

現代社会の三重危機―  
中国の民主化  
イスラム社会の世俗化  
西洋文明の衆愚政治化  
への対応とその後

―理想主義者







## 目次

第一章: はじめに.....	1
第二章: ビコーの歴史の周期と現代世界の三重危機.....	10
第三章: 汎理想主義.....	64
第四章: 形而上工学分野の設立.....	118
第五章: 形而上工学分野の検証(1) 形而上工学・形而上理論.....	142
第六章: 形而上工学分野の検証(2) 形而上製造 / 整備・形而上操作.....	214
第七章: 形而上工学者.....	264
第八章: 瞑想.....	359



## 第一章：はじめに

人類の歴史は戦争であふれている。人類は恐ろしい戦争が何度も繰り返されるのを食い止めようとしてきた。しかし人間社会の規模が広がり、技術革新が進むにつれ、破壊の規模も拡大した。20世紀には何千万人という人々がたった一つの戦争で命を失うことを可能にしてしまった。又このような大戦争が起こると、勝者はいないかもしれない。そこで次のような質問が起きてくる。「どうして人類はこのような自己破壊的な行動を繰り返すのか?」「これを食い止める方法はあるのか?」多くの人々がこの問題に取り組んできたが、答えを見つけることはできなかった。答えは無いのかもしれない。しかしたとえ無くとも我々はこの問題に取り組み続けていかなければならないのだ。そして本書はそのような試みのひとつである。ついに答えを見つけたと主張する意思は全くない。しかし我々一人一人が取り組む続けることが義務であると主張する。そして私は私の義務をここで果たすのである。

このプロジェクトの最終目的は恒久平和への道を見出すことである。そのような高邁な目的を追求する反面、我々は21世紀が直面する独特の問題も抱えている。それは三重の大量殺戮の危険である。それは相互に作用して殺戮の規模をさらに増すことになるかもしれない。まず第一は中国の民主化、また今では可能性は下がってきたが、ロシアの民主化がもたらす危険である。第二はイスラム国家の世俗化である。そして第三は現代民主国家の衆愚政治化である。であるからこのプロジェクトのまず第一の目的はこれらの危険を避け、人類歴史上最悪となりかねない大量殺戮への道を防ぐことである。

そのような大きな目的を果たすにはどこから始めればよいのか?それにはまず歴史上すでにこの問題に取り組んできた人々に依存することから始めよう。彼らは最後には成功しなかったかもしれないが、学ぶべきことはたくさんある。本プロジェクトはジャンバチスタ・ピコーの研究から始めることにする。ピコーは古代文明の歴史の周期を観察した。それは野蛮状態から始まり、宗教的指導者が政治的指導権を握る社会が設立され、その後指導権が士族階級に移行し、最後に平民に主権が移るというものである。この周期を一周して、社会は野蛮状態に戻る。

第二章は、この周期が以後のヨーロッパ史とその他の文明にも見られるかどうかを検証し、その結果個々の文明に同じパターンが観察で

## 2 はじめに

きると結論付ける。ごく足早にヨーロッパ史を訪れ、政治主権がキリスト教会から国王、そして現代民主主義で国民へと移行する過程を観察する。大変良く似た過程が日本史でも観察できる。そこでは政治主権は天照大神が祖先であることに正当性を置く天皇から武家の将軍へと移った。江戸幕府の支配が揺るぎ始めた頃、日本は西洋文明に吸収され、民主化の道を辿った。中国とインドも同じようなパターンを示している。この両文明は紀元前5000年からすでに最初の周期を完了していた。であるからここで観察されたのは第二の周期ということになる。これが西洋の周期とはいささか異なる原因となったかもしれない。イスラム文明はキリスト教文明から600年遅れてその周期を開始し、よく似た過程を辿っていた。しかし、19世紀に宗教から世俗的主権への移行の過程で西洋文明に吸収され、これが周期をゆがめる原因となった。

これらの歴史例では主権の移行は決して平和的なものではなかった。西洋文明の場合、宗教から世俗的主権への移行は三十年戦争の形をとった。これは当時ヨーロッパ史上最悪の戦争となった。産業化の遅れたヨーロッパ諸国と日本の民主化は第一次、第二次世界大戦を起こす結果となった。これは人類史上最悪の殺戮となった。

これらの観察を反映すると、中国の民主化はもし日本やドイツと同じ過程を辿ることになると、大量殺戮の事態を起こすことになりかねない。イスラム諸国の宗教から世俗的主権への移行は中断され西洋文明の枠内で今進行中である。もしこれがキリスト教圏と同じような過程を辿ることになると、大量殺戮を導くことになりかねない。これらの潜在的危険を秘めた移行が国際社会で同時に起こっている。もしこれが連動するようなことになると、殺戮の規模はさらに拡大することにもなりかねない。このような歴史上前例のない危険に直面している西洋文明は衆愚政治への道を辿りつつある。これは古代ギリシャと共和制ローマで起こったのと同じ過程である。最悪の場合、これは人類の破壊に繋がりがねない。それ故どのようなことをしてでも避けなければならない。

この歴史的検証に基づいて、第三章ではなぜこのような周期が繰り返されるのかを問いかける。その際まずアーウィン・シュロジンジャーによって生物学に応用されたエントロピーの概念を導入する。物質は全てそのままにしておく退歩するのでその存続のためには常に負のエントロピーを導入しなければならないというこの概念は本プロジェクトに二つの点で影響する。第一にこれによって生物界が弱肉強食の自然状態であることが説明される。地球上の有機物はこの自然状態に

さらされてきた。この現象は現実主義者によって研究されている。しかし、哺乳類への進化が別の生存への戦略を可能にした。これが理想主義である。ここでは社会のそれぞれの一員が負のエントロピーを環境に寄付するか、環境からエントロピーを吸収することによって、保護システムを形成し、それから恩恵を受けようとする。人類にとってこの進化の段階では両者ともに有効な選択史である。

これがピコーの周期の根底にある。現実主義者によって描かれる自然状態はピコーの出発点である。人類のこの生存競争から逃れようとする試みが、理想主義の台頭を導き、ピコーの神の時代が始まる。しかし誰もがこれに同意するわけではなく、現実主義者は人々の善意を悪用し始める。最終的には人々はこれに気が付き、理想主義への信頼が失われる。そうなると身体保護を提供できる武力を持ったものが台頭するようになり、英雄の時代が始まる。ここでは現実主義の法則がまた影響力を持つようになり、権力の集中が阻止される。権力の分散が進み、これによってピコーの平民の時代を経て野蛮時代へと戻ることになる。

さらにここで歴史的サイクルの影には理想主義と現実主義の相克があることを観察する。ヨーロッパ史においては、理想主義はキリスト教が最も支配的であった時期にその頂点に達する。宗教的影響力が弱まるにつれ、現実主義が支配的となる。この傾向は唯物主義の台頭ももたらした。さらにかつてはキリスト教会指導の下で包括的で一貫性のあった思想体系が細分化する。科学は独立した研究分野となる。芸術も宗教から独立し、さらに細分化して個人的志向が中心となる。哲学も細分化する。唯心主義はその一貫性を失い、ポストモダニズムが体系的思考を不可能にした。

他の文明においても同じ観察を行なうことが理想であるが、不可能であるため第三章においては、著書『*Great Thinkers of the Eastern World: The Major Thinkers and the Philosophical and Religious Classics of China, India, Japan, Korea, and the World of Islam*』に依存する。決定的な結論を出すためにはずっと詳細な検証が必要である。しかしながら、少なくとも西洋のパターンを決定的に否定する歴史的観察は得られなかった。

ここではどのようにして理想主義の台頭と凋落の波を制御することができるかという問題に焦点を当てる必要がある。もっと具体的には大量殺戮を生むことになるピコーの周期を食い止めるためには理想主義がその威信を失わないようにすることが必要である。その第一歩として本章は人類の置かれた状況を理解する二学派を掲げることから始める。第一は現実主義で、これは弱肉強食の自然状態での個人の生存

#### 4 はじめに

に焦点をあてるものである。しかし進化が進むにつれて、人類は脳内に辺縁系を持つようになり、これが愛情という感情を持つことを可能にした。そのおかげで、理想主義が可能となる。これは個々の社会の一員が少しずつ犠牲を払い全体の利益を向上させ、そのおかげで社会から保護と擁護を受けるようにしようとする方法である。

ここで、本書では汎理想主義のパラダイムを導入する。現実主義に対立する思想としての理想主義と異なり、汎理想主義は現実主義の存在を認識しそのパラダイム内に編入している。これによって問題を避けることなく取り扱うことができるようになればと希望している。人間の性質について性善説と性悪説の両極端に二分されることなく、本パラダイムは三種類の性質を前提とする。それは純朴理想主義者、現実主義者と汎理想主義者である。人類発展の現時点において、理想主義と現実主義はどちらも可能な選択史として考慮されるべきであり、個々人がどちらを採択するか決定する。純朴理想主義者は彼らが払わなければならない犠牲が最小限に抑えられる限り、全体の利益に貢献し、そこから引き換えに個人的保護を受ける用意がある。言い換えれば保護を受ける代償として負のエントロピーを体制に寄付する用意がある。現実主義者は権力と栄光を欲し、積極的に追求する。汎理想主義者はその為に払わなければならない犠牲がどのようなものであれ常に理想主義を保持し続ける。理想主義が旺盛なときには、純朴理想主義者と汎理想主義者の間に同盟関係が成立し、現実主義者の試みを制御することができる。理想主義がその威信を失った時には、純朴な理想主義者にとって理想主義を追求し続ける為の犠牲が大きすぎるようになり、彼らは現実主義に転身することになる。これがさらなる理想主義の凋落につながり、最終的には理想主義は消滅し、社会は弱肉強食の自然状態に帰ることになる。

負のエントロピーの概念が本書に与える第二の影響は、自由意志の問題に関連する。すなわち、負のエントロピーを輸入する物体・生命体は物理の法則から自らを解放できるかどうかというものである。ここで、マクロ的見地における自由意志の問題について簡単に触れ、人類がこの周期を制御するだけの自由意志を所持しているかどうか問いかける。結論を出す前に、自由意志があるものと仮定した。さもなければ、この研究をこの時点を超えて続ける意味がなくなるからである。その仮定に基づいて次の段階に進むこととする。

第四章は第三章で観察された理想主義の周期を制御するために形而上工学の概念を導入する。その際一連の仮説を立てる。第一に、ある段階では、物理的工学は物理法則を駆使し、人類にとって有用な物を

製造する。しかし、これらの操作がどのようなものであるべきかは形而上工学によって決定される。例えば、量子物理学が発見されたとき、人類がそれを使って爆弾を作るかそれとも平和的利用法を見つけるかを決定するのは形而上工学の分野に属するのである。その相互関係のはしごは人間の意識がどこから来たかというような問題を取り扱うようになることさらに上昇する。物質的現象がまた登場するのである。宇宙がどのように作られたかというような問題に触れるとそれはさらに上昇する。さらに高度なレベルの意識があることを示唆するような創造者としての神の意思なるものが存在するのだろうか？ 第二に、密接な相互関係のある物理現象と形而上現象の間では存在論と認識論の間には適度な精度が存在すると仮定する。本プロジェクトでの物理的工学と形而上工学は隣接しているので、実態は知覚できるままでであると仮定する。もし将来さらに遠隔な物理と形而上の段階で工学上の操作が必要な場合、この点がさらに重要な問題となると予測されるが、今のところはより身近な問題に焦点を当てることとする。

また形而上工学という部門を設立するために、汎理想主義は物理的工学と形而上工学は基本的には同一であるという仮定をする。この仮定に基づいて、同章では物理的工学分野の実態検証を行なう。同分野は理論、設計工学、製造・整備、操作の四つの垂直層からなっている。また電気工学、機械工学、化学工学といったようにいくつかの水平部門からなっている。航空機などの物体を製造するためには、これらの層・分野間では綿密な連絡が取られる。製造すべき物体がより大型で複雑であると、より広い分野間での綿密な協力関係が必要となる。同じことが形而上工学にも当てはまるはずである。

しかし二分野は全く同一というわけではなく、現時点では二つの大きな違いが観測される。第一には規模の問題である。形而上工学はずっと大規模である。物理的工学分野で一般に数年で完成できるようなプロジェクトが形而上工学では何世紀もかかる。これが協力関係の成立をずっと難しくするのである。同時代の距離的に離れての協力だけでなく、世代間の協力を確立する方法も見出さなければならない。第二は、主観と客観は物理工学では完全に区別できるが、形而上工学においては、エンジニアは同時に形而上建設物を製造する為の素材でもある。だから主観と客観が区別できなくなる。そのせいで形而上エンジニアは特別な訓練を受ける必要がでてくる。

形而上工学の概念が第四章で成立されたが、第五章では先に行なわれた歴史的検証に戻って、これらの検証結果を形而上工学の枠内で再検討する。まず始めに設計工学のレベルから始め、歴史的理想主義と

## 6 はじめに

宗教、そして現実主義を取り上げ、これらの学派・宗派がいかに平和を建設しようとしたかを検証する。それから、これらの学派・宗派の問題点を、個々の学派・宗派に内在する問題、理想主義・現実主義全体に内在する問題、理想主義と現実主義の限界の三層から検証し、最大の問題は両主義が個別に問題を解決しようとしたところにあると主張する。物理工学において航空機を設計しようとした場合、揚力対抗力比に焦点を当てる必要がある。もし揚力を向上させることだけに焦点をあてるか抗力を下げることだけに焦点をあてると、成功は見込めない。同じことがここでも言える。理想主義と現実主義は統合されなければならない。それが汎理想主義の試みるところである。

さらに第五章では理論レベルの検証を行なう。現時点ではこのレベルの包括的な理解を行なうことは不可能である。したがって第五章では将来の世代が工学の手段として使用できるよう発展させる可能性のあるいくつかの理論的問題点を挙げておくことにする。三つの問題点がここでは挙げられている。第一は知性と感情の統合問題である。西洋文明では知性的要素は哲学の分野で追求され、感情的要素は宗教の分野で追及されてきた。この分離がピコーの周期を制御するためには是非必要な知性と感情の包括的理論の形成を大変困難なものとしてきた。ここでは知性と感情の両方を包括した唯一の分野としての芸術の重要性、詩人ができる貢献の可能性、また音楽を通じて観察することのできる知性と感情の交流が議論される。

第二はマクロ対マイクロアプローチの問題である。ここでは根本的問題と執行上の問題がある。根本的にはマクロアプローチの方がより高い可能性がある。すなわち、全ての個人を善人に変えてしまおうと試みるより、形而上工学ではマクロ現象を形成しようと試みるべきである。そこでは個人の行動というのはあまり影響を持たないかもしれない。物理的工学ではマクロアプローチが使用されている。すなわち個々の粒子がどう行動するかを追うのではなく、物理学では  $PV=nRT$  といった一般方程式を用いる。執行上の問題では、マクロとマイクロアプローチに同一の現象が見られる。これは前述の規模の問題を取り扱うのに便利であろう。というのはマイクロ像がモデルとしてマクロ現象の検証に使用できるかもしれないからだ。しかし、マクロ現象は直接マイクロ現象の検証に応用できるが逆は必ずしも真とはいえない。例えば、地球が球体であることを示すのにテニスボールを使うことは有用であるが、多々の形状を有する日常の物資から地球の形を予測することは不可能なのである。したがって、マイクロ像は仮説の作成か教育材料としてのみ使用されるべきである。

最後に同章では二つの対立する極端な現象が隣立するという現象が観測されていることに言及する。その例としてはムッソリーニが一夜にして共産主義者からファシズムに転身したことや、ヒンドゥー教の「アトマンはブラフマン」という表現が挙げられる。本プロジェクトはこれを形而上回路と呼んでいる。ここでは観測された例をいくつか挙げ、将来この現象が形而上工学の手段として使用できる方法があるかどうかの検証を将来の世代に委ねたいとしている。本プロジェクト遂行の際、これらの観測からある種の規則的形而上回路群が生まれてきたのでここではそれを記録しておいた。最後にこれら全ての要素を包括している芸術作品の例としてヨハン・セバスチャン・バッハを取り上げる。

第六章では製造・整備層と操作層の観測が簡単に行なわれている。上記の理論、設計工学層における検証から引き出される一般的な教訓がいくつか挙げられている。製造・整備部門ではピコーの周期が示唆する三重の危機—中国とロシアの民主化、イスラム圏の世俗化と西洋文明の衆愚政治化—が論議されている。衆愚政治化においては古代ギリシャにおけるプラトンの観察と現代における現象が並立されている。現代の衆愚政治化は宗教的言語を用いて論議されているが、これはイスラムの世俗化との潜在的な連動を示すためである。操作層においては、現代の政策決定者が参照できるかもしれないいくつかの問題点が挙げられている。これらはそれぞれの層が個別的にどのように見えるかまたそれらがどのように連絡をとり協力できるかの例を示すためのものである。個々の現代の現象に対する特定の政策についてはそれぞれの事象についてより詳細な知識を必要とするためここでは不可能である。最後にピコーの周期を制御する工学上の機会として新たな周期の開始について簡単に論議を行い、汎理想主義者の協調を呼びかける。

第七章は形而上工学者の訓練の問題を取り上げる。現時点では包括的訓練法は確立できない。特に第一世代は教育者がいないため自己訓練を行なわなければならない。試験的方法として、同章ではまずプラトンが提案する哲人王の教育方法を検証する。その理由は哲人王と形而上工学者に要求される資質はよく似ているからである。プラトンの教育法からは教訓も得られるが問題もある。全体像を強調する点では教訓となる。プラトンの提案する個々の修学分野はより深い知識を習得するための手段にすぎない。

その反面、二つの問題点がある。第一は芸術的訓練と性格発展の間にあまりに緊密な関連が持たれていることである。プラトンは正しい種類の芸術に触れると、訓練生は強い道徳的性格を持つようになると

主張している。第二は段階的訓練法である。訓練生が一時に全体像の一要素だけに焦点を当てるように訓練を受けると、最後に複雑な一連の要素を統合して処理することが困難になる。個々の要素を学ぶにつれ、それを同時に全体に統合していく技術を学ぶことが必要である。

最後に、試験的に知能的訓練法と感情的訓練法が提案されている。知能的教育法は三部門からなる。全体像を把握するための二年間の教室での訓練、芸術の習得と実体験である。この時点では感情的訓練は人生での実体験を通して得るより他に方法がない。それを通して、訓練生は表面的意識レベルを離れ深い瞑想の意識レベルに達することが必要である。そこでは感情と知性が合流する。理想的にはより規則的な教育方法が開発され、知識的訓練と感情的訓練が分離することなく行なわれることが望ましい。分野の成功は社会が形而上工学者の第一世代を教育し互いに協力するようにできるかどうかにかかっている。

これは大変野心的なプロジェクトであり、個人が達成できるものではない。ここでは具体的な解決法は何も提案されていない。私が提案できるのはただ始めてみようというだけである。しかしこのプロジェクトはいくつかの決定的な貢献を行なうと信じたい。第一に目前の問題を取り扱うにあたって今の体制がいかにも不備であるかは議論の余地無く示されている。社会は分断し、小さくなりすぎそれぞれが問題の全体像を把握することができなくなっている。解決法を見出すことはさらに不可能である。第二に社会の一人一人が役割を背負わなければならないことが明確となっている。これは政治家や学者に任せておける問題ではないのだ。詩人にも責任がある。「私は唯の詩人だから大量殺戮の防止などという事態に責任はない。」とは言えないのである。このプロジェクトが個々の分野の人々をしてどのような貢献ができるかを考える様にできればと希望する。第三に本プロジェクトはこの試みにおいて人々を援助する世界地図を提供した。もちろん、これは完成した地図ではなく、コロンバスの世界地図である。アメリカ大陸全体が欠けているかもしれない。しかしそれでも探索すべき世界があることを確実に示している。より多くの人が世界を探索するにつれ、より多くの情報が集まり、地図はより正確なものとなるだろう。最終的には迷うことなく航海できる正確な地図となることであろう。

最後に、本プロジェクトには一人でも多くの人に参加してもらいたいと思う。この人類史上最大といっても過言ではないであろう形而上プロジェクトには全ての人が参加する必要がある。しかし、動機が純粹でないのなら参加してもらっても意味がない。本プロジェクトに参加

することによって、裕福になることも有名になることもないだろう。それが望みなら汎理想主義は何も提供できない。そういう人々にとっては私たちは全くの役立たずである。もし参加できるのであれば、建設的に協力して欲しい。これはまだ生まれたばかりのパラダイムであり、弱点も多い。もしこの時点で破壊的勢力にさらされたら簡単に破壊されてしまいかねない。批判するのではなく改良点を提案して欲しい。建設的なものを持ちこんで欲しい。あるいはよりすぐれた代案を提供して欲しい。

## 第二章 ピコーの歴史の周期と現代世界の三重危機

大量殺戮は人類にとって珍しいことではない。人類史上極初期から人類は戦争を経験してきた。20世紀に世界大戦の後ある程度の教訓を学んだかもしれないが、残念ながら我々の大量殺戮の経験はもう終わったとは言えない。本章は現代社会の潜在的な大量殺戮の機会を限定し、恒久的解決の道を探る。

### 歴史の周期に関する問題提起

ジャンバチスタ・ピコーは古代文明の歴史を検証し、全ての文明は野蛮状態から発生し、三段階を経てまた野蛮状態に戻ると結論付けた。中間の段階は神の時代に始まる。そして英雄の時代が続き最後に社会は平民の時代を経て野蛮時代に戻る。<sup>1</sup> より具体的に言うと、神の時代は宗教的指導者による支配に特徴付けられ、英雄の時代は世俗の軍事的指導者による支配を示す。平民の時代は民主主義の時代である。

ピコーはこの周期をヘブライ、カルデア、シキタイ、フォニキア、エジプト、ギリシャとローマ社会において察知した。ここで西洋文明を簡略的に検証すると、同じ周期を辿っていることが解かる。

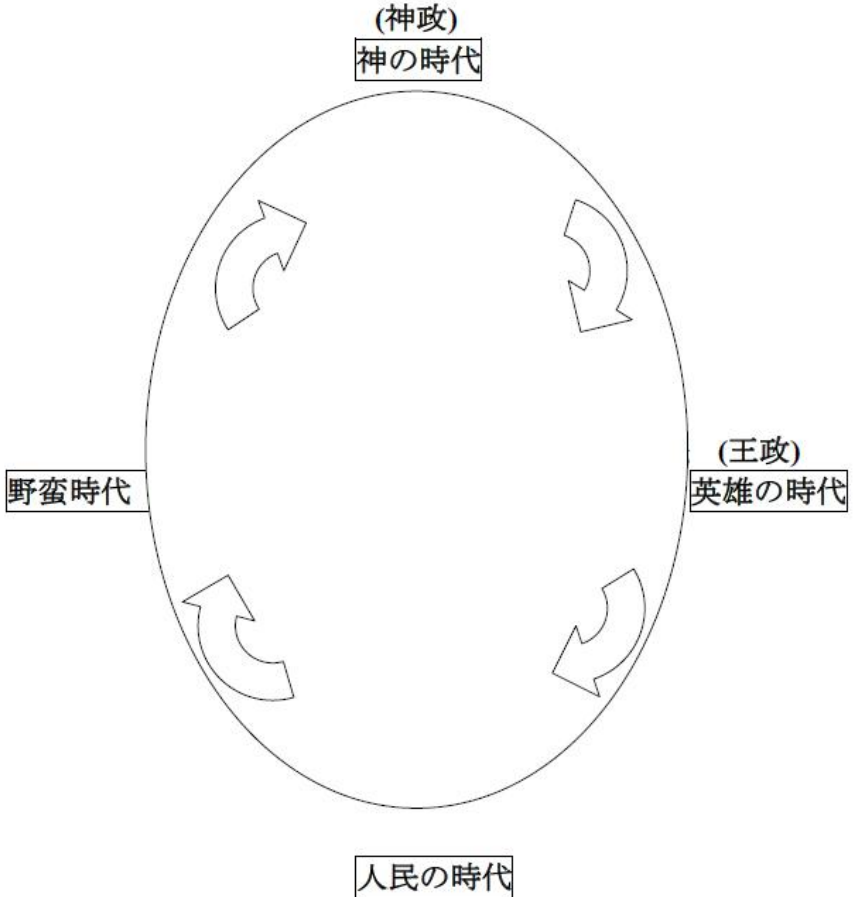
歴史的検証によると、さらにひとつの段階から次の段階に移る際に特に破壊的な大量殺戮が行なわれていることが観察される。この時期に起こる戦争には特殊な性質がある。ネオリアリストの観念がここで有用である。通常は支配を追求する者は権力・武力を最大限に活かそうとする。だから、これらの追求者は利益が害を上回るときには戦争をし、その反対になると退却する。そのせいで、社会で起こる殺戮の度合いには限度があるはずである。しかし、移行期には二つの個別の社会集団がその覇権をめぐる争うことになるので、他方が完全に破壊されるまで戦うことを止めない。それゆえ殺戮の度合いに限度がないのである。同学派のケネス・ウォルツはこれを選択過程と呼んだ。したがって、移行期の戦争は選択戦争と呼ばれるべきである。<sup>2</sup> 以下に西洋文明の歴史の移行期とその最中に起こった戦争についての検証を行なう。

---

<sup>1</sup> Giambattista Vico, trans. By Thomas Goddard Bergin and Max Harold Fisch, *The New Science of Giambattista Vico*, Ithaca: Cornell University Press, 1984, p.20.

<sup>2</sup> Kenneth N. Waltz, *Theory of International Politics*, New York: McGraw Hill, 1979.

図 2-1  
ビコーの周期



**西欧文明：**ギリシャとローマ文明の崩壊後、西洋社会は暗黒時代に入った。この野蛮時代からキリスト教社会が生まれ、ヨーロッパで11世紀から14世紀にかけて覇権を握る。これが神の時代である。その後国家が世俗の軍事力を背景に登場する。国家と教会は中世にその覇

権を賭けて争った。国家の覇権は1648年にウェストファリア条約によって終わりを告げた三十年戦争の最中に確立した。その後、王政産業革命の進展により、経済的・社会集団が誕生するに至って揺らぎ始める。19世紀から20世紀にかけて、西洋国家は民主主義を確立する。この周期に従って大量殺戮のレベルも変遷した。以下に、西洋文明での段階の移行と関連する大量殺戮の詳細を検証する。

**(1) ギリシャ文明とローマ文明の崩壊**（西洋文明の歴史の周期については図2-2を参照） 古代ギリシャを理解する為にはまずアテネの歴史から始めることにする。

古代アテネは貴族支配であった。紀元前7世紀と6世紀に立法家ドラコとソロンが平民の政治的権利を向上させる法律を作ったが、政情不安が続き、クーデターが起り専制政治となった。それからクレイテネスの改革により紀元前508年に民主政治の基盤が確立した。紀元前500年から449年にかけてのペルシャ戦争の間、土地を所有しない市民が大変な貢献をしたので、それら市民の発言権が強まり、民主制がさらに発展した。民主政権下で、アテネは帝国主義を採用し、紀元前447年にデロス同盟を結成した。これはギリシャの都市国家間のペルシャに対抗する防衛同盟である。しかしアテネはその同盟国を同盟参加を強制し、毎年奉納金を納めさせたり、予算をどのように割り当てるかについて発言権を与えなかったりという厳しい条件を課することにより高飛車に扱った。<sup>3</sup> 政治家ペリクレスの下で、アテネはさらに帝国主義を拡大し、それが民主主義の拡大に影響を与える。アテネの海軍拡張はこぎ手の必要を増大させ、その発言権が強まったため、民主主義が拡大することとなった。さらにアテネの海軍力は貿易を盛んにし、それがアテネ市民全てに恩恵をもたらした。<sup>4</sup>

紀元前430年にペストが流行しアテネ市民の多くが犠牲となり、ペリクレスも死亡した。このころ、扇動政治家というものが現れ始める。彼らは長期にわたる統一の取れた政策は持っていなかった。彼らの主な関心は権力を得てそれを保持することであった。この目的に向かって、彼らは人民の支持を得るために、人々の喜びそうなことは何でも言った。それでも政治的決定は集会でなされ、直接民主制が完成した。人民は戦争を支持した、というのは勝利によって奴隷がもたらされ、それが人民をより裕福にしたからである。その結果、アテネの

<sup>3</sup> Finley, M.I. *The Ancient Greeks*. London: Penguin Books, 1982, p.67.

<sup>4</sup> Ehrenberg, Victor. *From Solon to Socrates: Greek History and Civilization during the 6<sup>th</sup> and 5<sup>th</sup> Centuries BC*. London: Methuen, 1981, p.223

帝国主義は止まることなく拡大した。紀元前431年にペロポネソス戦争が発生し、アテネのデロス同盟はスパルタに率いられたペロポネソス同盟と対抗した。戦争は紀元前404年にアテネの敗北をもって終了した。その結果、アテネが築き上げた帝国は解体された。スパルタは民主主義を寡頭政治に切り替え、貴族政党の中から30人の指導者を指名した。しかし、スパルタもまた戦争によって疲弊していた。スパルタは覇権を確立しようとしたが、必要な資源をもう持っていなかった。しばらくしてアテネは民主制を再開した。しかし扇動的傾向は続き紀元前399年にソクラテスを処刑することとなる。戦争により疲弊したギリシャは紀元前4世紀中ごろにアレキサンダー大王に率いられたマケドニアの傘下に入り、その後ローマ帝国の支配を受けることになる。

このように、アテネの民主制は扇動政治に墮落し、崩壊することとなった。しかしアテネだけがギリシャではない。古代ギリシャの他の地域は専制政治か寡頭政治かあるいは民主主義のいずれかを採用していた。ツキジデスによるとある時点では大半の都市は専制政治であったが、スパルタがその多くを打破したとのことである。<sup>5</sup> また、ペロポネソス同盟もデロス同盟も防衛同盟である反面、それらは同盟国の政治体制にも関心を持っていた。ペロポネソス同盟は寡頭政治を支持し、民主制と専制政治には反対していたのに対し、デロス同盟においては、アテネは民主制を支持する傾向にあった。歴史家M.I. フィンリーは以下のように述べている。「アテネ市民の間に同盟国の国内政治に干渉しようという傾向が強まり、特に寡頭政治を採用する対抗者に対して民主的要素を支持・強化しようという傾向が強かった。」<sup>6</sup> これから察するに、もしアテネがペロポネソス戦争に勝利を収めていたら、ギリシャ全域が民主国家で占められていたことになるだろう。フィンリーは以下のように推測する。「よってこの戦争はアテネだけでなく、ギリシャにとっても惨事であった。そのせいでギリシャが何らかの統一政権に向かう道が閉ざされた。もちろん統一が野心のある一都市国家によって他の国に強制的に押し付けられたらうのものであったことは否定できないが。」<sup>7</sup> 歴史家ハッツフェルドもこれに同意する。「アテネ帝国と共に、ヘレニズム文化をひとつの共同体に統合しようという最初の試みは消滅した。それは洗練されたとは言えない試みで

<sup>5</sup> Thucydides. *History of the Peloponnesian War*. London: Penguin Books, 1972, pp. 43, 45.

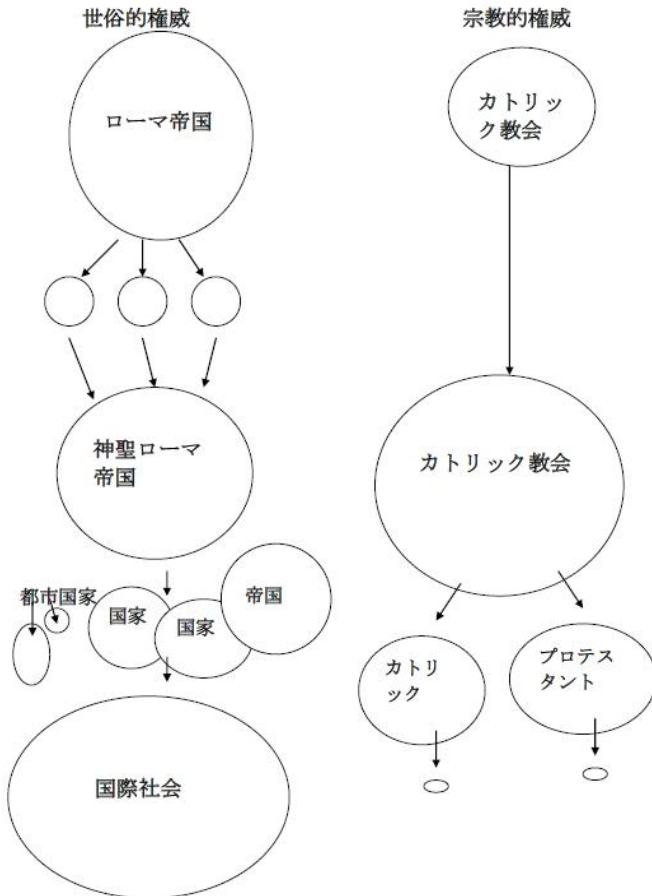
<sup>6</sup> Finley, p. 67.

<sup>7</sup> 同、70頁。

## 14 ビコーの歴史の周期と現代世界の三重危機

あつただろうが。」<sup>8</sup> 実際、スパルタは民主政治を寡頭政治に挿げ替えようとした。しかし戦争はアテネとスパルタの両国を疲弊させたので、ギリシャの寡頭制と民主制が内部でその発展の道を辿る前に外部の政治体制によって支配を受けることになった。

図 2-2  
ヨーロッパ文明の周期



<sup>8</sup> Hatzfeld, Jean, revised by André Aymard. *History of Ancient Greece*. W.W.Norton & Company: New York, 1966, p. 170.

共和制ローマもよく似た経路を辿った。ローマはエトルリアの国王によって紀元前676年から支配されてきた。紀元前509年にローマ市民は国王を排斥し共和制を成立した。当初は共和国は市民に発言権を与えることと権力の抑制と均衡を図るという原則に基づいたものであった。ローマ議会が設立され、そこで二名の執政官が選挙により選ばれた。執政官は高い権限を持った政府の監督官であった。特に緊急事態の際には、どちらか一名が最高6ヶ月までの間独裁者として任命されることができた。しかし平民はこの制度では十分に代表されていなかった。平民は政治参加を要求した。そして時が経つにつれ、政治権力を強めてきた。紀元前494年に平民は貴族から妥協を得ることに成功した。彼らは自分たち独自の集会を獲得した。また拒否権も獲得した。しかし、平民集会での決定事項は法的拘束力が無かった。紀元前450年に、十二表法と呼ばれる公平な法体制が成立した。これにより貴族による明記されていない法律の不公平な解釈は無くなった。紀元前367年に二名の執政官のうち一名は平民でなければならないとの決定がなされた。最後に、紀元前287年に平民集会での決定がローマ議会と同じ法的拘束力を持つに至った。この時点でローマ社会は世俗の支配者と民主制が共生していることになった。この共生が以下の政治の動向に影響を与えることとなる。

外交的にはローマ共和国は拡張し、多くの領土を得た。地中海の覇権を賭けてローマがカルタゴと争ったポエニ戦争は特に困難なものであった。紀元前146年に共和国はついにカルタゴを打破し、覇権を獲得し、多大な富を得ることとなった。富裕層は土地を買いラティフンディアと呼ばれる大土地所有者となった。小規模農民はこれに対抗することができず、自分の農地を売らざるをえなくなり、仕事を求めてローマに移住した。これらの農民が戦争で兵士として戦ったのであった。したがって、この現象がローマの軍隊に影響を与え、紀元前2世紀の共和国の敗退の原因となった。改革の試みが何度かなされたが、成功せず、改革者は暗殺された。その後百年にわたって共和国は内乱状態が続く。

内乱時代は紀元前107年にマリウス将軍が執政官になり軍政改革を行なったときに始まった。マリウスは土地を持たない者が兵士になることを可能にした。それから戦後、新たに獲得した土地を兵士に分配した。これにより、共和国自体ではなく個人の将軍に忠誠をつくす軍隊が形成されることとなった。一旦これが起こると、共和国は軍人間の権力闘争の場となった。内乱前に作られていた貴族制と民主制の並行体制がこの闘争に織り込まれていく。スラやポンペイといった将

軍は保守的なローマ議会の勢力基盤をその権力拡大に使った。彼らはオブティマテスと呼ばれている。一方マリウスやシーザーなどの政治家は権力拡張のため投票権のある平民に訴えかけた。彼らはポプラレスと呼ばれた。これら将軍はその政治基盤を使って覇権を得ようと争いあった。

最初の闘争はマリウスとスラの間で起こった。スラは上院によって通常の6ヶ月を越える生涯独裁の立場に使命されることに成功した。スラの支配は厳しかった。反对者に対しては容赦ない報復が行われた。この時点で平等な法による支配の伝統は恐怖政治に退廃した。世俗制と民主制の並行した時代は野蛮時代に退廃した。

数年後にスラが死亡すると、その部下のポンペイが後を継いだ。ポンペイは独裁者に指名されることに失敗したので、上院と妥協した。しかし市民は上院に不満だった、そして上院の威信は急速に衰えた。その間マリウスの養子であったシーザーが政界に登場した。彼はその政治的影響力を平民に訴えることによって築き上げた。プルタークはシーザーの策略のひとつを以下のように記述している。

年長の女性の葬儀の際、公式の演説を行なうことが古代ローマの伝統であった。しかしそれは若い女性の際にはまれであった。シーザーが妻が死亡した際最初にそれを行なった。それはまたシーザーに人気をもたらした行動であった。平民の間で強い同情が巻き起こり、シーザーは心の優しい人物であり、感情に富んだ人物であるとして、人々は彼を好むようになった。<sup>9</sup>

ポンペイは権力を失った上院を見捨て、三頭政治の形でポンペイとシーザーの間で一時的に和解が成立したが長続きはしなかった。最終的には軍事闘争となりシーザーが勝利を収める。ポンペイはエジプトで殺害される。紀元前48年にシーザーは生涯独裁者に任命され、インペラトルの称号を得る。ポプラレスとして彼は土地を貧民に分け与えた。しかし彼は共和制を守ろうとした一党によって紀元前44年に暗殺される。その後すぐその養子であったオクタビアスが権力を掌握し、共和制は永久に廃止されローマ帝国が誕生する。これによってローマ社会の敗退は200年の間食い止められ、ローマはその最盛期のパックス・ロマーナの時代を享受する。しかし、3世紀にはまた政情不安となり235年から285年の間に帝国は共和制末期と同じように将軍の傀儡と成り下った26人の皇帝が乱立することになる。

<sup>9</sup> Plutarch. *The Rise and Fall of Athens: Nine Greek Lives*. London: Penguin Books, 1960, p. 248.

このようにして古代西洋文明はピコーの野蛮時代に退化した。ギリシャは外部勢力により破壊され、ローマは内部闘争により破壊された。

**(2) キリスト教会の覇権(神の時代):** キリスト教はイエス・キリストがローマ帝国のタイベリアス・クロディウス支配下で説教を始めたときに始まる。当初はユダヤ教の一派であった。初期には12人の使徒が旅をしてキリスト教を広めた。12人の使徒ではなかったが、ポールはローマへ行き、偉大な貢献をした。そのユダヤ教信者への影響は多大だったと伝えられている。神のお告げを深刻に捕らえる人々とユダヤ教が儀式に焦点を当てすぎ、「宗教の核心を忘れてしまった」<sup>10</sup>と考えている人々の間で受け入れられた。しかし、一般市民の間では受け入れられなかった。ローマに対して反乱を起こしたがっていた人々にとってはキリスト教は十分革命的ではなかったのだった。また保守的なユダヤ教信者にとっては、そのキリスト教信者に対する態度があまりにも革命的過ぎたのだった。<sup>11</sup>

最初の300年間はキリスト教はローマ帝国によって迫害されたが、それは継続的なものでも、組織的なものでもなかった。最初の迫害は64年にネロによるものだった。ネロはローマで大火災があったときキリスト教徒のせいだと責任転嫁した。ドミティアン帝(81~96年)は自身を「支配者であり神」<sup>12</sup>と呼び、市民に神聖な敬意を示すよう要求した。キリスト教徒はこれを否定した。その結果、彼らは迫害された。しかしトレジャン帝(98~117年)がこの法律を破棄した。

これらの初期の迫害はキリスト教の波及に止めを刺さなかった。反対にキリスト教への支持は高まった。<sup>13</sup>これがより広範囲の布教の助けとなった。「地元の態度に多く依存していた迫害の散発的性質と、3世紀前には政府がキリスト教を真剣に捕らえていなかったせいで、教会は布教を進める余地を得た。」<sup>14</sup>2世紀にはキリスト教は異端とされていたグノーシス派を排斥することによって統一性を得た。これは二元説の一種で、精神が崇高で、肉体は意味がないか邪悪であるという考え方である。また使徒から司教への世代交代もあった。旅を続

<sup>10</sup> Chadwick, Henry. *The Early Church: The Story of Emergent Christianity from the Apostolic Age to the Foundation of the Church of Rome* (The Pelican History of the Church, 1). New York: Penguin Books, 1986, p.15.

<sup>11</sup> 同、16頁。

<sup>12</sup> 同、26頁。

<sup>13</sup> 同、29頁。

<sup>14</sup> 同、31頁。

ける伝道者によって築かれた教会は地元の司教を持つようになった。<sup>15</sup> 4世紀までにはキリスト教は社会的影響力を持ち始めた。<sup>16</sup>

デオクレシアン帝(284～305年)の下で厳しい排斥が再開された。しかし、3世紀にはローマ帝国は凋落の一途を辿っていた。破産や政治的分断化や軍事的敗北が頻繁に続いていた。<sup>17</sup> 312年にコンスタンチヌス帝は帝国での秩序を回復するためにキリスト教を合法化した。キリスト教の統一性と一神教が分断した帝国を再統一したいというコンスタンチヌス帝の目的に合致したのである。<sup>18</sup> 325年にコンスタンチヌスは教義の標準化を図るためキリスト教指導者を集めて会合を開いた。ニカエア公会議である。そこでは息子であるキリストは父である神と一体であると主張する者をカトリックと呼ぶことが決定された。また息子であるキリストはより下位の神であると主張する者はアリウス異教徒となった。一旦正教と異端の区別ができると、帝国は統一された世俗の権威と統一された宗教的権威を持つことになったが、世俗権威は宗教権威よりも上に立つものであった。東ローマ帝国では、この制度はビザンチン帝国に引き継がれ、1453年のコンスタンチノーブルの崩壊まで続いた。

他方、西ローマ帝国は476年に崩壊した。西方では中枢政治権力が解体した。領土はビシゴート、オストロゴート、ヴァンダル、ロンバルドなど非ローマ系の軍事指導者の間で分割された、彼らはビコーの軍事的権威を象徴するものである。キリスト教を排斥する代わりに、これらの軍事指導者はキリスト教徒となった。戦士たちは定住し地元社会の重要な一員となった。<sup>19</sup> そのうちの一人クロビス王はメロピング朝を設立した。王は部下の軍人たちと共にローマカトリック教に改宗した。彼は自身を異端の野蛮人に対するカトリック教会の擁護者であると宣言し、その領域を拡大した。この王朝は751年にピピンがメロピング朝に対してクーデターを起こすまで続いた。このクーデターはザカリアス教皇によって正当化された。ザカリアス教皇もまたロンバルドの国王たちに対する護衛を必要としていたのである。ピピンはラヴェンナを占領しその領地をザカリアスに献上した。ピピンの息子シャルマンはヨーロッパの各地を侵略し800年に皇帝となった。教皇レオ三世は彼を西ローマ皇帝として戴冠した。フランク王国の保

<sup>15</sup> 同、46頁。

<sup>16</sup> 同、60頁。

<sup>17</sup> Brown, Peter. *The Rise of Western Christendom: Triumph and Diversity, AD 200–1000*. Malden, Mass.:Blackwell, 1997. p. 19.

<sup>18</sup> 同、22頁。

<sup>19</sup> 同、58頁。

護の下、ボニフェスなどの伝道者がキリスト教を布教した。この発展により、西ヨーロッパは再びひとつの軍事的権威とひとつの宗教的権威を持つことになる。両者は相互に協力的な関係を結んだ。そこでは王国が物的護衛を行い、その見返りに教会が国王に正当性を与えることになった。この協調的関係は最終的には支配をめぐる競争関係となる。<sup>20</sup> 軍事支配者と宗教支配者はお互いを必要とする反面、お互いに対して支配的な立場に立とうとした。11世紀にカトリック教会内でグレゴリー7世による改革運動が起こり、中央集権政府が生まれる。

それはほとんど不可避免的に教皇と世俗の対抗者である帝国との間の覇権をめぐる競争関係に繋がった。教皇が自分に従順な教会の地域政府の役人だと思っていた司祭たちはもうすでに中央政府と地域政府の両方で帝国の従順な役人であった。<sup>21</sup>

歴史家タナー等によると、「中世的考え方において宗教的、世俗的な関心の相対的な重要性は初期には教皇の側に有利であり、最終的には勝利をもたらした。」<sup>22</sup> 1122年に結ばれたウォルムス協定では帝国の聖職者への支配権は限られていた。教皇の支配権は11世紀初めから13世紀末まで300年近くの間その覇権を享受した。十字軍の遠征が教皇の指揮の下行なわれたのはこの時期である。教皇の支配はイノケンチウス3世(1198～1216年)の統治下で頂点に達した。

**(3) 国家による支配(英雄の時代)と政治構成単位をめぐる30年戦争:** 支配をめぐる競争している間に帝国が分断した。その領域内に、都市国家、国家、連邦といった異なった政治体制を持つ社会が誕生し、自治権を要求するようになった。これらの政治体制の中で、国家が最終的に最も優勢となった。というのはそれが最も効率的な戦争行使の組織だったからである。マックス・ウェーバーによる定義では、「国家は与えられたある一定の領域内で合法的な武力の行使の独占を主張し(その独占に成功する)人間社会である」となっている。<sup>23</sup> 国家

<sup>20</sup> 詳細に関しては、Oliver O'Donovan and Joan Lockwood O'Donovan, ed., *From Irenaeus to Grotius: A Sourcebook in Christian Political Thought, 100-1625*, Grand Rapids, Michigan/Cambridge, U.K., 1999 を参照。

<sup>21</sup> Tanner, J.R. et. al. ed. *The Cambridge Medieval History: Vol. 5, Contest of Empire and Papacy*, Cambridge: Cambridge University Press, 1964, p. x1.

<sup>22</sup> 同、xi 頁。

<sup>23</sup> Tilly, Charles. *Coercion, Capital, and European States, AD 990-1992*. Cambridge, Mass.: Blackwell, 1993, p. 70.

## 20 ビコーの歴史の周期と現代世界の三重危機

が一般市民に対して行なったことは脅迫に似ている。すなわち、国家はお互いに戦い、一般市民を危険に陥れ、それから金銭などの代償と引き換えに護衛を申し出たのであるが、その危険というのは元々自分たちが原因なのである。拒否した者は、脅されるか、実際に被害を被った。この目的で、国家は徐々に一般市民から武器を奪い、強制の手段の独占を行なった。そしてまた徐々に組織化が進んだ。

支配者による軍隊の設立は永続する国家体制を生んだ。その理由は軍隊が国家内での重要な組織になったことと、軍隊の設立と維持の為、財政、供給、徴兵制度、税金徴収その他の多くの補完的組織をもたらすことになったことの両方による。<sup>24</sup>

英国とフランスは1339年から1453年の百年戦争の間に国家として成立した。この時期に両国で国家形成過程が進んだ。戦争の原因はフランス内の英国領をめぐる論争と、帝位継承をめぐる論争であった。カペー朝は1328年のフィリップ4世を最後に途絶えた。その弟であるフランス人のフィリップ6世と、孫である英国人のエドワード3世が両者とも国王であると主張した。フランスではチャールズ7世が15世紀のはじめに恒久軍隊を設立し、ルイ11世が15世紀末期に荘園の領土を没収した。戦争の結果、英国はカレーを除くフランス内の領土を全て失い、完全な島国となった。イベリア半島はイスラム教のオミアド帝国により支配されていた。11世紀にオミアド帝国が崩壊すると、キリスト教国家が誕生してきた。ポルトガルは1139年に独立し、カスティリアとアラゴンが合併して1479年にスペインとなった。1492年のグラナダ陥落によって半島はキリスト教下に戻った。この再征服運動を通して、イベリア諸国は中央集権化を達成した。その領土を神聖ローマ帝国によって支配されていたドイツの国家形成は19世紀まで遅延した。またその領土を強力な都市国家によって占められていたイタリアの国家形成も19世紀まで遅延した。

教会もまた統一を維持することができなかった。1378年から1417年の間大分裂を引き起こし、最初は二人、そして後には三人の教皇が真の教皇であると名乗り出た。その原因は政治的なもので、宗教原理に関するものではなかった。この問題は1417年にコンスタンツ公会議において解決を見る。教会内の分裂は16世紀にレオ10世がローマのサンピエトロ大聖堂の修復のための資金調達のため免罪

<sup>24</sup> 同、70頁。

符の販売を始めた時に決定的となった。マルチン・ルターは抗議のため『95カ条の論題』を発表することとなり、宗教改革が始まった。ルターの考えは教会は神の意思を理解するためには必要なく、聖書を読むだけで十分であるというものであった。この改革運動は広まって、ルターの概念に基づいてドイツでは反乱が起こった。当初はルター派は排斥されたが、1555年にカトリック教会を支持していた神聖ローマ帝国の皇帝カルロス5世と、ルター派の支持者であったシャマルカルデン同盟がアウグスブルグの和議によって和解した。この和解により神聖ローマ帝国内のドイツ諸侯は自領内のカトリック教かルター派のどちらかを選択することが許された。臣民は諸侯によって選択された宗教を維持するか、他の領土に移住することとなった。

これらの発展により、ヨーロッパ社会には数種類の異なった軍事的支配者と宗教的支配者が共存することとなった。区別をつく機能的役割を果たす代わりに、彼らは一つの領域での支配権をめぐる争った。これがヨーロッパでの複雑な動向の原因となった。大分裂には軍事的支配者も巻き込まれた。フランス、アラゴン、カスティリアとレオン、キプロス、バーガンディ、そしてナポリは一方の教皇を認知し、デンマーク、英国、フランダース、神聖ローマ帝国、ハンガリー、イタリア北部、ノルウェー、ポーランドおよびスウェーデンは他方を認知した。1494年から1559年にかけてのイタリア戦争中に、ヨーロッパは世界大戦前の現代ヨーロッパの様相に似てきた。この時代はしばしばバランス・オブ・パワーの原則によって特徴付けられている。ここでは、参加者は権力の分配に基づいて同盟を形成しまた再形成する。もし同盟国が強力になりすぎたら、過去の敵国と新たな同盟を結ぶのである。1494年にフランスのシャルル国王はイタリアを侵略し、ナポリ国王にするよう要求した。翌年、シャルル国王はナポリを占領する。1501年にルイ12世が攻勢し、これに対して教皇、皇帝、スペイン、ミラノ、ベニスその他がフランスに対抗するため同盟を結ぶ。1504年にフランスとスペインは和解し、ナポリとシシリアがスペイン領となる。それから皇帝カルロス5世とフランスのフランソワ国王が戦闘状態に入る。1521年、カルロス5世と教皇レオ10世がイタリアを侵略しミラノを奪回する。1526年フランスが妥協。1526年には教皇クレメント7世が、ベニスやミラノといったイタリア諸国とともに、フランスと協力してカルロス5世に対抗する。1529年にはカルロス5世とクレメント7世が和解、一方、カルロス5世とフランソワ国王はミラノをめぐる戦いを続ける。1559年

に、スペイン王フェリペ2世とフランス王アンリ2世はカトー・カンブレジ条約を受け入れ戦争は終結する。

これらの複雑な動向は三十年戦争に至るまで続き、ヨーロッパ全域が荒廃する。新ケンブリッジ近現代史によると、「人命の喪失と物質的損害を示す十分に正確な統計はない。現代の歴史家の一人はドイツの人口は地方では40%、都市部では33%減少したと見積もっている。」<sup>25</sup> この戦争は国家によって通常戦われている戦争とは区別されるべきである。

この戦争は神聖ローマ帝国内のカトリックとプロテスタントの間の宗教紛争として始まったが、同時に帝国内の権力闘争も伴っていた。宗教紛争はまもなくヨーロッパ全域に広まった。より多くの主権国家が宗教的また戦略的見地から参加した。戦争の焦点は徐々に政治的、戦略的なものへと移行した。終戦までには、紛争は宗教的というよりは、ブルボンとハプスブルグ朝のによる政治的なものとなっていた。戦争はウエストファリア条約によって終結する。この30年にわたる戦争中、ヨーロッパ社会には根本的な変化が起こった。ヨーロッパは現代社会へと移行していた。そこでは同一の政治構成単位である国家が排他的な領域を占めるようになっていた。宗教的支配者はその多大な影響力を失って、以後200年にわたって徐々にその政治的影響力を失っていく。ここでは英国がその先手をとり、16世紀半ばに自国独自の英国教会を設立する。その理由は帝国よりは小規模な国家は統合的な統一原則を必要としなかったからである。ある程度の統一原則は必要であった、というのは強制だけで支配するのはあまりに費用がかかりすぎるからである。人民の献身を得られれば費用はかからない。したがって国家は支配の道具として国家主義を使うことを選び、現代の国民国家という概念が成立することになる。1870年のイタリア統一の際、指導者は「イタリアを作った。次はイタリア人を作らなくてはならない。」と言ったといわれている。多民族、多文化国家は今でも存在するが、基本的概念は一民族・一国家による排他的領土を形成するというものである。

**(4) 民主主義—平民の時代—と政治構成単位選択戦争としての第一次・第二次世界大戦：** 国家は戦争行使の機関としての性質を持ち続けたわけではなかった。産業革命が進むにつれ、二つの新しい社会集団が登

<sup>25</sup> J.P. Cooper ed., *The New Cambridge Modern History: Volume IV, The Decline of Spain and the Thirty Years War, 1609–48/59*, Cambridge: Cambridge University Press, 1970, p.357.

場した。ブルジョワ階級と労働者階級である。これが産業化の過程である。かつては国王はより多くの自治権を要求し、できれば国王の座に着こうとする貴族階級を相手取る必要があった。この二つの軍事基盤に基づく社会集団に加えて産業化によって、四つの社会集団が混在することとなる。二つの軍事社会集団はお互い支配権をめぐる争いが、支配層として存続するという意味では共通の利害関係がある。二つの経済的社会集団は富の分配をめぐる争いが、経済活動に有利な社会的環境を作り出すという意味では共通の利害関係がある。一般的には権力は軍事的社会集団から経済的社会集団に移行した。これが民主化過程である。しかし、この過程は介入してきた複雑な利害関係のせいで、それぞれ大変異なった道を辿った。ある国家は比較的平和に民主主義を達成したが、膨張主義に走った国もあるし、内乱の形を取ったものもある。

初期の検証によるとこの違いは国家の規模、産業化の時期、経済的・軍事的環境と国家の歴史過程による可能性がある。国家の規模は膨張主義を採る余地があるかどうかを決定する。大国は武力闘争を国外に転化することができるが、小国はもしそのような試みをすれば、即座に国際社会で打ちのめされてしまうだろう。その間の中規模国はどちらにも傾きうる。国家形成と産業化の時期も社会にいくつの社会集団が共存するかに影響を与える。産業化の遅れた国は産業化を急いで行なわなければならないのでより多くの社会集団が混在することになる。明らかに国家は民主化を好ましい経済状況と平和的環境下で行なえばより高い可能性がある。しかし、最悪なのはこれらの環境に浮き沈みがある場合である。

大国の中では、産業化が早い時期に起こった英国と安全保障に問題の少なかった米国が比較的平和に民主化を遂げた。フランスは中程度の膨張主義を取った。産業化と国家形成の遅れたドイツは極端な膨張主義に走った。小国は国内闘争・内乱を経験する。ラテンアメリカ諸国はこの範疇に入る。しかし、小国の中でも経済的状况に恵まれていたため平和に民主化が行なえた国もある。スウェーデンが一例である。中規模の国家の中で、イタリアはドイツの例に従ったが、スペインは国内で内乱を経験する。これはスペインが歴史的過程で凋落傾向にあった反面、イタリアが、国際社会で大国の地位を得たがっていた新興国家であったことが原因かもしれない。ロシア帝国などは産業化が最も遅かった国であるが、民主化を達成することができず、共産主義独裁制となった。以下にこれらの民主過程を検証する。

**英国：**英国では国家形成過程は産業化が17世紀半ばに開始される

前に起こった。1688年の名誉革命の前にジェームス国王がフランスと同様に絶対主義を確立しようとしたが失敗した。その結果、次の支配者のウィリアムとメリーは議会に軍事予算を管理する権利が与えられた憲法を受け入れた。<sup>26</sup> 常備軍は、国王に多大な権力を与えることを好まない貴族にとっては容認できるものではなかった。その結果、英国は大変小規模な軍隊を持つに至り、傭兵に依存することとなる。傭兵が豊富であった18世紀の間はこれはいまやうまく機能した。さらに議会の保証のおかげで英国は国際社会で戦争用の資金を調達することが容易にできた。<sup>27</sup>

1830年ごろ、英国はブルジョワと労働者階級の闘争の時代に入る。この時期、国際的にはある程度の膨張傾向を示すが、極端な膨張主義にはいたらなかった。<sup>28</sup> 好ましい経済的、平和的環境のおかげで英国は極端な膨張主義に走ることは無かった。極端な膨張主義とはここでは自滅的になるところまで止むことなく膨張を続け、潜在敵国を自国より強力にするところまで敵対行為をとり、膨張による犠牲の方が利益を上回ってしまう行動を指す。まずナポレオン戦争中、英国陸軍はその規模を大いに拡大した。これが英国軍隊が巨大な軍事機関になる機会となったかもしれないが、その後続いた平和的状況がこの機会を奪ってしまった。クリミア戦争までは軍隊の総合規模は全人口の1%以下に押さえられた。<sup>29</sup> 第二に、1830年代の、労働者階級がブルジョアに対して権利主張を行なったチャーチスト運動の間、軍隊はまた、労働者階級の脅威に面するブルジョア階級を軍隊に依存させることによって拡大できる機会を得た。しかし、労働者階級はブルジョアにとって真の脅威となるところまで過激化しなかった。労働者はブルジョアの利権を直接脅威にさらすことになる私有財産権の廃止は要求しなかった。<sup>30</sup>

**米国:** 米国は独立戦争によって経済的社会集団は武力的社会集団と完全に分離したため、産業化を進めた時期に国王と貴族階級は存在し

<sup>26</sup> John Childs, *The Army, James II, and the Glorious Revolution* (Manchester: Manchester University Press, 1980). あるいは J.R. Jones, *The Revolution of 1688 in England* (New York: W. W. Norton & Company, 1973).

<sup>27</sup> Stone Lawrence, ed., *An Imperial State at War: Britain from 1689 to 1815* (London: Routledge, 1994), Chapter 5 を参照。

<sup>28</sup> Jack Snyder, *Myths of Empire: Domestic Politics and International Ambition* (Ithaca: Cornell University Press, 1991), Chapter 5.

<sup>29</sup> 詳細に関しては Edward M. Spiers, *The Army and Society: 1815 - 1914* (London: Longman, 1980) を参照。

<sup>30</sup> 詳細に関しては、Pauline Gregg, *A Social and Economic History of Britain: 1760-1970* (London: George G. Harrap & Co., 1971), Chapters 3, 4, 5, and 6 を参照。

なかった。南北戦争の前に、ブルジョワ階級は伝統的な支配階級から影響を受けることなく自己の社会を築くことができた。労働者階級は1860年代まで誕生しなかった。1780年代から1830年代にかけて、米国は農民を除いて、ブルジョワ階級だけが支配する社会であった。国内社会に共通の敵がいなかったため、ブルジョワ階級はその統一性を維持することができず、奴隷制と関税問題をめぐって争い始めた。<sup>31</sup>

ヨーロッパの中心から離れているので、米国は先駆者に追いつくため巨大な軍隊を築く必要が無かった。その結果、軍隊は独立戦争の後すぐに解体された。南北戦争前に、常備軍には一万から二万人の士官と兵士しかいなかった。<sup>32</sup>

二つのブルジョワ社会集団間の戦争のあと、労働者階級が登場し米国は二階級社会となった。1870年代に入って、米国社会は大規模な労働者によるストライキを経験する。他の場合と同様、秩序回復のため軍隊が召集されたが、南北戦争後の良好な経済環境のせいで、軍隊は強い影響力を得ることができなかつた。従って、労働者運動は軍隊の同盟を必要とせず、既存の制度の枠組み内で発展した。労使間の問題の調停のため National Civil Federation (NCF) などの組織が設立された。NCFは、反トラスト法と労働者災害補償法の設置を強く求めた。この伝統は大恐慌時代にローズベルト大統領によるニューデール政策中に頂点に達した。<sup>33</sup>

**フランス：**フランスは中程度の膨張主義を経験した。フランスの国家建設と産業化は比較的順序だてて行なわれ、また産業化は比較的ゆっくりと進んだ。<sup>34</sup> 現代社会に突入する前に、国王は貴族と農民の同盟によって1789年に追放された。<sup>35</sup> しかし、このときフランスには他に社会集団が存在しなかったため、国王は復帰し、よく似た政治

<sup>31</sup> Barrington Moore, Jr., *Social Origins of Dictatorship and Democracy: Lord and Peasant in the Making of the Modern World* (Boston: Beacon Press, 1966), Chapter 3.

<sup>32</sup> Maurice Matloff, ed., *American Military History* (Washington, DC: Office of the Chief of Military History, U.S. Army, 1969).

<sup>33</sup> 詳細に関しては Irwin Yellowitz, *Industrialization and the American Labor Movement: 1850–1900* (Port Washington, NY: Kennikat Press, 1977)を参照。Marguerite Green, *The National Civic Federation and the American Labor Movement: 1900–1925* (Westport, CT: Greenwood Press, 1973)も参照。

<sup>34</sup> フランスの産業過程に関しては Caron François, and Barbara Bray, trans., *An Economic History of Modern France* (New York: Columbia University Press, 1979) を参照。Guy P. Palmade, and Graeme M. Holmes, trans., *French Capitalism in the Nineteenth Century* (New York: Barnes & Noble, 1972)も参照。

<sup>35</sup> Theda Skocpol, *States and Social Revolutions: A Comparative Analysis of France, Russia, and China* (Cambridge: Cambridge University Press, 1979), Chapter 5.

的エリート集団間での権力闘争が続いた。権力に挑戦したエリート層はオルレアン党を議会内に結成した。<sup>36</sup> その間ナポレオン戦争での敗北によって、貴族と軍隊の絆が切れ、軍隊がより独立した社会集団となった。<sup>37</sup> 1830年から1848年の七月王政の間、産業化により新たな社会集団であるブルジョワと労働者階級が政治の場に登場してくる。議会でオルレアン党が徐々にブルジョワ党员によって占められるようになっていったのはこの時期である。未組織の労働者と貧困者が1848年に暴動を起こし、貴族層を打ち倒した。<sup>38</sup>

その国際的立場に関しては、フランスの産業化過程は英国とドイツの中間にあたる。産業化はドイツで生まれたような大規模なブルジョワ層を形成しなかった。その反面、ナポレオン戦争の敗北の結果、軍隊は解体され、その政治的影響力を失った。

フランスは1848年革命の直後に四つの社会集団が混在する状態に入った。1848年から1870年の第二帝国の崩壊までの間、国際的経済環境は良く、平和も続いた。経済は国際自由主義の頂点であった。安全保障体制もウィーン体制の下比較的協調的であった。短命であった第二共和国の間、これらの二つの社会集団は協調を試みた。しかし、すぐに協調は不可能なことが明らかになった。労働者階級はブルジョワにとってこの時点で強い脅威となった。ブルジョワと労働者はすでに革命において共通の敵であった国王と貴族を打破していたので、お互いに争い始めた。<sup>39</sup>

このブルジョワと労働者階級の紛争は軍隊に政治的舞台に再登場する機会を与えた。ブルジョワは今では労働者階級の攻勢に対処するため軍隊を必要とした。その結果、戦争大臣のキャベナック将軍が臨時政府の国家元首となり、労働者デモの厳しい排斥を行なった。普通選挙権も三年在住を要求することにより後退し、有権者の数は980万人から680万人に減少した。その結果議会での社会党の議員の数も減少した。<sup>40</sup>

<sup>36</sup> 詳細に関しては André Jardin, André-Jean Tudesq, and Elborg Forster, trans., *Restoration and Reaction: 1815–1848*. Cambridge History of Modern France, 1 (Cambridge: Cambridge University Press, 1983)を参照。

<sup>37</sup> Skocpol, pp. 190–196.

<sup>38</sup> 詳細に関しては Jardin et al. See also N. Peter Stearns, *Paths to Authority: The Middle-Class and the Industrial Labor Force in France, 1820–1948* (Urbana: University of Illinois Press, 1978)を参照。

<sup>39</sup> 詳細に関しては Maurice Agulhon and Janet Lloyd, trans., *The Republican Experiment: 1848–1852*. Cambridge History of Modern France, 2 (Cambridge: Cambridge University Press, 1983)を参照。

<sup>40</sup> 同。

ルイ・ナポレオンはこの軍隊、ブルジョワと労働者間の複雑な関係を利用した。彼はブルジョワと同盟を結び、秩序の回復を約束した。ブルジョワが黙認し、軍隊が援助したため彼のクーデターは成功した。<sup>41</sup> また、ルイ・ナポレオンの鎮静化によって、共産主義者は壊滅した。同時に、彼は大衆の支持を得るため国民投票を使った。これは以下に見るようにイタリアでの連合パターンとよく似ている。<sup>42</sup> またドイツのパターンとも似ている。取引の一部として海外での冒険主義が第二帝国によって行なわれるようになり、クリミア戦争、イタリア介入、普仏戦争と続く。普仏戦争の敗北により第二帝国は崩壊する。

ルイ・ナポレオンの失脚のあと、共産党が極短期間政権を握った。これはパリ・コミューンと呼ばれる。しかし、ルイ・ナポレオンがすでに過激左派を壊滅させていたので、これは長く続かなかった。<sup>43</sup> 過激左派が壊滅した後で、穏健共和派が政権に就く。ブルジョワは過激左派の心配をしなくてよくなったので、第三共和国は彼らにとって受け入れられた。労働者とブルジョワ階級は和解し、ブルジョワはもう軍隊と連帯する必要がなくなった。<sup>44</sup> 軍部は政治的影響力を失い、文民統制下に入る。軍部は抵抗を試みたが、市民社会に同盟者が無く、その努力は実らなかった。この一例がドレイフェス事件である。<sup>45</sup>

**ドイツ：** ドイツ国家は1840年代から50年代にかけて急速に産業化を行なった。<sup>46</sup> 統一ドイツ国家は1871年に形成された。権力の分配はドイツ議会内で制度化された。皇帝が主権を持ち、貴族とブルジョワの利権は議会で代表された。労働者階級は政治的に重要

<sup>41</sup> 詳細に関しては Alain Plessis and Jonathan Mandelbaum, trans., *The Rise and Fall of the Second Empire: 1852–1871*. Cambridge History of Modern France, 3 (Cambridge: Cambridge University Press, 1985)を参照。

<sup>42</sup> 同、6頁。

<sup>43</sup> 詳細に関しては John Hicks and Robert Tucker, eds., *Revolution and Reaction: The Paris Commune 1871* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1973)を参照。

<sup>44</sup> 詳細に関しては Jean-Marie Mayeur, Madeleine Reberioux, and J.R. Foster, trans., *The Third Republic from Its Origins to the Great War: 1871–1914*. Cambridge History of Modern France, 4 (Cambridge: Cambridge University Press, 1984). Alistair Horne, *The French Army and Politics: 1870–1970* (New York: Peter Bedrick Books, 1984)を参照。

<sup>45</sup> Horne.

<sup>46</sup> 同時期のドイツの産業化に関する詳細に関しては Helmut Bohme, W.R. Lee, trans., *An Introduction to the Social and Economic History of Germany: Politics and Economic Change in the Nineteenth and Twentieth Centuries* (New York: St. Martin's Press, 1978), Chapters 3, 4, and 5を参照。Martin Kitchen, *The Political Economy of Germany: 1815–1914* (London: Croom Helm, 1978), Chapter 4も参照。

になり始めていたが、議会での代表は極めて限られたものだった。<sup>47</sup>

国際社会においては、ドイツは英国に経済的にも軍事的にも後れを取り、追いつかなければならない立場にあった。そのせいでドイツは集中されたブルジョワの利害を持つようになったが、小規模なブルジョワジーも中間層として存在した。<sup>48</sup> ドイツでは強い軍事的利権が存在してきたが、ドイツが英国と同等の海軍を発展させようとしたときにより強化された。<sup>49</sup>

統一後すぐ、全ての社会集団が国内に共存するようになる。この時期、経済環境と安全保障状況は過激な膨張主義を引き起こしやすいものとなっていた。経済環境は19世紀の半ばは良好であったが、1870年代に悪化した。同時に経済状況の悪化が帝国主義の競争を激化させ、ヨーロッパは軍事的に不安定となる。その結果、ドイツのブルジョワジーは貴族と強い繋がりのあった軍隊との連帯関係に入り、ウィルヘルム2世が世界政策の一部としての海軍拡張を強く主張するようになる。<sup>50</sup> 国内に同盟を結ぶ相手もなく、労働者の政党であったSPD（ドイツ社会党）は戦争を支持した。それによって何らかの譲歩が得られればと期待したのである。<sup>51</sup>

第一次世界大戦の後、ドイツはまた過激な膨張主義に走る。敗北の結果帝政は廃止された。軍隊は1918年の革命の際解体の危機に瀕していた。SPDはその頃までには革命党というよりは革新政党に変身していたのだが、ドイツ議会において支配政党となった。この社会集団は、独自の革命議会を開設し、伝統的士官学校の閉鎖と最高指令権を厳しい文民統制下に置くように投票した労働者階級の過激派からの深刻な脅威に直面していた。<sup>52</sup>

その間、ドイツの国際社会における立場はかなり変化した。完全に破壊されたドイツは経済的に追いつかなければならなかった。さらに

<sup>47</sup> 詳細に関しては Simon Taylor, *Germany: 1818–1933, Revolution, Counter-Revolution, and the Rise of Hitler* (London: Duckworth, 1983) を参照。

<sup>48</sup> 詳細に関しては David Calleo, *The German Problem Reconsidered: Germany and the World Order, 1870 to the Present* (Cambridge: Cambridge University Press, 1978) を参照。

<sup>49</sup> 詳細に関しては Paul Kennedy, *The Rise of the Anglo-German Antagonism: 1860–1914* (London: Ashfield Press, 1987), Part III を参照。

<sup>50</sup> 同、228頁。

<sup>51</sup> この時期の連帯形成の詳細に関しては William Carr, *A History of Germany: 1815–1985* (London: Edward Arnold, 1968) を参照。Robert Herndon Fife, Jr., *The German Empire between Two Wars: A Study of the Political and Social Development of the Nation between 1871 and 1914* (New York: Macmillan Company, 1916) も参照。

<sup>52</sup> John W. Wheeler-Bennett, *The Nemesis of Power: The German Army in Politics, 1918–1945* (London: Macmillan & Co., 1954), p. 32.

重要なことには、厳しい軍縮条件が戦勝国によって課せられたため、軍部の過激化がある程度進んだ。これはたいしたものではなかった、というのは軍部はドイツ国内では是非必要とされていたからである。労働者階級の攻勢により深刻な脅威にさらされていたブルジョワは陸軍士官のグローナーと SPD 党首のエバートの電話での会話によって、軍部と取引をする。これによって、軍部はブルジョワを労働者階級の攻勢から守り、その代わりに軍部の政治的影響力が保たれることとなった。1920年代にはドイツは超インフレに苦しんでいた。例えば、1922年の12月には鉄道の技術を有する労働者の平均実質賃金は1913年と比べて55%減少した。<sup>53</sup> ここで大恐慌がドイツを襲った。

ドイツの経済状況は第一次世界大戦後の巨大な負債のせいさらに深刻なものとなった。1919年のベルサイユ条約によって要求されているヨーロッパの戦勝国への『賠償金』支払いのため、また産業再建のため多額の負債を背負うことを余儀なくされた。米国経済が恐慌に陥ったとき、米国の銀行はその貸付金を引き上げたがこれがドイツの銀行制崩壊につながった。<sup>54</sup>

1929年から1932年の間産業生産、卸売価格と海外貿易は、それぞれ41%、29%、61%減少した。<sup>55</sup> 1929年には約150万人の失業者があったが、1933年までにはその数は600万人まで増加した。<sup>56</sup>

経済的社会集団は困窮状態に陥った。この背景に対して、膨張主義の連合が国家社会党を中心に1933年3月5日の選挙中に全ての社会部門が参加して形成された。陸軍はヒトラーの再軍備政策を支持した。ヒトラーも軍部と取引をして、自身の准軍隊であったSAを解体し、陸軍の独立を保証した。それと引き換えに陸軍はヒトラーの台頭を妨げなかった。国家社会党時代の初期に、ドイツの機関車製造者で、主要な産業家であったフォン・ボルシッグなどの資本家は党に資金提供を

<sup>53</sup> Gerald D. Feldman, *The Great Disorder: Politics, and Society in the German Inflation, 1914–1924*, Oxford: Oxford University Press, 1997, p. 614.

<sup>54</sup> “Modern American Poetry: About the Great Depression,”

<http://www.english.illinois.edu/maps/depression/about.htm>

<sup>55</sup> Jerome Blum, Rondo Cameron, Thomas G. Barnes, *The European World: a History* (2nd ed. 1970) p. 885.

<sup>56</sup> “The Great Depression,” <http://alphahistory.com/nazigermany/the-great-depression/>

行なった。<sup>57</sup> 1932年から33年にかけて、党が資金難に陥ったとき、ドイツ西部の鉄鋼トラストの影響力のある一員とその他の産業家が大部分の負債を引き受けた。これは党のスローガンであった「もし国家社会党が崩壊すれば、ドイツでさらに1000万人の共産党員が生まれるだろう。」というものに対応してのことであった。<sup>58</sup> 1930年10月、ストの波がドイツを襲ったとき、ヒトラーはこれを支持して、雇用者にはストを非難すると労働者が社会主義を支持するようになるからだと説明した。<sup>59</sup> 1933年3月に、大半が労働者であったであろう一般大衆はヒトラーの政党を支持し、そのおかげで288議席という大半の議席が獲得できた、第二政党は社会民主党で120議席であった。

**イタリア：** イタリアでは国王とその挑戦者の間の伝統的競争関係は北部のピードモントと南部のサヴォイ間の地域競争の形を取った。1876年に南部は政権をとり、ピードモントの伝統は議会に受け継がれた。ピードモントの伝統と膨張を交互に繰り返した。まず最初にイタリアは普仏戦争に参加し、その結果は合理的権力の最大化で特徴付けられる。ピードモント人は軍事的膨張を支持するが、用意ができるまでは行動はとらない。1870年代から1890年代にかけて、彼らは経済的、軍事的譲歩をフランスと英国に対して行なった。1882年にピードモントが確立すると、サヴォイ国王ヴィットリオ・エマヌエーレはこの新たな政治的挑戦者に対抗するため軍隊の支持を求めた。彼らは可能な限り膨張的政策を取った。

第一次世界大戦まではイタリアの外交政策はこの競争関係を反映し、縮小は悲惨なものだった。ピードモントは軍事予算を削り、軍隊の威信は崩れ去った。1887年にフランチェスコ・クリスピが首相となり、壮大な膨張を行なった。これが1896年のアドワでの冒険的軍事行動の悲惨な結果を生み、軍隊は再度信用を失った。反軍感情が社会で高まった。士官はその給料の安さと失われた威信は文民政府のせいだと批判した。この時期、ヴィスコンティ・ヴェノスタが外相となり、ピードモント型的外交政策を実施しようとする。またヴィットリオ・エマヌエーレ二世が国王となる。彼は協調的・抑制的外交政策を採り、フランスと英国との相互理解、その他の協調的戦略を支持した。しかし同

<sup>57</sup> ナチス党の財源に関する詳細に関しては、Konrad Heiden, *A History of National Socialism* (New York: Alfred A. Knopf, 1935), pp. 100–103 (原語はドイツ語。翻訳者不明)を参照。

<sup>58</sup> 同、222頁。

<sup>59</sup> 同、133頁。

時に彼は戦争相からの軍部の独立を獲得した。<sup>60</sup>

その間産業化が興り、新たな社会集団が生まれる。イタリアは1870年に統一したが、重工業を持っていなかった。ピードモントの指導者は重工業化を強力に進めることによって大国を刺激することを恐れた。しかし最終的にはイタリアは大国に軍事的に追いつき自身が大国の地位を得るためには重工業化を進めざるをえなかった。<sup>61</sup> 1880年代と90年代に重工業化が進んだ。それ故、重産業部門は軍隊と強い繋がりを持つことになる。また、できるだけ早く追いつかなくてはならない必要によって、銀行、産業と国家が親密な関係を持つ経済構造が作られた。<sup>62</sup>

労働者階級は1890年代に登場する。社会党は1892年に設立した。クリスピは弾圧をもってこれに対抗する。しかし増大する労働者の数は弾圧政策の継続を難しいものとした。アドワの悲惨な結果の後、ジョヴァンニ・ジョリッティが首相となり、軍隊、ブルジョワ、土地所有者、カトリック、そして労働者の利権を代表した社会主義者と全ての社会集団を含んだ連帯を結成しようとした。ジョリッティは労働者と農民に対して懐柔政策を採った。社会党は1900年に承認された。普通選挙権は1912年に導入され、投票者数は300万人から900万人に増加した。ジョリッティは労働者に労使抗争に於いて国家の中立を提供した。軍隊の懐柔策として、軍事予算がかなり増大し、オットーマン帝国との戦争が1911年に始まった。<sup>63</sup>

しかし、ジョリッティの試みはあまりに意欲的過ぎた。最終的には彼は全ての矛盾する利害関係を調節することができなかった。社会主義者は普通選挙制を活かして反戦運動を打ち上げた。台頭しつつあったブルジョワ階級はジョリッティの政策に強烈に反発するようになる。熟練労働者は労働者階級にあまりに譲歩しすぎる国家に怒りを感じていた。<sup>64</sup>

第一次世界大戦はこのような状況下で起こった。激しい討議のあと、イタリアは参戦する。戦争はイタリア社会に大きな影響を与えた。軍部はこの機会を利用した。カルドナ將軍は攻撃的作戦に出た。多大な

<sup>60</sup> 詳細に関しては、Brian R. Sullivan, "A Thirst for Glory: Mussolini, the Italian Military and the Fascist Regime, 1922–1936." (Ph. D. diss., Columbia University 1984), Chapter 1 を参照。

<sup>61</sup> Richard A. Webster, *Industrial Imperialism in Italy: 1908–1915* (Berkeley: University of California Press, 1975), p. 8.

<sup>62</sup> Alexander De Grand, *Italian Fascism: Its Origins & Development* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1989), pp. 6–7.

<sup>63</sup> 詳細に関しては同、11～13頁を参照。

<sup>64</sup> 同、13頁。

犠牲を払った後、イタリアは勝利した。しかしながら、ヴェルサイユ条約は兵士を全く失望させるものであった。大国間の利害の中でイタリアは全く無視されてしまった。

経済的状况も戦争中に大きく変化した。第一に、戦時中武器産業が大成長し、軍部と重工業部門がさらに緊密な関係を持つようになる。第二に戦時中のインフレが労働者と農民を苦しめた。これが原因で1920年と21年に都市と農村の両方で暴動とストが頻発する。このような重大な経済危機の中、市民による軍部への攻撃がさらに強まった。財務大臣のフランチェスコ・サヴェリオ・ニッティは軍部を攻撃した。まず、ニッティは軍部のカボレッテでの作戦の大失敗に関する公式の報告書を一般公開した。これによって軍隊は信用を失い、陸軍は1919年の非軍事化に抵抗することが難しくなった。1919年ニッティはまた戦争大臣の権限の一部を文民警察に移した。

この時点で、イタリア社会は完全な混乱状態に陥った。ジョリッティが政府に帰還した。彼は再び大連合の形成を試みた。労働紛争は彼の努力によって決着を見た。しかし、ブルジョワは裏切られたと思った。このように、文民政府はブルジョワの支持を失い、軍部を立腹させた。ムッソリーニはこの状況を利用し国家主義的連合を形成する。彼は軍部と取引をし、軍部の自治を保証すると引き換えに軍部はムッソリーニの台頭を防がなかった。怒りのブルジョワはムッソリーニを支持した。<sup>65</sup>

**スペイン：** スペインはイタリアと大変よく似た経済的政治的状况下にあったが、過激な膨張主義には走らなかった。そのかわり、激しい内乱を経験した。第一に経済的には、ヨーロッパの大国に後れを取った。経済歴史学者のハリソンは、19世紀半ばのスペインの経済状態を以下のように記述する。「英国、ベルギー、フランスとドイツが現代資本主義経済の基盤を築きつつあった時、ピレネー山脈の南での産業化の失敗が、スペインの経済的発展の典型的な例であることを確認することとなった。」<sup>66</sup> 政治的には19世紀までにはスペインは国際社会での支配的立場を失っていた。歴史家カーは次のように述べている。「ウィーン会議においてはスペインの主張は第二級国のものとして退けられた。」<sup>67</sup>

<sup>65</sup> 1917年から1922年にかけての国内状況と軍部とその他の社会集団の関連の詳細に関しては、Sullivan, "A Thirst for Glory," 102-123頁を参照。

<sup>66</sup> Joseph Harrison, *An Economic History of Modern Spain* (Manchester: Manchester University Press, 1978), p. 42.

<sup>67</sup> Raymond Carr, *Spain: 1808-1975* (Oxford: Clarendon Press, 1982), p. 38.

しかし、イタリアと異なり、スペインは大国の地位を追及しなかった。大国政治に巻き込まれること無く、第一次世界大戦中は中立を保った。これによって、スペインはイタリアの発展経路とは極めて異なった経路を辿ることとなり、膨張主義ではなく内乱を経験する。従って、スペインでは軍部と緊密な関係にある重工業は発展しなかった。産業化に時間をかけたため、スペインはまた早急な労働者階級の台頭を経験することも無かった。これによって伝統的な軍事的社会集団の立場が比較的保証されたものとなった。下からの挑戦を受けなかったため、軍事的社会集団はヨーロッパ大国にかなりの後れを取っていることに憂慮した。先進国に追いつくため、支配階級の一部は改革が必要と考えた。しかし支配層の中には既存体制を維持すべきだと主張するものもあった。前者は革新派、後者は保守派、あるいは王政派と呼ばれた。スペインは支配層のこの両極端の間で一連の動揺を繰り返すことになる。<sup>68</sup>

現代世界で競争力をつける為の社会改革の試みは早くはカルロス3世のもと1760年には始まっていた。1790年にフランス革命に対応して過激な運動が起こった。フランス革命とその後の発展は伝統的絶対主義体制に深刻な打撃を与えた。その結果カルロス4世は退位し、フェルディナンド7世が王位につく。それからナポレオンがスペインを侵略し、フェルディナンド7世はフランスに連行され囚われの身となった。フェルディナンドは抵抗運動を組織し、ナポレオンが敗北したとき、再び王位についた。

1814年専制政治が復活し、1820年の革命まで続いた。これはフェルディナンドが自由主義者に対してあまりに寛容すぎると思った王政派のクーデターであった。この革命には娘のイサベラを王位につけようとしたフェルディナンドの妻クリスティーナと弟のドン・カルロスとの間の権力闘争に組み込まれた。王政派はドン・カルロスを支持したのでカルリストと呼ばれた。カルリストは頑固な保守主義者（過激右派）を代表することになり、1930年代までその努力を続けた。このクーデターの試みに対抗して、自由主義の軍隊はクリスティーナを支持した。王政派と革新派の抗争は内乱に発展した。内乱中に自由主義者は穏健派と革新派に分裂した。前者は革命を支持しなかったが、後者は受け入れた。穏健派と革新派の間でカルリストに対する連合を形成しようとする試みがみられたが失敗に終わった。革新主義者は穏健派政府に対して反乱を起こす。このとき軍隊は政府を支持しなかった。

<sup>68</sup> 詳細に関しては Carr を参照。ここでは Carr の著書に基づいて略史を紹介した。

### 34 ピコーの歴史の周期と現代世界の三重危機

その結果政府は崩壊し、エスパルテロ将軍による摂政政治が確立し、1840年から43年まで続いた。

この政府は共和派、あるいは民主派である過激左派と過激右派のカルリストを一端とし、革新派を別端とした連合によって挑戦を受ける。革新派は議会支持と革命支持に分かれていた。これが革新派を弱めることとなった。ここで穏健派は議会派革新主義者と連合を形成し、支配権を取り戻す。しかし穏健派はそれほど強固に結束していたわけではなく、革命の恐怖によってのみ結ばれていたもので、崩壊した。その結果、議会派革新主義者が政権の座を回復した。

1854年、保守派の護衛兵がプロメンスミアメントと呼ばれるクーデターを起こした。自由主義者はこれと戦い勝利を収める。新政府は自由主義者と連合を結んだオドンネル将軍に率いられた。1856年、新憲法が宣言されたが、これは当時ヨーロッパで最も革新的なものであり、有権者数の著しい増加も含まれていた。19世紀の半ば、スペインは経済拡張の時代を迎える。カタロニア人は繊維産業以外に産業化を行なおうとする。それに応じてこの地域で最初の労働者層が現れ始める。1866年に最初の労働者団体が組織された。しかし1850年代の労働争議は全て厳しく弾圧された。一方、貴族と将軍の合同もこの時期に起こった。これらの社会変化を反映して、スペイン憲法に初めて資本主義信条が組み込まれた。

この自由主義連合のもと、自由主義軍隊の利害とブルジョワ利害を代表した連合が形成される。軍部の要求を満たすため、政府はある程度の海外冒険主義を示す。しかし連合は長続きしなかった。1859年の予算では軍隊の権益は良く満たされていたが、ブルジョワの権益は満たされていなかった。その結果、オドンネルは1863年に辞職を余儀なくされた。それで革新派は政府に対してボイコットを行なう。これはレトライメントと呼ばれた。イサベラは妥協を拒否し、それでまた革新派の将軍ホアン・プリムによるクーデターが起こった。その結果1873年共和国が設立する。しかし、それは組合主義者、革新派と共和派・民主派の競合する利害関係を調節することができず崩壊し、無政府状態となった。このとき、カルリストと共和党派（再び、過激右派と過激左派）が連合を形成しクーデターを実行し、その結果ブルボン制復活となった。イサベラの息子アルフォンソ12世はカルリストであったが、彼が王位についた。マドリッドの貴族とバルセロナのブルジョワがこの政権を支持した。

1873年から1898年の間、スペインは中道派による安定した君主制の支配下にあった。1876年の新憲法は国王と議会が主権を

共有すると定めた。しかし実際は、国王は議会に従属した。保守派と自由派の権益は議会で代表された。したがって権力分配の移行はもうクーデターの形式を取らなくなった。その代わり、保守派と自由派が交代に政権に付くようになる。これがトゥルノと呼ばれる習慣となった。しかしこの政権は内部から崩壊した。共通の利害を共有することなく、自由派と保守派は派閥に分かれていた。その結果、二政党は統一が取れず、分断していった。1898年にスペインが米西戦争に敗北したとき、この政治体制は崩壊する。国家再建の試みがいろいろ行なわれたが、どれも成功しなかった。

そして第一次世界大戦が勃発する。スペインは中立を保ったが、危機も経験した。それは主にさらなる経済拡張の結果であった。この時期、中立のスペインは経済ブームを経験して、ついに植民地経済からの脱却に成功した。1913年の輸出量に比べて、1917年の家畜の輸出は100から18に減少、生資源は100から72に減少した。その反面製造物資は100から215に増加している。<sup>69</sup> スペインはこの拡張によって、資本家時代に入ったが、<sup>70</sup> 同時に激しいインフレも経験する。全体的には、賃金は物価よりも早く上昇したので、台頭してきた労働者階級も恩恵を受けた。しかし、労働部門の中には、恩恵を受けられなかったものもあり、労働者階級は革命的になった。政府はこの状態を納めようとしたが成功しなかった。また兵士は相対的賃金の下落を被ったので、再度政治に関心を持ち始めた。この時点でカタロニアの産業家は軍部を支持する用意があった。かくして軍隊は再び政治介入を行なうことになる。政府は主にブルジョワの利権を代表するカタロニアの分離主義者、それから軍隊、共和主義者と労働者階級からの脅威にさらされた。軍部は民主主義は国家再生に失敗したと主張し、自身をその解決策であると提示した。これを社会は受け入れた。1919年には軍隊に支持を受けたカタロニアの産業家によってストは弾圧された。1923年までには革命的労働運動はその勢力を失った。

プリモ・デ・リベラ将軍は1923年に独裁制を設立する。彼は無政府主義者を弾圧したが、過激労働者には譲歩し、1926年にアウノスの労働組合法を施行する。カタロニアの分離運動は弾圧され、ブルジョワは過激化する。軍部は独自の関心であったモロッコ問題をフランスの協力を得て解決する機会に恵まれた。最終的にはリベラ政権は

<sup>69</sup> Joseph Harrison, *An Economic History of Modern Spain* (Manchester: Manchester University Press, 1978), p. 91 の図表に基づく。

<sup>70</sup> 資本主義社会の形成と組織労働者の台頭に関しては Harrison, Chapters 5 and 6 を参照。

経済条件が良好な間は継続したが、大恐慌が1929年の秋に襲ったとき崩壊した。

1936年に第二共和国が生まれた。主な構成要素はアザーニャ連合だった。これは社会主義者内の改革派と共和派の連合であった。それは社会主義者と私有財産に関心のある資本家との間の不安定な連合だった。この政権もまた右派と左派の両方から脅威を受けた。カルリストはスペインの国家主義を政府を揺るがす策として使った。クーデターを試みたが失敗する。しかし1933年の選挙では、右派が勝利し政府を形成することとなる。そうになると、今度は左派が反乱を起こす番である。労働者階級が革命的になり、アザーニャ連合が崩壊する。労働者は1934年に十月革命を試みるが、厳しい弾圧を受ける。しかし1936年に左派は選挙に勝利し政府を形成する。そうすると、軍隊がモロッコで反乱を起こし、これがスペインに広がった。このようにスペイン社会は完全に両極化し、合法的体制下で権力を失った側が武力闘争で勝者を攻撃するという形となった。そして法制度が崩壊し、スペインは内乱状態にはいる。

内乱後、フランコ将軍が独裁制を設立する。その支配下で、スペインは経済的に大きな成長を遂げる。これはしばしば「スペインの奇跡」と呼ばれている。<sup>71</sup> そのおかげで社会構成が経済を基盤としたものに変わった。フランコの後、変遷は滑らかではなかったが、政党内の抗争の後、社会党のPSOEはマルクス主義を党原則からはずしたため、資本家との妥協が可能となった。<sup>72</sup> 軍隊も簡単には引き下がらなかった。またクーデターを試みたが、社会で経済的社会集団が団結して反軍にまわっていたので、社会で孤立していた。クーデターは失敗し、文民統制が確立した。<sup>73</sup>

**ラテンアメリカ:** アルゼンチン、ブラジル、チリ、メキシコ、ペルーといったラテンアメリカ諸国も民主過程で国内紛争を経験したが、海外での軍事行動はほとんど取らなかった。これらの国が海外で軍事行動を起こしていたら、イタリアが辿った経路を辿っていたことにな

<sup>71</sup> 同時期のスペインの経済成長に関する詳細は、Harrison, Chapter 8 を参照。

<sup>72</sup> 詳細に関しては、Elizabeth Nash, "The Spanish Socialist Party since Franco: From Clandestinity to Government: 1976–82," in David S. Bell ed., *Democratic Politics in Spain: Spanish Politics after Franco* (London: F. Pinter, 1983), pp. 29–61 を参照。Donald Share, *Dilemmas of Social Democracy: The Spanish Socialist Workers Party in the 1980s* (New York: Greenwood Press, 1989), Chapter 5 も参照。

<sup>73</sup> 詳細に関しては、Stanley G. Payne, "The Role of the Armed Forces in the Spanish Transition" in Robert P. Clark, and Michael H. Haltzel, ed., *Spain in the 1980s: the Democratic Transition and a New International Role* (Cambridge, Mass: Ballinger Pub. Co., 1987), Chapter 6 を参照。

るだろう。一見すると、これらの国々に共通している条件は米国の存在である。1823年にモンロー主義を宣言したことにより、米国は西半球での覇権を確立した。米国とラテンアメリカ諸国の国力の差は大きく、相対的にラテンアメリカは小国となる。19世紀後半にイタリアが行なったような行動は米国の介入を招き、国家を危険にさらしたことだろう。ここで、大体の感触を得るためウィニアのアルゼンチンに関する観察を引用する。アルゼンチンはラテンアメリカでは大変珍しく外部戦争を試みたが、この結果は内部の抗争を外戦に転化する選択肢はないということをしみじみ思い知らされるものであった。この場合介入したのは英国で、米国ではなかったが。

ホアン・ペロンの死によって始まった時代はラウル・アルフォンシンの1983年の選挙によって終わった。一人の大統領の埋葬と別の大統領の選挙というのはたいていの国ではそれほど珍しい出来事ではないが、アルゼンチンほど時代の分かれ目になっている国は珍しい。この間にアルゼンチンは七年にわたる軍事支配を経験し兵士は9000人近い国民を殺害した。また1982年にアルゼンチンは英国との戦争に敗れたが、最近そのような経験をした国もほとんどない。どう見ても、これはこの問題を抱えた国にとっては不幸な時代であった。

もちろん政情不安はアルゼンチンにとって新しいことではない。1930年代には軍部は民主政府を退陣させている。1940年代にはホアン・ペロンという名の士官が大統領に選ばれている。しかし、10年後には彼自身が軍部の同僚によって退陣させられた。その後18年の間誰一人国家の経営に成功した者はいなかった。そして1973年にペロンが返り咲くが、それもまた三年後のクーデターによって終わりを告げる。<sup>74</sup>

**スウェーデン：**スウェーデンでは、国王と貴族の間に長年にわたる競争関係があった。1680年から1718年の間に国王は絶対体制の確立に成功する。<sup>75</sup>しかし大北方戦争での敗北のため、国王の権威は失われる。1719年の無血クーデターの結果、新政府が形成され、権力の分配は貴族に大きく傾いた。貴族の利権は議会で代表された。この政府は1772年まで続いた。この時代は自由の時代と呼ばれて

<sup>74</sup> Gary W. Wynia, *Argentina: Illusions and Realities* (New York: Holmes & Meier, 1986), p. ix.

<sup>75</sup> 詳細に関しては、A. F. Upton, *Charles XI and Swedish Absolutism* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998)を参照。

いる。1772年と1809年の間に権力はまた国王に傾いた。1772年にグスタフ憲法が發布され、グスタフ4世は1789年の連盟と安全保障法により独裁制を確立した。その結果議会は独立を失った。権力分配は1809年にロシアがフィンランドに侵攻したとき起こった危機の間に再び貴族側に傾いた。グスタフ4世は逮捕され、退位を余儀なくされた。1809年から1921年の間、権力はまた貴族の手中におさまる。しかし1809年体制は自由の時代ほど自由派の関心事項は追求されなかった。政治的主導権を握るといふより、この体制は国王の権力の乱用からの保護を意図していた。1840年代に自由主義者の影響は増大し、国王の権威はさらに減少した。1850年代の初頭、保守派がある程度の勢力を回復するが、1856年から66年にかけて流れは再び自由派に傾く。

そして1866年に議会法が制定される。ここでは貴族、僧侶、市民と農民から成っていた階級制の議会は二院制に置き換えられた。この改革によって、権力は以下のように分配される。国王と貴族の間に競合関係があり、これは国王と議会間のバランスによって表明された。議会内では上院は貴族の権益を代表し、下院は農民の権益を代表した。スウェーデンはこの時点では産業化は興っていなかったため、経済的社会集団はまだまとまった政治的影響力を持っていなかった。彼らの権益は両院で少数派として代表されていた。この政治体制は現代体制に類似し始めた。下院内では現代政党が出現してきた。1885年頃に保護貿易と自由主義の間の論議があったが、これは農民と台頭してきた労働者階級の間の利害を表したものであった。<sup>76</sup>

1918年から1921年の間に憲法改正が行われ、政府の議会に対する権限はさらに制限された。国王に対する最後の打撃は統帥権が国王の手から議会に移ったことであった。1914年の宮庭内危機の間に、国王は直接人民に訴え自己の大臣たちを罷免した。このような必死の努力にもかかわらず、1920年に憲法が改正され、文民統制が確立する。<sup>77</sup>

スウェーデンの産業化は1850年代に始まるがこの過程は当初はゆっくり進んだ。1890年代に産業化は加速化される。鉱業と重生産業での労働者数は1890年初期から1913年の間に倍増する

<sup>76</sup> 詳細に関しては、Michael F. Metcalf ed., *The Riksdag: A History of the Swedish Parliament* (New York: St. Martin's Press, 1987), Chapters 2, 3, and 4 を参照。

<sup>77</sup> 詳細に関しては、Per Thullberg, "The Supreme Command of the Armed Forces, 1895–1920," in *The Swedish Armed Forces and Foreign Influences: 1870–1945* (Stockholm: Militärhistoriska Förlaget, 1992), pp. 7–22 を参照。

(約5万5千人から11万1千人)。<sup>78</sup>したがって、スウェーデンが労使紛争に直面するようになったのは1910年代のことであった。その頃までには国王と貴族の紛争は決定的に決着を見ていた。そして軍隊は議会の統制下に収まっていた。その議会は凋落しつつあった貴族の利権と勢力を増しつつあったブルジョワ権益を代表していた。

第一次世界大戦の直後、労働争議が起こった。これはまたソ連の革命にも刺激されていた。左派の指導者の中にはレーニンに会った者もいた。しかし、最後には武力闘争は発生しなかった。左派の多数派は議会制の維持を支持した。保守派もまた左派による一連の改革を受け入れたが、これは拒否すれば内乱になるだろうと思つてのことであつた。<sup>79</sup>

さらに、1920年代に当初困難を経験した後スウェーデンは輸出部門で急成長を遂げ、労使間の妥協にさらに良好な環境となる。この傾向は1929年の世界大恐慌によって翻されたかもしれない。もし被害が大きければ、労使間の紛争は深刻化し、軍部が失った勢力をいくらかでも取り戻すことができたかもしれない。しかし、大恐慌のスウェーデンへの影響は他の国ほど深刻ではなく、回復も早かつた。経済学者はその理由を推測する。そのひとつはスウェーデンの貨幣が過小評価されていて、輸出部門を助けていたこと。もうひとつはスウェーデンの国内市場の拡大が急速に進んでいたこと。そして最後は少なくとも部分的には農業生産品の保護の導入であつた。<sup>80</sup>

これらの良好な経済状況に助けられて、労使間の妥協は達成された。エスピングアーデルセンはこの妥協を次のように要約している。

1920年代と30年代からスウェーデンの社会民主制度は経済成長を通しての完全雇用の原則にしっかりと根付いてきた。確かに、誰も貧困を分け合うことによつての平等を信じていたわけではない。労働運動と事業家の間に1930年代に結ばれた合意は、労働者は私有財産の神聖を完全に黙認することであつた。これを基本に、社会民主党の繁栄への処方方は分配の平等

<sup>78</sup> Erik Dahmén, translated by Azel Leijonhufvud, *Entrepreneurial Activity and the Development of Swedish Industry: 1919–1939* (Homewood, Ill.: Richard D. Irwin, Inc., 1970), p. 20.

<sup>79</sup> 詳細に関しては、Andrae Carl-Göran, “The Swedish Labor Movement and the 1917–1918 Revolution,” in *Sweden’s Development from Poverty to Affluence, 1750–1970*, ed. by Steven Koblik, trans. by Joanne Johnson (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1975), pp. 232–253 を参照。

<sup>80</sup> 詳細に関しては、Lars Magnusson, *An Economic History of Sweden* (London: Routledge, 2000), pp. 169–170. See also, Dahmén, pp. 41–43 を参照。

性、生産性が高く融通の利く労働力と受け入れられる利益レベルの不安定な混合を奉ずるようになる。スウェーデンの労働運動は平等と利益、福祉と効率の間にマイナスとならない均衡をもたらすことに通常では考えられないほど優れていた。<sup>81</sup>

**ロシア：** 帝政ロシアは皇帝支配からの移行中に国内革命を経験した。民主主義を達成することができず、別型の独裁制となった。ロシアの第一次大戦での引き続き惨敗により貴族は皇帝に対する信頼を失い、軍部を自身の管理下に置きたいと考えた。労働者と農民は兵士として勧誘されたが、戦争により完全に疲弊しており、皇帝に対しての不平等が増大していた。革命はこれらの二つの社会集団、すなわち貴族と労働者・農民によって1917年2月に実行された。

1917年の2月から10月の間、ケレンスキーと、憲法君主制支持者から穏健社会主義者にわたる幅広い政治連合であったその暫定政府は、自由主義の民主政府を設立しようとした。政府はまた労働者、兵士と農民によって選ばれたソビエトからの支持も必要としていたので、彼らの利害関係も無視できなかった。これによって暫定政府は経済的に大困窮に陥る。これらの利害関係は全てを考慮に入れるにはあまりにも矛盾が大きすぎたのである。さらに、外圧その他の要因で第一次世界大戦を終わらせることができなかつたことが人民を完全に失望させることとなった。農民と労働者は自発的に特権階級を攻撃するようになり、無政府状態となった。農民は農村では独自の反乱に成功していたので、その結果、農民は革命には関心を失い、干渉を嫌った。国家的指導者には疑いを持ったのである。

都市部では、状況は異なっていた。都市生活を維持するためにある種の秩序が必要であった。ここで、ロシアが産業化が最も遅れていたもので産業化がほぼ完全に国家の手で行なわれ、ブルジョワによって行なわれなかつたという事実が発展過程に大きく影響する。産業部門の労働者を除いて、国家建設を実行できる組織だった社会集団が存在しなかつたのである。軍隊がこの役割を負うこともできたかもしれないが、長期にわたる戦争のため完全に疲弊していた。

社会党の過激派であるボルシェビキはこの状況を利用し都市の労働者を動員することに成功した。産業部門の労働者は生活を支えるため

---

<sup>81</sup> Gösta Esping-Andersen, "The Making of a Social Democratic Welfare State," in *Creating Social Democracy: A Century of the Social Democratic Labor Party in Sweden*, ed. by Klaus Misgeld, Karl Molin and Klas Åmark (University Park, Penn: Pennsylvania State University Press, 1988), pp. 37-38.

工場を運営し続けることが必要だったのでこれに協力した。ボルシェビキは戦争終結を約束したが、これもその支持者を大きく増大させる助けとなった。1917年の10月までには暫定政府の権限は大きく縮小していた。それでボルシェビキは労働者、農民と兵士の名でクーデターを起こす。

しかし、蓋を開けて見ると、彼らは議会では少数派に過ぎないことが分かり、社会主義者の他の派閥から強い反対を受けた。この時点からボルシェビキは強制と政治的権謀術数に頼ることとなり、メンシェビキその他の社会主義革命派の影響を取り除くことに成功した。

ボルシェビキにとって武力闘争は大切な手段となる。トロツキーの指導下、赤軍が組織される。赤軍は最初労働者を勧誘し、それから農民を勧誘する。躊躇する農民を協力させるため、徴兵制度が導入される。士官は旧体制から勧誘された。さらに執行部の決定を強制するため、ボルシェビキはチェッカと呼ばれる政治警察を設立する。これらの人民に対する統制手段によって、ボルシェビキは、自ら暫定政府を脆弱化させるために採用した革命的、民主的動向を反転する。

さらに、ボルシェビキと赤軍を一方とし、反ボルシェビキと白軍を他方とした内乱が勃発する。内乱中にボルシェビキはさらに中央政権化を進め、労働者の権利を剥奪した。これには主要産業の国有化、余剰農産物の強制没収と軍隊的労働者の訓練が含まれていた。内乱が終わった時には労働者は政治的影響力を失っていた。

一旦ボルシェビキが全ての競合する社会集団を排除すると、権力闘争は党組織内に移る。1930年代に、スターリンは容赦ない大粛清を行い、独裁制を確立した。スターリンは党内外の指導者を排除したが、これには元来のボルシェビキ指導者も含まれていた。(上述の各国の民主化の経過は図2-3に要約されている。)

第一次・第二次世界大戦は過激な膨張主義の道を辿った国家が原因で発生した。民主化に成功した国家とファシズム膨張国となった国家の紛争は歴史上前例のない殺戮能力を持つ現代の武器によってさらに破壊的なものとなった。見積もりによると第一次世界大戦の死亡者は850万人、第二次世界大戦では6100万人となっている。

ソ連と共産主義中国は別の形の独裁制をとることとなった。これが冷戦の原因となる。核兵器の存在によって資本主義民主国家と社会主義独裁国家間の抗争は制約された可能性はある。しかし強烈な武器競争がついにソ連を破産に追い込んだ。

このように、西洋文明はピコーによって観察された野蛮時代から、

神の時代、英雄の時代を経て、平民の時代という周期を辿った。古代ギリシャとローマは平民の時代が野蛮時代へと戻る段階を表している。キリスト教の台頭は神の時代、現代国家社会の形成は英雄の時代、そして民主国家制は平民の時代である。西洋国家は今共産国家となったロシア以外全て民主国家である。しかしロシアの共産主義の試みは失敗し、ロシアは再び民主化の過程を辿っている。

現代社会では西洋文明は独自に存在しているわけではない。他の文明もまたビコーの周期を辿っていて、西洋に合流した。日本、中国、インドとイスラム文明はこれまでのところ西洋文明に合流している。以下にこれらの過程を検証する。

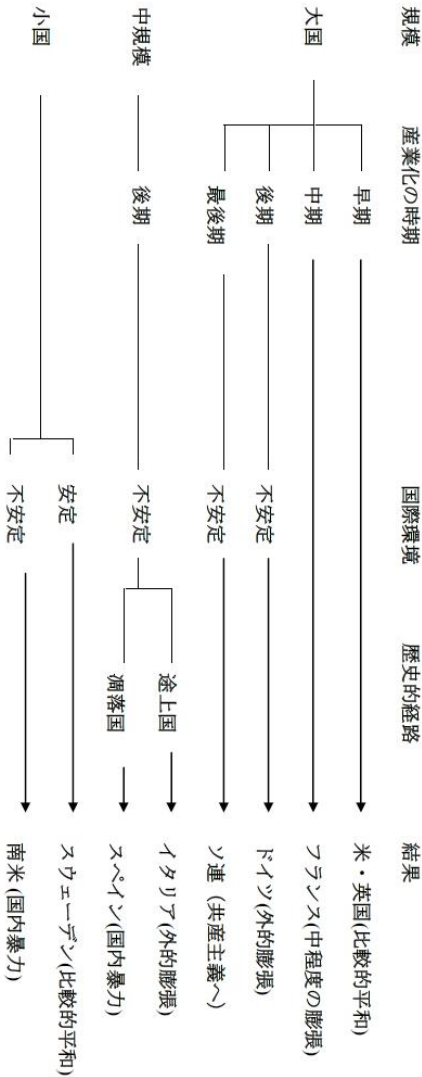
**日本文明：** 日本はビコーの周期を比較的西洋文明とよく似た形で辿った。まず、宗教的中央政権がその正当性を天照大神の子孫であるとして神道から引き出す天皇を中心に形成された。それから世俗的貴族が発展し、天皇の権威を縮小させる。12世紀には軍事的社会集団が生まれ、将軍制を形成し、天皇家からかなりの政治権力を奪う。徳川政権が1600年に確立される頃には、天皇家は実質的政治権力を失っていた。権力は幕府と諸藩の間で争われることになるが、これは西欧社会での国王と貴族との争いに似ている。幕府は諸藩の挑戦を1867年の明治維新までは抑制することに成功した。徳川時代には商業的發展もあり、大商人が台頭していた。これが20世紀に日本が重工業を發展させる助けとなる。現代社会に突入すると、日本はイタリアやドイツといった産業化の遅れたヨーロッパ諸国と似た状況に置かれ、これらの国の周期に合流する。

最初の支配階級はその正当性を神道から得たので、ビコーの神の時代の開幕となった。初代天皇は神武天皇であるといわれている。7世紀から8世紀にかけて、古事記と日本書紀が編纂された。石上英一によると、これらの書物の日本の伝説は天皇制の起源の権限と正当性を示すための極めて政治的な性質を持っていたとのことである。<sup>82</sup> 中央政府は天皇制の下確立した。8世紀には、儒教にならった政府制度が導入された。

---

<sup>82</sup> 石上英一『講座：前近代史の天皇（第1巻）天皇の権力の構造と展開 その1『はしがき』（東京：青木書店、1992年）、3頁。

図 2-3  
民主化の経路



9世紀に入って、貴族がその政治権力を増し始める。特に9世紀と10世紀には藤原氏が強い影響力を持つようになる。藤原氏は宰相の地位を占め、天皇を操った。この時代は藤原道長の時代(966~1

027年)に頂点を迎える。天皇家はある程度の政治権力を盛り返し、院制を確立した。この制度では天皇は譲位後も政治的影響力を維持した。その間、軍事階級が台頭して来る。特に平家と源氏が強い影響力を持つようになり、自らを天皇家の権力闘争の中に巻き込んでいく。1156年の保元の乱では、崇徳天皇が後白河上皇を倒そうとしたが、平氏は後白河上皇を支持し、源氏は崇徳天皇を支持した。これは後白河上皇の勝利に終わり、後白河上皇が平家を太政大臣に任命したことによって、強い政治的影響力を得た。

しかし平家の支配は長続きしなかった。源氏は平家を倒し、1192年に鎌倉幕府を開設し、武士による支配の時代、すなわちピコーの英雄の時代が始まる。当然のことながら天皇家は政治的影響力を取り戻そうとする。1221年に後鳥羽上皇は鎌倉幕府に対して反乱を起こすが失敗に終わる。天皇家は再び皇室内で権力闘争を繰り返して、これがまた軍事階級を巻き込むこととなる。1336年に皇室が分裂し南北朝時代となる。軍事階級の中には北朝を支持するものと南朝を支持するものが出る。国中を巻き込んだ戦が起こり、1392年に遂に解決を見た。この時期鎌倉幕府は足利家による室町幕府に取って代わられた。皇室の政治的影響力はこのあとさらに縮小する。しかし天皇はいまだに主権を保持していた。従って、正当性を得るためには将軍は天皇によって承認されなければならなかった。

皇室の政治的影響力が縮小するにつれ、軍事階級は支配を巡って自分達同士で争うようになる。1467年、足利家の継承問題が元で応仁の乱が勃発する。これが日本での戦国時代の始まりを告げ、1590年に豊臣秀吉が日本を統一するまで続く。1600年に豊臣氏と徳川氏が関が原の合戦で戦い、諸藩も参加する。徳川家康が勝利を収め、1603年に徳川幕府が成立する。

徳川家康は日本統一に成功したが、完全な中央集権ではなかった。諸藩がある程度の自治権を維持した。豊臣側について戦った藩もあったので反乱の可能性もあった。そのため家康は予防措置をとった。参勤交代がそのひとつである。このおかげで徳川政府は1867年の明治維新まで続く。

このように19世紀までには、日本社会では世俗化が進んだ。それで明治政府は日本国民の間の国家忠誠心を養うため皇室の威信を回復しなければならなかった。皇室は政治的影響力は与えられなかったが、

この間、徳川時代に日本は好ましい経済基盤を発展させた。商人階級が18世紀の初期に成長を始める。大ブルジョワとして独自の階級を形成するところまでは進んでいなかったが、ある程度の富の蓄積が

あった。明治維新の際、これらの大商人は日本の重工業発展を助けた。これが現代社会突入後のブルジョア階級と集中した労働者階級の比較的早い発展の原因となった。これによって日本はドイツとイタリアの辿った民主化の経路に合流することが可能となったのである。それは不幸なことに過激な膨張主義への道であった。

**中国文明:** 中国の帝国では儒教が特有の領域を成立した。国家と宗教的権威の関係は西洋文明とは異なったものであった。中国の王朝の場合、宗教的影響は儒教の教育を受けた官僚の形で国家制度に組み込まれた。そしてこれらの官僚は皇帝と緊張関係を持つのである。

中国は新石器時代にすでに一度ピコーの周期を経験した。フェアバンクは殷と周の二つの王朝を以下のように表述する。

殷と周の両王朝において支配族はその支配力を確かなものとするために精巧で劇的な儀式を使用したことが分かっている。特に、しばしば支配者自身であった僧侶（シャーマン）がその援助と導きを得るために先祖の霊と連絡を取るというシャーマニズムの儀式であった。<sup>83</sup>

フェアバンクはさらに「皇帝はまだ官僚化の進んでいないその組織的活動においては世俗制というよりはまだ神政的であった国家の世襲元首であった」と続ける。<sup>84</sup>

紀元前770年、中国は武将間の闘争の時代に入る。これは紀元前221年まで続いた。それはピコーの野蛮時代にあたる厳しい弱肉強食の過程だった。

いわゆる春秋戦国時代(紀元前722～481年)までにはそのような国家が170存在した。その各々が城壁で囲まれた首都を中心としていた。これらの国家は同盟や連盟を組み、外交的軍事的策謀をめぐるせ、強者が弱者を吸収していった。戦国時代(紀元前403～221年)までには競争に残っていたのは七国のみであった。その大半は人口の多い北部平原地帯に存していた。<sup>85</sup>

<sup>83</sup> John King Fairbank, *China: A New History*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1992, p. 37.

<sup>84</sup> 同、39頁。

<sup>85</sup> 同、49頁。

この厳しい経験が儒教の元となる。

この競合と戦乱の時代に平和と秩序を求める声が広まった。多くの人々がかつての黄金時代を理想化した。その時代には、伝説によると、中国全体が一人の支配者の下に平和に暮らしていたという。極度の武力闘争は、現代で言うコンサルタントであった周後期の哲人を刺激し、彼らは支配者にどのようにして黄金時代に戻れるかという助言を与えた。

孔子(紀元前551～479年)とその主だった信徒であった孟子(紀元前372～289年)はこの時代の主要な神学思想者である。．．．殺害と儀式によって武力闘争が容認されていたこの戦国時代の思想的枠組みを考えると、孔子の教えがどのように誕生し、最終的に受け入れられたかが理解できる。<sup>86</sup>

国家間闘争は秦朝による統一によって終わりを告げる。しかしこれは長続きしなかった。最終的に漢朝が紀元前206年に設立し、220年まで存在する。その間8～23年まで中断するが、儒教が中国文化の一部として根付いたのはこの頃である。しかしながら西洋文明と違って、独立した宗教的組織を設立することはなかった。その代わり、官僚の形で国家組織に組み込まれた。フェアバンクによると、

儒学は戦国時代の他の哲学思想を退け主流となったが、これは彼らが皇帝の不可欠の助言者であると主張し、またそうなったからである。この広い歴史的枠組み内では、これはアーサー・F・ライトが言うところによると、「学問のあるエリートが君主と同盟関係に入った」ということを意味した。君主は帝権、警察、軍隊、社会統制機関といった権力の象徴と根源を提供した。知識階級はその権力を正当化し国家が作動するように前例と国政府の知識を提供した。君主と知識階級は共に農業に基づいた二階級社会の実現に専念していた。<sup>87</sup>

ひとつの王朝が別の王朝に取って代わるという形態は一旦確立すると、中国が南北に分かれた5世紀と6世紀を除いて、何千年にもわたって続いた。ルーファは明朝(1368～1644年)、清朝(1644～1911年)と中国共産党政府の研究を行い、支配者とエリート間の

<sup>86</sup> 同、51頁。

<sup>87</sup> 同、67頁。

絶え間ない関係と抗争を観察した。この過程は西洋文明にも見られる特徴を帯びている。第一に、エリートは儒学教育を受けるが、これは世俗権威と宗教的権威の競合に匹敵する。第二にこれはまたヨーロッパ諸国での支配者と貴族間の競合に匹敵する。しかしながら、宗教的競合は激しいものではなかった。これは儒教の性質によるところが大きい。儒教を宗教と呼ぶものもいるが、フェアバンクは「哲学」と呼んでいる。<sup>88</sup>

ルーファはその観察において、この競合にさらに非特権階級を加えている。これによって、ピコーの周期の最終段階である民主化の可能性を検証する機会も得られる。もし、第三の社会集団が勝利を収めれば、中国は民主主義時代に入ることになる。以下にルーファの研究の要約を示す。

14世紀後期の明朝初期に権力集中が進んだ。支配者は大学出身のエリートと地主階級に政治的ライバルとして直面していた。支配者は官僚を非特権階級から採用することにより、また地主の土地を没収することにより彼らの政治的影響力を縮小させた。皇帝はまた軍隊を粛清し独裁制を確立する。しかし15世紀の半ばに対抗勢力が台頭して来る。非特権階級からの採用制度は衰え始めた。地方の地主階級も地租回収の能力を回復する。脱税が頻繁に行なわれるようになり、16世紀半ばには、宮廷はその支配的政治力を失った。この時点で、皇帝は権力を取り戻そうとしたが、これが武力闘争の引き金となり、明朝は滅亡する。<sup>89</sup>

強力な満州族が中国に侵略し明朝に取って代わり、清朝を1644年に設立する。満州族の支配者はまた政治権力を自らの手に集中することにも成功した。支配者は、大学卒エリートと地主階級と満州貴族に対処しなければならなかった。当初、皇帝は三集団全てを起用して、ひとつの社会集団に政治的影響力が集中しないようにした。支配者はまた公式の政策決定権を自己の手中に収めた。しかし非公式の決定権はこれらの社会集団に委ねられた。さらに、支配者はこれらの集団に各種の特権を与え、大衆から分離した。

これらの手段はエリートの支配者への忠誠心を開拓するのに役立った。地主階級に対しては、支配者は収入が支配者に集中するように税制を設定した。この過程は、地方地主による恣意的で収奪的な税制に苦しむ農民を援助するという口実の下行なわれた。しかし、清朝支配

<sup>88</sup> 同、51頁。

<sup>89</sup> Mark Lupher, *Power Restructuring in China and Russia*, Boulder: Westview Press, 1996, Chapter 2.

者も権力凋落の運命を免れることはできなかった。長期にわたって続いた繁栄は人口増加を招き、その結果地方の状況が悪化した。18世紀の後半、また白蓮教師の乱(1796～1803年)の後、地方の自衛団が台頭し始め、地方の軍事化が進んだ。彼らの政治的影響力は徐々に増大し、太平天国の乱(1850～1864年)の間に地方の自衛団が税収権を獲得する。1911年の革命は中央国家に対する地方中国人の勝利声明となった。その時点で中国は完全に地方の武将による支配の分断状態となった。1926年から1937年の間、国民政府が統一を試みたが、脆弱な財政基盤のため成功しなかった。<sup>90</sup>

このように、中国は現代国際社会に合流し、ロシアと並んで最も産業化の遅れた国のパターンを辿る。中国共産党政権は歴代の中国王朝と類似した過程を辿った。初期には毛沢東の指揮の下中央化に成功する。しかし、1950年代の産業化の失敗が毛沢東の独裁制にとって問題となる。党内のテクノクラートの一団が市場経済の導入を支持するようになる。中間レベルの党幹部からの挑戦に対して、毛沢東は人民を動員して対応し、百花繚乱声明にて大衆が革命的言語で党幹部を批判するよう励ました。

その後、毛沢東は党幹部を飛び越えて直接人民に訴え、大躍進産業化計画を打ち上げるが、これが大失敗となる。産業生産性は顕著に悪化し、深刻な飢餓が発生する。党幹部は毛沢東に責任を負わせようとした。これに対して毛沢東はこれらの党幹部を強制労働による再教育などの手段を用いて粛清した。しかしながらこの時点では根本的な党制度は健全で、党は比較的無傷で保持された。1960年代に粛清された専門家は復帰を許され、共産党とテクノクラートの間で和解が成立した。

そこで文化革命が起こった。これは数名の大学教授が党組織の権限と正当性を攻撃したときに始まった。毛沢東はこれを支持した。これが1966年の赤軍運動の発端となる。ブルジョワ専門家とその他の党幹部は大衆によるこの暴力行為にさらされた。毛沢東はこの運動を正当化し、党幹部を守勢に置く。自衛のため、党幹部は中道派の連合を形成する。人民軍は間に巻き込まれた。一度は毛沢東と人民を支持したが、すぐに反転して中道連合に合流する。これが決定的となり、毛沢東は敗北する。この中道連合の勝利は最終的には1978年の中国共産党大18期中央委員会第三回全体委員会で市場経済を中国に導入するという決定に繋がった。<sup>91</sup> ソ連と共に、中国は共産主義を断念

<sup>90</sup> 同。

<sup>91</sup> 同、Chapters 6 and 7

し、資本主義への道を歩んでいる。

中国の例は重要な問題点をいくつか提示している。第一に、古代ギリシャと共和制ローマでは大衆は支配者層の戦争努力を支持するか国王に対する貴族の挑戦を支持することによって政治的影響力を獲得し、民主主義に導くことができたが、これに対して社会規模のずっと大きな中国では、大衆が政治的影響力を得るためには組織的努力が必要であった。今日の安定した民主国家は全て産業化によって二つの社会集団（ブルジョワと労働者層）が形成された後で、国王と貴族からなる軍人層を制覇するための資本家と労働者の妥協の形で民主化が行なわれた。

第二に、中国の例は伝統的西洋の現実主義者に対して興味深い問題点を指摘する。西洋の現実主義者は権力の集中は不可能であると指摘する。というのは一人の権力追求者が権力を集中し始めると、他の全ての追求者が一丸となって権力の独占を防ぐからである。古代文明でよく似た経過を辿った後、中国は広大な帝国を形成した。ひとつの帝国が別の帝国に取って代わるというパターンが歴史の大部分を通じて続いたが、国土は維持され、その分裂は例外的でしかなかった。

フェアバンクは仮説となりうる二つの要因を挙げる。ひとつは中国全土の支配に正当性を与える天命の概念である。上述のように、戦国時代は大変な損害を中国にもたらすことになったので、中国は統一されて、一人の良心的な支配者によって支配されるのが良いとする考え方が生まれた。唐朝崩壊後の例が、西洋と異なり、中国武将たちは勝者全取の考え方を持っていたことを示している。フェアバンクは次のように述べる。

唐朝の中央政権の崩壊によって、10世紀中国では10あまりの継承国家が秦朝による統一以前の戦国時代に少し似た多国政体の状態にあった。その相互関係に於いて、多国関係は今では誰が中央帝国権を受け取るのかという問題に集中してたが、支配者は使節を送っての交渉など当時の慣習に頼った。<sup>92</sup>

もうひとつの可能性は地方の武将に対抗するための確立された官僚制である。

しかし女真の皇帝たちはすぐに自身の領内の部族長、そして征服した土地と人民の支配をしようとする北部からの軍事貴族と

<sup>92</sup> Fairbank, p.113.

競合してその中央集権を維持しなければならないと悟った。自衛のため金皇帝は儒教に基づいた帝国官僚制を設立した。<sup>93</sup>

一旦確立すると、官僚制は王朝が別の王朝に取って代わられたときに、同じ官僚が職を占めることによって崩壊を防ぎ連続性を維持するのに役立った。例えば、明朝が清朝に取って代わられたとき、「明の官僚の中には死を選ぶものもあったが、満州族の高官となり政府交代を助けたものもいた。」<sup>94</sup> ここで、もしこれが本当に重要な要素であれば、ローマ帝国が崩壊したことを考えて、中国とローマの官僚制の比較から有用な洞察が得られるかもしれない。(中国文明の周期の要約は図2-4に見られる。)

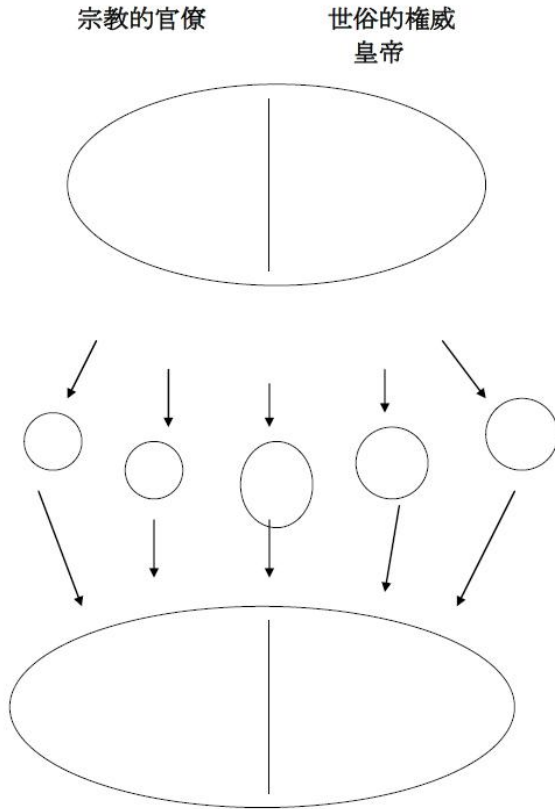
**インド文明：**古代インド文明は紀元前2000年まで遡る。紀元前1500年から600年までの間は古代ベータ時代とよばれ、紀元前2000年頃アーリア人がアフガニスタンとパンジャブ地方に侵入し、農耕生活を始めた。多くの部族があったが、部族長はラジャと呼ばれた。この時期、リグ・ベーターが成立し、ヒンドゥー教の基盤となる。紀元前1000年頃、アーリア人は土地を求めてガンジス川の下流に下って行って定住し農耕社会を設立する。紀元前800年頃、鉄器の使用が始まり、農耕技術が格段に進歩する。この時期に社会の階層化も進み、カースト制として固定するようになる。支配階級は僧侶階級であるブラフマンと貴族・武士階級のクシャトリアであった。その下には農・商階級のヴァイシャ、そして最後に奴隷階級であるスードラと続く。またヒンドゥー教の教義、哲学と祭礼は大変複雑であった。最終的にはブラフマンだけが祭礼を理解することができるようになり、祭礼の実行を独占することとなる。祭礼を理解する者だけが神との接触を許されると主張することによって、彼らは社会で支配的立場を獲得する。

---

<sup>93</sup> 同、115頁。

<sup>94</sup> 同、145頁。

図 2-4  
中国文明の周期



紀元前 6 世紀に、ヒンドゥー教は腐敗する。再活性化を図り、新しい教書であるウパニシャッドが編纂される。ほぼ同時期に、ヒンドゥー教、特にカースト制を批判して仏教が設立する。同時に部族社会制が官僚制と軍隊を持つ王国制へと移行し始める。マガダ王国が最強となり、商業を発達させ、クシャトリアとヴァイシャ階級がより影響力を高めた。以後数世紀の間、この傾向は続き、紀元前 317 年に武将チャンドラグプタが国王となりマウリヤ帝国が設立する。

マウリヤ帝国はアショカ王（紀元前 268～232 年）の下で最盛期を迎える。アショカ王は強力な軍隊を持つ独裁制を確立する。しか

しヒンドゥー教の僧侶も強い影響力を維持した。古代インド学者によると、「国王の権威は神の承認と結びついていて、日常機能の段階では、この結びつきはブラフマンの重要な立場という形で表された。．．国王のブラフマンへの依存は、国王がその資格もないのに成功を収める三要素はブラフマンの支持、行政審議会からの助言とサストラという特殊知識であると述べられているところにより明確に示されている。」<sup>95</sup> とのことである。アショカ王は宗教的影響力を減少させようとした。

アショカ王によるデヴァナンピアという称号の使用は国王が聖職者支持を求めたことのもうひとつの指標であると述べられている。しかし、それは単に国王が僧侶の支持を求めたということを示すだけでは無かった。それは王制と神の力の間のつながりを強調しようとする試みであり、できれば仲介である僧侶を除外する程度にまで進めようとした。<sup>96</sup>

この試みの一部は仏教によっても支持されていた。そこでアショカ王は、仏教の説くダルマ政治（法による支配）を打ち上げた。

仏教はヒンドゥー教の祭礼と思考に紛れ込んできた腐敗に抗議するものであった。後者は自身を神に選ばれた者とみなし、増大する聖職権力がもたらした支配的立場を享受するブラフマンの権力による腐敗が主であった。<sup>97</sup>

しかし、アショカ王は仏教を強く推奨しなかった。彼は仏教を支持し擁護したが、国教にはしなかった。後に国王は仏教に改宗したが、他の宗教を排斥することはしなかった。これはアショカ王が持っていたより広大な、インド社会を統一したいという、より根本的目標のためであった。

この時期の社会変遷と領土拡大が緊急時代の特徴を与えた、これによって、強力な統制力がより必要となった。このように連邦や共和国は王国に取って代われ、小規模な国家はより大規模な国家へと統合される傾向が出てきた。その頂点が

<sup>95</sup> Romila Thaper, *Asoka and the Decline of the Mauryas*, Oxford: Oxford University Press, 1961, pp.95-96.

<sup>96</sup> 同、96頁。

<sup>97</sup> 同、140頁。

マウリヤ帝国であった。この政治的变化は地域的な限られたものでなく、より広範な市民権の概念をもたらした。社会的責任は主にカースト内のみで重要というブラフマニズムと違い、仏教はより広い社会意識を強調する点でこの状況にとって適切なものであった。<sup>98</sup>

セイパーはアショカ王をコンスタンチヌス大帝と比較する。「アショカ王と最も頻繁に比較されるコンスタンチヌス大帝はキリスト教の時には政治的目で使った。」<sup>99</sup>しかしこれは長続きしなかった。コンスタンチヌスによって世俗と宗教的権威の間に確立された関係は西洋文明では何千年も続いたが、ここではほとんどすぐに崩壊した。アショカ王の死後50年以内に帝国は崩壊した。仏教もキリスト教がローマ帝国崩壊後も保てたような独立した宗教的権威を保つことはできなかった。仏教はクシャーナ朝（45年頃～240年）によって保護されたが、それに続くグプタ朝（320年頃～520年）では古代インド文明は最盛期を経験したが、再びヒンドゥー教が擁護された。仏教は過去に享受した政治的影響力を回復することは二度と無かったが、王族の後援によって人民の間に広まった。8世紀になると、インドはイスラム教の影響下に入り、それから英国の植民地下に組み込まれる。それゆえピコーの周期は民主化に進む前に中断されることとなった。インドは英国の制度的影響を受けたため、世俗の民主主義として現代社会に合流した。しかし、産業化による民主化を経験していないので、現代の産業化した民主国家とは振る舞いが異なる。またパキスタンとバングラデシュではイスラム教の影響がまだ強く残っていて、インドから独立した。

**イスラム文明：** イスラムは主要文明としてキリスト教に約600年遅れてその周期を開始する。その過程は国王と教皇といった軍事的権威と宗教的権威が分離した二極を構成しなかったという点でキリスト教と異なっている。イスラム社会はスルタン・カリフの指導の下政教一致で統一された。

イスラム教はモハメッド・イブン・アブデュラによって610年に創設された。神の天啓を受け、それをコーランにまとめた。610年から622年にかけて、モハメッドはメッカで宗教を広めたが、敵意を持って迎えられ、622年にはメジナに逃亡する。キリスト教と異な

<sup>98</sup> 同、143頁。

<sup>99</sup> 同、145頁。

り、モハメッドは預言者としての役割と宗教の護衛としての両方の役割を果たすことができたので、国王による護衛を必要としなかった。

クリーブランドは以下の様に述べる。

メジナでの10年間の滞在中、モハメッドの地位は劇的に向上した。ほとんど信者のない軽蔑された預言者の地位から、小国の君主となり、アラビア界を通じての主要人物となった。この変遷は戦争と交渉と説教の組み合わせを通じて行なわれた。そしてその成功はモハメッドの預言者としての権限だけでなく政治的指導者としての権限も確たるものとした。．．．ヒジュラ（メジナへの逃避）とメッカ陥落の間に、モハメッドの指導的役割はより複雑なものとなった。メジナは財務省、軍隊と増え続ける改宗者を含む小規模な都市国家に発展した。<sup>100</sup>

死去する前にモハメッドはアラビア半島の大部分の部族を統合した。その死後、モハメッドの宗教的政治的権威はカリフ制の形を取り、継承者はカリフと呼ばれた。初代のカリフはアブ・バクル、オマール、オスマンとアリであった。四人はラシダン・カリフと呼ばれおり、後のイスラム社会で懐かしく思い起こされることになる。656年にオスマンが暗殺されたとき、継承紛争が起こる。アリはモハメッドの従兄弟であったが、次期カリフに選ばれた。しかしシリアの総督であったムアーウィヤその他が抗議し、内乱が起こる。アリの死後、ムアーウィヤはカリフとなり750年まで続いたウマイヤ朝を設立する。この紛争は最終的にはスンナ派とシーア派の分離へと発展する。750年に内部の混乱によって王朝が崩壊すると、アッバース王朝が継承し、1258年まで続いた。750年から945年までの時代がアッバース朝によるカリフ制の繁栄時代となる。

アッバース王は「イスラム社会ウマの世俗的国王と宗教的指導者としての権力を行使する絶対君主」<sup>101</sup>となった。クリーブランドによると、アッバース制は成功した。

750年の革命後ほとんど2世紀にわたって、アッバース制はかなり合理的に機能し、帝国を前例のない繁栄へと導き、まば

<sup>100</sup> William L. Cleveland, *A History of the Modern Middle East*, Boulder, Colorado: Westview Press, 1994, pp. 10–11.

<sup>101</sup> 同、18頁。

ゆいばかりの知的達成と、広く受け入れられたカリフ制絶対主義の恩恵を基盤として概して安定した政治状況を享受する<sup>102</sup>

945年以降、アッバース朝は凋落し始める。945年にアッバース朝はイランの軍事王朝に征服される。カリフ制はかなりの権力を失い、単なる名目上の長に過ぎなくなる。その分裂は1258年の崩壊まで続く。この次期シャリアと呼ばれるイスラム法が編纂された。

アッバース朝崩壊のあと、オスマン＝トルコ帝国、サファヴィー朝、ムガル帝国の三つの地域的帝国が成立する。オスマン＝トルコ帝国は絶対君主制で、スルタン＝カリフによって支配され、軍人、文官とウラマ、カディス、シャイク・アル・イスラムなどの聖職者という三つの支配階級からなっていた。これらはスンナ派であった。しかしこの時点では宗教的影響力は世俗の権限の下に置かれた。

ウラマの大衆への大きな影響力にもかかわらず、シャリアの司法の規範を確立する上でのカディスの重要性にもかかわらず、またシャイク・アル・イスラムの権威にもかかわらず、イスラム教全体の官職はスルタンの意のままに決められた。ウラマの収入は国家からはほとんど独立していたが、任命は別問題だった。スルタンの意に反する意見をあえて進言したシャイク・アル・イスラムはその意見がイスラム教の法理論においてどんなに理に適ったものであっても罷免される可能性が大きかった。<sup>103</sup>

16世紀と17世紀において、オスマン＝トルコ帝国はその支配的立場を失ったが、帝国自体は第一次世界大戦の終わりまで存続する。

サファヴィー朝は現在のイランに位置し、1501年から1722年まで続いた。帝国の創設者であるイスマイル王はシーア派を採択し強力な宗教的影響力を作り出した。

イスマイルはスンナ派の友愛団体を解体しシーア派を受け入れることを拒絶したものを全てを処刑することによりその布告を施行した。イランにはシーア派の組織は存在していなかったため、イスマイルはシーア派のウラマと法学者をアラブ諸国、特にレバノンから招くことによって組織を作った。そこでは聖職者は

<sup>102</sup> 同。

<sup>103</sup> 同、48頁。

宗教上の階級の最高の官職を占め、活発なシーア派ウラマ階級出現の基礎を築くこととなった。<sup>104</sup>

サファヴィー朝は当初は部族的軍事政権であったが、16世紀には絶対主義官僚制帝国に変身した。政府の中央集権化はアッバス一世（1527～1629年）の支配下で完成する。

スンナ派のオスマン＝トルコとシーア派のサファヴィー朝はイラクを巡って対立する。1508年イスマイル王はバグダッドを占領する。バグダッド占領中にサファヴィー帝国はシーア派を人民に強制する。オスマン＝トルコ帝国はスンナ派イスラムの守護者としてこれを許すわけにはいかなかった。特にかつてのアッバス朝のカリフ制の中心地ではそれは許されなかった。1534年、オスマン＝トルコはイラクをオスマン支配下に回復し、イスラム社会の覇者であると宣告することに成功した。アッバス王は1624年にイラクを奪回したが、1638年にはまたオスマン＝トルコのムラット4世によって奪回された。

インドは7世紀にイスラムの存在を感じるようになる。イスラム教の波及は神秘主義のスフィズムによって助けられた。というのはスフィズムはヒンドゥー教に似ていたので、ヒンドゥー教徒によって受け入れやすかったからである。イスラム教国はウマイヤ朝のもとでインド侵攻を試みた。また12世紀の終わりにはデリー・スルタン朝が成立する。デリー・スルタン朝は1526年にムガル帝国が成立した際吸収された。当初は領内での独立したカリフ領を宣言することによってイスラム正統派からの独立を試みたが、最終的には正統派を受け入れることとなった。

アクバルは正確な現状分析をし、もし非イスラム教徒、あるいはイスラム教内での異教徒（スフィズム）と同盟を組むことになれば、正統派を無力にすることができるという決断を下した。アクバルは成功し、イスラム王国の事実上の外部の世俗君主となった。しかしその支配が終わりに近づいた頃、正統スンナ派は一団となり、徐々に勢力を増し、ついには無視できないほど拡大した。それゆえジャハーンギールは活動停止となっていた正統派イスラム制度を復活させなければならなかった。．．．正統派の反動は止むことなく、アウランゼブ王の政策につながる。

<sup>104</sup> 同、53頁。

同王はシャー・ジャハンのように自身が正統派であっただけでなく、正統派の支持にも強く依存していた。<sup>105</sup>

ムガル帝国は18世紀に最盛期を向え、そこから徐々に凋落し1862年に崩壊する。

17世紀にインドのイスラム社会で改革運動が起こる。18世紀にはアラビア半島中心部でワッハービズムと呼ばれる清教徒的改革が始まった。それからさらに改革運動が続く。クリーブランドはこれらの改革を次のように特徴付けている。

18世紀と19世紀の間、教義に基づいたイスラム運動がさまざまなイスラム地域の農村で広まった。これらの運動の指導者はしばしば古典的イスラムの伝統で教育を受け、頹廢的な世俗の慣習の浸透によってイスラム社会が預言者の伝統から逸れてしまったと信じるようになった者であった。信仰の清純化の為に彼らが打ち上げた運動はイスラム社会はその復興源として自らの社会の内面を見つめる必要があるとの確信が広まるのに役立った。<sup>106</sup>

ラマンも同意している。

前近代主義の改革運動は17世紀、18世紀と19世紀にかけてイスラム社会の大部分に広まったが、それは明らかに退廢意識と、それに伴う社会悪を修正し道徳的基盤を向上させることが必要という意識がイスラム社会内の根底から生まれてきた。<sup>107</sup>

これらの運動は反動的なものであった。ラマンは「これらの運動は全て例外なくコーランと預言者のスナナの点で原始イスラム教に『回歸』することを強調していた。」<sup>108</sup> と述べている。

19世紀には、イスラムの近代主義者が改革運動に乗り出す。宗教改革と反宗教改革を自然に経験し、その後啓蒙主義を通して現代化を

<sup>105</sup> I.H. Qureshi, "India under the Mughals," in *The Cambridge History of Islam: Vol. 2, The Further Islamic Lands, Islamic Society and Civilization*, P.M. Holt, Ann K.S. Lambton, Bernard Lewis, ed., Cambridge: Cambridge University Press, 1970, pp. 52–53.

<sup>106</sup> Cleveland, p.116.

<sup>107</sup> Fazlur Rahman, "Revival and Reform in Islam," in Holt, ed., p. 641.

<sup>108</sup> 同、640頁。

遂げた西洋文明と異なり、イスラム文明はこの過程を西洋の帝国主義の下で辿ることとなった。まずイスラム近代主義者は西洋の政治制度を西洋の支配から脱却するために採用しようとした。しかし彼らの文明と宗教的基盤とかけ離れた制度を導入することは不可能だった。この問題への反動として、イスラム社会では原理主義が再度台頭してくる。ラマンはこの問題を次のように論じている。

この激しい反動の理由と、近代主義思考の沈下と敗退の理由は多い。第一に、近代教育によってもたらされた新しい考えが成熟したものとして現れるまでには時間が必要であった．．．これに関連して、近代主義の初期の解釈者は近代西洋文明での驚異的な開花の裏にあるより深い宗教的、道徳的要素を理解していなかったという事実が挙げられる。それで彼らは主に、近代民主制度、義務教育と女性解放などこの内部の活力の外的兆候の一部を考慮することになったのである。西洋の活発な創造力のより深い基盤は、特に各種の形で現れた人文主義は、適切に研究され、必要に重視されることは無かった。その結果は、魅力的だという理由で西洋のある種のどちらかといえば外的な制度を新しい条件に適切に適応することなく新たな土壌に移植するという試みとなった。実際、近代主義者は新たな価値観や制度の適切な基盤を提供するために内部からの伝統的イスラム思考を発展させることをしなかった．．．初期のイスラム近代主義者はその近代主義が西洋化にあるという出発点から、自由主義をほぼ神格化し、その範疇をイスラム社会に強要しようとした。その結果、彼等の主旨がイスラム社会の内部に浸透した時、激しく拒絶されたのであった。<sup>109</sup>

このように、適切な基盤なしに近代性を移入しようとした試みはイスラム社会で原理主義と反動主義を煽る事となった。

20世紀に入って、オスマン＝トルコ帝国が崩壊しイスラム文明はより深く西洋の国際政治体制に組み込まれていく。オスマン＝トルコの領土は分断され最終的に主権国家によって占められることとなった。世俗化が自己のペースで達成される前に国民国家が強要されたという事実が、上記のように原理主義の種を植え付けた。さらに、現存する社会集団の数という点からも近代化を複雑なものとした。西洋では産業化がブルジョワと労働者階級を創出する頃には宗教的影響力は政治

<sup>109</sup> 同、649頁。

的影響力を失っていた。民主化は、国王、貴族、ブルジョワジーと労働者という最大四つの社会集団が存在する中で行なわれた。本書の研究によると、関係する社会集団の数が多いほど民主化は複雑化する。イスラム社会はいま、この四つに加えて宗教的社会集団も関わることになり、合計五つの社会集団が存在することになり、これが民主過程を西洋より複雑なものとしている。

イスラム社会へのこの影響は同一ではなかった。トルコは即座に世俗化に成功した。1922年、アタトゥルク政権下で、議会はカリフ職をスルタン職から切り離し、スルタン職を排除した。1924年3月、アブドゥル・メジードは退位させられ、カリフ職が廃止された。イスラムのシャリア法も1926年に廃止された。それからトルコは世俗の西洋諸国に似た形で民主制への移行を行なった。

その反対の極では、王国となったサウジアラビアがある。その支配王朝は地域に深く根付いており、支配の正統性を「イスラムと君主制の基盤」<sup>110</sup>から得ている。

君主は近代化は「政権が依存していた保守的社会構造とイスラムの価値制度を揺るがすことなく達成できる」<sup>111</sup>と考えていた。この体制は産業化が進むにつれて近代産業構造内で中間層が新たに台頭してきたことによって徐々に不安定なものとなっていった。

産業化と民主化を強い宗教の影響下で行なった国家もある。例えば、イランではモサデクのシャーに対抗する国民戦線は、宗教的社会集団であるウラマの支持者から西洋で教育を受けた世俗の職業家にまたがる連合であった。しかし、これがモサデクが戦線を維持するのを大変困難なものとした。イラン革命が失敗に終わったのは一部には米国の介入のせいであるが、この幅広い連合では結果は米国なしでも同じだったかもしれない。

権力政治の中で複数のアイデンティティの選択を可能にしたことによっても政治過程は複雑化された。権力政治では世俗の支配者はその支配を確立するのに大概弾圧の方法をとる。しかしこれは犠牲も大きい。従って、国民の忠誠心を養うような思想的手段は支配者にとっては魅力的なものである。物理的資源で劣勢にある権力追求者にとってはこれは特に重要な手段である。西洋文明では、近代国家が誕生する頃にはキリスト教は思想的手段を失っていた。だから、国民主義が創案された。これは支配者の領土と大体一致していたので便利な手段であった。

<sup>110</sup> Cleveland, p. 378.

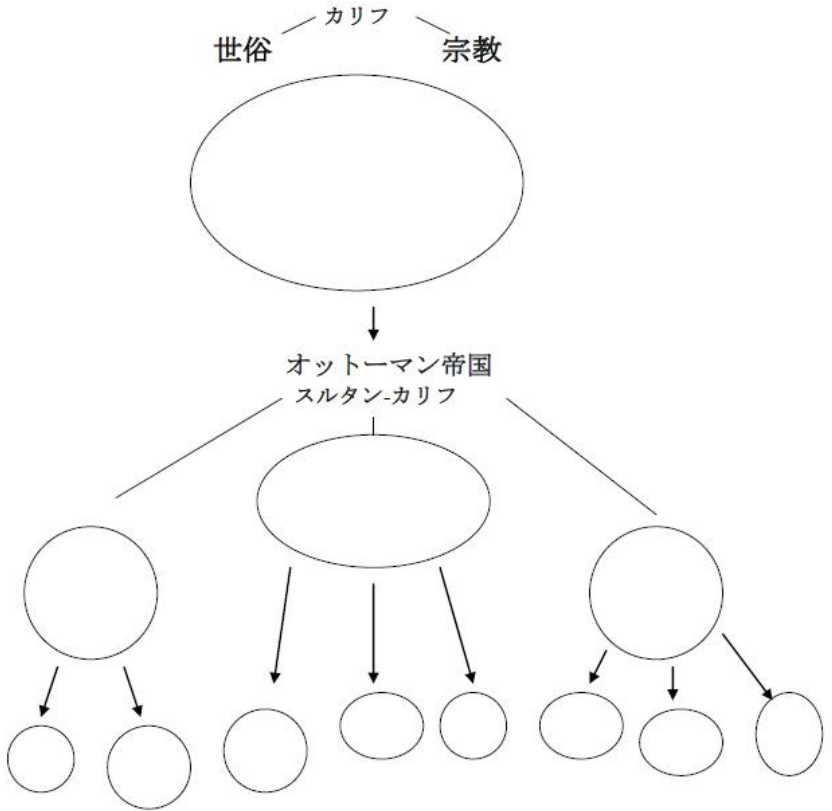
<sup>111</sup> 同、384頁。

21世紀のイスラム圏の権力追求者にはまだ宗教的手段が使用可能である。これは上記の19世紀の過程により原理主義の可能性を含んでいる。さらに、彼らには世俗の国民主義の手段もある。これはアラブ主義に拡大されうる。宗教的手段は地域を統合する可能性があるが、世俗的手段は地域を分断する傾向がある。イランではアヤトラ・ホメイニはシャー政権に対して宗教的原理主義を採択した。最近ではタリバンなどの組織がイスラムの価値観に訴えて国境を越えて人々に訴えかけようとしている。これらの運動はこれまでのところ比較的孤立して、より普遍的運動とはなっていない。宗教が提供する国境を越えた魅力は地域の抗争を繰り広げる権力追求者にとっては適切な物ではない。例えば、中東は産油国と非産油国の間に分断がある。シリアとイラクも地域支配をめぐる対立している。（イスラム文明の周期は図2-5に要約されている。）どちらの手段が優勢になるかによって、イスラム諸国が団結して西洋文明に対抗することになるか、イスラム圏内で抗争を繰り返すことになるかを決定しうる。

### 現代社会への問題提起

ビコーは1744年に他界したが、ビコーの周期は西洋文明内で継続した。ビコーの周期が提示する深刻な問題のひとつは宗教的権威から世俗的権威へと、また世俗軍事的権威から民主主義へと各変遷段階が膨大な戦乱を引き起こしていることである。もうひとつの問題は非西洋社会でこの周期がどのような結果を産むかということである。上記に見られるように、日本、中国、インドとイスラム文明は独自にその周期を辿っていたが、その過程は西洋の植民地主義によって中断され、これらの社会はそれぞれの段階で西洋の周期に組み込まれた。中には大変歪んだ形で組み込まれたものもある。

図 2-5  
イスラム文明の周期



これらの文明は全てピコーの周期を辿ったが、その過程には違いがある。西洋と日本の文明は軍事的権威と宗教的権威が君主と教皇、又は将軍と天皇という形で明らかな二極を構成した。これが全面对立の原因となる。中国では、宗教的権威と世俗的権威はひとつの政治体制の中に君主と官僚という形で組み込まれた。古代イスラム文明では、これらはまたスルタン-カリフ制というひとつの権威に組み込まれた。古代インドでは最初の周期が終わった後、最初の宗教的権威であったヒンドゥー教が腐敗し、仏教が誕生した。この点までは腐敗したユダヤ教とキリスト教の関係に似ているが、後により詳細に検証されるよ

うに仏教の性格が受身的なもので「神への献身」という要素に欠けることから、「私に仕えることは神に仕えることである」と言うことによって忠誠心を養おうとしていた世俗的支配者にとって政治的に有用な物ではなかった。したがって、仏教は、国王と教皇がお互いを必要としていて、初期には共生的関係を結ぶことによって両者共に支配的立場を獲得した西洋文明と違い世俗的支配者に提供できる物があまり無かった。これは、恩恵と害の両方をもたらした。一方では仏教徒による顕著な暴動は起こっていないが、仏教は、志している平和で平等な社会を築くという目的を達成するために必要な政治的影響力を得ることができず、助言者の役割を果たすに過ぎなかった。これらの違いは文明がピコーの周期を経験する際の殺戮のレベルに影響を与える可能性がある。これらについて、又ピコーの周期をどのように制御するかに関してのその他の問題についてさらに研究を続けることが必要であろう。

これらの観察はまた現代社会にとって深刻な影響がある。というのは国際社会のそれぞれの部分で異なった変遷が層を重ねているからである。これが現代社会に三重の危機を呈することになっている。

第一に民主化過程が脱共産化を行なっている中国とロシアで重要となっている。さらにインドなどの国が民主過程を進めこれらの国が過激な膨張国家となる可能性がある。インドは形式的には民主国家であるが、それは英国の植民地支配の結果であり、資本家と労働者が産業化の結果誕生し、政治的権威を軍事階級から奪取した近代民主化の過程はまだ経ていない。一見したところでは、インドは経済の近代化を重工業ではなく専門職とサービス業を通して行なっているようであり、これは集中資本と労働者層を生み出す可能性が低い。このことがインドの民主化の動向を変えるかもしれない。インド専門家は現状と民主化の歴史例との類似点・相違点についてより綿密に研究する価値があるかもしれない。

第二に、イスラム圏では宗教的権威から世俗的権威への移行が行なわれているところである。人民の支配をめぐる両者は協力と競争を続けている。これは10世紀から16世紀にかけてのキリスト教圏の動向に類似しているがその途中で西洋文明に吸収されたためその過程はゆがめられている。

第三に、西洋社会は衆愚政治の初期症状を提示している。この過程では古代ギリシャは外敵によって民主制の終焉を遂げ、共和制ローマは国内的に選挙によって独裁者を立てることによって終焉を遂げた。

もし西洋文明で衆愚政治が深まれば、他の二つの危機に対応することは不可能であろう。

それぞれの過程はそれだけでも多大な殺戮をもたらしうるが、それに加えて、これらの危機は互いに連動する可能性がある。そうすれば破壊の程度がさらに拡大することにもなりかねない。例えば、中国とロシアはドイツとイタリアと類似した過程を辿り過激な膨張主義に走るかもしれない。もしこれが起こると、中国とロシアを一方に、米国、ヨーロッパ共同体と日本を他方にした第二次世界大戦型の世界戦争が起こることになる。さらに、もしタイミングが合えば、これがイスラム圏の反民主主義運動と連動することもありうる。共通の敵を持つことは宗教的、世俗的権力の保持者にとって便利なことなので、彼らがこの札を最大限に利用しようとすることは間違いない。もしそれが起こると、民主国家は中国、ロシアと統一イスラムの大同盟に直面することにもなりかねない。衆愚政治の深まる民主国家はこの危機に対処するだけの能力はなく、敗北を帰すことになるだろう。共通の敵を失ったことによって、大同盟は分裂し戦うことになるだろう。さらに問題を深刻にするのはこの世界規模での戦争が今では歴史上前例のない物理的破壊力と並行しているということである。従って、この戦争は言葉に尽くせないほどの殺戮と破壊をもたらすことになりかねない。

このように、これらの危機は連動する可能性があるので、全ての変遷過程問題は同時に取り扱われなければならない。さもなければ、ひとつの危機に対する完全な解決法（もしそのようなものがあるとすればだが）が他の危機に対して悪影響を及ぼすことになってしまいかねない。これが現代社会での問題を極端に困難なものにしているのである。

本書はこの現代世界の三重危機の効果的解決法を見つけ、最終的には恒久平和を達成するためには、汎理想主義という学派が設立されなければならないと主張する。次章において、この学派が詳述される。

### 第三章 汎理想主義

脱共産主義後の中国とロシアの民主化、イスラム圏の世俗化と西洋社会の衆愚政治化という三重危機に対処するために本章は汎理想主義という学派の全容を紹介する。

その基盤として、汎理想主義はシュロジンジャーによって紹介された負のエントロピーの概念から出発する。負のエントロピーは論争となっている概念であるが、社会がピコーの周期から脱却するため、また三重危機に対する解決法に導きうる思想体系の導入口となる二点の重要な観点を提示する。

その著書『生命とは何か?』の中で、シュロジンジャーは有機物と無機物の違いについて考察し、以下のように結論付けた。

有機物がこれほど不可解に見えるのは『均衡状態』の不活性状態に入る急速な腐敗を免れるという点からである。それがあまりに不可思議だったので、人類の初期の思想からならかの非物質的あるいは超自然的な力（活力、エンテレケイア）が生物内で作用していると主張されてきた。そして中には今だにそう主張する者もいる。

生物はどうやって腐敗を免れるのか？ 明白な解答は「飲食し、呼吸をすることによって、また（植物の場合は）光合成をすることによって」である。これは技術的には新陳代謝と呼ばれる。ギリシャ語の  $\mu\epsilon\tau\alpha\beta\acute{\alpha}\lambda\lambda\epsilon\iota\nu$  という言葉は変化あるいは交換を意味する。では一体何を交換するのか？ 元来元を成す考えでは、疑いなくそれは物質の交換である（例えば、ドイツ語では新陳代謝は *Stoffwechsel* である。）物質交換が根本的であるという考え方は不合理である。窒素、酸素、硫黄などの原子はどれも同類の他の原子と同等である。それらを交換することによって一体何が得られるというのか？ しばらくの間我々の好奇心は、我々はエネルギーを消費するのだと言われることにより抑えられてきた。高度な先進国の中には、レストランに行くと価格の他に全ての料理の熱量がメニューに提示されているところがある。言うまでもなく、文字通りこれもまた不合理なことである。生態にとって、熱量は物質内容と同じくらい不動なものである。確かに、どのカロリーも他のどんなカロリーと

も同じだけの価値があるのであるから、単なるエネルギー交換がどうして役に立つのか解らない。

それではこの我々を死から守ってくれる食事に含まれる貴重なものとは一体何なのか？ この答えを見つけるのは簡単なことである。全ての過程、行事、出来事、何と呼んでもよいが、ある意味では、自然界で起こっている全ての事はそれが起こっている分野でのエントロピーの増加を意味している。したがって、生物は継続的にそのエントロピーを増加し続ける、あるいは、正のエントロピーを産出し続けるといってもよい。であるから、最大エントロピーの危険状態、すなわち死に近づく傾向があるのである。継続的に周りの環境から負のエントロピーを取り込み続けることによってのみ生物はその危険状態から逃れること、すなわち生きていくことができるのである。負のエントロピーはここですぐに解るように大変有望なものである。有機物が消費しているのは負のエントロピーである。これをもう少し明確に説明するなら、新陳代謝の根本的なことは有機物は生存中に生産せざるを得ない全てのエントロピーから自身を解放することに成功したということである。<sup>1</sup>

シュロジンジャーは、エントロピーが何であるか技術的な説明を続けるが、本書にとって重要な点はすでに説明されている。第一に、有機物は無機物から生成されているが、『均衡の不活性状態へと腐敗するのを避けるために』無機物粒子を環境から負のエントロピーを導入するように組織することによって自身を無機物から区別する。これは全ての生物が略奪的性質を持たなければならないことを示している。というのは、生物は必要な物を環境から調達しなければならないので、独立体として生存することができないからである。第二に、有機物は無機物から生成されているが、物理の法則からある程度の自由を得ることができる。シュロジンジャーが述べているように、生物はエントロピーの法則に違反する。動物はまた地上において行動を開始することができるが、これはニュートンの第一法則である慣性の法則に違反している。これは人間の自由意志の根源であるかもしれない。以下において、汎理想主義を提示する際、これらの二点の影響が検証される。

<sup>1</sup> Erwin Schrödinger, *What is Life?: With Mind and Matter and Autobiographical Sketches*, New York: Cambridge University Press, 1967/1996, pp. 70–71.

### 負のエントロピーの影響 1—生来の略奪的性質

全ての有機物は負のエントロピーを周りから移入しなければならないが、それには多くの方法がある。であるから略奪的性質は絶対必要というよりは潜在的である。実際、有機物の中には独立栄養生物などのように負のエントロピーを日光のような無機物から獲得するものもある。二固体が共生できる構造、あるいは少なくともどちらかが敗北しなくてもよい構造を作って、競争を避けることも可能である。マーチンは植物と昆虫の間の共進化を挙げている。<sup>2</sup>これは両者勝利の取り決めである。より複雑な生命体の中でも、相互扶助や共卓などのように種間の協力は可能である。しかし、進化の歴史を見ると、ほとんどの有機物は三種類の競争にさらされてきた。

第一は負のエントロピーの直接の資源、すなわち食物としてである。もし生物が自身を捕食者から守ることができなければ食べられてしまう。第二は利用できる資源を巡っての競争である。捕食者は限られた量の食物を巡って争わなければならない。第三は同種間の生殖権を巡っての競争である。これらの三種の競争は弱肉強食の世界を形成し、そこでは最強者だけが生き残り、その遺伝子を次世代に残すことができる。そのような環境下で、有機物の中には生存のために徐々により複雑な生命体へと進化していった物がある。皮肉なことにはそれが、より多くのエネルギーを必要とし、略奪的性質を強めることとなった。以下に本書の研究に関連する部分の進化の略史を提示する。<sup>3</sup>

**進化:** 地球上の最初の生命体は約38億年前に出現した。初期の生命体は原核生物と呼ばれ、そのほとんど全ては単細胞であった。原核生物からバクテリア、古細菌と真核生物が進化した。真核生物の一種が原生生物と呼ばれ、動物はここから進化する。

有機物が栄養を獲得するには四つの方法がある。それによって光合成無機栄養生物、光従属栄養生物、化学合成無機栄養生物と化学合成従属栄養生物に分けられる。動物は化学合成従属栄養生物である。これは「エネルギーと炭素原子の両方を一種かそれ以上の複雑な有機体から得る」<sup>4</sup>もので、その理由は「それらは有機分子を無機化学物質から合成できないからである。それらはこれらの有機分子を生死に拘

<sup>2</sup> Anthony Martin, and John Hawks, *Major Transitions in Evolution, Course Guidebook*, Chantilly, Va.: The Teaching Company, Lecture 15.

<sup>3</sup> Information here has been obtained from William K. Purves, David Sadava, Gordon H. Orians, and H. Craig Heller, *Life: The Science of Biology, Volume II: Evolution, Diversity and Ecology (Seventh Edition)*. Sunderland, Mass: Sinauer Associates, Inc., 2004.

<sup>4</sup> 同、531頁。

らず他の有機物かそれらが生成する物質から獲得し、その体内で消化する。」<sup>5</sup> パーブス等は以下のように要約する。「動物の進化は捕食者と獲物の間の複雑な『軍備競争』であったが、それは今後も続くだろう。」<sup>6</sup>

パーブス等は動物の進化について以下のように述べる。

動物は 鞭毛原生生物の群生地から細胞の集合体内の分業の結果として進化してきた。細胞の先祖の集合体内で、ある細胞は運動に専門化し、他の細胞は栄養獲得、そしてさらに他の細胞は生殖体へと分化した。一旦この機能による専門化が始まると、細胞の共同体は他の一群の細胞との協調関係を向上させながらその分化を続けた。このような協調する細胞群は、現在動物と呼ばれているより大型で複雑な有機物へと進化した。<sup>7</sup>

学者たちはこれが生存に有利になったと推測する。

多細胞性の初期の強みは捕食者に対する抵抗力の増大であったかもしれない。その多くは飲み込みという形で攻撃された。その他に堅固な表面に固着することによって海流に抵抗する能力、濾過摂食や光合成の為の太陽光を得る為に上方に達する能力などの増大も挙げられる。<sup>8</sup> さらに、外敵に対して保護を与えられる内的環境を作り出す能力<sup>9</sup> と情報を共有することによって一群の細胞が『知能的』に行動する機会さえ得ることができた。<sup>10</sup>

<sup>5</sup> 同、620頁。

<sup>6</sup> 同、653頁。

<sup>7</sup> 同、620頁。

<sup>8</sup> Butterfield, N. J. (September 2000). "*Bangiomorpha pubescens* n. gen., n. sp.: implications for the evolution of sex, multicellularity, and the Mesoproterozoic/Neoproterozoic radiation of eukaryotes". *Paleobiology* **26** (3): 386–404. doi:10.1666/0094-8373(2000)026<0386:BPNGNS>2.0.CO;2.

<http://paleobiol.geoscienceworld.org/cgi/content/abstract/26/3/386>. Retrieved 2008-09-02.

<sup>9</sup> Bonner, J. T. (January 1999). "The Origins of Multicellularity". *Integrative Biology* **1** (1): 27–36. doi:10.1002/(SICI)1520-6602(1998)1:1<27::AID-INBI4>3.0.CO;2-6.

[http://doi.wiley.com/10.1002/\(SICI\)1520-6602\(1998\)1:1%3C27::AID-INBI4%3E3.0.CO;2-6](http://doi.wiley.com/10.1002/(SICI)1520-6602(1998)1:1%3C27::AID-INBI4%3E3.0.CO;2-6). Retrieved 2008-09-03.

<sup>10</sup> Nakagaki, T., Yamada, H. and Tóth, Á. (September 2000). "Intelligence: Maze-solving by an amoeboid organism". *Nature* **407**: 470. doi:10.1038/35035159.

<http://www.nature.com/nature/journal/v407/n6803/abs/407470a0.html>. Retrieved 2008-09-03.

元出は <http://www.wikipedia.org> Evolutionary History or Life.

これは順調に進んだ過程ではなかった。というのは全ての細胞が分業に合意したわけではなかったからだ。バターフィールドは性生殖はこの必要性から生まれたと主張する。

分化した細胞による多細胞性は全体的には生命体にとって有益なものであったが、個々の細胞の観点からすると、不利であった。細胞の大部分は自身で生殖する能力を失った。無性生殖の多細胞生命体では、生殖能力を維持している不良細胞が乗っ取って生命体を未分化細胞の塊に退化させてしまうかもしれない。有性生殖はこのような不良細胞を次世代から除去する。それゆえ、複雑な多細胞生命の為の必要条件のように見える。<sup>11</sup>

この分業は肉体的に確立された後も個体動物の間で継続した。パーブス等によると、

多くの集団無柄前口動物はより良い資源の方向やより良い保護を得られる場所に向かって成長することができる。集団の個々の一員は、もし細胞が直接結合していれば、資源を共有することができる。資源を共有する能力によって個々の細胞は生殖、防衛、摂食など特定の機能に専門化することができる。摂食をしない個細胞はその栄養を摂食同僚から得ることになる。<sup>12</sup>

一旦多細胞生命体が登場すると、その単体はより複雑となり、感知システムなどの機能を発達させる。これによって、生命体は周りの環境を感知できるようになり、生き残る可能性を増すことになった。さらに、約5億年前、脊椎動物が登場する。約2億年前に哺乳類はここから分化した。脊椎動物は脳と呼ばれる中枢神経を持っていた。哺乳類が誕生したとき脳の構成にかなりの発展があった。

<sup>11</sup> 元展は <http://www.wikipedia.org> Evolutionary History of Life. Butterfield, N. J. (September 2000). "*Bangiomorpha pubescens* n. gen., n. sp.: implications for the evolution of sex, multicellularity, and the Mesoproterozoic/Neoproterozoic radiation of eukaryotes". *Paleobiology* **26** (3): 386–404. doi:10.1666/0094-8373(2000)026<0386:BPNGNS>2.0.CO;2.

<http://paleobiol.geoscienceworld.org/cgi/content/abstract/26/3/386>. Retrieved 2008-09-02.

<sup>12</sup> Purves, et al., p. 653.

大脳皮質は哺乳類を他の脊椎動物から、霊長類を他の哺乳類から、そして人類を他の霊長類から最も強く区別する脳の部分である。哺乳類の後脳と中脳は概して他の脊椎動物に類似しているが、前頭に劇的な違いが現れる。それはずっと拡大しただけでなく、構造自体も変化している。<sup>13</sup> 非哺乳類脊椎動物では、大脳の表面は外とうと呼ばれる比較的単純な層状の構造で覆われている。<sup>14</sup> 哺乳類では、外とうは複雑な六層からなる新皮質と呼ばれる構造に進化する。霊長類では新皮質はずっと拡大する。特に前頭葉と呼ばれる部分が拡大する。人類では、前頭葉の拡大が極端なところまで進み、大脳皮質の他の部分もかなり大きく複雑な物となる。<sup>15</sup>

この発達によって、意識が誕生する。それは生き残る可能性を著しく向上させた。というのは、この時点で個体は環境を感知し、それから生存のための判断を下すことができるようになったからだ。人間の脳はいまのところこの頭脳の発展の頂点に位置している。

新皮質は哺乳類の脳の一部である。これは大脳半球の外層で六層からなっていてⅠからⅤⅠと名づけられている（ⅤⅠ層は最も内部で、Ⅰ層が最も外部の層である。）新皮質は辺縁系の皮質部である原皮質と古皮質と並んで大脳皮質の一部である。それは知覚認知、運動命令の発動、空間推理、意識的な考えと言語などの高い機能に関係している。<sup>16</sup>

ここで、ノーデンによると、「脳の辺縁系は学習、記憶と感情を持つことを可能にする。これら全ては実行機能に影響を与える」<sup>17</sup> とのことである。辺縁系の中で、ノーデンは「背外側前頭葉前部皮質が人間の実行機能により関係しているように見えるが、これが我々の行動に

<sup>13</sup> Barton, RA; Harvey, PH (2000). "Mosaic evolution of brain structure in mammals." *Nature* **405** (6790): 1055–8. doi:10.1038/35016580. PMID 10890446.

<sup>14</sup> Aboitiz, F; Morales, D; Montiel, J (2003). "The evolutionary origin of the mammalian isocortex: Towards an integrated developmental and functional approach". *Behav Brain Sci* **26** (5): 535–52. doi:10.1017/S0140525X03000128. PMID 15179935.

<http://www.bbsonline.org/Preprints/Aboitiz/Referees/>.

<sup>15</sup> <http://www.wikipedia.org/brain>

<sup>16</sup> <http://www.wikipedia.org/neocortex>

<sup>17</sup> Jeanette Norden, *Course Guidebook: Understanding the Brain*, Chantilly, Va.: The Teaching Company, p. 89.

優先順位を付け、変化に対応する能力に貢献している。実行機能は感情に左右されるので、ここに含まれている。」<sup>18</sup> と述べている。

それを通じて人間が周りから情報を集めて、生き残る為にはどうすべきかの決定を下すことができる知能に加えて、辺縁系はまた人間に感情を与える。親は子供に対して愛情を持ち、その結果哺乳類は概して他の生物よりもずっと高い生存率を持っているので、何百、何千という子供を作る必要がない。感情はまた他の意味でも生存に役立つ。群性の動物の中で、家族はお互いをいたわるので、分業が可能な戦略となる。例えば、ミーアキャットの群れでは、他の家族が食料を探しに行っている間、残って子守をするものがある。また食料を探している間、外敵を見張る役割を持つものがある。進化のこの時点で、人間は生存の為に最も複雑な分業を遂行している。

脳の発達のこの時点で、動物は10億年以上前に単細胞生命体が直面したのとよく似たジレンマに直面している。それは我々は個人として生き残りを図るべきか、それとも集団の一部として生き残りを図るべきかということである。哺乳類にとって、結論はまだ出ていない。哺乳類の中には、ほとんどのネコ科の動物のように、一匹で生活することを選ぶものもあるが、その反面、狼や、イヌ科の動物やサルのように、社会を構成するものもある。社会を形成することを選んだ種においては、個人は程度の差はあっても、生殖権などの個人の利を犠牲にすることが要求される。このジレンマが人間の思想にも反映されている。人間の中には理想主義的に他の人間と協力することによって安全を獲得する戦略を採用することを信じる者がいるが、その反面、現実的に個人の生存に焦点を向けるものもある。以下においてこれらの二つの学派について検証する。

**理想主義と現実主義：** 上述のように、進化のこの時点で、理想主義と現実主義は我々人間にとってどちらも可能性のある選択肢である。

理想主義は人間が弱肉強食の自然の法則から逃れられる安全を引き出すことができるような構造を確立しようとする。肉体的存在との並行がここで見られる。多細胞生命体が腐敗を免れるためには、個々の細胞が健康でその割り当てられた機能を良く果たさなければならない。全体のシステムを健全に保つことによって、個々の細胞はその見返りに恩恵を受け、個別に存在する場合よりも生存の可能性を高める。しかし、人類にとって決定的な違いがひとつある。ここで我々に安全を

---

<sup>18</sup> 同、90頁。

提供してくれるのは、物理的構造でない。ここでは多大に人間のお互いに対する行動を支配する形而上的構造である。従って、この構造を建設するために必要な物質は我々自身なのである。形而上学的構造もエントロピーの法則の対象となる。有機物が常に負のエントロピーを移入し続けなければ生存できないのと同じように、この構造も維持するためには常に負のエントロピーを移入し続ける必要があり、我々は、システムに直接負のエントロピーを寄付するか、エントロピーを我々の内部に吸収することによって、負のエントロピーを提供しなければならない。伝統的にはこの行動が道徳、利他主義または自己犠牲と呼ばれてきた。

そのような構造を建設し維持するために重要なものは建設に使われる材料、すなわち我々自身である。我々は、我々の焦点を個人の生存から構造自体の安定へと切り替えなければならない。理想主義者我々にはこれが可能だと仮定する。すなわち人間の性質は根本的に『善』であるとする。言い換えると、人間はその個人的利益を安全やその他の恩恵と引き換えにある程度寄与し、社会全体に貢献することによって安全を獲得しようとする。理想主義者はこの試みを促進する行動を道徳的・道義的と呼び、個人の生存に焦点を当てた行動を非道徳的・非道義的と呼ぶ。宗教は全てこの思想体系内で形成されたもので、人々をこの教義に従って行動するよう説得しようとする。多くの宗教はまた、抽象的な構造という観念の代わりに神の観念を導入し、全体への献身を促進する為に神の栄光を讃える。理想主義者は人々に『正しいこと』をするよう奨励するが、これは自分自身に焦点を当ててではなく、システム全体に貢献するという意味を意味する。これによって、正しいことは常に行うのが難しいことが分かる。というのはこれは自分に必要な負のエントロピーをシステムに譲ることを意味するからである。自己犠牲と利他主義が理想主義にとっての主題であるが、これはシステムが適切に機能すれば、自分自身も恩恵を受けられるからである。

システムが適切に機能するためには、社会の全員が参加しなければならない。これが理想主義者の最終目的である。一旦これが達成されれば、システムへの危険は無くなる。だれも個人の目的を追求しなくなる。社会の全員がシステムが健全であることに焦点をあてる。というのはみんなシステムを健全に保つことによって、自分が恩恵を受けることを知っているからだ。したがって、彼らにとって理想的な社会はプラトンの言う哲人王のような最も有能な一個人が全員のために決断を下す。この社会では、全ての権力はこの個人の下に集中される。

また、人々の焦点は形而上システム構造に当てられているので、主な関心は当然唯物主義に対する形而上学に当てられることになる。システムはまた一個人の寿命をはるかに超えて存在するので、理想主義者はより長期にわたる観点を持つことになり、いわゆる大思想家となる。また、一個人がそのようなシステムを達成して維持することは不可能なので、理想主義者は他人を競争相手としてではなく不可欠な協力者と見ることになる。これで理想主義が教義内で『愛』を伝統的に強調してきたことが説明できる。

これに対して現実主義は人間の性質は悪であるか、少なくとも利己的であると仮定する。しかし、『悪』というのは理想主義から輸入された言葉である。現実主義者の仮定するところでは道徳は無関係である。というのは人間が自己の生存に焦点を当てるのは当然のことだからである。この観点からすると、生存はゼロサムゲームであり、そこでは他人を傷つけることも含めて個人が生存のために行なう全ての努力は正当とされる。これが弱肉強食の世界である。一者にとっての益は直接他者にとっての損失となる。このような世界では、全員が自己の権力を最大化しようとする。というのは、強大な権力を持つほどより安全が保証されるからである。その結果、社会は権力最大化を賛美する現実主義者の思想が支配的となる。しかし、ここに安全弁が作用する。第一にこの学派では人間は殺害をいとわないが、また自分たちに何の恩恵ももたらさないような殺害も貴重なエネルギーの無駄遣いであるとして避ける。野性の社会で見られるように哺乳類はただ殺害するためだけに殺害はしない。動物は摂食、縄張りの防衛と、ときには生殖権のために殺害する。人も常に利害計算を行い、そうすることによって利が害を上回るときだけ、他人に被害を及ぼす。言い換えれば、現実主義の世界では、人が他人に及ぼす被害は制限されるが、これは道徳によってではなく、利害計算によってである。これが社会では道徳とよく似た結果をもたらすはずである。

第二に、もし権力が一個人に集中されると、全体の福祉が危険にさらされる。したがって、一旦一人が不均衡な権力を獲得していることが明らかになれば、他の全ての構成員が協力して更なる権力の集中を防ぐ。もし権力配分が変われば、同盟の形式も変わる。人はこの世界では道徳観に支配されないので、昨日の敵は今日の友となりうる。その反対も真となる。それゆえ、この学派によると権力は集中しない。それがトーマス・ホブズの言うところの「万人の万人に対する闘争」状態をつくり出すのである。

さらに、この学派では人の主たる関心はその肉体的生存にあるので、人は自己の直接の利害により強い関心を持つ傾向がある。これが二つの傾向をつくりだす。第一に人は自己の肉体的生存への関心からより唯物主義に走る傾向がある。ここでは唯物主義は全ての存在は物質的である、また全ては物質から形成されていて、全ての現象は（意識も含めて）物質的相互作用の結果であるとの思想と定義される。言い換えれば物質が唯一の実存である。第二に、大思想家の傾向が失われる。その寿命を超える物には全く関心が無くなるので、人はその直接の環境を越えたより大きな問題に取り組むようなことはない。現実主義が支配的な世界では、思想の規模は小さくなる。

本書は理想主義者に属する学者とその教義に従って行動する者の両方を理想主義者と呼び、現実主義に属する学者とその教義に従って行動する者の両方を現実主義者と呼ぶ。

この時点で、ピコーの周期をこの観点から再検証することにしよう。ピコーの周期を動かしていたのはこの理想主義と現実主義の周期であった。歴史的発展のどの段階においても理想主義と現実主義は常に生存のための選択肢であるが、時代によってどちらかがより支配的となる。ということは、歴史のどの時点においても、理想主義者と現実主義者が共に存在するが、ある時代には、理想主義のほうがより支配的で、他の時代には現実主義がより支配的となる。一般形式としては、万人の万人に対する闘争という自然状態では、人は安全を熱望し、そのために個人の利益を犠牲にする用意がある。これが理想主義の台頭を助ける。この時期には、宗教的権威が支配的影響力を享受する。したがってピコーの神の時代となる。人々は権力の全てを宗教的権威に託す。しかし、通常、社会の一部に現実主義者が存在する。彼らにとって、これは個人的目的で人民に対して強大な権力を得る絶好の機会となる。これらの現実主義者は宗教的権威を侵食し始める。時が経つにつれて、人々は宗教組織の腐敗に気づき始め、これが宗教的権威と理想主義一般への信頼喪失に繋がる。この時点では身体的安全を提供できる者が権威を得ることになり、ピコーの英雄の時代、あるいは王政が始まる。ここでは危険を創出しているのが自分たち自身にも拘らず、一旦これが規範となると、より強い集団に所属する以外にほとんど選択肢は無くなる。一旦現実主義の時代に入ると、権力分散のメカニズムが働き始め、長期にわたって集中した権力を保つことが大変難しくなる。もし誰かがかなりの権力を手中に収めれば、他者が一時的に一丸となって支配者を引きずり下ろす。最終的には権力の中心が失われ、ピコーの平民の時代が始まる。この時代が進むにつれて、世界

## 74 汎理想主義

は徐々に万人の万人に対する闘争状態に戻る。これで一周期が完了し第二の周期が開始される。もしこれが正しいとすると、ピコーの周期の影に理想主義と現実主義の興亡が観察できるはずである。以下においてこの観点から西洋文明の簡略的検証を行なう。

### 西洋文明の形而上周期：

図 3 - 1 理想主義 - 現実主義の周期

時代	哲学	宗教	芸術	科学	ピコーの時代
紀元前	ソクラテス (前469年生)				
400年	プラトン (前428年生)				
300年	アリストテレス (前394年生)				野蛮時代
		キリスト教			神の時代
紀元300年		聖アウグスチヌス			
1300年		聖トーマス・アキナス (1225年生)	ダンテ (1265年生)		
1500年	マキャベリ (1469年生)		ルネサンス レオナルド・ダビンチ (1452年生) ミケランジェロ (1475年生)	科学革命 コペルニクス (1473年生)	
1600年	ホッブス (1588年生) デカルト (1596年生)		シェークスピア (1564年生)	ガリレオ (1564年生) ニュートン (1643年生) J.S. バッハ (1685年生)	英雄の時代
1700年		啓蒙主義 カント (1724年生)	新古典主義		
1800年	ヘーゲル (1770年生) マルクス (1818年生)		ロマン主義		人民の時代
1900年					
	ポストモダニズム				

(1) **ギリシャの理想主義:** 民主主義が古代ギリシャで最悪の衆愚政治状態に達した時、ギリシャはソクラテス、プラトン、アリストテレス

スという一連の理想主義者を輩出した。ピコーの周期では衆愚政治は平民の時代から野蛮時代への変遷期ということになっているが、これらの理想主義者の出現はこの文明腐敗への応対ということになる。彼らが提案した理想主義的解決法は聞き入れられなかった。アテネはソクラテスを殺した。

プラトンとアリストテレスは現実主義に対する理想主義を固守した。両者ともに倫理学の理論と処方案を提案した。しかしながら、二者の採った方向は全く逆であった。プラトンは『上からのアプローチ』を採り、アリストテレスは『下からのアプローチ』を採る。バンブローはこの違いを以下のように説明している。

『倫理学』を読み始めるとすぐにアリストテレスの独自のアプローチがその生物学的、目的論的観点によって固定されていることが明らかになる。人間の全ての活動はその目的に関しては何らかの善が含まれているものだが、異なった活動は異なった目的を持つ。プラトンはこれらの目的を互いに関連しあって階層を形成するとしたことは正しかったが、知識あるいは最上の目的は徳にとって十分であると仮定したことは間違っていた。我々は、目盛りの反対側から始めなければならない。医者が個人の患者を治療するように、道徳家は、人の行動は特定の状況には特定の反応をすることを覚えておかなければならない。アリストテレスは幸福は人間にとって最上の善であるという伝統的な観念を受け入れているが、我々の詳細な選択について導くにはその提議はあまりにも漠然としていると主張する。<sup>19</sup>

この違いは両者の基本的な哲学的アプローチを反映している。プラトンはまた唯物主義に対する観念論者でもあった。コッポルトンによると、

プラトンの観念では、我々が普遍観念において理解する物体、科学が扱う物体、叙述の普遍的用語に対応する物体は、物体のアイデアまたは普遍の真実（ユニバーサル）であり、超越した独自の世界に存在している。それは知覚できる物から離れた『どこか遠く』の世界で、事実上空間から分離して理解される物である。知覚できる物はこれらのユニバーサルの似像にすぎない、

<sup>19</sup> Renford Bambrough, trans. By J.L. Creed and A.E. Wardman. *The Philosophy of Aristotle*, New York: Signet Classic, 2003, pp. 308–309.

眞実は独自の不変の天界に存在するのに対して、知覚できる物体は変化の対象となり、実際常に変化しており、ある一定の状態であるとは決して言えない。イデアは自身の天界においてそれぞれ孤立状態で存在し、どの思想家の思考からも離れたところにある。<sup>20</sup>

一方アリストテレスは観念を物質的アプローチから切り離していたようには見えない。

アリストテレスの形而上協議とその生物学的検証への関心の間に緊密な関連があることがわかる。．．．アリストテレスはプラトンの知識というものは普遍の眞実（ユニバーサル）であるという確信を捨てることはなかったが、彼がそれ自体として最も知りうる物と我々にとって最も知りうる物の区別は（独自の普遍の天界ではなく）具体的な個別の物体自身に生物学者の研究でその物体が持たなくてはならない重要な場所を与える形式的理論である。<sup>21</sup>

アテネの民主主義はこのあとすぐ破壊された。プラトンとアリストテレスの理想主義的哲学はこの社会では利用されることはなかった。

**（２）キリスト教：**西洋文明においてキリスト教が誕生した。野蛮時代にはキリスト教は排斥されたが、最終的に理想主義の強力な伝達手段となった。その台頭期と全盛期において、キリスト教とギリシャの理想主義を統合しようとする試みが見られた。

2世紀に聖ジャスティン・マーターはプラトン主義をキリスト教に組み込もうとした。

ジャスティンの著書『*Dialogue*』内でのプラトン主義における評価をみると、明らかに彼がプラトンの哲学に対して持った敬意が感じられる。彼は、神と同一であるとみなした非物質的世界の教義と、元素的要素を超えた存在の教義を賞賛した。それでも彼は確信できて安全で確実な神の知識、すなわち眞の『哲

<sup>20</sup> Frederick Copleston, S.J. *A History of Philosophy. Volume II. Augustine to Scotus*, New York: Image Books, 1985, p. 166.

<sup>21</sup> Bambrough, p. xxx.

学』は天啓を受け入れることによってのみ達成することができるのだと確信するようになった。<sup>22</sup>

その2世紀後に聖アウグスティヌスが登場する。その貢献についてはデニース等が以下のように要約している。

彼の『告白』は、自伝的詳細を多分に含んでいるが、基本的には神への賛辞であり、神への献身と愛の宣言である。

『信仰・希望・愛—エンキリディオ』は彼の晩年の執筆であるが、これは信仰、希望と愛の徳の意味を明確にした手引書である。

一方『神の国』はキリスト教の枠内での広範な歴史哲学であり、入念な自然神学、即ち神が人間を取り扱う方法の正当化として機能する。

アウグスティヌスの教えは9世紀以上に渡ってほとんど独占的な影響をキリスト教の信念に与え続けた。その後聖トーマス・アキナス（1225～1274年）の哲学が支配的影響力を分け合うこととなる。<sup>23</sup>

コブルストンは聖アウグスティヌスがプラトン主義をキリスト教と共合させた方法について説明する。

（聖アウグスティヌスの）見地にははっきりとプラトン主義の特徴が表れている。両者は共に、永遠で非物質的な現実に比べて知覚できる物体を卑下し、実用的な知識を人生の必要としてほぼ不本意ながら認め、『理論的』な瞑想を主張し、魂の浄化と認識論の上昇に伴う感覚の奴隷となることから自らを解放することを主張する。しかしアウグスティヌスの態度を唯単にプラトン主義の採択に過ぎないと見るのは過ちであろう。プラトン主義とネオプラトン主義は確かに利用されているが、アウグスティヌスの関心は常に神の占有と洞察における人の超自然的目的と至福、そして時に彼が使うプラトンの伝統から取り入れた知能的な話法にもかかわらず、彼の思考の総合的機構では、最も重要な物として常に愛が掲げられている。．．．愛でさえ

<sup>22</sup> Copleston, p. 17.

<sup>23</sup> Theodore C. Denise, Sheldon P. Peterfreund, and Nicholas P. White. *Great Traditions in Ethics (Ninth Edition)*. Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company, 1999, p.70.

プラトン主義に相似していることは事実であるが、アウグスティヌスにとってその最終目的は客観的な善ではなく主観的な神の達成であったことを覚えておかなければならない。事実とはいうと、彼は賞賛して止まなかったプラトン主義の教義の中に根本的にキリスト教の人生哲学の解説のために採択できる物を発見したのだということだ。<sup>24</sup>

ダイソンによると、プラトン主義を土台として発生した政治論は極めて悲観的なものである。

聖アウグスティヌスと、彼の思想に追従する者にとって、この世の政治というのは概して痛ましく汚い事業である。最善に解釈してもそれは必要悪である。政治的取り決めは墮落した人間の罪深い状態から切り離すことができないものである。政府は墮落が起こらなければ存在することも無かっただろう。それは人がお互いを支配したがるという貪欲と欲望にその起源を持つ。その長所といえば罪深い者と、高潔な人の信仰の深さが試せるということである。この世における平和と正義は不安で、一時的で不安定なものである。それは天国に存在する真の平和と正義のお粗末な複写に過ぎない。この真の平和と正義はこの世の歴史が終わって、神の国が永遠の祝福の存続に入った時にのみ実現されるだろう。それまでの間、世界は墮落した人間が止むことなくお互いに対して支配を勝ち得ようとする試みに起因する戦争、貪欲、闘争と苦痛で荒れ続けるだろう<sup>25</sup>

13世紀に入って、聖トーマス・アキナスが登場し、西洋文明は理想主義の最盛期を迎える。聖トーマス・アキナスはキリスト教とアリストテレスを調和させた。ダイソンは次のように説明する。

聖トーマスはアリストテレスの教えを教会の教えと調和させることは可能だと確信するようになった。アリストテレスは天啓の利得を欠いてはいたが、また彼の真実に対する理解はその分欠陥があったが、援助を受けない論理が進められる限界までその知的研究を推し進めた。

<sup>24</sup> Copleston, *Volume II*, p. 58.

<sup>25</sup> R.W. Dyson, ed., *Aquinas: Political Writings (Cambridge Texts in the History of Political Thought)*. New York: Cambridge University Press, 2005, p. xxiv.

アリストテレスの『再発見』は聖トーマスをして新たな政治論を作成することを可能にした。それはまさに聖アウグスティヌスのこの世の価値の無さとその終焉に厳しく固執する態度を欠いていたので、より穏やかで楽観的だと特徴づけることのできる政治論であった。．．．彼は真っ向からアウグスティヌスに反対することはしなかったが、この世における善の獲得と天国での永遠の善の達成の間に両立できない対立関係があるとは見ていなかった。ただ前者が後者の方向に向かい、後者が前者のために疎かにされることが無いようにすることは必要であるが。この世とあの世の利は共存できる。聖トーマスは『人は生まれつき政治的動物なのである』というアリストテレスの有名な格言に両手を挙げて賛成する。．．．確かに人はアリストテレスが全く知らなかった真実と最終目的を持っている。人の真の宿命は天国での神との永遠の至福なのである。しかしこの世での幸福はその程度で的確に評価される限り、またそれを保証する政治的手段が有効である限り、可能で望ましいものである。信者に対する不信心者の支配でさえ恥ずべきものであったりしないし信仰に危険がない限り正当である。<sup>26</sup>

このように、哲学と宗教は西洋文明において強い理想主義の影響があった時期に互いに影響を及ぼした。哲学は論理を強調するが、宗教は愛と天啓を強調する。キリスト教内では、プラトンの上からのアプローチ、アリストテレスの下からのアプローチはともに追及された。

**（３）現実主義の台頭：** しながら理想主義の傾向はこの後逆流し、西洋文明はその後数世紀にわたって現実主義の台頭を経験する。16世紀にはマキャベリが登場する。分裂したイタリアに直面したマキャベリは『最終目的の為にはいかなる手段も許容される』<sup>27</sup>と主張した。イタリア統一の為、どのような汚い手段も許されるべきである。スタロフは彼の哲学を以下のように要約する。

政治的現実の主要な著書として、マキャベリの『君主論』はプラトンと繋がりがあった古典的理想主義の伝統からの決定的離脱となった。同書の『英雄』であるチェーザレ・ボルジアは冷

<sup>26</sup> 同、xxiv-xxv 頁。

<sup>27</sup> Peter Bondanella and Mark Musa, ed., trans. *The Portable Machiavelli*, New York: Penguin Books, 1979, p. 18.

血で、不道徳で策謀的な独裁君主であった。『マキャベリアン』という言葉は『君主論』の中で描かれているような方法で個人的権力を冷酷に追求する邪悪で狡猾な人物を指すようになった。<sup>28</sup>

その1世紀後、トーマス・ホッブスが現実主義をさらに発展させる。ダルトンは以下のように説明する。

ホッブスの政府の社会契約論は君主はその権威を神から授かるという中世の考え方と、正義は慣習上の問題ではなく客観的に根付いているというプラトンの考え方を拒否した。ホッブスは正義の根底は個人の他人による支配への恐怖にあると発見し政府は国民の合理的私益に基づくべきであると主張した。．．．ホッブスの人性の分析、その統率力に関する理論と主権の概念はマキャベリのものに優る。ホッブスはマキャベリの現実論をさらに発展させた。<sup>29</sup>

ホッブスは性悪説は信じなかったが、死に対する恐怖が同じ結果を生むと信じていた。スタロフは以下のように説明する。

自然状態に置かれた人間はお互い殺人者ではないかと恐れあう。人間は恐怖心からできるだけ権力を強大化させようとする。これが他の人間を恐怖に陥れ、自己防衛の手段として権力を追及させるようになるのである。完全な安全を達成することができないのはこの恐怖－防衛－恐怖の悪循環のせいであり、人間の生来の過激な性格や強欲のせいではない。<sup>30</sup>

現実主義は現代の学会で支配的学派となった。20世紀にはハンス・モーゲンソーはその著書『国際政治－権力と平和』において勢力均衡論に基づく国際政治における現実主義理論を発展させた。<sup>31</sup> 現在では政治学者は自己犠牲を説明するのに苦心している。

<sup>28</sup> Denis Dalton and Darren M. Staloff, *Great Minds of the Western Intellectual Tradition, Part II: The Age of Faith to the Age of Reason*, Springfield, Va.: The Teaching Company, 1998, p. 14.

<sup>29</sup> 同、26頁。

<sup>30</sup> 同、24頁。

<sup>31</sup> Hans Morgenthau, revised by Kenneth W. Thompson, *Politics among Nations: The Struggle for Power and Peace (Sixth edition)*. New York: Alfred A Knopf, 1985.

この理想主義から現実主義への移行は芸術界でも見られる。聖トーマス・アクィナスの頃に、ダンテは『神曲』を執筆したが、これは間違いなく理想主義的キリスト教の作品である。クック等によると：

これはどの見地から見ても特筆すべき、まさに無比の文学作品の達成である。この物語はキリスト教の死後の三世界—地獄、煉獄と天国への旅であり、死後の世界に巨大な視野を与えている。これは宇宙的規模の作品である。ダンテは地獄の最も深い冷たい巢窟から永遠の栄光の中で神の住む天国の頂上へと宇宙全体を旅するのである。<sup>32</sup>

マキャベリとホッブスが現れる頃には、シェークスピアが登場する。その多くの作品は現実主義と理想主義の真っ向からの対立を扱っている。

『オセロ』において、シェークスピアは善と悪が真正面から対立する世界を描いた。本劇では、善と悪は二つの明らかに区別がつく存在として提示される。一方ではデズデモナは純粋な善を表し、他方ではイアーゴが純粋な悪を表している。主役のオセロはデズデモナの世界からイアーゴの世界へと急速に移動する。オセロは試されて失格したのである。彼は良い人間ではあるが、過ちを犯し、その代償はその魂であった。ここではシェークスピアは中世のユダヤキリスト教的枠組みを使用している。中世の純粋な悪である悪魔が人々の魂を捉えて網の中につめているイメージが使われている。黑白、明暗、善悪といったキリスト教の極化の概念も本劇を通じてみることができる。

『マクベス』においても、シェークスピアは善と悪が混在する世界を描く。しかし、本劇では、善と悪は簡単に区別が付かず、『Fair is foul and foul is fair』（公正が不正で不正が公正）という灰色の世界となっている。マクベスは現実主義と理想主義が混在する世界に生きなければならなかった。ここでは二つの教義は完全に混ざり合い、分離することが不可能である。この世界では国王は支配を望むが弱肉強食の法によって更なる強者にとって代わられるという運命は避けたいと思う。そこで、国王は理想主義の教義を『借り』て、国民に全体の利益（この場合は王国）のために個人を犠牲にすることを信じさせたのである。マクベスもこの策中にはまることとなる。ここではマクベスは二戦線戦争に直面する。もし彼が純粋な現実主義の世界に生きていた

<sup>32</sup> William R. Cook and Ronald B. Herzman, *Dante's Divine Comedy*. Chantilly, Va.: The Teaching Company, 2001, p. 4.

ら、次々と現れる挑戦者に対して常に防衛措置を採らなければならないが、少なくとも後悔したり、隠し立てをしようとする必要は無かっただろう。もし純粋な理想主義の世界に生きていたら、反乱を起こそうなどという考えは思いつきもしなかっただろう。国王や王国に尽くすというわけではないが、人類社会全体に尽くすことに心から幸福を感じていたに違いない。この二戦線戦争のために、マクベスは現実主義の自然戦争状態よりも悪い殺戮機械になってしまう。現実主義者はその支配にとって脅威とならない者を殺害したり、不必要に敵を作ったりはしない。それは貴重な資源の無駄遣いであるからだ。しかしマクベスは周りの全てを破壊し始め、敵を自分で相手にできるより強力なものにしてしまい、資源を使い果たし、最後には殺されてしまう。このように、シェイクスピアによって描かれる従来の社会は地上の地獄である。

『リア王』では、シェイクスピアは善と悪の二極による全面戦争を描く。これは『オセロ』の世界観に似ているが、リア王の構造はずっと複雑である。というのは『オセロ』と違って、本劇は『マクベス』の世界観に似た善と悪が混在する灰色の世界から始まるからである。

コーデリアはデズデモナと同じように、純粋な善を表し、エドモンドはイアゴのように純粋な悪を表す。しかし両者はここでは区別をつく二極として提示されてはいない。他の人物が登場し、ケントとフルール、グローセスター、エドガーとアルバニーは善者、オズワルド、ゴネリル、レーガン、コーンウォールは悪者となるが、これらの人物は別々の二極として登場しないで、無秩序にばら撒かれている。ゴネリルとレーガンとコーデリアは姉妹である。ゴネリルはコーンウォールの妻であり、夫妻は邪悪な召使のオズワルドを抱えている。またレーガンはアルバニーの妻で、エドモンドとエドガーはグローセスターの息子である。

しかし劇が進むにつれて、この景観は変わってくる。そして最後には区別の付く二極が形成され、戦闘場面へと流れ込む。まずコーデリアが邪悪な姉妹から離別する。ケントとフルールもリア王について姉妹から離れる。それからエドガーがグローセスターとエドモンドから離れる。後にグローセスターもエドモンドから離れる。当初は善者は離れ離れであるが、徐々にお互いを見つけあう。ケントとフルールはエドガーに出会う。グローセスターがこれに合流する。最後に彼らはコーデリアに合流する。アルバニーはずっと後までレーガンと暮らす。彼もまた最後には善者に合流する。その間、エドモンドはゴネリル、レーガン、コーンウォール、オズワルドと合流する。

したがって戦闘は善と悪の『最終戦争』の形をとる。世俗的かというと、フランスはリア王の王国に敗北するが、これは悪が戦争に勝ったというわけではない。より緊密に象徴的見地から見てみると、この戦争には勝者がいないことが分かる。両者共に相手にかなりの打撃を与えることに成功している。エドムンドは善の中心勢力であるコーディアを殺害することに成功する。一方善者もエドガーがエドムンドを殺害したときに悪の中心勢力を破壊することに成功する。これは引き分けである。それではこれで終わりなのだろうか？両者とも完全に破壊され、人類が継続するにはもう何も残っていないのだろうか？多くが殺害されるが、登場人物全てが死亡するわけではない。善の側ではケントとアルバニーが生き残り、悪の側では姉妹とコーンウォルが生き残る。これらは中心を失った弱小勢力であるが、勢力を再編成し、勢いを巻き返し、十分な強さを回復したときにまた対決し、戦いは続いていくのである。

最後にリア王は善人であるが浅はかな人物として描かれている。リア王は日常生活において善悪の問題を理解できない大多数の人民を表している。彼らはこのような巨大な戦闘が周りで起こっていることにさえ気がつかない。その代わり、彼らは目先の環境内での自己の安楽に焦点を当てる。意図しないままに、彼らは安楽を与えようと無意味な約束をする悪に勢力を与え、その結果に苦しむのである。その苦しみの中で、彼らは遂に戦闘に気がつき、善の価値を知ることになるが、不幸にもしばしばそれは遅すぎるのである。

デニース等はハムレットも同じ問題を取り扱っていると主張する。

「生きるべきか、死ぬべきか？」という台詞はその本存は倫理学の問題である。「心の中でこの憤慨すべき運命の矢に耐え忍ぶことがより高貴なことなのか、それとも山積する問題に対して武器をとって戦うことがより高貴なことなのか。」これは実に難しい決断である。この決断において、ハムレットのジレンマは倫理学者にとっても感受性のある素人にとっても同様に典型的な問題である。<sup>33</sup>

**(4) 宗教の凋落:** 一旦現実主義が勢いを得ると、キリスト教は守勢に置かれることになる。前章で述べたように、キリスト教は内部分裂を起こす。三十年戦争の後150年の間、深刻な攻撃を受け、遂には啓蒙運動に達するのである。この運動は1680年代にフランス国王

<sup>33</sup> Denise, Peterfreund and White, p. 1.

ルイ14世がフランスのプロテスタントにある程度の寛容性を認めたナンテの勅令を廃止したときに始まった。20万人以上が国外逃亡した。<sup>34</sup> 亡命者は絶対君主とカトリック教会を攻撃し始める。

亡命者たちがどこへ行こうと、そのなかで教育の高い者たちは新聞や出版社の注目を集めた。1690年代に彼らはフランスの絶対主義に対して前例のない宣伝工作を開始する。ルイ14世は暴君となり、そのカトリック僧侶は迫害者として描かれ、追放者は宗教寛容運動の為に殉教者として称賛された。1680年代以降、英国のプロテスタントは自国のカトリック王に不満を抱き、フランスのユグノー亡命者と彼らがカトリック教と関連すると見ていた絶対主義打破の同盟を結んだ。このプロテスタントによる政治同盟は1720年代まで政治勢力を維持する。その後起こった危機の時代は絶対主義と国教を正当化した伝統を完全に分離する必要を明らかにした。啓蒙運動家の間で合意が生まれた：概してカトリック僧侶はあまりに長きにわたって、君主を気ままに排斥するよう扇動する勢力を享受してきた。その後すぐ全ての僧侶の特権は侮蔑されるようになった。

35

政治運動はキリスト教会と絶対君主を標的とした、ということはピコーの『神』と『英雄』が共に攻撃されたことになる。これによって、ロックやルソーといった思想家を通して啓蒙運動は民主主義への道を開いた。

教会に関しては、啓蒙運動は政治的だけでなく知性的にもその衰退を招いた。ここでエマニュエル・カントが偉大な貢献をした。カントはその著書『純粹理性批判』において合理主義を達成する非常に貴重な手段を提供したのである。カントはまた『道徳形而上学原論』において宗教に取って代わる理性に基づいた道徳論も提供し、全ての理性的存在に適用され個人的動機

<sup>34</sup> Margaret C. Jacob, *The Enlightenment: A Brief History with Documents*, Boston: Bedford/St. Martin's, 2001, p. 4.

<sup>35</sup> 同、4頁。

や欲望から独立した無条件の道徳法と定義される<sup>36</sup>提言命法を導入した。<sup>37</sup>

その結果、キリスト教会は社会における影響力を失った。クレイグはこの一般的傾向を以下のように要約する。

教会の権威は多くの分野で攻撃されたが、知的分野では最も深刻だった。新しい心理学は人間の精神は白紙で経験が知識を書き込むのだと描き、教会で長く保たれてきた見解を攻撃した。倫理的文化はキリスト教の代替となりうるという不明瞭な示唆は教会の権威に対する間接的な攻撃であった。人々は思うがままに考え行動する自由を欲しがっていた。ポルテールとその者にとって啓蒙運動は『神の御意思への平伏した服従』からの解放を提供するものだった。自由はいろいろに解釈されたが、それは少なくとも宗教を盲目的に重視しなくてよい権利を授与する物であると推測された。．．．

初期にはこの新しい思想はキリスト教に対して同情的であったが、徐々にバランスが神による天啓から人間の発見へと移動した。やがて、理性の充足性が革新的に肯定され、聖書の神学の全ての内容は比較的無意味な矮小なものへと追いやられた。

38

このように、一度は理想主義の中心であったキリスト教は西洋文明でその影響力の大半を失うのである。

**（５）唯物主義の台頭：** 現実主義の台頭と主に、唯物主義の台頭も始まる。理想主義の衰退が始まった時、その代替アプローチが登場し始めた。デカルトは精神と肉体の二元性を強調し、精神と肉体は共に存在するが、両者は異なった素質から形成されると主張する。<sup>39</sup> ホッブスはさらに進んで、物質だけが存在すると主張するようになる。19世紀に進んで、マルクスはドイツ理想主義者のヘーゲルを元に理論を

<sup>36</sup> <http://www.thefreedictionary.com>

<sup>37</sup> 詳細に関しては、Ernst Cassirer, trans. By James Haden, *Kant's Life and Thought*. New Haven and London: Yale University Press, 1981 を参照。

<sup>38</sup> Gerald R. Craig, *The Church and the Age of Reason: 1648-1789 (The Pelican History of the Church, 4)*, New York: Pelican Book, 1970, pp.12-13.

<sup>39</sup> <http://www.wikipedia.org/dualism>.

形成し、社会唯物論を提示する。青年時代のマルクスを『哲学者』<sup>40</sup>、熟年のマルクスを『社会歴史学者』<sup>41</sup>と呼ぶ者もある。共産主義哲学者のアルトゥーサーは次のように述べている、「青年時代のマルクスと熟年のマルクスは全く異なっている。．．．両者の分岐点は観念論的ヘーゲル論が完全に置き去られ、歴史的唯物論の科学的理論に代取された認識論上の離別である。」<sup>42</sup> この時点から政治学の分野では唯物主義が支配的学派となる。

芸術の分野では、13世紀から変化が見られる。クライナー等は以下のように述べている『中世を通じて、イタリアの絵画ではビザンチン様式が支配的であった。』<sup>43</sup> 同書はビザンチン様式を以下のように説明する。

ビザンチンのモザイクの正面像は．．．鑑賞者の前に重量感も言葉も無く空中に浮いている。それらの空間での所在は．．．不確かで．．．背が高く、やせて角ばった簡潔な像は初期のキリスト教芸術のふくよかな体の均整は失っている。衣服はまっすぐこわばって、狭い肩から薄く垂れ下がっている。有機的肉体は物体としての存在を失い、中には実像であるようにも見える物もある頭部を除いては、鑑賞者は厳粛な精霊が秘跡の存在の中無言で音も無く行進しているのを見ることになる。．．．青い空は神々しい金色に変わり、物体と物質の価値は蔑視された。ビザンチン芸術は金色の空間と天国の眺望を備えた確固とした肉体や投影のない芸術で、それはどこにも無いといえどどこにも無く、どこにでもあるといえどどこにでもあるのである。<sup>44</sup>

13世紀に入って、この傾向から離脱し、自然主義に向かう運動があった。絵画は再びより肉体的な特徴を提示し始め、立体的となった。これがルネサンスの人本主義への道を開くことになる。

<sup>40</sup> Sidney Hook, *From Hegel to Marx: Studies in the Intellectual Development of Karl Marx*. New York: Columbia University Press, 1994, p. xvii.

<sup>41</sup> 同、xvii 頁。

<sup>42</sup> 同、xxiv 頁。

<sup>43</sup> Fred S. Kleiner and Christin J. Mamiya, *Gardner's Art through the Ages, Volume II* (Twelfth edition), Belmont, CA: Wadsworth/Thomson Learning 2005, p. 523.

<sup>44</sup> Fred S. Kleiner and Christin J. Mamiya, *Gardner's Art through the Ages, Volume I* (Twelfth edition), Belmont, CA: Wadsworth/Thomson Learning 2005, p. 336.

(6) **思想体系の分断化:** 唯物主義への移行と並行して、かつては教会の指導のもとで統合的であった思想体系が分断し始める。まず科学が独立した分野となる。自然哲学と呼ばれた科学は400年から800年まではキリスト教社会ではあまり盛んな分野ではなく、科学的知識の大半はイスラム社会から輸入された。<sup>45</sup> 12世紀にはラテンの影響を受けるようになり、<sup>46</sup> アリストテレスが影響力を持つようになる。しかし、プリンチペによると、「フランシスコ派とドミニカ派は新たな自然哲学的見解と計画をその神学の一部として開発した」<sup>47</sup> とのことである。プリンチペは一般的に大体1450年から1550年頃の間をルネサンスと呼び、大体1550年から1700年頃を科学革命の時代と呼んでいる。彼は中世とルネサンスの間には継続性もあるので、時代系列化は問題があると思っているが、また1450年と1550年の間に重大な分断があったことも認めている。そのような発展のひとつは1518年の宗教改革運動である。これは「西洋のキリスト教を分断し、自然哲学が追及されていた制度的枠組みを変えた。」<sup>48</sup> また、科学を追及する実利的理由も出てきた。「科学と技術は新大陸により早く信頼できる方法で到達する為に、またそこで発見された物を利用するのに必要であった。」<sup>49</sup> しかしルネサンス時代、科学は今日のように専門家によって占拠された閉鎖された分野ではなかったように見える。レオナルド・ダ・ビンチやミケランジェロといったルネサンスの巨匠は芸術家であると同時に工学/科学者であった。ダビンチのほうが芸術と科学の両方を追及したことで有名であるが、ミケランジェロも有能な工学者であった。例えば、フィレンツェが1527年から1534年にかけて包囲攻撃を受けたとき、ミケランジェロはフィレンツェの要塞化の総督に任命され、市の要塞化を監督した。<sup>50</sup> そして科学革命が始まる。これは1543年に出されたコペルニクスの『天球回転論』によって始まったとされている。<sup>51</sup> そしてガリレオが新しい物理学を確立しようとした。<sup>52</sup> これらの発展のひとつとし

<sup>45</sup> Laurence M. Principe, *History of Science: Antiquity to 1700, Course Guidebook Part II*, Chantilly, Va.: The Teaching Company, 2002, p. 7.

<sup>46</sup> 同、17頁。

<sup>47</sup> 同、29頁。

<sup>48</sup> 同、49頁。

<sup>49</sup> 同、48頁。

<sup>50</sup> William E. Wallace, *The Genius of Michelangelo (Course Guidebook)*, Chantilly, Va.: The Teaching Company, 2007, Lecture 23.

<sup>51</sup> Laurence M. Principe, *History of Science: Antiquity to 1700, Course Guidebook Part III*, Chantilly, VA: The Teaching Company, 2002, p. 8.

<sup>52</sup> Principe Part III, p. 19.

て、プリンチペは機械哲学を挙げているが、これは教会にとって深刻な脅威となった。

17世紀の自然哲学の新たな概念のひとつは『機械哲学』である。これは世界を広大な時計仕掛けのような機械的機能として捕らえる明らかに反アリストテレス的の体系である。古代の原子論の復活もそれに関連した発展であった。機械哲学は自然現象に関して総合的な説明を提供するように見えたが、問題がないわけではなかった。おそらく最も重要な問題は、神学的に受け入れられない結果を潜在的に含んでいたことだろう。<sup>53</sup>

アイザック・ニュートンが生まれたのはこの科学と教会間の緊張関係の最中であった。微分積分の発明、その他の貢献によってニュートンが現代科学の確固とした基礎を築いたことに疑いはない。カープはこの貢献についてこう語る。

アイザック・ニュートンの多大な功績の性質は述べることは簡単だが理解することは難しい。しかしひとつの言葉を例にとってその程度の大きさを示すことができるかもしれない。ニュートンの生存中、今日現代科学として知られていることは多くの人々には単に『ニュートンの哲学』として知られていた。それはニュートンの個人的教義のように見えた。そしてそれは驚くほどに事実だったのである。ニュートンは自分で科学を『発見』したのではなかった。それは一個人には不可能なことである。科学は使われるのを待っているだけの小型の器具ではない。それは、むしろ、人が全く異種の要素から苦心してまとめなければならなかった複雑な発明だった。自然科学は深遠な複合体である。ひとつにはそれは物理的な意味のない数的抽象を生来数的表現を持たない具体的な自然現象と結合させる。それは懐疑的で厳格な実験方法を使用するが、その方法を現実の機械的性質に関する最も広範囲な仮定と組み合わせる。実証的であることから、真実は物質をありのままに検証することから得られると仮定する。数的で機械的であることから、物質はその実質は決して一見したところと合致しないとも仮定する。これらの要所をどのように組み

---

<sup>53</sup> 同、28頁。

合わせるかということは一見して明白ではないが、その組み合わせと合成はニュートンのものである。もし現代科学とその方法が機械に例えられるなら、ニュートンはその部品を組み立てて、そのすばらしい威力を明示したのである。<sup>54</sup>

ここで注意しなければならないことがある。ニュートンが現代科学の基礎を築いたことは確かであるが、彼自身は現代的人物ではなかった。彼は信仰に対立する論理を信じてはいなかった。グレークは以下のように述べる。

ニュートンは神を信じていたが、それは義務感からと言うのではなく、彼の自然に関する理解の縦糸と横糸を信じていたのである。彼は神を永遠で無限のものと信じていた。生命があり、偉大な力を持つ神は全てのことに決定権を持つ普遍の存在である。物体内にも存在し、物体の存在しない空間も占めている。彼は神を不動のものと信じていた。そしてこの信念がまだはっきりとは定義されていなかった彼の絶対空間の視野と融合したのである。ニュートンの神は宇宙が作動する規則を確立した。それについて人間は知るべく努力しなければならないのである。神は不変であるとしても、宗教はそうではない。親密な研究がニュートンに信仰と邪教の両方を追求させた。彼は何度も何度もキリスト教会の歴史を研究し書き留めた。彼は聖書を文字通り読み、特に予言について特別な魅惑に浸った。彼は予言には解明し、解釈されるべき象徴的意義があると見ていた。

彼はそれを自分の義務だと考え、解釈の15の規則と予言の70の形についての目録を作った。彼は事実と日付と数字を探求した。彼は腐敗していない原始キリスト教の復興であるとして理解していたキリストの再来の時を何度も何度も計算し直した。<sup>55</sup>

このように、ニュートンは物理学と形而上学を区別していなかったが、現代科学の基盤を築いた。以後の世代は物理学を形而上学から区別す

<sup>54</sup> Walter Karp, "Makers of Modern Thought: Sir Isaac Newton," in *Horizon (Autumn, 1968)*, pp. 17–26), pp. 17–18.

<sup>55</sup> James Gleick, *Isaac Newton*, New York: Vintage Books, 2003, p. 108.

るようになる。このように、一時はキリスト教学の必須の部分であった科学は完全に独立した思想体系となった。

この一般的傾向を示すため、ここに光に対するアプローチを三つの時代から拾って提示しよう。ひとつは中世に関するもので、次は1940年代のヴェルナー・ハイゼンベルグのもので、最後は現代の物理学の教科書からの抜粋である。

まず、ケンプは中世の光に対するアプローチを以下のように説明する。

多くの中世の哲学者は異常とも思える量の知的努力を光学の研究に費やしたが、我々は光が彼らに及ぼした威力の理由が何であったかを考慮しなければならない。光は伝統的には神の力と栄光の表れであった。教徒の間で敬われているキリスト教の映像で奇跡的な輝きの壮大な顕示なしで完成される物はほとんど無かった。光は13世紀には影響力の大きい哲学者の間で全存在の根本的な形而上の要素であるとみなされていた。そしてその結果彼らが行なった光力の研究によって、彼らは古典的な幾何学の高適な絶対不変の性質が自然界の実際の過程との独特な緊密関係に注入されるのだと発見した。光は直線的に移動するが、神の創造の神的秩序を反映するような形で幾何学の法則に従っているように見える。故に、中世の自然哲学に於いて光学に深く尊敬される地位を与えたのは、アルハエン、ロジャー・ベーコン、ジョン・ペッチャムやウイテロと言った主要な知識人であった。また、ダンテの天国に崇高な神力を見せつける術を提供したのは、時には厳密に幾何学的であり、不可解に超絶的な光であった。<sup>56</sup>

第二にノーベル物理学賞受賞者のヴェルナー・ハイゼンベルグはその著書『量子物理学の哲学的問題』の中で「現代物理学の光における色についてのゲーテとニュートンから学ぶもの」と題する一章を設けた。ゲーテとニュートンの各々の光に対するアプローチを検証した後、ハイゼンベルグは以下の結論に達した。

真実をこのように異なった側面（科学的と有機的側面）に分けることはゲーテとニュートンの色彩論の矛盾を即座に解決する

<sup>56</sup> Martin Kemp, *Leonardo da Vinci: The Marvelous Works of Nature and Man*, New York: Oxford University Press, 2006, p. 12.

ことになる。科学の大構造ではこの二つの理論は異なった立場をとる。現代物理学を受け入れたからといって科学者がゲーテの方法でも自然について瞑想することを妨げるものではない。これに基づいて、自然に対するより直接的で統一の取れた態度にすぐに戻ることができる并希望することはもちろん早熟である。我々の世代にとって、自然の『下流』を技術を通じた実験によって理解し、我々自身の物にすることが責務であるようである。精密な科学分野での進歩の中で、暫くは多くの場合に於いて、ゲーテには自然をより深く理解する為には必要だと思われる自然とのより直接的な接触を犠牲にすることになるだろう。我々は、これを受け入れる、というのはその代償に我々は相互関係のより広い範囲を、完全な数量的明瞭性をもって理解することができるようになったからだ。疑いなくこれは又『上流』の的確な理解のための基本で前提条件でもなければならぬ。これをあまりに大きな犠牲であると感じる者は、今のところ科学に専心することはできないだろう。彼らは科学の意味合いを、現代の研究手法の外縁において、科学が生命自身との関係を見出しているところで理解することができるだけだろう。<sup>57</sup>

第三に、現代の物理学の教科書では、光の問題は科学分野だけで取り扱われており、ハイゼンベルグの行なったような瞑想はもう無い。

光は地球上のほとんど全ての生命体にとって不可欠な物である。植物は日光によって移送されたエネルギーを光合成を通じて化学エネルギーに転換する。さらに、光は我々が回りの物体から、また宇宙を通じて情報を送受することができる主要な手段である。

光の性質と特性は古代から深い関心と推測の対象であった。ギリシャ人は光は光源から発せられる小さな粒子(*corpuscles*)から成っており、それらの粒子は観察者の目に当たった時に視覚を刺激するのだと思っていた。ニュートンはこの粒子論を光の反射と屈折を説明するのに使った。1678年に、ニュートンと同世代のオランダ学者クリスチャン・ヒュイゲンスは光が波

---

<sup>57</sup> Werner Heisenberg, "The Teachings of Goethe and Newton on Color in the Light of Modern Physics," in *Philosophical Problems of Quantum Physics*. Woodbridge, CT: OX Bow Press, 1952, pp. 60-76.

であると提案することによって光のその他の多くの特性を説明することができた。1801年には、トーマス・ヤングは光線はお互いに干渉し合えることを示し、波説に強力な支持を与えることになった。1865年にはマックスウェルが電磁波は高速で移動するという見事な理論を発展させた。．．．この時までには、光の波説が確固として確立したように見えた。

しかし、20世紀の初め、マックス・プランクは光粒子説に戻り熱体からの放射を説明しようとした。そしてアインシュタインは粒子論をいかに照射された金属から電子が放出するかを説明するのに使った。今日では、科学者は光を二重性があると見ている。すなわち、光はある状況下では波の性質を提示し、他の状況では粒子の性質を提示するというものである。<sup>58</sup>

**(7) 芸術の分断化:** 芸術界も宗教から独立した。それは北ヨーロッパで始まったが、一部にはその理由は「普及していたカルバン主義が清教徒として教会での芸術を否定することを要求していたからである。」<sup>59</sup> また、同地域での経済発展が、新しいタイプの後援者を作り出した。「新たな繁栄の中で拡大してきた商人階級の後援者が生まれ、この転換によって、今までとは異なった絵画の内容が強調されるようになる。オランダ・バロック芸術は風俗画、風景画、人物画そして静物に焦点をあてた。これらは全て繁栄する中流階級にとって魅力的なものであった。」<sup>60</sup>

芸術界内部では、感情と知性の間のバランスが変動する。ラングはバロック様式について次のように説明している。

盛期ルネッサンスは物静かで、確信に満ちて、成熟した人間の明瞭さを体現している。強く、幸せで知的で自分自身を古典文化に同化させた人間が全ての物の理想的尺度であった。均衡、調和、明瞭、包括性、多様性の中にある統一性は、この時期の支配的審美教義であった。チンクエチェントの前半はまだ遠近法の応用と発展と人体の表現をもって、空間の問題に主に関心が向けられていたが、16世紀の後半には行為の感情的側面により強い関心が向けられるようになる。ここから絵画の構

<sup>58</sup> Raymond A Serway, and John W. Jewett, Jr., *Physics for Scientists and Engineers with Modern Physics*, vol. 2, 6<sup>th</sup> edition, Belmont, CA: Thompson Brooks/Cole, 2004, p. 1093.

<sup>59</sup> Kleiner and Mamiya, *Volume II*, p. 718.

<sup>60</sup> 同、718頁。

成における時空の統一が発展する。初期には空間の定義を中心としていた芸術的問題を抱えた存在の純粋な形であったものが、ここでは行動が生き生きと感じられる現象に発展した。<sup>61</sup>

芸術的傾向は再び啓蒙運動の合理主義に基づくものに転換する。しかしながら、その直前、音楽界はヨハン・セバスチャン・バッハを生み出した。その作品は知的であると同時に感情的であり、ウルフはこれを『規則的であると同時に感情にも強く訴えかけ、科学的であるのに人間的でもある』<sup>62</sup>と表現している。ウルフはバッハの科学的側面を以下のように表現する。

ニュートンの研究の結果として（数学と物理学を含む）哲学の分野で起こったのと同じパラダイム・シフトが起こり徐々に定着していった。確かに偶然ではあったが、バッハの死後ちょうど一ヵ月後に1750年8月28日付けの記事の中で、バッハの元生徒でベルリンで自身も尊敬される作曲家・演奏者で理論家でもあったヨハン・フリードリッヒ・アグリコラが初めて、どちらも各々の分野で『深い科学』に深く関わっている点を指摘して、ニュートンとバッハの類似点を示した。バッハの音楽の促進をニュートンの哲学的達成に照らして見ることは全く適切なことであるように思える。両者は大変異なった種類の頂点に達したが、同じ根本原則の科学的発見と実証的証明の知的風潮の中で生き、考えそして活動した。<sup>63</sup>

シュバイツァーはバッハの芸術的側面を描き出す。

バッハが詩的ムードを最も繊細に捉えることは言うまでもない。音楽は表現不可能なものを表現すべきだといったワグナーの言葉をここで完全に適用することができる。これはまさにこの目的にとってはあまりに知脳的すぎる口語力を超えた表現という詩の根源である。

彼の聖書の言葉に関する概念は常に慣習的なものであるというわけではない。それは奥深く親密な感情から出てくるものである。バッハが『マタイ受難曲』の最後の晩餐の場面の聖餐な

<sup>61</sup> Paul Henry Lang, *Music in Western Civilization*, New York: W.W. Norton, 1941, p. 321.

<sup>62</sup> Christoph Wolff, *Johann Sebastian Bach: The Learned Musician*, New York: W.W. Norton, 2000, p. 462.

<sup>63</sup> 同、462頁。

言葉に与えた音楽は驚異的である。悲痛の影もない。音楽は平和と威厳を吹き込んでいる。終わりに近づくほど、低音部の震音がより威厳を増してくる。バッハには使徒の前に輝かしい顔でたたずみ、神の国での晩餐で再び共にワインを飲む日が来ると予言しているキリストが見える。バッハはしたがってこの場面の慣習的な通念から自己を解放し、その芸術的直感によって、神学が成し得なかったより正当な感覚を達成したのである。<sup>64</sup>

バッハの偉業を表現するために、Langはシュバイツァーを引用している「しかして、バッハは最終点である。何もバッハからは出てこない。全ては単に彼に至るのである。」<sup>65</sup>

啓蒙運動は新古典主義を生み、再び合理性が強調されることとなる。19世紀に振り子がまた反動し、ロマン主義が台頭し、再び感情が強調されることとなる。クライナー等は以下のように説明する。

新古典主義の合理性は啓蒙運動の思想を増強した。特にボルテール、ルソーによって促進された思想がロマン主義の台頭に貢献した。ルソーの「人は自由に生まれるが、いたるところで鎖につながれている！」という叫びがロマン主義の根本的前提を要約している。．．．ロマン主義は自由への欲望から誕生した。政治的自由だけでなく、思想、感情、行動、信仰、言論、趣向など他の全ての自由も含んでいる。

新古典主義からロマン主義への移行は論理から感覚への焦点の移行、計算から直感へ、そして客観的自然から主観的感情への移行によって表明されている。<sup>66</sup>

したがって、感情がロマン主義によって復活したとき、それは個人的感情となっていた。そして芸術界はついに『芸術のための芸術』によって独立を宣言するのである。

これはフランス語のスローガンの通常の英訳である。19世紀の初期から、『*l'art pour l'art*』という表現は芸術の固有の価値があり、どんな啓蒙的、道徳的、功利的機能からも切り離された「真の」芸術であるという哲学を表明している。そのような

<sup>64</sup> Albert Schweitzer, trans. by Ernest Newman. *J.S. Bach Volume Two*, New York: Dover, 1966, pp. 34-35.

<sup>65</sup> Lang, p. 512.

<sup>66</sup> Kleiner and Mamiya, *Volume II*, p. 827.

芸術作品は時には「自己目的主義」と表現される。これはギリシャ語の *autoteles*（それ自身で完全な物）という言葉から来ており、その概念は拡大されて、『内部志向』あるいは『個人志向』の人間という概念を包含するようになった。<sup>67</sup>

この段階を経ることによって、芸術界は自身を周縁に追いやり、社会とは無関係なものとするようになった。

**（８）哲学の分断化:** カントは啓蒙運動の偉大な貢献者である。カントはまた形而上学と物理学を統合しようとした。カシレーはカントがコーニッグスベルグ大学で教えた教科のリストを挙げている。

最初の学期は 1755 年の冬であったが、カントは論理学、数学と形而上学を教え、次の学期には先学期の講義に加えて、自然地理学と一般自然科学の基礎を追加した。それから彼の学術的活動の範囲はどんどん広がり、1756 年から 57 年の冬には、その講義の周期に倫理学を導入した。．．．さらに数年進むと、例えば、1761 年の夏学期には自然地理学、算数、幾何学と三角関数の他に、論理と形而上学、さらに、機械・理論物理学が教えられると発表されている。<sup>68</sup>

したがって、物理科学の台頭に直面して、少なくともカントなどの哲学者の最初の反応は分離するのではなく和解するということであった。

同時にカントは将来の哲学分断化の種を植え付けた。その著書『純粹理性批判』において、カントは『コペルニクスの回転』<sup>69</sup> と呼ばれる提案を行なう。基本的にはこれは、真実は我々の外部に存在し、我々は出て行ってそれを発見しなければならないという通常の観念を覆すもので、コペルニクスが太陽が地球の周りを回っているのではなく、地球が太陽の周りを回っているのだと主張したように、カントは真実は我々の精神の内部に存在すると主張した。より詳しく説明すると以下のようなになる。

<sup>67</sup> [http://www.wikipedia.org/art for art's sake](http://www.wikipedia.org/art_for_art's_sake)

<sup>68</sup> Ernst Cassirer, trans. by James Haden *Kant's Life and Thought*. New Haven: Yale University Press, 1981, pp. 41–42.

<sup>69</sup> Frederick Copleston, S.J. *A History of Philosophy, Book Two, Volume VI: Wolff to Kant*. New York: An Image Book, Doubleday, 1985, p. 207.

従来我々の全ての知識は外的物象に合致しなければならないとされてきた。しかし概念によって演繹的に確認し、そして知識を広げようとする全ての試みは、この仮定に関してなんらの結果ももたらさなかった。それならば、もし我々が外的物象が我々の知識に合致しなければならないと仮定したなら、形而上学においてより進歩を遂げることができるかどうか試してみようではないか。これは全ての場合において、我々が追求している可能性、すなわち外的対象に対する先駆の知識によりよく合致する。それは、我々に与えられる前にその対象に関する何かが決定的であるということである。<sup>70</sup>

これは真実は主観的だということの意味することになる。しかし、カントは個々人が独自の現実観を持つということの意味したのではない。カシレールの説明によると：

この『主観性』はカントの『コペルニクス的回転』が示唆するものとは全く違っている。それは対象の結果として起こるものではなく、認識における一定の規則性の結果起こるものである。その規則性に沿って、客観性の決定形式を（理論的、倫理的、審美的種類の）遡ることができる。これが一旦理解できれば、この個人性と任意性の様相に満ちているこの『主観性』の二義的意味は、即座に消滅する。ここで我々が確立している関係において、主観的という概念は必要な過程の基礎と論理の普遍法則を表現するものである。<sup>71</sup>

しかし、カントに続く世代は違った方向に向かった。スクルートンはカントの根本的アプローチを以下のように説明する。

「純粹理解の法則は感覚の対象物に対してのみ適用されるのであって、我々が理解できる方法を考慮に入れることなしに一般的に物事に当てはめられるものではない。」 [Critique of Pure

<sup>70</sup> Copleton, *Volume VI*, p. 224.

<sup>71</sup> Cassirer, p. 151.

*Reason*, First edition, p. 246, Second edition, p. 303] 経験に言及することなく世界を詳述することは不可能である。<sup>72</sup>

一旦「真実を経験に依存する」といってしまうと、次の段階は「私の経験は他の者とは違っている。」ということになり、これが実存主義への道を切り開くことになった。

実存主義は存在と人がこの世に存在している自分を発見する方法の分析を中心とする哲学である。その概念は人はまず存在し、それから個々人が一生をかけてその本質と性質を変えていくというものである。より簡単に言うと、実存主義哲学は自身の発見と自由意志、選択と個人の責任を通じて人生の意味を見出すことに関するのである。その信念は人々は経験、信念と将来の見通しに基づいて選択を行なうに際して一生を通じて自分が誰で何なのかを探し続けるというものである。そして個人の選択は真実の客観的枠組みを必要とすることのない独特なものとなる。実存主義者は人は法律、道德規則、伝統の助けなしで選択を余儀なくされ責任を取るべきだと信じている。<sup>73</sup>

ソレン・キルケゴールがこの学派の基盤を築いた。

客観的知識の有用性を認める反面、キルケゴールはそのような知識が我々の自己理解への欲望を満たすことはできないと主張する：

私が本当に必要としているのは私が何をしなければいけないかについて明確にすることであり、私が知らなければならないことを明確にすることではない。．．．最も重要なことは私にとっての真実を発見することであり、私があるために生き、そして死んでも良いと言える信念を見つけることである。<sup>74</sup>

そしてニーチェがこれに続く。オハラの説明によると、「その執筆を通して、ニーチェは個人を強調する。群集に対する個人、より切確琢

---

<sup>72</sup> Roger Scruton. *Kant: A Very Short Introduction*, New York: Oxford University Press, 2001, p. 131.

<sup>73</sup> <http://www.allaboutphilosophy.org/existentialism.htm>

<sup>74</sup> Denise, Peterfreund, and White, Chapter 13, p. 184.

磨しようとする個人、自己知識を追求する個人、自身の道徳を作り出す個人．．．ニーチェは以下のように書いている『我々の行動の全ては共に比類なく、親密で、独特で無限に個人的である。(The Gay Science)。』<sup>75</sup>

ニーチェの思想にはまた、個人に焦点をあてた思想体系とよく合致する現実主義の要素が含まれている。カウフマンによると、ニーチェは「宗教と完全に断絶した包括的な哲学を持った最初の思想家であった。」<sup>76</sup> 彼はまず「神は死んだ。」<sup>77</sup>と宣言する。そしてそれから現実主義に大変近いアプローチを発展させ、現代社会の技術進歩によって人々の生活がより安全で快適なものになるに従って、人々の焦点が自己保全から自己栄光へ移り始めているかもしれないと示唆した。

ニーチェの哲学的視野の重要な要素は『力への意思』(*der Wille zur Macht*) であり、これは人の行動の動機を理解する基盤を提供する。ニーチェによると、この概念は多くの場で広く適用できるし、また力への意思は適応や生存のための圧力よりも重要な要素であると示唆している。<sup>78</sup> ニーチェによると、力への意思に先立つ自己保存への衝動が見られるのは極限られた場合に限られ、生命が貧困と限界状況にさらされたときだけであるとのことである。生命の自然状態は、彼によると豊富に満ちたものである。<sup>79</sup> 後のニーチェの権力への意思の概念は、全ての生命体に適用されていて、適応と生存競争は動物の進化においては二次的衝動であり、自己の力を拡張したいという欲望ほど重要でないと示唆している。<sup>80</sup>

しかしながら、ニーチェはこれによって何も政治的なことを意図したわけではなかった。ライプチヒの教授であったリッチェルは以下のように証言している。「ニーチェには全く特に政治的性質は無かった。」

<sup>75</sup> Shelly O'Hara, *Nietzsche within Your Grasp: The First Step to Understanding Nietzsche*, New Jersey: Wiley Publishing, Inc., 2004, p. 21.

<sup>76</sup> Walter Kaufmann, *The Portable Nietzsche*. New York: Penguin Books, 1968, p. 17

<sup>77</sup> 最初に述べられているのは、*The Gay Science* (Deutsch: *Die fröhliche Wissenschaft*), 次に、section 108 (New Struggles), in section 125 (The Madman), そして三度目に述べられているのは section 343 (The Meaning of our Cheerfulness)である。また Nietzsche's classic work *Thus Spoke Zarathustra* (Deutsch: *Also sprach Zarathustra*)でも言及されている。  
(<http://www.wikipedia.org/god is dead>.)

<sup>78</sup> Beyond Good & Evil 13, Gay Science 349 & Genealogy of Morality II:12

<sup>79</sup> Twilight of the Idols; Skirmishes of an Untimely Man; §14

<sup>80</sup> <http://www.wikipedia.org/Nietzsche>

彼は全体的に概してドイツの大国化にある程度共鳴していたが、私と同様、特にプロシヤ主義に傾倒していたわけではない。」<sup>81</sup> 彼の哲学をナチ政権で使用するように政治化したのは以後の世代であった。

20世紀に入ると、この傾向がポストモダニストに引き継がれる。これは『主観的真実と世界的文化の説話を拒否する特徴を持つ現代文化の傾向』<sup>82</sup> と定義されている。この学説によると、ポストモダニズムは 歴史的、文化的、社会的、知性的その他の検証をより小さな単位と範疇に『脱構築』していく。例をあげると、「アメリカ文化の研究をしているって？ アメリカ文化などという物はないよ。」それで文化を東海岸の文化に脱構築する。すると、「東海岸の文化などというものはない。ニューヨークの文化もない。ニューヨーク市の文化もない。ハーレム？ ハーレムの男子人口？ ハーレムの12歳から25歳までの男子人口？ 1990年代のハーレムの12歳から25歳までの男子人口？」一旦脱構築を始めると、どこで停止するのか？ ポストモダニストは唯心主義であり、自学派を唯物主義に対抗するものとみなしている。しかし、この学派はしばしば他の学派を批判的に評価する際には有用であるが、独自のパラダイムを構成することはできないと批判される。その結果、現代の学会は唯物主義と細分化した唯心主義によって占められており、包括的な唯心・理想主義を創出することが不可能になっている。

このように、かつてはキリスト教会の下で包括的で一貫性のあった思想体系は細分化した。キリスト教会の指導者層が腐敗したのは事実であるが、その解決策は排除することであった。その結果、西洋文明は悪質な指導者層から指導者層の欠如へと移行したのである。

このように、理想主義と現実主義の変動はピコーの周期によって予測されたものと一致する。しかしながら次章に移る前に、二つの問題点について言及する必要がある。

第一に歴史のどの時代においても理想主義から現実主義に至る幅広い思想の枠が存在する。したがって、それほど著名ではない思想家を使って上記と正反対の構図を制作することも可能である。ということはここでの問題は、他の思想家がこの構造に影響を与えたかどうかではなく、これらの歴史を超えて生き延びた超大な思想家が、もし他の時代に生まれていてもその偉業を達成できたかどうかということである。例えば、もし聖トマス・アキナスが1850年に生まれていた

<sup>81</sup> Walter Kaufmann, *The Portable Nietzsche*. New York: Penguin Books, 1968, p. 8.

<sup>82</sup> <http://www.wikipedia.org/Postmodernism>

ら、『神学大全』を完成していただろうか？ もし完成していたとしたら、どれほどの社会的影響力があっただろうか？ 13世紀、14世紀、15世紀に論理と神学を統一できる偉大な思想化が生まれていただろうか？ それは無理だっただろう。これらの思想家が同じ偉業を成し遂げるためにはその特定の時代に存在することが必要だったのである。

第二に、ピコーの権力構造の周期と理想主義の周期は合致するが、どちらがどちらに影響を与えているかに関しては答えが出ていない。思想と現象の関係は複雑である。両者は相互に影響を与え合う。学者は世界を観察して理論付ける。それがその特定の運動に正当性を与え、社会で受け入れられる。この周期の繰り返しによって一定の方向が固定される。この時点ではただ周期が一致しているということだけを観察するに留める。

**非西洋文明の形而上周期：**ここで、理想的には西洋の思想史が他の文明の思想史とも合致することを確認することが望ましいが、個々の文明の歴史的検証の代わりに、ここでは『*Great Thinkers of the Eastern World: The Major Thinkers and the Philosophical and Religious Classics of China, India, Japan, Korea and the World of Islam*』<sup>83</sup> という著書を使うことにする。同書は41名の専門家による共著で、個々の文明においての主要な思想家を時系列に百科辞典方式で提示している。中国には31名、インドは30名、日本は26名、イスラム圏では16名の思想家が記録されている。個々の思想家の要点を辿るなか、長期的兆候を以下に記録した。

**中国：**中国の場合、取り扱われている思想家は6つの歴史的時代に集中している。最も多く記録されているのは『諸子百家の時代』（紀元前771年～221年頃）である。これは東周王朝の動揺から春秋戦国時代にかけての時代となる。紀元前500年代に孔子と老子が儒教と道教をそれぞれ設立した。ここで挙げられているほとんど全ての思想はこのどちらかの思想の変種である。戦国時代の露骨な現実主義に対応して、この時期の思想は理想主義が支配的であるが、ホッブスの思想に似た思想家を一名発見した。韓非子（紀元前280～233年頃）は、「人は身勝手だが、褒美と処罰に対応する。」また「政治権力は国王によってのみ掌握されるべきで貴族や僧侶と共有されるべ

<sup>83</sup> Ian P. McGreal, ed., *Great Thinkers of the Eastern World: The Major Thinkers and the Philosophical and Religious Classics of China, India, Japan, Korea, and the World of Islam*, New York: Harper Collins, 1995.

きではない。」と主張している。<sup>84</sup> この時代の直後董仲舒（紀元前195年頃～115年頃）は漢時代（紀元前206年～紀元220年）儒教を「建国直後の国家の理論的基盤として確立した。」<sup>85</sup> この時期の思想化は社会秩序の回復に多大な関心を寄せていたが、より抽象的な形而上の問題に取り組んだ思想家もいた。マクグリールによると、公孫龍（紀元前320年頃～250年頃）はその形而上の研究においてプラトンのユニバーサリズムにも似た概念を採択している。<sup>86</sup>

第二に、1世紀から3世紀の間には3名の道教の思想化が記録されている。セルマンは以下のように説明する。

『諸子百家』時代の後、後期東周王朝（紀元前771～221年頃）の時代、次世代の盛大な道教哲学が後漢の終わりから南北朝時代の政治的分権化の時代（3世紀～5世紀）にかけて発展した。法規主義と儒教哲学の混合が支配的な国家イデオロギーとして存続したが、道教の宗教と哲学が復活した。その理由は困難な時代と政治的混乱のせいであったのだろう。<sup>87</sup>

それから中国は5世紀から6世紀にかけて再び不安定な時代に入る。

第三の時代は6世紀半ばにやってきた。549年から700年にかけて、一群の仏教の思想化が記録されており、仏教がこの時期中国で影響力を持ったことが示されている。中国の仏教はその黄金時代を唐朝（618～907年）に迎えている。<sup>88</sup> 第四の時代は12世紀の初期に始まる。その後数百年ほどの間に四名の思想家が記録されている。これらの思想は新儒教と呼ばれている。セルマンによると、

周敦頤は．．．しばしば『宋朝（960～1279年）新儒教の父』と考えられている。宋朝の哲学は極めて折衷混合的である。周の新儒教哲学としての成功は道教と仏教思想の要素を主要な儒教の指針に組み込む能力に基づいている。<sup>89</sup>

<sup>84</sup> 同、44頁。

<sup>85</sup> 同、67頁。

<sup>86</sup> 同、31～34頁。

<sup>87</sup> James D. Sellmann, "Guo Ziang (Kuo Hsiang)," (McGreal, pp. 80–830, p. 80.

<sup>88</sup> Alan Fox, "Fazang (Fa Tsang)" (McGreal, pp.99-103), p. 99.

<sup>89</sup> James D. Sellmann, "Zhou Dunyi (Chou Tun-I)," (McGreal, pp. 104–107), p.104.

新儒教は引き続いて影響力を維持した。しかし、宋朝と明朝の新儒教の間には違いがある。宋朝で支配的であった学派は『理学』であり、明朝では『和心学』と呼ばれる学派であった。<sup>90</sup>

次の記録は18世紀の清朝の時代までない。チンによると、その頃までには中国は実証主義に支配されている啓蒙運動後の西洋に幾分似通ってきているとのことである。

18世紀の中国の知識人の間で、実証可能な研究に基づく学説が最終目的となっていた。．．．清朝の学者の過半数は哲学の追及や物事の理由や意味を追求しようとする試みを意味のない放蕩であるとみなしていた。<sup>91</sup>

19世紀に中国は西洋の植民地主義の下西洋文明に組み込まれる。独立を求めて、中国は共産主義を選んだ。

**インド：**インドでは、最初の三つの記録は紀元前600年から500年にかけて見られる。最初の記録はヒンドゥー教の基盤であるウパニシャッドである。第二の記録は仏教の創設者である釈迦である。第三の記録はジャイナ教のマハピラである。以下の記録は全てヒンドゥー教か仏教の思想である。パアンジャリ（紀元前200年～450年）の記録では、この二宗教を合成しようとした試みがあったとのことである。仏教の記録は紀元4世紀を最後に無くなる。8世紀から9世紀にかけて一群のヒンドゥー思想の記録がある。この時期にインドの全ての記録の中で特に目立つ記録がある。ジャヤレース・バッタ（紀元7世紀）が唯一の唯物主義者である。しかし唯物主義は紀元前600年のカルバカ派まで遡るようである。この学派は「人はこの世での人生を楽しむべきである、というのはあの世などというものはないのだからと教えたと言われている。」<sup>92</sup>

13世紀にはインドはイスラム教の影響を受ける。13世紀から15世紀にかけて、ヒンドゥー教はイスラム支配者によって排斥されるがヒンドゥー教の研究は続いたようである。マドバ（1197年～1278年）はベダンタ派を創立した。インドがヒンドゥー教に寛容な政策を採るムガル帝国の支配下に入った時は混乱状況であった。この様相の中、引き続き三者の記録はこれらの宗教を合成しようとする

<sup>90</sup> Randall L. Nadeau, “Wang Yangming (Wang Yang-Ming),” (Magreal, pp. 120-123), p. 120.

<sup>91</sup> Ann-Ping Chin, “Dai Zhen (Tai Chen),” (McGreal, pp. 124-127), p. 124.

<sup>92</sup> Narayan Champawat, “Jayarāsin Bhatta,” (McGreal, pp. 202-206), p. 202.

ものであった。ナーナク（1469年～1539年）はシーク教を創設する。

押さえようのない混乱、両者による宗教的偏見、貧困な民衆の搾取を引き起こしたヒンドゥー教とイスラム教の間の紛争に深く心を痛めたナーナクはインド社会を新たな宗教を提案することによって再活性化しようとした。この宗教がシーク教と呼ばれている。<sup>93</sup>

それから17世紀に二つの記録がある。この二つの記録はヒンドゥー教の極端な解釈のようであり、ブラフマンが唯一の現実で現世は偽りであると主張している。この時期、英国がインドに進出し始め、1600年には東インド会社を設立し、この領地での植民地的支配を強めていた。したがって、これらの解釈はおそらく厳しい植民地主義の現実に対する逃避思考であったのだろう。

残りの6つの記録は19世紀から20世紀にかけてのものである。これらの記録は西洋の唯物主義に対抗して唯心主義を奨励しているようである。例えば、タゴレはこの点で明白であり、「現代文明は富を蓄積したがその幸福を欠いている」<sup>94</sup>と主張した。ガンジーの主要な思考もこのような点から要約されている。「真実は善である。人の主な目的は自己実現である。愛が人生の最高の価値である。非暴力不服従が不正と戦う唯一の方法である。宗教の本質は倫理的行動である。全ての主要な宗教は同等で全て真である。政治は精神的価値から切り離すことはできない。人は全て兄弟である、というのは同じ魂を持っているからである。」<sup>95</sup>

**日本:** 日本の場合、最初の記録は聖徳太子（574年～622年）となっている。聖徳太子は皇族と血が繋がっていたが、国政には仏教を選んだ。「仏教は一般的国家に理想的な基盤を提供した。そして安定した社会的組織への方向性である調和を進める為に孔子の指針によって補われた。」<sup>96</sup> 以後の9つの記録は8世紀から13世紀にわたるが、全て仏教思想である。14世紀の軍事階級と皇族の紛争の間、公家出身の北畠親房は皇族の政治的影響力を主張する為神道を促進した。1600年に徳川家康が江戸幕府を開設する。この時期、一群の記録が現れるが、これは新たな幕府の基盤となるイデオロギーが何で

<sup>93</sup> Nandi Bhatia, “Nānak,” (McGreal, pp. 240–243), p. 240.

<sup>94</sup> Narayan Champawat, “Babindranath Tagore,” (McGreal, pp. 260–264), p. 260.

<sup>95</sup> Narayan Champawat, “Mohandas Karamchand Gandhi,” (McGreal, pp. 265–268), p. 265.

<sup>96</sup> Robert E. Morrell, “Shōtoku Taishi,” (McGreal, pp. 291–294), p. 291.

あるべきかという活発な論争があったことを示唆している。鈴木正三（1579～1655年）は禅道を採択しようとしたが成功しなかった。大部分の記録は新儒教の学者である。ここに中国での宋の理学と明の和心学の違いに並行する学派が見られる。前者は朱子学と呼ばれ、後者は陽明学と呼ばれた。この時期山鹿素行（1622～1685年）が皇族の支配を正当化するのに使われてきた神道を使って江戸幕府を正当化しようとした。

18世紀に入ると第二世代の学者が新儒教を批判し始めた。荻生徂徠（1666～1728年）は古典儒教の復帰を呼びかけた。本居宣長（1730～1801年）は国学を促進した。これは「仏教、儒教といった外国の思想から日本の精神的過去を取り戻そうという試みを持った神道運動であった。」<sup>97</sup> 平田篤胤（1776～1843年）はこの傾向をさらに促進した。「平田篤胤は国学者で、熱烈な国家主義者であり、復古神道運動を率いたが、これは外国思想、特に仏教と儒教を排斥し古代神道を復帰させようという試みであった。」<sup>98</sup> 日本はこの時点で西洋に支配されている世界に合流する。国家主義的傾向は20世紀の軍部によって引き継がれた。陸軍高官の石原莞爾は物的に優位な西洋と精神的に優位な東洋の間で最終戦争が起こるという考えを進めた。

**イスラム圏：**イスラム圏の場合、16の記録が哲学と宗教は共に重要であると考えた初期の学者から哲学に敵対的態度を取った後期の学者へと一般的な流れがあることを示唆している。初期の学者に関しては6つの記録がある。アル・キンディー（801～866年）は「予言的知識は人の論理より優れている」と主張するが、アリストテレスと数学の研究も真の知識に導くと言っている。<sup>99</sup> アブ・バクル・アル・ラージー（865～925年）は「宗教の天啓において、哲学的追求を禁止する物は何もない」<sup>100</sup> と主張している。アル・ファービー（870～950年）は「哲学と宗教を共に修学した預言者が国家にとって完全な支配者である」<sup>101</sup> と主張している。アビセンナ（980～1037年）は論理学、数学、物理学、形而上学と薬学を学んだが、「同時に政治家、哲学者、医者であった。」<sup>102</sup> シャラスターニー（1076～1153年）は「宗教と哲学思想は批評的、比較的方法で研究で

<sup>97</sup> William E. Deal, "Motoori Norinaga," (McGreal, pp 375–379), p. 375.

<sup>98</sup> William E. Deal, "Hirata Atsutane," (McGreal, pp. 380–383), p. 380.

<sup>99</sup> Charles E. Butterworth, "Al-Kindī," (McGreal, pp. 439–442), p. 439.

<sup>100</sup> Charles E. Butterworth, "Abū Bakr Al-Rāzī," (McGreal, pp.443–445), p. 443.

<sup>101</sup> Mehdi Aminrazavi, "Al-Fārībī," (McGreal, pp. 446–448), p. 446.

<sup>102</sup> Mehdi Aminrazavi, "Avicenna (Ibn Sīnā)," (McGreal, pp. 449–462), p. 459.

きるしそうされるべきである。」<sup>103</sup>と主張した。アベロエス(1126～1198年)は「哲学はイスラム法为天啓と矛盾しない。」<sup>104</sup>と主張する。

反哲学的傾向を示した最初の思想家はアル・ガザリー(1058～1111年)であり、「理性的哲学は確実性を實現できない」<sup>105</sup>と主張している。シュラワルエディー(1155～1191年)は神秘主義と哲学は両立できないと主張した。アミンラザビによると「シュラワルエディーは哲学と神秘主義の二学派が両立不可能であると思われていた時代に生きた」<sup>106</sup>ということである。ムラ・サドラ(1571～1641年)はシーア派で哲学を熱心に研究した。しかしながら、アミンラザビによると「彼の熱心な哲学の研究のせいで強い政治権力を握り、哲学を異教活動だと見なしていた正統派の法学者の中に脅威を覚える者がでてきた。研究し教えることによって真剣に哲学を追及することに対する正統派の敵対的態度のため、ムラ・サドラはイスファハンを追われることとなった。」<sup>107</sup> シャー・ワリー・アラ(1703～1762年)がインドで活動するようになる頃までには、細分化が進んでいた。レザ・マスルによると：

シャー・ワリーは『叡智』の時代として知られるイスラムの伝統が発展した時代に生きたが、この時代には哲学の伝統的宗教科学と神学と神秘論の統合がすでに達成されていた。しかし前近代にはこの古典的統合は種々の派閥的、政治的社会的圧力の下、分解の兆しを見せていた。<sup>108</sup>

19世紀に入って、イスラム思想は西洋文明から強い圧力を受けるようになる。ムハンマド・イクバルはインド(今のパキスタン)で生まれた。マスルによると：

ムハンマド・イクバル卿は1873年にインドのパンジャブ州シアルコットで生まれた。卿は1857年のインド大反乱の直後に生まれ、英国の植民地主義が台頭する前イスラム教の支配力が衰えつつあるときに育った。その一生を通じて、イクバ

<sup>103</sup> Michael A. Sells, “Shahrastānī,” (McGreal, pp. 461–464.), p. 461.

<sup>104</sup> Charles E. Butterworth, “Averroes (Ibn Rushd),” (McGreal, pp. 465–467), p. 465.

<sup>105</sup> Mehdi Aminrazavi, “Al-Ghazālī” (McGreal, pp. 457–460), p. 457.

<sup>106</sup> Mehdi Aminrazavi, “Shurawardī” (McGreal, pp. 469–474), p. 469.

<sup>107</sup> Mehdi Aminrazavi, “Mullā Sadrā” (McGreal, pp. 484–488), p. 484.

<sup>108</sup> Seyyed Vali Reza Masr, “Shāh Walī Allāh,” (McGreal, pp. 489–492), p. 489.

ルはその母国でのイスラム閉塞の宗教的、社会的、政治的影響について取り組んだ。卿の豊富な文学的、哲学的集大成はこの時期には独特のものであった。それはこの発展を理解することとイスラムを現世秩序においてあるべき場所に復興する道を示すことの両方に向けられた最も真剣な努力であった。<sup>109</sup>

最後の記録はイランのサイッド・ムハンマド・タバータバーイーである。彼は同書に記録されたイスラム思想化の中で唯一現実主義者と規定される思想家である。マスルはこれは西洋の影響であると主張する。

タバータバーイーがクムに定住する頃までには、イスラムの偏狭化と国家的文化と個人の帰属意識を定義し、イランにおける知的講話を形成する際の役割がさらに縮小していることを深刻に懸念するようになっていた。

タバータバーイーは西洋文明で最も重要な要素（教育の高いイスラム人を魅了している理由）はそれが現実主義に根付いていて現実的手段に依存しているからだと結論付けた。<sup>110</sup>

イスラム教の神秘主義派であるスフィ思想家も四名記録されている。ラビア・アル・アダウィヤ(717～801年)、クアシャイリ(986～1074年)、イブン・アラビー(1165～1240年)とシャイク・アフマッド・シュルヒンディー(1564～1624年)である。セルズによると、スフィ主義には三つの発展段階があった。

イブン・アラビの概念はスフィ思想の第三段階を代表し頂点となるのである。第一段階では、ラビ・ア・ジュナイドやピスタミなどの思想家がスフィの神秘的経験の概念を人間の自意識(*nafs*)が去りその経験を中心としたスフィ的生活として神秘的経験の概念を明言した。またスフィの神との一体化の確約を人間の意識を最愛なる一神に他の事を完全に忘れ去るところまで没頭することとして明言した。スラミ・サラジュ、マッキ、クスハイリとアル・グハザーリーによって代表される第二段階で

<sup>109</sup> Seyyed Vali Reza Masr, "Muhammad Iqbal," (McGreal, pp. 493-497), p. 493.

<sup>110</sup> Seyyed Vali Reza Masr, "Sayyid Muhammad Husain Tabātabā'ī," (McGreal, pp. 498-502), p. 499.

は、スフィの神秘的一体化の経験とスフィ的生き方はより明確にイスラムの儀式と神学に統合されている。

イブン・アラビによって、神秘的合体は神との一体化の確約とスフィの生き方の中心的瞬間となっただけでなく、神秘的言語内での中心的事象にもなった。これは究極の現実に関する全ての言語を根本的に変えてしまい、主観と客観、人と神、事前と事後、自己と他者の通常の二重性を再設定し、時には打砕してしまう事象である。<sup>111</sup>

インド出身のシュルヒンディーはスフィの主要概念を再形成しようとした。彼はイスラム暦の971年から1034年の間生きたので、『第二千年紀の更新者』<sup>112</sup>と呼ばれている。

上記の観察によると、現実主義の思想家はほとんどいない。これは、物理学が物質の富をもたらし、観念的要素を圧倒してしまった西洋文明の独特な時代を示唆しているのかもしれない。日本は明治維新を経て西洋同化政策を採ったため、その後の思想体系は西洋に合流している。イスラムはまだ神の時代から英雄の時代への移行期であり、インド文明は途中からイスラムと西洋の影響下に入ったため、まだ周期を貫徹していないので、最終結果はまだ出ていないといえる。

中国はソ連と共に共産主義下で宗教を排斥した。しかし、スミスは古代中国の周期に関して、古代の神の時代から一周して、野蛮時代に戻った戦国時代には個人主義が台頭したと述べている。<sup>113</sup>

社会をまとめていた古い錠は欠けて弱まってきた。『習慣の塊』から脱出する際、個人はこの塊を修復不可能なところまで破壊してしまった。破裂は一夜にして起こったわけではない。歴史は、少なくとも文化的変化は一瞬にして始まったり終わったりするものではない。最初の個人主義者はおそらく野蛮な突然変異者であっただろう。奇異な質問をする一匹狼の変わり者だったであろう。そして集団意識を持つことに抵抗しただろう。それは移り気でそうしたのではなく集団と完全に一体と感ずることが単にできなかったという理由だろう。しかし個人主義と

<sup>111</sup> Michael A. Sells, "Ibn 'Arabī," (McGreal, pp. 475–479), p. 475.

<sup>112</sup> Marcia K. Hermansen, "Shrīhī," (McGreal, pp. 480–483), p. 480.

<sup>113</sup> Huston Smith, *The World's Religions: Our Great Wisdom Traditions*, New York: HarperCollins Publications, 1991, (Chapter VI Confucianism), pp. 163–167.

自意識は伝染する。一旦登場すると、伝染病や山火事のように広まる。盲目的団結は過去のものとなる。．．．<sup>114</sup>

しかし戦国時代に勢いを振るったという現実主義の思想家の中で記録されているのは韓非子しかいない。これは現実主義が自然状態を扱うものであるのが原因かもしれない。自然状態に逆らわない限り、理論化の必要は生まれない。例えば、水を上から下に運ぶ際にはほとんど工学を必要としない。しかし、水を重力に反して上方に運ぶなど自然状態に逆らって進む場合は理論化と工学が必要となる。紀元3000年にこのような偉大な思想家の本が編纂されれば、19世紀から21世紀にかけての西洋は何の記録もない可能性もある。しかし最終的に結論を下すためにはより詳細な研究が必要である。これらの観測に基づいて、ここで汎理想主義のパラダイムを提示する。

**汎理想主義：**汎理想主義は以下の仮定をする。

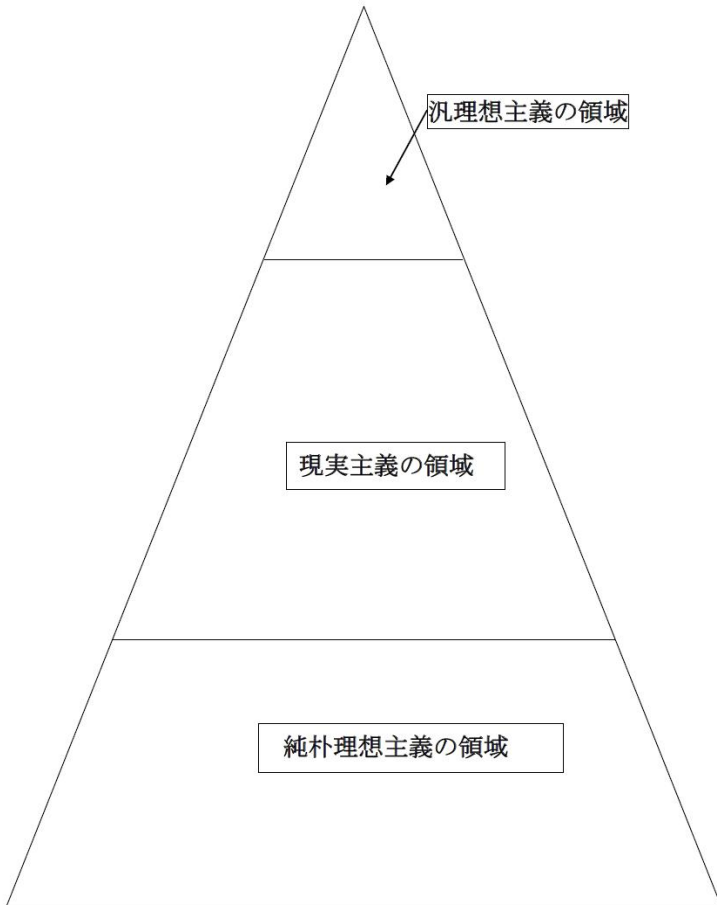
- (1) どの社会の歴史上のどの時点においても、理想主義に賛同する者と現実主義に賛同するものが混在する。
- (2) 現実主義者は自身を強者と認識し生存競争において生き残る自信のある者である可能性が高い。したがって、個人的目的達成の為妥協をする必要は無いと感じている。
- (3) 理想主義者は個人の必要や欲望を捨て社会全体に貢献し、それによって社会が市民の安全を提供できるようにすべきであると考える。
- (4) 社会には二種類の理想主義者が存在する。第一は無条件の汎理想主義者である。彼らは他の市民が何をするかに拘らずその理想主義の使命を遂行する。第二は純朴理想主義者である。彼らは他の市民も理想主義を遂行する場合に限って、またはそうすることの犠牲が極めて低い場合に限ってのみ理想主義を遂行する。犠牲が彼らにとってあまりに大きすぎる場合は、彼らは理想主義を放棄する。
- (5) 典型的社会では、最も多数なのは純朴理想主義者である。次に現実主義者が続き、最も少数なのは汎理想主義者である。

これらの仮定は図3-2に提示される。

---

<sup>114</sup> 同、163頁。

図3-2  
汎理想主義のピラミッド



しかしながら、ピコーの周期が動機の構造を変える。周期のある時点では、貢献による犠牲が低いので、純朴理想主義者のより多くが理想主義の領域に留まる。別の時点では、貢献による犠牲が大半の市民にとって高すぎるので、彼らは理想主義を放棄し、現実主義者の領域に参加する。その結果、人数は上下する。

- (1) 神の時代： これは理想主義が最も強力な時代である。この段階は自然状態の弱肉強食がはびこる野蛮時代から生まれる。人々は自分自身で常に身を守らなければならない状態に疲れきっている。それでもし社会がこの弱肉強食の状態から脱却できるのであれば、個人的犠牲を払う用意があるのである。純朴理想主義者の中から、より強いものが汎理想主義の領域に向かって出発するが、到達するためには現実主義者の領域を通り抜けなければならない。その途中で多くが肉体的にまたは精神的に退廃してしまうが、生き残って汎理想主義の領域にたどり着くものもある。そうになると、純朴理想主義者と汎理想主義者の間で同盟が成立し、中間層である現実主義者の領域を制御する。しかし中間層が完全に消滅することはない。この理想社会では、汎理想主義者が政治的権力を掌握する。その権力を悪用することなく、彼らは利他的な『善』を奨励し、自己中心的な『悪』行動を罰する。これにより『正しいこと』をするための犠牲が減少し大部分の市民は理想主義者の領域に滞在する。これがさらに中間層を縮小させ、汎理想主義候補者の通過を容易にする。これが理想主義をさらに補強することとなる。
- (2) 英雄の時代： 現実主義者が理想主義者の指導者層に権力が集中しているのを見るにつけ、効率的に支配を確立する方法をその中に見出すようになる。通常は支配を確立するには威圧行為が必要であるが、人民に彼らが汎理想主義者であると信じ込ませることができれば、人々は支配者を信用し服従する。また、人民を自分たちの間の権力闘争に巻き込むことができる。その競争相手の邪悪さを暴露するだけで、人々をして競争相手を攻撃させることができるのである。言い換えれば、善の構築に焦点を当てる代わりに人々は悪の破壊に焦点を当てるようになり、悪同士の戦いの代理戦争を行なうことになるのである。現実主義者にとってこれは費用のかからない軍隊である。そこで現実主義者は汎理想主義者であるふりをして理想主義を侵食し始める。これを本プロジェクトでは古い用語を借りて『偽偶像』と呼ぶが、これは科学の時代に合うように改める必要があるだろう。一旦彼らが権力の座に着けば、その個人的必要と欲望に人々が誠感を

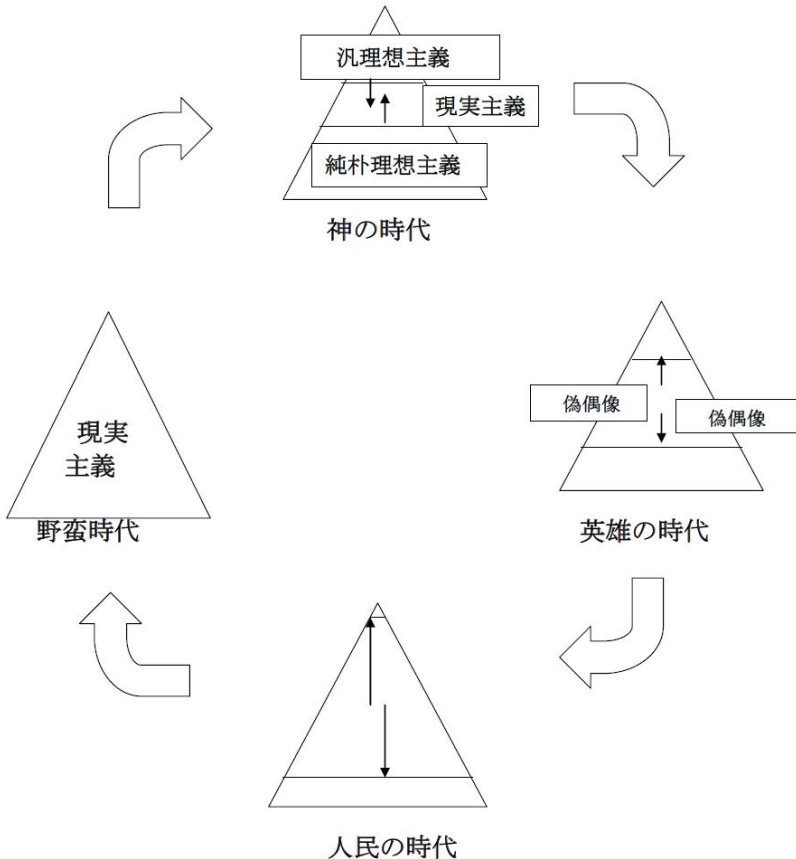
尽くすことを要求するようになるが、これは通常社会全体にとっては害となるものである。ここでは全体の福祉に忠誠を尽くす者は処罰される。時が経つにつれて、純朴理想主義者は何が起きているかに気づき始め、幻滅し、理想主義者の領域を離れて現実主義者に合流することになる。二つの機能がここで作用する。ひとつは恐怖である。不正に対して抵抗するために払う犠牲が専制君主の下ではあまりに高くなり、自己防衛の為に理想主義者の領域を離れることになる。もうひとつは欲望である。人民が他の人民が専制君主を支持することによって得られる報酬を見るにつけ、理想主義の領域に留まるにはあまりにも魅力的になってしまうのである。より多くの人民が現実主義の領域に合流するにつれ、汎理想主義者が現実主義者の領域を通過して目的地に着くことが難しくなりすぎる。より多くの汎理想主義者がその途中で肉体的または精神的に退廃してしまうのである。その結果、中間の現実主義者層が増大し、それがさらにその増大を呼ぶという循環ができあがる。

- (3) 平民の時代: この時点で大部分の人民は現実主義者層に滞在する。強力になりすぎた者は更なる権力の集中を防ぐために作られた他者による一時的な同盟によって対抗されるという現実主義の機能を通して、中央集権は徐々に分散化する。人民は専制君主に対処する必要は無くなるが、より小規模な脅威に対して個人の生存のため個々の闘争を繰り広げ、最後には万人の万人に対する戦闘状態となる。また、時にはこの過程で一時的に権力集中が起こることがある。というのは人民はこの時点で悲壮になり、利用できる者には何でもしがみつこうとする。そこで現実主義者の『偽偶像』が現れ、個々の社会の部分に対して非現実的なまた矛盾することを言い、彼らの気を休めるのである。必死の状態、人々はこの偽偶像を信用し、弱者と悪の同盟が結ばれる。一旦現実主義者が権力の座に着けば、人民を虐待し始め、わずかに残った保護機能をも取り去ってしまう。これが起こると、社会は一時的に独裁制を経験することになるが、権謀術数と威圧に頼る権力の集中は長続きせず崩壊することになる。

- (4) 理想主義者の領域が完全に消滅したとき、社会は野蛮状態に戻る。

この過程において、国際・国内を問わず政治とは誰がどの程度の負のエントロピーを寄与すべきか、あるいは誰がどの程度のエントロピーを吸収すべきかを決定する過程と定義される。この周期は図3-3に示される。

図3-3  
理想主義—現実主義の周期



汎理想主義の目的はこの変動を防止し、現実主義層が適度に抑制された安定した均衡を達成する方法を見出すことである。次の段階に移る前に、そのような事業が果たして可能かどうかを検証する必要がある。本章の最後の部分はこの問題を扱う。その際、先に触れたシュロジンジャーの負のエントロピーの概念に再び戻り、その二番目の効能について検証する。

## 負のエントロピーの効能 2—物理的法則の違反

有機物と無機物は同じ原子から成り立っているが、有機物は負のエントロピーを輸入する機能を持つことによって物理的法則に部分的に違反することができる。その結果、有機物はニュートンの物理学の決定論的な物理的法則からある程度の自由を得た。<sup>115</sup> 例えば、地上においては、有機物は運動を開始・停止することができ、また自由に方向を変えることができるものがあるが、これはニュートンの慣性の法則に違反している。有機物はまた体内に何を輸入し、何を拒絶するか、すなわち何を食べるかを自由に選択することができるものがある。

これは理解されている物理的法則だけでは規制できない分野があることを意味している。この物理的法則から独立した部分を規制する法則があるのだろうか？ それともその分野は完全な混沌状態なのだろうか？ もしそのような法則があるとすれば、誰がそれを決めるのか？ ここで通常行なわれている自由意志の論議が関係してくる。ニコルズは自由意志の問題を以下のように定義する。

我々が難しい決断を下そうとするとき、通常我々の前に正真正銘の選択肢があるように見える。我々が決断を下した後、他の選択肢があったようにも見える。しかしながら、我々が世界に関してより一般的に考えたとき、物事は事前の要素のせいで見こったように見える。我々は、全ての出来事に対して説明が付かなければならないと考えがちである。そしてこれはおそらく全ての我々の決断に当てはまるだろう。自由意志に対する脅威は我々の選択肢が必要から出てくるという考えである。すなわ

<sup>115</sup> ここで、現代物理学は物理は決定的であることはできず、確率的であるだけだと示唆している。ニュートンの物理学を究極まで拡大した時、その精度が失われ始める。（特別相対性理論は速度が光速に極めて近くなってきた時の問題に対処し、量子物理学は質量が極めて小さい場合の問題に対処する為のものである。）形而上工学はそのような極端な場合に対処しなければならないほど進歩しておらず、ニュートンの物理学に相当するであろう枠組み内でできることがまだ相当あるので、この時点では物理的法則は決定的であると考えることにする。

ち、それらは不可避なのだということである。これらの考慮は自由意志と決定論の問題の中心となる。<sup>116</sup>

個人の行動と出来事に焦点を当てるこの自由意志の問題に対する通常のアプローチは本書の探求にはあまり役に立たない。したがって汎理想主義はこの問題を以下のように再定義する。

- (1) ピコーの周期は確定しているのか、それとも人類が制御したり影響を及ぼすことができるものなのか？ 言い換えれば、人類はピコーの周期に対して自由意志を行使することができるのか？
- (2) もしその答えが否定的であるなら、それは人類が理想主義的戦略が可能なところまで進化が進んでいないのが理由なのか？ 言い換えれば、最深の知能的・感情的能力を司る我々の辺縁系はいまだに個人的生存の本能を克服するところまで発達してないのか？

第二の問題はSFの世界で取り扱われている。そこで見つけれられたところでは人類発展の方向に関しては二つの可能性が提示されている。ひとつは『2001年宇宙の旅』<sup>117</sup>のスターチャイルドである。ここでは人類は自己の意識を肉体から完全に独立させることにより物理の法則から完全に解放される。第二はスタニスラウ・レムによって描かれたそれ自身が巨大な頭脳である『惑星ソラリス』である。<sup>118</sup> この筋書きによると、数十億年前に単細胞が集まって多細胞生物を作り上げたように、人類あるいはそれに続く有機体も何十億年か後に集まってより複雑な有機体を作り上げることになる。実際、我々の宇宙にほとんど何も生命体が存在しないことから考えて、また全ての物が100万、1000万という単位で扱われなければならない宇宙において我々の寿命が100年以下ということから考えて、我々は進化のかなり初期の有機体であると考えerほうが妥当であろう。寿命100年というのは宇宙では生成されたとたんに分解されてしまう物体と同じと考えられる。現存の生命体はこの宇宙ではいまだに大変不安定な存在であり、何百万年という寿命を持つより安定した生命体に進化する余裕が多分にある。

<sup>116</sup> Shaun Nichols. *Great Philosophical Debates: Free Will and Determinism (Course Guidebook)*, Chantilly, VA.: The Teaching Company, 2008 p. 1.

<sup>117</sup> Arthur C. Clarke. 2001: *A Space Odyssey*. New York: The New American Library, 1968.

<sup>118</sup> Stanislaw Lem, *Solaris*. San Diego: A Harvest Book, 1970.

進化は直線的ではないという兆しもある。ホークスはヒトの頭脳は徐々に増大した後縮小してきていることを観測した。<sup>119</sup>それが意味することはこの時点では明らかではないが、増大する脳はより多くのエネルギーを必要とし、収奪的性質をより強化させるというジレンマを認識する必要がある。そしてこの頭脳拡大の戦略が成功してきたかどうか考えてみる必要がある。恐竜など多くの複雑な有機体は絶滅したが、バクテリアなどの原始生命体はいまだに存在している、というのは生存するのにほとんどエネルギーを必要としないからである。自然はより複雑な生命体はより多くのエネルギーを消費するとしてこの戦略をあきらめて、エネルギー消費の少ない単純な生命体にもどろうとしているのだろうか？

ということは我々はこの進化の過程がどちらに進むのか選択することができるのだろうか？しかしながらこの問題はこの時点ではあまりに大きすぎるので、ここでは第一の問題に焦点を当てることにする。

我々はピコーの周期を制御することができるのだろうか？ピコーとよく似た周期を観測したオズワルド・スペングラーはこの周期は不可避であると結論づけた。

[存在の概念としての魂は可能性の実現、生命自体が全ての線において変更することのできない運命的なものであるという確実性を必然的に伴う。そのような有機的論理は無機質の論理に反対し、アリストテレスやカントといったシステム論者の枠組みを超える。]

『運命』という言葉は表現できない内向きの確実性を表明する。因果関係は法の観念を持つ。人相によって一生・運命を読むことのできる相貌的傾向はどのようなシステムであれ故意の努力無く作用する。原因と結果の法則から完全に切り離されている。それでもある種の運命という内向きの感性が原因と結果の認識の基盤となっている。なりつつある物に対してなった物ということである。因果関係は運命が無機化されたもので理由という形式に模式化されたものということができるだろう。運命という概念は歴史の世界像を司る、というのは運命は主要な現象の真の存在様式であるからだ。<sup>120</sup>

<sup>119</sup> Anthony Martin and John Hawks, *Major Transitions in Evolution, Course Guidebook*, Chantilly, VA.: The Teaching Company, 2010, Lecture 24.

<sup>120</sup> Oswald Spengler, *The Decline of the West (An Abridged Edition)*, New York: Oxford University Press, 1991, p.76.

すなわち、スベングラーによれば、全ての人間が年をとって死ななければならぬのと同じように、文明もその自然の経過を辿って終わらなければならないのである。

一方、ピコーは我々は周期を制御できると主張している。

物理学の中に取り込まれ、それから道徳を通じて家族統治に取り込まれ、それゆえ我々自身の教育に取り込まれたこれらの形而上の法則によって、青年たちを良い政治に導こうではないか。そしてそれに適した彼らの精神で青年たちを遂には法理学に進ませようではないか。それが理由で1725年の『*New Science* (新科学)』の初版の献呈の中で我々はヨーロッパの大学に、法理学を人文と神性の学識の全体的枠組みの中で取り扱うよう提案した。そして、その点で、我々は法理学を全ての他の科学より重要であると見なす。このように訓練されることによって青年たちはこの神の意思が国家世界の為に設立した永遠の法則に基づいた科学を実行することを学ぶであろう。国家はその国民がそれに奉仕し、その精神が支配する限り安全で至福の中に繁栄するのである。そして青年たちは、全てのキリスト教徒の元父であるヘラクレスの真の十字路に立たされるのである。すなわち、彼らが下劣で侮蔑的で彼らと彼らの国にとって奴隷的な快楽の道を選ぶか、または名誉と栄光と幸福を持って美德の道を選ぶかである。<sup>121</sup>

ということはこの問題では結論はまだ出ていないことになる。ここで汎理想主義者の採る立場は我々はやってみなければならぬというものである。決定論を受け入れてしまえば、諦めなければならない。しかしやってみれば、最悪でも我々には自由意志がないということを証明することになる。しかしもしかしたら我々が自由意志を持っていることを証明し、さらに次の人類による大災害を防ぐことに成功するかもしれない。それゆえ、汎理想主義は我々は自由意志を持ち、ピコーの周期を制御できる、したがって、近い将来三重危機に対処し、最終的には恒久平和を達成できると仮定する。それでは、ピコーが解決策を提案してから後どのようにピコーの周期は継続したのであるか？ 汎理想主義はピコーの結論から出発し、この周期を制御する方法を追

<sup>121</sup> Giambattista Vico, trans by Thomas Goddard Bergin and Max Harold Fisch. *The New Science of Giambattista Vico*. Ithaca: Cornell University Press, 1984, p. 430.

求する。その際、形而上工学という分野を設立することが必要となる。次章においてこの分野の基盤を設定する。

## 第四章 形而上学分野の設立

形而上学とはなにか？この問題に答えるために、まず物理学から始めることにしよう。ここ200年ほどの間、医学を含む科学と工学分野で顕著な進歩があり、人類の生存確率を飛躍的に向上させた。我々はもはや自然にやるせなく頼るだけの生命体ではなく、多くの自然の驚異から身を守ることができる。であるから物理学から学んで、ピコ一の周期を制御する為形而上の分野で同等のシステムを設立することができるかもしれない。その際、本章では物理学と形而上学の関係を定義することから始める。それから、物理学と形而上学の間には並行関係が存在するという仮定に基づいて、物理学分野を形而上学の模範として検証する。そして最後に二分野の間に調整を必要とする違いがあるかどうかについて考察する。

### 物理学と形而上学の相互関係

検証を始める前に、本書ではスタロフ等によるものを使って物理学を「『自然の理論』であり、時間と空間による物質界の研究」と定義し、形而上学を「『自然を超えた』空間と時間から独立したもの（純粋な概念や精神的要素）の研究」と定義する。<sup>1</sup> また、本書の定義から形而上学を負のエントロピーを移入する物体を支配する法則とも理解する。本書は物理学と形而上学の間に関係の図4-1で示される相互関係のはしごがあると仮定する。

以下の論議は物理学の最も身近な部分から始まり、それから相互関係のはしごを辿る。

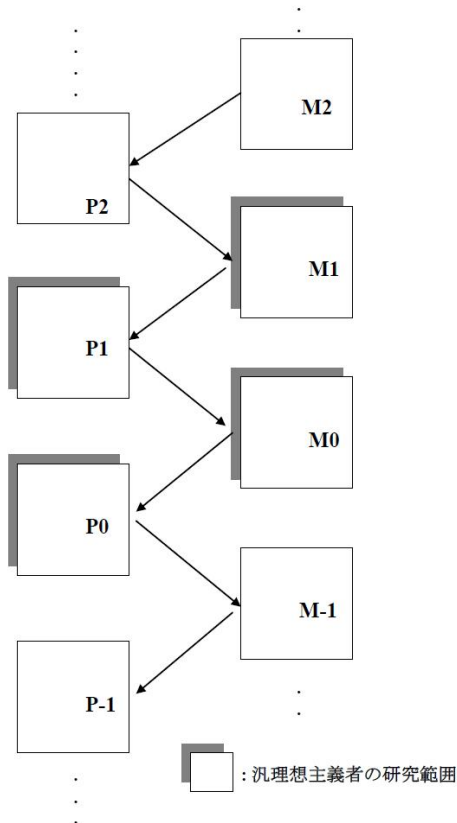
(1) 物理学レベル0:ここで与えられる物理学の定義は人間による物理学の範囲内で、人間の生活を向上させるためになされる自然環境の操作である。本書では、このレベルをP0 (physical engineering level 0)と呼ぶことにする。このレベルでの物理学の関心は人類の目前の生存である。このレベルの工学は人類の歴史の極初期から始まっている。井戸から滑車を使って水を汲み上げたりがその例である。灌漑技術によって人間が砂漠地帯に住むことも可能になった。歴史を通じて、人類は物理の法則を使って船や教会を建設したり、印刷を行っ

---

<sup>1</sup> Darren M. Staloff, Michael Sugrue, Robert Oden, Elizabeth McNamer, and Denis G. Dalton, *Great Minds of the Western Intellectual Tradition, Part I Ancient Philosophy and Faith: From Athens to Jerusalem (Course Guide)*, Springfield, VA.: The Teaching Company, 1998, p.8

たり、弓矢や鉄砲・大砲という武器を開発したりしてきた。この分野は過去200年ほどの間に顕著に進歩した。輸送技術によって人が遠隔地に住むことが可能になった。空調技術によって人が極寒地や極暑地に住むことが可能になった。冷蔵技術によって人が飢餓を免れるため食物を保存することが可能になった。これらは物理工学が達成したいいくつかの例である。そして大半の達成はニュートンの決定論的法則の枠に収まっている。しかしながら20世紀には人類はニュートンの法則を超えて量子物理学の分野に進出し始め、GPS装置や携帯電話といったものを発明した。

図4-1  
物理—形而上のはしご



(2) 形而上工学レベル0: ここで与えられている形而上工学の定義は形而上学の法則に基づいて人間の生活を向上させるためになされる人間環境の操作である。本書においては、このレベルはM0 (metaphysical engineering level 0)と呼ぶことにする。このレベルの関心は人類の5千年以上の生存性についてである。このレベルは物理学の範囲外であるピコーの周期制御の試みにとって最も重要である。すなわち、物理の法則では人類がこの周期をどのように制御するかまたそれをどのように扱うかについては何も理解できない。判断が下されなければならない。現実主義者は技術を使って個人の生存性を高めようとするため、兵器の発明に繋がる。理想主義者は全ての市民が恩恵を受ける健全なシステムの設立を強調する。技術はこの範囲内で使用されなければならないので、個人の目の前の生存を超えた長期の人類の福祉にとって有害となる物質の製造は控えるべきだと訴えるのは明らかである。このレベルが何がP0レベルで製造されるかに決定的影響を与える。人類は成功した時には、上記のように我々の生存性を高める物質を製造してきた。しかし同時に、我々は人類の生存性にとって多大な脅威となる大量殺戮兵器なども製造し、また自動車のように我々の生活を便利にする反面深刻な汚染問題を引き起こす物も製造した。M0レベルはプラトンとアリストテレスの時代からほとんど何の進化も遂げていない、またここ200年の間確実に退化した。その理由はこの分野の検証が宗教と哲学の分野で、しばしば道徳や倫理学の形で行なわれていたからである。私はカントが言及していたのは物理学の一般法則に該当する形而上学の一般法則であったのだと信じている。全ての物体が物理の法則に従わなければならないように、全ての形而上物は、ある程度物理の法則から解放されているとはいえ、形而上の法則には従わなければならない。もしカントのコペルニクス的回転が実行に移されるなら、物理の法則と形而上の法則の間、あるいは客観と主観の間に存在する関係を理解することができるようになるかもしれない。カントのいう普遍的な主観法則と客観法則の間には関連があるはずである。しかしながら、この追求は主観を全ての負のエントロピー移入物体に適用される一般法則としてではなく、個別の有機体に適用した以後の学者によって中断された。

(3) 物理工学レベル1: 上記によって人の意思(M0)が物理工学が何を創造するか決定することが明らかになった。しかしこれらの意思がどこから来るかに焦点を当てた時、問題はまた物理レベルに戻る。亜原子レベルで考察を行なうと、全ての物理的存在は陽子、中性子と電子から構成されている。それではどうしてある組み合わせが意思を

創造し、他の構成は創造しないのであろうか？ 20世紀の半ば、量子物理学がこの問題に直面したのは無理も無いことである。哲学者の中にはこの問題に取り組んで意識がどこから来るかという問題を取り上げた者もある。しかしながら、全く進展は遂げられなかった。それは形而上学の分野がどれほど遅れているかを考えると無理もないことである。プラトンの物理学で量子物理学を取り扱うことは不可能である。物理学がそのレベルに到達するまでには何千年もかかった。形而上学がプラトンの時代からほとんど進歩を遂げていないことを考えると、この問題に今取り組もうとするのは無理なことが分かる。現在の物理学のレベルに到達するためにはM0レベルの形而上学がそこまで追いつかなければならない。一旦到達すれば、意識源といった問題に取り組むことができるようになるだろう。

このレベルの工学は我々が100万年あるいはそれ以上の生存性についての問題を取り扱う際に有用となってくるだろう。一旦人類が垂原子のどの組み合わせがどのような意識を生成するかという問題を解決すれば、人類は『望ましい』人間意識を生成することができるようになるだろう。また、物理的にはその期間内で、地球の天候の変化や流星の地球衝突などといった問題にも取り組む必要が出てくる。

(4) 形而上工学レベル1: この分野は宇宙が意図的に作られたかどうかというような問題を提起した時に関連してくる。これは宗教が取り扱っている問題である。神が宇宙の創造者であり維持者である。ネアンデルタール人が現代社会を想像するのがほとんど不可能であるように、我々が今いるところからはこの分野がどのようなものか想像するのは難しい。『望ましい』人間意識とは何かを決定するのがこのレベルであるが、その際P0レベルとM0レベルの関係がより明らかになるだろう。言い換えれば、『神の目には』これらの二つの法則は互いに独立して存在するものではなく、親密に関連しているのである。したがって、このレベルでは精神が肉体から独立して存在できるかどうかといったような問題が出てくることになるだろう。ということはこのレベルで、我々は遂に精神と肉体の二重性の問題に取り組むことができるようになるのかもしれない。我々にとっては、これは宇宙が続く限り人類の生存が可能になるということであろう。

ここで自由意志の問題に帰って、もし人間に自由意志があるのなら、M0レベルがピコーの周期を制御するのに十分ということになる。もし自由意志がないのなら、全てがM1レベルで決定されなければならないことになる。そうなれば、M1レベルでの探求が汎理想主義者にとって必要となる。進化の過程を観察すると、我々の将来をどうする

か考えている意思はかなりの手間をかけていることが分かる。これが全て生存の為だけであるなら、バクテリアなどの初期の生命体はいまだに機嫌よく地球上に生存している。ということは進化の必要は無いことになる。生命体は大変不安定である。宇宙の時間では、我々は形成されるとほぼ同時に崩壊していることになる。地球以外では意思のある存在なしでも宇宙は何の問題も無いようである。もしそうだとすると、われわれが神として認識しているM1の意思が意思のある存在を宇宙の一部にしようと努力していると考えるのは間違っているのだろうか？

最も効率的な社会を達成するためには、物理学と形而上学の分野が並行して発展しなければならない。しかし、現代社会では、P0レベルにおいて顕著な発展があった反面M0レベルは後退した。これが人類の生存にとって深刻な問題となった。人類は歴史上前例のない方法でお互いを傷つけあう能力を得た反面、そのような能力を制御することができなくなった。我々の生存確率を高めるために使われるべき技術革新が、大量殺戮兵器や汚染といった形で我々に害を及ぼしているのを我々は目撃した。これらの問題は自然が起こしているのではなく、人間が起こしているのである。これは形而上工学分野で深刻な問題があることを提示している。というのは一旦物理学によって使用可能になった自然界の資源をどう使うかを決定するのがこの分野であるからだ。

この時点での物理工学P1レベルへの更なる発展は人類にとって有害であろう。例えば、この時点で意識がどこから来るかという問題が解決されることになるとパンドラの箱を開けることになる。人間の意識を生成したり操作したりすることができるようにでもなると、誰がどの種の意識が生成されるべきかまた誰によって意識が操作されるべきかという問題が出てくる。もしアドルフ・ヒトラーやサダム・フセインといった邪悪な人物がその技術を手に入れたらどうなるか？形而上学が追いついてこの問題に対処できるようになるまでは人類はこの技術を持たない方が安全である。100万年単位での人類の生存に関する問題もある。しかしこれらに対処する時間は十分にある。今現在我々はM0レベルで起こる問題によって絶滅する可能性の方がずっと高いのである。したがって、この問題は先送りにして、形而上学の進展に焦点を当て、5千年単位での生存を確実にすることが先決であろう。

物理工学・形而上工学P0-M0の一对は形而上の世界地図を提供し、P1-M1の一对は形而上の宇宙の地図を提供するということになる

うか。しかしながら、これら二対の外側にもさらにP-Mの層が続くと予測される。これは将来人類がより長期にわたる生存の探求を行なう必要が出てきたときに関係してくるので、ここで認識しておく必要がある。

汎理想主義は物理と形而上の因果関係には無限のはしごがあると仮定する。この仮説を証明する基盤はないが、過去の世代が経験したことに基づくと、我々が何か特別なものに属するというよりは何か普通のものに属すると考えるほうが安全である。地球はかつて宇宙の中心であると考えられていたが、実は宇宙のどこにでもある銀河の端にある小さな惑星であった。だから我々が無限の物理と形而上のはしごの極普通の一部であると考えるのは全く法外だとも言えないだろう。はしごのレベルはP2, M2, P3, M3という具合に上がって行き、この方向で無限大に達し、反対方向にP-1, M-1, P-2, M-2という具合に無限大に達する。これは図4-1に図示されている。

これによって、汎理想主義は絶対的知識は存在するが、人類にとっては達成不可能なものであると主張する。しかしながら、ここでの安定した社会と知的制度を達成するという限られた目的の為には、P0, M0, P1, M1内の知識で十分である。したがって、これらを汎理想主義者の領域と呼ぶ。これも図4-1に図示されている。

この観察に基づいて、汎理想主義は認識論と存在論に関する更なる仮定を設ける。これは物理と形而上の隣接した現象には認識論と存在論の間には緊密な関係があるというもので、すなわち、我々は隣接した現象内では極めて正確に真実を認識できるというものである。この仮定の理由は同じ環境内で同じ物質から作られた物同志は完全に違っているというよりは親密に関係していると考えの方が理に適っているからである。外部環境を全く異なって認識する物は進化の過程で排除されてしまうだろう。これは認識論と存在論の問題が我々にとって無関係であるというのではない。M1現象からの違いがどのように小さな物であっても、我々の生活に影響を与えるなら、調整することは必要である。しかしながら、技術論のためだけにそこから始まって、議論にがんじがらめにされるようなことは避けなければならない。議論は常にその違いが我々にどのように影響するかを焦点に行われなければならない。将来、P1とM78といったより離れたP現象とM現象間にまたがる工学が必要となるような時には、より大規模な調整が必要となるだろう。P現象の間だけでも、中には人間の脳が理解できない四次元の物質が関連してくることもあるだろう。であるからこれを理解できるようにするある種の調整が必要となるだろう。研究者たちは

すでに一元宇宙ではなく多元宇宙に関して話し始めている。<sup>2</sup> したがって、これは現実的に必要となるかもしれない。しかし我々が初期の目的を達するまでは、このような調整を必要とする分野には拡張しないこととする。物理工学者たちはすでにこれを行なっている。ニュートンの物理学は大半の工学プロジェクトにとっては十分であるが、物体がきわめて小さくなり、原子のレベルになったとき、また光速に近い速度で動いているときには誤差が大きくなりすぎる。これらのプロジェクトには量子物理学や特別相対性理論が使用される。しかしニュートンの物理学で十分なプロジェクトにはこれらの理論物理学を導入して物事を必要以上に複雑にする必要はない。

これらは全て便宜上の仮定である。これらは我々がこの分野を設立するにあたって確実な地盤が何もないという印象を与えるかもしれないが、有用な仮定である。第一に、これによってとにかく事業を開始することができる。第二に、これらの仮定は全体像を常に認識することによって細かい技術的な点に必要以上に縛られるのを防ぐ。特に、物理学の進歩のせいで、その検証において実験と反証可能性を要求する実証哲学主義が支配的となった現代、上記の一連の仮定はそのような思想体系に完全に埋没してしまわないよう警告する。つまるところ我々が知覚できる物は極わずかなのである。知覚できない物全てを無視するというのは大変危険なことである。我々は今のところ何もできないかもしれないが、我々が知覚できない物があるということを手軽にも認識することが必要である。また、これらの仮定はカスなどに代表される考え方に対抗するのに有用である。シルバーはカスの主張を以下のように要約している。「レオン・カスは人間の精神より高尚で偉大なものは存在しえないと信じている。彼は『精神の向上の物語はすでに完成しているのかもしれない』と言っている。」<sup>3</sup> 我々のアプローチによると完全知識に対しては人間の精神は、人間の精神に対する単細胞生命体の知能のようなのだと感じられる。ソクラテスが言うように、我々の無知を自覚することは重要である。我々に成長する余裕が出てくるからだ。第三に、これらの仮定は独善的ではないので無害であり、自由に調整ができるものである。したがって、差異が出てきた場合、調整される。

---

<sup>2</sup> Mark Shittle, *The History and Nature of Our Universe (Course Guidebook)*, Chantilly, Va.: The Teaching Company.

<sup>3</sup> Lee M. Silver, *The Science of Self, Course Guidebook*, Chantilly: Va., The Teaching Company, 2009, p. 74.

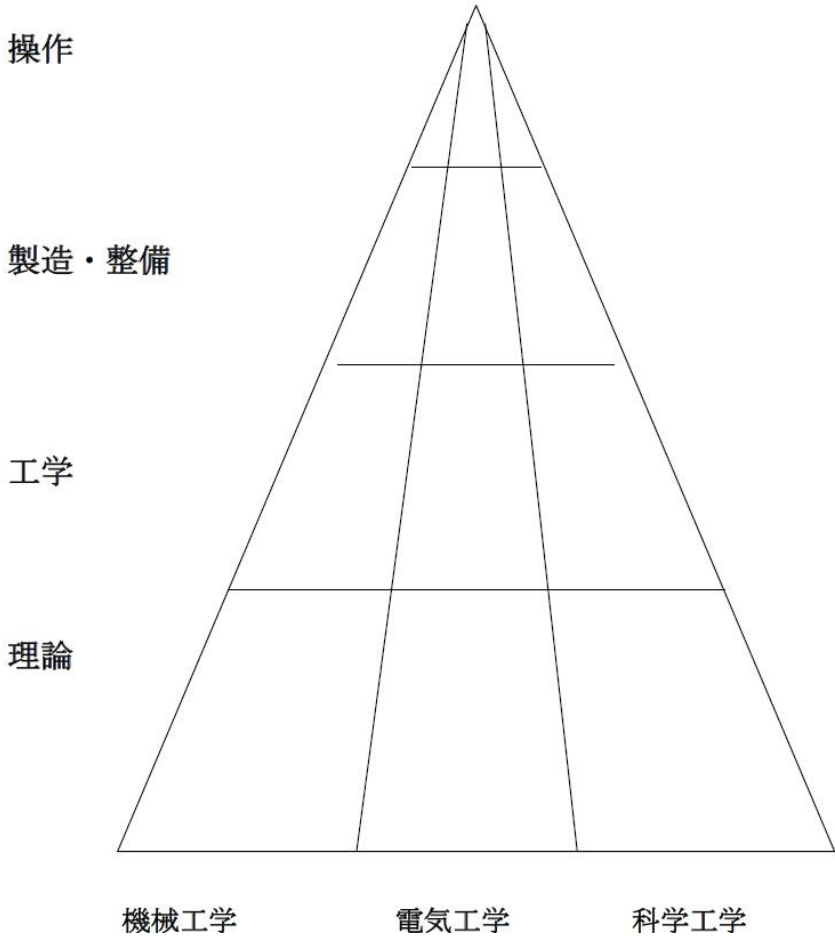
形而上工学はこれらの仮定に基づくが、さらに物理工学と形而上工学の間には完全な同等性が存在するというもうひとつの仮定から出発する。これも証明されているわけではないが、どこからか始めなければならぬので、ここから出発し、決定的な違いが表面化した場合、調整を行なうこととする。これらの理由により以下に物理工学の分野検証を行なう。

### 物理工学の分野検証

物理工学の世界は大まかに三つの副部門からなるピラミッドによって構成されている。それらは機械工学、電気工学、化学工学である。またそのピラミッドは四層からなる。下から順に、理論、工学、製造・整備と操作である。これは図4-2に示されている。

飛行機や建築物、橋、自動車など我々の見るエンジニアリングはこれらの部分が統合されることによって可能となる。ここではこの点を示すため、飛行機の設計と製造を例に取る。ここでの説明は単純化され、不均等なものであるが、全ての副部門と層が完全なピラミッドとして統合されることなしには完成品は得られないことを示すには十分であると希望する。

図4-2  
物理工学のピラミッド



**並列的統合:** 現代的飛行機を設計して製造する為には全ての副部門が完全に統合されなければならない。ひとつの副部門だけで飛行機を製

造することは不可能である。ここでは物理工学の三主要副部門の並列的統合を提示する。

現代の商業用飛行機はいくつかの優先的な重要要素からなっている。第一は飛行である。飛行機は空中に上らなければならない。第二は安定性と制御である。一旦空中に上がると、飛行機は安定して空中にとどまらなければならない。第三は航行と通信である。パイロットは現在地を知って、目的地まで航行しなければならない。地上員との通信も必要である。最後に商用飛行機は乗客にとって乗り心地がよいものでなければならない。これらは図4-3に示されている。

図4-3  
飛行機—設計/製造水平統合

- |              |         |
|--------------|---------|
| 1. 飛行        |         |
| • 翼設計        | 機械工学    |
| • エンジン       | 機械工学    |
| • 素材         | 化学工学    |
| 2. 安定と操縦     |         |
| • 機体設計       | 機械・化学工学 |
| • 尾翼         | 機械工学    |
| • ケーブルと滑車    | 機械工学    |
| • フライーバイーワイヤ | 電気工学    |
| • 水理学        | 機械工学    |
| • 素材         | 化学工学    |
| 3. 航行と通信     |         |
| • レーダー       | 電気工学    |
| • コンピューター    | 電気工学    |
| • 通信機器       | 電気工学    |
| • GPS        | 量子力学    |
| 4. 旅客の便宜     |         |
| • 客室気圧調整     | 機械工学    |
| • 空調         | 機械・電気工学 |
| • 照明         | 電気工学    |
| • 娯楽         | 電気工学    |

個々の要素は関連する副部門の点から以下に言及される。

(1) 飛行: 飛行の最も基本的な部分は翼の設計である。重航空機飛行を可能にするのは適切な揚抗力比である。揚力は重力と反対方向に作用する重量と同等かそれ以上の力と定義される。<sup>4</sup> 抗力は気流に対する抵抗と定義される。<sup>5</sup> すなわち、揚力は飛行機が空中に上がるのを助ける力であり、抗力は飛行の障害となる力である。したがって翼はできる限り揚力が大きく抗力が小さいように設計されなければならない。これは機械工学の航空力学の部門に属する。第二に、飛行機は十分な推力を持たなければならない。この目的の為にはエンジンが必要となる。エンジンには適切な重量対動力比が必要である。すなわち可能な限り軽くてかつ強力でなければならない。当初は蒸気エンジンが使用されたが、後にはより優秀な重量対動力比を持つ燃焼エンジンが使用されるようになった。燃焼エンジンはさらにピストン型からずっと大きな推力をもち、信頼度も高いジェットエンジンへと進歩する。燃焼エンジンは機械工学部門の熱力学に属する。重量対動力比を更に改善する為に、強くて軽い材質が求められた。ボーイング747型機の開発中に、製造者ロールス・ロイスはエンジンの羽根を軽量の、ファイバーグラスと接着剤を鉄鋼に絡ませた複合材料に置き換えようと試みたが、これは最後には却下された。<sup>6</sup> この種の探求には材質のイオンレベルでの結合を検証する必要があり、これは化学工学の部門に属する。

(2) 安定と制御: 飛行機が空中に安定した状態で留まるためには機体の設計が重要となる。空中分解を避けるためには、機体にかかる全ての力とその分配が計算されなければならない。このためには機械工学部門のベクトル機械学が使用される。機体の偏揺れ、縦揺れと横揺れを制御するために、スタビライザーとなる尾翼が機体に取り付けられなければならない。<sup>7</sup> 尾翼の設計には機械工学の一部門である航空力学の法則が使用される。材質は強力で耐久性が無ければならない。そのためにストレステストと疲労テストが行なわれる。ここでは化学工学の部門が貢献する。又尾翼のコントロールも必要である。機械工学部門のケーブル線と滑車がこの目的で使われていたが、その後コントロールを容易にするために流体操作機が導入された。これには機械

<sup>4</sup> Smith, H.C. "Skip." *The Illustrated Guide to Aerodynamics*, New York: TAB Books, 1992, p. 12.

<sup>5</sup> 同、56頁。

<sup>6</sup> Sutter, Joe with Jay Spenser. *747: Creating the World's First Jumbo Jet and Other Adventures from a Life in Aviation*. New York: Smithsonian Books in association with HarperCollins Publishers, 2006, p. 208.

<sup>7</sup> Smith, H.C., pp. 159-160.

工学部門の流体力学が関連する。1990年代にボーイング社が777型機を開発中に、ケーブル線と滑車はフライバイワイヤというコンピューターを使ったシステムに取り替えられた。これには電気工学の法則が使用されている。ここでも軽量化は深刻な問題であった。軽くて強い材質が常に求められた。機体は木製からアルミ製に変わった。チタン、アルミ—リチウム、カーボン繊維などの軽い材質が導入された。777型機では、重量の9%は非金属材質による。<sup>8</sup> 化学工学部門における継続的努力がここに貢献している。

(3) 飛行と通信: 一旦飛行機が空中で安定して留まることができるようになると、目的地に到着することが次の目的となる。発明直後には飛行機には飛行や通信装置は付いていなかった。パイロットは自分の視覚とバランス感覚に頼った。1920年代に入って装置による飛行が追求されるようになる。当初の装置には高度計やジャイロコンパスが含まれていた。パイロットが地上の管制塔と通信できるように無線機も取り付けられた。<sup>9</sup> これらの装置は徐々に性能を増し、777型機が1990年代に設計される頃には、ハニーウェル航空資料や、ADIRSといったかなり精巧なコンピューター・システムが使用されるようになる。<sup>10</sup> これらが可能になったのは、電子工学の発展のおかげである。さらに新たに発展してきた量子力学がGPS装置を可能にした。

(4) 乗り心地: 商業飛行が普遍化するにつれ、乗客の乗り心地が重要性を占めるようになってきた。第一に客室の空圧が調整されなければならないが、これは機械工学の部門である。それから客室の温度調整が必要であるが、これには機械工学部門の熱力学と電気工学の電気回線が関連してくる。照明と娯楽も電気工学を使っている。しかしこれらの装置のせいで飛行機の重量がかなり増加した。それで新たな技術が重量問題を解決するために導入された。1960年代のボーイング747型機の開発中に電気工学での革新のおかげでマルチプレックスというシステムが可能になり、一本の電線がシグナルを時分割で共有することができるようになり、必要な電線数を減らすことができた。<sup>11</sup> 1990年代のボーイング777型機の開発中に、CMSという精巧

<sup>8</sup> Yenn, Bill. *Inside Boeing: Building the 777*. St. Paul: MBI Publishing Company, 2002, p. 45.

<sup>9</sup> Smithsonian National Air and Space Museum. *Flight: 100 Years of Aviation*. New York: DK Publishing, Inc., 2002, p. 122.

<sup>10</sup> Norris, Guy, and Mark Wagner. *Boeing 777: The Technological Marvel*. Osceola, WI: MBI Publishing Company, 2001, pp. 40–41.

<sup>11</sup> Irving, Clive. *Wide-Body: The Triumph of the 747*. New York: William Morrow and Company, Inc., 1993, 241.

なシステムが導入された。このシステムは客室のインターフォン、照明、温度調整、娯楽システムなどを自動的に操作することができる。<sup>12</sup>

**垂直統合:** 現代の飛行機を設計して製造するためには、四層全てが完全に統合されなければならない。一層だけで飛行機を製造することは不可能である。ここでは物理工学の四層の統合を観察する。その際、見本として機械工学の航空力学部門に焦点をあてる。

(1) 理論: 航空力学の理論的基盤はベルヌーイの定理と連続の法則からなっている。数式は図4-4に示されているが、ここでその意味を理解する必要はない。ダニエル・ベルヌーイは18世紀のスイスの数学家である。H.C. スミスはその航空分野への貢献を以下のように表現している「ダニエル・ベルヌーイは飛行機という言葉聞いたことが無かった。彼は1782年に他界したが、これはモントゴルフィエ兄弟が最初の気球を飛ばした前年後である。彼の研究はその探求中には飛行とは全く関係が無かった。彼は数学的に動作中の液塊が及ぼす圧力の変動について説明しようとしていたのであり、その主な関心は水流であった。」<sup>13</sup> したがって、もし理論と工学層の間で対話がなければ、ベルヌーイの定理は理論層に留まり、飛行に応用されることは無かっただろう。

(2) 工学: 英国のジョージ・ケイリー(1773~1857年)がベルヌーイの定理を必要とする重航空機飛行に向けて実際のまた理論的に進歩を遂げた最初の人物である。彼は組織的に実験を行い、数式を用いて鳥を観察することによって揚力と抗力の問題を扱った。<sup>14</sup> これが現代の工学への道を開いた。20世紀に入って、ボーイングやダグラスといった航空機製造会社が同じ揚力と抗力の法則を使って何千人というエンジニアを使ってより大きくて速い航空機を製造することになる。

しかし、二層間の連絡は一方的ではない。時には理論は独立して発明され、後に元々は意図しなかった目的で応用されることもあるが、時にはまたエンジニアが問題にぶつかり、解決法を見つけるために理論を探求することもある。後にジェットエンジンの発明によって、飛行機が音速に近い速度で飛ぶことが可能になった。音の障壁に近づくと、圧縮性の問題が出てくる。これをボーイング社のエンジニア、サッターは「飛行機が音速に近づくとつれ、空気が十分速くに道を開け

<sup>12</sup> Norris, p. 41.

<sup>13</sup> Smith, H.C., p. 13.

<sup>14</sup> Smithsonian, p. 12.

ることができなくなっていて、東になって衝撃波が形成され始める」と説明している。<sup>15</sup> ドイツ人が早くは1930年代からこの問題に取り組み始めた。米国は1940年代に研究を始めた。科学者マックス・ムンクが飛行船の外郭の周りの気流を研究し、数学的に分析した。ロバート・ジョーンズはムンクの数式を応用して、三角翼がほとんど抗力を生まないようだと発見した。<sup>16</sup> これらの研究が最終的に高速航空機の後退翼の導入に繋がった。

図4-4  
飛行機—設計/製造 垂直統合  
航空力学

1. 理論

- ベルヌーイの定理  

$$P + 1/2 \rho \times V^2 = \text{一定}$$
 P= 圧力  
 ρ= 密度  
 V= 速度

- 連続の法則  

$$\rho \times A \times V = \text{一定}$$
 ρ= 密度  
 A= 面積  
 V= 速度

2. 工学

- 揚力と効力の比の計算  

$$\text{揚力係数 } (C_L) = \frac{\text{揚力}}{\frac{1}{2} \rho V^2 \times S}$$
 \*S= 翼の面積  

$$\text{効力係数 } (C_D) = \frac{\text{効力}}{\frac{1}{2} \rho V^2 \times A}$$

3. 製造・整備

- 製造と維持・管理

4. 操作

- 操縦士

(3)製造・整備: 一旦設計が完了すると、製造が始まる。ここでも連絡は一方的ではない。製造が始まると、製造現場は時には部品がかみ

<sup>15</sup> Sutter, p. 54.

<sup>16</sup> Irving, pp. 68-69.

合わないことを発見したりする。そうすると、再設計のためにエンジニアに送り返される。

(4) 操作: 一旦原型が制作されると、テスト飛行士が全てが作動するかどうか確認する為飛行を行なう。問題があれば再設計の為エンジニアに報告される。ボブ・ロビンズはボーイングのテスト飛行士で、同社が開発していた軍用爆撃機 XB-47 のテスト飛行を行なった。ロビンズは爆撃機はダッチロール問題があると報告した。その後数週間以内にボーイングのチームは MIT の学者のチャールズ・スターク・ドレイパーと協力して片揺れダンパーと呼ばれる装置を開発した。<sup>17</sup>

一旦飛行機が市場に出されると、商業用パイロットと整備士の間で日常の維持の為緊密な連絡が行なわれる。

**全体の協力:** ボーイング 747 型機や 777 型機などの大規模な航空機を設計して製造するためには何万人という人間が関わってくる。これほど多くの人間が関わる事業が首尾一貫した全体系を作り出せるというのは注目すべきことである。この偉業に関してはいくつかの要素があるように見える。

(1) 共通の背景: エンジニアとなる大部分の人はよく似た教育・訓練を受ける。大概是大学へ行き、微分・積分、物理、化学とさまざまな工学の授業を受け、それから専門分野へ進む。その間に彼らは共通の言語を習得する。多くのテスト飛行士も工学の学位を持つので、同じ言語を用いて問題をエンジニアに報告することができる。もし公式の学位を持たなくても、飛行士は飛行訓練中に少なくともある程度の工学の知識を学ぶことが要求される。整備士の中にも公式の訓練を受けていない者もいるかもしれないが、物理の法則を学ぶよう勧められる。知識が豊富なほど、整備士としての価値も上がるので、後に専門的分野に進むことになっても、他の分野で何が起きているか説明されれば理解できる。これが異なった工学部門間の統合を助けている。

(2) 組織の重複: 各部門と組織間には重複部分がある。エンジニアは学術機関で訓練を受け、多くは博士号か少なくとも修士号を持つ。したがって、理論と工学の間にはかなり強い関連がある。航空機の運営に責任のある航空会社は社内に独自のエンジニアを持ち、製造会社との連絡を効率的なものにする。1990年代の777型機の開発中にボーイングは設計 / 製造チームという新しい概念を導入した。この

<sup>17</sup> 同、100～101頁。

システム下では、整備士などが設計過程に関与する。<sup>18</sup> これらの動向は工学部門で一般的な傾向のようである。

(3) 親密な連絡: 異なる設計チームの間で親密な連絡関係が確立されている。コンピューター化される以前には最も重要な過程はモックアップと呼ばれる実物大模型の製作であった。アービングはこれを以下のように表現している。

エンジニアリング・モックアップの決定的瞬間は『モックアップ・バイオフ』と呼ばれていた。これにはいつも派手な祝賀会が開かれ、設計技師が全て出揃って、飛行機の自分担当の部品を確認した。もし特にきわどい配管組織がきっちり合えば、担当のエンジニアはそれをその場で模型から取り出して、それが製造過程で完全に再現されるよう確認するために持ち帰った。もし合わない部品があれば、設計のやり直しとなり、新たな設計の為の変更要請が出されなければならなかった。部品が合えば、仕事終了となるのであった。<sup>19</sup>

この過程は1990年代に精巧なコンピューターシステムに取って代わられた。CATIA (コンピューター使用立体相互作用プログラム) と呼ばれるシステムが導入された。ボーイング777型機プロジェクトには2千2百のCATIA 端末機がオーストラリア、ブラジル、日本と英国の供給メーカーに接続された。それによって伝統的なモックアップを必要としない場合が出てきた。<sup>20</sup>

(4) 全体像の把握: ボーイング社で747型機プロジェクト担当のエンジニアであったジョー・サッターは何度も全体像を理解することの大切さを強調している。

常に最良の教師である実際経験を通して、私は「飛行機設計の全体は個々の部分を足し算した合計ではない」ということを学んだ。飛行機設計は航空力学だけでも構造だけでも推進力だけでもない。これらが全てうまく噛み合うようにしなければならないのだ。<sup>21</sup>

<sup>18</sup> Norris, pp. 21-22.

<sup>19</sup> Irving, p. 281.

<sup>20</sup> Norris, p. 23.

<sup>21</sup> Sutter, p. 50.

エンジニアはすぐに飛び込んで何百ページもの資料を分析したがる。しかししばしば彼らは細部に気をとられて全体像を見失う。というのは彼らが正しい方向に進んでいるかどうかを確かめるために最初に単純な作業をしないからだ。膨大なコンピューター機能による詳細な作業は基本的な概念が適切に定義された後で必要となるのである。<sup>22</sup>

そしてサッターは部下が全体像を持つよう努力した。

私はこの信じられないくらい複雑で骨の折れるプログラムの関係者は全て自分の問題に埋もれて全体像を見失っていると気づいた。私は即座にこの問題を正す決心をした。そのときから、私は私の747エンジニア・チームが私と同じように多岐に渡って広い情報を把握しているように努めた。<sup>23</sup>

サッターの経験はまた興味深い人間の性質も示している。すなわち人間は自分だけで全てができないときには、自分が取り組んでいる部分が全体のどの部分を占めているかを理解していると、よりよく機能できるというものである。

アル・ウェッバーに朝一番で見せたいものがあったので、私は彼の部屋へ行った。私はアルがまだ仕事をしているのを見て驚いた。彼は翼に搭載される着陸装備を支えるチタンの柱の問題に取り組んでいた。私は資料を渡して部屋を出ようとしたが、そのとき彼が大変落ち込んでいるのに気が付いた。彼は取り組んでいる設計問題の解決法を探すことはできるが、成功の見込みのない仕事をしていると思っていることを認めた。

もう夜も遅かった。私が最初に思ったことは、もう切り上げて家に帰るとのことだった。しかし、そのときふともしアルが全体像を見ることができれば、それほど落ち込むこともないかもしれないと思った。そこで私は時間を割いて彼とプログラムについて話し合った。私が思っている実態がどういうものか説明すると、彼はずっと気が楽になったと言った。<sup>24</sup>

---

<sup>22</sup> 同、79頁。

<sup>23</sup> 同、134頁。

<sup>24</sup> 同。

(5) 力の均衡の感覚: この分野では、全ての相対する力や要素を指定してそれを均衡状態に持っていくことが特に大切である。エンジニアはみんなそのことを知っている。この力の均衡を得るというバランス感覚が単純化した論争を防ぎ全体の統合を助ける。以下にこの点でのエンジニアの証言を掲げる。

航空機設計の初心者は通常共通の感情を経験する、それは挫折感である。飛行機のある部分の性能を向上させようとする、どうしても他の部分の性能を犠牲にしなければならなくなってしまう。例えば、速い航行速度の為には抗力を低くしなければならない。そこで設計者は抗力を下げる為翼面積を小さくすることを選択する。しかしそうするとこの翼が高速度で失速するので、離着陸により長い距離が必要となる。これを修正しようとして離陸時の動力を増強し、着陸用にフルフラップを延長する。しかしそうするとこれが航空機の重量を加算することになり、減速し、さらにほとんど全ての他の機能も減少する。もちろん費用もかさむ。

他の観点からやり直すことにして、設計者は今度は離着陸を容易にする大きな翼を選択する。そうすると、航行速度を計算する時に、それが望ましい値よりずっと低いことを発見する。それで大きなエンジンを考慮するが、エンジンの重さと大きなエンジン用に加算される燃料の量をまかなうために、滑走路の長さを又延長しなければならなくなる。

たいてい最後には、翼の選択は両者の間に落ち着く。程よい速度と程よい離着陸機能を持った翼である。これは妥協である。設計の職業では、これはトレードオフと呼ばれている。我々は一部分の性能を他の部分の性能を上げるために交換するのである。<sup>25</sup>

飛行機設計の最終行使は妥協である。例えば、もし燃料搭載量を増加させればそれを貯蔵するより強くて大きな構造を必要とするので、飛行機の重量と抗力が増加する。また上昇するためにより強力なエンジンが必要となり、燃料消費が増加する。それゆえ設計チームの仕事は最良の結果を得るようにこれらの要素の最高のバランスを決定することである。<sup>26</sup>

<sup>25</sup> Smith, H.C., pp. 214-215.

<sup>26</sup> Sutter, p. 156.

この分野検証が形而上工学部門設立の為の基盤となる。それに際してまずこの構造をできる限り真似ることから始める。この二分野は似てはいるが、根本的違いもある。したがって、このモデルに従って基本構造が一旦形成されれば調整を行なう必要がある。

## 形而上工学

物理学の構造と同じように形而上工学も垂直に理論、工学、製造・整備、操作の四つの層からなる。また水平には知性と感情という二部門が存在する。これは図4-5に示される。

- (1) 理論: 西洋文明では、知性に関する理論は伝統的に哲学の分野で行なわれてきた。そして感情あるいは精神に関する理論は宗教の分野で取り扱われてきた。
- (2) 工学: このレベルでは、知性と感情の統合理論を使って、ピコ一の周期を制御するための実際の形而上システムが設計されることになる。今のところそのような試みは行なわれていない。しかし、ここ数世紀の間に凋落してきたとはいえ、芸術が活動的に形而上工学のプロジェクトに取り組んできた。であるからこのレベルでは芸術を検証し形而上的政治システムを構築するための要素をそこから引き出すことになりそうである。
- (3) 製造・整備: このレベルでは、一般的工学法則が個々の歴史的また地理的状況に合うように調整される。今のところ、政策研究所や政府機関がこの役割を行なっている。
- (4) 操作: このレベルでは、個々の政治状況に見合う個々の政策が創出される。政府の行政府がこの役割を担っている。

物理学の分野と同じようにこれらの垂直、水平部門の間で緊密な連絡とフィードバックが行なわれる必要がある。

ここで、物理学部門では一般論化のレベルは操作 / 製造・整備の層から理論層へと下がるにつれて深まることに留意する必要がある。製造層ではホンダの部品はフォードの部品とは全く異なっているが、工学層では全ての通常乗用車は内燃エンジンを使用している。したがって、ホンダの部品とフォードの部品の違いはこのレベルでは重要ではない。理論層では、内燃エンジンは熱力学の応用である。したがって、理論家にとっては、通常の乗用車だけでなく、冷蔵庫やエアコンその他の装置も一つの枠内で考えられるのである。<sup>27</sup>

<sup>27</sup> 詳細に関しては、Raymond A. Serway, and John W. Jewett, Jr., *Physics for Scientists and Engineers (6th Edition) Volume 1*, Thermodynamics, pp. 579–702 を参照。

同じことが形而上部門にも当てはまる。したがって、ポストモダニストの相違を強調するアプローチは製造・整備の層では重要になってくるであろう。これは役割分担の問題である。垂直層をより底部に向かって下降するにつれ、焦点はより一般的で抽象的なものとなる。ポストモダニストのアプローチは製造・整備層では適切であるが、全ての部門で使用されるべき不変法則であるとの主張はできない。個々の層でそれぞれ適切な抽象化と一般論化のレベルがあるのであり、それが関係者全てによって尊重されなければならない。

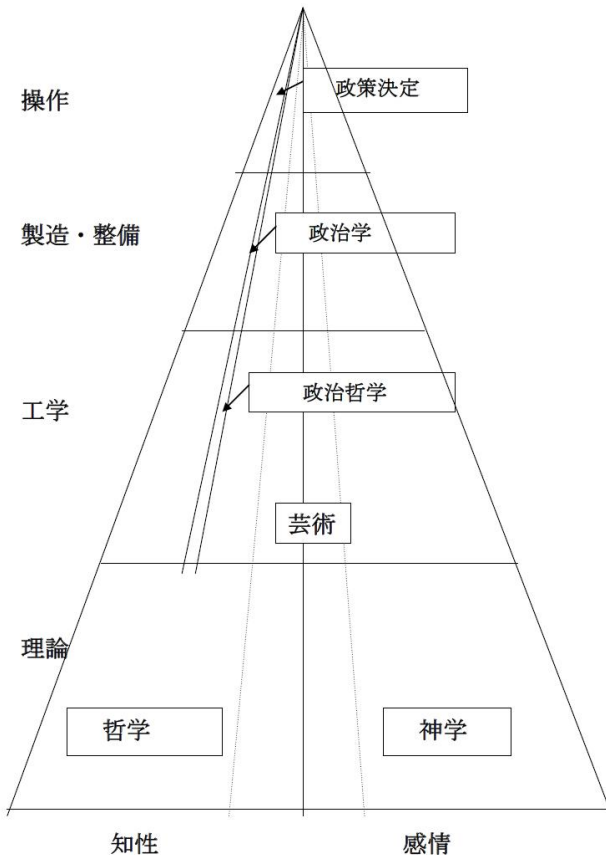
物理と形而上工学分野の類似関係が一旦設立すれば、今度は形而上工学分野を探索して調整を加える必要があるかどうかを確認しなければならない。現時点では、私は二つの違いを感じている。ひとつは規模である。形而上工学のプロジェクトは物理工学のプロジェクトより規模がずっと大きい。例えば、所要時間を見たとき、物理工学の分野では計画、調査、開発、テストから製作過程まで通常数年かかるが、形而上工学では、プロジェクトの完成に何世代、何世紀もかかる。近年共産主義による実験が失敗に終わったのを我々は目撃したが、このテストの結果が出るには75年ほどかかった。であるから形而上工学においてプロジェクトを完成させようとするのは、人間の寿命が数ヶ月しかないのに物理工学のプロジェクトを完成させようとしているようなものである。このような状況で物理工学のプロジェクトを完成させるのはどれほど難しいことだろうか？ ここで重大な調整が必要である。この規模の大きさのせいで、形而上工学は理想主義者の世界でしか実行できない。一個人のできる貢献はそれだけで意味のある物に集大成するにはあまりにも小さすぎるので、自己の栄光を求めていたのでは満足のいく結果は絶対に得られない。この点でボーイングの従業員の持つという社員精神が希望の光を投げかける。ジェット機のように巨大な物を製造する際、個人の貢献は極めて小さい。例えば、私の読んだところでは、エンジニアの一人は雇設計の仕事を与えられた。しかしまた私はボーイングの製造担当者は彼らが頭上で飛行機が飛ぶのを見る度に誇りに思うとも読んだ記憶がある。

しかしながら、残念なことに形而上工学では、それでも十分ではないかもしれない。プロジェクト期間は個人の寿命をはるかに上回るので、大半の人々はプロジェクトの終了を見るができない。したがって、『神への献身』に近い精神性が必要となってくるのである。一人一人が自分の役割を果たして、それを神に捧げ、そして次の世代がそれを引き継いで、自分の役割を足してそれを又神に捧げるのである。『神』といった統一力なしでは細分化は免れない。それで中世の精神

性が再度導入される必要があるだろう。当時は人々は完成に何百年もかかる教会の建設に喜んで参加したと聞いたことがある。

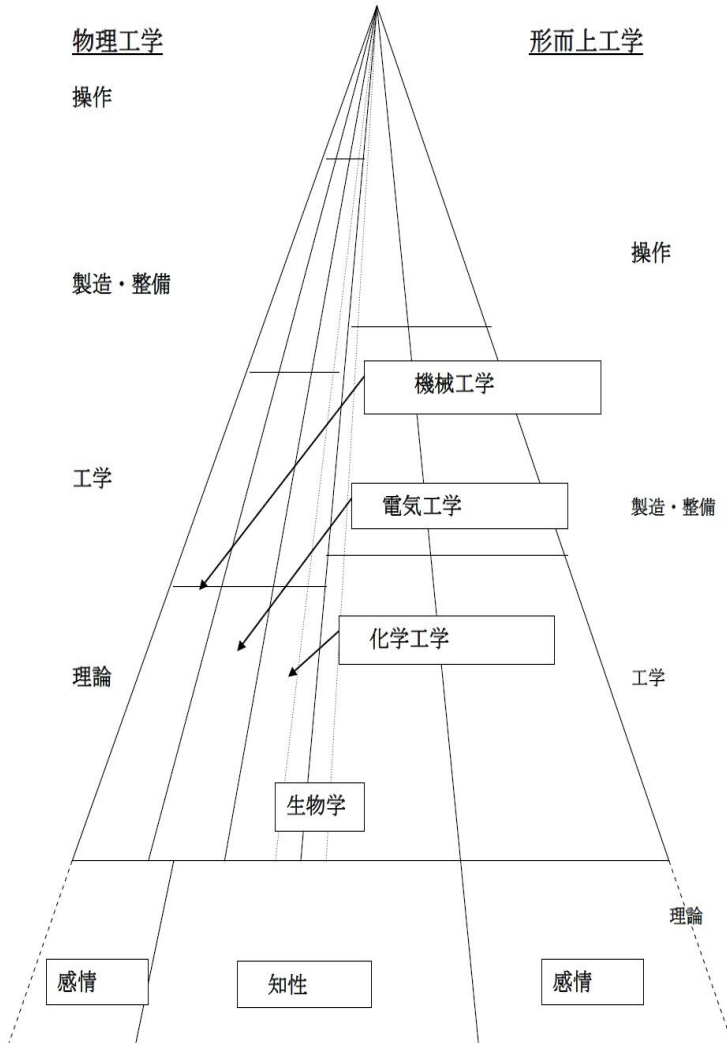
第二に、形而上工学のプロジェクトではエンジニアは同時に自分を取り扱う材料でもある。言いかえれば、エンジニアは研究の行使者であると同時に、自分が実験を行なっている試験管の中の粒子でもあるのである。すなわち、形而上工学には主観と客観の区別がないのである。これが重大な調整を必要とするもうひとつの問題である。これらの問題は次章においてより詳細に検討される。

図4-5  
形而上工学のピラミッド



ここで形而上工学分野が完成するためには物理工学と切り離されてはいけない。したがって、この二分野は図4-6に示されるように統合されなければならない。

図4-6 物理—形而上工学のピラミッド



## 140 形而上工学分野の設立

この関連を示す一つの方法は  $E=mc^2$  を使うことであろう。これは有名なアインシュタインの数式で、 $E$ はエネルギー量、 $m$ は質量で  $c$ は光速である。この数式が完成するためには左側に形而上式が加えられる必要がある。

$$\text{知性} * \text{感情} \rightarrow E = mc^2$$

この関数において  $E$ は自然界にあるエネルギーの量で、知性がそのうちどれだけの量を人間が採取できるかを決定し、感情がそれらのエネルギーがどのように使われるかを決定する。現代社会では、科学知識の発展のおかげで我々が自然から採取できるエネルギーの量は拡大に増加したが、どういうわけか我々は全人類を何度も破壊できるような大量殺戮兵器を開発してしまった。これは二分野の間に緊密で調和の取れた関係が無ければ、結果は破壊的なものになりかねないことを示唆している。

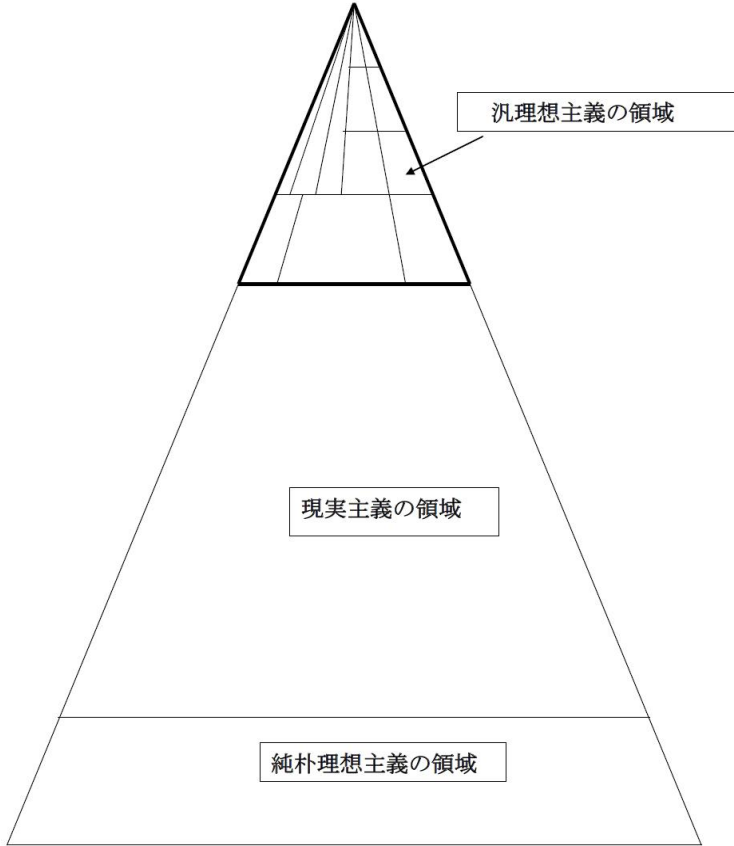
最後に、この分野は社会から孤立してはいけない。この分野全体が汎理想主義の位置するところに当てはまる必要があり、最終的な構図は図4-7に示される。

うまく機能する形而上工学分野を設立することは緊急を要する。しかし、そこで何をすればよいのだろうか？ ピコーの周期を制御して三重危機に対処できる安定した政治制度の確立の為に今までどのような研究が行われてきたか、またこれから何に取り組むべきかという点から次章以下に於いて形而上学の分野検証を行なう。<sup>28</sup>

---

<sup>28</sup> 本書の目的は大量殺戮の再発を防ぐことであるが、一旦形而上工学が設立されれば、他の部門にも応用できる。地球温暖化や保健、負債問題、市民権その他についても最良の解決法を見つけるために形而上工学を適用することができる。

図 4-7  
汎理想主義のピラミッド



## 第五章 形而上工学分野の検証(1) 形而上工学・形而上理論

本章と次章において、形而上工学分野の理論、工学、製造・整備、操作の各層において今までどのような研究がなされ、またこれからどのような研究が必要かについての検証を行う。これは一個人にとって完全に達成することは不可能な作業である。ここで私が行なおうとしていることは、物理工学の分野において、15世紀に飛行機を設計し、製造し、操作しようと提案しているのに等しい。その当時には微分・積分もなく、航空力学も無く、電力も無かった。これらが仮にあったとしても、設計を行なうには何千人というエンジニアを必要とし、製造にも何万人が必要である。前章では、形而上工学は物理工学よりずっと規模が大きいと述べたが、ということは、このプロジェクトが意味のある結果を出すためには何百万人もが取り組む必要がある。ここでの私の目的はそれほど大きくはないが、それでも達成するのは不可能である。ピコーの周期を制御し恒久平和を達成する為に誰が何をすべきかを示せればと考えている。1500年にジャンボジェットを飛ばすことは不可能であった。しかし、人類はこの偉業を達成した。特に20世紀に入って一旦全ての条件が整えば、20世紀初頭のライト兄弟から世紀末にはボイジャーを天王星に送るところまで進歩した。これだけの進歩を物理工学の分野で達成することが可能であるなら、形而上工学分野でも同じ試みがなされるべきである。以下ではまず形而上工学層からはじめ、次に理論層、そして次章では製造・整備 / 操作層の検証を行なう。

### 分野検証—形而上工学

維持できる体制を確立するための形而上工学の最終目的はエントロピーの制御である。第三章で述べたように、物理学の用語を借りれば、権利と義務の問題はエントロピーを使って表現することができる。ここでは、個人の権利を追求することはエントロピーを体制内に放流するか、体制から負のエントロピーを奪取することに等しく、また義務を遂行することは体制内のエントロピーを吸収するか体制に負のエントロピーを寄与することに等しくなる。体制には常にエントロピーが流入するか負のエントロピーが奪取される一方で、エントロピーが吸収され、また負のエントロピーが流入している。もし過度のエントロ

ピーが体制内に流入するか、過度の負のエントロピーが奪取されると、体制は崩壊する。したがって、ここでの根本的な目的は体制内に流出するエントロピーと負のエントロピーの量を許容範囲内に抑えるということである。ここで理想主義はエントロピーを完全に排除するか負のエントロピーに変換しようと試み、現実主義はエントロピーの存在を認め、その害を最小限に抑えるためその集中を抑えようとする。ここではこれらの二学派によって提案された解決法を主に慣習的言語を使って検証し、その解決法の問題点を分析する。

**理想主義：**理想主義では哲学者と神学者がこの問題に取り組んだ。両者の主な違いは、哲学が人間の理性が根本的であると信じるのに対して、神学者は天啓が必要であると考えた点である。ここでは哲学的アプローチからはじめ、次にそれぞれの宗教的アプローチを検証する。

### (1) 哲学的アプローチ：

**プラトン：**プラトンはその著書『国家論』において、理想主義国家を描き、どうやってそれが達成できるかを検証した。その際、「正義とは何か」という問題を提起することから始めている。この問題を検証するに際して、プラトンは人と国家の類似を提示し、両者共に三部からなると主張する。国家の場合、支配者、兵士と職人から成る。人の場合は理性と欲望と精神から成る。国家では支配者は全体の益となるよう決断を下すが、職人は自己の欲望に捕われる。そうすると、兵士が職人を押さえ込む。同じことが人でも起こる。理性がその人にとって有益な決断を下すが、欲望が本人にとっては益にならないことを望むかもしれない。これは個人の葛藤であるが、それが起こると、精神が理性に同調して人の不健康な欲望を押さえ込む。

それからプラトンは四つの卓越した徳—賢明、勇気、鍛錬と正義—について述べ、それぞれを国家と人の場合に割り当てる。賢明は国家では支配者に人では理性に割り当てられる。勇気は兵士と精神に、鍛錬は支配者か理性が職人か欲望を押さえ込むことを意味する。そして、正義は国家においても個人に於いても個々の部分が他の部分に介入することなくなすべき機能を果たした時に達成される。

それからプラトンは理想的国家を達成する為には支配者は哲学者でなければならないと主張し、哲学王の教育について詳細に述べる。初期的教育段階では、焦点は人格形成に置かれる。正しい種類の芸術、詩と音楽がここで教えられるべきである。しかし、プラトンはこれには懸念もあり、間違った種類の芸術は誤った感情を湧き立たせると警

告している。次の段階は体育である。その後、最も優秀な者が数学と論理を教えられる。最後に最も適した人物が選ばれ15年間実体験を積む。そして彼らが順番に哲学王として勤める。しかしながら、支配者は特権階級ではない。プラトンの理想国家では、支配者には決定権が与えられるが、富は与えられない。

それからプラトンは哲学者とは何かについて詳細な説明を行なう。プラトンの核心的概念であるアイデアがここで説明される。コプルストンによると：

プラトンの見解では、我々が普遍的概念で理解する物質、科学が取り扱う物質、一般的叙述に使われる用語としての物質は普遍のアイデアに内在する客観的観念であり、それは独自の超越した世界に存在する、知覚できる物からは離れたどこか遠くの世界である。離れたというのは実際に空間的隔離であると理解される。知覚できる物はこれらの普遍的現実と所属する物の複写であるが、後者は独自の普遍の天界を持つ。知覚できる物は変化の対象となり、常に何かに成りつつあり、決して不変のものではありえない。アイデアは個々に孤立した状態で独自の天界に存在し、どの思想家の精神からも隔離している。<sup>1</sup>

哲学者とはこのアイデアを上記に説明されているように理解できる者かあるいは劣悪な複写から真のアイデアを識別できる者である。全てのアイデアの中で、プラトンは善のアイデアが最も特別であると主張する。これは太陽が我々に全ての物が見られるようにしてくれるので特別であるのと似ている。さらに哲学王を説明するため、プラトンはここで洞窟の寓話を導入する。俗人は洞窟に鎖で繋がれ、壁に映る影を見てそれが現実だと思い込む。哲学者とは鎖を解放し洞窟から出ることができた者である。まぶしい太陽の光の下、哲学者は真の世界を見、真実を理解する。しかし一旦洞窟から出ても哲学王は洞窟に戻って他の人々を助けなければならない。これが哲学王が全体の益の為になすよう求められた犠牲である。

それからプラトンは人に対応する現存する国家に目を向け、国と人がどのように墮落していくかを検証する。墮落の程度の順にプラトンは四つのタイプを挙げる—金権政治と金権的人物、寡頭政治と寡頭的

<sup>1</sup> Frederick Copleston, S.J. *A History of Philosophy: Volume I, Greece and Rome (Part of Book One: Volume I, Greece and Rome; Volume II, Augustine to Scotus; Volume III, Ockham to Suárez)*, Garden City, New York: Image Books, 1985, p. 166.

人物、民主政治と民主的人物、そして専制政治と専制的人物である。金権政治では軍人階級が野心を抱くようになり、支配者に対抗するようになる。寡頭政治ではエリート階級が富を追求するようになる。

最後の部分でプラトンはまた芸術に触れ、今度は芸術をひどく批判する。プラトンの主張は理想国家の達成に導くのは感情ではなく理性であるとの信念に基づいている。しかしこの決定的瞬間にプラトンは体制が効率的に機能するために二つの神話を採用しなければならなかった。そのひとつは金属の神話である。これは人民に人間には金・銀・銅の三種類があり、それぞれ社会で果たすべき役割があると信じさせることであった。これが成功すれば、市民の不健康な野望は防げるであろう。二つ目はエルの神話であるが、これは宗教にかなり近い。それによると、この世で健全に生きた者は死後の世界で報われるが、悪徳を働いた者は罰せられるというものである。また今生きている人生は生まれる前に自分で選んだものだと示唆している。すなわち、現世で何が起ってもそれは自分の責任だということである。

**アリストテレス：** アリストテレスはプラトンに理性が理想人と国家を達成する基盤であるべきだという点には同意している。しかしながら、その手段は上から下へのアプローチを取るプラトンとは正反対で、下から上へのアプローチを採用している。デニス等は以下のように説明する。

歴史的に、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』は西洋文明において倫理学を系統的に扱った最初のものである。それはソクラテスによって始められ、プラトンによって進歩した伝統に属すが、その伝統とは人間の理性的性質の至上性と、宇宙の整合的な性質の両方を強調するものである。にもかかわらず、この大きな枠組みの中で、アリストテレスとその師匠のプラトンの概念は著しい対照を成している。この違いは究極的な道德原則の性質に関する対立する概念から出てきており、異なった形而上的立場の結果である。アリストテレスは個々の物質は本来のその本質中にもみ存在する不変のアイデアを通してのみ知覚することができるというプラトンの思想に反駁する。アリストテレスの教義によると、物質を理解可能にするアイデアは個体から離れては存在しないというものである。すなわち、アリストテレスにとっては個々の物質は宇宙の統一であり、複製可能なアイデアで、独特の内容や物体である。「物体なしでアイデアはなく、アイデアなしで物体はない。」その結果、アリストテレスは日常

性格の道徳的評価は経験や個性や状況に関係ない『善』が前提であるという見解を否定し、反対に基本的道徳原則は我々の日常生活の活動に内在し、それらを研究することによってのみ発見されると主張する。<sup>2</sup>

究極の存在を追求するにあたって、アリストテレスはアイデアのように高遠に存在する物ではなく、身近な物から考察を進め、一次物質にいたるまで、元の素材のはしごを辿り続ける。元の素材は自身で変化しない場合は、行為者によって他の物に変えられる。そしてその最初の行為者が第一の実体である。

我々はすでに議論の中で何かになる全ては何かになり、何かからできることを語った。また何かになるときにはそれ自身と同じである行為者を通じてなる。<sup>3</sup>

ある物が、可能性だけで存在していた後で思想の結果何かになりその実態を完全に実現する条件は以下のものである。まず誰かがその実現をなし得たいと望むこと、それから外部に障害が無いこと、そしてそれが健全に実現することに関しては、内部にも障害が無いことである。<sup>4</sup>

ただ偶然に動かされる物は何もない。常に何かがそれを動かさなければならない。それは物質が自然かあるいは、行為者の意思か何かそれによく似た物を通した力によって動かされるのと同じである。．．．しかし動かされる物は動く物と同様に中間物体であるので、自分は動くことなく他のものを動かす何かが存在しなければならない。これは何か永遠のものである。．．．それでは第一の実体は存在しなければならない。<sup>5</sup>

アリストテレスは第一の実体について考察する。

<sup>2</sup> Theodore C. Denise, Sheldon P. Pettefreund, and Nicholas P. White, *Great Traditions in Ethics*, Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company, 1998, (Chapter 3 - Moral Character: Aristotle/Selections from the *Nicomachean Ethics*, Books I-ii, is, vi-vii, and ix), p. 24.

<sup>3</sup> Aristotle, trans. By J.L. Creed and A. E. Wardman, *The Philosophy of Aristotle*, London: A signet Classic, 2003, p. 107.

<sup>4</sup> 同、104～105頁。

<sup>5</sup> 同、121、122、123頁。

今までの議論によって知覚できる物とは別に何か永遠で不動の物質があることは明らかである。．．．この崇高の精神に関してはある種の問題がある。我々の知る他の何よりも神聖であるが、この種の物がどういう状態にあるのかを知るのは難しい。．．．

さらに、この物質が精神であるにせよ思想であるにせよ、何を考えるのであろう？ それは自分自身について考えるかまたは他の事について考えるかであるが、もし他の事を考えるのであれば、常に同じことを考え続けるか違ったときには違ったことを考えるかである。とすると、それが善について考えるかそれとも何でも心に浮かんだものについて考えるかによって違いがあるのだろうか？ 何かについて考えるというのは第一の実体にとって奇妙なことではあるまいか？ 端的に言って、それは最も神聖で最も価値のあるものについて考える。端的に言ってまたそれは不変である。というのはどのような変化も完全な第一の実体にとっては悪化を意味するからであるし、いずれにせよすでに動いていることになるからである。それでは第一に、もしそれが実際の考えではなく考える力であるなら、その思想の存続が第一の実体にとって労力のいることになるが無理なく予測できる。第二に、精神よりも貴重な何かが明らかに存在する。それは思想の対象である。というのは考えることと実際の考えは最悪のことを考えるような物にさえ属するからである。であるからもしこれが何か避けなければならないものであれば、（そして避けるべきものであるのだが、というのはそれは見るよりは見ない方が良いものであるから。）その考えは最良のこととは言えなくなってしまうからだ。それではこの精神はもし最良のことについて考えるのであれば、自分のことについて考えているはずである。そしてその思想は思想についての考えであらう。<sup>6</sup>

長期にわたる検証を行なった後、アリストテレスは道徳的訓令を提案するが、それは中庸の美德である。デニス等は以下のように説明する。

アリストテレスは道徳的美徳を説明するという務めに注目し、人間の性格を三つの要素に分けた—情熱と、能力と性質の状態である。情熱（例えば怒りや恐れ）と能力（例えば怒りや恐れ

<sup>6</sup> 同、125～126頁。

を感じる能力)は元来本質的に非難されたり、賞賛されたりする価値のあるものではなく、美德は性質の状態である。経験によると、人がその適切な機能を過度と欠落の両極端の中間点で満たそうとする性格の状態であることが示されている。それでは道徳的美徳を持つ人はいつも中庸の美德に基づいて行動することを選ぶ。しかしアリストテレスは個人によって中庸は代わってくることを指摘している。<sup>7</sup>

この立場はアリストテレスの政治に対する概念にも反映されている。バンブローは以下のように説明する。

アリストテレスはギリシャのポリスはもし適切に計画され統治されれば、最も自然でそれ故理想的な人間社会の形を形成し、それはまた個人の最高の状態での性質に完全に合致するというプラトンの考え方に従った。彼はその弟子であるアレキサンダー大王の征服によって築き上げられたより大規模な共同体を予見しなかったし、許容する準備も無かつただろう。

しかしアリストテレスは、都市国家の性質についてより特定の問題を考慮し始めたときにプラトンとは意見を異にすることになり、この論文の関心の大部分はプラトンの主な提案のいくつかを否定する理由が中心となっている。アリストテレスがプラトンの専門性や機能の分業は必要だという考えと、統治の技巧には生来の才能と取得される技術を要求するという点にも同意していることは事実である。しかし彼はプラトンの道徳と政治的美徳の概念を医学や航海学といった知識の一部門としてみる概念は否定する。

アリストテレスのプラトンの理想的国家に対する最も根本的異議は個々の人間の活動としての幸福の概念を基礎に置いているということである。プラトンは幸福な共同体の建設に焦点を当て、個人の全てに優先する要求には与えられるべき重要性を与えなかった。アリストテレスは国家は市民の為に存在するのであって、市民が国家の為に存在するのではないと考えた。し

---

<sup>7</sup> Theodore C. Denise, Sheldon P. Pettefreund, and Nicholas P. White, *Great Traditions in Ethics*, Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company, 1998, (Chapter 3 - Moral Character: Aristotle/Selections from the *Nicomachean Ethics*, Books I-ii, is, vi-vii, and ix), pp.31-32.

たがって、彼はプラトンが彼の考える哲学王の為に処方した妻子や財産の共同所有は否定する．．．。

このプラトンとアリストテレスの対照はプラトンの『法律』における人間社会の修正青写真を考えた時に最も明らかとなる。同書において、プラトンは全ての個人的関心は共同体全体の益に服従しなければならないと明確に主張している。反対にアリストテレスは都市の福祉にとって過度の統一は過少の統一と同じように害があり、完全な統一は都市の完全破壊と同等であると信じた。<sup>8</sup>

**マルクス・アウレリウス：** これらの思想家の他に、理想主義の実務家もいる。ローマ皇帝のマルクス・アウレリウスはおそらくプラトンの哲学王に最も近い人物の一人であろう。アウレリウスはその観点を『自省録』に記した。カウフマンは、アウレリウスは「ローマ皇帝のなかで最も賢明で気高い人物の一人」であるとしている。<sup>9</sup> カウフマンは、マルクス・アウレリウスはストア派、すなわち「自然界の根底にある秩序と合法性を個人の行動において模倣することによって外界の一見した混沌状態にもかかわらず、内面の平和と倫理的確実性を追求することを強調する」<sup>10</sup> 学派に属した。以下にアウレリウスの自省をいくつか紹介しよう。

14. 私の弟セベラスから私は親族を愛すること、真実を愛すること、正義を愛することを学んだ。そして弟から私はテレジア、ヘルピディアス、カトー、ディオオン、ブルータスについて学んだ。そして弟から私は全ての市民に同じ法律が当てはめられる政体の概念、平等権と言論の自由により統治される政体、そして特に被支配者の自由が尊重される国王による統治の概念を受け取った。私は弟からまた私の哲学に関して、また善行を行ない、快く他人に恩恵を施し、希望を抱き、私は友人によって愛されているのだと信じる気質に関して、常に一貫して決して逸れることがないように学んだ。そして私は弟が非難する人物に関しての意見を隠し立てしないこと、また友人に彼が望んでい

<sup>8</sup> Renford Bambrough, trans. by J.L. Creed and A.E. Wardman, *The Philosophy of Aristotle*, New York: A Signet Classis, 2003, pp. 426-427.

<sup>9</sup> Marcus Aurelius, *Meditations*, Mineola, New York: Dover Publications, 1997, with introduction by editor William Kaufman, p. viii.

<sup>10</sup> 同、vi 頁。

ること、望まないことをはっきりさせるので推測する必要も無いことを見て取った。<sup>11</sup> (第一巻)

3. . . . しかしおそらく著名と呼ばれる者への欲望に苦しむことがある。全てがどれほど早く忘れ去られることか見るが良い。そして、現在の両方に無限に広がる時間がいかに混沌としているかを見るが良い。そして喝采の無意味さと賞賛を与える振りをする人物がいかにその判断力を欠いていて気まぐれで、その了見が狭いかを見るが良い。そして最後に沈黙するが良い。というのは、地球全体が唯の一点で、汝の場所は本当に小さなその一隅に過ぎないのである。その中には極わずかの人間しかいない、そしてその中でどのような人間が汝を賞賛しているか見るが良い。<sup>12</sup> (第四巻)

**(2) 宗教的アプローチ:** 全ての宗教は理想主義のパラダイムに属し、その目的は人々を個々人の欲望を差し置いて、全体の益に貢献するよう仕向けることである。言い換えれば、負のエントロピーを創出することを目的とする。しかしその中には違いがある。以下において、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、儒教、道教、ヒンドゥー教と仏教のあらましを検証する。

**ユダヤ教:** ユダヤ教では人類がそれ自身ではない何か他の物から発し、人力は限られているとされている。ユダヤ教信者は人間の肉体的な弱さを認識している。さらに重要なことには、信者は人間の道徳的な弱さを認識している。スミスは以下のように説明する。

彼らは基本的な人間の限界は肉体的というよりは道徳的なものであると見ていた。人間は虚弱なだけでなく罪深い者である. . . . 罪という言葉は元々「標的を外す」と言う意味から来ており、人々は常にどういうわけか標的を外し続けているのである。気高くありたいと思うのだが、通常それができず、寛大でありたいと思うのだが、他の人間に与えることができない。動物よりは崇高に作られているのだが、しばしば動物同然のところまで下落する。

最後に、ユダヤ教のその神が愛情に満ち溢れた神であるという概念から、人々は神の寵愛を受ける子供たちであるとの見方を持つ. . . . この世に於いてさえ、これほど広大にも拘わ

<sup>11</sup> 同、3頁。

<sup>12</sup> 同、20頁。

らず、また自然の強大な力に織り込まれているにも拘わらず、人は家庭で完全に受け入れられている子供の持つ自信を持って歩むことができるのである。<sup>13</sup>

ユダヤ教は人間の見識は自分自身で得られるのではなく神の天啓として得られると信じている。信者は神との契約関係に入ったと信じるのである。

天啓とは開示を意味する。．．．神学的天啓の概念もこの基本的意味を持つが、特定の種類の開示に焦点を当てている。それは神の性質と人類への意思である。

[出エジプト記を引用し]、これらの三つの出エジプト記の基本的開示—神の力、善と歴史への関心—を考えると、ユダヤ教の神の性質に関するその他の見解はすぐに理解できる。その善性からすると、神は人民にも善性であって欲しいと望むはずである。したがって、十戒が出エジプトの必然的結果として確立された場所であるシナイ山となる。預言者による正義の要求は神が美德を社会面、すなわち社会組織にも責任性を要求するところまで拡大された。最後に苦しみが最も重要な意味を持つはずだ、というのは奇跡的に民を救った神が完全に民を見捨てるなどということはありえないからである。

全体像は、ユダヤ教徒に突然開示された時、聖約の概念を中心に形成された。聖約は契約であるが、それ以上でもある。契約は（家を建てるなど）契約関係に入った者の生活の一部しか関係しないが、聖約は（結婚など）自身の全てを誓うことを含む。もうひとつの違いは契約は通常満期日を持つが、聖約は死ぬまで続く。ユダヤ教徒にとって、神の出エジプト記における自己開示は聖約への招待であった。エホバはイスラエル人が与えられた法を守り続けるという自分たちの側の責任を果たす限り彼らを祝福し続けるであろう。<sup>14</sup>

道徳法は神によって十戒の形で与えられた。

十戒がこれらの分野で定めるのは、集団生活を可能にするための最低基準である。この意味では社会秩序にとっての十戒は

<sup>13</sup> Huston Smith, *The World's Religions*, San Francisco: Harper, 1991, pp. 281–282.

<sup>14</sup> 同、303～306頁。

自然の秩序に対する天地創造の第一章に相当する。お互いが無ければ唯の無形の虚無にすぎない。天地創造は物理的世界を構成（したがって創造）する反面、十戒は社会を構成（したがって可能）にする。<sup>15</sup>

十戒は、本書が純朴な理想主義者としている社会の一般市民に向けられているが、旧約聖書は汎理想主義者にも目を向ける。最初は神の指導の下に社会を指導することを期待されている者である。最も明白な例はダビデ王である。

ダビデ王はエルサレムの聖櫃のための聖堂を建設したいと考えた。エルサレム王宮の預言者であるネイサンはエホバからダビデ王はエホバに家を建てるべきではないとのお言葉を賜った。神聖な二重協約をもって、エホバはそのかわりにダビデの家を建てるように申し付けたが、これは恒久の王朝を意味する。それからダビデの聖約と呼ばれている契約において、エホバはダビデ王朝を絶え間なく支持することを誓った：

7:16 汝の家と王国は我の前に永遠に確固として確立されるであろう。汝の王位は永久に確立されるであろう。<sup>16</sup>

次に個人を全体の益のために犠牲にするという特別の責任が与えられる者がいる。ジェレマイアなどの預言者がこの例である。

7 エホバよ、神よ、貴方は私を誘惑し、私はそれにはまった。あなたは私を圧倒し打ち勝った。私は永久に笑い者の道化師となった。みんな私を馬鹿にする。8 私が言うべきことを言い、叫ぶ度に私は「血まみれの殺人！」と叫ぶことを余儀なくされているように感じる。<sup>17</sup>

この種の自己犠牲はキリスト教のイエスキリストの話に集大成される。さらに、ユダヤ教は一神教である。エホバが唯一の神である。一神教は他の古代宗教の中でユダヤ教を特別なものに行っている。スミスは以下のように説明する。

<sup>15</sup> 同、287頁。

<sup>16</sup> Barry L. Bandstra, *Reading the Old Testament*, Belmont: Wadsworth Publishing Company, 1995, p. 264 より転載。

<sup>17</sup> The Bible 20: 7-13, Bandstra より転載、337頁。

ユダヤ教がその近隣の民と異なっているところは彼らが『神』を人間的なものであると想像したということではなく、その人間性の中の一人の崇高な自然を超越する意思に焦点を当てたことである。エジプト人、バビロニア人、シリア人とそれより劣る当時の地中海の人民にとって、それぞれの自然力に個々の神が存在した。嵐には嵐の神。太陽には太陽神。雨には雨の神。ヘブライ聖書に目を向けたとき、我々は全く異なった環境にいることに気づく。ここでは自然は全ての存在を支配する一人の神の表現である。<sup>18</sup>

旧約聖書は他教徒を敵として取り扱い、この共同体の人民と同じ様に扱われるようには意図していない。その際バールの崇拜者という用語を使い、これらの信者は旧約聖書では残酷な扱いを受けている。

2:11 イスラエル人はエホバの目には邪悪な行動を取った。彼らはバール神を崇拜した。12 イスラエル人はエホバの神を見捨てた。彼らの祖先の神であり、エジプトの地から彼らを救い出した神である。彼らは他の神々に追従した。彼らの周りに住んでいる人々の神も含めて。彼らはそれらの神を崇拜し、エホバの怒りを買った。13 彼らはエホバを見捨て、バールとアシュタロス神に仕えた。14 エホバの怒りはイスラエルに対して爆発し、彼らを襲い、近隣の敵に売り渡した略奪者の手に渡された。イスラエル人は敵に対して立ち向かうことができなかった。15 どんなに努力しても、エホバの力は彼らに対抗し、不運な結果を生んだ。ちょうどエホバがイスラエル人に誓ったように、そして彼らは困窮のどん底に突き落とされた。<sup>19</sup>

これから一般的様相が浮かんでくる。それはひとつの完全な権威で人間はただそれに従うべきであるというものである。しかし、理想主義は共同体の内部の人間にしか適用されない。部外者や他の信仰の信者は敵として残酷な扱いをうけた。

**キリスト教:** キリスト教は絶望的状态にあったユダヤ教への対応として生まれた。ユダヤ教には四つの宗派があった。ひとつはサドカイ派で現実に妥協しようと主張した。残りの三派はエホバに変革を求めた。エッセネ派は社会はあまりに腐敗しているので脱社会を図った。

<sup>18</sup> Huston Smith, p. 273–274.

<sup>19</sup> Bandstra より転載、2 3 5 頁。

パリサイ派は社会に残って、モーゼの法に厳密に従うことによってユダヤ教を再生しようとした。ゼロト派は反乱を起こすことによって変革を起こそうとし、第二の寺院破壊に繋がる。<sup>20</sup> イエス・キリストは第五の選択を提案する為に登場する。

サドカイ派と異なり、キリストは変革を望んでいた。エッセネ派と異なり、キリストは社会に留まった。軍事的選択を支持する者と異なり、キリストは平和をもたらそうとする者を賞賛し、敵でさえも愛するよう呼びかけた。一番近かったのはパリサイ派であり、両者の違いはただどこを強調するかという点だけだった。パリサイ派はエホバの神性を強調したが、キリストはエホバの哀れみの心を強調した。しかしパリサイ派はエホバは哀れみの心も持っていることと主張することに躊躇しなかっただろうし、キリストもエホバの神性をも主張しただろう。最初の違いはほとんどないように見えた。しかし現実にはそれはひとつの宗教が許容するにはあまりに大きいことが証明された。．．．

神聖要項の中にキリストが受け入れられないとする重要な特色があった。それは人々の間に引かれた線である。行動や物事を清潔か不潔という範疇に収めることから始まり、．．．神聖規則は人々をそれらの区別を尊重するかどうかによってまた分類した。その結果は障壁に引き裂かれた社会構造となった—清潔と不潔な人々の間、純潔と穢れた者の間、神聖と卑属の間、ユダヤ教者と異教徒（キリスト教徒）の間、そして有徳者と罪深き者の間。エホバの主要な性質は哀れみの心であると結論付けた結果、キリストは社会内の障壁はその哀れみの心にとっての侮辱であると見た。そこでキリストは税金の徴収者と会話し、追放者や罪深き者と食事をし、売春婦と交流し哀れみの心が休むようにいう安息日には休養した。それによってキリストは既存の秩序の限界に挑戦し、人間社会に関する異なった視野を支持する社会の預言者となった。<sup>21</sup>

キリスト教は天啓と一神教を含むユダヤ教の主要な特徴を受け継いでいる。しかしながら、スミスは、変化は哀れみ深さの分野で起こったと示唆している。哀れみの心はもう選択的に与えられるのではなく

<sup>20</sup> Huston Smith, p. 321.

<sup>21</sup> 同、3 2 1～3 2 2 頁。

普遍的に与えられた。共同体外の人々を敵として扱うのではなく、イエス・キリストは敵でさえも愛するように説教した。(Luke 6:27-36)

**イスラム教:** イスラム教はユダヤ教とキリスト教の主要な特徴を引き継いでいて、両者を「聖書を持つ人々」として尊重しているが、旧約・新約聖書を真実の一部しか開示していない、また伝道の途中で部分的に腐敗したと批判する。イスラム教は人間の理性に対してより感情的要素に傾斜しているようである。

外側から見ると違って見える。すなわち外側から見ると、コーランは全く理解不明である。雨の週末に寝転がってコーランを読んだような人はいない。カーライルは「それは今まで読んだ本の中で最も苦痛を伴うものだった。うんざりするような、混乱した、洗練されていなくて、粗雑で。義務感以外にヨーロッパ人にコーランを最後まで読ませることができない物はないだろう。」... コーランを部内者として読んだ時と部外者として読んだ時の違いをどのように理解すればよいのだろうか？

コーランが書かれている言語はアラビア語であるが、これが最初のヒントを与えてくれる。フィリップ・ヒティは「この世界で、口語でも文語でも、アラブ人ほど言葉によって感動する人々はいない。アラビア語ほど話し手の心に抵抗できない影響を与えることのできる言語はほとんど他にない。」と書いている。カイロ、ダマスカスやバグダッドの群集は翻訳されると陳腐に聞こえるような声明に最高の感情の高まりを感じさせられるようである。そのリズム、旋律的な韻律と押韻は強力な催眠的效果を生み出す。したがってコーランの天啓力はその言葉が文字通り意味することにあるだけでなく、またその意味が、音調も含めて組み込まれている言語にも存するのである。コーランは最初から口語現象であった。我々は、神の名の下に「朗読」することになっていることを覚えている！ここでは内容とその容器が切り離せなくなっているので、コーランがその元来の形で持っている感情や、熱狂を翻訳で伝えることはおそらく不可能だろう。<sup>22</sup>

スフィズムはイスラム教の神秘主義派であるがこれをさらに押し通す。主流イスラム教は創造物である人間と創造者であるアラーの神の距離を尊重するが、スフィズムは愛を通じてこの距離を縮めることができ

<sup>22</sup> 同、233～234頁。

ると主張する。また、理論的には説明できない直感と読書からの直接の認識をも強調する。

**儒教:** 孔子は古代周朝による安定した政情が崩壊した混乱の時代に生きた。戦国時代と呼ばれた数百年の間に、大変野蛮な社会となり、古代の騎士道精神は消滅した。孔子は、人々がむき出しの弱肉強食の世界で生きるピコーが野蛮時代と呼んだ時代に直面していたのである。

社会秩序の再建設を試みるにおいて、孔子は太古の習慣と伝統を再導入する道を選んだ。しかし、スミスによると、人々はすでに全く違っていた。個人主義が広まった後、人々はもう習慣に従う気持ちは無かった。そこで、孔子はまず理想主義の教義を代表する型を作って、人々をそれに当てはめようとした。

孔子は伝統に固執していたが、それは伝統は傾向と態度を決定すると見ていたからである。孔子は伝統をこよなく好んだが、それは潜在的に中国の過去の黄金時代、偉大なる調和の時代に完成された行動様式を現在に移入する手段と見ていたからである。道徳には従わざるを得なかったので、人々は遵守した。道徳は精密に形成されていたので、遵守は平和と幸福をもたらした。孔子は中国が周王朝が絶頂にあった紀元前二千年から千年にかけての時代を理想化、いやロマンチックに解釈さえしていたかもしれない。孔子がこの時代を羨ましく思い、できるだけ正確に複写したいと思っていたことに疑いはない。孔子にとって伝統は栄光ある過去からの処方箋をこの不安定な時代に割り当てる道具に思えた。．．．

孔子の過去への敬意—崇拜と言ってもいいかもしれない—は彼を好古家にしたわけではない。孔子は文字通り過去に戻ることはできない変化がすでに起こっていたことを知っていた。個人主義者になっていた中国人によって紀元前500年は紀元前千年とは切り離されていた。彼らは自意識も無かったし、物事を深く考えることも無かった。それはそうとして、自発的な伝統—意識的に形成されたものではなく、そして反対もなく村々を統治してきた伝統—はもはや不可能であった。その代替は意識的な伝統である。伝統がもはや自発的でも盲目的でもなくなった今、それは意識的な注意によって作られ、強化される必要があった。<sup>23</sup>

<sup>23</sup> 同、168～169頁。

そのためには教育が重要な役割を占めた。孔子の教育は支配者と被支配者の両方に適用された。スミスは仁義礼知信の五徳を上げる：

- 1) 仁：仁は人間が達することのできる最高の美德で教育の最終目的である。<sup>24</sup>
- 2) 義：最高の人間の意味で、細かいことにこだわる意地の悪い人間の反対である。<sup>25</sup>
- 3) 礼：これには二つの意味がある。スミスによると：

第一の意味は礼儀の意味で、物事がなされるべき方法である。孔子は人々が自分自身で礼儀を見極められると考えるのは現実的ではないと考えた。彼らには見本が必要で、孔子は彼らの注意を社会史が提供できる最高の規範に向けたかった。それを観察して、記憶して真似るのである。<sup>26</sup>

それからスミスは五つの例を挙げる。

- 名前の矯正。これは規範の意味を求めるもので、主要な名詞が人生が秩序正しく進むために必要な意味を持つ言語の作成である。<sup>27</sup>
- 中庸の教義、これは常に非現実的な両極端の中央に位置する方法である。<sup>28</sup>
- 五つの不変の関係。これは親子関係、夫婦関係、兄弟関係、先輩・後輩関係と支配者と被支配者の関係を指す。<sup>29</sup> 個々の関係において、前者がより高い立場に立ち、後者の面倒を見る。そして後者は前者を敬い、従うのである。これらは自分の生活が依存している生活の輪を壊すことなく自分個人を最大に活かせる枠組みである。<sup>30</sup>

<sup>24</sup> Joseph S. Wu, "Confucius (Kongfuzi/F'ung Fu-Tsu)," in Ian P. McGreal, ed., *Great Thinkers of the Eastern World: The Major Thinkers and the Philosophical and Religious Classics of China, India, Japan, Korea, and the World of Islam*, New York: Harper Collins Publishers, 1995, p. 3.

<sup>25</sup> Huston Smith, p. 173.

<sup>26</sup> 同、174頁。

<sup>27</sup> 同、175頁。

<sup>28</sup> 同。

<sup>29</sup> 同。

<sup>30</sup> 同、176頁。

- 家族。それは社会の基本単位である。<sup>31</sup>そして最後に年配を尊敬する心。これは孔子の年月は経験と慣れをもたらすだけでなく、賢明で穏やかな心ももたらすという信念によるものである。<sup>32</sup>

第二の意味は祭礼である。スミスによると「全ての行動には一定の様式がある。一年に二回皇帝が天命に関して天国に奉仕することから、個人が自宅で客を招待してお茶を出すに至るまで。」<sup>33</sup>

- 4) 智: 智とは力を意味するが、通常強制する能力を意味する現実主義者の定義とは異なり、『道徳的規範となる能力』<sup>34</sup>を意味する。スミスは以下のように説明する。

孔子は国民全てを常に統制できる国はないと確信していた。国の大部分でほとんどの間としても無理だろうと。国はその意思を国民が受け入れることに依存しなければならない。国家の行なっていることを国民が承認し信頼することが必要である。政府の三要素が経済的充足、軍事的充足と人民の信頼であることに注目して、孔子は人民の政府に対する信頼が圧倒的に大切であると加えた。その理由は「もし人民が政府に信頼が置けなかったら、政府は存続できない」からである。

この国民の自発的同意、国家がそれ無しでは存在できない士気は国民が、指導者が能力があって、誠実に共通の利の獲得に献身し、尊敬を促す性格を持っている時にのみ得られる。<sup>35</sup>

- 5) 信: これは芸術を意味するが、スミスによると孔子は「人性を孔子が関心するような美德の方向に変換させるのが芸術の力であると信じた。その力によって、そうでなければ難しい他人に対する思いやりを心を豊かにすることによって簡単にする力である。<sup>36</sup>

<sup>31</sup> 同。

<sup>32</sup> 同。

<sup>33</sup> 同、177頁。

<sup>34</sup> 同、178頁。

<sup>35</sup> 同、176頁。

<sup>36</sup> 同、179頁。

このように、当初儒教には宗教的要素はほとんど含まれていなかった。スミスは「彼の哲学は一般常識と俗才を混合したものであった。形而上的思想の深みは含んでいなかったし、推測に飛び込むこともなかったし、宇宙の敬神に魂を掻き立てるようなこともなかった。」<sup>37</sup>と書いている。しかし後になって、仏教と道教の要素を導入し、新儒教となる。宋朝と明朝において理学と和心学の二派が生まれる。ナドーは以下のように説明する。

宋朝と明朝の新儒教の『理学（原則学派）』（朱子によって創設される）と『和心学（精神学派）』の最も根本的な違いは賢人となるための自己鍛錬の方法である。．．． 読書や、賢人や美徳ある個人を模範したり、公共奉仕に携わったりすることによって、物事や事象の原則について注意深く熟考すること．．． は『精神を修正』することに役立つ。すなわち、主観的になったり、利己主義に導く感覚や感情を克服して管理することができるようになる。

王陽明はこの自己鍛錬は外的原則の発見を必要とするという考えを否定する。．．． これは感情を根本的に肯定的に評価するものである。感情を持つことは自然で適切であるだけでなく、自己鍛錬の過程の基本でさえある。朱子が感情は外的原則によって管理されなければならないとするのに対し、王は感情は『自己修正』であり本質的にうまくバランスが取られていると主張する。<sup>38</sup>

**道教:** 儒教と異なり、道教は支配者を正当な社会を導くために教育しようとは呼びかけない。

道教は道とその持つ力に焦点をあてる。道教は道には三つの意味があるとの主張から始まる。第一は究極の現実であり、究極的に超越的で恒久的である。これは人間の理性が理解するにはあまりにも広大すぎる。第二は宇宙の道である。これは自然の全ての規範で、リズムで、原動力である。第三は人生の道であり、これは理想の人間を定義する。

道教には三宗派がある。第一は哲学的道教で、これは知性的アプローチをとる。この宗派は宇宙と自然に於いて、エネルギーは特定の用法で流れる、人間は宇宙の縮図であると主張する。言い換えれば、自然という流れがあり、人間はその一部である。同宗派は人体を機械的

<sup>37</sup> 同、185頁。

<sup>38</sup> Randall L. Nadeau, “Wang Yangming (Wang Yang-Ming),” (Magreal, pp. 120-123), p. 120.

に捉える。個人は『気』の集合体である。我々は気を効率的に使うことによって節約すべきである。怒りや憎しみなどの特定の感情を避けよ、というのはそれらの活動はエネルギーの浪費であるからだ。エネルギーの流れが途絶されると、人々は病気になる。同派は自然は我々自身の性質であるので、自然と共に動けと教える。第二は宗教的道教である。同派は魔法を含む神秘的アプローチをとる。第三は活性道教であり、これは気を節約する以上のことを主張する。気の流れを増やすために、我々は物質、運動と精神と協同すべきである。すなわち、健康的な食事をし、身体と精神を鍛えよというものである。

**ヒンドゥー教:** ヒンドゥー教は純朴理想主義者と汎理想主義者の両方に訴えかける。その目的は人を迷わせる全ての欲望からの個人的解放である。「ウパニシャッドは外界への旅より自己の内面への旅をすることを勧める」<sup>39</sup> それから、強者には統治の責任が与えられる。

ヒンドゥー教は四つの人間の基本的目的があるとす。第一と第二は快感と成功で欲望への道と呼ばれる。人がこれらの目的を追求すると、それは満足の行くものではないことを悟る。快感は人間の精神を満たすにはあまりにも矮小すぎるのである。またそれはさらに欲望を招き、最後には中毒に陥ってしまう。成功への願望も満たされることはない。また成功した時にその成果を他人と分け合うことができない。一旦人が自己中心の焦点を越えた何かがあるに違いないと悟ると、人は自制の道に進む。それは義務と解脱（モークシャ）である。義務感には二種類ある。第一は自尊心や報酬といった外部からの影響による。究極の義務感の本質的なものであり、何の報酬も必要としない。人の究極の目的はモークシャである。スミスは以下のように説明する。

人間性の顕著な特徴は無限という概念について考える能力があることである。この能力が全ての人生に影響する。．．．善に言及すると、我々は、それについてもっと想像することができる。そして想像すると、もっと欲しくなるのである。医学は寿命を二倍にしたが、二倍生きることによって人々は死に対する心の準備ができたろうか？ それでは完全な真実を述べるためには、我々は人々が本当に欲しているのは無限の存在、無限の知識、そして無限の至福であると言わなければならない。人は妥協しなければならないがそれが本当に欲していることなのだ。それを一語で説明すると、人が本当に欲しているのは解脱（モークシャ）なのである。つまり、我々を我々の心が欲する

<sup>39</sup> Lawrence F. Hundersmarck, "Upanishads," in McGreal, p. 156.

無限の存在、無限の意識、無限の至福から制限する有限からの解放である。<sup>40</sup>

モークシャを達成したとき、人は表面的に自身だと思っていたものの奥底に本当の自身があることを悟る。これがアトマンと呼ばれるものである。スミスはこれを『全ての生命の無限の中心、あるいは隠された自身』<sup>41</sup>と呼んでいる。アトマンを見つけた時、人はまたアトマンはブラフマンと同一だと悟る。それは客観的な現実で、我々が知覚できるものの土台であり、神格である。

それからヒンドゥー教はモークシャを達成するために選べる四つの道を提示する。信者はそのうち自分に合う道を選ぶことになっている。第一はギャーナ・ヨガと呼ばれ、知識を通じてモークシャを達成する道である。これは知的アプローチで人は無限の自身を一時的な有限の自身から分離するまで学習し、瞑想することを勧める。第二はバクティ・ヨガで、愛を通じてモークシャを達成する道である。これは感情的アプローチで、人は好みの神を選び、主観と客観の壁がなくなるまで選んだ神との親密な愛情を深めることを勧める。第三はカーマ・ヨガでこれは報酬を期待することなく義務に献身することを勧める。第四はラージャ・ヨガで、心理的・肉体的鍛錬を通してモークシャを達成する道である。呼吸法や黙想を通して、別の意識の状態が生まれてくる、そして主観と客観の壁が溶解するのである。

これらの道は人生の四住期を経て進む。第一は学生期で人は伝統や職業について学ぶ。第二が家住期で、人は成人して家族を持つ。この期の終わりまでには、人は快感、成功と義務の三段階を経ていることになる。第三が林住期で、人、特に男性が森に入って真の自身を発見することになる。最後が遊行期で人は快感と成功を放棄して自由となる。

ヒンドゥー教は人は皆異なっており、社会で決められた場所があると説く。人はみな一定の性格と気質を持って生まれ、それが社会でどのような役割を果たすべきかを決定する。これがカースト制となる。主に四階級がある。僧侶階級、騎士階級、商人階級と奴隷階級である。腐敗のない理想社会では、これは弱者を守るための制度であったとスミスは主張する。「階級間では平等はない。しかし個々の階級内では個人の権利は社会で自分ひとりで生き抜くことに比べると安全であった。個々の階級は自己統治の形をとり、問題を起こした場合、同等の

<sup>40</sup> Huston Smith, p. 21.

<sup>41</sup> 同。

仲間によって裁かれる。個々の階級内では人は平等で、同等の機会と社会保障があった。」<sup>42</sup> また義務は特権に応じて分配された。

従って給料と社会権力の点で、第二階級である騎士階級が、名誉と心理的影響力の点では僧侶階級がそうあるべく最高の立場に立った。しかし（理想によると）それはその分責任も重くなるからである。国王は決して罰せられることがないというヨーロッパの教義と正反対に、正統派ヒンドゥーの見地は最低階級である奴隷階級はほとんど罰せられることがないという見解を持つ。奴隷階級に属する者は子供のようなもので、ほとんど何も期待されることがないのである。古典的法典は同じ罪に対して、商人階級の罰は奴隷階級の二倍、騎士階級の罰は商人階級の二倍であるべきだと定めている。インドでは最低階級が上級階級に課される清廉潔白さや自己否定の多くから免除されている。<sup>43</sup>

**仏教：** 仏教は腐敗したヒンドゥー教への反動として誕生した。根底には類似点がある。しかし仏教は正当な社会を統治する支配者を求めることはない。反対に好ましくない欲望を克服するため内面的アプローチを採る。仏教は四聖諦から始まる。第一は苦諦で、この世は苦悩に満ちていると明らかにする。第二は集諦で、苦の原因を明らかにし、それは個人的満足への欲望であるとし、無欲となったとき人間は解放されると説く。第三は滅諦で、苦悩を滅するため苦悩の原因を明らかにする。第四は道諦で苦悩の滅を実現する道を明らかにするというものである。それは八正道と呼ばれる。

- 1) 正見は物事を根本的に違った見地から見ることから始め、そのひとつは欠乏は人間によって作られたものであるなどである。
- 2) 正思惟は、害を及ぼすことなく紛争を避けるよう説く。
- 3) 正語はその威力のゆえに口語を特別な形の行動であると考ええる。
- 4) 正業は殺すことなかれ、盗むことなかれ、うそをつくことなかれといった道徳的要素をもつ特定の行動をとるように説く。
- 5) 正命は人を利用するなど有害な職業を避けるよう説く。

<sup>42</sup> 同、37頁。

<sup>43</sup> 同、57～58頁。

- 6) 正精進は人生で何が重要かを知るよう説く。
- 7) 正念は常に自分の思考や感情を吟味し、その根源を悟るよう説く。自省を通して、人はその心の執着的様式を知り、その心理的・肉体的状態は常に流動的で自制することはほとんどできないと悟る。
- 8) 正定によって、人は自分で思ったようなものではないことを悟る。この段階に到達すると、人は涅槃に達するのである。ここでは全ての煩惱は消え去り、個人としての心理的・肉体的存在を規定していた独自性が消滅する。涅槃を達成すると、モークシャを達成したのと同じように、至福の喜びを感じる。周りから得られる喜びは条件付きであり、真の幸福は得られない。真の幸福源は自分の中にあるのである。

仏教は大きく別けて二つの宗派がある。大乘仏教と小乗仏教である。大乘仏教は知性的アプローチをとり、個人的で釈迦の説法を文字通りに受け入れようとし、賢明を強調する。儀式にはあまり重点を置かず、釈迦を崇高な賢人と考える。小乗仏教は感情的アプローチをとり、集団的で、釈迦の説法を全ての人が同じように解釈することは不可能として比喩的に解釈する。哀れみの心や儀式に重点を置き、釈迦を救世主と考える。

**現実主義:** 理想主義者が人々を自己生存や自己栄光などの個人的関心を差し置いて、社会全体の福祉に貢献することによって、個人的にも安全を達成できるようにするよう差し向けようとするのに対して、現実主義者は人は自己保存や自己栄光を追求するものであるという前提に基づいた言い換えればエントロピーの存在を容認し、その上での解決法を提案する。ここではそのアプローチを検証する。

**マキャベリ:** マキャベリは現実主義のパラダイム内で解決法を提示したが、それは特定の歴史的状況に対応したものであった。それはフィレンチェが置かれていた状況で、内部分裂と外部からの脅威に同時にさらされていた。マキャベリは共和主義で、共和政府を望ましいと思っていたが、フィレンチェが置かれていた緊急事態においては、彼が最も重要と考えていた政治的安定を維持する為には強力な一個人が統治すべきだと考えた。この特定の目的のために、マキャベリは『君主論』を書いた。これは「目的のためには手段を選ばず」という有害な教義を支持する専制君主のための手引き書であり、悪名高いセサーレ・ボルジア（殺人魔で自分の妹ルクレシアの愛人で、暴君）を新たな君主

の模範としている。」<sup>44</sup> ここではマキャベリの目的は「人類史上最も長続きして強力な共和政府を個人の利益の為ではなく公共の利益の為に行なわれるあからさまな暴力行為（そしてそれは不可避である）によって建設する」<sup>45</sup> ことであった。その主張の中には彼の思想体系の中に根本的な現実主義の要素があることが示されている。まず最初は人間の本質であるが、これは一定で変えることはできない。ボンダネラは以下のように説明する。

マキャベリは人を利己的な動物で満たされることのない物質的欲望に支配され、自己利益の法則に動機付けられると定義している。人は信用に値しない（その信用が愛ではなく恐怖に基づいていない限り）そして人は簡単に利用され、見かけにだまされる。マキャベリは『君主論 (XVII)』で次のように記している。「一般的に人については次のように言うことができる。人は恩知らずで、移り気で、何かのふりをして人をだまし、危険を避け、欲深い。人は恐れられている人を傷つけるのは躊躇するが、愛されている人を傷つけることはそれほど躊躇しない。というのは愛は一連の義務によって繋がれているので、惨めな存在である人間は、自己利害が絡んだときには必ずその絆を破るのである。しかし恐怖は必ず来る罰を恐れることによって絆を保ち続けるのである。

第二は彼が政治を闘争と見ていることである。ボンダネラによると：

経済的欠乏の普遍的原則が世界で作用しており、人の希望は単にこの世の物質的潜在性ではまかないきれない。富を追求する限りのない人間の欲望を満たすだけの十分な物質的富は無いのである。このような貪欲な、攻撃的な人間の本質が、厳しく制限された資源と交わって、政治的闘争を不可避にしている。

マキャベリの国内的、外交的見解の両方は、彼の政治的英雄の概念と同様に、武力闘争がしばしば最も優秀で、多才な政府や支配者を決定するというものであり、決然として先見の明を持って自己防衛を行わない政府や決然とした行動を取る者に

<sup>44</sup> Peter Bondanella, and Mark Musa, ed. Trans., *The Portable Machiavelli*, New York: A Penguin Book, 1979, pp. 17–18.

<sup>45</sup> 同、22頁。

懐柔政策を採る支配者にはほとんど同情しない。したがって、彼の政治理論の中では軍事は根本的である。<sup>46</sup>

第三にこのように紛争的な世界では、力が最も重要な要素となる。ボンダネラは説明する。

マキャベリの全ての研究の中で、軍事力は国家の独立の評価において決定的な範疇である。例えば、『君主論(X)』において、公国の強さは主に支配者の軍事的自給性と潜在的敵国に対して軍隊を動員する能力によって計られるとしている。さらに公国と共和国の両方に於いて、良い法律と軍隊は『主要な礎』を提供する。しかし、マキャベリが法律より軍事力を重視するのは明らかかなようである。「強い軍隊の無いところで良い法律は存在できないからで、また強い軍隊の有るところには良い法律が必要だからである。」(君主論 XII)。<sup>47</sup>

これらの仮定に基づいて、マキャベリは解決法を提示する。ボンダネラによるとマキャベリは以下のように確信していた。

そのような紛争は実際適切に組織され、安定した政治体制によって統制されている政府では良い結果をもたらすかもしれない。．．．しかし政治的安定は、マキャベリの見解では闘争無しには、また変化や変動が許されていない固定した社会構造では達成されない。その反対に、健全な統治体は社会の摩擦や紛争で特徴付けられるものである。．．．マキャベリは政治勢力が、擬似の安定を作り出すために抑圧されるのではなく、それらによる流動的な均衡を達成することを提案した。<sup>48</sup>

新たな政治秩序を設立する際、マキャベリは中道を行くのではなく、どちらにしても決然的行動をとることを勧めている。

他の重要な外交的任務によってマキャベリは法王ジュリアス2世(1506年)とマクシミリアン皇帝(1507～1508年)を訪ねなければならなかった。最初の任務は最終的に『デイス

<sup>46</sup> 同、28～31頁。

<sup>47</sup> 同、31頁。

<sup>48</sup> 同、29～30頁。

『コルシ』の中で最も有名な一文を生み出すこととなった。それは中道的行動がいかにかに害を及ぼすかという議論と人は全くの善人か全くの悪人になる術をほとんど知らないという事実である。(I, xxvii).<sup>49</sup>

**ホッブス:** トーマス・ホッブスも内乱で分裂した英国という特定の状況に対応していた。ホッブスもまた現実主義のパラダイム内で解決法を提示した。第一にホッブスは人が置かれている現状は勝つか負けるかの両極であると定義する。

人の置かれている状況は、．．． 全民の全民に対する戦争状態があるので、全ての人は自身の理性によって統治される。そして自らの命を敵から守るのに使える物は何でも使う。ということは、そのような状況下では、全ての人は全ての物に対する権利があるのである。お互いの命でさえも。それ故、この全民の全物に対する自然権が存続する限り、誰にとっても一生を通じて安全が保障されることはない（人がどんなに強く賢明であっても）。その結果、理性の前提あるいは一般規則は、「全民は平和を達成しようと望む限り、その達成に努力しなければならない。そしてそれが達成できなければ、どのような援助や戦争の利点をも求め、利用する」となる。この規則の第一支系は、自然の第一の最も根本的な法則を含むが、それは「自然を求め、それを追い求める」というものである。第二は自然権の総体であるが、「己を守るためにはどのような方法をも用いることができる」というものである。<sup>50</sup>

ここで、マキャベリと異なり、ホッブスは人性は悪であるとは仮定せず、人は不安なのだ考える。

私は人類の一般傾向を常に止むことのない力への欲望であるとする。そしてそれは死ぬまで続く。そしてこの原因は常に人がすでに持っているよりもっと優れた歓喜を追い続けるからというのではなく、また並の力では満足できないからというのではなく、人は健全に暮らすための力と術を確証することができる

<sup>49</sup> 同、13頁。

<sup>50</sup> Hobbes, *Leviathan*, (ed. By Richard Tuck), Cambridge: Cambridge University Press, 1996, pp. 91-92.

いからである。それで今持っているだけでは十分ではなく、常にもっと獲得しなければならなくなる。<sup>51</sup>

この観察に基づいて、ホッブスは解決法を提示する。それはひとつの統合された権威による共和国である。国民は統治者との契約関係に入ることになる。統治者は、国王か議会であるが、違反者を武力を持って罰し、国民の安全が保障されるようにする。それと交換に、国民は統治者に服従する。

人（自然と自由を愛し、他人を征服したがる）の最後の存在理由、目的あるいは意図は、課された束縛の中（それを我々は共和国内に住んでいると見る）では、自己保存について不安を持たず、それからより満足のいく生活を送ることである。すなわち自らを人の自然の情熱の結果として起こる戦争の惨めな状態から脱却することである。戦争が起こるのは彼らを畏敬に服させ、契約に違反し自然法に従わない場合は罰を与えられるという恐怖に縛る明らかな権力が存在しないからである。

自然法（正義、平等、謙虚、慈悲と（要約すれば）他の人が自分にして欲しいようにしてあげなさいということ）は、それ自身ではある権力による脅威なしでは、従わせようとするものの、差別的で名誉欲があり、恨みを持つような人の自然の情熱に反するものなので成り立たない。契約は剣なしで言葉だけでは、遵守させる力はない。したがって、自然法(それは全ての人が守る意思のある時、守ることが安全な時には守ってきたものである。)にも拘わらずもし権力が存在しなければ、またそれが我々の安全保障にとって十分でないものであれば、全ての人は合法的に自己の力と技に頼ることになるだろう。それは他人への用心の為である。<sup>52</sup>

ホッブスは権力がひとつかあるいは統合されていることの重要性を強調する。国王が最も明白な候補である。しかし彼の時代には、教会がかなりの政治権力を把握していた。したがって、ホッブスは『リヴァイヤサン』のほとんど半分を教会の影響力を低下させることに費やしている。彼は教会の権威に関して三層あると認識しているようである。それはキリストの言葉、聖書、そして聖書の解釈者としての教会

<sup>51</sup> 同、70頁。

<sup>52</sup> 同、117～118頁。

である。ホッブスが最も強く攻撃するのは第三の権威であるが、彼が無神論者であると信じているものもいるようである。

教会の権力の土台は精神的なものなので、ホッブスの教会の権力を侵食しようとする試みは彼を唯物主義者とした。「リヴァイアサンはまたその過激な宗教見解でも良く知られている。それはしばしばホッブスとその唯物主義的仮定から聖書を再解釈しようとした試みであった。例えば、彼は非物理的な世界を否定するので、天国と地獄はこの世にあると書いている。そしてその他にも当時の教会の教えとは合致しない立場をとった。」<sup>53</sup>

**これらの解決法の問題点：**理想主義者も現実主義者も武力闘争を繰り返すことのない恒常的に安定した制度を確立する為の解決法を独自のパラダイム内で提案した。それではなぜこれらの解決法がいまだに成功を見なかったのか？この問題は三層から検討する必要がある。第一は個々のアプローチに内在する問題である。第二は理想主義と現実主義全般に内在する問題である。第三は理想主義と現実主義自体の限界である。

**(1) 個々に内在する問題：**このレベルでの検証を実施するためには個々のアプローチについてもっと詳細な研究が必要となるが、それは将来の世代に任せたいと思う。ここでは目に付いたいくつかの問題を挙げておくことにする。例えば、ヒンドゥー教ではモークシャを達成した人は森の中で隠遁生活を送ることになっているが、ということは社会はいまだに欲望に満ちた人によって統治されていることになる。この形態ではモークシャを達成した個人の恩恵は社会一般には広まらない。またカースト制は元々社会での重荷を個人の能力にしたがって分配しようとした試みであったが、世襲制はここでは機能しないようである。もしある社会がこの能力による重荷分配の制度を導入しようとするのであれば、個人の能力を評価する必要があるであろう。さらに、個人でさえ一生の間に成長することがあるので、この種のアプローチにはかなりの融通性が必要となろう。

ここで一般論を述べると、当然のことながら、理想主義の原則は特定の時代と人に合うように調整されなければならない。物理工学では、飛行機には数人用からジャンボ機まで各種のサイズがある。またジャンボ機の中でも、座席の配列から色合いまで意図する乗客の必要や好みによって多数の内部デザインの選択がある。しかしそれらは全て航空力学の原則に見合ったものでなければならない。宗教も特定の聴衆

<sup>53</sup> <http://en.wikipedia.org/wiki/Leviathan>

に合うように調整されなければならないが、根本原則は変えることができない。そこでここではどの要素が不変の根本原則で、どの要素が変更可能な特定事情であるのかを見極める必要が出てくる。一般法則は宗教の一貫性を保つためには維持されなければならないが、特定の必要に対応するだけの柔軟性も必要である。これは物理工学では簡単であるが、形而上工学においては、必ずしも明白ではない。例えば、キリスト教がコンスタンチヌスによって合法化された後、最初の真剣な議論はキリストの神性についてであったが、汎理想主義者の見地からすると、これは全ての信者が同意する必要がある根本的原則ではなく、個々の信者の解釈に任せられるように思える。

**(2) 理想主義に内在する問題:** 私の見る限り理想主義には四つ主要な問題が内在する。第一は第二章での歴史検証で観察されたように、理想主義の宗教的アプローチにはジレンマがある。キリスト教などの宗教は世俗的指導者にとって便利な道具であった。世俗的指導者が経費のかかる武力による威嚇を使わずに支配を確立する要素を含んでいたのである。すなわち「私に仕えることは神に仕えることだ。」と言うだけで、被支配者層からの献身を勝ち得ることができたのである。一方、宗教的原則は理想主義社会の確立というその究極の目的を達するためには政治的影響力が必要であった。したがって、西洋文明では、宗教的権威と世俗権威は当初は協調的関係を結び、後に世俗的影響によって腐敗したのである。これに反して、仏教はその該当する文明で政治的影響力を得ることができなかつた。世俗的支配者によって保護を受けたこともあったが、キリスト教のように恒常的影響力を得ることはできなかつた。この違いは二者の根本的アプローチにあるようである。全ての宗教は根本的問題は人が自分を愛するほどには他人を愛さないとあるということでは同意しているが、これには二つの解決法がある。キリスト教はこの問題を自己愛を普遍的愛に拡大することによって解決しようとする、すなわち他人を自分と同じように愛せよと。一方仏教は自己愛を消滅させようとする、すなわち私は他人ごとのように自分にも無関心でいられると。その結果、仏教のアプローチは消極的すぎて、世俗的支配者が利用する方法を見出せなかつた。宗教はその高潔さを維持しなければならないが、政治的にも関与しなければならない。歴史によるとこれは大変難しいバランスである。

第二に宗教には多神教から一神教へ、また小規模から大規模へとその発展に一定のパターンがあるようである。アスマンは以下のように分類している。「多神教は常により古い一次的な宗教で一神教はより

新しい二次的な型の宗教である。」<sup>54</sup> 多神教の中には一神教に移行する物もある。ショーはそのような傾向をエジプト新王朝の太陽神ラーへの移行に観測している。

太陽神と国王が、数世紀を通じて発展する間にエジプトの神学思考とカルト礼拝の核心を成した。太古の創造神でもあった太陽神の日程がその創造物の生存の存続を保証した。寺院では太陽神の毎日の天界を通過する旅程が儀式と聖歌によって象徴的に演じられたが、その主な目的は宇宙の創造された秩序を維持することであった。国王はこの毎日の儀式で重要な役割を担った。彼は太陽神の日常の旅程についての全ての側面に親密な知識を持った主要な担当官であり、太陽僧であった。毎朝の日の出は「第一機会」、すなわち最初の世界創造の反復であった。ラー自身が死と再誕の日常の周期を辿り、そこで再活性化され、朝にはラー・ホルアハティとして再誕生した。闇無くしては光は存在しえない。死無くしては再生と生命はありえない。太陽神とともに死も再生した。それはラーの毎日の旅程に参加し、同じ死と再誕の永遠の周期を辿った。オシリスは死と黄泉の神で、他界した者は伝統的にこの神と共にあるとされてきたのだが、徐々にラーの一側面であると見られるようになってきた。そしてこれは全ての他の神にとっても同じことであった。というのは、もし太陽神が太古の創造者であるなら、他の全ての神はそこから誕生したのであり、したがって太陽神の側面なのであるのである。この意味では、一神教の形式への傾向はエジプト新王朝の宗教に内在するものであった。<sup>55</sup>

この機能的統合に加えて、異宗教間の統合も進んだ。古代社会では、個々の共同体が土着の宗教を持っていた。これらは徐々により強大な共同体に編入されていった。エジプトの場合、旧王朝では、

古代エジプトの宗教的信念は地元によって多岐にわたり、社会的には層化していた。事実上エジプトの全ての地域が土着の神を持っており、それが住民にとっては最も重要な神であった。

<sup>56</sup>

<sup>54</sup> Jan Assmann, "Monotheism and Polytheism," in Sarah Iles Johnson ed., *Ancient Religions*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, p. 17.

<sup>55</sup> Ian Shaw, *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford: Oxford University Press, 2003, p. 266.

<sup>56</sup> 同、1001頁。

エジプトは権力分散の時代を経験したが、新王朝下で再び中央集権化に成功し、影響力の低い共同体はエジプトに統合されて行った。

平和はまたエジプト人の近隣の異国に対する態度も変えた。それらはもう主にエジプトを囲んでいる混沌の敵対勢力として見られることはなくなり、歴史の最初に作られた秩序ある世界であった。アメンホテップの王宮は国際的に重要な外交の中心地となり、エジプトの近隣諸国との友好的接触が外国文化への許容的環境を作り出した。王朝の初期に、移民が土着の神をエジプトに持ち込み、それらの神の中には特に、その戦闘的側面でエジプト王と関連付けられるようになったものもある。しかし今では、外国人は自身が創造の一部で、太陽神ラーとその地上の代表であるファラオの情け深い支配によって守られ、支えられているのだと見られるようになった。<sup>57</sup>

時には、この過程は平和的なものであったが、そうでない時もあった。統合が完成するまでは、外部者は敵と見られた。理想主義はこれらの敵には適用されなかった。したがって、ほとんどの宗教は理想主義を共同体の内部の人間に適用し、その外部者には現実主義を適用する。これは世界全体が一つの共同体となるまでは、たとえ個々の共同体が理想主義社会を達成しても、常に敵対する勢力が存在することになる。

これに関連して、共通の敵の問題がある。内部の団結を達成する為にこれは有効な手段として使われてきた。十字軍の遠征がその例である。これは一共同体が団結する為には共同の敵と戦うという形で意見の相違を移出する必要があるのかもしれないことを示している。

第三に規模の問題がある。愛を教義とする理想主義の一派は普遍の愛を推進しようとする。しかしもし世界全体が一つの共同体になるとすれば、地球の反対側に住む会ったこともない誰かを家族と同じように愛するという事は果たしでできるのだろうか？これはプラトンが掲げた忠誠心の問題である。彼は哲学王の訓練の際家族から引き離すことを提案した。キリスト教も普遍の愛を説くので、忠誠心の問題にぶつかる。パペチュアの殉職がその例である。パペチュアは3世紀に22歳でキリスト教に改宗したばかりの信者であったが、ローマ帝国によって処刑された。パペチュアは死を覚悟していたが、父が気持ち

<sup>57</sup> 同、265頁。

を変えるよう懇願した。しかし最後には彼女はキリストへの忠誠を選んだ。

実証的には、全ての宗教が、広大な領土において多大な人口をひとつにまとめることは不可能であることを提示してきた。キリスト教がユダヤ教から分離した。それからカトリックとプロテスタントに別れ、プロテスタントは多数の宗派に分離した。イスラムは正統派とスフィに分かれた。正統派はシーア派とスンナ派に分かれた。仏教は大乗と小乗に分かれ、それぞれが異なった国で多くの宗派を持つことになった。

これは古代宗教の現代社会への適用の際の究極の限度かもしれない。古代の灌漑システムが現代の人口を支えきれないのと同じように、古代の宗教は規模のずっと大きい現代社会で有効に作用することは不可能なのかもしれない。野生の王国を見てみると、動物は血族関係を使って古代の地方的人間の共同体に似た共同体を形成している。アニマル・ブラネットが放映した『ミアキャット・マナー』で見られるのが一例である。ここで、彼らの生活の二側面は現実主義によって司られている。ひとつは部外者に対してである。部外者に対しては彼らは強烈に戦う。温情というものはない。彼らは敵の小さな子供を殺す。もうひとつは生殖権である。雌ミアキャットは支配権を獲得または保持するためにお互いの子供を殺しあう。しかし一旦支配者が選ばれると、理想主義の教義が司る。このテレビ番組では、フラワーという女族長が完全な権威を維持し、全ての決断を群れにとって最良となるように下していた。群れの安定を維持するために、フラワーは厳しい規則を課し、違反者は追放された。それでも権力の乱用はしなかった。実際、敵の群れと戦うことを決めた時には、フラワーが先陣を切った。最後にはフラワーは子供を守るために命を犠牲にした。動物はこれらを宗教や哲学の力を借りずにやってのけている。だからみんなが親戚であるような小さな共同体では内部の団結を保証する為に宗教は必要ではないことになる。宗教はある程度規模の拡大に貢献した。いや多大に貢献したといってもいいかもしれない。しかし、宗教戦争の規模とその犠牲者の規模が劇的に増加した歴史が示すように完全に達成できない限り、むしろ有害となる場合がありえる。50人が殴り合っている代わりに何百万人という人間が殺しあうことになるのである。

第四に、理想主義は未だに感情と知性の統合に成功していないようである。西洋文明では、知性的アプローチは哲学となり感情的アプローチは宗教となったが、理性と信仰の間で緊張関係が続いた。例えば、ダンテはキリスト教信者ではないという理由だけで、プラトンとアリ

ストテレスを天国に位置することができなかった。イスラム教も全般的に感情的アプローチに傾斜しているようだが、正統派はより知性的で、スフィは感情的である。仏教も知性的に傾斜した大乘仏教と感情的に傾斜した小乗仏教に分かれた。儒教は知性的であったが、発展の過程で、仏教と道教の宗教的要素を導入し、新儒教を生み出した。これが知性的に傾斜する理学と感情的に傾斜する和心学に分かれた。道教とヒンドゥー教にも哲学的な宗派と宗教的な宗派がある。

**(3) 現実主義に内在する問題:** マキャベリもホッブスも名君を平和的解決法として提案している。マキャベリの君主は残虐極まりないにもかかわらず、「個人の利益よりは公共の利益のために」行動しなければならないとなっている。<sup>58</sup> ホッブスの解決法も中央集権に依存している。この点で、現実主義者の先駆者たちは究極的には理想主義のパラダイム内で活動していたことになる。彼らにとっては現実主義は理想主義の目的を達するための手段に過ぎなかった。しかし中央権力とは何か？ 言わせてもらえば、権力闘争者は全てこの中央権力の座が欲しくて争っているのである。ということはこれは解決ではなく問題の原因ということになる。また実証的に、もし歴史的特殊条件によって現実主義者が中央権力の座に着けたとき、間違いなく権力を乱用している。ヒトラー、レーニン、東条などがその例である。

後の現実主義者は独自のパラダイム内でその弱点を利用した解決法を提案している。現実主義は脅威に基づく教義から成り立っているが、これは規模の問題に繋がる。大規模な領土と人口を強制だけによって支配することは不可能である。マフィアは地元近隣の住民を脅威にさらす。対抗するマフィア・グループと近隣の縄張りを争いあい、対抗するグループからの保護を住民に提供しその見返りに支払いを強制する。このような方法は直接の強制ができる範囲でなければ成り立たない。このような方法で何百万人という人口を効率よく支配するのはあまりに費用がかかりすぎる。

したがって、現実主義者が広大な領土や人口を支配することは元々難しいのである。そこで現実主義者の提案する解決法はその自然の傾向をさらに確実な物とするため、権力を分散し集中しないことを目的とする。マキャベリの国内政治体制はこの考えを反映している。国際政治に目を向けると、ハンス・モーゲンソーはバランス・オブ・パワー論を提案した。これによると、国家は支配を巡って競合するが、一国が支配的地位を占めるのは不可能である。というのはもし一国が強力に

<sup>58</sup> Bondanella, p. 22.

なってくると、他国が一丸となってさらに強力となるのを阻止するからである。これが確実に作用するために、モーゲンソーはバランスーの存在を提案する。19世紀のヨーロッパでは英国がこの役割を果たした。より強力な国に直面して自国を破壊するような馬鹿な国はないので、そういう時には後に引く。したがって、純粋な現実主義の世界では多くの小さな闘争が起こるが、大量殺戮には至らない。

明らかに、これは実証的に間違いであった。それでは第一次世界大戦や第二次世界大戦などの大量殺戮はどうして起こったのか？ この問題を取り扱うために、以下において理想主義と現実主義自体の問題に取り組む。

**（４）理想主義と現実主義の限界:** 理想主義は人は全て善人である、あるいは教育によって善人にできると仮定する。だから有能な支配者と人々の教育に焦点を当て、悪をどのように取り扱うかについては焦点を当てない。一方現実主義は、人は全て悪人であるか、善人であっても事情によって善人として振舞うことができないと仮定する。だから、悪が集中して多大な害をなすことを防ぐことに焦点を当てる。ここで物理工学のアナロジーを使えば、エンジニアが飛行機を設計する際、まず飛行機を空中に飛ばすためには揚力が必要であるが、それだけでは飛行機は空中に留まることができない。そのためには抗力を下げなければならない。ということは、揚力か抗力だけに焦点を当てていたのでは飛行機は設計できない。そのためには揚力対抗力比が適切でなければならない。形而上学に戻って、理想主義は揚力の向上だけに焦点を当てているのと同じことをしていることになる。すなわち、有能な支配者を訓練して完全な権力を与えようとするのであるが、これは抗力を無視していることになる。一方現実主義者は権力集中をできる限り防ごうとするが、これは抗力を下げることに焦点を当てて揚力を無視しているのと同じことである。これが示唆していることは、揚力を上げることだけでは、また抗力を下げることだけでは目的は達成できないことになる。両者は合成されなければならない。ここで、このイメージは形而上の世界についてより適切な理解をもたらすかもしれない。確固とした地面ではなく、形而上の環境は空気に近いものかもしれない。したがって、堅固な建物を地上に建てるというよりは、常に変動する気流のなかで滞在できる飛行機を製造するという方がより近い物になるかもしれない。

これらは予備的検証である。これらの中には工学レベルで対処できるものもあるが、より深い検証を必要とするものもある。以下において、それらの問題を理論レベルで取り扱う方法を検証する。

### 分野検証—形而上理論

本書の主な焦点は形而上工学であるが、全ての関連事項を工学の層だけで扱うのは不可能である。ここでは、理論層を取り扱うが、残念ながら、私はこのレベルを取り扱うだけの能力は無いので、ここでは汎理想主義者がピコーの周期を制御し、恒久平和を確立する為にはこの層でどのような研究が行なわれる必要があるかをできる限り述べることにする。この作業には終わりはないが、ここでは三点の問題を提示する。

**知能と感情の関係：**上記において、理想主義・唯心主義は知能と感情の統合にいまだに成功していないことを示した。したがって、知能と感情を結合する根本的理論が必要である。この作業は我々の時代のように感情などの非物理的要素が無視されている唯物主義が主体の時代に遂行するのは大変難しい。知能と感情をいまだに統合した形で取り扱っている分野は芸術だけである。したがって、この分野の検証を行ないそこからできるだけ学ぶことが必要である。しかし、先に進む前に、我々が芸術から学んだことが、形而上工学の分野にそのまま当てはまるかどうかを検証する必要がある。芸術はその分野以外でも関連性を持ちうるか？これに関しては学者間でも議論がある。例えば、メイヤーは音楽の世界を以下のように観察する。

あらゆる文化において作曲家、演奏家、種々の学派や形式の理論家、審美哲学者や異なる確信を持つ批評家は皆、音楽は意味を持ち、その意味はどうかして参加者や聴衆に伝わっているという点で同意している。少なくともそこまでは当然とみなしてもよいかもしれない。しかし、音楽的意味を成すものが何か、またどのような過程を経てそれが伝えられるのかについては数々のまたしばしば白熱した議論の対象となってきた。

最初の主な意見の相違は音楽的意味がその作品自体の枠組みの中、芸術の音楽的作品の内部で明確にされた関係の知覚の中にのみに存すると主張する者と、これらの抽象、知能的意味に加えて、音楽は又、概念、行動、感情の状態と性格の音楽外の世界にもなんらかの方法で意味を伝えていると主張する者の間

で起こっている。前者を『絶対主義者』、後者を『参照主義者』と呼ぶことにしよう。<sup>59</sup>

メイヤーの説明に基づけば、プラトンは参照主義者ということになる。プラトンの芸術に対するアプローチは芸術が性格形成に直接の影響を及ぼすと主張しているように見える。すなわち、正しい種類の芸術は哲学王にふさわしい性格の形成をすることができるが、間違っただ種類の芸術は悪影響を与えるというものである。もしこれが正しいのなら、芸術家は形而上工学者である。ということは我々が成さなければならぬことはプラトンの主張に基づいて、どの種類の芸術がどのような性格をもたらすかを研究することになる。最後には私はこの考えを破棄した。個人的にはその反対の絶対主義者も間違っていると思う。そしてその間に三つの可能性があると思う。

第一の可能性は人間の真の感情の参考点として作用することである。私の信じるところでは、人は実際の人生の旅を通じて性格を形成しなければならない。性格を形成するのは人生の実体験とその対応であろう。芸術家ができるのはどのような精神的状態を達成することが必要かを示し、そこに辿り着いたときに分かるようにすることである。

第二の可能性は芸術は本書の関心には直接の関係はないが、これが感情と知能の関係を扱う唯一の分野であるので、ここからできるだけ学んで一般論を引き出し、その一般論を使って独自の工学プロジェクトを制作しようというものである。それは航空力学の原則を知らないときに飛行機が飛んでいるのを見て、それを検証することによって、航空力学を発見しようとするようなものである。一般論が一旦得られれば、それをレースカーに応用してダウンフォースの生成に使うこともできる。異なっただ分野であるが、同じ原則ということになる。

第三の可能性は主観と客観の連結点としてである。第四章で述べたように、物理工学と形而上工学の違いの一つは形而上工学では研究者は又同時に研究対象物でもあるということである。物理工学ではエンジニアであると同時に製作中の機体を構成している鉄鋼の柱であるというようなことはありえない。ランガーは芸術を『内面の性質を外部に提示するもの、主観的の真実の客観的の提示』<sup>60</sup>と定義している。

まだ我々は芸術が形而上工学の分野でどのような役割を果たすべきか完全に見極めていないが、本書では何らかの関連はあり、それはい

<sup>59</sup> Leonard B. Meyer, *Emotion and Meaning in Music*, Chicago: University of Chicago Press, 1956, p. 1.

<sup>60</sup> Suzanne K. Langer, *Problems of Art*, New York: Charles Scribner's Sons, 1957, p.9

ずれ明らかになるだろうと仮定する。形而上理論の分野検証の最後にこの点に戻ることにする。

この前提に基づいて、知能と感情の関係を芸術を通して検証することにしよう。知能と感情の伝達を難しくしているのは言語の問題である。知能は言葉に依存するが、感情は言葉だけでは伝えきれない。ランガーは以下のように主張する。

それでも主観的存在は構造を持つ。それは刹那的に見られるだけではなく、観念的にも知り、熟考し、創造し、詳細にまたずっと深く象徴的に表現することもできる。ただ我々が感性の生命として知っている物を表現するために役立つのは我々の通常の手段である談話—言葉による意思伝達—ではない。言語がなぜこの目的に見合うことができないかについては理論的な理由がある。．．．重要な事実は言語が簡単にできないこと—感性的また感情的な性質や様式を提示すること—は芸術によって成されているということである。このような作品は表現的形式を持ち、それが表現しているのは人間の感性の性質である。<sup>61</sup>

ラングも音楽においては感情を表現するには言葉は十分ではないとも主張している。「感情と興奮が絶頂に達したとき、音楽に移ることは、劇の最も単純で古い形式の性質であった。その理由は音楽は深く揺れ動かされた人の魂が言葉にならないため息としてしか表現できない感情を引き続いて表現することができるからである。」<sup>62</sup>

それでは知能と感情はお互いに連絡を取ることができない別途に仕切られた別分野なのであろうか？この問題に関しては、詩が知能と感情の架け橋となりうるのではないかといういくつかの可能性を発見した。第一にジャンバチスタ・ピコーは歴史の解釈において詩の重要性を強調している。

言語と文字の起源の法則は最初のキリスト教信者は自然と必要であったので、詩的特徴を遺って話した詩人であったという事実存することを発見する。この発見は、この科学の主要な鍵であるが、我々の文学生活のほとんど全てを止むことなく研究し続けることを必要とした。というのは我々の文明的性格では、我々現代人は創造力を全く欠いてしまい、これらの古代の人間

<sup>61</sup> 同、7～8頁。

<sup>62</sup> Paul Henry Lang, *Music in Western Civilization*, New York: W. W. Norton, 1941, p. 12.

の詩的性格を理解するためには四苦八苦しなければならないからである。我々が言語で使う詩的特徴はある種の想像の分野に属するのである（大半は彼らの想像力によって形成された生き物、神や英雄のイメージである。）彼らは個々の種類に関連する特定の特徴を全ての種類に当てはまるように簡略化してその想像的分野を作った。それは後期の喜劇に見られるような人の時代の寓話が道徳的哲学によって理解できるよう理由付けされてできたのとまさに同じことである。そこから喜劇詩人は想像的分野を形成し、それは喜劇の人間であるが、種々の人のタイプの最良の概念はまさに喜劇の人間なのである。これらの神や英雄的な登場人物は、真の寓話や神話であり、その寓話は類推ではなく明瞭で、またの哲学的ではなく当時のギリシャ歴史の意味を含んでいた。

これらの分野は（というのはそれが寓話の根本であるからだ）論理力の最も欠けていた人の持つ最も生き生きとした想像力によって形成されたので、われわれはその中に最も詩的な文章を発見する。それは最も激しい情熱とそれゆえ崇高で感情を揺さぶる不思議に満ちた感性に違いない。ここでこれらの詩的言葉遣いの源は二つある。言語の貧困と説明し理解されることの必要性である。神の時代に使われていた、それらが意味すべき概念と自然に関係のある行動や物象に関する抑えた言葉遣いは直後に英雄的な口調に取って代わられた。最後に、人間組織の必然の発展過程の中でアッシリア人、シリア人、フェニキア人、エジプト人、ギリシャ人、およびラテン人の間で言語は英雄詩として始まり、それから短長格へと移り、最後に散文の形を取るに至った。これが古代の詩人の歴史に確実性を与え、なぜゲルマン言語、特に農民地域のシレジアでは、多くの自然の詩形成体が存在するのか、またスペイン語、フランス語とイタリア語では最古の作家は詩の形式で執筆したのか説明することができる。<sup>63</sup>

それではこれは古代社会では、人々は知能的にはそれほど複雑な思考を持たなかったが、知能と感情の溝は現代ほど大きくなかったと解釈できるのであろうか？ 文明が発達するにつれて、知能と感情は哲学と芸術に二極分解したということであらうか。

<sup>63</sup> Giambattista Vico, trans. by Thomas Goddard Bergin and Max Harold Fisch, *The New Science of Giambattista Vico*, Ithaca: Cornell University Press, 1976, pp. 21–22.

第二に、ラングは詩と音楽の接点とその緊張関係について語る。彼のルネサンス時代のフランス音楽に関する議論がその一例となっている。

すでに吟遊詩人のシャンソンは、音楽的なリズムが、主に脚本の韻律とリズムによって決定された国家の芸術を代表していた。詩と音楽の結合に於いては、詩の方が支配的であった。言葉が音符を支配した。したがって、その極初期からフランス音楽は口語的要素が浸み込んでいた。そして知性主義が談話の言語の道具としての言葉に続いた。これはフランス音楽の根本的特徴である。それはフランス芸術の全ての表明に見られる特徴である。ロンサードは器楽においては、「心地よい声楽のメロディが伴わなければ全く聞き心地が悪い」と言っているが、器楽はフランスでは19世紀まで高い人気を得ることはなかった。まったく実演されなかったわけではもちろんない。しかしフランス人は今日に至ってもまだ *du chant* (歌) にこだわり、音楽では音が聞く耳に心地よく、その反面台詞が精神を刺激するのを常に好むフランス人を喜ばせることはできなかった。

器楽では、純粹な知性はその基盤を失う。そしてフランス人は全体にまた段階ごとに理解することのできない何かを聞くという考えに恐れおののいたのである。<sup>64</sup>

第三に中には詩を架け橋として使っていた芸術家もいたようである。ミケランジェロはダンテの『神曲』を完全に暗記していたとのことである。また若いときペトラルカ風の詩を書き始めた。ワラスによると、ルネサンス時代の読書は量ではなかった。人は数冊の本を選んで、深く読み込んだという。<sup>65</sup> それではなぜミケランジェロは『神曲』を選んだのか? 興味深いところである。さらに、ワラスは以下のように付け加える。

ミケランジェロは明らかに彫刻中に詩について考えていた。彼の仕事場のメモ用紙にしばしば詩が走り書きされているのが見つけられる。ミケランジェロは詩と彫刻の間を大儀なく行き来した。金槌のリズムは彼には詩に聞こえた。彼の詩はその石の

<sup>64</sup> Lang, p. 216.

<sup>65</sup> William E. Wallace, *The Genius of Michelangelo* (Lecture Tape), Chantilly, Va.: The Teaching Company, 2007, Lecture 4.

ような元素を持ち続けた。彼の詩を研究した者はほとんど全て『岩のような』という形容詞を使って、その詩の特徴と複雑さを表現する。<sup>66</sup>

第二回目の講義では、ローレンシアン図書館の設計図上に走り書きした彼の詩を実際に見ることができる。<sup>67</sup>

『神曲』はイタリアのテルツァ・リーマという三韻句法で書かれた詩であるが、正義とはなにか、我々はどのように統治されるべきかといったプラトンが『国家論』で取り扱ったのと同じ問題を取り上げている。同時に同じ重要性を持って、ダンテはどのように詩を書くべきかまた芸術が何のためにあるのかといった問題にも取り組んでいる。<sup>68</sup> プラトンの芸術や詩に対する態度はぎこちなく、性格形成に於いてその価値のある程度は認めているようだが、最後には詩を攻撃している。したがって、ここではすでに詩は、知能的明確さを犠牲にすることになるかもしれないとはいえ、感情に向かってより広い範囲を含むことができることを示唆している。『神曲』には政治と詩が並行して論じられている箇所がいくつかある。異端者が罰せられる地獄では、最初の罪人は政治を論じ、二番目の罪人は詩を論じている。<sup>69</sup> 煉獄では、ダンテは詩人に会って政治について論議を交わす。この最初の政治と詩の出会いは友好的なものであった。<sup>70</sup> 煉獄での巡礼の終わりの方で、ダンテを案内していたウェルギリウスは「理性が許す限りの範囲で案内をして来たが、最後の答えは案内役としてベアトリーチェを待たなければならない。」と言った。<sup>71</sup> これがキリスト教のとる立場、すなわち、人間の理性は限られていて、最後には天啓に依存しなければならないというものである。これは人類が理想社会を確立するためには知的能力に加えて、感情的能力も必要だと言う風に解釈できないだろうか？天国ではダンテは言語の限界を認めている。

クック等は以下のように説明する。「言語自身が旅をする間に変わっている。地獄での対話は荒々しい。天国ではダンテ自身が作った新しい単語を導入している。彼の経験は言語の限界を強調している。」<sup>72</sup>

<sup>66</sup> 同、Lecture 20

<sup>67</sup> 同、Lecture 22

<sup>68</sup> William R. Cook and Ronald B. Herzman, *Dante's Divine Comedy* (Course Guidebook), Chantilly, Va.: The Teaching Company, 2001, p. 1 and p. 4.

<sup>69</sup> 同、22頁。

<sup>70</sup> 同、42頁。

<sup>71</sup> 同、49頁

<sup>72</sup> 同、59頁。

これは、言語は最後まで行くことはできないが、詩が知能と感情の架け橋となれるという一般論と合致している。

比喩の使用は詩の重要な部分である。例えば『神曲』では中心的比喩は『屈従から自由への旅』である。<sup>73</sup> 形而上の現象を知覚する為には、物理的現象の比喩を用いる他ないと私は思っている。本書は二つの中心的比喩を用いている。形而上工学を物理工学を通じて知覚することと、形而上の世界を地図で示された地理的世界を通じて知覚することである。詩が微分・積分が物理工学で演じている役割を演じることはできないだろうか？

明らかに、この試みには問題がある。第一に詩が微分・積分の役割を果たせないだろうかという問題について文学教授と話し合ったことがあったが、彼は全ての人が数式のように詩を同じように解釈することは不可能だと言った。詩人と読者の間でさえ、合意できる解釈はないのである。詩人はあることを意味するかもしれないが、個々の読者はそれから他の事を読み取るかもしれない。そしてそれには何も問題はないのである。音楽でもよく似た問題に突き当たったことがある。ここでは作曲家と演奏家が自分の考えをそれぞれ持ち込んでいた。これはあたっているかもしれないが、私は意識の表面近くでは多数の感情が存在するかもしれないが、『キリストの死』、すなわち人類が理想社会を築こうとするが何度やっても到達することができないことを悲しむ感情といったような深い感情になると、人類全てが唯一の感情を分け合えるのではないかと考えている。

もうひとつの問題は異なる言語である。微分・積分は全世界を通じて共通であるが、詩を音楽に近い物にする韻律や押韻は言語間で自由に移動することができない。ここで私は旧約聖書のヘブライ語の詩に出くわした。ガベル等は以下のように説明する。

ヘブライ語の詩で重視されている要素は外的形式よりも思想の構造であり、ヘブライ語の詩は一連の感覚単位をお互いにある種の簡単な関係の法則に従って構成している。

これらの感覚単位は明らかに文法的な一貫性で文節に構成され、しばしば完全な文章となる。

これらの単位の関係を示す一般用語は『並立法』である。ヘブライ語の詩の中に見られるいくつかの並列法のうち、最も単純なものは同じ思想を異なった表現で繰り返すことから成って

<sup>73</sup> 同、83頁。

いる。一つの単位から次の単位への違いは言葉遣いだけである。それゆえ、この型の詩は『同義』と呼ばれる。．．．

現代の読者は、これに直面するに際して見解を調整しなければならない。我々の独自の形式は、重複を好まず、その法則の上に詩を形成することはさらに問題である。しかしヘブライの詩人はそうは考えず、異なった伝統の枠内で作詩したのである。現代の詩人は何かをいうと、即座に次の段階へその詩を進めたくなる。．．． 一方、古代のヘブライの詩人はそんなに急ぐ必要はないと考えていたようである。もしその思想が本当に重要なら、一文で言い切れるものではない。それを手にとって他の角度から見て見ることによって、ヘブライの詩人はその重要性をより完全に表すことができたのである。

理論によって繋がっているあるいは詩人の前向きの思考によって繋がっている単位には『合成』という用語が当てはめられた。．．．

第三の主な並立法の形式は『対照』である。これは単位がその前の単位を否定するあるいはその例外を提示するとき起こる。．．． 他の並立法の形式には派生またはこれらの基本の変形がある。その中で二つは特に重要である。『象徴』並列法は同義的並列法の変形であるが、ここでは思想は半分は文字通りに半分は比喩的に表現される。

『最高潮』並列法は同義語を短い文節の繰り返しで積み上げである種の最高潮に持っていく方法である。．．．<sup>74</sup>

私には、これは多大な可能性があるように見える。これらの並列法の組み合わせが知能と感情、あるいは理想主義と現実主義の関係の検証に大きな貢献を与えることができるかもしれない。最低でもこれらの二要素に同時に直面することを余儀なくされる。もし文学的才能が私にあれば、これに関してさらに実験をしたいところであるが、汎理想主義者のコミュニティは有能な詩人が汎理想主義の教義に献身してくれるまで待たなければならないだろう。

しかし、我々はここであきらめてただ待っているわけにはいかない。我々は芸術の分野をできる限り最良の方法で検討する必要がある。知能と感情の関係に取り組み始めるとすぐに、私はその複雑さを認識したが、この問題は私が音楽を勉強していた時に、小規模な形で取り扱

<sup>74</sup> John B. Gable and Charles B. Wheeler, *The Bible as Literature: An Introduction*, New York: Oxford University Press, 1986, pp. 37–40.

うことができた。声楽の授業を受けていた時であるが、教科書にヘンデルのリナルドの中のアリア『Lascia ch'io pianga』があるのを見つけた。これは何年も前に映画の中で使われていたときに初めて聞いたのであったが、聞いたとたんに引き込まれてしまった。これは悪人に誘拐された王女が自分の不憫な運命を嘆く自己憐憫の歌であるが、練習している時、あまりに感情的に激しかったので、歌っている最中に泣き崩れてしまい、最後まで歌うことができなかった。感情移入などは問題外であった。その時、私は芸術では生の感情は伝えることができないことを学んだ。聴衆に自分が感じている感情を伝える為には、知能による制御が必要である。そうでなければ感情が見境なく暴れまわってしまう。音楽理論の勉強と楽譜の分析は知能にこの感情を制御する手段を与えるのではないかと考えている。

それから又別の層では、愛して止まないバッハの『マタイ受難曲』の中のアリアに注目し始めた。そのとき気が付いたのはこのアリアはヘンデルのアリアよりも深い感情を扱っているということだった。ヘンデルのアリアは「私の悲しい運命を嘆く」自己憐憫の感情であるが、マタイ受難曲で扱われている感情は『キリストの死』によって感じられた全人類に共通する感情である。ここでレデラーが述べていることが、私の観察をある程度裏づけしてくれる。

ここで、バッハの感情的、劇的そして精神的軌跡がアルトのための壮大な告解アリアである『Erbarme dich (どうかお慈悲を)』の中で合流する。もしマタイ受難曲がオペラであったなら、台本ではこれは主役の一人が耐え切れない状況に置かれた時となるだろう。この筋書きの形式は劇的音楽の主な目的のひとつであり、作曲家はここで旋律の洪水を発生させることができる。情熱的というよりはむしろ心を打つもので聴衆を涙の海に落とすものである。(ヘンデルはこの種のアリアの名人であった。リナルドの『Lascia ch'io pianga (ただ泣かせてください)』を熟知している者でさえ、この単純で無限に感動的な曲を聴くたびに予測どおり涙にくれるか泣きそうになるのである。)使徒にも去られたキリストと聖ピョートルが己の脆弱さを嘆いて涙を流すこの劇的状況で、バッハは聴衆自身が涙を流す用意ができていところに『Erbarme dich』を放つのである。ヘンリーツィの率直で感動的な台詞は凝りすぎた敬虔主義者の迷路を作らず、その代わり、作曲家に精神的苦悶を表現する直

接の道を提供する。バッハが台本家に「ここは簡潔に！」と言っているのが想像できる。

「神よ、私の涙に免じてどうかお慈悲を。見てください。あなたの前で私の心も瞳も身を切る思いで涙に暮れています。どうかお慈悲を！」これは最も美しく、心を打つ、そして分かりやすいアリアの歌詞である。多くの聴衆にとってマタイ受難曲のまさに核心であり、信心深い迷える魂による神への悔恨が隠すことなくほとぼしり出ている。その簡潔さでは、キリエのエレイソン（神よ、どうか我々にお慈悲を）に迫る。それはカトリック典礼のとても簡潔なギリシア語の祈りであるが、その中で会衆は人類の役割を演じ、全員がひとつとなる。

『Erbarme dich』は個人的見解を取るがその中に人類全体への含を抱えている。ここで個人は全員の為に感銘的に言葉を発する。どちらの歌詞においても、言葉少ないことがより多くを伝えている。究極的には信心深い心が言えることは神への慈悲を乞うこれらの強力な数語以外には無いのである。<sup>75</sup>

私がこれらの二曲を勉強し練習するにつれて、演奏準備をするためには、その曲が存する感情的状態よりひとつ深いところに自分をおき、そこから知能によって制御することが必要かと考えるようになった。マタイ受難曲の感情層にいるときには、ヘンデルのアリアを泣き崩れることなくより巧みに制御することができた。

音楽の演奏に関しては知能を制御能力と見る反面、それに対立する観察もある。ある場合には感情は感情的事象に関しては知能よりもよく理解しているようなことがある。少女時代に私はショパンとベートーベンに夢中になったが、バッハは大嫌いであった。あまりに退屈で練習に耐えられなかった。ベートーベンは今でも気に入っているが、年をとるにつれてショパンへの情熱は冷めていった。それから子供時代は退屈だと思っていたモーツァルトを発見し、最後にバッハにたどり着いたが、理性的にどうしてそうなったかが理解できたのは後になってのことであった。ショパンはロマンチックだが、それに代わって、彼の作品はそれぞれが興味深い形をした小石のようなものであると。しかし小石では大規模な構築はできない。それに反してベートーベンは『モチーフ』を使った作曲家で、個々のモチーフはレンガのような

<sup>75</sup> Victor Lederer, *Magnum Opus Series: Bach's St. Matthew Passion*, New York: Continuum, 2008, pp. 78–79.

もので、それ自体はあまり興味深いものではないかもしれないが、数を合わせて巨大な城を作ることでもできる。

よく似たことがグレン・グールドのゴールドベルグ変奏曲についても感じられた。グールドはゴールドベルグを青年時代と熟年時代に二度録音した。最初の録音を私は『華麗』と感じ、二番目の録音は『瞑想的』と感じた。CDには短い解説が付いていたが、それによると：

なぜほとんど二度は録音しないグレン・グールドは27年前にこれこそという評価を得た演奏をした作品を再録することを選んだのだろうか？グールドは最新の技術と自分の『主題と変奏の間の数字的一致』について再検討してみたいとの願望のせいで再録してみようと思ったと説明しているにすぎない。新しいアプローチに関してもっと詳細に説明する為には、グールドに言わせると、『変奏曲を構成する30の大変興味深い個々に独立した精神を持つ曲』についてほとんど本になるような完全な文書化した分析が必要になるとのことである。<sup>76</sup>

これは知能的に大変複雑に聞こえるが、ここで私が疑問に思ったことは、「それならその結果がどうしてこれほど簡単に予測できるものであるのだろうか？」ということである。青年時代に彼はその見事な技術を見せ付ける華麗な演奏をし、成熟した人として、深く瞑想的な演奏をする。どうしてその反対を想像することがこれほど難しいのだろうか？ここでは感情が声をそろえて「分かっているさ。何もそんなに一生懸命努力しなくても、ちゃんと分かっているさ。」と言っているような気がした。

その後探求を続ける中で、バッハの四声聖歌の楽譜を分析する機会を得た。始めたときに感情と知性が完全に調和しているバッハの世界に関して驚くべき発見をした。例えば、『Ach Gott, vom Himmel sieh' darein (BWV 153)』の分析をしたことがある。これは学生程度の質であるが、この短い作品の中に私でさえこれだけ多くのことを発見できるのだということを示すために、ここに提示した。

まず、歌詞の訳を見たとき、これは善と悪の戦いが主題であると思った。それを見た時、私が作曲家ならどうするかと思ってみたが、まず思いついたのは、不協和音であった、これは対立する二つの勢力の戦いなのであるから、適切に思えた。私なら、まず善を代表する調を

<sup>76</sup> CD: Bach The Goldberg Variations, BWV988: Glenn Gould, New York: CBS Records, 1982 より。

選んで、それからできるだけ離れた調を悪に選んで、不協和音をふんだんに使用することを考えただろう。しかしそれでは、概念を知性的に音楽に当てはめただけで、感情的要素は全く無視していることになってしまう。不協和音がそう呼ばれる理由は感情にとって不快だからである。だから知性的には善悪の真っ向対立の概念が表現できても結果的に感情的効果は無視することになってしまう。

バッハはこの道を選ばなかった。バッハは完全に音楽の慣習中に留まっている。不協和音の代わりにバッハは二通りに解釈できる和音の二重性を最大限に活用してこの闘争を表現した。そしてこの感情的ジレンマを音楽性を犠牲にすることなく表現することに成功している。私は、バッハは人間の感情を完全に理解していたと思う。そしてその中では全てが感情を引き立てることに役立つある境界を設定し、その中で作曲することによって、その作品の中に知性的要素をどれほど導入しようと感情を犠牲にすることを避けることができたのではないかと思う。

#### Cantate BWV153

4.5. Ach Gott, vom Himmel sieh' darein  
Schau', lieber Gott, wie meine Feind',  
damit ich stets muss kämpfen  
so listig und so mächtig seid,  
Dass sie mich leichtlich dämpfen!  
Herr, wo mich deine Gnad nicht hält,  
so kann der Teufel, Fleisch und Welt mich  
leicht in Unglück stürzen.

神よ、天から見下ろしたまえ  
神よ、私が常に戦わされている  
敵を見てください、  
それは欺瞞に満ちあまりに力強く  
簡単に私を圧倒してしまう！  
神のお導きの無いところでは  
悪魔が、肉欲がそして俗界が私を  
簡単に不幸へと陥れるのです

初見: これは苦難に直面して強くあろうとする人のための歌のようである。迎合して楽になりたいという気持ちに圧倒されつつも、このような状況にある人は強くあるよう神にすがるのであるが、悲しいことにしばしば負けてしまう。バッハの聖歌には二つの共通項があるように見えてきた。

第一はその感情的基盤は神への崇拝である。曲が書かれている調がこの感情を表わし、曲はこの調に始まってこの調で終わる。(中に一つ最終のカデンツがこれに合致しない曲があったが、それが何を意味するのかはその曲を分析するまで分からない。)これに幸せ、苦悩、悲

しみなどの人間感情が編みこまれる。しかし最後にはこれらの感情は最終のカデンツに向かって神への感情に吸収されていく。

第二は『小は大』というゴールドベルグ変奏曲で表現されていたテーマの一つである。バッハの作品は複数の層をなしている—個人的状況、個人の神に向かっての人生の旅路、そして人類の理想主義への旅路である。これをこの聖歌に当てはめると、思いつくのはマクロ層では人類の最終戦争ハルマゲドンであろうか。これが私がキリスト教の教えとして理解するようになったことであるが、ハルマゲドンは我々一人一人の中で毎日起こっているのだと。

**構成:** Fの音にシャープが付いているので、神の調とされるべき基調はト長調かホ短調である。私はホ短調が強さを求めて必死に神にしがみついた人間の感情を表わし、ト長調はそれを見つけた喜びの感情を表わしているのではないかと感じた。さらに、イ短調が使われているが私はこれを人間の苦悶の感情であると解釈した。曲の構成はだいたい||A:||B-Aとなっているが、トニックが帰ってきたときに途中で終わるので、未完成な感覚が残る。これは善悪の戦いはまだ終わっていないとずっと続いていくのだということを表わしているのかもしれない。シェークスピアの『リア王』にも同じテーマが見られた。

**和声:** ホ短調として書かれているにもかかわらずAの部分は人間の苦悶の感情を表わすイ短調として解釈するほうがより自然なようである。Aの部分の後半は絶対的にイ短調である。しかしホ短調の基調が付いていることと、最初の和音がEであることからAの部分の前半には強いホ短調感がある。このイ短調なのかホ短調なのかというジレンマがまさに人間の諦めたいと思う反面正しいことをしようとする内面の善の言葉に引かれるという、諦めるのか闘うのかというジレンマの感情を反映しているようである。この曲はホ短調であるが、まるで神が共にあるかのようにホ長調のトニックを借りてきて最初の和音としている。しかし長調の曲調はすぐに短調に変わってしまう。また長調の和音であるがト長調ではなく、ホ短調のホ長調から借りたトニックとなっている。これは強がってはいるが内面では必死の決心であろうか。しかし借りてきた勇気と同じように、この決心は苦難に直面したとたんに萎えてしまう。後半ははっきりとイ短調である。これが示唆しているのは、神の慈悲を見つけることができず、人は一人で苦悶し、信仰を失ってしまい、世俗の苦悶だけが残る。

Bの部分はト長調で始まる（V—I）。ト長調の到着は最初のイ短調と並行するホ短調によって強調される。探していた神の慈悲が見つかったのだ。もし初めの部分が確固としたイ短調であれば、このト長調は意味を成さない。どうして神を探してもいないのに見つかったのか？しかしト長調は即座にホ短調に取って代わられる。これはまるで、ほんの一瞬人間が神に支えられて勇敢に感じたが、まったく続かないで自信を喪失し信心を取り戻すために苦悶しているかのようである。そこで必死の努力が始まる。人は神の存在を感じるもののそれを実際の勇氣に還元するために苦闘するのである。その孤独な苦悶を表わすのにここでイ短調がまた帰ってくる。この部分は半終止のカデンツで終わり、この苦悶が永久に続くことを示唆する。ここでまたホ長調のトニックが使われ、もしかしたら神の調で終わるかもしれないという幻影が見られるが、これはト長調ではないので、本物ではない。最後の和音は最初の和音と同じであるが、これが次の苦悶の周期が始まることを示唆しているのだろうか。この和音は紙の上ではトニックとして作用し、普通に見えるが、聞いてみると、イ短調の借りてきたVとして機能しているかのように聞こえる。これはホ短調として書かれている曲としては異例のことである。であるからこのように異例な和音で始まり、同じ異例の和音で終わるといえるのがこの永遠の苦悶という解釈を裏付けていると言えるのかもしれない。

ヴォイス・リーディング: 聞いただけでは分からないのだが、楽譜を見ると、ソプラノとバスの反進行はお互いに向かいつつある二つの軍隊のイメージを思い起こさせる。Bの部分のヴォイス・リーディングは規律を欠いていてあたかも戦場のようなものである。そしてイ短調が戻ってきたとき、また反進行で終わる。今度は間隔が開いていくのであるが、私にはあたかも二つの軍隊がお互い撤退していくかのようなイメージを受ける。しかし半終止のカデンツで終わることから、戦いは終わっていないということが示唆されているようだ。

最終考察: ここで私はもしこの曲がイ短調として書かれていてF#が出てきたときに臨時記号を付けたらどうなるか考えてみた。すると即座に当初感じていた強い感情が萎えていくのが感じられた。イ短調の裏に常に示唆されているホ短調の影が無ければ、神の慈悲を求めて戦い続けるという強い感情はもう存在せず、愚痴ばかり言う感情が残るばかりである。もし私が演奏者であったなら、これらの二つのシナリオによってまったく違った心構えを持つことになり、それによって演奏

は大きく左右されるような気がする。一つは「私が何をやって何も変わらない、だから迎合して楽になろう」と言う人であり、もう一つは「やめたい。いや続けるんだ。神よ、どうか私に力をください!」といて戦い続けている人の苦悩の感情である。この苦悩が最初にもものすごい推進力を作り上げそれが曲全体に伝播しているようだ。

これは驚くべきことであった、というのは演奏されると、どちらもまったく同じ音を再生するはずであるが、それに対する感情的反応はまったく異なっている。ここで私は知性がどのように感情の表現力を生み出すのか見たような気がした。バッハに於いては、知性と感情は相対するものではなく、お互いを強めあう関係にあるのだった。知性は適切な感情を始動させるためにはまず状況を理解しなければならない。例えば、愛するものが傷ついたのを見たとき、人はまず状況を理解し、それから動揺したり悲しんだりする。楽譜を分析するということはまず知性が状況を理解する過程であろう。それからこれが感情に伝達され、適切な感情が始動するのである。聴衆がその感情を感じられるように表現するため、演奏者はここでも知性を使って裸の感情をコントロールし聴衆に伝えるのである。このように知性と感情は優れた芸術を達成するためお互いに依存しあうのである。

また私はバッハの深さは多層性から来るのではないかと感じる。バッハはただ単に悲しい言葉を悲しい和声で、また楽しい言葉を楽しい和声で縁取るようなことはしない。その代わり、バッハはこのような祈りの言葉をささげる人がどのような心境にいるかということを深い洞察力によって感知し、それを音楽で表現するのである。しかし同時にそれはただ個人の心境を表わすだけでなく、その個人の置かれた環境をも表わしている。それは目の前の環境と、神の発見への旅路の一部としての環境の両方である。さらにバッハはそのような個人の旅路はまた人類全体が理想主義社会を建設する旅路でもあることを示している。これら全てが一分にも満たない聖歌の中で達成されているというのは真に驚くべきことである。

私は聖歌を数曲分析してみたが、すぐにいくつかのパターンが見えてきた。まず、歌詞で描かれている状況に関連するいくつかの感情が異なった調で表されていること。ここで、感情というものは折り重なるものである。人間はひとつだけの感情に支配されることはほとんど無い。関連するいくつかの感情が波のように打ち寄せては消えていくも

のである。バッハはこれを多くの和音が重複する近い調を使って表現しているように思えた。第二にこれらの感情の中で人の神に対する感情というものが最も重要視されているように思えた。それは神への感謝や畏敬の気持ちであったり、神への懇願であったりするが、これは神への感情を符調とすることで表されているようである。人間的感情は存在するが、それは最終的には神への感情に統合されていく。全ては神への感情に始まり神への感情で終わるのである。第三に、多重層が感じられた。バッハの描く感情的状況は多くの層に当てはまるようである。それは人が経験する個々の出来事にも当てはまるが、人の神を見出すまでの旅路にも当てはまるし、人類全体の理想主義社会達成への旅路にも当てはまるようである。

パターンが見つけれられたと思ったとたん、これらの当てはまらない聖歌に出くわした。『An Wasserflüssen Babylon (BWV 267)』では、神の調が見当たらなかった。これは征服者によって母国から連れ去られ異国に連れてこられた者の嘆きの歌であるが、歌詞は痛みや恥・恥辱といった残酷な言葉に満ちている。それで私は、これは短調でなければならないと思った。しかし、実際にはト長調で書かれている。分からなかったので、実際に聞いてみた。すると、郷愁の情が湧き上がって来た。それで多分バッハは歌詞の中に、苦悩ではなく郷愁の情を感知したのかと推測した。中ほどにイ短調と二短調で書かれた部分があるが、これは囚人の母国への思いと現状での恥辱の情を表現しているのかもしれない。しかし最終的にはこの部分はト長調に囲まれていて、まるでバッハが、「そんな最悪の状況ではないよ」と言っているかのようである。ト長調で終わるが、最後の二小節には確かにため息が聞き取れる。だから終わり全てよしというわけではないが、結局のところ、囚人は征服者によって拷問を受けたり飢餓に遭ったりしているわけではない。考えて見ると、征服者に囚われて異国に連れてこられたとき、川岸に座って母国のことを思い浮かべるような余裕があるというのは最悪の状態から比べるとずっとましではないか。

この練習をするうちに、感情を完全に受け入れつつ、それを知的に取り扱うことは可能であると信じるようになった。この聖歌に描かれている状況の一つ一つとバッハのそれにまつわる感情の解釈をじっくり見つめることによって、我々の知能は人間の感情を密に理解することができるようになるだろう。ここで得られた分析技術は我々が人生において実際経験する感情にも当てはめることができるかもしれないからだ。ここから先は音楽家に引き継いでもらいたいと思う。

**マイクロアプローチとマクロアプローチ：**ここで第二の問題であるマイクロアプローチとマクロアプローチに移ることにしよう。ここでは研究対象と研究手段という二つの側面が関係してくる。

まず第一に研究対象としては、全ての宗教は基本的にはマイクロアプローチを採っているのに対して、P0の理工学はマクロアプローチを採っている。宗教上の仮定は人は全て善人か悪人のどちらかであり、宗教的鍛錬を積むことによって善人になれるというものである。どの宗教にしてもこの最終目的を達するためには、全ての人が善人にならなければならない。これは全ての粒子を酸素に変えようとするようなものである。個人の行動に焦点を当てるもうひとつのマイクロアプローチもある。これは物理現象を個々の粒子間の運動量を計算することによって説明しようとするようなものである。この種のアプローチは理工学では使用されていない。エンジニアは個々の粒子の存在位置や特徴を知らないが、マクロ数式を使う。例えば、二つの物質を混ぜて新しい物質を作る時、化学者は個々の粒子には注目しない。 $\text{Na(OH)} + \text{HCl} \rightarrow \text{NaCl} + \text{H}_2\text{O}$  という化学反応においては、化学者は特にどの粒子にも注目することなく危険な物質を無害な物質に変えてしまう。ここで、この数式は実際に起こっていることを正確に表現してはいない。というのは、多くの粒子はイオン状態のままだからである。しかしこのうちのいくつの粒子がイオン状態で残り、いくつが結合するかを考慮することなく、同じ結果が得られるのである。また、ある特定のシステムの中にどの種の粒子がいくつあるかを数える代わりに、エンジニアは理想気体の法則を発見した ( $PV = nRT$  において、Pは圧力、Vは体積、 $R = 8.314 \text{ J/mol.K}$ 、Tは温度である。) 驚くべきことに、これによって、どの種類の気体が存在しているかさえ知る必要はないのである。

M0現象における形而上工学においては、マクロアプローチが有功かもしれない。上記の例を参照すると、もし、形而上工学が同じ結果を達成できたら、善悪の問題さえ問題にならないとして飛び越すことができるかもしれない。いや形而上工学にとってはマクロアプローチを取ることがもっと重要と言えるかもしれない。というのは個々の物質が明らかにそれぞれの特徴を持つ物理学と違って形而上の世界では、物理的存在は必ずしも形而上的特徴と明確に対応しないからだ。言い換えれば、完全な悪人や完全な善人というものは存在しない。大多数の人は部分的に善人で部分的に悪人、またはあるときには強くあるときには弱いのである。だから人々を硫酸は酸性などというようにレッテルを貼ることはできないのである。

ここで注意しておかなければならないことがひとつある。現代的アプローチは反対方向に向かいつつある。啓蒙主義後に発展して来た新しい科学は個人主義の強い影響下にある。心理学や神経科学は明らかに個人的焦点を持つ。したがって、連続殺人犯のような個人的犯罪者を理解するには有効である半面、自殺テロのようなマクロ現象を取り扱うことができない。

P1現象では、マイクロとマクロアプローチは統合されるかもしれない。というのは全てが陽子と電子と中性子、あるいはそれより小さい単位の要素のなんらかの組み合わせとして表現できるからである。我々がM1現象で作業を始めたとき、これは形而上でも起こるかもしれない。

プラトンはマイクロとマクロのアプローチを同時に使用している。これは変化の説明をするのに役立つかもしれない。その『国家論』において、プラトンは、民主的個人と民主性などと個人の性格と政治体制の間に完全な並行関係が存在すると仮定している。ここでプラトンは個々の政治体制の欠点がある種の型の個人を生み出すと議論しているようにも見える。<sup>77</sup>

個人的にもマクロとマイクロの連鎖を目撃した。教師として働く際教室では私が哲学王で現実主義者と純朴理想主義者を統治する。しかしその教室は学区の一部であり、また学区は州の一部である。このマイクロマクロの連鎖は図5-1において図3-2で示された汎理想主義のピラミッドに統合されている。純朴理想主義者と現実主義者の境界上に多数の小型のピラミッドが存在する。そして個々の小さなピラミッドの境界線上にまた別のさらに小さいピラミッドが存在する。この連鎖が私の教室のような最小のピラミッドに到達するまで続く。

ここで、『戦争と平和』<sup>78</sup>ほどの規模で書かれた小説がマクロとマイクロの現象で感情と知能の相互関係を検証するのに多大な可能性があるかもしれないと感じた。『戦争と平和』はナポレオン戦争時代のロシアを舞台とする小説であるが、これは本書では英雄の時代の末期から大衆の時代への移行期にあたる。このマクロ的傾向が個人の選択に影響し、それがまたマクロ現象に影響を与えることになる。トルストイはマクロ-マイクロ連携だけに焦点を当てたわけではなく、未成熟と成熟した愛や生死に直面することなど個人が人生の旅路の中で経験する普遍的問題についても多くを割いているが、同時に個人の選択に影響を与えるマクロ現象に触れるときには、読者が登場人物に対して深

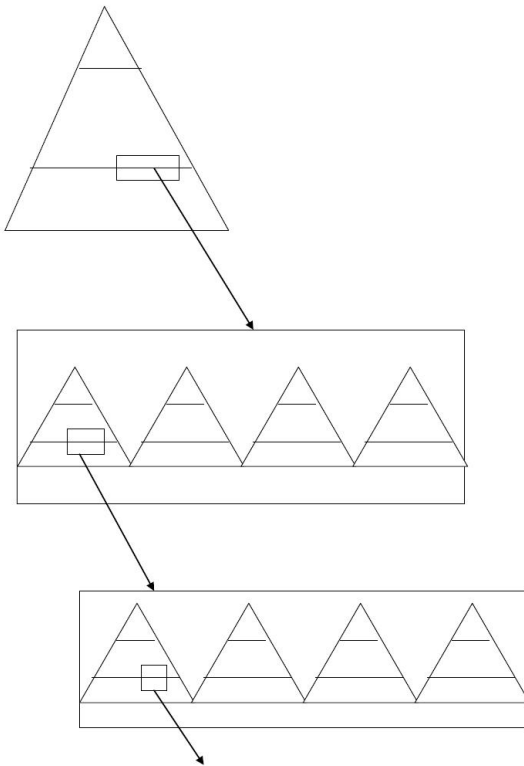
<sup>77</sup> Plato, trans. by H.D.P. Lee, *The Republic*, New York: Penguin Books, 1971, Part IX.

<sup>78</sup> Leo Tolstoy, trans. by Ann Dunnigan, *War and Peace*, New York: A Signet Classic, 1968.

い感情を抱くような描写をするので、この現象の知的側面だけでなく感情的側面を理解するのを可能にしてくれる。

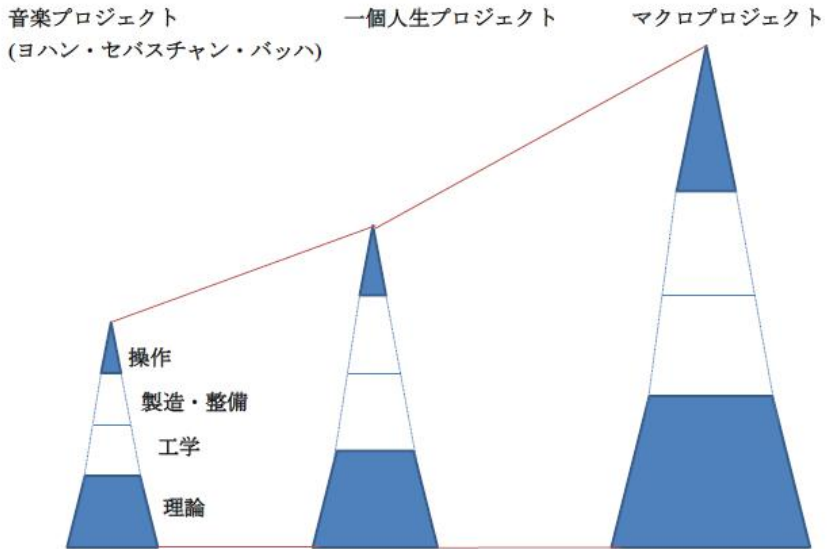
第二に研究手段としては、第四章で論じたように、物理工学と形而上工学の大きな違いのひとつは規模にある。個人的経験からすると、自分の周りで三つの層が同時に連動して変動しているように感じるようになった。最も小規模なレベルでは先にも述べたように、音楽の勉強の際、感情には深さの層があり、演奏しようとする曲より一段階深い感情から知能によってコントロールすることが必要と感じるようになった。第二層では、個人的生活でその複雑な関係を認識していた。私の知能はいつも厳格で、ストア主義の支給源であった。私の感情はしばしば不満を言って辞めたがったが、私の知能が常に義務を確実に遂行することを確かめた。しかしその一方で、何が為されなければならないかについてはより深いところで私の感情が理想主義に専心したことによって決定されたのである。例えばもし私が個人的名声の追及などに傾倒していれば、私の知能は全く異なった一連の方針を創出でたことであろう。そして最後に、最も大規模なレベルでは、本書における研究が、純朴理想主義者と汎理想主義者の二層を持つ社会構成の仮説へと繋がり、純朴理想主義者の感情を表面的な感情と、そして汎理想主義者の感情を深い感情と結びつけるようになった。社会の指導者層として汎理想主義者は深い感情層に滞在し、そこから社会を知能によって統治するのである。

図5-1  
理想主義のマクローマイクロピラミッド



もしこの現象をうまく使うことができれば、物理工学が模型や風洞を使うのと同じ方式で、規模の問題を回避できるかもしれない。この三段階の連動を使って形而上工学の方法論が開拓できるかもしれないと考えるようになった（図5-2）。

図5-2  
形而上工学方法論実験



概して、マイクロ構図をマクロ状態に応用するには問題がある。第一にマクロからマイクロへの方は直接的で簡潔である。一旦マクロ像を目にすれば、マイクロ状態に直接当てはめることができる。しかし反対方向はそう単純には行かない。例えば、もし地球の球形を見たら、テニスボールやオレンジなど突然日常の物体の中に同じ形をした物をいくらかでも見るようになるが、日常の物体を見るだけで地球の形を見極めることは不可能である。あまりに多くの形態が存在するからである。地球はさいころのような立方体なのか、それとも本のように長方形なのだろうか？ 第二に、個人の人生をマイクロ像として扱うと、客観的であることがほぼ不可能になってしまう。実際にマイクロ現象をマクロ現象に当てはめるとき、大部分の素人は過ちを犯す。テロリストの中にはその個人的挫折を社会的不正に当てはめてその破壊行為を正当化する者がいる。例えば明るい将来を持っていたにも拘らず個人的挫折を経験したユナボマーは無実の人に爆弾を含んだ小包を送りつけたが、それは大規模な組織を必要とする現代技術によって人間の自由が奪われつつあることを世間に知らしめる為にしなければならなかったのだと主張した。ここで、二つのマイクロ像を使うことによってこれらの問

題を軽減することができるかもしれない。第一の問題は二つのマイクロ像を使用することによって大いに軽減されるかもしれない。一つのマイクロ像からだけ一般論を引き出そうとすれば、これはまったくの賭けである。しかし二つのマイクロ像の共通点を使って仮説を立てれば、不確実性の規模をかなり狭めることができるだろう。第二に、一番小さな音楽の分野を使うことによって、工学者は客観的に行動することができる。

もちろんこの方法論では個々のエンジニアは一生に一つの実験データしか提供できない。これが理想主義のプロジェクトでは多岐にわたる人々の協力が必要とされることを強調している。

**形而上回路：**最後の問題は私が形而上回路と呼んでいるものである。これは理論と言うよりは今のところ観察に過ぎない。何千年にもわたって、人々が重力のことをまったく知らないままにりんごが木から落ちるのを見てきたように、その正体を知らないままに、何かを観察することは可能である。個人的に二つの極端な現象が正反対の極として存在するのではなく、隣接しているのを何度も目撃してきた。これを習得できれば、対局する二つのパラダイムを合成し、次の象限に移行するのに役に立つだろう。

最初に気がついたのはムッソリーニがほぼ一夜にして共産主義者からファシストに転向したのを知ったときである。私はムッソリーニは現実主義者でもし欲しい物が手に入るのであれば立場をこのように変えることなど平気なのだろうと思ったが、同時に日本の農村でもまた同じことが短期間に起こっている。もし二極端が直線上の反対の点にあるのであれば、反対の立場に移るためには中道を通っていかなければならない。これらの例は二極端は直線状にあるのではなく、両極端が隣接する円状になっているのではないかと思わせる（図5-3）。

この後で、同じような状況に何度も直面した。個人的にも経験した。一般論を追求する過程で徐々に『一般的過ぎる』という批判を受けるようになった。それでも探求し続けたが、ついには本書に見られるように誰にも理解されなくなった。そこでどのような種類の一般論を形成することも全く不可能であり、我々はみんな自分の世界に閉じ込められて、理解しあうことは不可能なのだと主張するフーコーなどのポストモダニストに再会した。しかしこれは考えて見れば、それ自体が極端な一般論である。

古代ギリシャの哲学者ヘラクリタスの「善と悪はひとつである。」また「神は昼と夜、夏と冬、戦争と平和、過多と飢餓である。」<sup>79</sup> という言葉もこれに該当すると思う。これはまた、シェークスピアがマクベスで述べた「公正は不正である。」という言葉とも似ていると思う。第三章で述べたように、これは現実主義と理想主義が真っ向から衝突する構図である。

キリスト教と仏教も両極端で出会う。先に述べたように、両者とも問題は人が自分を愛するほどには他人は愛さないというところから生じているという点では同意している。したがって、キリスト教は自己愛を普遍の愛へと拡大しようとし、仏教は自己愛を消滅させようとする。歴史によると両者の目的達成の為の過程は異なった政治的・社会的影響をもたらすが、どちらにせよ最終的には同じ地点に辿り着くはずであった。

また、論理物理学者の中には、論理の道を究極まで辿り着いた結果、神に出会った者もいる。

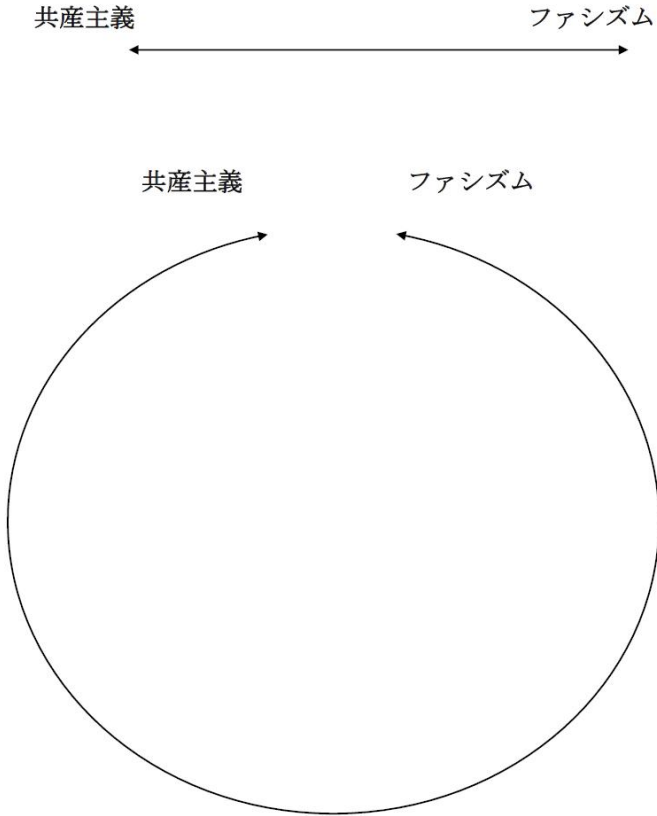
ホーキングが『宇宙を語る—ビックバンからブラックホールまで』で行なった哲学化の主旨は宇宙の事象での神の役割を矮小化し、人類の役割を重要化することである。この主旨の穂先となったのは同書の前書きでそれを示唆したカール・セーガンであるが、セーガンによると、同書は「神について、いやというよりは神の不在について」語っているのである。これは「空間に限界のない宇宙、時間に始まりと終わりのない宇宙、そして創造者が何もすることのない宇宙」を提唱しようとする試みを代表している。皮肉なことに、このメッセージはホーキングの注目すべき特異点定理からの結論に矛盾する。そこではホーキングは自身の言葉が「時間には始まりがある」ことを確立している。

原因と結果の法則を通じて、この定理はホーキングにとって明らかに、多分あまりにも明らかに、宇宙とその空間と時間を設立した宇宙の範囲を超える何らかの実体が存在することを示している。ホーキングの始まりを認めなくても良い唯一の希望、すなわち創始者は宇宙の歴史の中で（時空の定理が基づいている）一般相対性理論の数式がある時点でその有効性を失うことになるかもしれないことに存する。<sup>80</sup>

<sup>79</sup> Campbell, Joseph, ed., *The Portable Jung*, New York: Penguin Books, 1986, p. xxvii.

<sup>80</sup> [http://www.siprep.org/faculty/phanley/200files/Einsteina\\_Hawkin\\_God.html](http://www.siprep.org/faculty/phanley/200files/Einsteina_Hawkin_God.html)

図5-3  
形而上回路



これは本書では P0 (物理現象 0) と M1 (形而上現象 1) の接点を意味している。また反対の極では、私が音楽の理論を勉強しようとして買った教科書の最初のページを開いて見るとそれは音波、すなわち物理の説明であった。<sup>81</sup>

<sup>81</sup> George Thaddeus Jones, *Music Theory*, New York: Harper Collins, 1974.

ヒンドゥー教のアトマンはブラフマンであるという主張はもし自己発見の為の内部の奥深くまで旅を続ければ、アトマンを発見するが、その際また絶対神であるブラフマンも同時に発見することを意味している。ヒンドゥー教はまた他にも興味深い主張をしている。『ウパニシャッド』によると、意識には四つの層がある。最も表面的は意識は人が目覚めている時で、二番目は夢を見ているとき、三番目は夢を見ない深い睡眠状態にある時で最後はその睡眠状態を超えた時である。イースワランは以下のように探求している。

ウパニシャッドの賢人たちは意識の状態について独特の関心を示した。彼らは夢と夢を見ない睡眠状態を観察し、それぞれにおいて何が『知られている』か、またどのような能力が理解者として必要かと問いかけた。夢の中での経験と目覚めている時の経験との違いは正確に言って何なのか？ 夢のない睡眠状態では自己認識に何が起こるのか。そして彼らは不変要素を探した。常に変動しつつある人間の経験の中で、変わらないものがあるのだろうか？ 常に変動しつつある思考の中で、不変の観察者が存在するのだろうか？ 連続性の糸、これらの精神状態が一律となる知覚状態より高いレベルの現実というものが存在するのだろうか？

これらは賢人たちが投げかけた疑問である。しかしどういうわけか彼らは論議を止めなかった。彼らは集中力が深まるにつれて、精神は実のところそれを探求している意識の状態を通過するという発見に取り入れられた。そして意識自体に集中する際「それを理解しているのは誰か？」を追求し、彼らは精神層を分離して、植物学者が花を観察するように客観的にその機能を観察することができることを発見した。<sup>82</sup>

ヒンドゥー教の四つの意識層を見てみた時、自分の中で感じ始めていた意識層との関連を感じた。第一層は私が最も物理的端にあると見ていたものに近いような気がする。そして、第四層は最も形而上端にあるようだ。第四層は特に興味深い。この層はもしかしたらカントがその主観について意味した層ではあるまいかとも思う。カントはヒンドゥーの第四層を意味したのに対して、その後の学者はポストモダニストに至るまで、別々の主観、すなわちヒンドゥーの第一層を意味するようになったと説明できるかもしれない。第四層では形而上工學上

<sup>82</sup> Eknath Easwaran trans., *The Upanishads*, Tomales, Calif.: Nilgiri Press, 1987, pp. 15–16.

の二つの問題—客観と主観の交錯と一個人の能力を超える規模—が解決できるかもしれない。上記の引用文が述べているように、このレベルに達した者は自己を客観的な観点から観察することができる。また意識はこのレベルではもう分割されていないので、個人の肉体的存在を超えた規模のプロジェクトに取り組むことも可能になる。ナグラーはこのように説明している。「神話が、神話であるゆえに我々に告げていないことは、これらの信念の最も重要な結果である。すなわち人間は、意識内で、単一性から多岐へと続く創造過程を辿るだけでなく、反転させることもできるということである。」<sup>83</sup> 形而上体制が存続するためには、この意識の第四層が必要なかもしれない。

この概念は大変見込みがあるようであるが、一旦この概念をより緊密に考察してみると、多数の問題にぶつかった。例えば、私が今いる意識の状態をヒンドゥー教の第二層の夢の状態と考えようとして見たが、即座に問題にぶつかった。夢を見ているときには、人は自己の意識の世界に囚われている。夢の世界を他人と共有するわけにはいかない。だからこのレベルは統一的傾向と反対の分裂的傾向があるのではないか？ 第三層の無夢状態に移って、ここで私の経験の中で最も近いと思われるのは、問題を抱えて眠った時、起きて見ると解決法が思い浮かんでいることがある時である。（物理の宿題でさえ！）そういうときにはいつも私が寝ている間に私の精神は起きて働いているのかなと思う。しかし意識が無い時にどうやって自分の精神を検証することができるのだろうか？ そのためには第四層に移らなければならないということになるのだろうか。しかしどうやったらそこに辿り着けるのか？ もしこれを最後まで追及したら形而上回路として第一層と第四層が両端として出会うことになるのだろうかとも考える。考えて見るとこの二層が意識のある状態で、第一層が最も個人的な主観的意識で第四層が最も包括的な主観意識であるわけだから。しかし修行の足りない私にはそこまで辿り着くことはできなかった。

本書の執筆中にこれらのばらばらの観測からより規則的な一連の形而上回路が見え始めたので、それを図5-4に示した。個々の中にはすでに上に述べたものもあるが、ここで再提示した。

第一に図4-7で示した汎理想主義のピラミッドの現実主義者の領域を泳いでいる間に自分自身で愛と憎しみという形で表現される善と

<sup>83</sup> Michael, N. Nagler, "Reading the Upanishads," in Eknath Easwaran trans., *The Upanishads*, Tomales, Calif.: Nilgiri Press, 1987, p. 282.

悪の両極端の感情を発見した。理想主義の目的を現実主義者の領海で果たそうとする間に、私の人類にとって困難な問題を一緒に努力して解決しようという呼びかけに対して、飢え死ねと言って応えた社会に対して怒りと憎しみを抱くようになった。その瞬間自分がティモシー・マクベイといった国内や911の国外のテロリストのすぐ横に座っているのを発見した。

第二に感情に於いて愛についてより緊密に考察したとき、悲しみと喜びの両極端を発見した。汎理想主義の追求は孤独なものである。それはバッハの『マタイ受難曲』に反映されている。それを聞くとき私は深い悲しみを感じるが苦い感情は全くないところに連れて行かれる。反対の極ではベートーベンの『歓喜の歌』を発見した。これは理想主義の至福を祝福するものである。この二極を合成させようと努力する間に、バッハの『ゴールドベルグ変奏曲』を発見し、これが感情の二極の合成の答えではないかと感じた。ここで私が感じる感情は唯単に深く、あたかも悲しみや喜びといった全ての感情が分岐する前に完全な形で一体となっているかのようなのである。バッハの曲を聴くとどちらにも神の存在を感じる。『マタイ受難曲』の神は究極的客観性を持つ全能の神であるが、ゴールドベルグに感じるのはずっと身近で自分の中にある究極の主観の神のようだ。これは極めてウパニシャッドのブラフマンとアトマンの観念に近い。ヒンドゥー教はこれをアトマンはブラフマンと言うことによって統合した。

第三に、自分自身を図4-6で示される汎理想主義のピラミッドの頂上にある形而上工学のピラミッド中に発見したが、ここでは知能と感情の両極端の接点にいて、上述のように音楽を通してこの統合の道を探っている。この探求をさらに進めるため、ゴールドベルグ変奏曲を練習し始めた。その後すぐに練習中に深い瞑想的感情を感じるようになった。すると突然どこからともなくアリストテレスの第一の実体が目の前に現れた。この深い瞑想の状態が感情と知性が合流できる地点なのかもしれない。ここにいる時には感じているのか考えているのか分からなくなる。これが感情と知性を統合する道となるかもしれない。

第四に、この時点で、感情と知性の領域に対称的存在を感じる。感情の領域で見られた『マタイ受難曲』と『ゴールドベルグ変奏曲』の間に感じられるブラフマンとアトマンの関係がプラトンのイデアとアリストテレスの第一実体の関係にも感じられるような気がする。これらの統合は一体どこに繋がっているのだろうか。

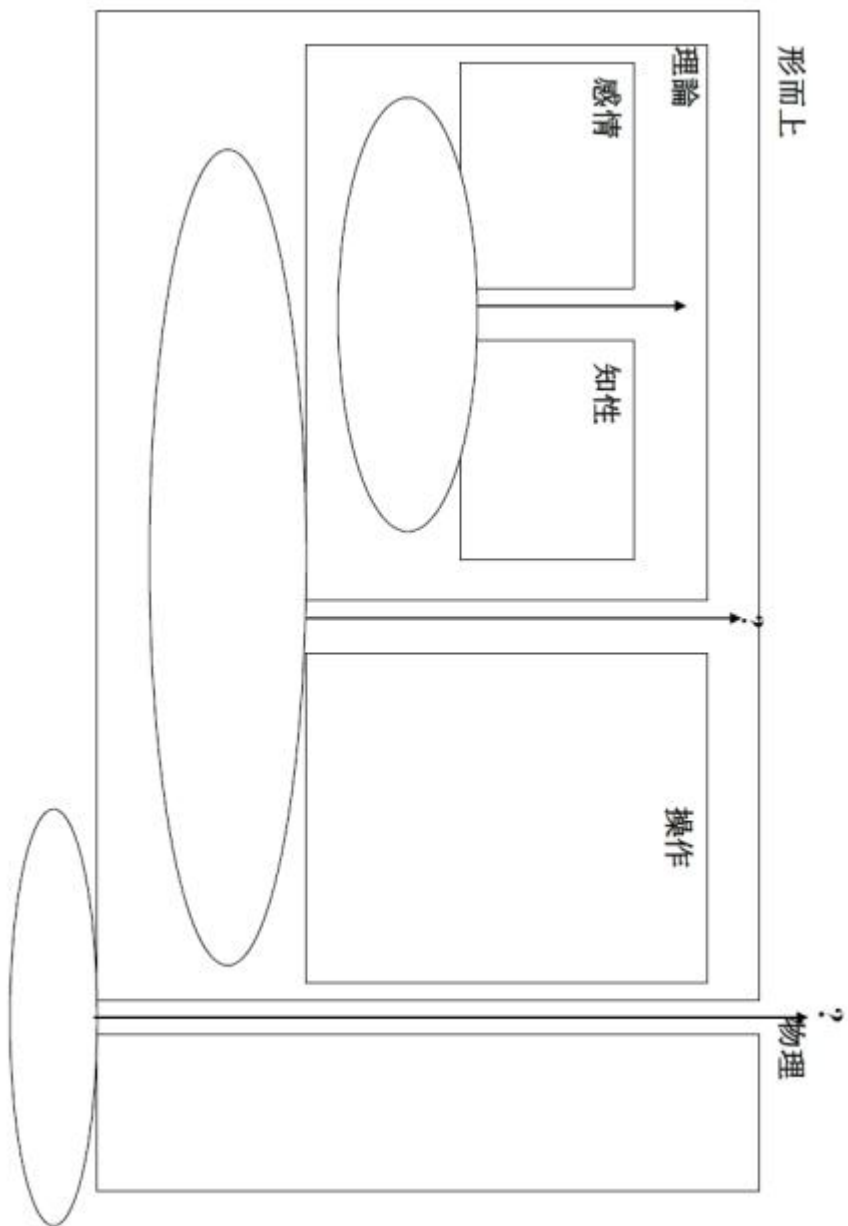
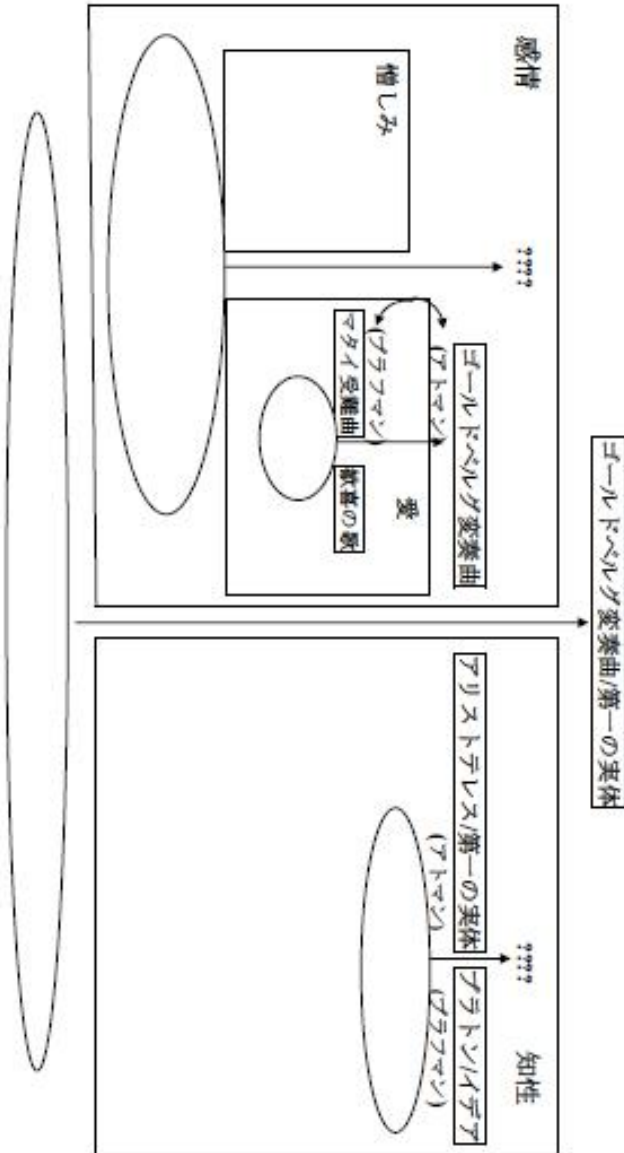


図5-4  
形而上回路



第五に最後の統合が形而上と物理の領域間で成される。科学者たちは意識がどこから来るかという形でこの問題に取り組んでいる。個人的には私は本書の執筆が終わりに近づくとつれてこの問題を認識するようになった。本書に取り組んでいる時に私は常に自分の肉体的存在と形而上的存在の狭間にはさまれた。特に執筆中は年に三度ある2～3週間の休暇を利用したため、学期中は生きていく為の日常のこまごました問題に捕われ、休暇が始まると1～2日で形而上の最も深い層に到達し、休暇が終わるとまた1～2日で表面層に戻ってこなければならなかった。最後には自分の肉体的存在が本書を完成する為の道具に過ぎないように感じ始めた。物理的世界に存在しなければいけない理由はそこでしか本書を創作することができないからだ。形而上の領域ではそれぞれの思考を伝え合ったり共有することはできない。だから、思想を共有する為には物理的領域に来る必要がある。ただこの仕事を成し遂げるまでは自分を生かさなければならぬという考え方をするようになった。

もしこれが本当であれば、無限の物理現象と形而上現象の相互関連(P0, M0, P1, M1,..... と P0, M0, P-1, M-1,.....)の両極も図5-5に示すように最終的に接点を持つことになるのだろうか？ もしそうだとすると、我々の推測もこの接点を越えてどのように広がるのかまで拡大されなければならないことになるだろう。これが推測以外の何者でもないとしても、少なくとも我々の知識の矮小さを証明することにはなる。

接点の中には平和的なものもあるが、暴力的なものもある。それがどうしてなのかは全く分からない。もっと資料を集める必要があるだろう。多くの人が自分で辿ってみてその結果を報告することによって資料を集積することが必要かと考える。

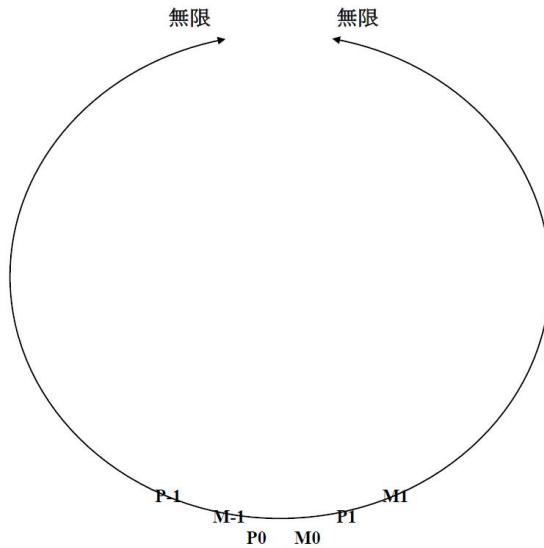
形而上回路の概念をさらに進めるのは時期尚早であるが、どこか理工学のデジタル回路に似通っているようにも見えてきた。電気回路にはアナログとデジタルの二種類がある。これが形而上工学にも当てはまるのかもしれない。アリストテレスや孔子のように中道を説く者はアナログ・システムと採用するのと似ているが、極端に進む者はデジタル・システムを採用しているようなものではあるまいか？

最終的には回路を調整することによって望ましい形而上現象を創出することができるようになるかもしれない。デジタル形式には四つの可能な結果がある。すなわち(1,1)、(1,0)、(0,1)と(0,0)であるが、(0,0)は両極端がともに消滅する場合を意味することになる。歴史的には民主主義は共産主義とファシズムという両極端の思想が破壊された後で誕生した。これは(0,0)の場合と見てよいだろう。時にはどちらか

の極端が反対の極を消滅させることもあるだろう、これは  $(0, 1)$  か  $(1, 0)$  の場合と言うことになるだろう。聖書は善と悪のどちらかが敗北する最終戦争について語るがそれがこの場合に当たるだろう。興味があるのは  $(1, 1)$  の場合である。もし形而上工学において  $(1, 1)$  を達成する方法を見つけることができれば、次の次元に移ることができるかもしれない。これはヘーゲルの弁証法を彷彿とさせる。すなわち正と反から全く異なる合が形成されるというのである。しかしもし形而上回路についてもっと知識を得られれば、人類はこの過程を操作することができるようになるかもしれない。

私はまた、これらの回路が完成されれば、ピコーの周期の問題に対処するだけの規模の形而上のスペースが確保できるかもしれないとも期待している。しかし今のところこれらの五つの形而上回路は本書では未解決のままに残される。人類の生存はこの種の探求をどこまで続けられるかにかかっていると心から信じている。

図 5-5  
形而上回路としての M-P のはしご



ヨハン・セバスチャン・バッハの【ゴールドベルグ変奏曲】：本章の始めに芸術が形而上理論上果たす役割の重要性について述べた。ここで主要な理論についての検証を終えた後、芸術の果たす潜在的役割について再検証してみたい。私はその可能性は絶大だと思う。ここではバッハの『ゴールドベルグ変奏曲』に焦点を当てたい。この作品は汎理想主義の感情を統合する可能性が、しいては感情と知性を合成する可能性があるということから、特に焦点を当てるだけの価値があると思う。

初めて講義テープを聴き始めた時、驚愕した。この作品はあたかも汎理想主義者の為に作曲されたように思えた。ここではグリーンバーグの講義の要約を提示し、汎理想主義者の立場からの私のコメントを付け足した。

第一に、変奏曲のテーマはグラウンド・ベースと呼ばれる8小節の下降音階である。これは個々の変奏曲で4回繰り返される。これが作品全体を統一する構造となる。それぞれの変奏曲は大変異なっている。メロディーは変わるし、情操も変わる。しかしその基盤には常にこれらの下降音階がある。これは私には汎理想主義者の人生のように思える。状況は変わるし、人も変わるが、汎理想主義者は常に理想主義の教義を守り続けるのである。これが我々の人生の構造となる。

第二に、この作品はあらゆるレベルで周期的である。ミクロのレベルでは、これらの下降音階が4回繰り返される。次のレベルでは、32小節の変奏曲と主題であるアリアが繰り返される。次のレベルでは、30の変奏曲は3曲づつの10の周期に分けられる。最後にマクロレベルでは、15曲づつの前半と後半に分けられる。そして全体の周期は一曲としてまとまって完成するのである。ここで、グリーンバーグはゴールドベルグ変奏曲をフラクタルと特徴付けている。これは「大は小」を意味し、個々の変奏曲は32小節から成り、全体は32曲から成っている。だから、小規模の構成が大規模の構成と同じなのである。

私の考えでは、我々にとってもっとも重要な周期は3曲づつの10周期である。個々の周期は特徴的小品、トッカータとカノンからなっている。特徴的小品は大概はダンス曲で体の動き、すなわち物質的性格を帯びている。トッカータは変遷過程で、カノンが形而上的対話を表している。というのはカノンではメロディが重複するので、この音楽に乗って体を動かすことはできないからである。グリーンバーグはカノンをゴールドベルグ変奏曲の魂とみなしている。もちろん、形而上的対話は汎理想主義者の魂でもある。そして私にはこの周期は汎理

想主義者の人生を表しているかのように思える。我々は人生のいろいろな段階を経るにつれこれらの周期を繰り返していく。

*Aria* 1.

The image displays a handwritten musical score for a piece titled "Aria". The score is written on seven systems of two staves each, with a treble clef on the upper staff and a bass clef on the lower staff. The time signature is 3/4. The music is characterized by intricate melodic lines, frequent use of ornaments (indicated by small 'w' and 'u' symbols), and complex rhythmic patterns. The notation includes various note values, rests, and dynamic markings. The piece concludes with a double bar line and a repeat sign at the end of the seventh system.

合計9つのカノンがあり、現れる度に、音程がひとつずつ広がっていく。だから最初のカノンはユニゾンで、2番目のカノンは2度、3度目のカノンは3度となり、最後のカノンは9度離れている。これは私には汎理想主義者が人生の周期を経るにつれて広がっていく形而上の世界を現しているように思える。さらにバッハは数秘学も採用しており、それぞれの数字に特別な意味を割り当てている。例えばグリーンバーグは変奏曲12の4度のカノンについて以下のように説明している。

生理的に3度から4度への異なった段階は感知できる無限から有限の現実への進行である。4は達成を意味する数字である。．．．鏡像カノン、または逆カノンと呼ばれるカノンにすることによって、バッハはこの4度のカノンは特別な性質があることを示している。．．． $2 \times 2 = 4$ で、鏡の外と中の二つの像がひとつの完全な像を作る。逆カノンが意味することは．．．お互い上下が逆の鏡像である。一方が音階を上昇する反面、他方が下降する。．．．しかしこれは最も興味深い憶測である。実際、何かの鏡像は二つの像を一緒にしたときにより大きな一つの像とその数字的憶測を作る。鏡像カノンにすることによって、バッハは数字の4が代表する全体論の展望について瞑想しているのである。<sup>84</sup>

個人的にも漠然とではあるがこの物質的端から形而上的端への移動には気が付き始めていたので、この構成に沿って自分の人生を当てはめて見ようとしてまた驚いた。私の人生は完全にこの構成に合致するのである。特に変奏曲のいくつかは直接心に訴える。

変奏曲15番は前半の最後の曲である。これを聞くと、米国に旅立つ為空港で飛行機を待っていたときの自分が思い浮かんでくる。それは私の人生の前半の終わりを意味した。自分が乗るはずの飛行機の銀色の機体を見て、もう戻ることはできないのだと思うと無性に悲しくなった。そのときの感情が完全にこの曲想に表されている。

変奏曲16番は前奏曲である。それは私の第二の人生の始まりであった。そのエネルギッシュで熱意のある曲想はキー・ブリッジから初めてジョージタウン大学を見たときの自分を思い起こさせる。この日の為に生きてきたのだと思った。

<sup>84</sup> Robert Greenberg, *Bach and the High Baroque*, Part IV, Springfield, Va.: The Teaching Company, 1996. Lecture 31.

変奏曲24番はオクターブのカノンである。これには達成感が感じられる。最初の本を書き上げた時のことが思い起こされる。

変奏曲25番は大変深い悲しみを持った曲想である。これは理想主義の終焉を感じている時の私である。みんなが協力して問題に取り組める枠組みを提供したのだから、人々が集まって協力してくれるようになることを期待していたが、その楽観的思考はその後数年間で粉々に破壊された。この曲の中に、純朴理想主義者の為の弔鐘が聞こえる。

変奏曲27番は9度のカノンで最後のカノンであるが、私にとっては本書を意味する。これは私の人生の責務の完成であり、形而上の世界が最大限に拡大した。またここで再度鏡像が使用されているが、形而上回路の最終接点を思い起こさせる。

変奏28、29、30番曲は最終地点到着に向けての推進力を増していく。28番は表面的には静かであるが、水面下でいろいろと動きが出てきている。そして突然29番のファンファーレが聞こえ、『クォドリベット』へと繋がっていく。これは帰郷の祝福の曲である。汎理想主義者の領域に辿り着いたことを祝っているのである。この曲を弾いていると、私の中で帰郷を祝う鐘の音がいっそう高く響き渡り、他の事が何も聞こえなくなるようである。ついに辿り着いたのだと。実際、この変奏曲は二つのドイツの俗謡の合成である。ひとつは「もうずっと会っていなかったね。さあこっちへいらっしやい。」というもので、これには何の説明も必要ないだろう。あまりの合致に言葉も無いほどである。

ゴールドベルグ変奏曲はこれが私が進んできた方向なのだと教えてくれ、心が温まる。しかしそれでも心配なことがある。この衆愚政治台頭の時代に汎理想主義者のコミュニティは存在するのだろうか？もし拡大を続ける現実主義者の領域によって汎理想主義者の領域が完全に失われていたらどうなるのだろうか？着いて見ると太古の廃墟だけが残っているかもしれない。バッハが使った二つ目のドイツの俗謡はここでも不気味なほど適切である。それは「キャベツと甜菜ばかり食べさせるから、私はいやになって出て行ったのだ。もし母が肉を料理してくれていたなら、残っていただろうに。」と言っている。私が着いたときに荒れ果てた廃墟でこの手紙を見つけるのだろうか？

そのとき、最後に主題曲をもう一度聞くことになる。この最後の主題曲『アリア・ダ・カーポ』は、「旅の終わりに何を見つけるかは問題ではないよ。」と言ってくれる。この曲が示す最終目的地は深い瞑想である。全ては自分の中にあるのだと。心の中の平静を見つけたのならそれがこの旅の目的地だったのだと。

グリーンバーグは講義の終わりに次のように述べている。「変奏曲 28番から30番に続いて聞くダ・カーポはこの世の物とは思えない、ほとんど超現実的である。この作品の一生は、全ての周期の最も大きな周期であるが、ダ・カーポによって完成するのである。」<sup>85</sup> さらに続けて：

それは崇高の喜びの瞬間である。しかし偉大な精神的そしてほとんど形而上的の黙想である。出発点に帰ってきたのだ。この曲には最初に聞いた時とは全く違った感性が感じられる。そして我々はなぜこんなに違うのか考えなければならない。．．．我々はこのメロディを最初に聞いてから全ての可能性を試し、一生の経験を積んだ。そしてこのメロディは成熟して経験を積んだ者には未経験の時に聞いたものとは全く違って聞こえるのである。ビッグバンの前、生まれたばかりの時に、そして単一の曲が爆発して表現と技術の宇宙の中に無限に広がって行き、前に聞いた時とは全く違って聞こえるのである。<sup>86</sup>

私にとって、この最初の主題曲から30の変奏曲を経ての『アリア・ダ・ガーポ』への旅路はまさに理想主義者が純朴理想主義から汎理想主義者へ向かう旅路と同じである。そして最初の主題曲と『アリア・ダ・ガーポ』の比較はまさに純朴理想主義者と汎理想主義者の比較と同一である。

しかしこの曲が私の人生を表していると考えるのは傲慢だろうか？これもバッハは問題ないと思ったことだろう。これも全てバッハのフラクタル「大は小」の一部である。この約一時間のピアノ曲が私の全人生に対応している。その一方、単なる一個人の一生が汎理想主義の世界全体に対応している。実際、ここにはミクロとマクロの連鎖の万華鏡が見える。時には作品全体が純朴理想主義者から現実主義者の領域を経て汎理想主義者の領域への旅を表しているように見える。時には、個々の三曲ずつの周期が個人の旅で、10周期を合わせて集合的な汎理想主義社会の旅路を現しているようにも見える。例えば、ひとつの性格的小品からトッカータ、そしてカノンへの旅は、純朴理想主義に当てはまる初期から現実主義に当てはまる英雄の時代を経て汎理想主義への旅を遂げたベートーベンの人生のようにも見える。ベートーベンの第五交響曲は彼の英雄主義を代表していて、正義を表すハ長

<sup>85</sup> Robert Greenberg, *Bach and the High Baroque*, Part IV, p. 48.

<sup>86</sup> Robert Greenberg, *Bach and the High Baroque*, Part IV, Lecture 32.

調が邪悪なハ短調に対して勝利を収める。第九交響曲は彼の理想主義を代表するもので、ここで彼は英雄主義を否定し人道主義を抱擁する。彼の英雄主義の時代は私には現実主義の領土を旅していることになると思える。英雄は群集の中で際立つ。であるからこれは自己栄光である。バッハのトッカータは演奏者がその妙技をひけらかすことのできる場所である。であるからこれも、自己の栄光を誇示する場所である。しかしベートーベンはその人生の終わりに英雄主義を否定し人道主義を抱擁することによって、汎理想主義者の教義に同調したのだと思う。さらに、物質主義から形而上への周期は人類の歴史上のピコーの周期を彷彿ともさせる。周期が繰り返されるにつれて、形而上の領域が拡大されていく。この観点からすると、人類はまだ第二周期を経過しているに過ぎず、まだまだ先が長いことが示唆されている。このように、バッハはあらゆるフラクタルのレベルで取り扱うことを可能にしている。これが私がずっと抱えていた疑問に答えることとなった。ゴールドベルグ変奏曲は10名ほどの演奏家の演奏を聴いたが、それぞれが大変異なっていて、しかもどれひとつとして完全に心を打たれる物は見つけられなかった。多分個々の演奏家はみんな個人のフラクタルのレベルで演奏しているのだと思う。一人一人の人生はみんな違うので、これらの演奏を完全に理解できる人はいないのだろう。もしバッハが自分でゴールドベルグを弾いたなら、マクロレベルでの演奏をしたことだろう。そうすれば、全ての個々の人生は全て飲み込まれるので、聞く人全てが「これこそ私が求めていたものだ！究極の演奏だ！」と感嘆したことだろう。バッハの時代にコンパクトディスクが存在しなかったことが悔やまれてならない。

マクロとミクロの連鎖に加えて、ゴールドベルグには形而上回路も内包されている。先に述べたように、『マタイ受難曲』は人類が理想主義社会を求めながらそれを達成できない悲痛の感情を表しているが、これは人類の至福の感情に相對するもので、これによって、汎理想主義者の感情が統合される。この二極から生まれてくるのがゴールドベルグ変奏曲である。これは深い黙想を通して知性が感情と出会う場所であり、アリストテレスの第一の実体をも彷彿とさせるものである。『アリア・ダ・カーボ』は知性と感情が一つとなった汎理想主義の領域への到達を表すものである。

ここで私はバッハの中に神の存在を感じるようになった。私が『マタイ受難曲』の中で感じる神は万能の創造神であるが、ゴールドベルグ変奏曲の中で感じる神はもっと親密である。これはヒンドゥー教のブラフマンとアトマンに非常に似ているような気がする。ウパニシャ

ッドによるとブラフマンとアトマンは同一である。ここで不思議に思ったのはもしブラフマンがアトマンなら、私が見ている形而上回路ではブラフマンがアトマンよりひとつ下のレベルにあるのはなぜだろう？ 確実な答えを見つけることはできないが、もしかしたらキリスト教の神はブラフマンではあるが、キリストの処刑に代表されるように万民の悲痛の感情に主に依存して、至福の情に関してはあまり重きを置いていないためかもしれない。バッハはブラフマンを完全に包括する作曲をする能力があったが、キリスト教に束縛されたのかもしれない。

ここでまた別の回路も発見した。かつて『マタイ受難曲』が究極の感情であると思っていた時、私はこれを真に理解するためにはドイツ語、オーケストレーションと音楽の勉強をしなければならぬかと考えていたときがあったが、突然初めて音楽を勉強し始めた時と同じように、自分とピアノだけになった。このようにまた最後に出発地点に戻ってきたのである。

このように、バッハのゴールドベルグ変奏曲には私が理論的に本章で提示した全ての問題が含まれている。また私がまだ発見していない問題も多く含まれているだろうと思う。私にとってはこのように感情的にここまで深く人を打つ芸術作品が汎理想主義者の知性的問題全てをまた内包しているというのは奇跡的である。これは真の知性と感情の完全な統合であろう。私にとってはバッハは神に一番近い人間である。

私はバッハの神に近い才能は彼の深い理想主義への献身にあると思っている。作曲する際彼の唯一の目的は神の栄光を讃えることであった。シャノンによると、

『バッハにとってその作品の最後に記述した S.D.G. (Soli Deo Gloria—神の栄光にのみ)という言葉はただの形式上のものではなかった。それはバッハが一生を通じて追求し続けた目的だった』とロビン・A・リーバーは述べている。<sup>87</sup>

もし彼が個人的名声を追及していたなら、全く異なった一連の作品を作曲していただろう。しかしそのような動機を持たなかったため、彼はその芸術の追求に関して一切妥協をしなくてすんだ。その代償を払

<sup>87</sup> Fr. Martin Shannon, "Soli Deo Gloria," in John Burr ed., *The Sacred Choral Music of J. S. Bach: A Handbook*, Paraclete Press, Brewster: mass, 1997, p. 41. Originally in Robin A. Leaver, *J.S. Bach and Scripture: Glosses from the Calov Bible Commentary*, (St. Louis: Concordia, 1985), p. 107.

わなければならなかったが。生前は名声を得ることは無かった。彼の作品はその死後忘却に追いやられ、メンデルスゾーンによって再発見されるまで見直されることは無かった。しかしバッハはその生涯を越えて存在し続ける芸術作品を創造することができ、ついには認められることとなった。これは負のエントロピー貢献の典型的見本といえよう。

次章において形而上製造・整備と操作の分野検証を続けることとする。

## 第六章 形而上工学分野の検証(2) 形而上製造 / 整備・形而上操作

一旦理論家とエンジニアが一般論を形成できれば、製造・整備士がそれを特定の状況に当てはめることになる。当然我々が理論から操作へと上がって行くにつれて、一般論化の度合いは低下する。製造 / 整備と操作の段階ではその適応性は限られている。それは時代によって限定され、また状況によっても限定されるので、その個々の事象全てを詳細に検証することは不可能である。したがって、本書での焦点は21世紀の現代社会が内包する問題に限り、そこでの一般的議論を提示する。本章では、現代社会に戻り、それが直面する三重危機についてのどのような調整が必要であるかについての一般的方向を模索するものとする。もちろん、理論と工学がまだ完成していない現時点では完全なことは言えないので、取り扱われるべき問題点をいくつか提示するに留める。

20世紀後半の著名な政治家であるヘンリー・キッシンジャーは21世紀の世界を以下のように分析している。

まずヨーロッパ諸国は1648年以降勢力均衡の原則に基づいて行動してきたが、今その原則を廃棄し、欧州連合の設立に向かっている。これは神聖ローマ帝国に似た制度である。そこでは参加国の主権は完全ではないがかなり制限される。しかしながら、政治家はそれでも国内の選挙によって選ばれるため、連合の利害と諸国の利害の間に緊張関係が存在する。この問題に対処する為、欧州は内向きの傾向を示すようになり、世界的秩序の形成に積極的に参加しなくなった。<sup>1</sup>

第二に、中東では、国家制度が崩れて現実主義権力闘争者の競合に陥っている。かつて国家によって統治されていた地域は権力の真空状態となり、本書で言うピコーの野蛮状態と退化した。中央政権が既に崩れ去った地域では、権力闘争者はお互いに激しく競合し、地元の住民を犠牲にしている。国家体制がまだ温存されている地域でも、支配者は周りの脅威を理由としてその支配を強めるようになった。個々の闘争者は米国やロシアなど外部の支持を得る可能性を追求している。ここではまだ宗教は影響力が強いので、権力追求者の目的達成の為の手段として用いることができる。したがって多くの紛争は、アラブー

---

<sup>1</sup> Henry Kissinger, World Order, New York: Penguin Press, 2014, p. 93-95

イスラエル問題や西洋社会に対するイスラム聖戦など宗教闘争の形をとる。<sup>2</sup>

第三に中国の大国化がアジアでの中心問題となっている。米国と中国の間に緊張関係が発生し戦争にまで至る可能性がある。米中関係を決定する中心問題は戦略的環境である。二国はお互いを疑いの目で見て、これが不信を招き、お互いの安全保障を害することになるかも知れない。これは冷戦中の米ソ関係に似ている。東アジアは中国、韓国、日本間で勢力均衡のパターンを示し始めた。さらに、米国は地理的には遠隔な国であるが、勢力均衡制度の中心的存在となっている。しかしこのパターンには米国が日本の同盟国であると同時に中国との協調の声明も出しているなど不明確な点がある。これが、各国家が何度も同盟を組み替え、一国が超大国となるのを防いだ18世紀のヨーロッパでの勢力均衡と同じように、アジアでも効率よく機能させる助けとなるかもしれない。<sup>3</sup>

以下において、キッシンジャーの分析に関連ある問題点を形而上工学の見地から検証する。

### 形而上製造 / 整備層の分野検証

本書の最初で述べたように現代社会は三重危機に直面している。それは中国の民主化、イスラム世界の世俗化と西洋民主国家の衆愚政治化である。キッシンジャーの観察によると国民国家間の勢力均衡論に基づいた分析はこれらの問題点に対処するには不十分である。というのは国際社会の単位としての国民国家は崩壊しつつあるからである。以下においてこれらの形而上工学上の問題点について簡単な検証を行なう。

**中国とロシアの民主化:** 前の民主化の周期においては、ドイツとイタリアと日本が膨張国家への道に走ったが、中国が同じ道を辿る可能性があるだろうか？

民主化と国内外での軍事行動の関係は別書<sup>4</sup>において詳細に検証を行ない、また第二章でも取り扱ったので、ここでは、簡単な要約を提示するに留める。ドイツ、イタリアと日本が膨張戦争への道に辿ったのに対して、英国、米国、スウェーデンの民主化は比較的平和に行なわ

<sup>2</sup> 同、142～145頁。

<sup>3</sup> 同、228～231頁。

<sup>4</sup> Masayo Ohara, *Democratization and Expansionism: Historical Lessons, Contemporary Challenges*, Westport, Conn.: Praeger, 2001.

れた。スペインとラテンアメリカ諸国は内乱の形をとる。そして中国とロシアは民主化に失敗して共産国となった。これらの違いを説明するいくつかの要素がある。

これらの要素を挙げる前に、本書における民主化の定義を再度確認しておく必要がある。本書では、民主化は権力基盤が軍事社会集団（国王と貴族）から経済的社会集団（ブルジョワと労働者）に移行する過程と定義されている。民主主義はブルジョワ階級と労働者階級が軍事社会集団に対抗する同盟を結成できたときに達成される。この同盟結成に影響を及ぼす要素が民主化の過程と結果を左右するのである。

第一の要素は産業化のタイミングである。英国は早期に産業化を行なったので、集中した経済利権が存在せず、民主化にも時間がかかった。これが変遷過程を国王から貴族、貴族からブルジョワ、そして労働者へと段階的なものにするようになった。ドイツ、イタリアと日本は産業化が遅れたのでできるだけ早く追いつかなければならなかった。これが大ブルジョワジーと集中した労働者階級の形成となり、また軍事的にも追いつかなければならなかったので、強固な軍隊を形成することとなる。中国とロシアはさらに産業化が遅れたため、ブルジョワ利権を育てる機会を失った。ここで、中国は脱産業化の現代再度民主化を試みている。ここでは大ブルジョワジーの根源となった重工業は主な駆動源ではないので、これが主要な要素となる可能性は低いだろう。しかし先進国がサービス業に移る中製造業を中国が引き受けるといふ可能性はある。

第二の要素は国家規模である。スペインとラテンアメリカは小規模国家であったため、武力闘争を国外に移出することができず、内乱の形をとった。しかし大国・小国の区別は明確ではない。スペインとイタリアはよく似た規模の中規模国であるが、イタリアは新興国であったため、国外戦争を選んだが、スペインは斜陽国であったため、戦争を避け、内乱となった。中国には武力闘争を移出する機会が豊富にある。

第三の要素は経済と安全保障環境である。米国は差し迫った脅威が無かったため、強力な軍隊を作らなかった。ここでは中国は戦略的に複雑なアジアに位置している。

スウェーデンは小国であるが、国際経済環境と軍事情報は民主化を進める間有利なものであったので、過度の武力闘争を経験せずに民主化を遂行できた。ここで、継続的平和と経済繁栄は理想的であるが、最悪な状況は突然の環境変化である。もし経済と安全保障状況が良好であれば、経済的社会集団は繁栄し、軍事的利権に対抗して経済的支配を強めることになるが、それによって軍部は脅威を感じる。この時

点で軍事状況が急変すると、経済社会集団がその安全のために軍部に依存しなければならなくなる。ここで脅威によって過激化していた軍部が社会的影響力を得ることとなる。これが最悪の事態である。

現代の国際体制では中国とロシアが民主化の過程で膨張主義に走る危険がある。インドなどの国にも可能性があるかもしれない。しかし今のところ、これらの国が直接膨張主義への道歩んでいる様子はない。不幸なことにロシアはまた民主化の失敗に終わっているようである。しかしそれが、国家の解体を防ごうとするロシアと地方社会との確執を生み、国際社会に現在不安定な軍事闘争として現れてきている。一方中国は躍進しているが、民主化を跳び越して衆愚政治化が進んでいるようにも見える反面、反動的動きも観察される。しかしこの問題について確かな政策を決定するためにはずっと詳細な研究が必要であろう。例えば21世紀のアジアは一見すると19世紀のヨーロッパに似ていないともいえない。中国が膨張主義に走ることになると、勢力均衡政策がうまく機能する可能性は全く無くなってしまおうだろう。そしてそれは国際安全保障にとって重大な危機をもたらすだろう。世界は第二次世界大戦前夜のような様相を呈してくるかもしれない。当面これらの国を監視することは重要である。

**イスラム社会の世俗化:** イスラム社会の世俗化は第一次世界大戦によって中断された。世俗化は進んでおり、内部的には西洋文明よりは平和であった。これは、創立者であるモハメッドが宗教的指導者であると同時に軍事的指導者でもあったことが関係しているかもしれない。キリスト教社会と違い、宗教と世俗の支配権が二極化しなかった。後にそれはスルタンとカリフに分かれたが、再びスルタン—カリフ制として合併した。世俗化過程が中断された時、世俗指導者であるスルタンはカリフに対してより強力な影響力を得ていたが、この時点でスルタン—カリフ制は廃止された。したがって、イスラム社会には現在政治的、宗教的中央権力は存在しない。これは好ましい条件かもしれないが、インターネットの時代、オサマ・ビン・ラデンのような人物が扇動的なメッセージを流し、バチカンのようにそのような行動を内的に規制するイスラムの中央権威が存在しない。これは問題となりうる。

もうひとつの問題は、政教分離への過程の違いである。20世紀に、トルコはほぼ即座に多党制民主制に移行した。その後軍隊の介入を要する危機に何度か直面したが、民主制度は保たれている。これはトルコがオスマン帝国の中心地でスルタン—カリフ制の影響が最も強い地域であったからかもしれない。そのせいでスルタン—カリフ制が廃止

されたときに巨大な真空状態を作りだし、新たな政治体制の創生を可能にしたのかもしれない。もしすでにブルジョワ層が形成されていたのなら、産業化のレベルも影響を与えた可能性がある。ソ連に隣接しているという戦略的重要性もまた、米国からの多大な援助を得ることとなった。これも影響しているかもしれない。<sup>5</sup>

イランは専制国家となったが、最終的にこれは過激なイスラム原理主義体制に置き換えられた。1960年代には軍事的社会集団を礎に築かれていた専制制度が石油産業を国有化しようとしたモサデクに率いられた経済的社会集団によって脅かされることとなった。その際モサデクは宗教的集団と協力関係を結ばなければならなかったので、社会改革が難しいものとなった。さらに英国と米国がその道を妨害すべく介入した。専制制度は続いたが、最終的には崩壊しアヤトラ・ホメイニがイスラム原理主義体制を導入した。したがって、イランが産油国であったという事実がその変遷過程を外国介入によって狂わされる運命に導いたことになるのかもしれない。外国介入が無くてもモサデクが成功するのは難しかったかもしれないが、ひょっとして、トルコに似た形で何度かの改革の試みの末ついには民主制度の形成に成功していたかもしれない。また宗教の影響力は強く残っているが、これはイランが少数派のシーア派であったため、スルタン・カリフ制の廃止による影響を受けなかったからかもしれない。<sup>6</sup>

エジプトでは1950年代に青年将校がクーデターを起し王政を廃止した。イランと異なり、王政に対するクーデターは軍事社会集団と経済社会集団の間の攻防ではなく、軍事社会集団間のものであった。ナセルが国家指導者として浮上する。ナセルは冷戦と西側国家間の抗争をうまく利用しスエズ運河危機の際その指導権を堅固なものとした。その外交上の成功は国内での評判も高めた。エジプトは魅力的な外国投資先ではなかったので、外国の介入を受けることも無かった。ナセル政権は土地改革を行い、また教育の普及などの国民福祉政策も行い、その正当性を高めた。宗教的社會集団はその利害関係を、ムスリム同胞団の形で表明したが、ナセルの権力基盤は安定していたので、軍事政権は彼らを地下運動の形に抑えることができた。宗教的社會集団はその実質的政治力を失い、軍事的社會集団の配下に押さえられ、軍部の支配確保の道具として使用された。<sup>7</sup>

<sup>5</sup> 詳細に関しては William L. Cleveland, *A History of the Modern Middle East*, Boulder: Westview Press, 1994, pp. 261–271 を参照。

<sup>6</sup> 詳細に関しては、同 271～282 頁を参照。

<sup>7</sup> 詳細に関しては、同 284～303 頁を参照。

シリアとイラクでは、旧支配層は地方出身の将校によるクーデターにより敗退した。最終的にはシリアではアル・アサド、イラクではサダム・フセインが権力を掌握し、独裁者となった。その際、彼らはバース党の思想に依存した。これは復興という意味で、国家主義的また改革主義的傾向があった。この思想はイスラム教の教義を組み込んでいたが、基本的には世俗的なものであった。<sup>8</sup> したがって、彼らの政権は軍部と世俗のバース思想によって支えられていた。このため彼らはその支配思想の基盤としてイスラム教に依存する必要がなかった。それで伝統的な宗教的社会集団は排除された。その結果、彼らの利害は反乱という形で表明されることとなった。またバース思想は宗教が及ぼすことのできる広い影響力を養うことができなかった。この問題に対処する為アル・アサドとフセインはしだいに抑圧政策を強めなければならなくなり、最終的には残虐な独裁体制となった。それでも教育普及などある程度の社会改革を行なった。<sup>9</sup>

サウジアラビアでは、地元には支配族が存在し、20世紀にその一人が王朝を起し、サウジ朝が誕生した。この地元には世俗的支配者が存在したことが、世俗社会集団の宗教的社会集団に対する優位を与えることになったのかもしれない。それでも後者は強い影響力を維持した。その結果、王国は宗教的指導者であるウラマに対して優位な立場に立ったが、協力関係を保つという形となった。王国はその正当性をイスラム教の擁護者という形で引き出した。これは西洋の国王の神聖支配権と似たものであろうか。ウラマは徐々に政策決定権を剥ぎ取られ、国家組織に組み込まれていった。その引き換えに、ウラマは道徳的指導者としての立場を与えられ、教育・法律部門で強い影響力を持った。道徳警察はウラマによって管理され、ファイサル王の死後その影響力はさらに高まった。<sup>10</sup>

これらの初期的観測によるとイスラム圏の世俗化の過程は中央・偏狭部、石油の有無、産業化のレベル、代替思想の有無、そして国際環境と外国の影響によって違ってくように見える。これらの因果関係をより正確に見極めるためには更なる研究を必要とする。これらの因果関係が決定できたら、次に部外者がこの過程とその際に起こる武力闘争に影響を与える可能性はあるのかどうか問題となる。彼らは独自の三十年戦争を避けることができるだろうか？ これらの問題は地域専門家に委ねることとしたい。

<sup>8</sup> バース思想に関しては、同 306 頁を参照。

<sup>9</sup> 詳細に関しては、同 353～376 頁を参照。

<sup>10</sup> 詳細に関しては、同 377～397 頁を参照。

1980～90年代に現代化に成功した国々が出てきた、その結果、社会的経済的実情が政治の旧体制とかみ合わなくなって来た。さらに、冷戦の終わりが、その環境を大きく変えた。これらの変化によって、世俗化過程は大きな影響を受けた。21世紀にはイスラム圏は不確実の時代に入った。

また、このイスラム圏ではいまだに宗教的影響力が強く残っていることに注視する必要がある。これは変遷過程の方向を決定付けることになるだろう。宗教の目的は人々を理想主義の教義に専心させることである。理想社会は人々が理想主義を都合によって適用したりしなかったりしたのでは形成できないので、人々を盲目的信仰を持ってたとえ自分の命を賭けてでも理想主義を守り続けるよう呼びかける。確立した全ての宗教はこの盲目の信念を養うことに成功している。しかし理想主義が現実主義の世界に移出され腐敗すると、この硬直性が最悪の状況を招きだす。現実主義社会では、硬直性は愛ではなく憎しみの渦巻を作り出す。このような状況では融通の利く同盟の形成・再形成を必要とする勢力均衡が機能する可能性は破壊されてしまう。

第二次世界大戦後の日米関係とアラブーイスラエル紛争の比較が興味深いところである。戦時中私の両親の世代は鬼畜米英として米国人、英国人を憎むよう教育されたが、この種の感情は戦後すぐに消滅してしまった。これは米国が新たな敵国であるソ連の登場のせいで、日本に対しては寛大な処置を取ることを決めたからかもしれない。そして日本も米国もお互いを物質的利害計算に基づいて、戦後復興に当たった。これは典型的な現実主義の機能である「昨日の敵は今日の友」が作用していることになる。日本陸軍の日本国民の間に憎しみを広げようとする試みは全く続かなかった。

他方、アラブーイスラエル紛争の場合、イスラエルはユダヤ教徒にとってもイスラム教徒にとっても神聖な土地なので、お互い妥協することができなかった。さらに、ユダヤ教徒はナチ政府化で凄まじい宗教的迫害を受けた直後なので、安全保障に関して妥協する余裕が無かった。この当初の硬直性が憎しみの渦巻を繰り広げることとなり、現実的な解決法に達することができなくなった。最近では平和交渉が進んでいる最中、急進的ハマースがガサ地区選挙で多数決を獲得し、平和交渉の条件に従うことを拒否し、最終的にはガサ地区を完全に支配下に収めた。それからイスラエル領土にロケット攻撃を仕掛けるようになった。イスラエルは封鎖を行い対抗した。2014年にユダヤ教の若者三人がハマースによって殺害されると、イスラエルはガサを攻撃し、何千人という非戦闘員が死亡したり、住居を追われることとな

った。<sup>11</sup> 今回の敵対行為の交換は、さらなる怒りと憎しみを生み出すことになったに違いない。

それは現実主義の融通性を奪うが、別の意味で現実主義の権力闘争者の利用できる道具も提供する。例えば腐敗した宗教を政治的目的で使用する一つの有効な方法は共通の敵の採択である。これは現実主義の権力闘争者が領土内で政治的統一を達成する為に使える安価な道具である。

1979年のイラン革命の後、アヤトラ・ホメイニの指導の下イランはイスラム制度の再興を呼びかけたが、このときにはイスラム諸国は応答しなかった。クリーブランドは以下のように観察している。

革命の成功は西洋型の発展モデルに失望し、繁栄と希望のある将来を築くことのできるようなイスラム体制の復興を望んでいた世界中のイスラム教徒に歓迎された。しかし中東の支配者は革命によって起こった人民の間の陶醉感を持たず、イランでの過激なイスラム共和国の誕生は保守的の国王と改革的独裁者を同様に動揺させた。そしてイランは中東で孤立した。<sup>12</sup>

このように、統一の目的を達するのは簡単なことではない。しかしもしイスラム国家が共通の敵戦略を内部統一のために採用することに成功し、武力闘争を外部に移出することができたなら、彼らはイスラム圏内での破壊的戦争を避けることはできるかもしれないが、武力闘争が世界的に波及する恐れが出てくる。世界は極端に不安定となるだろう。状況によっては、民主化を進める中国と同盟を結ぶことになるかもしれないし、または聖戦の名の下に無差別に圏外に攻撃を仕掛けてくるかもしれない。イスラムの過激派は現在そのメッセージをインターネットで広めて、ある程度の成功を収めている。現体制に不満を持つ青年層がこれに呼応して既存体制をあちこちで攻撃している。これが現存体制に脅威を与える世界的現象となるかどうかはまだ分かっていない。

最後にイスラム圏は中東に限られてはいない。中東外ではインドネシアが最大のイスラム国家である。ここでは独立直後にスカルノが空軍の支持の下独裁政権を築いた。これが陸軍とイスラム教徒の不満を募らせた。1960年代に陸軍がクーデターを起こしスハルトが大統領となり『新秩序』を打ち上げる。彼はパンカシラ思想をインドネシ

<sup>11</sup> [http://en.wikipedia.org/wiki/2014\\_Israel-Gaza\\_conflict](http://en.wikipedia.org/wiki/2014_Israel-Gaza_conflict)

<sup>12</sup> Cleveland, p. 398.

アの国家思想として採用する。これは社会主義と、国家主義と一神教を合一した物であった。軍隊はスハルトの支持の下、イスラム教徒の昇進を否定するなどの反イスラム政策を採る。その支配を強めるため、スハルトはイスラム教の政党を世俗的政党と同様に統合させその支配者を統制することによって彼らをその影響下に治めた。1980年代には保守的イスラム教徒がパンカシラに反対して抗議運動を起こしたが、これは軍部によって抑圧を受け約100名の死亡者が出た。イスラム教徒は爆破運動によって報復し、多くが逮捕された。しかし1998年にスハルトは辞任を余儀なくされ、民主政府が誕生した。<sup>13</sup>

インドネシアは順調に民主化を進めているようである。地域専門家はその理由を以下のように分析している。

民主主義がイスラム教徒が多数を占めるインドネシアで順調に進んでいるその理由として一般的にインドネシアのイスラム教徒が穏健なものを採択していることが挙げられている。「20世紀に出された研究文献の大半はインドネシアのイスラム教社会をよく良質な言葉で表現している。この好意的な意見にはいくつかの要素が関連している。まず、地元のイスラム教社会はイスラム教を地元の宗教と同一化させたこと。すなわち既存の宗教活動と混合して多彩な種類を作り上げたのである。さらに、このインドネシア化したイスラム教には中東のイスラム教にある厳しさや硬直性が全く無く、穏健で寛容と評価を受けている。学者の中にはイスラム教徒の多数はそれほど献身的ではなく、イスラム法の最も基本的なものしか従っていないと観察しそれを評価している者もある。」とグレッグ・フィーリーとサリー・ホワイトは述べている。<sup>14</sup>

これは中東の激動的状況とは大変対比的である。インドネシアにはアラビア語圏のイスラム教徒の合計とほとんど同数の信者がいるといわれている。<sup>15</sup> それゆえ、インドネシアが中東の激動的イスラム国家から距離を置けるかどうかは世界にとって大きな問題となるだろう。

<sup>13</sup> [http://en.wikipedia.org/wiki/New\\_Order\\_\(Indonesia\)](http://en.wikipedia.org/wiki/New_Order_(Indonesia))

<sup>14</sup> Michael Buehler, "Islam and Democracy in Indonesia," p.3. 引用は Greg Fealy and Sally White, "Introduction". In Greg Fealy and Sally White. (eds.), *Expressing Islam: Religious Life and Politics in Indonesia* (Singapore, Institute of Southeast Asian Studies, 2008), p.1. [http://www.columbia.edu/cu/weai/pdf/Insight\\_Turkey\\_2009\\_4\\_Michael\\_Buehler.pdf](http://www.columbia.edu/cu/weai/pdf/Insight_Turkey_2009_4_Michael_Buehler.pdf)

<sup>15</sup> Anna M. Gade, *Perfection Makes Practice: Learning, Emotion, and the Recited Qur'an in Indonesia*, (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2004), p. 1.

**西洋文明の衆愚政治化:** 上記の二問題が現代社会に黒い影を投げかけているが、西洋の民主国家は衆愚政治のせいでこれに効果的に対処する能力を失うかもしれない。この前の衆愚政治は古代アテネで起こった。この時、プラトンは過度の自由が民主主義を崩壊させたと分析している。またソクラテスの経験は純朴理想主義者の自分の力量以上の者になりたいという欲望が歯止めが利かなくなると、道理を通そうとする人を抑圧し、民主主義の崩壊に貢献することを示している。

プラトンの民主国家の表示が特に興味深い。<sup>16</sup> プラトンは民主主義は最も公正な政治体制であり、人民は最大限の自由を享受することを認めている。

「第一に人々は自由だと思いませんか？ 言論の自由は豊富にあり、個人個人が何でもしたいことをする自由がある。」．．．「私はあえて、民主主義は最も魅力的な社会体制だと言いましょ。」私は、．．．続けて言いますが、「もしできるなら権威を強制的に行使することもないし、もしいやなら権威に服従しなくてもよい。戦争があってもいやなら行かなくていいし、平和な時でも平和がいやなら個人で戦争をしてもいい。もし政治的あるいは司法的官職に就けないような法があったなら、それでもそのような機会があったら職に就けばいい。それは短期的には生活を続けるすばらしく快適な方法ですよ。」

「ということで、これらとそれによく似た特質が民主主義の性質です。それは、快適な無秩序な形式の社会です。多様性も多く、全ての市民を同等であろうが無かろうが同等に扱います。」<sup>17</sup>

プラトンはさらにこの過度の自由が民主制度を崩壊に導くと主張する。

「創始者は我々の国家を創立したときには大変思慮深く崇高な原則を適応しましたが、それらの原則を厳密に解釈するどころか、軽蔑しています。我々は、特別な才能を持っていない人は子供時代から良い環境に育って良い訓練を受けない限り良い人

<sup>16</sup> Allan Bloom, *The Republic of Plato*, Basic Books, 1968, pp. 235–244.

<sup>17</sup> Plato, trans. by H.D.P. Lee, *The Republic*, New York; Penguin Books, 1955 [1971], pp.329–331.

間にはなれないと言いましたが、民主主義は大げさな身振りでこれらを掃き捨ててしまい、これらの政治家が、人民の友であると宣告する限り、彼らの習慣や生い立ちなどには全く関心ありません。」

「まったくおっしゃるとおり。」

「それでは、今言ったこととそれによく似たものが民主主義の特徴です。これは波風を立てない、無秩序な社会の形態で、いろいろな種類がありますが、全ての人は同等であろうが無かるうが、平等です。」<sup>18</sup>

「もしある者が快樂の中には良い欲望から出てきたという理由で、奨励され認可されるべきものもあるが、中には邪悪な欲望から出てきたという理由で、抑制され制御される必要のあるものもあるとその人に言ったとしましょう。その人は真実に対して扉を開くことも無く、謙虚に耳を傾けることもしないで、頭を振って、全ての快樂は同等で同等の権利が与えられるべきだと言うでしょう。」

「そのとおり。その人はまさにそうするでしょう。」

「実際、」私は言う、「その人は一時の快樂の為に生きるのです。ある日はワインと女と歌で、次の日はパンと水。ある日は激しい肉体トレーニングで次の日は怠惰で安易に、それから哲学的研究の時代があります。次にその人は政治を取り上げるといふ具合に、気ままに思いついたことをしたり言ったりしているのです。時には軍事的野心に捕われ、また時には商売での成功を目指す。その人の人生には自制というものが全くありません。そしてその人はそういう生き方が快適で自由で幸せなのだと思うのです。」．．．「それで、これが民主社会に対応する個人であり、こういう人を我々は民主的人間と呼んで問題はないでしょう。」<sup>19</sup>

それからプラトンは民主主義は崩壊し、専制政治が続くと議論する。

「それでは民主主義は目的を持ち、この目的への欲求があまりに過度となるため崩壊するということではありませんか？」

「その目的とは何ですか？」

<sup>18</sup> 同、330～331頁。

<sup>19</sup> 同、334頁。

「自由です。」と私は言う。「これが民主主義の最大の利点だと言われたことを聞いたことがあるでしょう？　そしてその理由で自由な人間が住むのに適した唯一の社会だ。」

「確かによく聞きます。」

「ということは、さっき言いかけたように、他のもの全てを犠牲にした過度の自由への欲求は民主主義を傷つけ専制主義への要求へと導くことになるでしょう。」

「説明してもらえませんか？」

「民主国家はその自由への欲望のせいで、悪い指導者の影響下に陥るかもしれません。そういう指導者は社会を巧妙な精神で酔わせて、それから政府が寛容で多大な自由を与えない限り、寡頭政治だといって非難して罰するのです。」

「それが民主政府のやることです。」

「政府に服従し臣民のように振舞う支配者や支配者のように振舞う臣民への承認を控える者をこびへつらうとか情けないとか言って私的生活でも公的立場でも攻撃するのです。このような社会では自由の原則は極端なところまで進むしかありません。そしてそれは私生活に浸透し、最後には家畜まで無政府状態に感染してしまうのです。」

「それはどういう意味ですか？」

「そう」私は言う、「父と息子が入れ替わるようなことが起こり、父親が息子の威厳に屈し、息子は独立を主張するため親を尊敬することも恐れることもなくなる。そして市民と外国人の間の区別もない。そして、もっと些細なことがあります。教師は生徒を恐れ迎合するようになる。それで生徒は教師を軽蔑する。若者は年長者のまねをして、彼らと口論し、同等に振舞う。その反面年長者は気難しいとか厳格すぎるとかいう評判が立つのを恐れて若者の真似をして物分りの良い仲間として彼らと付き合うのです。．．．」

「アイスキュロスが言うように、この問題について話している間に全てを出してしまおう。」

「そうしよう。」私は言う、「自分の目で見ないと信じられないでしょうが、家畜やペットには民主社会では有り余る自由が与えられています。自分を愛するようにイヌやネコを愛せよということわざが言っているが、ウマやロバにも当てはまる。．．．」

「結論として言えることは、」私は言う、「市民の心があまり敏感になって抑制のかけらでも感じられると許せないと行って憤慨するようになり、最後には御存知のように、統率者を絶対持たないと決心し、成文法であろうと慣習法であろうと全ての法律を無視するようになるのです。」

「そのとおり。」

「そう。これが専制政治が出現する根源となるのです。」と私は言う、「最初は明るい見通しがあります。．．．」

「だから過度の自由から社会や個人が最も得られる可能性のあるものは、過度の服従です。もしそれが当たっているのなら、我々は専制政治が民主主義から生まれ出ることを予期すべきです。つまり過度の自由から最も残虐な服従が生まれるのです。」<sup>20</sup>

パターソンはプラトンの民主主義が専制政治に退歩する過程の説明を以下のように要約している。

さて、民主主義はどのように専制政治に移行するのでしょうか？ 民主主義国家の指導者はかつて寡頭政治の指導者に対して反乱を起こした人々です。その多くは乞食か犯罪人でした。民主主義社会の指導者として、これらの輩は市民を喜ばせようと全力を尽くします。彼らは人気を保つために市民に迎合します。残り少ない裕福な市民から奪い取り、そのほとんどを自身で取り込んだあと、残りを大衆に分配します。もしこれが起こると、裕福な人々は富を奪われたと民会で訴えます。そうすると、民主社会の指導者によって市民に対して陰謀を企てたとか、反動的で寡頭政治的だといって弾劾されます。これが内乱につながり、大衆は民主制度の指導者の一人を選んで収めてもらおうとします。この大衆の指導者は市民からの完全の支持を得ます。そして市民は言われることに全て従います。彼は残り少ない地主や裕福な人々を追放するか処刑して、最大限の権力を得ます。もちろん、この指導者は自分を守らなければならないので、護衛を要求し、徐々に私的軍隊を築き上げます。その支配の初期には専制君主であることを否定します。大きな約束をして、富を分配し、概して誰にでも親切に振舞います。しかし陰謀者に対して常に用

<sup>20</sup> 同、335～337頁。

心しなければならぬでしょう。その私的軍隊を拡大しなければなりません、そのために市民に高い税金をかけます。知性的で勇気のある人間を謀反を目論んでいるかもしれないと言って全て不信の目でみます。彼の取り巻きや護衛はしたがって愚かで、犯罪者的な存在です。というのもこの指導者はそれ以外の人間を信用できないからです。やがて資金も尽き果て、市民を圧迫し始めます。彼を権力の座につけてくれたまさに同じ市民をです。これがそう暴君です。彼の支配する国家は明らかに全ての政治体制の中で最悪で、最も不幸なものです。<sup>21</sup>

ソクラテスの経験は衆愚政治化のもうひとつの側面を提示している。すなわち純朴理想主義者と汎理想主義者の間には常に緊張関係があり、衆愚政治化が進むにつれて分裂してしまう可能性があるのである。『ソクラテスの弁明』では、汎理想主義者と純朴理想主義者の不安定な協調関係が鮮やかに描き出されている。当然人は知識が深く特別な存在であると思いたがり、無知であることを思い知らさせることを好まない。しかし、純朴理想主義者がそのような誘惑に打ち勝ち、自分の立場をわきまえないと、現実主義者の領域に立ち入ることになる。そうすると彼らは現実主義者の手先となり、汎理想主義の領域を破壊するのである。『弁明』ではソクラテスは純朴理想主義者との関係がいかに損なわれたかについて述べている。

私は私より賢明な人を見つけ、私の中で神と論議し、神に向かって「ここに私より賢明な人がいますが、あなたは私が最も賢明な人間と言いましたね。」と言おうかと考えた。それで私は賢人と評判の高い人の所へ行った。名前は言わないが、彼は政治家で私は彼を試してみようと思って会ったが結果はこのようなものであった。私が彼に話し始めたとき、彼は多くの人から最も賢明であると考えられていて、また彼自身人が考える以上に賢明だと思っているにもかかわらず、私は彼はどうしてもそうだとは思えなかった。そこで私は彼に自分で賢明だと思っているようだが本当はそうではないと説明しようとした。その結果彼は私を嫌悪した。そこにて私の話を聞いていた数人も敵愾心を抱いたようである。そこで私は彼の元を離れて、「ふん。どうやら私も彼も本当に美しく良いものを知らないようである

<sup>21</sup> Charles H. Patterson ed., *Plato's The Republic*, Lincoln, Neb.: Cliff's Notes, 1963, p. 65.

が、私は彼よりは勝っている、というのは彼は何も知らないの  
に知っていると思っているが、私は何も知らないが、何かを知  
っているとも思わないからだ。」と離れ際につぶやいた。それ  
から私はさらに哲学的なことについて知ったかぶる別の人のと  
ころへ行った。そして私の結論は全く同じだった。彼も私の敵  
となった。そして彼のそばにいた多くの人も私の敵となった。

その後私は次から次へと人にあったが、私が敵愾心を抱かせ  
ることに薄々気がついてはいた。私はそのことを残念に思い、  
恐れもしたが、どうしても続けなければならなかった。神の言  
葉を考慮することが一番大切だと思ったからだ。そこで私はま  
ず何かを知っていそうな人全てに会い、そしてその神令の意味  
を見極めなければならないと自分に言い聞かせた。アテネ市民  
よ、私は真実を告げなければならないので、誓って言うが、私  
の使命の結果はこうであった—私は評判の高い人物はほとんど  
愚か者と言ってよく、教育の低い者の中には賢明でより優秀な  
人がいた。私はこのさまよいながら議論の余地の無い神令を見  
つけるまで続けた鉄人的とでもいう仕事をやり遂げた結論を言  
わせてもらおうと、私が政治家の下を離れてから、詩人のところ  
へ行った。悲劇的なもの、主神礼賛そしてその他全ての類が  
いた。そこでは私は彼らは私が彼らより無知であることを見て取  
るだろうとつぶやいた。そこで私は彼らの自作の中から最も手  
の込んだ一節をいくつか選んで、その意味を教えてくださいと頼ん  
だ。何か学ぶものがあるだろうと思ったのだ。信じてもらえる  
かどうか分からないが、私はこのことについて話すことを恥ず  
かしいとさえ思うが、自分の詩について自我自賛する者がほと  
んどであった。この件から私は詩人は賢明さを使って詩を書く  
のではなく、なんとというか一種の鬼才というか妙想によって詩  
を書くのだということを知った。彼らは易者や占い師のような  
もので、分かったようなことをよく言うが、その意味は理解し  
ていないのである。そして詩人も同じようなものに思えた。そ  
れで私は彼らが自分たちをして自分たちの知らないことについ  
ても最も賢明なのだと思わせるようになった詩の強みについ  
てさらに観察した。そして私はその場を離れたが、私が政治家よ  
り勝っていると思うに至ったと同じ理由で私は詩人よりも勝っ  
ていると思った。

最後に私は職工のところへ行った。というのは私は全く何  
も知らないことを意識していたからだ。そして私は彼らが多く

の優れたことについて知っていると同様に確信していた。この点について私は間違っていなかった。というのは彼らは私の知らないことをたくさん知っていたからだ。そしてこの点については彼らは確かに私より賢明だった。しかし私は腕の良い職工でさえ、詩人と同じ間違いを犯すことを観察した。というのは彼らは腕の良い職工であるから他の全ての崇高な物事についても知っていると思ってしまうのである。そしてこの欠点が彼らの賢明さを打ち消してしまうのであった。したがって私は神令に関して、私が彼らの知識も持たない代わりに彼らほど無知でもないという今の状態を好むか、それとも彼らのように知っていることは知っているが、知らないことまで知っていると思ひ込む方が良いかについて自問した。そして自分と神令に対する答えは私は今のまがが一番良いということであった。

この調査のせいで私は最悪で最も危険な敵を作ることとなり、災難も被ることとなった。<sup>22</sup>

恨みを持つ純朴理想主義者による死刑宣告に直面して、ソクラテスは勇気を持ってその立場を守る。

であるからもし釈放してもらえ、私を処刑しないのであれば元から告訴されるべきではなかったのだと主張し、またもし私が逃避すれば、あなた方の子息が私の言うことを聞くことによってだめ人間になってしまうだろうと主張するアニトスの審議会の決定を拒否しようと言ってくれるのであれば、もしあなた方が私に、ソクラテスよ、今回はアニトスの言い分を却下し、釈放してやるが、一つ条件がある、それはもうこのような方法で探求し、憶測を働かせることは今後しないようにということである。またもしそのようなことをしているところを見つかったら、そのときは死刑に処すと言ったとしたら、もしそれが釈放の条件であるというのであれば、私は、アテネ市民よ、私はあなた方を尊敬し、愛しますが、私はあなた方より神に従います、そして私が生きていて健康な限りこの検証を続け哲学を教え続けますと答えるでしょう。<sup>23</sup>

<sup>22</sup> Plato, "Apology," in *The Trial and Death of Socrates: Four Dialogues*, New York: Dover Publications, Inc., 1992, pp. 22–24.

<sup>23</sup> 同、30頁。

ソクラテスはまた純朴理想主義者に汎理想主義の指導層を排除した場合の結果についても警告している。

確かに私は多くの敵を持っています。そしてこれがもし私が処刑されるならその原因であるでしょう。それはメレトスでもアニトスでさえも無く、世間の羨みと非難のせいだと確信しています。これは今迄多くの善人の死の原因となってきました、そして将来もっと多くの善人の死の原因となるでしょう。私が最後となる可能性は全くありません。

中には、ソクラテスよ、寿命を全うすることなく死ななければならないような人生を送ることを恥と思わないかと聞く人もあるでしょう。そういう人にはこう答えます。貴方はそこが間違っているのです。何をするにつけても巧みな人間は生死の可能性の計算などしてはいけないのです。唯一考えなければならぬのは何かをするに際してそれが正しいことであるか誤ったことであるかだけです。善人として生きているのか、悪人として生きているのか。 . . . <sup>24</sup>

知っておいてもらいたいことは、もし私のような人間を殺せば、私を傷つけるよりもっとひどく自分自身を傷つけることになるということです。

メレトスとアニトスは私を傷つけはしません、できないのです。というのは悪人は自分より優秀な人間を傷つけることは無いのです。 . . . そしていま、アテネ市民よ、私は、あなたがたが思っているように自分の為に議論しているのではなく、あなた方の為に、あなたがたが神に対して冒瀆を働かないようにする為に議論しているのです。あるいは馬鹿げた比喻を使わせてもらえば、私は神によって国家に与えられたアブのようなうさぎ存在ですが、そして国家はその大きさのせいで動きの鈍い偉大で高貴な馬のようなものですが、そのため存続する為に常に韜鼓される必要があるのですが、私のような存在はもう見つけられないかもしれないことを心配して議論しているのです。私は神がこの国に与えたアブです。そして一日中どこにいてもあなた方をいつも目覚めさせ、説得し、叱っているのです。私のような人間を見つけることは簡単なことではありません。私を処刑しないよう助言します。昼寝をしているときに突然起

<sup>24</sup> 同、29頁。

こされたりしたらいらいらするでしょう。そしてアニスが助言するように私を処刑してしまえばと思うでしょう。それは簡単なことです。そうすれば残りの人生ずっと眠り続けることができるだろうと。神が別のアプを送ってこない限りは。そして私が神によってあなたの方の下に送られたのだと言うことはこのことによって証明されます。すなわち、もし私が他の人間と同じであるなら、私はここ何十年の間、自分の身の回りの関心事を無視して、市民が義務を怠らないように根気よく見守ることも無かったでしょう。そして父や兄というような個人的な形であなた方に与えられる義務を果たしてあげることも無かったでしょう。美德を尊重するようあなた方に勧めて回ることも無かったでしょう。というのも言わせてもらえばこれは人の性質に反することだからです。<sup>25</sup>

このように古代ギリシャでは、衆愚政治化が進み民主主義は崩壊した。もう一人の思想家マキャベリも民主主義の現実性について疑いを持っている。彼は民主主義は長続きしないと述べている。ボンダネラによると：

その『ディスコルシーローマ史論』の中で、マキャベリは政府の周期に関する見解を述べている。三つの良い国家体制は、公国、貴族制と民主制であり、三つの腐敗した国家体制は専制政治、寡頭政治と無政府状態である。これらについてはマキャベリは多くの古典理論の中で精通している。しかし彼にとって、「掲げられている全ての政治体制は欠陥を持っている、良い三つの政治体制は長続きしないという点で、そして三つの腐敗体制は本来有害であるという点においてである。」(*Discourses*, i. ii.)<sup>26</sup>

しかし、歴史的に民主国家が崩壊したからといって、現代の民主制が必ずしも同じ道を辿るとは限らない。実際、パターソンは、このような状況は古代アテネにだけ当てはまると考えているようである。「もちろん、プラトンは複雑で精巧な抑制と均衡制度を持つ現代社会や政

<sup>25</sup> 同、31～32頁。

<sup>26</sup> Peter Bondanella and Mark Musa, ed., trans. *The Portable Machiavelli*, New York: Penguin Books, 1979, p. 29.

府での経験はありませんでした。」<sup>27</sup> したがって、ここで現在の民主政治について検証する必要がある。

汎理想主義者にとっては現代の民主制度は理想主義の崩壊の最終段階で全民の全民に対する戦争である自然状態への復帰段階ということになる。理想主義社会に於いては、賢明で良心的な指導者であり、全体の益の為に決断を下す汎理想主義者の占めていた役職が汎理想主義者のふりをする現実主義者に奪われた。その結果、汎理想主義者の領域は完全に信用を失った。民主主義はその反動として生まれた制度で、その問題の解決法として、汎理想主義者の領域は排除され、現実主義者と純朴理想主義者の領域が社会に残された。そのため、汎理想主義者と純朴理想主義者が現実主義者を挟み込むことによって押さえ込むという戦略はもう使えなくなった。その中で現実主義者による専制政治による人権侵害を押さえ込むために、三権分立により、政府機関が互いに牽制し合い専制を避けることに代表される権力集中を防ぐ一連の安全弁が設置された。民主主義はまた社会への義務よりは個人の権利に焦点を当てる。これらの歴史の直前の時代での問題を解決する為の策は国民の平等を基盤原則とする国民が主権を持つ政治体制を生み出した。

しかし、これらの対策が、民主制度が内部からの崩壊の種を内包する原因となった。第一に、知的能力がない。国民の大部分は純朴理想主義者であり、理想主義社会では服従者である。今、彼らは自分たちだけで決定を行わなければならなくなる。この社会に於いては、政治家はプラトンが言ったように、人気を保つことに執心し、国民を喜ばすことに熱心で、その結果その意思決定において世論調査に敏感である。したがって、この社会での意思決定は問題にそれほど知識の無い素人によって為されることになる。医者が患者に対して手術を行なうかどうか決定するのに世論調査に従うことを想像してみると解るが、これは患者にとってはおぞましいことである。第二に個人の権利をあまりに強調する体制は社会にとって有害である。民主主義がうまく機能するためには国民一人一人が自由は何でもやりたいことをやりたいようにすればよいという意味ではなく、それは自己統制の権利であるということを知る必要がある。言い換えれば、誰か他の人間に統制されるのではなく、自分自身で自己を統制することが許されるということである。それができない社会では自由社会は無政府状態の弱肉強食社会に退化する。ここで歴史的状況のせいで、社会への義務という観

---

<sup>27</sup> Patterson, p. 67.

念は汚名を着せられ、権利の概念だけが強調される。このせいで国民が膨大な権利意識を持つに至り、人々は体制に貢献したいと思うのではなく、体制は個々の欲求と権益に奉仕すべきだと要求するようになる。このような状況下では、権力分立による牽制制度がしばしば政策決定過程を麻痺させ、長期的に一貫した政策を採ることが不可能になる。全体の利益を追求することができなくなり、それぞれの政府部門はしばしば偏狭な利権を代表する、あるいはそれさえ無くただ選挙だけをめぐって対立する政党によって占められお互いの政策を阻止しあう。また、自分が何をしなければならないかを考える義務感の欠如から、牽制機能が他の人がすべき義務をいかに怠っているかを批判するだけに留まり、その結果社会として何も解決されない状態に陥ってしまう。

民主主義の第一の問題点を工学上の概念を借りて表現すると、航空力学の概念を使うのが効果的だろう。ここでは飛行機は適切な揚力・抗力比によって飛行が可能になるのであり、高い揚力か低い抗力だけでは成功しない。プラトンの哲学王は支配者の能力を向上させるという点で揚力の向上に焦点を当てることに値するだろう。しかし揚力だけに焦点を当てることによって、多大な人権侵害を起こすことになった。これに対して、民主主義による解決法によって抗力の減少に値する権力の集中を防ぐことが提案された。ということは現在の先進民主国家は翼を失った飛行機といっても良いかもしれない。翼は揚力を与えるが同時に主要な抗力源でもある。もし市民が抗力を減少させることだけに専念するなら、揚力を失うことになるという結果に気づくことなく翼を切り取ってしまうこともありうる。さらに、現在の民主社会は集中した巨大な抗力を分散させようとする努力は、全体の抗力を減少させるのではなく、単に無数の小さな抗力を生成することとなることを示唆しているようである。さらに懸念となるのはその努力の最中に全体の抗力がむしろ増加したことである。最も近いイメージは翼を失った飛行機が無数の破片に空中分解し、それぞれが独自の抗力を生成し、その合計が元の抗力を上回ったというものであろうか。これらの部品が地面にぶつかったとき、文明は崩壊し社会はホブズが全民による全民に対する戦争と表現した自然状態、あるいはピコーの野蛮時代に戻ることになる。

権利と義務の問題はより深い問題で、抽象的な理論の層でエントロピーの概念を使って表現できる。ここでは個人の権利を追求することはエントロピーを体制に排出するか、体制から負のエントロピーを吸収することに価する。また義務を遂行することは体制内のエントロピ

一を個人が吸収するか、負のエントロピーを個人が体制に寄与することを意味する。もし過度のエントロピーが体制内に流入するか、過度の負のエントロピーが体制から流出すると、体制は崩壊する。この点では、専制政治と民主政治の間には大差はない。理想主義者の主な焦点は負のエントロピーを生成するかエントロピーを負のエントロピーに変換することであるが、一旦これに成功すると、社会にはエントロピーは存在しなくなるので、政策決定は一人の賢人に委ねることができる。しかしこれは現実的には悪性の強い専制政治を産むことになってしまった。専制政治では巨大な一つの独立体が大量のエントロピーを流出するか負のエントロピーを奪取する。この問題に対して民主的解決法が提案され、そこではエントロピーの生産者としての権力集中を防ぐことが主な目的となった。しかし、民主主義は国民全てに権利意識を植え付けた結果、エントロピー生成者の集中は免れたものの、無数の小規模な生産者を創造することになり、全体のエントロピー生成量を減少させることはできなかった。

もうひとつの民主主義の原則である平等の概念も問題となる。ヒンドゥー教の歴史にも見られるように、初期により重責を課された社会層がそれに価する報酬を求めるようになる。それは理に適っているので、代償として特権を与えられることとなった。すると、現実主義の権力追求者がその地位を奪うこととなり、義務を果たすことなく特権だけを享受することとなった。民主主義はこの腐敗した体制への解決策として採用され、体制からの恩恵を平等に分配することに焦点を当てている。これによって、市民は他の市民が持っている者は全て自分も持つ権利があると信じるようになった。しかしこの種の考え方は社会を破産に追いやってしまうことになる。また責任分担の面でも分配に対する配慮を怠り、「全ての人民は平等に作られている」という格言に見られるように、人民全てが同じ責任を負うことが可能であると仮定する。この平等の名の下に、能力の低い層の市民に不相応な重圧が課されることとなる。この平等の概念によって全体のエントロピー量が増加し、それが社会に於いて下部に負担になるように分配されるのである。現代民主主義に於いては、体制内に流入するエントロピーと体制から奪取される負のエントロピーの量が危険域に達している。これを数量的に表す方法は無いが、ここではその代わりにキリスト教の言語を借りて表現することにしよう。すなわち、現代民主主義は『七つの大罪』を放出することとなった。

**欲望:** 過度の権利意識のせいで人々は富や名声を限りなく欲しがるようになった。経済学者はこれを学説の中に組み込んで、人の欲望は

無限であるとの仮説を立てている。そうなるとこれが通常の状態となり、否定的な意味合いは無くなってしまった。そこで人々はより多くの富、権力や地位を求めて、それを別に悪いことだとも思わなくなってしまった。億万長者となったマイクロソフトの創始者のビル・ゲイツを例にとってみよう。オンライン販売のアマゾンで検索して見ると95冊出てくるが、その題名のいくつかを見ていると『*The Success Secrets of Bill Gates: The Inspirational Story and Success Secrets of Microsoft Billionaire Bill Gates* (ビル・ゲイツの成功の秘密—マイクロソフト億万長者ビル・ゲイツの感動的物語と成功の秘訣) (Anthony Taylor)』、『*Gates: How Microsoft's Mogul Reinvented an Industry—and Made Himself the Richest Man in America* (ゲイツ—マイクロソフトの実力者がいかにして産業を立て直したかそして自身をアメリカ—裕福な人間にしたか) (Stephen Manes and Paul Andrews)』、『*The Rich and How They Got That Way: How the Wealthiest People of All Time—from Genghis Khan to Bill Gates—Made Their Fortunes* (金持ち、そしてどうやって金持ちになるか—ジンギスカンからビル・ゲイツまで歴史上最も裕福な人間がどうやってその財産を築き上げたか) (Cynthia Crossen)』といった具合である。ビル・ゲイツは財団を創立して積み上げたその富を分配し始めたが、『黄金の子牛』を解き放って健全な社会を破壊した後では、すでに害はなされており、有り余った金をばら撒いてみてもそれはもう修復できないのである。

**強欲:** 富を獲得した市民の間で富を還元しない傾向が増えつつあるとのことである。過度の権利意識がもしこれだけの富を積み上げる能力が自分にあるのなら、富を自分だけの為に保持する権利があると思わせるようだ。新鋭の裕福者は慈善事業に関心が薄いと各所で報告されている。<sup>28</sup>これが富める者と貧しい者の間のギャップを増大させている。

強欲というものは人間性を麻痺させてしまう。どこでも金の集まる場所では人間性は失われているようである。芸能界を例にとると、若い才能のある人が、多くは10代であるが、スカウトされて産業に入るが、ビジネス側は数年の間に取れるだけ金をとって次のタレントに移るといふ具合である。タレントの長期にわたる潜在性を花開かせてやろうというような心遣いは全く無い。成熟して演奏家としてその才能を開花させるような生き方はさせてもらえない。その結果、早い時期に頂点に達して、あとは一生かけてそこから転落していくのであ

<sup>28</sup> 例えば“Silicon Valley wealth divides San Francisco,” in Los Angeles Times, August 14, 2013, B1, B6を参照。

る。40代、50代になってまだ芸能界にいれば、その多くは生き残るために10代、20代の新鋭と浅いレベルで競争させられる。というのも、ベテランとして年をとるにつれて深い感情を表現する道を与えられないからである。より健全な社会では、これらの才能のある演奏家はその才能を完全に発揮できるよう、また長年にわたってそのキャリアが続き、その間に人間として成長しながらそれが演奏に反映されるようにすることだろう。

**暴食（過度の消費）**：過度の権利意識のせいで人々はその欲望に歯止めが利かなくなった。実際資本主義はその存在を消費に依存している。消費は経済成長・回復の機動力である。であるから人々は本当は必要としない物資やサービスを購入するように煽られる。例えば、ウォールストリート・ジャーナルの中にこのような記事がある。

2008年の経済危機のせいで、米国では豪華品の消費が鈍っていたが、中国が世界的にこの部門での重要な駆動源と見られてきた。中国の消費者はユーロ圏の危機のせいでユーロ市場が圏内での消費に努力し始めたのでさらに重要となった。多くの豪華製品製造業の重役はバス満杯のアジアの旅行者がその救済にヨーロッパを訪れるのを目撃した。<sup>29</sup>

人々により多く消費させる為、製品はどんどん豪華なものとなった。もし20型のテレビを持っていれば、60型のテレビを買うように勧められ、家を持っていれば、休暇用の家を買うように勧められるといった具合である。これによってこの社会は惨事に向かって直進している。当然このような行動が永久に続けられるわけが無く、いずれ資源を使い果たして崩壊するのである。

**傲慢**：誰でも自分を特別だと思いたいものであるが過度の権利意識が自分は特別である権利があると思わせるようになった。このせいで社会は急激な下降状態に置かれている。基準は全ての市民が特別だと思える所まで下降した。この社会では一般人が理解できない作品はお高く留まっていると軽蔑されたり無視される。例えば芸術界では人は十分な才能が無くても有名になりたいと思うため、ポップ・カルチャーなるものを発明し、限られた才能しかない者が暫しの富と名声を味合う

<sup>29</sup> “What Recession? Americans Regain a Craving for Luxury,” by Nadya Masidlover and Christina Passariello *Wall Street Journal*, February 13, 2013.  
(<http://online.wsj.com/article/SB10001424127887324880504578300291357105904.html>)

ことができるようになった。他の分野でもこれは進んでおり、これが本書での形而上工学の底部の消滅の原因となっている。

俳優の中には多額の報酬と引き換えに中身の無い映画に参加する者もいる。その後で有り余った金を慈善事業に寄付しているが、このような行動は限られた一時的な影響しか社会に与えることができない。そして長期的には社会の退廃を悪化させることになる。社会に真の貢献をする為には、彼らは内容の無い映画の製作に参加することを拒み、自己の所属する産業がそのレベルを維持できるようにすることが必要であろう。個人個人が自分の所属する部門でそのレベルを維持できるようにすることによって社会全体が高いレベルを維持できるのである。

**怠惰:** この社会は即座の満足を追及する。人々は欲しい物はすぐに得る権利があると思い、そのために努力することをしない。一生懸命働くなどということは笑い者になった。問題があると人々は全て問題には対処すべきであるという点では同意するが、その為に自分は何かができるかと問うのではなく、他人が解決することを期待する。このせいでこの社会は集団否認を被っている。この種の考え方がこの前のサブプライム経済危機を招くことになった。ここでは社会の全ての部門に属する人々が簡単に即座に利益を得ようとして、銀行は返済能力の無い借り手に高い利子で融資し、買えないことが分かっている買手も数年で売れば利益になると借金をするといった具合であった。このようなことが永久に続くはずはないが、みんなそのことは無視した。

傲慢と怠惰の組み合わせは社会にとって有害な影響を及ぼす。傲慢のせいで、人々はその資格もないのに地位の高い立場に立ちたがる。最も著名な例は大統領の職であろう。真に資格のある人材もあるだろうが、そういう人は問題を本当に解決する為には犠牲を払うことが必要であると知っている。ここで怠惰が絡んでくる。国民はそんなことは聞きたくないのである。国民は問題は簡単に解決できると言って欲しいのである。自分で何を言っているかも解らずに資格の無い人間はそれを約束するが、本当に問題を理解している人はそんな約束はできない。それで国民は資格の無い人間を大統領に選ぶことになり、問題に本当に対処できる人間がその立場に立つことができなくなってしまうのである。

**嫉妬:** ある定義によると、嫉妬とは誰かが他の人の持つ性質、達成あるいは所持品を持っていない時その人もそれを持っていないかと望むことから来る憤慨だとある。<sup>30</sup> もしこれが定義だとすると、この

<sup>30</sup> Parrott, W. G., & Smith, R. H. (1993). "Distinguishing the Experiences of Envy and Jealousy," *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, pp. 906-920.

社会はすでに嫉妬を超越している。例えば、もし裕福な人間が百万ドルかかる治療を受けられるとすると、人はその人がそのような高額な治療を受けられなければいいのにと願うのではなく、過度の権利意識のせいで、もし他の人間がそのような治療を受けられるのであれば、自分にもその治療を受ける権利があると思うのである。そして社会がその費用を受け持つべきだと主張する。この種の考え方は、福祉にかかる費用をまかないきれないところまで高額にする。福祉国家は国民一人一人が政府の福祉の世話になるのは恥であると強く感じる社会でなければ成立しない。国民が政府から搾り取れるだけ金を搾り取る権利があると考えている社会は破産する。この考え方はアメリカン・ドリーム(注)の基盤であった。「他の人間が持っている物は、なんでも自分も持つことができる。」当然これは暴食と同様支えきれぬものではなく、社会を崩壊に導く。

**憤怒:** 過度の権利意識のせいで人々は与えられたことに感謝すべき様なものでも当然と考えるようになった。そしてそれを失ったり、得られなかったりすると、権利を侵害されたと感じるようになった。そのせいで訴訟社会が生まれたが、その多くは軽薄なものである。時には人は彼らの被った不正に対して政府が対処することを要求し、政府をより軽薄な事態に巻き込んでいく。例えば合衆国憲法修正第一条は、当初は、カトリックを改宗することを拒否したために処刑された英国のトーマス・ムーアのように政治的、宗教的信念のために迫害を受ける人を守ろうとしたものであったが、今日では、人々は児童ポルノを掲載するために修正第一条の保護を要求する。政府は全ての国民がやりたいことを何でもすることを保証することはできない。国民にそれほど重要でないことをあきらめることによって、真に重要な権利を守ることができるだけである。しかし今では体制は麻痺してしまっている。

さらに悪いことには、国民が些細なことに執念を燃やしている間に、修正第一条項の核心が侵食されてしまった。ゲーリー・ウェブというジャーナリストがニカラグアの反共産のコントラグループがCIAの支持の下コカインを米国で販売しその活動資金を得ていたという政府の陰謀を暴く記事を書いた。後にこれは本当であると分かったが、当時ワシントン・ポスト、ニューヨーク・タイムス、ロサンゼルス・タイムスといった大手新聞社は全てこれを否定し、かなりウェブに関して批判的な記事を書き、最後には彼を自殺に追い込んだ。皮肉なことにはこれは1980年代のマスコミ自由化の結果、マスコミの独占化が進み、大資本が主要マスコミ機関を所有することになった結果であるとのことである。そしてそれらの大資本はしばしば政府寄りである。こ

れはプラトンの過度の自由に対する警告に関する身の冷めるような教訓であろう。何の規制もなく、全ての人間が自由に振舞えば、もちろん強者が勝ち、全てを奪う。事実的には自殺であったかもしれないが、ウェブは殺されたのである。修正条項第一条は白人至上主義者や児童ポルノ撮影者を守ろうとする反面、本来守るべきとされた一人物を守りきれなかった。

国民はまた一人一人の意見は重視されると教えられるので、自分の意見がどの問題についても必ず重視されることが当たり前と思うようになる。そして自分の意見が重視されないと憤慨するのである。これが個人の行動が社会の一部あるいは全部に影響を与える公的領域と個人の行動がそのような影響を持たない私的領域の区別を不明確にすることとなった。政治は最も抽象的なレベルでは市民の間で体制に与えられるべき負のエントロピーをどのように分配するか、あるいは市民の間で吸収されるべきエントロピーをどのように分配するかを決定するものと定義されるべきである。これに影響を及ぼさない事象は私的領域に残されるべきである。しかしこの社会では、妊娠中絶から同性結婚まで全ての問題が政治化され、人々は自分の意見を反対者に押し付けようとお互いを激しく攻撃しあうのである。しかしながら、このような論議は建設的な解決に結びついていないように見える。というのは人々は問題を解決することには関心が無いからである。これが政界を麻痺させている。結果は皮肉なもので、この社会は白人至上主義者など社会を破壊しようとするものを守り、同性愛者のようにただ結婚したいと言っているだけで社会には無害の人の権利を奪うことになっている。

妊娠中絶の論争は子供の頃聞いたソロモン王と二人の母親の話の思い起こさせる。二人とも子供は自分のものだと言ったが、ソロモン王は引っ張りっこして勝った方に子供を渡すといった。そこで引っ張り合いが始まったが、子供の泣き声を聞いて手を離れた母親に王は子供を渡した。現在の論議では子供が間で苦しんでいるにもかかわらず両者共に手を離さないでいる。今の論議の形では胎児には殺されるか、望まれずに生まれてくるかという二つの選択肢しかない。もし本当に問題を解決したいなら、論争は違う形をとるだろう。両者共に協力し合って、生まれてくる子供に最良の環境を提供できるようにすることが大切になるはずである。そうすれば中絶の数も自然と減ってくるだろう。であるから、両者共に利用できる全ての資源を使って、妊娠中の母親に、里親制度、養子縁組、家族擁護制度、社会擁護制度、カウンセリングを含む幅広い選択の余地を与えるような社会制度の設立に

専念することになるはずである。最後の決断は胎児の一生に直接責任のある母親とその家族によって決められるべきであるが、政府はそのような努力をこれらのサービスの為の資金を提供したり、カウンセリングを強制するなどの法律を通すことによって支持することができるはずである。

このような社会では理想主義の基盤となる精神的分野は低落してしまう。この兆候として人々はペットを家族のように扱うようになったが、これはプラトンのコメントを不気味なほどに反映している。<sup>31</sup> 一見すると人々がペットを人間のレベルまで格上げしているように見えるが、ペットとの関係は肉体的生存内に限られている。何百年も前に存在した動物にそのような愛着を感じることは不可能である。したがって、人間以外に精神的関係を持てる生き物はいないのである。これが人間を他の全ての動物から区別する性質であり、理想主義の領域内だけに存するものである。しかし現実主義の台頭する中、人々はこの人間独特の性質を放棄し、肉体的存在だけにへばりつくようになった。であるからこの場合、ペットが人間のレベルに格上げされているのではなく、人が動物のレベルに格下げされているのである。

一旦枠組みが外れると、これらの傾向は有能な指導者が欠如しているため押さえ込むことができなくなる。純朴理想主義者は弱く、ちょっとした困難に出会うと理想主義を捨ててしまう。しかし第三章で述べたように『正しいこと』とは、人が度合いは違いが負のエントロピーを体制がその統一性を失わないようにする為に寄付することを意味するので、常に困難なことなのである。理想的な社会では、有能な指導者が市民一人一人にその能力に応じてどの程度の貢献をすべきか割り当て、それが実行されるように確認する。指導者は市民ができるだけ強くあるよう励ますとともに、自分が最も大きな犠牲を払うのであるが、この時点ではこのような指導力は最早存在しない。その中で、弱者は方向を見失って破滅しまうのである。私の兄の生涯はその残酷さを顕著に物語るものであった。子供の頃よりひとときわ優越感の強い存在であったが、学校に上がり外の世界と接触するようになると、自分が思ったほどには卓越した存在ではないと思ひ知らされるようになったようだ。これは、よくあることで「天才も二十歳過ぎれば唯の人」と言われるように、大部分の人間は大人になるにつれ自分は凡人であることを思ひ知らされ子供時代の壮志を諦め、自分の器で生きていくようになるのであるが、兄の場合はここで大きく道を逸れること

<sup>31</sup> Plato, H.D.P. Lee trans., *The Republic*, Maryland: Penguin Books, 1971, p. 336.

となってしまった。兄は一流と呼ばれる大学に入ったのはいいが、二年間進級できず放校になってしまった。これに対して、まず兄はこの社会は欠陥に満ちているものであると批判することによって参加する価値も無いものであると見下した。頭の悪い人ではなかったのが彼の批判は技術的には正しいものだったが、彼の知識はいわゆる聞きかじりで、スポーツでいえば、素人がテレビを見ながらプロの選手の批判をしているようなもので、解ったように思えても、実際には無知なのであった。このような生き方が続けられる訳もなく、社会参加を余儀なくされた。ここで、本来なら社会は無理やりでも自分にあった器に押し込めるところなのだが、このような社会ではその箍が外れてしまい、兄は野放しのまま社会に放たれることとなった。その結果、彼はあたかも社会のトップ・プレイヤー、即ち一流大学を卒業して大企業に入った人たちと同等であるかのように振舞った。この中で良心的な人たちは兄のことを歯牙にもかけず無視したが、一方で彼のもの欲しさを利用しようとする現実主義者の格好の餌食となった。都市銀行の副頭取などに相手をしてもらい、ほぼ契約は確実などと言われ雑用を押し付けられた挙句に、最終的には予期せぬ事情のせいで契約ができなくなった、またこの次の機会になどといわれて放り出されているのを目撃したことがある。このように兄は社会で何一つ建設的なことができず、絶望的になり違法行為にまで手を付け、最後は行き場が無くなって酒びたりとなり朽ち果てることになってしまった。このような生き方はまた、多大なエントロピーを放出し、周りの人間はそれを吸収しなければならなくなる。彼の家族は、経済的にも精神的にも追い詰められた。このようなことが社会のあちこちで起こるようになり、あたかも金属疲労による小さな亀裂が大きく広がって機体が弱体化して行くように、社会は疲弊していく。

それでは、指導者層の破壊というのはどのように起こるのであろうか。図4-7で示されているように、それは汎理想主義者の垂直分野と水平層の侵食と分断化という形をとる。

第一に、底辺の侵食が起こる。第五・第六章において形而上ピラミッドの四層の分野検証を行なった。私の博士論文は民主過程と膨張主義に関するものであったが、助言を求めたほとんど全ての人に『大きすぎる』から書かないように警告を受けた。しかし汎理想主義者のピラミッドでは製造・整備の層にあたる。これは、物理工学の分野では整備工にあたる人々が博士号を与えられているのと同じということを示唆している。ここで断っておくが製造・整備の層になんら劣るものがあるわけではない。個々の層はそれぞれ不可欠なものである。問題は最深の

層に与えられるべき免状が第二層に与えられていて、それ以下の層が消滅してしまっているということである。もし米国の政治学で博士号を取ろうとすると、国際関係、比較政治、米国政治と政治理論の四つの分野から自分の専門分野を選ぶことになるが、おそらく政治理論は専攻しないよう助言を受けることであろう、というのは、職が無いからである。政治理論は工学層に属し、他の三部門は製造・整備層に属する。このように、人々は哲学が全く関係ないところで博士号（Doctor of Philosophy）を獲得しているのである。

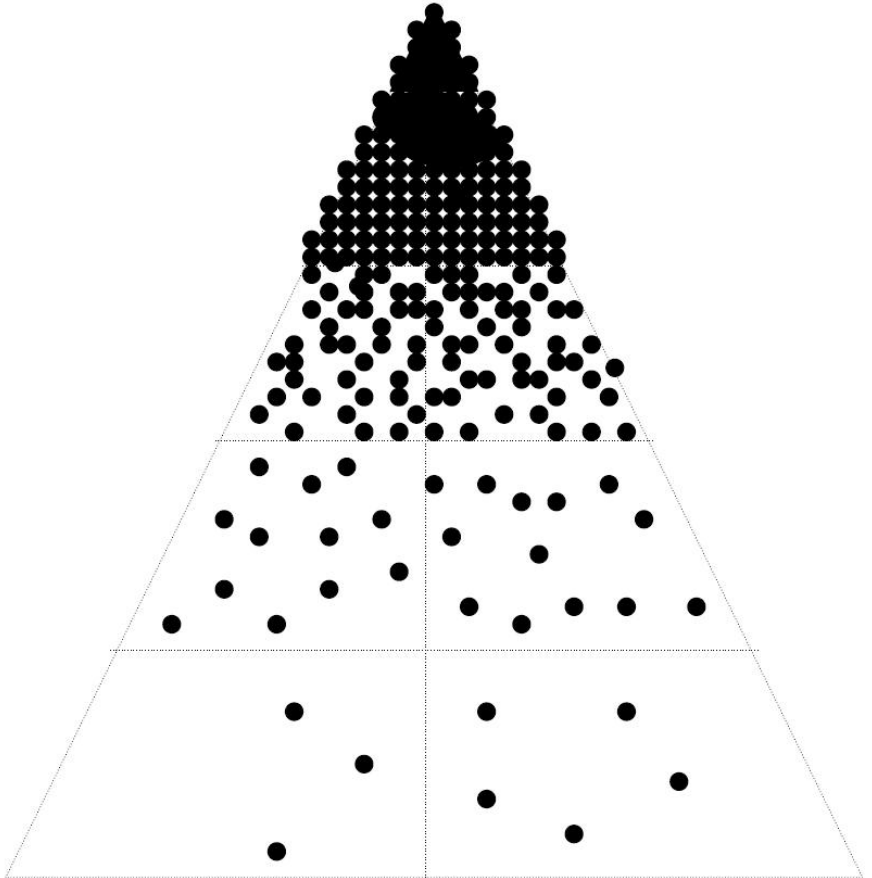
第二に、個々の層で、それぞれの部門がより小さく区画化されて、異なる分野間の意志の疎通がほとんど不可能になる。個々の分野が独立して排他的になっている。哲学と神学は理論層で、社会学、人類学、経済学、政治学、文学、芸術その他は工学層にある。これらの分野はさらに小さな副分野に分かれている。政治学では比較政治や国際政治である。これらの分野間の意思疎通は大変難しくなっている。例えば、経済学者は数量化を進めたため、政治学との共通の言語を失った。その結果、現代の学者は自分たちをその小さな専門分野に閉じ込め、それが全体の中でどのように存在するのかに関する知識が無い。理論数学者の以下の発言がこの点を顕著に表明している。

私の数学研究と数学一般に関する見解を皆さんに聞いていただきたいと思います。大きな銅の球体を想像してください。そして数学者はその銅の球体の中に住んでいます。そしてその銅の球体は数学的理解の境界を示しています。そして一人一人の数学者は金槌を持っています。私たちがしていることはこの銅の球体を、銅から鋼を作るように内側から打ち付けているのです。徐々に私たちはくぼみに次ぐくぼみを作り続け、この球体は徐々に大きくなり始めるのです。<sup>32</sup>

これが西洋文明の思想体系の分断化の主な原因である。目的の為の手段であったものがいつのまにか目的自体になってしまっている。そしてその新しい目的の為の手段がまた目的自体になってしまう。この現象の連続が学者たちを孤立した球体に閉じ込めることになってしまった。その結果、体制全体が崩壊してきている。表面部分はかなり混雑して来ていて、激しい競争状態となっている反面、底部は絶望的に人不足となっている。この現在の傾向は図6-1で示されている。

<sup>32</sup> Edward B. Burger, *Zero to Infinity: A History of Numbers* (Lecture Tape), Chantilly, Va.: The Teaching Company, 2007, Lecture 1.

図6-1  
形而上工学の分断化



民主主義の終焉には二つの可能性がある。ひとつは内部からの崩壊である。この場合、自分の財産を当然自分の物として保持できると考えている『持てる者』とより豊かな者から与えられることを当然だと考えている『持たざる者』との間の紛争が激化し、最終的には協調のための社会構造が引き裂かれてしまう。この段階で社会はさらにホッ

ブスのいう『万人の万人に対する闘争』状態に近づく。そこでは人々は政府からの保護を必要とするというよりは、同じ市民からの保護を必要とするようになる。例えば、極最近80歳のプロ・バスケットチームのオーナーが40歳以上年下の妻と電話で妻が黒人の元バスケットボール選手と撮った写真について口論した。その口論の最中に彼は黒人には自分の試合に来て欲しくないと言った。その理由が何なのか？それは彼が人種差別主義者だからかもしれないし、あるいは彼はただ嫉妬していただけかもしれない。この会話が彼の知らないところで録音されテレビのゴシップ番組で放送された。すると社会全体がひっくり返ったように批判をはじめ、翌日彼は連盟から何百万ドルという罰金命令を受け、生涯立ち入りを禁止されてしまった。政府はこのような処罰を行なうことは絶対できない。仕事でいやなことがあって、帰ってきて友達に電話して上司を殺してやりたいといったら翌日警察に逮捕されたなどということは考えられない。この件でも、彼に度重なる人種差別的行動があったかどうかさらに調査してみることは妥当だったと思うが、彼は市民によって公正な裁判なしに処罰された。このヒステリー現象は魔女狩りのように見えた。しかし、後にオーナーは公式インタビューで、私的なことには無責任に関与しないように大衆に訴えかける代わりに、妻のボーイフレンドを批判し、自分で私事を公開することになり、公式の場が私的論争に乗っ取られてしまった。衆愚政治の行く末を見るような事件であった。

近年私は衆愚政治の潜在的浸透の可能性を目撃する機会があった。国家レベルで高卒資格のレベルを上げようという動きが出てきている。この規準では州立大学で機能できる程度の能力がなければ卒業資格が取れないことになっている。しかし高卒者の何割が州立大学に進むか考えて見たとき、この規準を満たすことのできない生徒がいることが明らかである。この規準を満たすことのできない者は、全く社会から疎外されてしまうことになる、というのも職業訓練を受ける為にはしばしば高卒資格が要求されているからである。職業訓練を受ける為にはそのような高い規準を満たす必要はないのであるが、それでも高卒資格なしではこれらの訓練校に入れなくなるのである。そうなると彼らは最低賃金の職から脱出できなくなり、貧富の差はますます広まることになる。これは平等の民主精神の誤用である。人は皆同じ権利を有するが、能力において同じではないのである。ここに私は「どうして私たちと同じことができないんだ？」とする多数の傲慢、いや暴君さえ見て取れると思う。不幸なことに、これは少数ではあるがそれで

もかなりの社会の部分を占める疎外された社会集団による多大な反体制エネルギーを創出することとなるだろう。

持てる者と持たざる者が妥協する可能性もあるが、その場合、皆が王様のような生活をして社会を破産に追い込むことになるだろう。問題が深刻になるにつれて、有能な指導者の欠如と犠牲を払いたがらない市民のせいで、社会は崩壊することになるだろう。民主社会が統制不可能になった時、市民は解決してくれる指導者を探すが、そのときには解決法はすでに彼らには背負いきれない犠牲を要求することになる。

邪悪な権力追求者はこの機会を利用して権力を掌握しようとして、絶望的な市民を利用することになるだろう。ここに二つの例がある。一つは、本書が『偽偶像』と名づけた輩であるが、彼らは自分を救世主と名乗る。もう一つは悪どろしがお互いの悪を暴きあい、人々に悪の破壊を訴えるケースである。この場合人々は悪どろしの権力闘争の代理戦争を行なうことになる。現在スーパー・チャーチと呼ばれているものの中に第一の例がみられる。人々の感情的弱さに漬け込んで、これらの伝道者は現実性のない解決法を提示し、「心配しなくても大丈夫。何もしなくても全てはちゃんと収まるから。」と彼らの聞きたいことを言うのである。その際キリスト教の教義は捻じ曲げられる。例えば原罪の概念であるが、私はこれは人々にあまり独善的にならず、自分の善性についてある程度の疑念を持つようにとの警告であると見ているが、前に一度伝道者がテレビのインタビューでキリストがすでに我々の為に原罪を受けたので、もう何も心配しなくてよいのだと言っているのを聞いたことがある。2005年のハリケーン・カトリーナの時には、またある伝道者が神が同性愛者を罰しているのだと言っているのを聞いたことがある。しかし、汎理想主義による解釈では、この場合では、キリストの深い悲しみに覆われた顔を見ることになるはずである。ニューオリンズが海面下にあり、堤防が必要なことは誰でも知っていた。しかしそれは政治家にとっては不人気の税導入を提案することを意味し、官僚にとっては残業を意味し、人々にとっては資金調達のため大型テレビをあきらめなければならないことを意味する。私には、キリストが「もし自分の中でこのような不快なことをする勇氣を見つけられれば、この大災害は避けられたのに。私はそれを自分の命であなた方に示したでしょう。」と言っているような気がしてならない。キリストが担った犠牲と比べれば我々が担うべき犠牲は微々たるものである。しかし多くの市民はこの種のデマに振り回される。というのは試練に対してそれに対処するのが自分の義務であると認め

るよりは、他の人間を責める方がずっと簡単だからである。歴史上、ナチス政権にみられるように、悪にとって人々をこのように説得することは大変簡単なことであった。今のところこれらの伝道者は金儲けが主な目的であるが、機会が与えられれば政治的野心を抱くこともありえる。

これらの権力追及者の中に聖書を使用するものがある。しかし、聖書のように2000年も前に書かれた莫大な書物は、全体像を理解せずに一部だけを取り出せば、たいていの立場を擁護することができる。例えば、神の命令によって、安息日に働いたために民衆から石をぶつけられて死んでしまったかわいそうな人物が聖書に出てくる(NUMBERS 15:32)。もし聖書の一字一句に従うのなら、これは週末に働く人は殺されることになってしまう。このような事態を避けるためには、全体からまずその精神を理解し、それから個々の部分はその全体の精神の中で解釈されなければならない。ここでまた、神学者と牧師は聖書のある部分が『偽偶像』によって一般精神に反してどのようにデマによって悪用されているかを示し、市民を守る義務がある。そのためには一般市民に聖書の一般精神を理解させ、ある立場を正当化するために使われている場合それを詳しく検証する必要がある。特にそれが同性愛者など社会の一部の集団に対して使用されている場合はそれが重要となる。

その他に世俗の分野では白人至上主義運動の指導者など社会不満を利用する者もいる。社会から疎外された青少年は現体制の破壊活動に勧誘されていく。インターネットの時代ではこのような不満層を勧誘するのは簡単なことである。そうすれば、自分の手を汚すことなく追従者に汚い仕事を押し付けることができる。もし成功して現体制が破壊されればその真空状態を利用して権力の座に就くことができる。衆愚政治が進み、人々がより絶望的な状態に置かれるにつれ、これらの先導者の議論はより説得力を帯びてくる。彼らがするべき唯一のことは自分の下心を隠すことだけである。

このような『偽偶像』に対抗しようという人物も世俗界でも宗教界でもいるであろうが、そのような声は抑圧されるであろう。衆愚政治の末期では、神学者は汎理想主義者というよりは、純朴理想主義者であるため、以下に見られるように象牙の塔にこもって科学者からの攻撃に対して自分の立場を守ることのほうに関心があるようである。

天地創造は現在の論争の焦点となっているが、その理由のひとつは科学者が宇宙の起源について宇宙爆発起源論などといった

新しい理論を発表したからである．．．しかしながら、今日の天地創造に関する大部分の論争は宇宙が構成されている物質がまずどのようにして作られたかに対する説明がなされていない。したがって、科学者などはしばしば適切な意味で天地創造について論議するのではなく、世界の発端について論議している。すなわち、その初期の状態からどのようにして今我々が知覚しているものと成ったのかということであって、どのようにして物質が存在するに至ったかについてではない。<sup>33</sup>

形而上工学者にあたる神学者からの支持を得られず、製造・整備担当にあたる牧師は巷で孤立して『偽偶像』と戦わされている。良心的な牧師は困難を抱える人々に神様に対して問題を解決してくれるよう願をかけるのではなく、問題に真っ向から直面する強さを持てるように祈るよう説得しようとするが、多くの人はそのような牧師を見捨て、そんなに努力しなくても神様が面倒見てくれるよと聞きたいことを言うてくれるスーパー・チャーチに移る。したがってこれらの教会の信者の数は減少し、スーパー・チャーチなどが大盛況となるのである。そうなると牧師は教会維持のため真の精神を捨てるか、生活できなくなってしまうかのどちらかを選ばなければならなくなる。

政界では、問題に直面して、犠牲を伴うが真に問題を解決しようとする提案する人物は、自分に任せておけば何もしなくても解決してあげるという人物に対して選挙で当選することができなくなる。市民の安全が究極的に依存している体制の長期の安定の為に『正しいこと』をしようと訴える人物に対して市民は憤慨するようになる。これが古代ギリシャでソクラテスを殺した勢力である。経済回復の為に消費を奨励するといったような簡単な問題解決法は長期の問題を深刻化させるに過ぎない。そうなると社会は悪循環に入る。社会悪がより顕著となり、それに対する解決策がより大きな犠牲を必要とするものとなる。そこで市民は真の解決法を提案するものに敵愾心を抱くようになり、最終的にはこの民主政治も第二のソクラテスの死によって終焉をつけることであろう。ここで形成されるのが悪者と弱者の同盟である。しかし一旦権力の座に着くと、残っていた全ての市民権擁護の制度は廃止されるだろう。そこで現実主義のダイナミクスが始動する。他の挑戦者があるので権力集中は難しい。もしある支配者があまりに強力になる

<sup>33</sup> Francis Selman, *Aquinas 101: A Basic, Introduction to the Thought of Saint Thomas Aquinas*, Notre Dame, Ind.: Ave Maria Press, 2007, p. 31.

と、他の対抗者が一丸となって引きずり下ろす。したがって多くの場合、専制政治はピコーの周期の野蛮時代の始まりである。

民主政治終焉のもうひとつの可能性は外部からの破壊である。本書の重要な課題のひとつは三重危機の連動である。上記に示したように、衆愚政治を宗教的言語で表現することは大変簡単なことである。またそれは簡単に扇動的にも表現できる。これは衆愚政治化がイスラム圏の世俗化と連動する可能性があることを意味する。内部で闘争するよりも、イスラム支配者は西洋文明を共通の敵として武力闘争を移出することを選ぶかもしれない。上記において民主主義の問題点をキリスト教の言語を用いて提示してみたが、邪悪な権力追求者にとってこのように宗教的概念を用いて西洋民主国家に対抗する議論を提示することは簡単なことであろう。産業先進民主国家は世界人口の約20%を占めるが、全エネルギー量の75%を消費しているとのことである。<sup>34</sup>近年米国で『99%』運動というものが起こり、99%の市民が所得上位1%の市民に対して富の分配が不平等であるとの抗議をおこなったが、発展途上国の国民が先進産業民主国家に対して同じような感情を抱いていたとしても不思議ではない。さらに、民主主義は国際社会では自国の国民を守るために、経済危機に際して国境を閉鎖したり、社会悪を移出したりと、利己的に行動する。そこでもまた、途上国の国民が人権擁護を宣言しながら専制君主のように振舞う民主国家を偽善者と見ても不思議は無いだろう。したがってイスラム圏の多くの市民が心から神に従い悪を制覇しているのだと信じながら、このような破壊行為に参加することも十分考えられる。国内の場合と同様に、これらの『偽偶像』がしなければならぬことは悪者が他の悪者を暴いているだけであるという自分の本当の動機を隠すだけである。この勢力はイスラム圏などいまだに宗教的影響の強い地域では特に強力となりうる。すでに自殺テロ行為など部分的に成功をおさめている。

ここで歴史的に言って、悪者は人々を悪の破壊に勧誘することによりかなりの成功を収めてきた。これは善者が善の建設に人々を勧誘することによりあまり成功していないのと対称的である。これが成功するのは破壊の為には形而上的意識に長期間滞在する必要がないからかもしれない。破壊は一瞬にしてできることである。それに反して、真に良い社会を築くために必要な善の建設の為には人はずっと長期にわたってその意識の層に留まる必要がある。善の建設に取り組むということは、

<sup>34</sup> “The Impact of Energy Use in Industrialised Countries upon Global Population Health,” by Anthony J. McMichael, MBBS, PhD, Alistair J. Woodward, MBBS, MPH, PhD, and Ruud E. van Leeuwen, MSc, in <http://www.ipnw.org/pdf/mgs/1-1-mcmichael.pdf>

スポンジが水を吸い込むように、自己に対してなされる不正が社会の他の部分に転嫁しない様それを吸収し続けながら、事実上一生を善の建設の義務に捧げなければならないことになる。これを達成するためには常に意識の形而上端で耐え忍ばなければならない。キリスト教の教義である許したまえと右の頬を打たれたら左の頬を出せというのはこのことだと私は思う。しかしこれは怒りや欲求不満などの一時の熱情に駆られて行動するよりはずっと難しいことである。

現在の国際体制を見てみると、中国はなかなか優秀な学び手である。完全に民主化を達成する前にすでに西洋の衆愚政治化に合同しているようにも見える。その反面専制体制への反動化の兆候も示しているが、この動向を見定めるためには台頭しつつある経済社会集団の勢力分布を知る必要があるだろう。ロシアも民主化の打ち上げに失敗したようで、ピコーの周期の野蛮時代に退化しているようにも見える。もしこれらの観測がただしければ、中国とロシアが同盟を組んで西洋に対抗すると言う最悪のケースは避けられたのかもしれない。しかし民主主義を盲目的に信仰するのではなく、一種の疑いの目を持って再検討し、集団で現実逃避に陥ることなくその弱点を初期に感知して修正することによって現在の民主国家は崩壊の道のを免れることができるかもしれない。

では、民主国家はどのようにして崩壊を免れることができるだろうか？ここで再び抽象的な形而上理論に戻ると、前述のように維持できる政治体制は、適切なエントロピー分配によって達成することができる。人民の中には知能的・感情的な強度には差があり、貢献できる負のエントロピーの量と自己内に堆積できるエントロピーの量も個々に異なってくる。維持できる政治体制を構築するためには個々の能力を超えない量を確保することが不可欠である。これを怠れば結果は重大となりうる。一般的に現実主義者の領域が主なエントロピー創出者であり、エントロピーを体制内に放出するか体制から負のエントロピーを奪取する。汎理想主義者の領域は主なエントロピー吸収者となるべきである。個々の純朴理想主義者は少量の負のエントロピーを提供するか少量のエントロピーを体制から吸収できる。しかしもし能力以上の量を提供するか吸収するように強制されると、自己保身に焦点をあて、エントロピー創出者となり、現実主義の領域に移動する。彼らは数的には大多数であるので、ここから創出されるエントロピーと負のエントロピーの量は合計ではかなりの量となる。

形而上工学のレベルでは航空力学の概念を使って、より具体的な政治体制を知覚することができる。ここでは社会を航空機と認識してみ

よう。まず汎理想主義の領域が翼となり、揚力を提供し、現実主義者の領域は抗力を生成する。これは汎理想主義者の領域によって吸収されなければならない。ここで吸収できる抗力の量には限りがあるので、全体の抗力を減少させる必要がある。現実主義者の解決法は抗力をより小さく分散させることしかできない。これは適切な動機の構造により純朴理想主義者の領域で成されなければならない。それから純朴理想主義者は能力に応じて種々の責務を与えられる。飛行機を設計する際、エンジニアは各部にかかる全ての荷重を計算しそれに耐える強度を持った材質を選択する。強度に加えて、重量や熱耐性などの要素も関わってくる。エンジニアはこれら全てを考慮に入れた上で各部に最良の材質を選択する。アルミ材は機体には使用できない。やわらかくて曲がってしまうからだ。しかし軽量で柔軟であるため外板には適している。人々もその強さや柔軟性という点で異なっている。したがって、維持できる体制の創設の為に適材適所が必要となる。社会主義国家がこの体制を採用したことがある。ソ連では各部門で才能のある人が選ばれ国家によって特別訓練を受けた。スポーツなど限られた部門でこれは成功を収めたが、国家指導者はこれを国家レベルで自分たちに当てはめなかったため、体制は最終的には崩壊した。

この観点から民主主義の欠陥を修正するには、第一にプラトンの過度の自由の問題に対処する必要がある。この目的の為に健全な汎理想主義の領域を維持することが不可欠である。その為に二つのことが必要である。一つはピラミッドの現実主義者と汎理想主義者の境界を補強することである。ヒンドゥー教はカースト制を導入することによってこれを図ったが、それはあまりにも硬直した制度であった。したがって境界は強固であるが融通性もなければならない。形而上工学の分野を創立して職業上の学位を必要とすることが状況を改善するかもしれない。政治家になる為には、候補者は、形而上製造・整備と操作部門を習得したことを証明する形而上工学の学士号を持たなければならない。官僚は形而上工学の工学部門を習得したことを証明する修士号を持つことが要求される。そして学会では形而上工学の博士号を持つ学者が官僚と協力して統制のとれた政治体制を確立する。もうひとつは有能な人材の形成であるが、これについては第七章で検討することとする。

一旦汎理想主義の領域が確保されれば、純朴理想主義と現実主義の境界も確保されなければならない。純朴理想主義者は恐怖と欲望によって現実主義の領域に誘導される。したがって、政治的指導者はこれらのメカニズムを抑制する動機の構成を達成することが不可欠である。

指導者は純朴理想主義者がどこまで負担を背負えるか把握して、それ以上の負担を与えないようにしなければならない。この限度の範囲内で、純朴理想主義者は抱えられる最大限の負担を抱えるように奨励されるべきである。またその貢献自体を価値のあることと考え、その他の報酬を求めないことが望ましい。そうすれば、体制に向けられる負のエントロピーの量が増えるからである。しかし上記のジャーナリストのゲーリー・ウェブの件に見られるように一旦良心的な行いが罰せられるようになると、大量の現実主義への移動が見られるだろう。というのも人々は自分の面倒は自分で見ないと誰も面倒を見てくれないと判断するからである。次に欲望を抑えるためには権利意識が抑えられなければならない。また違反者が処罰されることも重要である。もし違反者に何のお咎めも無ければ、自分だけ正しく行動することがばかばかしくなり、彼らは違反者に合流する。

第二に純朴理想主義者と汎理想主義者の間で健全な協調関係を設立することが不可欠である。その為にはソクラテスが経験した問題に対処する必要がある。個人的には純朴理想主義者が自分の無知を認知できないことについて三点観測した。第一は選択的認知である。一連の概念が提示された時、純朴理想主義者は自分にとって見覚えのある部分だけを認識し、その他の概念を全く無視する。したがって、彼らの心の中では、常に全体を理解していると認識するのである。第二はフラクタルに関係する。前に述べたように、大きいフラクタルを理解していると、小さいフラクタルの形状を理解できるが、逆は真とは言えない。ある概念が提示された時、純朴理想主義者は小規模なフラクタルを用いて理解し、それによって全体を理解したと思うのである。図5-1で示されているマクロとミクロの理想主義のピラミッド図が良い例である。マクロのピラミッドが説明された時、彼らはこれらの小さなピラミッドを理解し、それによってマクロピラミッドの全容を理解したと思い、誤った一般論化を始めるのである。それはあたかも地球はサッカーボールのように球形であると言われた時、「知ってるよ。地球はまた白黒の五角形と六角形が交互に配置されて、中には空気が入っていて．．．。」と言うようなことになる。

この現象は素人に限られていない。この社会でプロと見られている人も多くこの罫にはまっている。学会のエリートが自分の周りの競争の激しい社会の状態を基に一般化を行なっているのをよく見る。大部分の学会のエリートは生まれた時から汎理想主義者のピラミッドの現実主義の層で生きてきた者である。自分の個人の経験に基づいて、彼らはその世界観を形成する。その結果、現在彼らは自己犠牲と協調の

概念を説明するのに大変苦勞して、補助的定理をいくつか形成するにとどまっている。より大きな枠組みを見るときに彼らは目の前の環境に影響されているのである。であるから、彼らが一般理論として提示するのは自分の目の前の環境を格式ばった専門用語を使って表現しているに過ぎないのである。例えば、冷戦時代には、二極性の国際体制が最も安定しているという理論を提示し、それについて学者たちは議論していた。その前に、多くの国が同盟を組んでは組み替えていた時代には、多極性の国際体制が最も安定しているという理論を提示し、それについて議論していた。しかしながら、これらの理論の適用性は小さなフラクタルである彼らの住む世界に限定されている。

第三に、又聞き知識と呼ばれるべきものがある。例えば、かつて私は買ったCDの解説で「モーツァルトは天才である、というのは次に来るべき音が何であるかについて全ての可能性を知っていてその中で最高の可能性を常に選択できるからである」というのを読んだことがある。これによって私はもう既に知っているような気になって、その知識を人々の前でひけらかすことができる。しかしながら、これは意味の無い知識である、というのはそれで実際作曲をすることはできないからである。人は時にこの種の知識を真の知識と取り違え、自分を知識が豊富な人物であると思ひ込む。しかしこの種の知識の所有者は実際には無知なのである。そしてこの種の知識を持つ純朴理想主義者の中には自分はこんなに知識を持っているのだから汎理想主義者であると思う者が出てくる。そこで純朴理想主義者の領域に留まるように言われると憤慨して理想主義を捨てるのである。民主制度内の強い権利意識がこの問題をさらに悪化させている。

中にはこれらの問題を理性的には理解できる人もいるが、感情的障壁があまりにも大きくて克服できない。二つの要素がここで関連してくる。ひとつは自分が特別で、知性的で知識が豊富であると思いたいという欲望である。であるから誰かに自分が無知であることを示されると憤慨するのである。もうひとつは恐れである。もし自分の無知を認めれば、それを克服する為に努力しなければならないが、そう思うだけで圧倒されてしまうのである。もし私が博士号を持つ学者全てが一旦その学位を返還して、さらに十年の訓練を積まなければいけないと言ったとすると、誰一人実際そうしようという人は出てこないと仮定して無理は無いと思う。現状では、その間生活を支える術もないので特に難しい。ソクラテスを殺した敵愾心がここにある。人はそのような提案を最初は無視するが、あまりにうるさくなると、追放したり殺害したりして沈黙させるのである。

私は純朴理想主義者と汎理想主義者の団結は『神』の存在の下でのみ可能だと思っている。万能の『神』の下では、全ての人間が無知なのであり、全てを知らないことを恥と思う必要は無いのである。図5-5を見てみると、最も知識の深い人間でさえ、このはしごの全てとそれを超えた現象に関する完全な知識を持つ『神』に比べるほとんど何も知らないことが分かる。人間の無知は当然のことであり、このような万能の存在を前にして自分が知識が豊富であると思うことは全くの傲慢である。また、『神』に仕えたいという願望が、全民をして、自分の知識をひけらかす為ではなく、真に追及するに価値のある知識に焦点を当てることになり、感情的障壁をも克服する強さを得ることができるのである。もし価値ある知識を得るのに十年かかるのであれば、『神』のお導きのもとたゆまなく努力することができる。しかし『神』の不在の状況では、二種の理想主義者は仇敵となる。

欧州連合はこの点で興味深い実験である。上記の民主国家の欠点を補うべく上部政治機関が形成されようとしている。その成功は支配層の質と連合が個々の民主国家にどの程度の支配権を執行できるかにかかっているだろう。ヨーロッパが民主主義の恩恵である個人の権利の擁護とその欠陥である過度の自由を賢人の指導によって調整できる政治機構を結成することに成功すれば、世界に希望をもたらすことになる。そうすれば、米国や日本などの国と共同関係あるいは連邦を形成するなどする努力をすることになるだろう。もしこれに成功すれば、世界は残り二つの問題に対処するのに十分な体制を取れるだろう。しかしヨーロッパにとってこれは厳しい試練である。啓蒙運動後、キリスト教はすでに民主国家で異常な権利意識を持つようになったその信者を純粋な理想主義の世界に戻るよう説得することは難しい。ヨーロッパはキリスト教を再解釈し再復興させるか、ある種の理想主義の教義を創設する必要がある。これは21世紀の物理学と矛盾しないものであれば、より容易に受け入れられるだろう。歴史的には、これは長期にわたる野蛮時代を経たあとで、人々が残虐な現実主義から抜け出す為には多大な犠牲を払ってもいいと思った時にしか成功していない。どんなに可能性が低くても、唯一の可能性は人々がピコーの周期を知って、意識的に努力することだろう。もし連合が腐敗し指導者が腐敗すれば、ソ連にも似たより大規模な独裁国家の形成を見ることにもなるだろう。またもし指導者が選挙によって選ばれることになれば、今の民主国家と同じ欠陥を持ったより大規模な民主国家が形成されることにもなるだろう。

### 形而上操作の分野検証

最後に、政治家は個々の政治事案についてそれぞれの政策決定を行なわなければならない。本書はこの義務に関して包括的なガイドラインを提供することは目的としていない。したがって、現在の政治家にとってある程度の参考となるかもしれない一般的ガイドラインを以下に提示することとする。

**民主化:** 民主主義を強制することは不可能である。政治哲学によって正当とされる政治体制と権力の分配状況によって表現される政治的現実には手に手をとって発展する。政治体制は新たな体制の発展を補強し、その正当性を弁護することによって旧体制の崩壊を遅らせる。しかしながら、政治体制は政治現実によって可能な域を超えては設立できないのである。

西洋文明のピコーの周期では、まず教皇と国王の間で権力闘争が繰り広げられたが、ここでは権力は徐々に教皇から国王に移った。それから国王と平民の間で権力闘争が起こり、権力は徐々に平民に移った。政治体制に関する論議はこのパターンに密に沿っている。

古代末期(250～750年)には、教会と国家は教会の優勢の下協力的関係にあった。ここでは「教皇ゲラシウス一世は僧侶と帝政の司法権について別々だが互惠的機能を提示した。」<sup>35</sup> 同時に教皇は「宗教的優越と(ゲルマン国王制に対する)ローマの優位を宣言した」<sup>36</sup>

中世(11～14世紀)には、この協調関係は権力闘争に取って代わられる。

グレゴリー七世は聖ピエトロの教皇の座に就いたが、教会の下位の職(僧侶と俗人の両方)の教皇の権限に対する服従は宗教的だけでなく、不可避的に政治的で法的であり、キリストの司法と法律によって要求されていると信じていた。教皇の信念はフランスドイツ国王からの猛烈な反対によってさらに強化された。またドイツの司教による教会法に基づく司祭の選挙と都会の住人による任官の為の教皇の法律に対する猛烈な反対によってもさらに強化された。その抵抗の中でグレゴリーは自分の思

<sup>35</sup> Oliver O'Donovan and Joan Lockwood O'Donovan, ed. *From Irenaeus to Grotius: A Sourcebook in Christian Political Thought, 100-1625*, William B. Eerdmans Publishing Company: Grand Rapids, Michigan/Cambridge, U.K., p. 170.

<sup>36</sup> 同。

い上がった意思を神の明白な意思より上に置く世俗の支配者の悪魔的誇りを見て取った。<sup>37</sup>

教会はそれから教会の優勢を正当化する為教皇の完全性理論を形成する。

フランス教会に対する国王の領地と特権の侵食、また教会の司法権の侵食に直面して、そして教会行政組織の道徳、司法、政治的自給の為の新たな議論に直面して、．．．教皇の広報は物と人に関する教皇の司法権を注意深く定義し、教皇の完全性と、キリストのこの世での完全性から来る排他的起源の普遍性を示そうとした。<sup>38</sup>

14世紀から16世紀にかけて、国家がより大きな影響力を持つようになる。

ボニフェス8世がフランス国王フィリップ4世によって被った恥辱は14世紀の開始を告げたが、この実際の影響より大きな象徴的重要性があった。両方のローマ教皇庁の財源の国王による削減とフランス教会の管理と司法上の独立より痛手があったのは、教皇制支持者による教会論の敗北だった。これは教会を階層性組織とし、その精神的、社会的統合と、権威と権利が最終的に教皇を頂点に存在するように構成されていた。これに対してフランス政府とそのより急進的な広報は国家教会の概念を提案した。そこでは社会的統合と権威と権利が最終的に国王とその領内に存在していた。<sup>39</sup>

三十年戦争は教会に対する国家の覇権を確立した。それから政治論争は国家と人民の間の権力闘争に焦点が移る。これは21世紀の現代の世代にとってはより知られているものである。当初は国王が圧倒的権力を握っていたが、これは国王の政治責任を免除する神権によって正当化された。国王は神の意思によって支配する権利を与えられているので、人民の意志に対しては責任が無い。それから18世紀に入って、ジョン・ロック、ルソー、モンテスキューらがこの国王の権利に挑

<sup>37</sup> 同、232頁。

<sup>38</sup> 同、235頁。

<sup>39</sup> 同、389頁。

戦する。モンテスキューは権力の分散を提案し、ルソーは『社会契約論』によって主権は人民に存すると主張する。ロックは人民には抵抗権・革命権があるので君主制は合法的に人民によって廃止することができるかと主張した。

このように、民主化は国内政治過程であって、他国は好ましい国際環境を提供することによって間接的に影響を及ぼすことしかできない。七歳の子供にスーツを着せてもビジネスマンにはなれないように、準備のできていない国に民主制を押し付けることはできないのである。14世紀のヨーロッパ諸国に外部から民主制を押し付けようとしても失敗したことだろう。強制されればその結果は悲惨となりうる。結果はワイマール共和国のように悪質な独裁制に陥ることになるかもしれない。あるいは、1990年代の東ヨーロッパで見られたように内乱状態に陥るかもしれない。

ヘンリー・キッシンジャーは中東の状況を以下のように観察している。

しかし安全保障の必要の概念と民主主義推進の概念はしばしば衝突してきた。民主化を促進する者は自己の支配を達成する手段として以外に民主化の重要性を認識できる指導者を見つけるのに苦渋した。同時に安全保障上の必要性を重視する者は、確立された政権がどのように民主化、あるいは民主改革さえ行なうことができるのか提案することができなかった。民主化のアプローチはその目的追求の為に現存する真空状態を修正することはできなかった。戦略的アプローチは現存の体制の融通性の無さによって阻まれた。<sup>40</sup>

例えばシリアでは2010年代に専制君主のアル・アサドに対する反乱があったが、これが内乱に発展した。

主要なシリア人と地域での戦略家はこの戦争を民主主義とみなしたのではなく、権力闘争での勝ち残りを見た。彼らは民主主義が自分の派閥が支配権を握れる場合に限ってしか興味を示さなかった。政治体制に於いて自己の政党が支配権を握ることが保証されていない体制を支持する者は無かった。．．． 闘争は、彼らが知覚するところによると、専制君主と民主派の間で起こっていたのではなく、シリアの競合する派閥間とその地域での支持者の間のものであった。この戦争は、この見解によると、

<sup>40</sup> Kissinger, p. 123

シリアの主要派閥のうちどれが他の派閥を支配し、シリア国家の残留を支配するか決定するものであった。．．． 闘争が膠着状態に陥ると、徐々に過激派や過激戦術に頼るようになり、その残虐さがまし、人権に留意する者はいなくなった。<sup>41</sup>

ここで、上記で述べたように、トルコは即座に政教分離を果たし、民主化の道を歩み始めた。インドネシアも順調に民主化の道を歩んでいるようである。これらの国には他の国にはまだ無い民主主義を受け入れる下層構造をすでに持っていたに違いない。これらの要素を特定することができれば、問題となっている国に民主制度の導入が適切かどうかの判断をする際有用な指標となるだろう。国家体制の完全崩壊という結果をもたらしたイラク侵略の例に見られるように、無秩序は時には悪政よりも悪いことがある。であるから、悪体制を破壊する決断を下す前には十分な考慮が必要である。独裁制は簡単には民主主義に置き換えられないかもしれない。

**物質力と精神力：**西洋は圧倒的に優位な物質力を所有しているが、イスラムなどの文明は精神力に秀でている。それらの国の人民はより強い決意を持って、彼らの信じることの為により多くの犠牲を払う用意がある。もしある国が強力な陸軍を持っているが、海軍は弱小な場合、海戦、特に海軍大国との海戦は避けるべきである。陸戦が望むところであろう。同じことがここでも言える。物質的闘争に留まるべきである。この点では最初の湾岸戦争は道理がかなっていたといえる。米国はサウジアラビアの物質的利権を守るためにサウジアラビアの要請に従って参戦した。しかしそれでも、アルカイダのような過激派を刺激することとなった。これがいかにこの問題が複雑であることを示している。第二のイラク戦争は無謀であった。もし原則を用いるならイスラムは民主主義の原則よりずっと筋が通っている。とどのつまり、米国はその正当性が依存している民主的自治権の原則に違反したことになる。中近東は物質的利害では分裂している。産油国は裕福であるが、貧困国もあり、これらの国家間に緊張関係が存在する。しかし、これら諸国はイスラムの理想のもとに団結することもできる。もし西洋が誤った政策をとれば、富裕国であろうと貧困国であろうと西洋に対抗して団結することにもなりかねない。それが西洋にとっては最悪の事態となる。

<sup>41</sup> 同、126頁。

この点で直接干渉は勧められない、というのはイスラムの世俗化と西洋の衆愚政治化を直接結びつけることになるからである。また西洋の民主国家は国内での贅沢三昧な行動をつつしみ、彼らの共通の敵として絶好の標的となるようなことを避けなければならないだろう。その間、彼らには社会にまだ十分な宗教的要素が残っているので、ピコーの周期を回避し今いるところから汎理想主義社会の建設に進む方法を発見するよう奨励することも価値があるだろう。

**核兵器:** 米国のオバマ大統領は核の無い世界を作ろうとのキャンペーンを打ち上げた。以下に挙げたのはその支持者である元国務長官ウィリアム・ペリーの発言である。

私の同僚であるナン上院議員は核兵器排除—完全排除—の目的というのは、彼は高い山の頂上にあるようなものだと考えている。我々は今山のずっと下方にいて、頂上に登ろうとしているのである。頂上は雲に覆われていて。どうやったら頂上に辿り着けるのか分からない。どうやったら頂上に辿り着けるのか分からないのである。それでも下がるよりは上った方が良いことは知っている。その山を登るにつれて、我々を徐々に安全にしているのだ。彼はまた中間的目的である登山用語で言うところのベースキャンプと呼ばれる所に到達することについても表現している。そこでは我々は今いる所よりは安全であるが、また十分近いので、頂上を見ることもできる。そうしたら我々はどうやったら頂上に辿り着けるのかまたどの位かかるのかについての判断をすることができる。その判断を今することはできない。<sup>42</sup>

形而上工学はここで核軍縮を行なうに際してより大きな背景の理解ができるという点で役に立てるかもしれない。本書の観点からすると、核兵器の全面排除は我々がピコーの周期を統制できるかどうか大きく依存していることになる。もし成功すれば、どの国も別に核兵器など持ちたがらなくなるだろうが、もし失敗すれば、どんなに努力しても欲しい国は手に入れて使うだろう。もちろんこれは一方通行ではない。核兵器の存在自体がこの周期の方向に影響を与えることも十分考

---

<sup>42</sup> 2009年7月18日エディー・野口氏によるウィリアム・ペリー国務長官とのインタビューより。

えられる。しかし判断はこの周期を完全に理解したうえで為されなければならない。

**経済環境:** 同じ理由で、安定した経済環境を保つことは重要である。この点では我々は全く成功していない。特に民主主義は自国民保護のため経済諸悪を国際体制に移出する傾向がある。この点を改良することは経済学者にとっての重責である。歴史的には英国が世界経済の不況の際自国の市場を開放して経済の崩壊を防いだ。21世紀にはヨーロッパは連合を形成しつつあるが、その中の一国がヨーロッパ市場の健全さを守るためにこの役割を果たすようになるかもしれない。しかし圏外に対しては市場を閉鎖することは十分考えられる。中国も所得分配の均一化に成功すれば、巨大な国内市場に頼ることができるかもしれない。北米は独自の経済圏を形成しつつあるが、所得の差と政情不安のためラテンアメリカを包括するのに苦渋している。これらは自給自足の三つの経済圏を国際社会に形成することになるのだろうか？ そうなるとより安定した国際経済環境を築くのに役立つだろうか？ それとも三経済圏の間で紛争が起ることになるのだろうか？

### 結論—一次期周期

第五章と第六章では、形而上工学の四層の検証を行なったが、これによると我々には大変困難な作業が待ち受けている。そして三重危機の一つ一つについて時計はすでに進んでいるのである。どこから手を着けたらよいのかなかかなか検討もつかないというのが実情であろう。もしピコーの周期がこの段階で終止符を打てれば最高であることは当然であるが、もうすでに手遅れかもしれない。最も秀でたエンジニアでもすでになされた被害を修復できないこともある。例えば、翼を失った飛行機を空中で修復することは不可能である。

もし修復不可能であれば、我々の運命は決定してしまっている。どのように工学上の努力を試みても、この文明を救うことはもう不可能であり、ピコーの野蛮時代の到来を待つしかない。したがって、焦点を次の工学上の機会に移さなければならない。ピコーの周期によると、我々は今後数世紀の間に次の周期が始まる時、最も重要な機会を迎えることになる。これは人類にとってこの問題に優位に対処できる大いなる機会でもある。ここでしっかり対処できれば、最初に犯した過ちのせいで、次々と起こる問題に対処しようと苦心する必要も無くなる。これは大変な機会であるが、同時にこの責任を背負う世代にとっては本当に重責となり、とてもではないが一世代で達成できることではな

い。成功する可能性があるとするなら、我々は彼らを援助する為にできる限りのことをしなければならない。

第一に歴史はピコーの周期に関して検証されるべき問題を多く提示している。その中には本書のいろいろな箇所でも触れたものもあるが、ここで再度まとめておこう。これらの問題やその他の関連問題を将来の世代の為に検証しておくことは重要である。

- (1) 宗教と世俗権威の形態に違いがある。キリスト教圏では、宗教と世俗権威が独立した二極として存在したが、中国では二者はひとつの制度の中で支配者と官僚として組み込まれた。またイスラム圏はその中間の形態をとった。これらの違いはピコーの周期で起こる殺戮の度合いに影響するのだろうか？
- (2) イスラムの世俗化の過程にかなりの違いがある。この違いはどこから来ているのだろうか？可能性としては、中央支配の影響力の違い、宗派の違い、物質的富の差などが考えられる。そうすると、これが武力闘争のレベルに影響を与える可能性は？
- (3) 西洋文明では、帝国制度は維持不可能となり国民国家制が誕生したが、中国では一つの帝国が別の帝国に取って代わるといった形式がとられた。これはピコーの周期での殺戮の度合いに影響を与えるのだろうか？もしそうだとすると、どのようにしてどちらかの形式を形成することができるのだろうか？ どうしてローマ帝国は崩壊し、無数の小規模な行政組織に分裂したのに、中国の官僚制はそのまま次の帝国に受け継がれたのか？
- (4) どうして古代の宗教はその目的を果たせなかったのか？全ての宗教は現実主義者の領域で権力追及者によって侵食されてしまい、その威力を失った。例えば、ローマ帝国ではコンスタンチヌス帝がキリスト教を国教としたとき、その凋落が始まった。これは宗教の純粋さと政治的影響力の間にジレンマがあることを示しているようである。すなわち、宗教はその純正を政治的影響力が無い間は維持することができるが、安定した理想主義社会を築く為に必要な社会的に広い影響力を得ることができない。その反面、一旦広い政治的影響力を得ると、その純正を失ってしまい、安定し

- た理想主義社会の基盤となることが不可能となる。次の周期ではこのジレンマに対処することができるだろうか？
- (5) 宗教の中で過ちを犯したものもある。例えば、ヒンドゥー教は人民の能力に応じて責任を分配しようとした。強者にはより重い責任が与えられるはずであり、それゆえ社会的にはより高い地位に就けられることになっていた。それに反して弱者は与えられる責任も低くそれゆえ社会的には低い地位に就くこととなっていた。しかしこれはほとんどない結果を招いた。この教訓としてこの種の配分制度には十分な柔軟性が必要であることが示されている。強者の子息が必ずしも強者であるとは限らないので世襲制は適切ではない。
- (6) 私の経験では知性は中性であり、深層の感情が人を理想主義に専心させるよう説得するものである。知性を理想主義のために働かせる為には、知性が何か理性では理解できないものが指揮していると信じる必要がある。さもなければ個人的危機に直面した際、知性は自己保身の理論から現実主義に従うこととなる。であるから宗教は盲目的の信心を育てる。その為には宗教には理性の理解できないある種の神秘主義が必要である。しかし科学の発展によって、宗教に必要な神秘主義のベールが剥ぎ取られた。ではこの科学の時代にどうやって知性を説得することができるのだろうか？
- (7) 宗教は両刃の剣である。成功した宗教は深層感情を理想主義に専心するよう説得することに成功している。ここで人々が理想主義の根本的教義に専心できれば、人は無限に寛大な心を持つこととなる。しかしここに問題がある。大部分の人にとって、根本的教義は理解するには大きすぎまた抽象的過ぎる。そこで個々の宗教はその信者に分かりやすい原則を具体化する。しかし人は特定の具体例に執着した時、柔軟性を失い他の具体像に対して極めて不寛容となり、表面的な違いを巡って争うようになる。これはまさに宗教が避けようとしている結果である。盲目的の信心の要素と組み合わせり、歴史上この問題は権力を追及する現実主義者による宗教的手技によりさらに悪化し、理想主義の硬直さと現実主義の邪悪の混合という最悪の事態を招いてきた。この問題をどのように避けることができるのか？

- (8) 一神教はしばしば部外者を敵とみなし、たとえ内部で理想主義社会を達成できたとしても、外部に対しては現実主義を採択してきた。これが世界的に異なる宗教間での闘争を生み出してきた。この現象を回避することはできるのだろうか？
- (9) 現代社会は古代宗教が効果的に作用するには規模が大きすぎるようである。古代の灌漑システムが現代にあわせて近代化しなければならなかったように、宗教も現代にあわせて再修正されなければならないが、それはどのようになされるべきか？

これらの工学上の問題には確固とした理論の支えが無ければ有功に対処することができない。それは航空力学なしでは飛行機を設計できないのと同じことである。したがって、我々にはできる限り早急に形而上理論体系を作り上げなければならない。これは大変な作業である。形而上の分野は大変広大であるので、一人の人間が完全な検証を行なうことは不可能である。我々は全て全体の小さな部分を占めるに過ぎない。一つの実験でさえ、何世代もかかる。これが啓蒙主義の後で実験して証明できる現象だけを重視するようになった西洋文明が形而上の分野を破棄した理由であろう。しかしながら、我々は我々の生活にこれほど重要な影響を与える現象を物理学が知覚できるような形で知覚できないからといって諦めるわけにはいかないのである。

これらの個々の研究結果が次の周期の開始に当たる世代が利用できるように一箇所に集められておくことは不可欠であり、まとめて保管できる場所が作られれば最高である。ばらばらになってしまうとすでに困難な将来の世代の作業がさらに困難なものになってしまうからだ。ここで、個人的な目的を持つ研究はこの過程にとって有害である。というのは何度も述べたように自己の栄光の為の道具としての研究は本書の目的を満たすにはあまりに規模が小さすぎて、本書の目的に一致しないからである。ここでは一人一人が、それ自体では重要性が無いように見えるかもしれない微小な役割を果たすことが重要である。したがって、理想的にはこの文書館は次のような基本法を持つことが望ましい。

### 汎理想主義文書館基本法

この文書館は地理的にも時代的にも分散している汎理想主義者の間の協調を容易にする為に設立された。以下の規則に合致する研究はここに提出されるよう奨励する。またこれらの研究は以下の規則に従う限り自由に使用されることが奨励される。

汎理想主義者の研究は全て匿名であり、『神』に捧げられる。汎理想主義の精神は善の建設である。

悪の破壊にその焦点を当てる研究または部分的にでも悪の破壊を取り扱う研究は本館の精神に反する物であり、受け入れられない。

汎理想主義者の研究には著作権はない。汎理想主義の精神の範囲内で使用される限り、またその引用文を含む研究が匿名である限り、引用は自由であり、引用元を提示する必要はない。

このプロジェクトに取り掛かるにつけて、私はまず最初に百人の形而上工学者を訓練することから始めることを提案したい。そこから始まって、より深い探究心を持つ者は理論へと進み、行動家や説得力のある者は製造・整備、操作の分野へと進めばよい。となると、次の問題はいかにそのような工学者を訓練するかである。次章においてそれを検討することとする。

## 第七章 形而上工学者

もし政策決定が専門家の形而上工学者に委ねられるのであれば、民主主義がうまく機能することは可能である。航空会社が飛行機を発注する際、各社は製造会社をいろいろ当たってどこから購入するかを決める。ボーイングかもしれないしエアバスかもしれない。どこから購入するにしても飛行機は専門家によって製造された物で航空力学の理にかなっているものであることは確かである。航空力学上の設計は、ある程度の範囲内でしか行なえないのである。したがって、どの会社の飛行機もそれほど違った形状を取らない。翼が九枚あったりとか四角かったりとかはしない。となると後は価格とか内部のデザインとかで決まることになる。同じことが形而上工学でも言える。人々はプロのエンジニアの中から選択できるが、政策にはそれほど大きな変動はないであろう。というのは一旦我々が形而上の機能を知れば、選択の余地は限られてくるからである。選挙民は候補者の人柄や、人種や見かけなど何を規準に選んでも良い。基本的には彼らがしっかり訓練された形而上エンジニアである限り、みんな健全な政策を採るだろう。訓練を受けていないエンジニアが何百人という人を運ぶ飛行機の設計を許されるべきでないのと同様に、政治家は全て形而上工学の学位を取得することが要求されるべきである。映画俳優やプロレスラーなどは資格がない。不幸なことに我々は現在その為の教育制度を持っていない。まだ形而上工学の分野が設立されていないのである。であるからこれがいかに緊急を要する事態であっても一夜にして解決するわけにはいかない。しかしもし最初の百人の形而上エンジニアを訓練できれば、そこから急速に広がる可能性はあるのではないかと期待している。しかしながら、この初代の形而上エンジニアは公式の教育制度を通じて訓練を受けることができない。そこで私はまず形而上エンジニアと同じ技術を獲得することを要求されている哲学王を訓練するため類似した教育法を提案したプラトンの案を検証し、それから自身を形而上エンジニアとして訓練しようとした私個人の経験に基づいて教育プランを立ててみた。これは決して組織的で有効なものではないが、いつの日かより効果的な訓練制度が整うことを希望している。そのような制度では形而上エンジニアは知的訓練と感情的訓練を受けなければならない。最後にそれらについて検討する。

始める前に、第四章に戻って、物理工学と形而上工学の違いについて再度確認する。ここで簡単に要約すると、第一はその規模である。形而上工学の規模は物理工学の規模よりずっと大きい。もし形而上工学が物理工学と同じ規模に縮小されたとすると、我々の寿命が数ヶ月しかないのに新しいモデルの飛行機を設計して製造するのに何年も掛かるかかると同じような事態となる。第二に、形而上工学では主観と客観の区別がない。物理工学ではエンジニアはある物体を製造する為に金属や木材といった物質を処理するが、エンジニアと彼らの取り扱う物質の間には完全な区別がある。しかしながら、形而上工学ではエンジニアは同時に彼らの使う物質でもある。したがって主観と客観が合体する。この二つの違いが訓練制度が設置される際考慮されなければならない。

### プラトンの教育制度

その『国家論』において、プラトンは哲学王は「以下の特質を持たねばならない—哲学的性向、高揚した精神、迅速な知性とそして強靱さ」と言っている。<sup>1</sup> これらの特質を訓練する為プラトンは三段階の訓練システムを提案した。第一段階は第三部で提示されている。第二段階は第八部で提示されている。最終段階は軍官としての修行であり、第八部で提示されている。

リーはプラトンの教育第一段階を以下のように要約している。

教育は三部門に分かれている。読書と作文、体育とそして我々が中等教育あるいは文教と呼んでいるものである。これは主に詩の勉強から成り立っており、それは朗読され、必要な時には豎琴にあわせて歌われたので音楽の知識も含まれていた。それは大体我々の教育制度の中等教育に当たるものであり、その後18歳から始まる二年間の軍事教育が続いた。<sup>2</sup>

この段階での主な教育の目的は人格形成であった。リーは以下のように説明する。「この教育段階での一般的目的は人格と道徳観念、それから審美眼の形成であった。道徳観と審美眼の間には親密な関係があった。」<sup>3</sup> リーはさらに詩と音楽の道徳教育での重要性について説明する。「またギリシャ人は聖書を持っていなかったので、神学と倫理

<sup>1</sup> Plato, trans. by H.D.P. Lee, *Plato: The Republic*, New York: Penguin Books, 1955, p.114.

<sup>2</sup> 同、113頁。

<sup>3</sup> 同、141頁。

の根源として聖書が我々にとって果たす役割をギリシャ人にとっては詩が果たした。」<sup>4</sup>

このようにプラトンは詩と音楽を哲学王にふさわしい人格形成の為に使用する意図であった。プラトンは詩と音楽は人格形成に決定的効果があると信じていた。

「教育は精神と人格形成から始めるべきでしょう？」

「もちろん。」

「この種の教育には物語りが含まれるべきでしょう？」

「はい。」

「物語には実話とフィクションの二種類ありますよね。我々の教育は両方使わなければなりません、まずフィクションから始めます。」

「それはどういう意味ですか。」

「我々は子供たちに物語を聞かせることから始めますよね。それらは概してフィクションです。一部には真実も含まれますが。そして体育を始める前に、子供たちに物語を聞かせます。」

「そのとおり。」

「それが私が意味するところです。体を鍛える前にまず精神を鍛えることから始めるのです。そして第一段階は常に最も重要なことです。特に幼い子供たちを相手にしているときはそうです。まだ人格が固まっていないので、大人が選んで与える印象が一生残る時なのです。」<sup>5</sup>

その理由でプラトンは「教育に使用される音楽と詩には厳正な検閲が必要」<sup>6</sup>だと主張する。それから彼はどのような種類の物語が子供に聞かされるべきかについて詳細に議論し、大概の詩を却下している。それにはホーマーの作品も含まれるが、これは道徳的に欠陥のある神や英雄を描いているからとのことである。それからプラトンは教育における劇の使用に反対している。というのは、劇は演じる役になりきるために子供たちが自分を失うことになってしまうからだ。<sup>7</sup>さらに詩の伴奏としての音楽についても議論しているが、そこではある種の音階

<sup>4</sup> 同、113頁。

<sup>5</sup> 同、114頁。

<sup>6</sup> 同、141頁。

<sup>7</sup> 同、130～131頁。

が子供たちの人格形成にとってより効果的であると主張している。<sup>8</sup> 最終的にプラトンは審美学を道徳に結び付ける。

「でも今すぐに決断できることが一つあります。それは美と醜悪は良いリズムと悪いリズムから生ずるということです。」

「それは疑いないことです。」

「そして良いリズムは良い詩にうまく合う音楽の結果で、悪いリズムはその反対です。同じことが音階と旋律についても言えます。さっき言ったように、リズムと音階が言葉に適するべきでその反対ではありません。」

「もちろん言葉が音楽を決定すべきです。」と彼は言った。

「でも詩自体の様式と内容はどうですか？」と私は尋ねた。

「他の物が性格に依存しているのと同じようにそれらも性格に依存しませんか？」

「しなければなりません。」

「したがって、良い文学と良い音楽、そして一般的に形式の美は全て性格の良さに依存しています。私は我々が無礼にならないように『善』と呼んでいる世界の認識不足を意味しているのではなくて、真の判断力と信念のある性格のことを言っているのです。」

「私もそう思います。」

「そしてこれらは、若者が適切な役割を人生において果たすのなら、取得しようとしなければならないものではありませんか？」

「そうです。」

「そしてそれらは絵画やそれによく似た芸術、織物や刺繍、また建築物や家具、そして生き物、動植物の中に見られるのです。これら全ての物の中に我々は美と醜悪を見出すからです。形式の醜悪さや調和の欠落は悪い芸術と悪い性格に繋がり、その反対は良い性格と鍛錬に関連しまたそれを代表しているのです。」

ですから我々が詩の中で良い性格を代表するかそうでなければ全く何も書かないように要求する命令を出すのは詩人に対してだけではありません。我々はよく似た命令を全ての芸術家に

<sup>8</sup> 同、138頁～141頁。

出し、彼らが悪い性格や、修養の無さや、意地の悪さや醜悪さを絵画や彫刻や建築物やどのような芸術作品に於いても描くのを防がなければなりません。そしてもし芸術家がそれに服従できなければ芸術を続けることを禁止しなければなりません。したがって我々は、我々の生徒が邪悪な物を代表している物の中で育てられるのを防がなければなりません。そんなことをすれば、毎日少しづつ不健康な牧草地で餌を与えることによって、児童は気づかぬうちに精神的に大きな損害を受けることになってしまいます。我々の芸術家や工芸家は美しい物の真の性質を感知できなければなりません。そして我々の青年たちは良い気候で育ててあるがままにその恩恵を受けるのです。というのも彼らが見聞きする芸術作品は全て彼らを良い方向に導くからです。健全な田舎からの微風などのように、知らない間に彼らを理性的で正しいものに同意し同調するように型付けていくのです。」

「それは確かに子供を育てる最良の方法です。」

「そして、親愛なるグローコンよ」と私は言った。「それが理由で、この教育段階は大変重要なのです。というのはリズムとハーモニーは心の奥底に浸透して、最も強力な影響を与えます。そしてもし教育が良ければ、調和と公正さをもたらします。もし悪ければその反対です。さらに我々が提案する適切な訓練は人に芸術作品や自然の欠点をすぐに見抜く目を与えます。その醜悪さを彼はそうあるべく嫌うでしょう。何でも美しい物を彼は歓迎するでしょう。そしてそれを受け入れて自分自身の善として吸収するでしょう。何でも醜い物は彼はそうあるべく非難して嫌うでしょう。まだ若くてその理由が分からない時でさえそうするでしょうし、一旦理性に出会うと、彼は教育のおかげで感知できるのでそれを見慣れた友人として認知して歓迎するでしょう<sup>9</sup>

次にプラトンは体育について述べる。ここでもまたプラトンはそれを体力増強というよりは人格形成の手段として使用している。

「もちろんそれは児童が訓練中にこの厳しい試練を乗り切る間にそのエネルギーとやる気を刺激する為であって、単に体力的に強くする為だけではありません。それは普通の運動家の食

<sup>9</sup> 同、141～142頁。

事と訓練の目的ですが。そして親愛なるグローコン」私は続けていった。「それが私が、この二つの確立された種類の教育（文学と体育）の目的ではないという理由です。中には一方が精神を訓練し他方が肉体を訓練するのだと思う人もいるかもしれませんが。」

「それでは何が目的なのですか？」と彼は尋ねた。

「私は両方の目的はたぶん主に精神を訓練することだと思います。」

「どうやってそれをするのですか？」

私は尋ねた。「いままで一生を肉体の鍛錬に捧げると、他の物を全て除いて、ある種の型の精神が得られることに気がついたことはありませんか？ ちょうど反対にそれを怠ると別の型の精神が得られるように？ 一方は強くて野蛮な傾向があり、もう一方はやわくて過敏で、そして．．．」

「はい。それには気がついていました。」と彼が遮った。

「運動能力を過度に強調するとかなり野蛮な人格ができ、文学的また学術的訓練だけをすると、人を必要に満たないなよなよした人間にしまいます。」

「彼らを野蛮にするのはその性格に内在するエネルギーとやる気なのです。」と私は言った。「もしそれを適切に取り扱っていると、それは人を勇敢にしますが、もし強調しすぎると、予期されるように人を荒々しく無骨にしまいます。」

「私もそう思います。」と彼は言った。

「その反面哲学的気性は、温和ですが、あまりに緩めすぎると、過度の柔軟さを作り出します。しかし適切に取り扱われれば、結果は上品で人間的なものとなるはずです。」

「はい。」

「そしてこの二つの要素を組み合わせると、臆病で野蛮な精神に反対して、洗練されていてそれでいて勇敢な精神を作り上げることができるはずではありませんか？」

「そのとおり。」．．．

「ですから私が言うべきことは、これらの二つの教育方法は神によって機動性と理性を訓練する為に人に与えられたもので、偶然の場合を除いて、ひとつが肉体を鍛える為でひとつが精神を鍛える為にあるのではなくて、エネルギーと機動性、そして理性の間で適切な調和が保てるよう、そしてお互いを正確な音程で奏でられることを確実にする為の物のように思えるという

ことです。だから、教育の肉体的訓練と知的訓練の最高の混合が生成できて、それを人格形成の訓練に適用できる人は、単なる音楽家よりずっと重要なハーモニーを作り出していることとなります。<sup>10</sup>

このように、プラトンの第一教育段階は読み書きを習得した後で、詩と音楽による文教と体育からなっており、その両方は人格形成の目的で使用されることになっている。

第一教育段階で優秀な成績を収めた学生は哲学王になる為の更なる教育段階に進む。第二段階は数学と弁証法から成っている。この時点での目的は精神を鍛え抽象的思考を可能にすることである。まず学生は弁証法の準備段階として算数、平面幾何学、立体幾何学、天文学と和声学の五分野の数学を勉強する。数学的訓練の後、学生は弁証法に移る。リーはこの段階での最終目的を以下のように要約している。

数学の勉強は弁証法の準備にすぎない。我々は直線と曲線について思い起こさせられる。弁証法は純粋な思考と知能の実行であり、それは直線の最高の部分である。その目的は目が太陽自体を見ることが出来る時である洞窟からの登上的最後の段階となる善を知覚することである。弁証法という言葉によってプラトンが正確に何を意味したかは多大な論議を呼んでいる。明らかにそれは数学と道徳の両方に関係していて、それぞれが以前の段階で欠いていた統一性と確実性をもたらすのである。しかしプラトンはわざと詳細を精密に表現するのを避けた。もし我々が弁証法は純粋に哲学的活動であり、人の知識全体に統一性を与えるものであり、ついには究極の現実に導くものであると言ったなら、多分少なくともそこまでは確実に言えることであるう。<sup>11</sup>

プラトン自身はこの教育段階で全体的知識習得の重要性について強調している。

「そうですね。我々はこれらの実習と学習と危険に関して怖気づくことの無い少人数を選んで入学させなければなりません。」

<sup>10</sup> 同、152～155頁。

<sup>11</sup> 同、300頁。

「何歳ですか？」と彼は尋ねた。

「必要な体育訓練が終わり次第です。その間二年か三年でしょうが、学生は他には何もすることができません。肉体疲労と睡眠は学習にとって好ましいものではありません。そして最も重要な試練は彼らが肉体訓練の授業にどのように出席するかということです。」

「そのとおり。」

「その後、20歳でその中から選んで昇進させます。そこでは幼年期に学習した個別の科目を統合させなければなりません。そしてそれらどうしの関係と現実との関係の総合的見地を持つようにならなければなりません。<sup>12</sup>

このように、第二教育段階は数学と弁証法の二部からなっている。ここでプラトンは哲学を勉強する機会是谁にでも与えられるべきではないと警告している。「実際、我々が言ってきたことは堅実な鍛錬を積んだ人格だけが哲学の議論に参加を許させるべきで、資格も無いのにたまたまそこにいただけの人間には許されるべきではないということです。」<sup>13</sup>

最後に候補生は実体験を受けることになる。

「それから多分体育に掛けるべきと提案した時間の二倍の時間を掛けて継続的な哲学の集中学習を行ないます。それで十分ではありませんか？」

「6年か4年ということですか？」

「それは問題ではありません。」と私は言った。「5年としましょう。その後で学生はまたさっき話した洞窟に送り返され青年にふさわしい軍隊かその他の将官の役職を勤めさせられ、同僚と同じようにできるだけの実務経験を積めるようにします。そしてそこでまた、学生は直面するあらゆる種類の誘惑に打ち勝てるかどうか試されなければなりません。」

「この段階はどのくらいの期間続くべきですか？」

「15年です。そして彼らが50歳になったとき、これら全ての実務的また知的試験に合格した者は最後の試験を受け、その心の目で全ての明かりの源が見られるように、そして神自体が見られるように向上させられます。これは社会と個人だけ

<sup>12</sup> 同、307頁。

<sup>13</sup> 同、310頁。

でなく自分自身の生活を秩序立てる様式と解釈されます。そして残りの一生を大半の時間は哲学に向けながら、自分の番が来た時には、政治という厄介な職に目を向け、支配者としての義務を果たします。それは名誉の為ではなく、ただ必要だからそうするのです。<sup>14</sup>

プラトンの教育計画は教訓と問題の両方を提示してくれる。まず形而上工学者を訓練するにあたって我々の教育制度が持つ欠陥を修正するのに役立つ教訓がある。プラトンは文学と数学の両方の訓練を人格形成と抽象的思考能力獲得というより大きな目的の為の道具として使用している。これらは両方とも洞窟からの解放を達成する為の手段である。最終段階では、別々に学んだことを弁証法を通じて統合し、全体像が把握できるようにする。

現在の体制は第四章で述べられているように（図4-7）一貫して機能する可能性を持っている。しかし第六章で述べたように分野の垂直的、また水平的分断化があまりにも進みすぎていて、必要な機能を果たすことができなくなっている。元来一般教養科目がこの現象を防止する為に設置されているが、ここでは個々の科目が別々に教えられて、これらの個別の思考体系を融合させる能力を養成する試みは為されていない。最終段階で、学者は全体を理解することには関心を寄せない自分の分野の専門家になることだけを期待されている。図7-1Aに示されているように、もし山の頂上だけを見ると、これらの科目には関連がない。全ての独立した科目が融合する底辺を見た時にのみこれらは統一的に機能するのである。現代の問題は教師自身が上記の欠陥を持つ教育制度を経て来ていることである。これが授業の焦点を極めて限られたものになっている。一見すると何の関連も無いような科目間の共通点を示すことが彼らにはできない。この傾向はさらに悪化してきている。例えば、私がシェークスピアの授業を受けた時、教授はおそらく1970年代に博士号を得たと推測するが、一人一人の学生にどうしてこの授業を受けたいのかと聞いて回った。私は、芸術には自信がないが、どちらかというと音楽の基本の方がまだしっかりしているほうだが、どうしてヴェルティ、メンデルスゾーン、ベルリオーズといったロマン派の作曲家がこれほどシェークスピアに興味を示したのか知りたかったからだと言うと、なにかきまりの悪い沈黙に出くわしてしまった。この授業で使った教科書でおそらくこの教授の二

<sup>14</sup> 同。

世代ほど前の学者によって書かれたものの中に、シェークスピアを論じる際音楽に触れたものがあつた。例えば、ブルームはオセロについてこう書いている。「オーデンはその最も不可解な批評論文の中のひとつで、イアーゴの中にいたずら者の理想像を発見している。私はオーデンのイアーゴが、オーデンのフォルスタフが劇的であるというよりはむしろオペラ的であるのと同様に、ヴェルディの（すなわちボイトの）ものであることを理解したとき初めて説明が付いた。」<sup>15</sup>これは、彼がシェークスピアが芸術の他の分野でどのように解釈されているか注視していたことを示唆している。であるから、その頃にはまだ関連性は失われていなかったのである。しかし、一旦授業が始まると、この教授は私がシェークスピアの作品を通して理想主義と現実主義についてより深い洞察を得るのに大変協力的に指導してくれた。最も最近の学者たちはさらに焦点が狭い。私が詩の授業を取って、ミルトンの『失楽園』と理想主義に関して質問を書き上げたとき、若い教授で、おそらく1990年代に博士号を獲得したと思われるが、「これらの質問は詩の分野には属さない」との返事をよこした。私は最終的にはこの授業を放棄した、というのもこのように狭く定義された詩の範囲内では何も得ることが無かったからである。

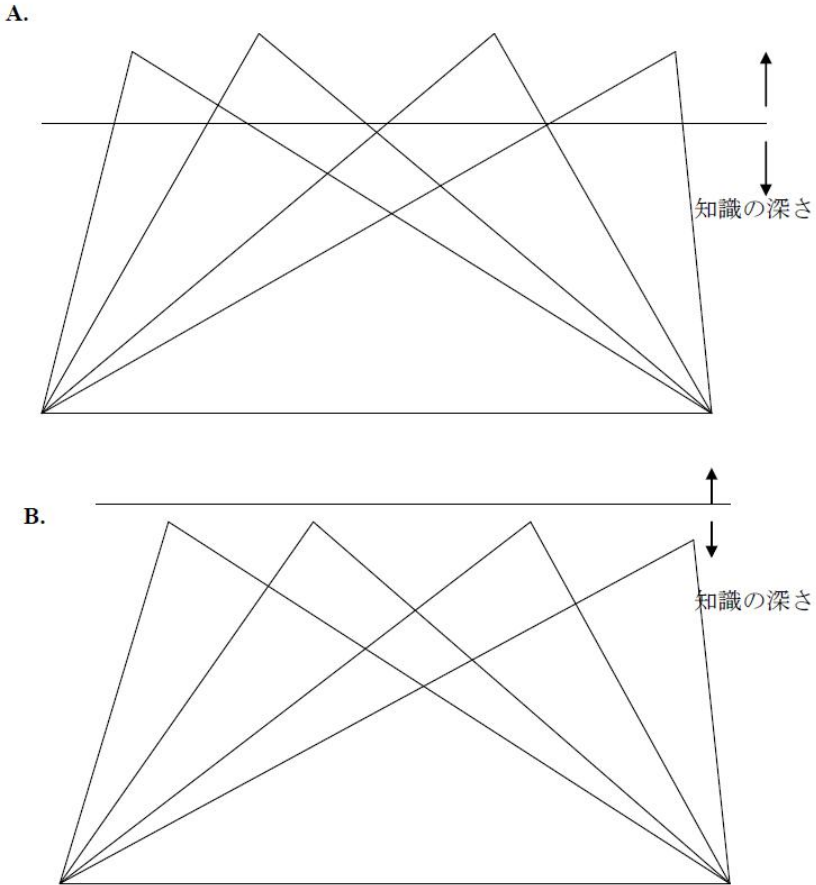
多分野間の協力を奨励する新しい傾向が近年出てきている。例えば、社会学者と人類学者は現代のアメリカ社会の移民のコミュニティについて理解しようと協力している。しかしこれらの傾向は、分断性を逆行させるものではない。これは単に個々の分野があまりに浅くなったため、分野の範疇が失われてしまい実際意味の無いものになったということを示している（図7-1B参照）。言い換えれば、これは西洋の思考体系の完全な崩壊の印である。工学の例を使えば、フォードとホンダの整備工が、一緒に車を製造するように言われると、少なくとも始めのうちは部品や製造工程の違いなどから苦勞するだろう。しかし、単純な芝刈り機のような道具と一緒に作ってくれといわれたら何の苦も無く協力できるだろう。このような単純作業には複雑な理論や専門化は必要とされないのである。現代の学会は完全にプラトンの全体の精神を失ってしまった。

第三章で検証したように、これは現実主義の台頭によって予期される結果であつた。現代の学会は現実主義の教義に支配されており、ここでは学者の主な関心は自己の昇進と栄光である。彼らは出版したが、それは社会一般の益にとって重要であるからではなく、それが

<sup>15</sup> Harold Bloom, *Shakespeare: The Invention of the Human*, New York: Riverhead Books, 1998, p. 435.

最低では雇用に結びつき、最高では社会的名声が得られるからである。このような環境下では、できるだけ近道をしたという自然的傾向がある。社会の深刻な問題の解決法を模索していない限り、他の分野と連絡を取る必要は無いのである。

図 7-1



これはプラトンの資格の無い人物には弁証法を教授するべきではないという憂慮に繋がる。これによってプラトンは詭弁家を意味すると私は解釈しているが、知識は力である。社会はある人間に力を与える

時にはその力がどの目的でいつ使われるべきか判断する能力のある人間であることを確認することが重要である。<sup>16</sup>

この傾向は物理学部門の進展には害を為さなかった。というのは物理学では客観と主観が離別しているからである。『*Law and Order*』というテレビドラマがあるが、その中に『*Big Bang*』というエピソードがある。一番に何か新しい物を発見してノーベル賞を獲得しようとする理論物理学者の社会で、一人の著名な物理学者が宇宙がどのように始まってどのように終焉するのかの説明の鍵となる陽子崩壊の問題に取り組んでいた。一方で若い生活に困窮する物理学者が、アパートの門番として働きながら、この著名な学者の説を覆す仮説を出す。これは出世のきっかけになるはずであったのだが、著名な学者がこの若手の応募した奨学金を否定し、その概念を盗んだのである。これは刑事ドラマなので若手の学者が著名な学者を殺そうとした。このようなことが実社会で起こることは無いと思うが、この背景には事実的な面がある。宇宙の始まりと終わりというような大きな問題に関心を持つ人々がどうして個人のキャリアなどという矮小なものに執着することができるのだろうか？これが可能なのは、主観的関心は客観的関心とは完全に離別しているからである。

ここで付け足しておきたいのは、図4-2に示されるように、科学分野は個別には完全に機能しているとはいえ、図4-7に示されるように一旦社会に組み込まれると深刻な問題を引き起こす。この社会は宇宙の始まりについて知りたがる反面、西暦2000年代を生き延びられるかどうかも分からない社会になってしまった。この社会は何千億ドルという経費をかけて粒子加速器を製造する反面、何億という人々が飢餓に苦しむ社会になってしまった。「その問題は差し置いて、宇宙の始まりについてゆっくり考察できるようまず人類が十分生存できる環境を作り出そう」とか「その問題は差し置いて、まず地球上で誰も飢え死ぬことが無いようにしよう」とかは言わない社会になった。

形而上工学では第四章で述べたように、主観と客観の区別がない。これが現実主義者が形而上工学のプロジェクトに従事するのを不可能にしている。現代の哲学者の関心は現代の物理学者の関心と同じである。その立場を正当化する為に哲学者が依存する万能の議論があるようである。それは哲学は実用的である必要は無い。というのは哲学は英語では *philosophy* だが、これは知識 (*sophia*) を愛する (*philo*) とい

<sup>16</sup> 興味深いことに、日本の武士道も類似した原則を持っている。人を死に至らしめる能力を得るものは同時に茶道や和歌をたしなむべきであるとされる。これはその種の技能を持つ者がそれを乱用し他人を傷つけないようにとの配慮である。

う意味だからであるとのことである。私が哲学の基本を勉強する為に使った講義テープの中で二人の講師がそのことに言及していた。宗教哲学の授業を受けた時、初日に教室に入ったとたん、黒板に同じことが書かれているのを見た。

もしそれが事実なら、どうしてプラトンは『国家論』を書いたのだろうか？ここでの私の理解は一般人は実用性に関心があるということであるが、彼らが実用的といった時、それは日常生活にとって利便性があるということである。これを物理工学を例にとって見ると、彼らの関心は、例えば飛行機の場合、快適で広々とした座席とか、トイレの数とかそういうことになる。彼らには飛行機を空中で飛行することができるようにする抽象的航空力学の法則を理解することはできない。であるから、数式を見せられたとき、これは実用的ではないと却下するのである。このように、学者の関心が個人の関心事に限られている限り、意味のある形而上工学のプロジェクトを行使する為に必要な抽象理論のレベルまで掘り込むことは不可能なのである。

このようにプラトンは教育制度について貴重な洞察を提供している。しかしその反面、そのアプローチには問題もある。第一にプラトンは審美学と道徳の間に親密な関係付けを行なっている。この思考系統では、芸術において美を認識できるものは自動的に道徳上の善を認識できることになっている。ということは、古典芸術を勉強する者、特に質の高い詩を読む者は善人に成ることができる反面、悪質な芸術や詩に触れると、学生は道徳的に退廃するということになる。しかし、最低でもそのような主張は証明されていない。個人的には、これに反対する例証を目にして来た。もう何年も前に、白人至上主義運動の指導者のインタビューをテレビで見たことがあるが、そこでは彼はベートーベンの『莊嚴ミサ』を聞いていた。また私は高校生を教えてもいるが、学校の英語の授業では道徳教育も重視されている。学生は人種差別の激しい1960年代のアメリカ南部で白人弁護士が無実の黒人を弁護するハーパー・リーの『アラバマ物語』や、さっさと切り上げて家に帰りたいがる陪審員の中で一人正義の為に立ち上がり被告人の無罪を証明するというレジナルド・ローズの『12人の怒れる男』などが課題として与えられている。これは両者共に困難な状況下で勇気を持って生きていくように奨励するものである。さらに別の課題であるアーサー・ミラーの『るつぼ』では、自己保身の為に一少女のついた嘘が近代アメリカの村で狂人的魔女狩りを引き起こすというものであり、最後にはある人物が名誉の為に告白を拒否し処刑される。また最初は人民の側に立っていた革命家が権力の座に着くや否や特権を悪用し始めた

ロシア革命の寓話であるジョージ・オーウェルの『動物農場』も課題となっている。私の見るところでは、学生は知的には述べるべき建前を理解しているが、それに伴って行動しようと決意する者は皆無である。特に彼らは怠慢な大人に囲まれているので、彼らが大人から得るメッセージは「自分たちはやらないが、お前たちはやれ。」というものとなり、残念なことにここで教えられているのは偽善である。

プラトンはこの問題を無視していたわけではなく、その解決法として実社会の怠慢に触れることのないよう社会から学生を孤立させることを提案している。またプラトンは二年間の体育によって誘惑に負けない強靱な精神を作り上げることも提案している。これはある程度問題を改善することができるかもしれないが完全に解決できるかどうかは疑問である。まず体育は役立つかもしれないが、現代では勝つことがあまりに強調されていて、苦難に耐えうる強靱な精神の形成という点はほとんど無視されている。正しい状況下では、例えばチームスポーツは訓練生に初期のモラルジレンマを提供することができる。誰でもレギュラーになりたいが、なれるのは一流の選手だけである。もし補欠となってもチームに貢献することができるか？一方、レギュラーになれたからといって、スター選手の態度をとらず、貢献してくれた補欠たちの努力に感謝することができるか？その為には体育の性格が見直されなければならないだろう。第二に、真空状態では強靱な精神を達成できるかもしれないが、学生は人々の弱さを観察する機会を失う。プラトン自身も『金属の神話』の概念を使用している。ある人は金である人は銀そしてある人は銅であり、金である人は支配者となり、銀である人は兵士となり、銅である人は服従者となるというものである。支配者が効率的に支配する為には、個々の金属の性質を熟知し、適材を適所に配置できなければならない。しかし孤立して教育を受けた学生はそのような見識眼を育成することができない。これは物理工学者でいうと、個々の材質がどれほどの圧力に耐えうるかを知らないことになる。であるから工学段階で、飛行中に受ける圧力を支えきれない弱い材質を飛行機の重要な部分に配置したりするという過ちを犯すかもしれない。そうなるとう飛行機は離陸したとたん折れ曲がってしまう。

『国家論』自体でその限界が示されているともいえるかもしれない。そこではプラトンはその提案がうまく機能するようもう一つの神話を忍び込ませている。それは『エルの神話』であるが、そこでは正当な人生をきた者は死後報われるが、不徳な人生を送った者は処罰されるというものである。また現世での経験は全て生まれる前に行なった

選択の結果であるとも言っている。<sup>17</sup> プラトンはほとんどの問題を理性の範囲内で解決しようとしているが、それには限界がある。だからそれを補足するためにこのような神話を付け足さなければならなかった。西洋文明ではキリスト教がこの部分を取り上げ、最大限に発展させている。知能の範囲内では人格がどれほど強くなければならぬかを叙述することができるかもしれないが、究極的には強靱な人格の形成は感情の分野で為されなければならない。スポーツに関して読むだけでは人は技術を獲得できないのと同じように、物語を読むだけでは人は道徳的な強い人間にはなれないのである。道徳的強さを得るためには、人は各種のモラルジレンマに遭遇し、一つ一つ克服していかなければならないのである。宗教がこの溝を埋めている。

第二の問題は段階的学習計画である。上記で述べたように、プラトンは三段階の教育制度を提案している。第一は人格形成で、第二は抽象的思考の開発で、最後は実際経験である。総合的で客観的な証拠は提示できないが、個人的には段階的学習は役に立たなかった。それは音楽の学習において役立たなかった。3歳か4歳の頃にピアノのレッスンを受け始めて、20年ほど音符を読んで技術をつけることに費やした。一旦技術が身に付けば、表現力や音楽性に焦点を当てようといつも考えていた。しかし私の最初の問題は、私のレベルでは完全な技術を身につけることは不可能で、音楽性的の問題を探求できる段階に到達できなかった。第二の問題は、ついにその問題に気がついて、音楽性に焦点を当て始めた時、音楽理論の授業を受け始めたが、そのときにはベートーベンのピアノソナタなどを弾いていたが、これはすでに理論的に複雑すぎて、説明してもらってもどうにか知能的に理解できる程度であった。そしてこの複雑な知能的概念を感情的表現に変換する術を全く持たなかった。40歳になってからピアノの練習を始めて、すぐにこのような曲を弾くことは期待できないように、40歳になってからいきなり音楽的表現に注目してすぐにそれが実行できるわけが無いのである。作曲の授業を受けていたとき、数小節の四声の通奏低音など極めて単純な練習から始めてもらった。当初はどうすればより音楽的にできるか全く見当が付かなかったので、ただ数字的に可能な組み合わせをいくつも作って、先生にどれがより音楽的でそれはどうしてか説明してくれるよう頼んだ。時が経つにつれて、少しずつこれらの数字的組み合わせの中から自分が気に入った物が選べるようになった。この勉強を続けるとしたなら、先生にこのレベルでの音楽性を

<sup>17</sup> Plato, trans. by H.D.P. Lee, *Plato: The Republic*, New York: Penguin Books, 1955, pp.393–395.

全て探求し終えるまでは次のレベルに進まないよう依頼したことだろう。やってみたかったもうひとつの訓練は、技術的にも理論的にも基本的な作品を選んで、最初はただプロの音楽家の演奏を聞いて、心に浮かんだことを書きとめ、それから楽譜を分析して、最後に異なった音楽家の演奏を聴き比べ、個々の演奏家がどのように楽譜を解釈しているかを比べてから自分の演奏計画を書き留めるといったものであった。私は、少女時代にピアノの練習をしていた時、ただ音符をたどるのではなく、このような過程を踏むべきだったと後悔している。言い換えるならば、技術の習得を行っている際、同時にどのようにそれを使うべきかを見極める能力、すなわち芸術の修練を行なうべきである。そのようにすれば、個々のレベルで全体を習得することができ、徐々により複雑なレベルに上昇することができたであろう。

これはどの分野にでも当てはまることだと思う。例えば野球を採ってみても、もし少年が最初の一年はルールブックを読むことだけに専念し、それから数年間は投球だけの練習をし、それから打撃だけの練習をし、最後にこれらが個別に習得された後で、ついに試合をするなどという習得法をとれば、それは有効な習得法と考えられるだろうか？ この少年は有能な野球選手になっているだろうか？ 私としてはそれは疑わしいと思う。この種の習得法は個々の技術の習得を助けるが、それぞれの技術をどう使い最良の結果を出すかという判断力の養成を助けない。であるから、子供たちはリトルリーグで試合をすることから始め、それから中学、高校、大学へと進み、最も優秀な者がプロとなるというのが順当であろう。しかしそれぞれのレベルで彼らは総合的に試合をしている。ただ最初は全てが単純で、上に上がるほどより高い技術を必要とし、試合も複雑となるのである。

これは工学にも当てはまるべきだ。もし学生が最初の数年は物理の数式を覚えることだけに費やし、それから数年は各章の問題を解くことだけに費やし、必要な物理の法則を身につけたとして、それから突然飛行機を設計しろといわれても、そのような仕事を遂行することができるだろうか？ 個人的には、学生は数式を学んで、問題を解く傍ら、芝刈り機などの単純な機械の設計から始めていかなければならないと思う。

要約すると、プラトンの教育計画は形而上工学者の訓練の為に重要な含蓄を提供してくれる。すなわち専門性を強調し、全体像を軽視することによって思想体系の分断化の原因となっている現在の教育制度の深刻な欠点を指摘してくれる。しかしプラトンの計画はまた審美学と道徳に証明されていない関係付けを行い、また段階的習得法を提案

している点で問題がある。これらの観察に基づいて、本章の以下の部分で形而上工学者の予備的訓練法の作成を試みる。

### 形而上工学者の訓練法

教育計画を設立する為には、まず形而上工学者が何を達成する必要があるのかについて理解する必要がある。その為には図4-7を参照するとよい。形而上工学者は全て汎理想主義者であり、純朴理想主義者から出発する。図では訓練生は二つのことをしなければならないことが示されている。一つは汎理想主義者の領域に辿り着くためには現実主義者の領域を通り抜けなければならないということであり、もうひとつは汎理想主義者の領域を習得しなければならないということである。前者はだいたいプラトンの第一教育段階である人格形成に価し、後者は思考能力を高めるというプラトンの第二教育段階にほぼ一致することになる。しかしこれは完全な姿ではない。私自身が感情と理性の統合を達成できていないのでこのように二つの別個の画像を目にしているのである。私の経験では感情と理性は大変複雑に相互関連している。もしこの複雑な相互関係が完全に統合されれば、別個の教育課程は必要なくなるはずである。いつの日か誰かがこれらの二分野をうまく統合してより総合的な教育制度ができることを祈っている。現時点では、他に方法が無いので、二つの別々の教育分野として知性的訓練と感情的訓練を検証する。これらは以下に別々に提示されるが、プラトンの段階的教育計画の欠点を補う為にできるだけ同時に行われることが望ましい。

実行上の問題として、最も深刻な問題は教師の不足である。これは明白であるが、プラトンも全体像を教える為には、教師がまずそれを理解していなければならないと言っている。

「それでは私が、我々が鍛錬と、勇気と、寛大さと精神の偉大さ、そしてそれらに関連したものの性質とその反対の性質を、どのような形でそれが表現されても認知できるようになるまでは、我々を適切に教育したとも、我々が教育している指導者を適切に教育したとも言えないと言っても間違いではないでしょう。そしてそれらの機会が大きかろうが小さかろうが軽視することなく、同じ学習過程であり両者を認知する為の技術の習得を可能にすると認めなければなりません。<sup>18</sup>

<sup>18</sup> Plato, trans. by H.D.P. Lee, *Plato: The Republic*, New York: Penguin Books, 1955, p.143.

しかし、前に述べたように、形而上の世界は現代では分裂しており、全体像を提示できる教師が存在しない。これは我々が総合的教育制度を設定する前に第一世代の形而上工学者は自身で訓練を行わなければならないことを示している。

振り返って見ると、私の場合は自己訓練の際の最大の利点は西洋文明の圏外で生まれたことであった。最初の20年間は西洋文明との十分な交流はあるものの東洋思想が主体の環境で育った。その結果、米国に移住してからずっと部外者として西洋文明を観察する立場にあった。そしてそこで現住者が業績として認めるようなものを達成すると、多大な利点を持つことになる、すなわち十分な内部知識と外的観点である。西洋文明内に生まれた者がこのような巨大な領域を完全に制覇して領域外へ成長していくことがどれほど難しいことか想像できる。

しかし残念なことにこれは変更できる要素ではない。形而上工学者になりたいと決心する頃までには、その機会は既に失われている可能性が高い。しかしこれはより小規模な形で達成できるのではないかとも思う。この理由で、この時点では、10歳から20歳の間の初等教育を飛ばして、大学レベルからの訓練方法について考察する<sup>19</sup>。将来誰かがより制度的な訓練法を形成してくれることを祈っている。

**知的訓練：**第一に形而上工学者は水平層と垂直層を認識しなければならない。最終的には化学工学や理論物理学といった特定の層や部門に専門化することになるかもしれないが、常にその専門分野が全体のごく一部であることを知っていなければならない。それを知らなければならない理由は特定の問題に直面した際、まずどのレベルで問題が処理されるべきか判断できなければならないからである。これは理論上の問題か、工学上の問題か、それとも製造・整備上の問題か？ 化学的解決法があるか、それとも電気工学上の解決法があるか？ もし電子工学者が、問題が機械工学上のものであると認定したら、機械エンジニアに連絡を取らなければならない。そのため訓練の焦点はこの全体像の習得に置かれる。

第二に、解決法は現実的でなければならない。しばしば紙の上では良く見える計画が実際の状況では機能しないことがある。物理工学の

<sup>19</sup> 当然のことであるが、初等教育も含めた総合的教育プランが作成されるほうが望ましい。ジョン・デューイの『*The School and Society* (学校と社会)』(Cosimo Classics, 2008)などのようにこの種の試みをしたものもある。

学生は皆このことを熟知している。実験室に入って教室で学んだ現象を再現しようとしたとたんに、ことはそれほど単純でないことに気がつく。私が化学の授業を取った時、出るべき結果が出せたことが無かった。最後に白い結晶が試験管の底に溜まるはずの実験で、何も残らなかった。どこで間違ったのか？もう嫌気が差したものだ。実験は大嫌いだった。しかし何が起こるべきか予測してそれを実際に起こすことのできる有能な物理工学者になる為にはこれらの段階を経なければならない。

前に述べたように、現在の大学教育の最大の問題は一般教養科目が別々に提供されていて、それらの関連性を見つける訓練がなされていないことである。そのせいで学生は全体像を把握することができない。もうひとつの問題は形而上の授業が全て教室内で行なわれていることである。物理工学者がしなければならないように、形而上工学生も教室外での実験を経験しなければならない。ここで私は二年間の一般教養過程と、芸術と実体験の三層から成る教育制度を提案する。

**(1) 一般教養過程:** まず二年間の総合一般教養コースにおいて、個々の分野が関連付けられるような形で提供する。ここにその例を添付する。

### 形而上工学入門

人類の歴史上常に存在した最大のものは戦争である。歴史は戦争でひしめいているがどうしてなのだろう？ どうして人類は歴史から戦争を取り除くことができないのだろう？ 今こそ我々は努力すべきであり、形而上工学がその道具となる。本コースは四学期にわたる入門コースである。形而上工学には哲学、宗教、科学、芸術と歴史が含まれる。通常ではこれらは別々に教えられるため学生はこれらを統合する機会がない。本コースはこの問題を軽減する目的がある。終了後に学生はなぜ文学専攻の学生が物理を取り、物理専攻の学生が詩を書くべきなのか、そして、哲学が我々社会の健在化において重要な役割を果たすのかを理解することになる。

#### ピコーの歴史の周期

ジャンパチスタ・ピコーは17～18世紀にかけて活動したイタリアの哲学者である。彼は古代文明を検証し、それらに共通する歴史的周期を観測した。それは野蛮時代に始まり、そこから宗教的指導者が台頭し、それが世俗の王政に引き継がれ最後に人民が統治権を握るという周期である。一学期目はここから始め、ヨーロッパ、中国、インド、イスラムと日本文明の周期を考察する。学生は、これらの周期は実在するのか想像に過ぎないのか、この周期は他の文明に適用できるのか、また例外があるならそれはどうしてかなどの問題に取り組むよう指導される。

#### 汎理想主義

汎理想主義はピコーの周期の説明を試みる。二学期目はこれらの周期の裏には理想主義と現実主義の相克があることを観察する。第一に我々はヨーロッパ文明の哲学、宗教、芸術史を観察し、周期との相関関係を考察する。第二に我々は主に宗教の分野で発達した他の文明の理想主義を考察し、最後に汎理想主義の法則を提起する。学生は他の文明でも同じ関連が見られるか考察するよう指導される。

#### 物理的工学

三学期目は形而上工学の基礎として物理的工学の分野の考察を行う。第一に理論、工学、製造・整備、操作という4つの垂直層の間と、機械工学、電気工学、化学工学という3つの水平層の間の密なる関連を考察する。学生はどうやって理論を実際の工学に適用し、相対する力や要素を均衡するかという問題に直面する工学者の見解を習得する。さらに、ミクロから超マクロレベルでの他の科学的分野の考察を行う。これによって、異なった考察のレベルが異なった実用レベルに適合することを学び、目的によって正しい考察レベルを選ぶ術を習得する。

#### 形而上工学

最終学期は形而上工学に焦点を当てる。まだ確立された分野ではないので、本コースでは垂直・水平層の歴史上の人物の考察を行う。これらの層は物理的工学ほど密に関連していないことは明白であり、共通の言語も存在しない。学生は自分の専攻に鑑みてこの分野の確立にどのような貢献ができるか考察するよう指導される。

形而上工学入門 1

ビコーの歴史の周期

1. ジャンパチスタ・ビコーとその歴史の周期

Giambattista Vico, trans. By Thomas Goddard Bergin and Max Harold Fisch, *The New Science of Giambattista Vico*, Ithaca: Cornell University Press, 1984.

2. ビコーの周期の世界史への適用

A. ヨーロッパ

- i) 古代ギリシャの衆愚政治化
- ii) キリスト教の台頭
- iii) 国家の台頭
- iv) 民主化と衆愚政治化

B. 中国

- i) 第一の周期
- ii) 帝国の台頭
- iii) 皇帝と官僚
- iv) 共産主義中国
- v) 民主化

C. インド

- i) 第一の周期
- ii) ヒンズー教と仏教
- iii) 諸王国
- iv) イスラム教
- v) 西洋帝国主義

D. イスラム圏

- i) イスラム教の台頭
- ii) スルタンとカリフ
- iii) イスラム諸帝国
- iv) 西洋帝国主義

E. 日本

- i) 神道と天皇
- ii) 武士政権の台頭
- iii) 江戸幕府
- iv) 明治維新と民主化

3. 現代社会の三重危機

## 形而上工学入門 2

汎理想主義

1. 人類進化の歴史
  - i) 現実主義
  - ii) 理想主義
2. ヨーロッパ形而上学の略史
  - i) 知性的アプローチ: 哲学
    - 理想主義・唯心主義
    - 現実主義・唯物主義
    - 思想体系の分断化
  - ii) 感情的アプローチ: キリスト教
3. ヨーロッパ芸術の独立と分断化
  - i) 古典時代
  - ii) 中世
  - iii) ルネサンス時代
  - iv) バロック時代
  - v) 新古典時代
  - vi) ロマン主義
4. イスラム教
  - i) 知性的アプローチ: イスラム正教
  - ii) 感情的アプローチ: スフィ
5. ヒンズー教
  - i) 知性的アプローチ: ヤナヨガ
  - ii) 感情的アプローチ: バクティヨガ
6. 仏教
  - i) 知性的アプローチ: 小乗仏教
  - ii) 感情的アプローチ: 大乘仏教
7. 儒教
  - i) 哲学としての儒教
  - ii) 新儒教: 宗教的要素の融合
    - 知性的アプローチ: 宋新儒教
    - 感情的アプローチ: 明新儒教
8. 汎理想主義
  - i) 仮定
  - ii) ビコーの周期との相関関係

## 形而上工学入門 3

## 物理的工学

1. 垂直統合: 物理
  - i) 理論: 熱力学
  - ii) 工学: 自動車エンジン
  - iii) 製造・整備: 自動車整備
  - iv) 操作: 運転
  
2. 水平統合
  - i) 機械工学
  - ii) 電気工学
  - iii) 化学
  
3. 飛行機の設計
  - i) 航空力学
  - ii) 翼/機体の設計
  
4. その他の科学—分析レベル
  - i) ミクロレベル
    - ミクロ生物学
    - 有機化学
  - ii) 人間レベル
    - 生理学
  - iii) マクロレベル
    - 地質学
    - 気象学
  - iv) 超マクロレベル
    - 天文学
    - 宇宙学
  
5. 量子力学: 科学分類の終焉?

## 形而上工学入門 4

## 形而上工学

1. 垂直層
  - i) 形而上理論
    - プラトン
    - アリストテレス
    - カント
    - ヘーゲル
    - 形而上回路?
  - ii) 形而上工学
    - プラトン
    - アリストテレス
    - マキャベリ
    - ホッブス
  - iii) 形而上製造・整備
    - プラトン
    - アリストテレス
    - マルクス
    - モーゲンソー
    - ウォルツ
  - iv) 形而上操作
2. 水平層: 知性と感情
  - i) シェークスピア
  - ii) バッハ
  - iii) ミケランジェロ
  - iv) 詩歌: 形而上工学の微分・積分?
3. 物理的工学と形而上工学の違い
  - i) 規模
  - ii) 客観/主観の分離
3. 物理-形而上の因果関係の鎖
4. 結論: 形而上工学の未来の課題

私が博士課程にいたとき時、学生はどの学派に属するか極めて早い段階で決めて、それ以外の学派の弱点を攻撃するという傾向があることに気がついた。これは大変危険な傾向であり、有能な形而上工学者の訓練では絶対に避けなければならない。現在の教育制度で訓練され

た学者はしばしば極端な対立議論を繰り広げる。例えば、私が中国とロシアの民主化に際して教訓を得ようとする国際環境下で民主過程が行なわれた場合膨張主義が起こることがあるという政治学の私の博士論文について日本歴史学者に話したとき、「日露戦争前と第一次世界大戦前の日本の膨張主義の原因は全く別だ!」と怒鳴られたので、会話を続けることもできなかった。物理工学の例をとると、私がここで目撃したことは整備工が工学者に向かって、「ばかばかしい! フォードのエンジンはホンダのエンジンとは全く違っている!」と言い、それに対して工学者は「熱力学の法則を知っている限り、エンジン部品など関係ない。車は走る!」と応対しているようなものである。お互いがどの立場から見解を述べているかを理解し、協力できるようにすることが大切である。同じ層でも異なった観点から見るとかなり違って見えることがある。それは象がどのような形をしているかという議論にも似ている。正面から見ている者と後ろから見ている者では、象は全く違って見える。一旦それに気がつけば、完全な姿を理解する為には正面、上部、下部、二側面と後ろから見て、それから頭の中でその六面を総合して真の姿を理解する必要があることが分かる。これが本書の教育課程の提案するところである。

この目的の為に、一般教養を一つの授業にまとめることは役には立つが、一連の独立した分野を束ねる為には連続したまた意識的な努力をする必要がある。理想的には全ての個別の分野が形而上工学の一つの概念にまとまることが望ましい。私はそれを自分でやらなければならなかった。まず最初に私は政治学者としての観点がかった。それから音楽家としての観点を得た。その後物理工学者としての認識を得、最後にそれらが融合して形而上工学者としての観点を得るようになった。これらの観点を獲得し最終的に融合する為には、多くのエネルギーを費やす必要がある。毎週毎週授業に出ることはかなり大変なことである。全く知らない分野の最初の授業に出る時、私はいつも見慣れぬ環境に怖気づいて辞めたくなくなったものだった。例えば、化学の授業を取った時、試験管やブンゼンバーナーの並ぶ部屋に入って、こんなところで自分は何をやっているのだろうと思ったものだった。しかし、学期が終わる頃には、それは自分の一部となり、実験室にいる自分が想像できるようになった。それほどの努力をした後では、「化学なんて世界平和には関係ない」と言ってこれらの分野を無関係と切って捨てることは難しくなった。そういったとたんに3ヶ月以上の苦労は無駄になってしまうからだ。相当の努力をした時には、それが役に立ったと思いたいものである。これが自分のどの部分も無意味と思わなく

て済むよう自分の知っている全てのことをひとつの枠組みの中に組み入れたいという更なる動機となる。これを私は観点の自己内部化と呼んでいる。一旦観点の自己内部化を達成すれば、その観点を自分の一部と見るようになる。多数の観点を内部に持つことは有用である。物的世界では、物体の全体像をひとつの観点から見てつかむことは不可能である。歩き回っていろいろな点からみてそれを頭の中でつなぎ合わせて全体像を把握するのである。であるから、政治学のプロジェクトを音楽家としてはどう見えるか試してみたりする。究極的にはこれらの個別の自己内部化された観点はひとつの総合的観点となり、それが形而上工学者の観点となるのである。

これらの基本的授業を受けている間に全体像をより良く把握できるように学生はいくつかすべきことがある。第一に、一つの理論に固執して他の全てを攻撃するのではなく、個々の理論を中立的に検証する能力が必要である。私の場合、個々の理論を壊れたラジオと考えていた。それぞれを分解し、使える部品を取り出して、一つの使えるラジオを組み立て直すのである。そうすれば、二つか三つの壊れたラジオから一つの使えるラジオを作ることができる。もちろん言うのは簡単である。でもどうやって使える部品と使えない部品を見分けるのか？ ひとつの練習法として、疑問と理論の銀行口座を開くことがある。私は常に一連の疑問を保管しておいた。そして新しい理論を学んだ時にはいつも、これらの疑問にそれぞれの理論がどう対応するか考えて見た。例えば、どうしてヨーロッパとアジアでは協調の為の制度化の度合いが異なっているのかという疑問を持っていたとしよう。歴史的議論を用いてヨーロッパは何世紀にも渡って多国間で外交的関係を結んできたがアジアにはそれが無かったという答え方がある。また戦略的議論を用いて、アジアは中国とその他の共産国があり、それが状況を複雑化させ協調の為の制度化を難しくしているという答え方もある。ここでどちらかを選ばなければならないだろうか？ ヨーロッパは歴史的發展過程においてアジアよりも進んでいると議論することもできる。とすると、ヨーロッパはアジアがその制度化を進める際の良い教訓を提示してくれるだろう。その一方で、戦略的議論は現状を理解するためのスナップ写真を提供してくれる。ただ歴史的に時期が熟すまでじっと待っているわけには行かない。問題は日夜山積しているのであり、対処しなければならぬのである。物理工学を例にとれば、大気汚染を防ぐためには、電気自動車など新しい種類の自動車を発明する必要がある。しかしその間、多くのガソリン車が毎日維持さ

れなければならないのである。このように見ると、これらの議論は補完性があり、異なった目的でどちらも有用であることが分かる。

壊れていない部品を見分ける際のもう一つの重要なことはもう絶対そうするより他に方法がなくなるまで検証中の理論を廃棄しないことである。であるから他の理論に移る前に、この特定の理論がどこまで説明できるか調べる必要がある。言い換えるなら使えるだけ使ってそこから成長していくことが必要なのである。そうすれば、特定の理論がどこまで説明できて、何が説明できないのか完全に把握することができる。これは常に新しいことを提案するよう大変な圧力のかかっている現在の学会では特に難しいことである。学生はすぐに確立された理論の欠点を探す傾向があり、わずかな修正を提案するに留まってしまい、数年も立つと時代遅れとなってしまう。残念なことにこれらの修正はどんどん小規模なものになってきている。長い目で見たときには、確立された理論をできるだけ有効に使うとする態度の方がずっと生産的なのである。できるだけ使って、他にどうしようもなくなってもまだ問題が解けないときに初めて修正を試みるのが良い。そうすれば、これらの理論がどの程度の能力があるのか完全に把握できる。これらの理論が何十年も何世紀も生き残ったのにはそれなりの理由があるのである。もし真っ向から戦えば、勝てる可能性はほとんど無い。私の時代には絶対的優位性に対する相対的優位性、物力ではなく、脅威や意図に基づくバランスなど無数の修正が古典的バランスオブパワー論に対して提案されていたが、どれほどが生き延びたか分からない。それらは形而上工学のレベルでは全く有用性がない。

深さを理解することも全体像を把握する上では重要なことである。この点で一番重要なことは共通点を探すことである。一見して離れている分野で共通点を見つけられれば、それだけ深いことになる。絵画と音楽の間に何か共通点を見つけることができれば、それは極表面的なものよりは深いところにあることが分かる。もし科学と芸術などもっと離れた分野での共通点を見つけることができれば、それはさらに深い層からくる事象であることが分かる。分野が離れていればいるほど、共通点は抽象的なものとなる。したがって、真に深みを理解する為には、ただ単に一分野の専門家になればよいというものではない。これを習得するひとつの良い方法は一分野でまず専門家となり、それから他の分野を再度訪れてみることである。その時には、どこまで遊ばれるかについて一般教養で学んだ時よりもっとはっきりした感覚がえられるはずだ。このように、自分の専門外の分野の学習を一生涯続けることは大変重要なことである。私は政治学の副専攻である国際関係

から入り、別の副専攻である比較政治、さらに歴史へと拡大した。博士号を取得した後一般教養部門を再訪し、物理・化学・工学、芸術史、文学・詩、そして哲学へと広げた。また整備部門の感覚を掴むため、四ヶ月ほど自動車修理工の学校へ通った。学生中に専門課程で二年間経った後、事情があって、音楽の勉強をすることになったので、25%～30%を音楽の勉強に向けた。後になってみれば、これが段階的教育課程を避ける良い機会となった。

作曲の個人授業を受けている時、政治学の博士課程にいた時とよく似た経験をしたことがある。それは先にも述べた既存の規則や理論から成長していくということである。規則は基本的に役に立つようになってきていることを学んだ。規則とはいらだたしい物である。やりたいことをさせてくれない。四部和声の宿題をしていたとき、規則のせいでやりたいことができなかつた。そこであるとき、私の望む概念が表現できるようにわざと規則を破ってみたことがあった。先生にはそれは音楽性が劣っていると評価された。そのとき私は規則とは最低の音楽性を保証する為にあるのだと学んだ。規則に従えば、まず音楽的に最も劣ったものを排除できるのである。音楽的センスが無くても規則に従うだけで最低限の音楽性は達成できる。規則を破ることは簡単であるが、それと同時に音楽性を向上させることは極めて難しい。その為にはまず規則の中で可能な全ての可能性を探求しつくさなければならない。それは政治学でも同じことである。音楽と政治学の共通点をここで見つけたので、この発見はより深いところから来ている概念だと解る。

しかし、個々の分野をどこまで習得するべきだろうか？この問題に答えるために、まず異なったレベルの知識について述べる必要がある。モーツァルトの天才を例にとってこの点を考慮してみよう。第一レベルは基本的には聞きかじりの知識である。これは前章でも述べたが、昔CDを買ったとき、ある学者が、モーツァルトは次の音符が何であるべきかについて全ての可能性を熟知した上で最良のものを選ぶことができるので天才であると書いているのを読んだことがある。これで私は知識を得た。パーティでこの知識をひけらかすこともできる。しかしこのレベルの知識は、そのような知識が存在するという認識を広める役には立つが、その他の目的には役に立たない。より深いレベルの知識を得るためには、自分で音楽理論を勉強しなければならない。すると数年後には、基本的知識が得られ、その時点でもし誰かが、楽譜の分析を通して、それらの可能性が何であるか、そしてモーツァルトがなぜこれを選択したのかを説明してくれれば理解することができ

る。すなわちもし説明してもらえれば理解できることになる。これを受身の知識と呼ぶことにしよう。しかし、それでも自分で作曲したりするのはまだ難しい。最も深い知識が真の知識である。何年もかけて作曲の修練を積むと、ついに自分自身でモーツァルトの意図が理解できるようになる。この時点に達すると後は天の情けである。もって生まれた才能の分だけ能力を発揮することになる。自分はモーツァルトの生まれ変わりではないと悟ることになるかもしれないが、この時点では少なくとも能力のある作曲家として、その知識を使って実際自分の作品を作ることができる。

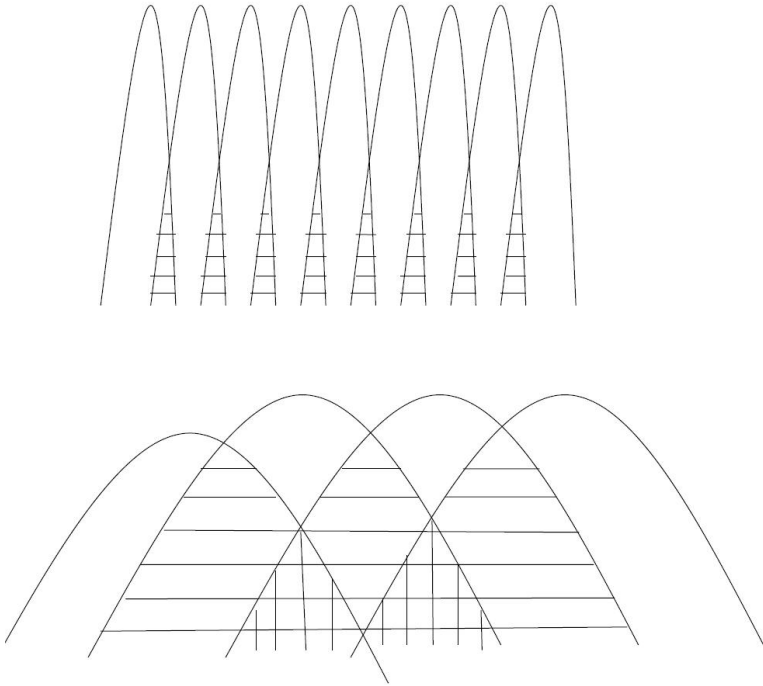
私はこの第二の受身の知識が形而上分野の統合に貴重な役割を果たすと信じるようになった。前にも述べたように、物理学と形而上学の分野の主な違いは規模にある。形而上工学では理論物理学とオペラは共に果たすべき重要な役割がある。しかし、物理学上の数式という共通の言語を持たない（将来は詩がこの役割を果たせるようになるかもしれないと前述したが。）ので、彼らが意思の疎通を行なうためにはお互いの分野の受身の知識を持っていることが最重要である。私は一般教養過程で与えられる第一レベルの知識はここでは役立たないと考えている。私は理論物理学者は詩を書き作曲をすることが必要であると考えている。もちろん何も優秀な作品である必要はないが、その過程と内容を知るとは意思疎通のため不可欠である。このように受身の知識の充実度が形而上工学の分野の統一性を決定づける。(図7-1C参照)

最後に形而上工学の規模の大きさはまたプロジェクトの期限にとっても問題となる。この点で適切な規模の感覚を身につける良い練習がある。三週間の冬休みにケンブリッジ中世史を読もうとしたことがあった。これは八巻からなる大作であったが、三週間で読み終えようと飛ばし読みをした。そこで気がついたことは、国王なり法王なりの歴史上の人物がほぼ一時間ごとに死去することであった。これが実際に形而上工学プロジェクトを行う際の感覚に近いものと思う。

このように、入門コースが学生にとって専門過程に進む前に全体像を把握する機会を与えることになると思うが、生涯を通じてこの種の学習を続けることは重要である。

図7-1

C.



(2) **芸術の修練:** 第五章で述べたように、芸術は感情の要素を持つ唯一の完全な形を持つ分野である。したがって、学生は少なくとも一つの芸術分野で実習を行なうことが不可欠である。物理工学のピラミッドは全体像を認識するには役に立つが形而上の要素が全く含まれていない。芸術史や芸術鑑賞の授業を取ることは役に立つが、学生は感情と知性の交流の問題に直接接することができない。

音楽の場合、形而上理論はその根底となる哲学から成っている。バッハの場合、その宗教的作品はキリスト教神学が元となっているし、その非宗教的作品の多くもゴールドベルグ変奏曲に見られるように深い哲学を反映したものである。形而上工学の層に存するのが音楽理論である。従ってより深い哲学的問題がどのように音楽に反映されてい

るかを知る為には音楽理論を勉強する必要がある。形而上製造・整備の層では、作曲家が音楽を作曲し、それは操作層で演奏される。したがって演奏準備の為ある曲がどのように形作られているかを知る為にはある程度の作曲経験も必要となる。もちろん超一流の作曲家や演奏家になる必要はないが、感情などの抽象的概念の取り扱いを理解する為にはこの全体の過程を経験する必要がある。上述の受身の知識を芸術の一分野で持つことは形而上工学者の最低条件である。舞台芸術と異なり、絵画や彫刻は操作層が存在しないかもしれない。しかし名作の模写をすることが演奏の代替となりえるかとも思う。芸術界では芸術部門として確立していないかもしれないが、形而上工学者の訓練としては同じ役割が果たせるのではないかと考える。

単に学術的に芸術を研究することは形而上工学にとっては有用な洞察をもたらさない。議論する為にはある程度実習を積む必要がある。感情の問題に純粹に知能的なアプローチを取る学術論文を見たことがあるが、それらのアプローチから得られる知識は形而上工学に適したものではない。例えばメイヤーは『*Emotion and Meaning in Music*（音楽における感情と意味）』を書いたが、そこから彼の一般的アプローチを示すため引用してみると以下ようになる。

そのような構成を作り出す鑑賞者の心は中立で、何の興味も無い白紙というわけではない。刺激域は鑑賞者の識別の習慣と知覚の学ばれた習慣である。そのような学習は鑑賞者の注目を全域のある部分に向けることにより、何を求めて、何を期待するかを条件づけ、それゆえ知覚された対象を修正する。「我々の関心の中心がそこに存在する、そして他の条件が同じであれば、ある像が浮かんでくるはずである。」学習はまた浮かんでくる像の質にも影響する。というのは「特定の部分域に勢力を与える注視は、それほどうまく表現されていないような表現でも増幅させることができる」からである。言い換えれば、修練を積んだ鑑賞者は、芸術の様式に基づいて特定の方法で注視することを学んでいるので、概してその表現を向上させる傾向があるだけでなく、一定の芸術様式の中である種の構成をより好む傾向がある。したがって、多声音楽だと思った音楽を聴いているときには、修練を積んだ鑑賞者はだいたい同様にうまく表現されているそれぞれ音声の同等性を強調する傾向がある。その反面斉奏音楽と思った音楽を聴いているときには鑑賞者はある一

連の音声を他の物より重視する傾向があり、この音声の後者の側面が実際よりもっと同一に思えるのである。<sup>20</sup>

ここでは参りましたといわんばかりの専門用語を披露しているが、彼は果たして心から人を動かすような音楽を作曲できるのだろうか？ 私にはそうは思えない。そうは思えないのは、この種のアプローチはあたかも小説を読んでいるときに文法を分析することによって感情を理解できるというような印象を受けるからである。英語はたいいていの場合形容詞は名詞の前に置かれる。これで今読んでいるものの感情的効果を理解することができるだろうか？ 文法は重要だと思うが、それは必要条件だと思う。すなわち、読書をしているときには、まず何が書かれているか理解できなければならない。であるから文法と単語の勉強をする必要がある。私自身も大部分理性的な教育を受けてきた為、この罣にはまる危険がある。例えば、作曲の個人授業を受けていたとき、学んだ作曲技術を感情表現の為どのように使ってよいか分からなかった。もし私がずっと作曲の勉強を続けたら、先生は「うーん。君の作品はいつもいろいろ工夫してあって面白いんだけど感動しないんだよねえ。」といわれるのではないかといつも感じていた。すなわち、私の作品は知能主導によるものとなっていたことであろう。

これと比較して、以下にロバート・シューマンが書いたベルリオーズの音楽に関しての批評を引用する。シューマンは自身が有能な作曲家であった。そして私には彼の随筆自体に顕著な感情の存在が感じられるのである。

このすばらしい作品の歴史的観点に於いて適切な位置を見出す為には単なる詩的思考以上のもの、すなわち、哲学的思考を持つ音楽家であるだけでなくまた、他の芸術の歴史についても熟知している者、多種の表現法の重要さと相互関係、そしてそれらの登場する順序の意義について熟考した者でなければならないことが私の目には明らかになった。であるから、個人として新しい世代の方向を採択し、全身全霊を込めてその中の最良のものを守り、しかしそれにもかかわらず、宮廷の前で、私的には喜んで許されるような時でさえ、彼の愛する音楽家を超えて従来の音楽慣習を破ることに躊躇しない音楽家の言葉を聞こう

<sup>20</sup> Leonard B. Meyer, *Emotion and Meaning in Music*, Chicago: University of Chicago Press, 1961, pp. 187–188.

ではないか。今回は確実に楽譜より多くの打ち砕くべき栄冠があるはずだ。．．．

この交響曲の和声の質に関しては、右も左も分からないが、それでもその目的に突進する18歳の不器用な作曲家を感じさせる。例えば、もしベルリオーズがト長調から嬰二長調に転調したければ、彼は何の転調の過程も経ずにそうする。そのような突飛な行動に頭をひねる人もいるかもしれない。パリで交響曲を聞いた音楽的に洗練されている人々はこの特定の時点ではできることは一つしかなく、そうするしかないと主張した。実際ある人はベルリオーズの音楽は、奇妙なことだが、「*Que cela est fort beau, quoique ce ne soit pas de la musique.*（それは大変美しいが音楽ではない）」と言った。多分ちょっと大げさかもしれないが考えるべき点がある。私はここで、そのような奇妙に工夫された楽節は概して例外的であることを付け加えておきたい。私としては、彼の和声は、この素材から作り出す組み合わせの多様性にも拘わらず、ある種の単純さがあり、確かにベートーベンの作品の中でより発展した形で見られる簡潔さがある。その反面、野蛮で平凡な和声にも出くわす。少なくとも古風な見解では欠点のあるように聞こえるものさえある。そして響きの悪い、耳障りな歪んだものもある。このような楽節が美しいとみなされるような日が絶対来ませんように！

それでもベルリオーズにはどこか奇妙なところがある。修練を積んだ和声家なら誰でもできるように何かを変えてみようとしたり修正しようとしたりしてみよう。そうすると比較したときに本当に鈍く聞こえる。強烈な若い精神の最初の音調はある種の個人的な不滅の活力がある。荒々しく聞こえるかもしれないが、それは批判を通じて現在受け入れられている芸術の慣習と一致させようといろいろ努力しない方がより効果的である。それは単に芸術的拘束に縛られるようなものなのである。規律を受け入れ、目的と過程を確立する為に自分自身の資源を使うところまでは至っていないが。彼はどうか嫌いなものは粗野に退け、好きな物は愛情を一杯に浴びせかける。そう、このような気性の激しい、その才能を既存のものさしで測れない若者には寛大さが必要である。粗野で奇妙なものとのバランスをと

る柔らかさや独特の美の多くを見逃さないようにしようではないか。<sup>21</sup>

これは長い引用文であるが、この批評自体が芸術的で詩的にさえ感じられ短く切ってしまうことができなかった。私の感情は彼の批評に引き込まれ、読むのを止めたくなかった。感情的に優れた音楽を作曲できると同時に理性的にそれらを論じることのできるシューマンの能力はまさに形而上工学者に最適なものである。これによって分かることは、形而上の分野では、理論は結果を創出するものでなければならないということである。したがって理論家は工学者の中からその回想として生まれてくることを望みたい。

最後に、芸術は形而上学の重要な問題点のいくつかを知覚するのに役立つ。例えば、私はモーツァルトから芸術と技巧の違いについて学んだ。モーツァルトほどの作曲家になると、一曲内で始めから終わりまで技術的に最も複雑な楽節で埋めることは簡単なことである。しかし楽譜の分析をしてみると、私でさえ分かるような単純な部分もある。もちろんそこから突然全く何が起きているかわからないところに連れて行かれるのだが。でもそれはいったいどうしてなのだろう？ これて学んだことは、最高の技巧に加えて、モーツァルトには最高の感情的効果を得る為にはそれらの技巧をいつどのように使うべきかという芸術の才があることを示しているということであった。

ここでの唯一の例外はヨハン・セバスチャン・バッハである。彼の楽譜は私には全く理解不可能である。音楽理論の授業で、8小節から10小節程度の聖歌の分析をしたことがあるが、個々の音符があまりにも重みがあり、しばしば半分分析するのに一時間かかったことがあった。この止まることの無い技巧の陳列にもかかわらず、バッハは最も深い感情的効果を挙げることができる。

私は長い間技巧と芸術がどう繋がっているのかについて見極めようと苦労して来た。子供の頃ピアノのレッスンを受け、成人として音楽理論をさまざまな音楽家から学んだ。練習している曲を真に理解する為には理論を知る必要があると考えたのである。そこで、理論を学んで楽譜の分析をしたが、常にそれをどう演奏に活用するかという問題にぶつかってしまって答えを見つけることができなかった。ある日、バッハの四声聖歌の勉強をしている時、突然分析の結果は芸術的に解釈される必要があることに気がついた。つまり分析した後、なぜバッ

<sup>21</sup> Robert Schumann, *Schumann on Music: A Selection from the Writings*, (Trans. and ed. by Henry Pleasants), New York, Dover Publications, 1965, pp. 78-81.

ハがそうしたのかと問う必要があるのである。この「なぜ」という問題が芸術の部門に足を踏み入れる足がかりとなるのである。バッハがしたことは全て歌詞の感情的効果を高めるために成されているはずである。と思ったとたん、これらの数字による分析結果が芸術的意味を持つようになった。これは現在の教育システムの技巧と芸術の狭間をつなぐのに大変有効な訓練法だと思う。おそらく科学専攻の学生が教科書の各章の終わりの問題に取り組むのと似ているだろう。

最も有効な方法はまず歌詞を見てどのような感情が表現されているかを確認することから始めることだと思う。バッハもそこから出発したに違いないからだ。もし作曲家であるなら、自分で音楽をつけてみて、それからバッハの物と比べて見ると良いだろう。もし素人なら、そのままバッハの楽譜を分析してみてどのようにバッハがこれらの感情を表現しているか探求してみると良いだろう。そうすることによって、専門家としてまたは素人としてでも、バッハがどのようにその技巧を駆使してそこまで深く感情に訴える音楽を作ることができたのかその芸術を目の当たりにすることができるだろう。

芸術なしでは、作曲家の作品は全て作曲家の技巧を見せびらかすだけになってしまう。このような作品は時代とともに消え去ってしまう。私はいつも音楽というのはそれなしでは行けないある感情の場所に連れて行ってくれる輸送機関のように考えていた。ポップ音楽は自家用車のようなもので、海岸へ行って楽しい思いをするのに使う。バッハの音楽はジェット機のようなもので、北歐へ行ってオーロラを見て感動するのに使う。

もし誰かが自分の車を見せびらかそうとしても私は別に感動しない。クラシック音楽はこの道を進んでいるようである。私が音楽理論の授業を受けていた時、先生が楽器演奏の指導者が感情の深さを育むような科目に反対して、テクニックを向上させることだけに執心しているという嘆いておられたのを覚えている。このような方法で訓練を受けた演奏者は聴衆を感情のいろいろな場所へ連れて行くことはできず、ただ自分のテクニックを見せびらかすだけに終わる。聴衆にある種の感情を抱かせるにはまず自分が感じていなければならない。もし作曲家が意図した感情に到達したことが無ければ、どうやって聴衆を連れて行くことができるだろうか？

芸術以外の分野にもまたこの教訓は当てはまる。近年大半の学者は出版を自己宣伝の道具と見ている。その結果、これらの研究は自己の技術を見せびらかすだけのものに近い。彼らには今取り扱っている問題の最も効果的な解決法を見つける為にはどの技術を用いるべきかと

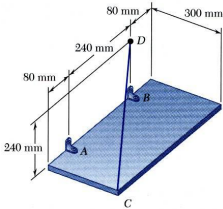
ということが分かっていないようである。であるから、過剰な技術を単純な問題に当てはめ、非効率な結果をもたらしている研究を目にすることがある。たとえば、このような研究がある。

本研究はフェティシズムと呼ばれる行動様式の四つの特徴—唯物性、歴史性、効果と具体化—を採用し核のフェティシズムの理論を提示する。これらの範疇を核のフェティシズムに当てはめることによって、本研究者は核兵器は他のフェティシズムの対象物と一貫性があると同時に差異もある新たな社会形態を代表することを示す。．．．マルクスは貨幣を商品フェティシズムの成熟した表現であると指定した。本研究者は核兵器を力のフェティシズムの成熟した表現であると指定する。このように核兵器は国際社会において、力の貨幣の機能を果たす。．．．この核兵器と人類の行動間の関係の再解釈から得られる政策への当初の影響を提示し、核兵器の非フェティシズム化に使用する。

しかし最終的に言っていることは平和時には軍縮傾向が起こるといっているに過ぎず、これは私にとっては芸術が必要としないところ、に技巧を過度に当てはめる例であり、不必要に問題を複雑にしている。先に述べた私の架空の音楽の先生の「うーん。君の作品はいつもいろいろ工夫してあって面白いんだけど感動しないんだよねえ。」という言葉が聞こえるようである。この論文は不必要な専門用語を避けて、適切な範囲内で書かれた方が良いものとなったであろう。『平和時には軍縮傾向が起こるが、その経過は既得権益などによって妨げられることも多い。本論文においてはオバマ大統領の核軍縮政策に於いてのこれらの障害を指摘し、それらがどのように克服されたかを記録する』といった具合に。

(3) **実体験:** 物理か化学の授業では、まず数式や原則を学び、その直後に宿題が出る。各章の最後の問題を解かなければならない。そのときに愕然とするのである、少なくとも私は愕然とした。例えば、 $M_0 = r \times F$  という式を習う。それだけである。と突然「長方形の板が A と B 地点においてブラケットで、また針金 CD によって支えられている。針金の張力が 200N であるとき、C において針金が与える力の A で

のモーメントを求めよ。」<sup>22</sup>というような問題に出くわすのである。すなわち単純な数式を黒板から写していたと思うと次の瞬間にはこのような複雑な図をみせられ、先生がこれらはどういうわけか関連しているというのである。この二者の間の関連が見られるようになるまでには問題をたくさん解くしかない。やっと出来るようになったと思うと今度は実験が来る。



解答

方程式より

$$\mathbf{M}_A = \mathbf{r}_{CA} \times \mathbf{F} \tag{1}$$

$\mathbf{r}_{CA}$  は  $C$  から  $A$  のベクトルであるので

$$\mathbf{r}_{CA} = \overrightarrow{AC} = (0.3 \text{ m})\mathbf{i} + (0.08 \text{ m})\mathbf{k} \tag{2}$$

$\mathbf{F}$  は  $CD$  に沿って、大きさは  $200\text{-N}$  である。ここで  $\mathbf{A} =$

$\overrightarrow{CD}/CD$  であるので

$$\mathbf{F} = F\lambda = (200\text{N})\overrightarrow{CD}/CD \tag{3}$$

ここでベクトル  $\overrightarrow{CD}$  を長方形の成分に導入し

$$\overrightarrow{CD} = -(0.3 \text{ m})\mathbf{i} + (0.24 \text{ m})\mathbf{j} - (0.32 \text{ m})\mathbf{k} \quad CD = 0.50 \text{ m}$$

これを方程式 (3) に代入し

$$\begin{aligned} \mathbf{F} &= 200\text{N}/0.50\text{m}[-(0.3\text{m})\mathbf{i} + (0.24\text{m})\mathbf{j} - (0.32\text{m})\mathbf{k}] \\ &= -(120\text{N})\mathbf{i} + (96\text{N})\mathbf{j} - (128\text{N})\mathbf{k} \end{aligned} \tag{4}$$

ここで (2) と (4) を (1) に代入し

Here,	$\mathbf{i} \times \mathbf{i} = \mathbf{0}$	$\mathbf{j} \times \mathbf{i} = -\mathbf{k}$	$\mathbf{k} \times \mathbf{i} = \mathbf{j}$
	$\mathbf{i} \times \mathbf{j} = \mathbf{k}$	$\mathbf{j} \times \mathbf{j} = \mathbf{0}$	$\mathbf{k} \times \mathbf{j} = -\mathbf{i}$
	$\mathbf{i} \times \mathbf{k} = -\mathbf{j}$	$\mathbf{j} \times \mathbf{k} = \mathbf{i}$	$\mathbf{k} \times \mathbf{k} = \mathbf{0}$

故に

<sup>22</sup> Ferdinand P. Beer, et. al. *Vector Mechanics for Engineers: Statics and Dynamics [in SI Units]*, New Delhi: Tata McGraw-Hill Publishing Company Limited, 2005, p. 83.

$$\begin{aligned} \mathbf{M}_A &= \mathbf{r}_{CA} \times \mathbf{F} = (0.3\mathbf{i} + 0.08\mathbf{k}) \times (-120\mathbf{i} + 96\mathbf{j} - 128\mathbf{k}) \\ &= (0.3)(96)\mathbf{k} + (0.3)(-128)(-\mathbf{j}) + (0.08)(-120)\mathbf{j} + (0.08)(96)(-\mathbf{i}) \end{aligned}$$

$$\mathbf{M}_A = -(7.68\text{N}\cdot\text{m})\mathbf{i} + (28.8\text{N}\cdot\text{m})\mathbf{j} + (28.8\text{N}\cdot\text{m})\mathbf{k}$$

科学の授業を受けた後で宗教哲学の授業を受ける機会があった。これはキリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教と道教の教義を学ぶ標準的授業であったが、物理の授業を取った後では奇妙に思えた。そこでは章末の問題がない。実験がない。個々の宗教の主要点を暗記して試験で繰り返すだけである。教授は知識豊富であったが、それは人から人へと受け渡される聞きかじりの知識であった。彼は四つのヨガの形態や仏教の八正道がなんであるかすら述べるのができたが、受身の知識も真の知識もないように見えた。学生は答えを求めていた。一人の学生は麻薬に走ったがそこから立ち直り、授業中にその問題について哲学的解答を得ようと質問したが、教授は答えることができなかった。これを物理の授業に当てはめると、その分野に存在する全ての数式を知っているが、これらの数式を工学上の問題に当てはめることのできない教授ということになるだろう。学生は熱力学が自動車のエンジンでどう使われているかなど工学上の質問を持ちかけるが教授には答えることができない。もし科学の授業がこのような形で行なわれていて、授業内容が全て数式を暗記することだけに向けられていたなら、これらの授業は無意味とみなされるだろう。授業で数式を覚えるだけでは物理工学者は訓練できないのと同様に、応用が教えられなければ形而上工学者も訓練できない。科学や工学の授業では、数式を学ぶことは過程の極一部であり、それは章末の問題を解き、それから実験を行なうことによって真の知識となるよう広範囲にわたる訓練が行なわれる。

それでは形而上工学部門での実験とは何であろうか？ これがおそらく形而上工学者の訓練の上で最大の問題となるであろう。それは実体験を通じてなされなければならない。訓練生は数年間実生活で指導的立場に立ち、実体験を積むことが必要と思う。私の場合、教師として40～50名の学生の学級を担当した。これは多数の生徒を個人教授する学級であった。つまり学生は個々に自分の課題を果たし、終わったときに単位を貰うというものである。もし課題が解けなければ質問に来る。働いている間にいくつかマクロ現象と関連のある問題が学級内にあることに気がつくようになり、この仕事を科学の授業における実験と同じものであると理解するようになった。私の課題は本書で述

べた原則を使ってこれらの学生の間で理想主義社会を築くことであった。

まず最初に、どんな環境に置かれても腐敗しない極少数の学生がいる。彼らは生まれつきの理想主義者である。こういう学生に対してはほとんどすることは無い。その反対に欲しい物の為にはどんなことでもするというまた極少数の学生がいる。彼らは体制を利用して欲しい物を得ることを当たり前と考えている。搾取するだけの能力があるならそれは特権であると考えているのである。彼らはもしカンニングをして捕まったら次はもっとうまくカンニングしなければと考えるのである。これを変えることはほとんど不可能である。彼らに対してはただ抑えを効かせるしかない。

大部分の学生はその間にいてどちらにでも傾く可能性がある。これらが教師として集中しなければならぬグループである。教師の指導力によっては彼らは理想主義に参加するが、教師の怠慢によっては現実主義社会に合流する。彼らは純朴理想主義者であり、もし払う犠牲がそれほど高くなければ正しいことをする。したがって、理想主義社会に留まれるような動機の構成を確立することが不可欠である。この点でいくつかのことを試してみた。

- (1) 最も大切なことは自己の正当性を維持することである。学生はもし教師の正当性を認めなければ指示には従わない。正当性を維持する為に最も重要なことは自己を教室内では最も厳しい規律で統制することである。学生をある規律で縛りながら自分は例外とすると、だれもその規律には従わない。誰よりも高い規律で自分を抑制していることを示すことによって、学生がその正当性を認めるようになる。
- (2) 一人一人が少しの犠牲を払うことによって、結局全員が体制から恩恵を得るが、自分だけ得をしようとする最終的には自分も含めて全員が被害を受けることになるのだという理想主義の教義を理解させる。この教義に矛盾するような規則は採用してはならない。執行の重荷を減らすために、学生が何を求められているかをはっきり知ることが重要である。大半の学生はもし何が期待されているか知っていて、それを納得がいくものだと認めれば、それに従う。
- (3) 自由の真の意味を理解させる。自由とは何でも好き勝手にやりたいことをやれるという意味ではない。自由とは

自己規制をする権利のことである。したがってもし責任を持って行動できなければ自由は取り上げられる。どんな共同社会においても個人がこの点を理解することが不可欠である。

- (4) できる限り、不正行為を取り締まることが重要である。もし学生が他の学生が不正行為を行なっても何の処罰もされないでいるのを見続けると、最後には体制への信頼を失って、自分たちも不正を行なうようになる。不正行為を行なってそこから利を得ている人々を前にすると正しいことを行なうのが馬鹿らしく見えてくるのである。
- (5) 学生ができる以上のことを要求しない。その代わりに、自分の能力内で全力を尽くすことを要求する。もし実力以上のことを要求し続けると最終的には学生はプレッシャーから不正行為を働くようになる。全力を尽くしている学生に対しては、たとえ既成の基準には達していなくても十分に褒め称える。そうすると、彼らは理想主義者の領域に留まりできる限りの貢献をするようになる。苦勞している学生には「才能は天から与えられたものでどうしようもないけれど、全力を尽くすことは君の責任だよ。それに基づいて成績を決めさせてもらうからね。」と言う。
- (6) 教師にこびへつらっても体制から個人的利益を得る為の特権は得られないことを明確にする。一方、体制に忠実な生徒は十分に報いられるようにする。生徒が教師を感心させようとスタンドプレーに走らなくて良いように、生徒一人一人をしっかり見つめることが大切。
- (7) 学生間で誤った助け合い精神が見られる。能力のある者が、苦勞している学生に答案を写させてやるのである。しかし、これは最終的には助けにならない。また、学級での規準が下がることによって最終的には全体が被害を被ることとなる。この点を理解させることが必要である。その為には、規準に達しているかどうかによって判断するのではなく、どれだけ努力しているかによって判断することが役に立つ。合格するかどうかという心配をしなくても全力を尽くしている限り何も心配しなくても良いと知ることによって安心して勉学に励むことができるのである。

紙の上ではこれらはごく当たり前のことで書きとめる必要さえないかのようにも見えるが、私が忌み嫌っていた化学の実験のように、起こるべきことは実験室ではなかなか起こらないのである。50人ほどしかない集団でも理想主義社会を達成することは極めて難しい。化学の実験のように、最後に白い沈殿物を発見すべきところで黒い物を発見する。一体何が起こったんだ？どこで間違えたんだ？毎日私は出すべき結果が出せるよう苦闘している。最も難しいことのひとつは規律と思いやりのバランスを取ることである。どんなことをしてでも自分の思い通りにしようとする学生と、どこまで規律を曲げることができるか試してみる学生に取り囲まれているうちに、徐々に決意が鈍ってきた。肉体的疲労が精神的にも不健康な状態を招き、回りを全て疑うようになった。やがて必要な証拠を固めることなく学生を処罰するようになると思う。そしてついには人を無実を証明するまでは有罪であると見る情けの無い専制君主になってしまうことだろう。

その反面で、もう疲れ果てて、簡単な道を選びたくもなった。あるとき、私の助手たちが授業中におしゃべりをするようになった。私は学生に授業中のおしゃべりを禁止しているので、もし彼らをそのままにしておくと教師の学生に対する正当性が失われると何度も説明した。それはえこひいきになるからだ。最後には、怒鳴りつけなければならなくなり、それに対して彼らは不満な態度を示すようになった。ここで本当なら、次には書面で警告を出し、それから解任すべきであったのだが、助手を失い全ての仕事を自分でするのがいやだった。そこで理由をつけて一人を他の部署に転任させた。このようなやり方は悪環境を作り出す。というのはもしこのことが知れたら、助手は二度と私を信用しなくなるからだ。わがままを聞いておいて裏工作で処罰するというのは最悪の方法である。どうしてプラトンが哲学王は交代して支配に当たるべきだといっているのかが分かった。公正で強くあるためには息を抜くことが必要だ。

教室では私は哲学王の役割を演じるが、この職はまたより規模の大きい組織の一部でもある。そこでは私は形而上工学のピラミッドの操作員の役割を演じることとなる。そこでは、教育委員会が工学者、学校長が整備士、そして教員が操作員となる。この設定で、私は純朴理想主義者が指導的立場に就いた場合何が起こるかを経験することとなった。哲学王と反対に、私はこれを人民王と呼ぶこととする。人民王は純朴理想主義者である。彼は善意はあるのだが、知能的にも感情的にも弱く、自分の必要が全て満たされている時にしか全体に奉仕することができない。国王に要求されているように部下の背負えない重責

を自分で吸収するのではなく、苦難に直面したとたんにその負担を下層に転嫁する。私は哲学王と人民王とその運営する組織に大変な違いがあることを学んだ。以下にまず私の経験を要約し、それから引き出した一般論を提示する。

教職に就いていた時、教育規準が上げられた。聞くところによるとこれは州立大学の関係者が入学してくる学生の学力が低いので大学教育についていけるだけの学力を高校でつけるようにとの要請から発したとのことであった。このような狭い焦点が全制度に国家指導レベルで当てはめられたとき、その負の影響はずっと下方にまで広がる。私はこれを目撃する機会を持つことができた。

主流社会ではこの規準は紙の上ではよく見えるが、現実性が全く無い。大学レベルでの学力規準を上げることに問題はないが、事実では全ての高校生が大学に行ったりプロの職業家になるわけではない。教師や学生がどんなに頑張っても少なくとも下位30%位の学生はこの規準を満たすことはできないだろう。ここで問題は、高卒資格が、修理工や配管工などほとんどの職業学校の入学条件となっていることである。したがって、一旦学生が高卒資格を得られなければ、これらの訓練を受けることもできず、これらの職業がそのような高い学力を必要としないにもかかわらず、仕事に就くことができず永久に最低賃金の職に就かなければならなくなる。この規準では毎年このように体制から迫害された若い学生層が多数創出されることになる。このような大きな潜在的に爆発的な社会層を持つことが体制に与える脅威は深刻である。このような勢力は権力掌握を狙う現実主義者にとって格好の道具となる。インターネットを通じて国内外のテロ集団が腐敗した現存体制を打ち崩せと勧誘を行うこともあるだろう。これらは最悪の場合組織化される恐れさえある。また、民主社会では腐敗した勢力に対抗する救世主として立候補し、彼らの支持を集めようとすることもあるだろう。

このような無謀な方針が上から下りてきたとき、指導層の次のレベルが、この場合は教育委員長であるが、再考するよう送り返すか、このレベルでの修正を行なう責任がある。この場合、教育委員会は基本的学力を習得した際、学生に訓練証明書などを出し、職業学校に通えるようにするなどの方針を出すことができたと思う。しかしそのような方針は一切出されなかった。

成人学校への影響に移って、この規準では英会話クラスに入った学生のうち極わずかししか高卒の資格が得られなくなる。私の理解するところでは成人学校の使命は移民学生がまず十分な英語を習得し、それ

から自立できるようになるため職業訓練を受けるにふさわしい基本学力をつけさせることである。ここでは学生の多くは自国で小学校さえ出ていないものも多く、そういうものが数年英会話を勉強したあとでいきなり高校レベルの学習をするのである。一旦ここまで後れを取ると追いつくことはまず不可能である。したがって、多くの一世たちは自分を犠牲にして、子供を大学にやって彼らが主流社会でキャリアを追求できるように一生懸命働くのである。今彼らのアメリカ社会に2～3世代かけて合流していく為の基本条件である家族を支える手段が脅かされている。

この方針が下りてきたとき、成人学校の指導者層はうちの学生には無関係な規準でまた学生を傷つけるとしてこれを拒否し、本校の学生に見合う規準を達成した者には資格を発行し続ける旨宣言すべきであった。もし大学がこの規準を受け入れられないとするのであれば、それは彼らの権利である。どうしても拒否できないのであれば、指導者層は新たな訓練免状を作り、州にこれを職業学校が入学条件として受け入れるように歎願すべきである。また地元のビジネス界に接触し、これを特定の未熟練の職種では高卒資格の代わりに受け入れるよう交渉するなどの措置をとるべきである。

しかし実際はその代わりに彼らは簡単な解決法を求めた。この規準ではいずれ移民学生の数が減少すると読んだようで、学校生存の為、指導者層はこの学生層を切り捨て、その焦点をこの規準を達成することができる可能性のより高い主流高校の高校生と高校未卒業生に切り替えているようである。例えば、教育手段を教室からオンラインに切り替えることが考慮されていると聞いたが、私の経験では多くの移民学生はコンピューターに弱く、PCを持っていない割合が一番高いのもこの学生層ではないかと思積もっている。であるから、多くの移民学生がこの指導法についていけない可能性が高い。この方針を取るとは短期的には学生数を保つのに役立つかもしれないが、長期的には独立の成人学校の存在理由を失うことになるだろう。これに対して、もしその基盤をしっかりと守れば、潜在的反体制勢力を吸収する社会にとってかけがえの無い安全弁を提供することができるだろう。

さて、指導者層が学生やプログラムを傷つけている場合には、その擁護の責任は学校長に移る。学生を守り、長期の安定性を守るために、学校長はこの方針に声高に反対し、全校にわたる調査を行い、どの程度の学生たちが大学や専門職に興味があるのかを見極め、またオンライン授業を受けるだけのコンピューター準備がどの程度整っているかを見極めることが必要であったろう。

しかしその代わりに学校長も簡単な解決法を求めた。それは数字を操って結果が出ているように見せかけようとするものであった。例えば、合格率を人工的に上げるために、我々は、たとえ生徒が受けたいといっても、絶対に受かる見込みのある生徒しか卒業試験を受けさせてはいけないという命令を受けた。これは根本的な問題の解決にならないばかりか生徒を傷つけることにもなる。というのは学生が助言に基づいて自分の意思で決定する権利を奪い、また実際の試験を受けることによって得られる学習機会を奪うことになるからである。学生の福祉を無視した政策は最終的には学校に有害な結果をもたらす。暫くすると、学生たちは自分で高校科目に進んでも無駄なことだと悟り学校を去っていくことであろう。

この経験から得た一般論を以下に提示する。

組織を立ち上げる際、哲学王は自分の支配する共同体が何を必要とし、彼らの人民がどれほどの能力があるかを知り尽くしている。だから、彼らはその組織を人民の根本的必要が満たされるように設計し、組織建設に際しては、彼らの計画は現実的である。それから彼らは組織建設と維持に関わる労力を個々の人民の能力に応じて分配し、それらの責務が果たせるだけの資源を人民に与える。より強い一員にはより重い責務が課せられる、当然であるが、最強者として、哲学王は最も重責を背負う。全員が恩恵を得るような組織を維持する為に、哲学王は彼ら自身に個人的忠誠心を要求するのではなく、明確な戦略的方向性を示し、個人がそれに貢献するよう呼びかけることによって、組織に対する忠誠心を育てようとする。彼らはまた、組織の底部から最上部の自分のところまで途絶えることの無いフィードバック制度を設定し、常に変動する状況に対処し、潜在的問題をできるだけ早い段階で感知するようにする。

このように建設された安定した組織は危機を経験することは極めてまれであるが、それでも危機が起こった場合、哲学王は創造的解決法を提示することができる。その際、彼らは自分が共同体の全ての人民の福祉に責任があることを理解している。彼らは最初に犠牲を払い、全員が救済され自分が最後となるまで救われないことを知っている。彼らが最大の犠牲を払っていることを示すことによって、哲学王はその人民に個人の利害を差し置いて、組織の回復に集中するよう人民を説得する。

これに反して、人民王は堅固とした組織を建設し、維持する能力が無い。彼らは人民の必要とするものやその能力に関して全く知識が無い。組織を設計するに当たって、彼らは何が現実的で何が遂行不可能

であるかに関して全く知識が無い。そして彼らの設計する組織は人民の根本的福祉に無関係であるか、時には有害でさえある。またその労力を非現実的な割合で分配し、その労力遂行の為に必要な資源を供給することもしない。彼らは戦略的方向性も持たず、ただ日夜変化する目前の状況に応じて政策を変更する。また悪い知らせを忌み嫌い、人民が憂慮や問題点を提示するのを喜ばない。これがフィードバック体制を麻痺させ、彼らが組織の健全を維持する能力をさらに低下させる。また、人民王は彼らに取り入って個人的利益を得ようとする者の策略によく引っかかる。彼らは悪い知らせを持ってくる人民を遠のけ、それがどんなに非現実的であっても聞きたいことを言ってくれる連中を取り巻きとして昇進させる。時が経つにつれ、彼らの支配する組織は矛盾に満ち、繰り返し危機を経験するようになる。

そのような危機に直面し、人民王は創造的解決法を提供することができず、根本的に問題を解決するのではなく、簡単な解決法を探そうとする。この簡単な解決法は何の資源も与えずただ部下に問題を解決せよと命令することや、所属する人々の福祉に関係なく、問題のある部門を切り捨ててしまうことから、根本的問題解決には意味の無い重箱の隅をつつくような些細なことに関与してくるなどに及ぶ。全く不可能な状況下で結果を出さなければならない彼らの部下は見せ掛けだけを整えて、偽装工作された資料を示し任務が完了したと報告するようになる。その際部下は必要とみなせば、元々ある一定の人民に奉仕するために作られたプログラムにそれらの人々が参加することを禁止して統計値を自分たちに有利に見せようとするなど他の共同体の一員を傷つけることもいとわない。しかし問題が表面化すると、彼らはなぜもっと早く報告しなかったのだと引責させられるのである。このように部下は『やったらやっただで責められる。やらなかったらやらなかったで責められる』というジレンマに陥るのである。また、聞きたいことを言って人民王に取り入り、個人的利益を得ようとするものがさらに重用されることとなる。この時点で組織は一貫性を失い、また野心家の個人的利害によって乗っ取られていることになるかもしれない。そうして危機がさらに悪化する。

一旦このような傾向が始まると、それは命令系統を通してあつという間に底部にまで広まる。工学上の問題は未解決のまま整備士に受け継がれ、整備士はその問題を未解決のまま操作員に引き渡すのである。そうなると、このような組織を救うことはほとんど不可能となる。というのはこの連鎖反応を途中で方向転換させることは大変難しいのである。一番上に立つ者は知能的にも感情的にも最も強い者であるはず

であるから、中間部となるとより弱者が職を占めていることになる。ということはより強い者が対処できなかった問題を今より弱者が直面しているわけであるから、ここで問題が解決されるとは考え難い。最低部に到達する頃には問題はこのレベルで解決するには大きすぎるものとなっている。だから人々は体制に信頼を失い、自分で自分を守るしかないと考えようになる。この時点では人民王の正当性は失われている。支配者と人民の間の絆も切れてしまい、全員が自己保身に走るようになる。これは旧約聖書 Judges 21:25 の「この頃イスラエルには王は存在しなかった。みんな自分の目に正しいと映ることをするようになった。」という状態に似ている。

私の職場で、厳しい財政危機が起こり、事態は悪化するばかりであった。あたかも民主主義崩壊のミクロ版を目撃しているかのように思えた。財政危機に直面して、就任直後の教育長が、30万人の移民の学生を教育する私の所属する部門を廃止すると発表した。自分で身を守るしかなくなった教員と学生は大規模な抗議運動を組織した。その運動中はみんなが一丸となって、部分的な成功を収めた。部門は存続となったが、半分以上の教員が職を失った。それから残った者と職を失った者の間に確執ができた。それは縮小していくパイの取り分を巡っての争いのように見えた。社会の一部が縮小するパイに直面したとき、彼らは抗議運動を起こす。我々からは取るなど。しかしパイがこれ以上縮小するのを食い止めたり、反対により大きくなるような方法を探したりするようなことはない。抗議運動の間は人々は統一されるが、パイが縮小し続けるので根本的解決にはならない。そこで、その社会の一部はどんどんさらに小さな部分に分割していき、さらに小さなパイの部分を探して争うようになり、最後には個人の個人に対する闘争となって行くのである。

このような状況下で、個人が操作の段階でできることで方向を変えることができることは何も無い。それではこの時点での形而上工学者の役割は一体何なのであろう？結論として私は、どんなに現状が悪化して、どのように努力しても何の結果も得られなくなっても、自分の義務だけは果たさなければならないと思うようになった。しかし同時に、組織全体を救う為に、機能停止した部門を引き継いで自分の責任以外の役割まで背負い込むのも個人には無理だと悟った。私の場合、残って体制に迎合するか、残って戦うか辞職するという三つの選択肢があった。第一の選択肢は受け入れられなかった。あとの二つから選択するのは難しかった。どちらをとっても何も変わらないことは明らかであった。最後には、テストパイロットは問題をエンジニアに報告

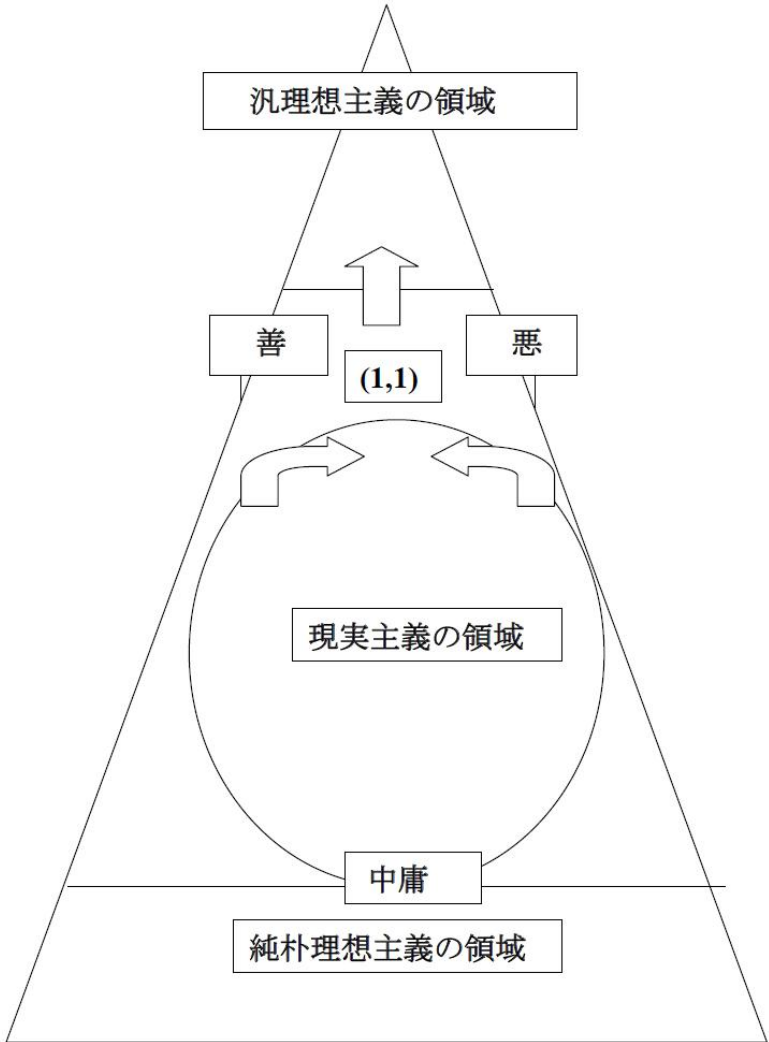
することしかできないように、私も問題を上部に通告することしかできないと感じ、全く無視されることを覚悟の上で、州の指導者層に上るまで問題通告を郵送した。より強い人間なら残って戦うこともできたと思うが、私は最終的に圧力に負けて体勢に迎合してしまうことを恐れた。

このように、訓練生は社会の縮図となる組織に於いて汎理想主義指導者として4～5年にわたって実体験を積むのが好ましい。

**感情の訓練：**プラトンは物理における実験のように哲学王になる為の訓練を受けられる人工的環境がありえると信じた。私の信じるころでは形而上の分野では実験室は人生そのものである。訓練生は全て純朴理想主義者から出発する。それは図4-7に示される底辺である。そしてそこから上方の汎理想主義者の領土へと渡っていくのである。底辺からの距離が延びるにつれて、訓練生はより強くならなければならない。強靱な性格を形成するためには、体制にただ従うのではなく、各自が保身と自己犠牲の間のジレンマに直面し、自己の栄光への欲望を克服しなければならない。始めはジレンマは良い成績を取る為にカンニングをするなどの小さなことであろう。成長するにつれて、会社で歳入を増やす為、仕事を失うかもしれないにもかかわらず不正行為を働くことを拒否するなどジレンマは大きくなるだろう。訓練生が小さなジレンマを克服していく度に、より困難なジレンマに直面する用意ができていくのである。ここではどこで訓練が終わって、どこから実際の責務が始まるかについて明確な境界線はない。それは各自がどこまでいけるかという問題である。精神的に腐敗し理想主義を捨てる者も多いだろう。現代社会では彼らはそれを『大人になるということ』と呼ぶ。反対に理想主義者の教義遂行の為に命を犠牲にしなければならない者さえ出てくるだろう。

この旅路は私には図7-2に示すように形而上回路を通り抜けるという形で行なわれ、中間から始まった。大部分の人は一生ここに留まる。例えばアリストテレスは有名な中庸の法則で人々にここに留まることを奨励している。この部分は安定していて安全である。しかし人の意識の次の段階へ繋がる突破口はもたらされない。したがって、形而上工学者は善の極地へと向かわなければならないのである。中間点から離れるほど強くならなければならない。

図7-2  
感情の訓練



二つの理由からこの時点で形而上工学者がこの過程を経るための総合的訓練法を提示することは不可能である。第一にそれぞれの歴史的状況は異なりそれが旅路を異なったものとするからである。私には衆愚政治化初期に行った自分自身の訓練経験を主観的に提示することしかできない。この特定の過程では、旅路は工学者の疎外化という形を取り、私は社会で中程度の疎外を被った。しかし衆愚政治がより進んだ中で自己訓練を行なおうとすれば、その犠牲はずっと大きいだろう。また、もし理想主義の台頭の最中に訓練を行なうとすれば、訓練課程は完全に異なったものとなるであろう。理想主義は十分に支持を受けているので、直面すべき敵は誘惑や権力乱用といった自分自身に関するものとなるかもしれない。第二に、感情の問題を探求する為には言語は適切ではない。適切な文学的訓練を受けなかった私は、訓練生が通過する道を何とか知的方法で叙述する方法しか持たず、適切な能力でこの過程を通過中の訓練生が感じる感情を表現することができない。

概要を伝える為に歴史上の天才の力を借りることはできる。私が最も近いと感じられたのはダンテの『神曲』であった。例えば地獄の門の上に刻まれた以下に掲げる詩は訓練生が純朴理想主義者の領域を旅立ち、現実主義者の領域に足を踏み入れる時の送り言葉に適切であろう。

我をくぐりて、汝らは入る なげきの町に  
 われをくぐりて、汝らは入る 永劫の苦患に  
 われをくぐりて、汝らは入る ほろびの民に  
 正義 高きにいますわが創造主を動かす  
 われを造りしは 聖なる力  
 いと高さ知恵 また第一の愛  
 永遠のほか 我より先に  
 造られしもの無し われは永遠と共に立つ  
 一切の望みは捨てよ 汝ら われをくぐる者<sup>23</sup>

ダンテの旅路は形而上工学訓練生の旅路に似たものがあるが、ひとつ大きな違いがある。地獄の旅を通して、ダンテは各種の罪人に会い、会話を持ったり、彼らの証言を聞いたりする。我々の訓練生は、これらの罪人に話を聞くのではなく、実際に生活の中で出会い、多くの場合これらの罪人の罪の結果を被ることになってしまう。それでも彼らは理想主義の課題を果たし続ける強さが必要なのである。訓練生がそ

<sup>23</sup>寿岳文章 『神曲：地獄篇』、集英社文庫ヘリテージシリーズ、2008年、37頁。

の際持つ感情と彼らが旅路の後に最終的に辿り着かなければならない感情はダンテに匹敵する文才を持った者にしか表現できない。ここでは私はただ自分の経験を感情豊かに表現することなく叙述することとする。

私自身も典型的な純朴理想主義者として出発した。小学校時代に広島出身の先生が担任であった。先生は原爆投下時には疎開していたため直接被害には会わなかったが数週間後に町に戻ったとのことであった。そのせいで先生には被爆者手帳というものが与えられ、一生医療費は掛からないとのことであった。子供心になんと羨ましいことかと思ったが、先生はこのような烙印を押されたくはなかったとおっしゃっていた。先生は熱心に原爆の与えた悲惨な結果について教えられた。しかし私には全てを理解することはできなかった。私はそんな何十年も前に起こったことにいつまでも固執しないで先を見て生きていくべきだと思った。そしてそれをあるとき感想文に書いたら偶然私の作文帳が一番上に来て、先生がクラスの前でそれを読むはめになった。先生は大変傷ついておられたようだった。私も恥ずかしい思いをした。その後中学高校と進むにつれ、時々そのことを考えるようになり、ついには先生の意図は正しかったが、過去の惨事を現在につなげてそれは我々にとっても関係ある事態なのだということを教える必要があったのではないかと考えるようになった。1980年代の初めに大学生だった私は、反核運動に行ってみたことがあった。そこで私が聞いたことは「核兵器は悪い。悪い物は廃絶されなければならない。したがって核兵器は廃絶されなければならない」ということだった。私はこのように議論するのはちょっと単純すぎるのではないかと思った。本当に核廃絶を望むのであれば、核兵器の支持者を説得できるような議論を立てる必要がある。それで私は米国に行って核の支持者がどのような議論をしているかをまず学んで、それから最終的にそれに反駁できるようになりたいと思った。そして私の旅が始まったのであった。

形而上の分野ではこれは私の純朴理想主義の領域から現実主義者の領域への旅立ちを意味するものであった。ここでは私の無知が幸いした。一体これが何を意味するのか判った頃にはもう引き返すことができなくなっていた。もしこの旅について始めから知っていたら、もし地獄の門でダンテの銘文を読んでその意味を真に理解していたら、それをくぐる勇氣は無かつただろう。

当初は私の目的は戦争と平和の問題について現実主義者がどのように理解しているかを学ぶことだった。学んだこと全てを理想主義の目的に使うという熱意があった。これがときに現実主義の世界でぎこ

ちない緊張関係を産んだことがある。私の理想主義的意図を告げた時、教授の一人が「あまりに子供じみているので人前では言うな」と助言した。現実的世間では次の世界大戦を防ごうと一生懸命努力することは子供じみていると思われると知るの不思議な感覚だった。しかし教授は私の行く末について心配してくれていたのだと思う。現実主義社会で生き延びるためには、世間知らずと思われるのはならないのである。そして私の発言は私を世間知らずに見せるものだった。

私は現実主義者の領域にずっと深く入り込むまで世間知らずで、常に説得力のある議論を立てられれば人は支持してくれるものと思っていた。理想主義的目的の為に現実的解決法が提示できるよう努力した。そしてその技術が付くにつれて、私は人からよく私にそうする準備があることが証明できるならば手を貸そうと言われるようになった。まず修士号をとると、社会的信頼を得るためには博士号が無いと思っているようなことはやれないと言われた。そこで博士号を取ると、博士論文を出版しなければならないと言われた。それで出版した。特にそこでは、私は21世紀の中国とロシアの民主化の危険について警告し、異なった政治学、経済学、歴史、地域専門家など多分野の学者が政策担当者と危機防止のため協力できるような枠組みを提案した。世間知らずなことに私は共通の枠組みさえあれば学者たちがどんどん参加してくれるようになると思っていた。しかし私の訴えは完全に無視され、私は教職さえ得ることができなかった。論文を出版した後、私は教えた経験が無いとして退けられた。それはジレンマだった。教える経験をj得るためには、雇われなければならないが、雇われる為には教える経験が無ければならないというのである。ボランティアで教授の助手をしたりして経験をj得るよう努力したが、全く無駄だった。自己の栄光を追求するという現実主義の教義で動く現代の学会にはそれに相容れない真に理想主義の教義に従って動く私のような人間を雇う意思は全くないのだということを知るまでには長い時間がかかった。

そこからは学会の中心部から移民に高卒の資格を与える為の成人学校の教師という偏狭までの一直線の降下のように思えた。それは厳しい旅で、理想主義者の教義を守り抜こうと努力したが、簡単なことではなかった。第一に、自己保存と人類生存の間のジレンマに常に直面しなければならなかった。成人学校では最初の二年間は十分な時間が与えられなかったので生活するだけの収入が得られなかった。そのおかげで時間だけはあったので、汎理想主義のパラダイム開発の為に必要な一般教養の授業を受けることができた。その反面、私は高校教師となる免状をとるような授業を受けることを勧められた。そうすれば

もっと安定した職が得られるからだ。第二に、どこからも支持を得ることができなかつた。博士課程終了後に音楽や科学など一般教養分野を再訪していたとき、理想主義の目的の為に人々を説得しようとした。私が何をしようとしているかを説明し人類歴史上最も悲惨な惨事を防止する為に彼らがどれほど重要な役割を果たすことができるかを説明した。答えはいつも同じだった。「それはすばらしいことだ。是非続けなさい。でもここではなくて、どこかよそでやってくれ。」

この環境下で私は先に述べた私の音楽の勉強と並行する三つの段階を経た。最初は自己憐憫だった。これはヘンデルのオペラリナルドの中のアリア『Lascia ch'io pianga』によって表されている。常に自分の生活について心配し、周りからは何の支持も得られないまま生活している間に、私は被害者意識のようなものを持つようになった。私はこの社会が私の世界的惨事を避ける為に一緒に協力しようという心からの提案への答えとして私に餓死しろと言っているように感じた。私は信じることもうできなくなって、憎しみが私の中で膨らみ始めた。あるとき、私はオクラホマの連邦ビルを爆破した国内テロのティモシー・マクベイや911で世界貿易ビルを爆破したモハメッド・アタのすぐ横に自分が座っていることに気がついて愕然としたことがある。先に述べたように、これは形而上回路の二極端の接触地点である。私はこの極点に到達して生き抜くことの大変難しい極端に不安定な状況下に自分を発見した。ここで形而上工学者はこの一発触発とでもいうような環境で職務を遂行し、ピコーの周期を統制する為に必要なより高いレベルの意識に到達する為に、この形而上回路の二極を合成する方法を見つけなければならないのである。

それは厳しい道のりだった。私は全くの暗闇の中で、希望も無く怒りに満ちていた。私がバッハの『マタイ受難曲』に始めて出会ったのはこの頃であった。それは第二の感情の段階である人類共通の悲しみを代表するものであった。『マタイ受難曲』を聴いていると、深い悲しみに包まれているが、怒りや憎しみの全く無い世界に連れて行かれる。私はこれが汎理想主義者が到達しなければならない感情の段階だと思った。バッハは感情的にここに来てずっとここにいるように私に言っていた。しかし、もちろん私の実際の感情は人生の浮き沈みによって影響を受ける。だから砂浜の砂の城のように『マタイ受難曲』を聴いてその感情に達しても、日常のごたごたの中で消滅してしまう。そこでまた『マタイ』を聞いて感情をそこに戻す。そしてまた日常生活によって引き戻されるという状態が続いた。数年間そういう状態が続いたとき、突然ベートーベンの『歓喜の歌』が私の人生に飛び込ん

できた。これは『マタイ受難曲』の対極で、理想主義の喜びに満ちている。ベートーベン自身もその音楽活動を通じて、ハ長調が代表する善とハ短調が代表する悪の戦う第五交響曲に代表される中期の英雄の時代から、人生の終末には英雄主義を否定し、全人類を抱擁した第九交響曲の中の『歓喜の歌』に代表されるように汎理想主義の祝福へと旅を続けた。もうずっと私はこれを理解することができなかった。というのも私の理想主義追及の旅路の中で喜びという感情には一切出会えなかったからだ。今日においてさえ、一体どこで道を間違えたのだろうかと思う。これは私が個人的に道を誤ったのか、それとも西洋文明が啓蒙主義の後その道を失ってしまったのだろうか？ 科学の発達には人類に大きく貢献したが、その代償も大きかった。我々は物理的存在を超える共同体を心から信じる能力を失ってしまった。初期のキリスト教徒はそれを信じることでできたゆえに永遠不滅であったということ学んだ。それゆえ彼らはその置かれた状況にも拘わらず喜びの情を分かち合うことができたのだろう。ベートーベンも理想主義者の間の喜びを感じることで最後の世代だったのだろうか？ それともすでに存在しない喜びを実現しえたのは彼の特別な才能だったのだろうか？ いまだに私は作曲家にとっては大打撃である聴力の喪失などという苦難に満ちた人生を歩みながらもその作品の中でこのように善を信じる心を描くことのできたベートーベンには不可思議なものを感じる。

この時期に私はキリスト教を身近に感じ始めた。聖書の中で述べられているいくつかの教えには安堵感を感じた。プラトンなどは形而上工学者はその義務をただ冷徹に果たすことを要求するが、それには超人的強さが必要だと感じた。私は何かに頼らなければ生きていけなかった。そのとき私は理想主義者の共同体を発見した。キリスト教はこの過程を表現する言語を与えることによって私を助けてくれた。私は『神』を伝統的な意味では信じていない。それは理想主義社会の抽象的概念を象徴するものだと考えている。しかしキリスト教のおかげでそれが知覚できて身近に感じられるものになることができた。

また盲目的に信じることをも可能にしてくれた。形而上工学者はその仕事を『神』に捧げる。そして『神』はそれが次の責任者へと受け継がれるよう確認する。バッハの音楽を通じて私は神の声を聞いたが、それは「汝が十字架にかけられる日には、私もすぐそばにあらう」というものであった。言い換えれば、我々は全て個人の欲望を差し置いて、その弱さを克服し、全体の益の為に専心するよう求められているのである。強ければ強いほど、より大きな犠牲を払うよう求められる。

最強の者はキリストのように究極の犠牲を払うよう望まれる。そしてこれらの人々が『神』に会うことのできる特権を持った者である。だから困難に出会う度にまた一步『神』に近づいたのだと思わなければならない。

『神』は我々の必要な物は全て与えられ、そして我々はそれを意図されたように使うべきなのだ。私益の為にそれを使っては絶対いけない。より多くの人がそれに従うようになると、要求される犠牲が少なくなる。しかし概して人々がその義務を放棄すると、残された少数の者が全体の重荷を背負わなければならない。それが現実主義の時代に起こることである。そんな中で、被害者意識が募ってきた時、キリストにそのことを告げて見ると良い。すると、きっと「私は十字架にかけられて命を失ったのだよ。」と言われるだろう。すると突然、大きな犠牲だと思っていたものがなんでもなく見えてくる。この社会が私が人類自身のせいで起こるかもしれない歴史上前例の無い悲劇を食い止める為に努力して、その結果勝ち得たと思う報酬を与えるのを社会が拒否したとき私は十字架にかけられたような気がしたが、今ではこのように小さな犠牲を払うだけでよいことをありがたく思う。この社会で高い地位を持っているわけではないが、言うべきことを言ったせいで刑務所に入れられるようなこともなく、処刑される心配もない。自己憐憫に陥る日には、汎理想主義者の未来の世代のことを考える。中にはずっと大きな犠牲を払うよう求められる者もある。彼らには深い同情を感じる。私はこんなに小さな犠牲を払うように言われただけなのだから、彼らの重荷をできるだけ減らせるように努力しなければと思う。

この時点で私は聖書を読み始めて、その中に大変馴染みがあり、心の休まる教えをいくつか見つけた。キリストが逮捕される前夜に泣いたことを知って心が休まった。

彼はペドロとゼベディーの二人の息子を連れ行き、それから嘆き、動揺し始めた。それから彼は三人に、「私は深い嘆きを感じている。死に際もここに残って私と一緒にいてほしい。」そして少し行くと、地面に体を投げ出して祈った。<sup>24</sup>

これは私に厳しい現実にも動揺することなく常に勇敢に立ち向かう必要は無いのだと教えてくれる。これが私がプラトンよりはキリスト教に

<sup>24</sup> Michael D. Coogan, et. al. ed. *The New Oxford Annotated Bible* (Third Edition), Oxford: Oxford University Press, 2001, New Testament, p. 50 (Matthew 26:37,38,39).

依存するところである。プラトンは一旦何をすべきか見出したら、我々はその義務をひるむことなく果たさなければならないと感じさせる。不平不満など言っている暇は無いのだと。自己憐憫の余裕など無いのだと。キリストはいいんだよ。我々には感情があるんだから、つらければ泣いていいんだよとってくれる。

私がキリストが「神の王国は汝自身の中にあり」<sup>25</sup>と言われるのを聞いた時、私は他人からの賞賛を決して求めるなど言われたような気がする。周りで何が起ころうとも、我々はすべきことをやり続けるのである。それは褒美がもらえるからではない。もしそうすると我々の魂は滅びてしまう。人々は我々から去っていくだろう。人々は我々が困難なことをしなければならぬと訴えることによって我々を罰するだろう。しかし自己の王国に忠誠心を持つのだ。そしてそこで我々は評価されるのだ。このことが本書の執筆の助けとなった。ほとんど誰も読まないだろうが、それでも書かなければならないのだ。

私はキリストが「汝の敵を愛せよそして迫害者のために祈れ」<sup>26</sup>と言うのを聞いた時、常に建設的な勢力とのみ同調せよと言われているのだと思う。善の建設だけに焦点を当てよと。そして悪の破壊には決して焦点を当てるなど。一旦その焦点を悪の破壊に移すと、あつという間に現実主義者の野心の手先になってしまい、彼らのために代理戦争を戦う羽目になるのだ。

私はキリストが「許せよ」<sup>27</sup>と言ったとき、再び、何があっても善の建設にのみ集中せよといわれたような気がする。何か不正が自分に対して行なわれたなら、忘れ去って先に進めと。もし許せなければ、怒りに焼かれ、また悪の手中に陥って、破壊に焦点を当てるようになり、悪の為に代理戦争を戦う羽目になるのである。これは私にとってはなかなか辛い教訓だった。いまでも苦悩している。いまだに「私が正当に獲得したもの」を奪った輩に対する強い怒りがたくさん残っている。もし許せないのなら忘れ去ろうとした。彼らを憎み続ける余分なエネルギーは無いのである。手持ちの全てのエネルギーを善の建設と本書を書き上げるという私に与えられた義務の遂行の為に使わなければならない。

一度悪魔がキリストを魅了しようとしたが、拒絶されたと言う話を聞いたことがある。

<sup>25</sup> 同、130頁 (Luke 7:21)

<sup>26</sup> 同、15頁 (Matthew 5:44)

<sup>27</sup> 同、108頁 (Luke 6:37)

それから悪魔は彼を連れて上がって彼に即座に世界の全ての王国を見せた。そして悪魔は彼に言った。「あなたにこれらの王国の栄光と権威をあげよう。これは私に与えられた物だから誰でも私が譲りたい人に譲ることができるのだ。もしあなたが私を崇拝するなら、これは全てあなたの物になる。」キリストは答えた「『神を崇拝し、神のみに仕えよ』と書かれています」と。<sup>28</sup>

これは良い教訓である。形而上工学者は既存の体制から恩恵を受けている以上大規模な改革を遂行することは不可能であることを理解しなければならない。既存の体制内で出世し、権力を獲得してから改正を行なおうとは決して思っていない。その頃には既存の利害関係に深く縛られて、自由に行動することはできなくなる。マタイ伝の中に良く似た警告がある。

「狭い門をくぐって入れよ。広い門をくぐり安泰な道を行くと破壊に繋がる。そしてその道を行くものが多くある。門が狭く道が厳しいと生命に繋がる。その道を見つける者はほとんどいない。」<sup>29</sup>

現代の感覚ではカトリックにとって自殺がこれほど重大な罪と考えられていることは理解し難いかもしれない。しかし汎理想主義者の観点からすると、それは明白である。我々は一人一人義務を背負って生きている。もし一人がそれを放棄すると、誰かがそれを引き受けなければならないが、その人は、汎理想主義者の数の少ないことから考えて想像に難くないが、すでに多大な重責に苦戦している状態なのである。我々は他の人が自分の分まで責任を背負わされることのないよう生き残って我々の責務を果たさなければならない。

しかし第二の感情の段階でさえ遣り通すことのできる強さを得ることはできなかった。二つの問題が解決できないまま残った。第一にキリスト教はこの世で払う犠牲は死後の世界で報われると教えている。同様に、この世で犯した罪は死後の世界で罰せられるとも教えている。この世での物理的存在が終わる日に我々は『最後の審判』にかけられる。したがって、我々はみんな一生をかけてその日に臨む準備をするのだと。私が誰にも読まれないであろうにも拘わらず本書を執筆した

<sup>28</sup> 同、102～103頁 (Luke 4: 5,6,7,8)

<sup>29</sup> 同、17頁 (Matthew 7:13)

のは本書が書かれなければならなかったからだ。そこから何の報酬を得ることも無い。それは受け入れられるが、私はその為に代償を払っている。老齢に備えて年金や貯金をするべき時に不安定な職についてぎりぎりの生活を送っている。それでも私は本書を書いたが、それは『神』の目による判断を考慮したからだ。私の『最後の審判』の日に神の目に適うものでなければならない。しかしその為には、この時点でついに報われるのだという盲目的の信念が必要である。ここで現代精神の悲劇が起こる。量子物理学の時代に、知性が最後の審判の日など存在しないのだと言っている時に、一体どうやって物質的福利を犠牲にして盲目的の信念を持ち続けるだけの強さを得られると言うのか？

第二に、旅を続ける間に私は汎理想主義者の通念を学ぶにいたった。全てが何百年も何千年も掛かる責務を我々が果たす為には、個人より大きな意識を持たなければならない。個人の意識に閉じ込められていると、我々のプロジェクトを遂行することは不可能なのである。それで私は過去に汎理想主義のプロジェクトに取り組んだ人々や将来取り組むであろう人々に対して緊密な感情を抱くようになった。私はこれらの人々を私の心の家族と見るようになった。私が私の心の親と感じるようになった人々の中には歴史上名前を残した人もいるが、大半は無名のまま亡くなっていった。私が私の心の子供と感じる人々はまだ生まれていない。これらの人々に直接会って個人的に知り合いになることは不可能である。しかし私は次第に彼らに対する感情を深めていった。会ったこともない全くの他人にこれほど緊密な感情を持てるようになるのは驚きであった。しかし徐々にそう感じるようになった。

私が精神的領域により深く入り込んでいくにつれて、物理的存在の重要性が減少していった。これは第五章で述べた物理と形而上を両極とする形而上回路の現象である。本書の執筆中に私は、ただ書いているというよりもあたかも私の魂を肉体からこちらに移しているかのように感じていた。であるから本書の生存の方が私の肉体的生存よりも重要になってきた。一旦成し遂げた後は、自分の肉体的存在は空っぽの貝殻のようなもので、自分の本質は本書の中に存在するのだと感じられた。これによると、私の意識の中で物理極から形而上極への移動があったことになる。これはおそらく私の辿った旅の自然の最終到達地だったのであろう。また、形而上の領域では実際の執筆作業が終わった時点で本当の執筆活動は終わらないとも感じ始めた。それは始まったばかりなのだ。本書の真の価値は私が残りの人生をどう生きるかにかかっている。ただ生き延びる為だけに既存の制度に迎合するようなことがあると、本書はその威力を完全に失い、無意味な物となる

であろう。しかしこれは切り替えが即座にできることではない。毎日葛藤があった。もう本書を書き上げたのだから後は何が起こってもかまわないと思う日もあるが、ついにその結果に直面しなければならなくなった時、それを受け止める強さがあるかどうか自信が無い日もある。町でホームレスの人を見かける度に、これが私の将来かとも思うことがある。どうか強くあることができますようにと祈る日々である。そして私は強さを得る為に心の家族に頼るようになっていった。最後の審判はもう現実的には感じられなかったが、これらの家族はそう感じられた。

しかし、これが私と生みの親との正面衝突を生じさせることになってしまった。私の親はもちろん私を愛してくれているし、私を守る為にどんなことでもしてくれた。私の父はいつも金のことは心配しないでいいから、しっかりやり遂げなさいと言ってくれていた。実際、両親の保護無しには本書を書き上げることは不可能であった。書く為には生きなければならなかったのである。父は家族の生存と安泰を守る為、その一生をやりたいこともやらずに犠牲にした。しかし彼らが守ろうとしてくれているのは私の物質的存在であって、たとえ私の精神的福利を犠牲にしてでも、そちらのほうを守ろうとしてくれるのである。この問題は私の旅の間中引っかかっていたが、この時点でついにこれ以上無視できなくなってしまった。私は神に従って心の家族と共に生きることとを選ぶべきなのか、それとも両親の懇願に従って、物理的福利を追求するべきなのか？この二つの選択は両立できず、共存の余地は無いのだろうか？

私は答えを探した。第一に聖アウグスティヌスに向かい、その『告白』を読んだが、彼は私とは全く違う環境に遭遇し、私とは全く違う問題に直面していたことを学んだ。聖アウグスティヌスは理想主義の全盛時代に生き、外部には強敵は存在しなかったので、彼の抱えた問題は圧倒的に内面的なものであった。青年として、彼は肉体的・世俗的の歓喜に没頭した。

私はカルタゴに来たが、そこでは不正な愛の大釜が私の回りで跳ね回り煮えたぎりました。私はまだ本当に人を愛したことはありませんが、私は愛することを愛していました。そして私の欲望の深さから愛すること自体をもっと愛さないことで自分自身を憎みました。そして足元に仕掛け網のない安全な生活を憎みました。というのは心の中では私は飢えていたのです。神よ、魂の食物、それはあなたですが、私はそれを欠いていまし

た。それでも私はそれを欲してはいませんでした。腐敗することの無い食物は全く欲しいと思いませんでした。それは十分にあったからではなくて、自分の中身が無ければ無いほどそのことについて考えることがいやだったからです。そのせいで、私の魂は病んで、腫上がっていました、そしてそのかゆみを肉体的なもので癒そうと苦しんだのです。肉体的なもの、それはもしその中に魂がなければ、それは愛の対象ではありません。私が欲していたことは愛することであり、そして愛されることでした。でも最も欲していたことは私を愛する人から肉体的快感を得ることでした。

したがって私は不潔な欲望のせいで多くの友情を汚し、肉欲の地獄でその純潔を汚しました。そして下劣で不潔であるのに加えて私の虚栄心は巨大だったので自分を清潔で高潔だとして振舞っていました。そして私は恋に落ちました。ただそうしなかったからという理由だけでした。慈悲深い神よ。愛の契りの絆にどれほどの苦味があることか。私は祝福の鎖を身にまといましたが、それは苦悶の鎖でもありました。というのも私は嫉妬の焼けた鉄の棒で身を打たれたからです。疑惑と恐れと癩癩と口論で身を打たれたのです。<sup>30</sup>

これは私にとっては全く問題とならなかった。ということは彼の内面の葛藤は私のジレンマを解決する為にはほとんど役に立たないように見えた。しかし、聖アウグスティヌスは敬虔なキリスト教徒であった母モニカとの関係を通してひとつの教訓を私に与えてくれた。

モニカは常にアウグスティヌスの熱心な支持者で、青年時代の息子を辛抱強く見守った。モニカの導きのおかげで、アウグスティヌスは改心し32歳でキリスト教徒となり、地位も報酬も高い修辞学の教授職を離れた。<sup>31</sup> そしてモニカが他界した時、彼は自身でその最後の日々を記録している。

母がその人生を去る日が近づいたとき、その日は貴方は御存知でしたが、我々は知らなかったのですが、思うにあなたの秘密の取り決めによって、母と私が窓際に寄りかかって二人きりになったことがありました。その窓はチベル川のオステアに

<sup>30</sup> Augustine, trans. By F.J. Sheed, *Confessions*, Indianapolis: Hackett Publishing Company, Inc., 1993, p. 35.

<sup>31</sup> 同、151頁。

ある我々が滞在していた家の中の庭を外から覗くようになっていました。周りには誰もいなかったのですが、それは我々の長い地上の旅の疲れから回復し、また引き続く海の旅に備えて休息を取る為でした。そこで母と私は話しました。二人きりで。深い喜びについて。そして過去のことは忘れ、目前に広がることに期待を寄せ、我々は真実の存在について話しました。それは神よ、あなたのことです。聖者の永遠の生命とはどのようなものか。それは目で見たり耳で聞いたりしたものではなく、人の心を通じて入ったものです。でもあなたの泉の高尚な水を求める我々の心の口を通じて入ったものです。命の泉、それはあなたと共にあります。我々の能力に応じてその泉から得た飛沫です。ある意味では、我々はこのような偉大な問題について折り合いをつけるべきなのかもしれません。

そして我々の会話は、肉体的快感はどのようなものでも、どのように輝かしい肉体的明かりも、永遠の光に比べると何の価値もないように見える、言及する価値さえないように見えるという点に辿り着きました。．．．

私が述べたこのような考えは、このとおりの順番ではありませんし、実際発した言葉でもありませんが、神よ、御存知のように、我々はこれらのことについて話したその日、これらの喜びに満ちた世界は我々の話したことに比べると安っぽく見えました。そして母は言いました。「息子よ、私はもうこの世には何の喜びも見出さなくなりました。もうこの世から何も望むものもなくなった今どうしてここにまだ残って何をすべきなのかは私にはわからない。この世にもう少し長く残っていたらと思っていた唯一のもの、それはお前が私が死ぬ前にキリスト教徒になることだった。キリスト教徒のお前がこの世の全ての幸せを侮蔑する神の遣えとなるのを見たいま、神は私にこれ以上望むもの無いものを与えてくださった。それなのにどうしてまだここにいるのだろうか?」．．．

さらに、後で聞いたのですが、我々がオステリアにいた間、母はある日私の友人にこの世に対する侮蔑と死への魅惑について話したそうです。私はその場にはいませんでした。友人たちは一人の女性の中にこれほどの勇気があることに感服しました。でもそれを母に与えたのはあなたです。友人たちは彼女に故郷からこれほど離れた街で肉体を離れていくことに恐れを抱かないのかと聞きました。でも母は全ての物は神の下にあります。

そして私は神が私を育てた場所から離れた世界の果てを知らないかもしれないという恐怖は抱いていません。」と言ったそうです。そして発病後9日目に56歳でこの敬虔で聖なる魂はその肉体から解放されました。私は33歳でした。<sup>32</sup>

モニカの死は辛かったが、最後にはアウグスティヌスは以下のように回想している。

さあ、母をその夫と共に心安らかに眠らせてあげよう。というのも夫以外には母には誰もいなかったから。夫だけに仕えた人だったから。根気良くあなたの為に実らせた人で、夫をも神の下に改宗させた人だった。おお我主よ、神よ、あなたに使える私たち使徒を激励してください。我主よ。私が心と声とペンで仕えるあなたの息子たちがこの本を読む人と同じ数だけいますが、あなたの祭壇であなたに使えたモニカを覚えていてくれるかも知れません。夫のパトリシアと共に。彼らの肉体を通じて貴方は私をこの世に送り込みました。どのようにしてかは私には分かりませんが。愛に満ちた心で私の親であった人を彼らがこの移り行く光の中で覚えていてくれますように。あなたを我々のカトリックの母の中で我々の父として使える使徒たち、そしてあなたに使える人々が生まれてから聖地詣でとしてやってくるまであこがれる永遠のエルサレムで私の同市民となるべき人々を忘れませぬように。それによってその最後に母が私に願ったことが私の『告白』を読んで母を思うようになってくれたこれほど多くの人の祈りによって私一人の祈りよりもより豊かに達成できますように。<sup>33</sup>

彼らの関係は私が直面している心の家族と血縁の家族との間のジレンマは根本的なものではないことを教えてくれる。莫大な数の心の家族と実際に出会う可能性はほとんど無い。しかしアウグスティヌスとモニカのように特別な場合、心の家族とも物理的時間と空間を分け合うことができる。これらはしかし心の家族が分け合う永遠と比べるとほんの一瞬でしかない。だからこそ本当に貴重なものである。物理的領域でこのような特別な時間を共に過ごせるとは本当に彼らにとって幸運なことである。したがって、理想主義の世界では、血縁の家族は

<sup>32</sup> 同、163～166頁。

<sup>33</sup> 同、170頁

円が楕円の特別の形態であるように、心の家族の特別の形態と言えるのであって、その中に何も矛盾すべきものはない。

それは理想主義が現実主義に圧倒されたときだけ厳しいジレンマとなる。そこでは肉体的生存が最高の目的となり、精神性はほとんど失われてしまう。私と父との関係を見てみた時、私は二人とも『神』の不在の中でほとんど超人的と言ってよい強さを得ようと苦悩しているように思える。

それから私は古代ギリシャの哲学者を再訪した。プラトンは哲学王の訓練生は家族から引き離すよう提案している。これは家族と共に居ると、忠誠心の対立が起こるからである。<sup>34</sup>しかし私は抽象的議論は読みたくなかった。それよりも、この問題を実際に体験した人の話を聞きたかった。それで民主制下で処刑されたソクラテスに向かった。哲学者である彼としても、一旦理性が解決法を見つけたらそれは何が何でも成さなければならなかった。私はいつもギリシャ哲学者にとっては正しいことを行なう感情的強さというものは常に当たり前に行われているように感じる。死刑宣告の後、友人のクリートが監獄を訪れ、ソクラテスに逃亡するよう説得しようとする。他の理由に並んで、彼は子供のことを挙げる。

貴方は子供たちを裏切っています。子供を育てて教育する義務があります。その代わりにあなたは去って子供たちを置き去りにしようとしている。そうすれば子供たちは運を天に任せなければならなくなります。もし孤児のよく辿る道を免れたとしても、ほとんどあなたのおかげとはいえません。最後まで面倒見られないような子供を作るとは許されません。<sup>35</sup>

これに対してソクラテスはこう答えた。

親愛なるクリートよ。あなたの熱意はもし正しければ大変貴重なものです。しかしもし間違っていれば、熱意があるほど邪悪になります。だからこれらのことが為されるべきかどうかまず考慮してみる必要があります。私は今までもそしてこれからも常に理性によって導かれる性質ですから、熟考した後で理性が告げることをすることが私にとっては最善に思えます。そし

<sup>34</sup> Allan Bloom, *The Republic of Plato*, Basic Books, 1968, p. 136.

<sup>35</sup> Plato, "Crito," in *The Trial and Death of Socrates: Four Dialogues*, New York: Dover Publications Inc., 1992, p. 45.

て今この運命に直面するに際して、私は目前にある理性を無視することはできません。私が今まで尊重し、敬ってきた原則を今でも私は遵守します。あなたがこの瞬間それよりも良い他の原則を見つけられない限り、私はあなたに同意することはないのです。<sup>36</sup>

あなたの述べた資金、気骨を失う、子供を教育する義務といった他の考慮すべき点ですが、これは私が思うにただの多数の教義にすぎません。それらの人々はほとんど理性的に考えることなく簡単に人を生かしたり殺したりします。<sup>37</sup>

あなたのような哲学者が我々の国家で、両親や祖先といったものよりはるかに価値があり、崇高で聖なるものがあること、そして神の目と深い理解を持つ人の目にはより大切なものがあるということが分からなかったのでしょうか？<sup>38</sup>

ソクラテスにとっては血縁の家族は副次的なもので、何の葛藤も無く捨て去ることができるのが判った。私はソクラテスの強さに感服し、私にもそれだけ強さがあればと思う。ソクラテスの直面した問題に比べると私の問題は子供のようなものである。私はよくソクラテスのことを考えただけ強くなろうと頑張る。ソクラテスは私の魂の父親である。しかし、これは凡人には大変厳しい規準である。理性の命じるまま冷徹に行動する為には超人的な強さが必要である。そのように行動できる感情的強さをどこで見出せばよいのだろう？

最後に私は第五章で述べ、またしばしば心に浮かんでいたパペチュアを再度訪れた。パペチュアはローマ帝国下に生き、彼女の一家の奴隷がキリスト教徒として逮捕された時に自首したのであった。彼女が私が自分のジレンマに直面するに当たって最も近い存在と感じられる人物であった。パペチュアは理想主義のどん底の世界に生き、血縁の家族と心の家族が共存する余地の全く無い最も厳しいジレンマに直面させられた。ソルズベリは初期のキリスト教社会について以下のように観察している。

キリスト教社会は個人にその父母を離れ、過去の共同体からの絆を断ち切り、新しい共同体を作るよう呼びかけ、新しい社会構成を創設していた。家族を強調し、将来の世代を築き保持

<sup>36</sup> 同、46頁。

<sup>37</sup> 同、48頁。

<sup>38</sup> 同、51頁。

する為の母性は殉教を通じて得られる個人的救世とは両立不可能に見えた。キリスト教の殉教の目的はイエス・キリストの例に従うことであり、家族や社会や文化的共同体への考慮に捕われることが無いようにすることであった。殉教者はキリストの世俗的関心を捨て去るようという呼びかけを真剣に受け止めた。<sup>39</sup>

パペチュアはどちらかを選ばなければならなかった。彼女が心の家族を選んだことには疑いはない。彼女はローマ帝国下のカルタゴの競技場で、父と乳飲み子を残して果てた。パペチュアはまず父との絆を断ち切る。エルマンによると、

この物語の最も強烈な要素はパペチュア自身が記録しているように、かわいそうな父に対して取った対応でした。．．．かわいそうにこの父は娘が迫り来る処刑を前に改宗を拒否することによって死に直面していたのです。父は宗教の為に死を選ぶ娘の理由を理解できない非キリスト教徒でした。父は自分と彼女自身の子供の為に生きるよう説得しようとしたが成功しませんでした。彼女にはまだ乳児がいました。彼が改宗させようとした理由はこの彼女の子供であり、また彼女が死ねばこの子に何が起こるかということでした。そしてもちろん彼女自身の為にも改宗させようとしていました。パペチュアの父への反応に関して書かれた部分の日記から数節読んでみましょう。「私たちがまだ逮捕されていた時」彼女は日記の中で言います、「私の父が、私を愛するあまり、私の決意を揺るがせようと試みた。『お父様』と私は言った。『例えばこの花瓶か水がめか何かがありますよね?』『あるよ。』と父は言った。そして私は『これをそれ以外の何か他の名前と呼ぶことができますか?』と言った。父は『できない。』と言った。『でしょう。だから私も私以外の名前では呼べないのです。私はキリスト教信者です。』そのとき私の父はキリスト教徒という言葉に怒り狂った。父は私の方に向かって来たがあなたも私の眼球でも引き抜こうかというような勢いであった。でも父はそのままその悪魔のような議論と共に打ち負かされて去っていった。」だから彼女は彼の議論を悪魔のようなものだと考えていたのです。だから彼女は結局

<sup>39</sup> Joyce E. Salisbury, *Perpetua's Passion: The Death and Memory of a Young Roman Woman*, New York: Routledge, 1997, p. 88.

は彼女自身の身の上だけを心配している父親を拒絶するのです。少し後にまた彼女は書き残しています。「私の父はまた心配のため街へやって来て、また私を説得しようと考えて私に会いに来た。『娘よ』と父は言った。『この白髪に同情してはくれないか。お前の父である私に同情してはくれないか。もし私がお前の父と呼ばれる資格があるのなら。もし私がお前の兄弟を差し置いてお前をかわいがったのなら。もし私がお前を人生の全盛に辿り着くまで育て上げたのなら。他人を責める為に私を見捨てないで欲しい。お前の兄弟のことを考えなさい。お前のお母さんやおばさんのことを考えなさい。お前が死んでしまっただけは生き延びられないお前の子供のことを考えなさい。プライドを捨てなさい。お前は私たち全員を破滅させてしまう。』」今度もやっぱり何の効果も無く、彼女は妥協しません。<sup>40</sup>

それから彼女は夢を見た。

それから私は広大な庭園を見た。そしてその中に白髪の男性が羊飼いの服を着て座っていた。背が高くて、羊の乳を絞っていた。そしてその周りには白い衣装を着た何千人という人が立っていた。彼は頭を上げると、私を見て言った。「娘よ。来られてよかった。」彼は私を彼のそばへ呼ぶと絞っていた口いっぱいの乳をそのまま私に与えた。そして私はそれを両手で受け止めて飲んだ。すると周りにたたずんでいた人がみんな「アーメン!」と言った。この言葉が発せられたとき、私は何か甘い味がまだ口の中に残ったまま目が覚めた。<sup>41</sup>

ソルズベリはこの夢は父を意味すると解釈している。

彼女の夢の中で、羊飼いは白髪の老人だった。彼は彼女の描く父親の像に似ている。羊飼いを老人と描くことによって、パペチュアは彼女の夢の世界に描かれた映像を変えている。初期のキリスト教は善良な羊飼いを若者として描いている。また『ヘルマスの羊飼い』は老人としては描かれていない。パペチュアの夢では、見慣れた映像がその人生で彼女がたった今拒否

<sup>40</sup> Bart D. Ehrman, *From Jesus to Constantine: A History of Early Christianity (Course Guidebook)*, The Teaching Company : Chantilly, Virginia, 2004, Lecture 13.

<sup>41</sup> 同、99～100頁。

した父親像と入れ替えられている。彼女は父親的愛情で天国の家族に迎え入れられたのである。「来られてよかったね。」彼女の新しい父は古い父が誇りに思ってくれなかった彼女の選択を誇りにしてくれているのである。<sup>42</sup>

これはパペチュアにとっては簡単なことではなかったが、子供との離別はもっと辛かった。しかし最後には後に見る夢をもって、彼女は再びその血縁を精神的な繋がりに取り替える。彼女は幼年にして癌で他界した弟ディノクラテスの夢を見た。

私はディノクラテスが暗い穴から出てくるのを見た。そこには彼と一緒に多くの人がいた。とても熱くてのどが渴いた。色があせていて汚かった。彼の顔には死んだ時の傷が残っていた。．．． 私たちの間には深い溝があったので、どちらも相手に近づくことができなかった。ディノクリテスの立っていた所には水溜りがあった。そしてその縁は子供の背よりも高かった。だからディノクラテスは水を飲むのに背伸びしなければならなかった。私は水溜りには水があるのにふちが高すぎてディノクラテスが飲めないのを見てかわいそうに思った。そこで私は目が覚めたが、弟が苦しんでいることを知った。<sup>43</sup>

ソルズベリはこの夢を「パペチュアの息子が苦しんでいて、ミルクを欲しがっているという心配が、喉の渴いている弟に取って代わられた。彼女の裁判以後、パペチュアはだんだん後世のことを考えるようになる。そして彼女の母性愛が今では死んだ者に向けられているのである。」<sup>44</sup>と解釈している。

このように、パペチュアは血縁の家族を完全に心の家族と取り替えることによってジレンマを解決した。私のジレンマはパペチュアのジレンマと比べると子供のようなものである。私は彼女に深く心を寄せる。毎日私は彼女のことを考え、どれほど彼女に近づけるか、どれほど強くあれるか考える。パペチュアは私の心の母だと思ふ。彼女の存在を感じながら、できるだけ強くあろうと努力する。同時に私は彼女の父の苦しみも感じている。その痛みは耐えられないもので、私は何とかその痛みを和らげてあげることはできないかと考える。その時、

<sup>42</sup> 同、100～101頁。

<sup>43</sup> 同、105頁。

<sup>44</sup> 同。

私が感じていた父に対する失望感がパペチュアの父に対する深い同情に代わった。苦々しい感情はもう感じられなかった。ただ二つの世界の間で挟まって苦しんだ年老いた父への深い思いだけが感じられた。父は第二次世界大戦敗戦後の復興の時代に生きた人であるが、家族の安全を守る為に全てを犠牲にした。その引き換えに父の望んだことは子供が幸せに結婚して孫の顔を見ることだけだった。一生の犠牲に対してこれは本当につつましい望みであると思う。そのとき私を通して、このジレンマに引きずり込まれたのである。父が一生の犠牲と引き換えに全ての報酬を得るべき老年時代に私が父の苦悩の根源でなければならないというのは本当に心が痛む。父はこんな目に会ういわれは全くないのに。ただ兄が家族を持ち孫という宝物を父に与えることができたことが唯一の慰めである。

そこで私は心の家族から強さを引き出し、血縁の家族が強くなれるようその強さの根源となりながら形而上の旅を続けなければならないのだと考えるようになった。この頃私はボーイングのエンジニアがB-777の翼のストレス検査をしている写真を見つけた。写真には「翼の先端は通常的位置から24フィート以上反れ上がっていて、約50万ポンドに値する重荷に耐えているのだ！」<sup>45</sup> (写真参照)との説明がつけられていた。私はこれはまさに形而上工学者を代表するイメージだと思った。我々は検査を行なっているエンジニアであると同時に検査が行なわれている翼でもあるのだ。すなわち我々は社会という飛行機の翼であると同時にその翼の設計者でもあるのだから、社会の一員の福祉に責任があるのだと。だから我々は耐え続けなければならないのだと思っていた。

---

<sup>45</sup> Guy Norris, and Mark Wagner. *Boeing 777: The Technological Marvel*, Wisconsin: Zenith Press, 2001, p. 27.



Copyright © Boeing

このジレンマに直面しているとき、私はゴールドベルグ変奏曲を練習し始めた。すると突然その中に第二の知性の段階を発見した。それはアリストテレスの第一の実体が行っているという深い黙想であった。

この段階では、自分で決定できることは何も無く、より高いレベルの意識によって決定されているように見えてきた。もしそれが私がある義務を果たすべきだと決めたら、うまいことを言って逃れようとしても完了するまでは同じことが起こり続けるような気がする。義務の分配は公正なものであろう。有能なエンジニアが特定の目的に合った材質を選ぶように、このより高い意識は我々の強さや弱さを知り尽くし、適切な義務を割り当てるのだろう。であるから遂行できないような義務は与えられないだろう。ということはいろいろな状況下で私がしなければいけないことは最善を尽くすことだけということになる。

この時点で、私は自分自身を空想上の身体の一細胞のように思い始めた。例えば、免疫機能を見てみると、好中球や大食球を含む白血球は身体に外的物質が発見されたとき呼び出しを受ける。好中球も大食球も外的物質を飲み込み消化して殺害する。ここで私が読んだところ

によると、「好中球は病原体を飲み込んだ後、自分自身もしばしば大食球によって飲み込まれてしまう」<sup>46</sup> とのことである。ということは細胞の中には自分の住む生命体を救う為に自分の命を犠牲にすることを要求されているものがあるということになる。

私は我々の社会でも同じようなことが起こっていて、我々は全て我々の住むより大きな形而上的実体によって役割を与えられ、必要に応じて呼び出されるような気がしてならない。ソクラテスやパペチュアは我々の為に永遠に生きる為にその肉体的存在を犠牲にするよう命じられた。一旦このように知覚するようになると、私が今まで『ちょっとした奇跡』と呼んできたものが突然意味をなすようになった。私が汎理想主義者への道を歩んでいる時、私は一連の偶然によっていつも必ず必要な場所へ連れて行かれ、私の責務を達成するのに必要なものは全て与えられていることに気づき始めた。より深く進んでいくにつれて、それはだんだん明白になってきた。

まず、核戦略と軍縮を専攻した修士号を取った後で、私はその分野に残ろうとしたが全く何も見つけられなかった。そこでニューヨークの日本の銀行で働き始めたが、それ以後数年間全く何一つ建設的なことは起こらなかった。米国の永住権を取ることができたが、ビジネスというのは私には全く向いていないことが明らかになった。そこで私は本来の使命に戻って、博士号を取ろうとした。それは簡単なことではなかったが、まずできるだけいろいろな人の話を聞くことから始め、ボランティアをしたことのある非営利団体のディレクターだった人に連絡を取った。その人はニューヨークの市立大学の教授に連絡を取るよう助言してくれた。そこで私は教授に連絡をとり、推薦状と引き換えにボランティアで助手をした。偶然にも教授はコロンビア大学でも教えていたので、その教授の推薦状のおかげで受け入れられた。他に応募したところは全て拒否されたので、この教授なしでは私の使命はそこで終わりを告げていたことだろう。

始めはかなり苦勞した。一学期が終わった時、成績が回復しなければ今学期限りと警告を受けた。それで私はもうあと一学期しか居られないかもしれないんだから、できるだけのもをもらって出て行こうと決めた。そのおかげで何とか生き延びることができた。それから1年目に総合試験に落ちた。このときこそはもうこれで終わりだと思った。もう出て行く準備ができていた。それには二つの理由があった。ひとつはもう全力を尽くしたという実感があった。もうひとつはこれ

<sup>46</sup> <http://en.wikipedia.org/wiki/Neutrophil>

以上人を信用するのが難しくなった。試験の前に私は考えられる全ての人に連絡を取り、私が準備の為にしていることをつけ、これでよいかと聞いて回ったが、みんなそれで大丈夫とってくれた。それでこの結果は驚きだった。今度受ければ大丈夫だからとってもらったが、前に同じことを言われてこの結果だったではないか。どうして今回はそうだと信じられる？しかし最後には両親の説得もありもう一度だけ受けることにした。しかし素早く行動しなければならなかった。私の感情はいまだに信頼感を回復することができず苦悶していた。そこで私の理性が感情に私がこの件は対処するから暫くどこかに行っていると言った。そこで私は大学を出てからはやめていたピアノのレッスンを受け、私の感情をこれらのごたごたから切り離せるようにした。再試はうまくいった。そのとき私は音楽はただ一時的避難の場所に過ぎなかったのだろうかと考えた。しかしその時までにはすでに自分の一部になっていたような気がした。そこで私は音楽の勉強を続けたが、それが本書のために不可欠な要素となった。

博士号を取った後、私は教職を得ようと努力したが、全く何一つ機会を得ることができなかった。一度日本の資本家が新たに大学を設立するということで雇われたが、今度は日本政府が許可を出さなかった。その理由は私には出版記録が無いということだったが、それは四月で私の論文はその年の六月に出版予定となっていた。それでも認可は得られなかった。

最終的にはプロジェクト・マネージャーとして日系人博物館で働くこととなったが、その仕事は大学時代の友人がたまたま訪ねてきていて、仕事を探しているといったところ、お父様が飛行機でたまたま横に座った人が、人を探していると言って公募要項を渡してくれたとのことで、ファックスしてくれたものだった。インタビューのとき全くディレクターと折が合わず、断ることにした。そのことを電話で父親に告げると怒鳴られ、それで無理やり就職することになった。仕事としては悪夢であったが、しかし出版準備をするには完璧な状況だった。写真家が必要だった時には、博物館で働いている写真家があった。地図を作らなければならないとなると、博物館の出版物のため契約したばかりだった地図製作者がいたので個人的に連絡を取った。他の場所でここまでできたかどうかはわからない。博士論文を出版した後、もう一度教職を得ようとしたが、百通を超える不採用の手紙を溜めただけだった。最終的には我慢できなくなって何の可能性も無いまま退職した。

一度、私が音楽理論を学んでいた近所の音楽学校が専門大学部門を設立するというようになった。その為には歴史学の教授を雇うことが

要求されているということで、私はこれは良い組み合わせかもしれないと思った。そこで音楽の勉強を続けて知性と感情の統合に取り組む間、生徒に彼ら自身の分野である音楽をより広い歴史的枠組みのなかで見つめられるようにして、音楽的解釈に深みが出て、その演奏により豊かな表現が出るように援助してあげられると思ったのだ。私の理論の先生は支持してくれて、いろいろ努力してくれた。同時に先生は理論と演奏の指導者の間に緊張関係があると警告した。演奏家は理論に重要性を置かないとのことであった。器楽指導者の方が圧倒的に数が多かったので、彼らの立場が強まり、私の理論の先生は孤立しているとのことであった。先生は先生と図書館長だけがただ楽器を演奏するだけの能力を超える音楽のより深い要素の重要性を主張していると言った。結局私は拒絶された。

二年近く探したが、結局見つかったのは成人学校の教職だけだった。いやだったが生活が懸かっていたのでそこで教え始めた。同じ頃私は本書のために工学の勉強をする必要があると考え始めていた。専門学校などを当たって見たが、人生のこの時点で現実的な選択は無いように見えた。そこで再度私はここで終わりかと思い、あきらめて働き始めた。しかし最初はパートタイムの割り当てしかもらえず、週に十時間働けただけだった。すると働き始めて数週間しかないうちに、私の上司が短大でいくつか授業を受ければ数学を教える資格が取れ、そうするともっと時間がもらえる可能性が高まるよと教えてくれた。そこで私は短大のパンフレットをもらってきて、そこに取りたいと思っていた物理や工学の授業が並んでいるのを見つけた。その後数年の間必要な授業を全て受けることができた。物理科学の他に、芸術史、宗教、詩などの授業も受けられた。また成人学校では自動車修理工のクラスもあるというので、毎週土曜日に通った。そのおかげで、物理工学のピラミッドの理論から工学、製造・整備、操作までの大体の様子をつかみ、また形而上学の基本を学ぶことができた。さらに、暫くすると、教室での観察が私にとって指導者育成の実験室的役割を果たすことに気がついた。その結果は本章で報告した。

その間私は本職を見つける努力をした。つまるところ私も『世界を救う』前に自分が生きていかなければならないのだった。しかし何一つ見つけることはできなかった。本書の為に必要な授業は全て受けることができたが、これ以上限られた収入で生きていくこともできず、またこれまでかと思った。その時、数週間もしないうちに、また私の上司が学校がシルバー教室へ拡大しようとしているから校長に話して

ごらんと言ってくれた。そこで行ってみるとすぐに割り当てをもらうことができた。

そこでついに私はもう収入の心配はしなくてよくなった。しかし割り当てられた授業は朝と午後、月曜から土曜と散らばっていたので、本書に携わる時間がほとんど無くなった。その後四年間私はいろいろ読んだが、それ以上のことはできなかった。年に三度ある2～3週間の休暇が役に立っていたが、その時、学校は一年50週制に拡大すると言い出した。これでまた終わりかと思った。

そのとき前代未聞の財政危機が起こり、割り当てが減らされた。そのおかげで私のスケジュールが変更され週休三日となった。さらに年間の学習期間も減らされたので、本書を書き上げる機会が訪れた。週末にはさらに形而上に関する読書を続けた。それから休暇毎に一章ずつ書き上げた。しかし始めの頃はどのように構成してよいか全く見当がつかず、一体書けるものかと心配した。もう何年間かいろいろ考えが浮かんできてはいたが、時には何千頁にもなるようにも見えることもあり、時には数頁で書き上げられるようにも見えた。全てが一度に動くのでどうやって順序だてて概念を提示できるか分からなかった。すると最初の休暇が始まる数週間前突然本書の構成が思い浮かんだ。まさに完璧なタイミングだった。宗教はよく天啓について話すが、これはそれに近いものに感じられた。偶然にもまた私が収入を補うために行なっていた翻訳の仕事が本書の執筆中の一年間は全く来なくなった。

第一草稿を書き終えた時、もう精根尽き果てたと感じた。最初の本を出版したあと博物館を辞めたときのようにもうここには何も私のすることは残っていないように見えた。それでももう辞めたいと思った。しかし私は博物館を辞めたときのことを覚えていた。次の仕事に付くまで一年半かかった。私は博物館にはあと六ヶ月から九ヶ月勤めるようになっていたのだと思う。だから辞めたいと叫ぶ私の感情を抑えて、辞職はしないと心に決めた。その頃までには、自分の意思が自然の流れに干渉しない方が良く思うようになっていたのだ。辞めることになっているのなら自然にそうなるはずだと思った。その年の終わりに新しい学区長が成人学校部門を完全に閉鎖すると発表した。私はこれで終わりだと思い、次に移る準備を始めた。

それから私は閉鎖に対する抗議運動に参加することになり、ミクロの次元で民主主義の機能を観察することができた。これについても本章で報告した。結局部門は存続となったが、3分の2の教員が雇用停止となった。私もその範疇に入っていたが、土壇場で組合が交渉して

私の範疇がはずされ、仕事を続けられることになった。そのとき私はまだ本書が完成していないことに気がついた。それでここ一年間本書完成の最後の段階を貫徹するよう努力したが、それはバッハのゴールドベルグ変奏曲によって感情的に表明されたアリストテレスの第一の実体の観念を理解することだった。であるから振り返って見ると、本書完成のため今までこの仕事を続けなければならなかったかが分かる。この経験を振り返って、私は本書は個人の努力だけでは書き上げられるものではなかったと思っている。なにかより大きな流れが働いていたに違いないと。

最後に15年ほど前本書に取り掛かり始めた頃、書き上げてもそれをどうやって公表すればよいのか全く見当がつかなかった。たかが成人学校の一教員が出版する可能性など無いことは知っていた。でも心の底で何かが突き上げてきて、私はこのプロジェクトに取り掛かり、最後までやり遂げた。その際、たとえ誰にも読まれなくても、本書は書き上げなければならない、それはこれは書かれなければならない本だからだと考え続けた。しかしこの15年の間、電子書籍産業が生まれ発展し、書き上げる頃にはこの方法で出版することがごく普通のことになっていた。伝統的出版方法をまず試みたがまったく良い返事は得られなかった。それは予期していたことだった。それで私は電子本として出版することに取り掛かった。普通の本として読むことができないのが少し不満だったが、それでも出版できるだけでも運の良いことだと思っていた。そこでこの過程を辿り始めた時、注文に応じて印刷する本としても出版できることが分かった。さらにこの方法を使えば、版權を保持でき、また出版後も内容を変更することができ、さらに出版価格も自分で決められるということが分かり、突然全て必要な物が与えられていることに気がついた。ここでまた「与えられた義務の遂行に専念しなさい、そうすれば、必要な物は何の苦も無く与えられるのだから。」と言う声が聞こえたような気がした。もちろん本書がこれを読まなければならない人のところに届くという保証はなにもない、というよりむしろ可能性は無いに近いが、それでもこれであるべきところに届いたのだという感触がある。

これらの経験を経た後で、今では私の表層感情は全くの重荷と感じられるようになった。苦悩に満ちた旅であったが、もしこの表層感情が無ければ何の苦痛も無しに遂げることができたであろうに。もうこの時点で私は個人的感情は破棄してこの崇高なる意図に完全に服従する用意がある。私は残りの人生をこの崇高なる意図そのものが一体な

んであるのか見極めることに捧げるだろう。この意図に疑問を投げかけることなど考えられもしない。

しかしこの意図を理解することは思ったほど簡単なことではない。何があってもこの意思に従おうと硬く決心していても、しばしば決断に苦しむことがある、例えば、腐敗した組織で働いていて、無実の人が苦しんでいるのを見る時、残るべきか去るべきか？ 残るとすると、それは彼らを守るために勇敢に戦っていることになるのか、それともただ給料をもらうためだけなのか？ また去るとすると、それは腐敗の一部になることを拒絶するからなのか、それともただいやなところからさっさと出て行きたいだけなのか？ 最後には、この意図は明らかになるがそれまでは、ただ耐えなければならない。これには信じられないほどの忍耐が必要とされる。しかし時が経つにつれて、鍛錬を積んで、この意思をよりよく理解できるようになりたいと思っている。

私がこの段階に到達した時、私が心の家族と感知していたものが、実は自分自身の一部であると思うようになった。この自身は私の肉体的存在内に限られたものではなく、私の前にあったものそして私の後に来るもの全てを含んでいる。それは私が五歳だった頃に体内にあった細胞と今体内にある細胞がどちらも私の一部であるのと似ていると思う。いまでは、より偉大な意識に向かったの進化が進んでおり、我々はその中間産物であるような気がしている。これを私は超越自己として認識している。だとするとちょっとした奇跡は形而上的実体の通常の機能に過ぎないのであり、その中の一細胞として、私はその機能に気づき始め魅了されているのではないかと感じ始めた。そこで私は、私に与えられた責務について考えた。私は聴覚器官の一細胞で、周りから集められる情報を全て集めて、それを脳に送ることになっているのかもしれない。ここでまた本書が別の既存の機能によってそこに運ばれていくだろうという盲目的信念を感じるのである。

もし我々はすでにより偉大な形而上の実体の必要を満たすべく機能がすでに割り当てられているとするなら、自由意志は無いことにはなるが、私は選択の余地がひとつあるように思う。それはこの実体に合流するかどうかという選択である。一旦その実体に合流することを決めれば、全ては決定されているのである。我々がこのより偉大な実体の健全を保つことに献身することを誓ったとき、一人前の形而上工学者になるのである。

しかし我々は合流しないことを選ぶかもしれない。そうすれば、我々の存在は我々の身体中の癌細胞に似たものになり、自己の必要を最大限まで追求することにより、自分の住む身体を最後には破壊して

しまうことになるのだろう。現実主義台頭の時代は癌細胞の広がった肉体に似ているところがあるようだ。このような状態では、いくら残った健康な細胞が頑張っても通常の肉体的機能を維持することは不可能となる、というのも残った細胞が癌に冒された細胞の機能を取って代わることはできないからである。それでも健康な細胞は自分の与えられた機能だけは何があっても続けなければならない。

そう感じたとき、私はゴールドベルグ変奏曲に代表される深い黙想の感情を感じている。ここで私の感情は知性に出会った。私の知性はこの状態をアリストテレスの第一の実体として知覚している。ここにいるとき私はもはや考えているのか感じているのか分からなくなる。ただ深い黙想のみである。ここでは私の感情は神を伝統的に人格化された神として知覚しているが、私の知能はなにか私がカントの客観として理解している、物理の一般理論に対する形而上の一般理論のようなものと知覚している。感情と知性が共通の神像を得たとき、神はどのように見えるのだろうか？

ここでは私は、もはや『神』を選ぶか『親』を選ぶかといった不可能な選択に迫られることも無く、また最後の審判の概念にこだわる必要もなくなった。これで本当に肩の荷が下りた。そして今までの苦悩が溶けていくのが感じられた。もちろんこの意識の変革は一昼夜にして起こるものではない。私はいまだに苦悶している。本書を市場に出した後で、長年にわたって自己保身の必要を軽視してきたことが遂に仇となり、この国で独自で生計を立てていくことができなくなり、母国へ帰ることとなった。ここで私は上記の三つの層がそれぞれ異なって反応していることに気がついた。最も表面上の感情は自己憐憫に浸り、私を見捨てた社会への怒りを感じている。『マタイ受難曲』が聞こえる全人類にわたる悲痛を感じている層では、私の感情はこの出来事を十字架に架けられる日と解釈している。そして私の場合、悲しみは感じるものの、これが自発的国外追放という軽度のものであったことに神に心から感謝している。『ゴールドベルグ変奏曲』の聞こえる最深層では、私の感情はこの移動を『クオドリベット』から『アリア・ダ・カーポ』への移動と解釈し、深い黙想の中で周期が完成される過程と解釈している。またこの層では私の知性はこの移動はただ単に細胞が非活性化される過程であると解釈している。どちらにしても苦悶は全く無い。現在これらの感情は同時に存在しているが、ここで私は深い感情層の存在によって、表面上の感情の苦悶が抑制できることを学んだ。時が経つにつれて、この表面上の感情が徐々に消え去り、深層感情がより支配的となることと祈っている。

## 追記 最後の旅路

### 『クオドリベット』から『アリア・ダ・カーポ』へ

私が故郷へ戻ってから1年ちょっと経った。この引越しは『クオドリベット』から『アリア・ダ・カーポ』への心の移動を現実に表現するはずのものであった。だから私は精神的に完全に平静で穏やかな境地に達せられるであろうと期待していた。しかしそれはまったくの誤りであった。この一年は悪夢のように苦しかった。その中で私は私の『アリア・ダ・カーポ』を探し続けた。

まず最初に辿り着いたのは私の深層感情であった。それはほとんど即座であった。私が子供時代を過ごした家に帰ってきたことと滞在期間がちょうどゴールドベルグの変奏曲の数と同じ30年であったという象徴的な偶然が、私が完全に一周して『アリア・ダ・カーポ』に辿り着いたのだという天からの声明を聞くには十分であった。その気持ちはまったく平静で『アリア・ダ・カーポ』で表現されているものに最も近いものだろうと思う。この黙想の中で私はゴールドベルグを超えた世界が果たしてあるのだろうかと考えようになった。

次に辿り着いたのは私の知性であったが、深層感情よりはずっと長くかかった。帰国当初は世界の現状に心を痛めた—国家間の緊張悪化、世界中でのテロ攻撃、そして欧米諸国での顕著な衆愚政治の台頭などである。私にとってはこれに対処する為には最初の100人の形而上工学者を養成することが急務であった。それで必死で働きかけた。日本での学術機関のいくつかに連絡を取り、形而上工学の分野を創設するよう懇願したが、もちろんまったく無視された。そこで自分でできるだけのことをしようと思い、最初に出版していた本の日本語版を自己出版することにした。これは19世紀の民主化過程において極度の膨張主義に走った国家を解析したものであり、中国が民主化を行うにあたって重要となるので、政策決定者に警告を発しておきたかったのである。注意を払ってもらえる可能性など無かったが、それでも世界的悲劇を防ぐ為にできる全てのことをするのが私の義務だと感じたのである。その為には英語版の出版社から許可を得なければならなかった。申請したが、拒絶された。

私の知性が私の仕事はもう終わったと知ったのはこの瞬間であった。どんなに努力しても協力してくれる人が出てこないことには慣れてきたが、あえて妨害されることは予期できなかった。「許可はやるから

勝手にしな。」といわれると思っていたのだ。まさか「許可できない。」といわれるとは思っていなかった。それから著作権専門の弁護士に相談してみたり、日本語版を出版してくれる出版社を探してみたりしてみたが、何の結果も得られなかった。かつて、ひとつの仕事を終えるたびに新たに二つ三つやるが増えていた頃があり、やればやるほど忙しくなった頃があったことを覚えている。しかし今では、何かやろうとする度に妨害されて、それに対抗しようとしても、まったく勢いを得ることができなくなった。まだ続けたいのはやまやまである。最初の100人の形而上工学者を育てたい気持ちは強い。世界規模の悲劇を食い止める為できるだけのことをしたい。しかし状況から見て、今の私は自分の実力をはるかに超えたことをやろうとしているようだ。もう大量のエネルギーを注ぎ込んで何の結果を出すこともできないこの不毛のプロセスから脱却すべき時が来たのであろう。どんなに貢献したくても、超越自己にまた呼び出されるかどうか待つ以外、もう私にできることは何も無いのである。そう悟ると、私の知性は深い諦観に陥った。これで私は自身で上述した細胞の非活性化を経験したことになった。

最後に最も厄介だったのは私の表層感情である。私は常に、体制に反旗を揚げておきながら体制から保護してもらおうと期待するような虫のいいことはできないことは知っていた。懇願し続けたが、社会は決して私がなんらかの影響力を持てるような立場を与えてはくれなかった。それで私は孤独な活動を続け本書に取り組んだ。たとえ誰にも読まれなくても書かなければならないと感じていた。しかし心のどこかで、最後には私の努力は報われることを期待していたのである。

「築けよ、されば訪れん。」という感じであった。本書の執筆は簡単なことではなかった。人類と個人の存続という二面戦争を同時に戦わなければならなかったのである。幸いなことに私には個人の戦場では安全ネットがあった、それは家族からの経済的援助であった。それは本当に大きな助けであった。しかし可能な限り頼らないようにしようとは努めた。だから最後の三年間は学年が終わりに近づく度に教職を失う可能性に対処しなければならなかった。これには大変な労力を要した。本書を完成する頃には、完全燃焼したと感じられた。それでもどこかで、報われる瞬間が来ることを期待していた。しかし、それは来なかった。私が『これほどの犠牲』を払ったのに、たった一度私が助けを求めた時、この社会は私に背を向けた。表彰してくれなどと願ったわけではない。ただここに住み続けて、努力を続けられるように助けてくれと願っただけなのに。私が得たものは、「数年したら帰っ

て来たらいいだろう。」というおざなりな社交辞令であった。それでももし私の努力が次の人たちにきちんと受け継がれていたなら、安心もできただろうと思う。そこで私はわずかに残っていた社会の中心的立場にある人たちとの繋がりを使って次の仕事である知識の拡散を委ねようとした。しかしながらここでも人は無関心だった。本書を自己出版する前に、一出版社が私が出版費用を全部払えば、今の価格の五倍の価格で出版してやろうと言ってくれた。これが私が得た最大の援助であった。このとき私は、あたかも警察に犯罪を通報した際、出勤の費用をお前が全部出せば警官を送ってやると言われたような気がした。社会の中心にある者には社会全体の福祉を守る責任がある。しかし現実主義の盛んな現代、そのような責任感はいずれの間にも存在していなかった。私は全ての努力は無駄に終わったと悟り、国を離れた。

帰国した時には、私の表層感情は疲れきり、傷つき、怒りに満ちていた。この時点で、環境が変わったことを利用して回復することに専念したほうが良かっただろう。家族の保護のおかげですぐに働く必要はなかった。その間私の知性はこの環境の変化が、次の仕事のステップであるかもしれないと、『ひとつの成功は999の失敗の後に来る』という精神で、私に結果を期待することなく努力し続けるよう圧力をかけてきた。そのような努力を続けることは私の表層感情にとってはもう無理であった。いくら期待しないといっても、各所に働きかける度に、返答が来るまで何ヶ月も待つ間やはり何らかの結果が出ることを期待せずにはいられないのである。そしてそれが無益に終わったと分かった時、やはり失望せざるを得ないのである。この期待と失望の繰り返しに疲れ果ててしまった。このように疲れ果てた状態で、社会の中心にありながらその責任を取らないエリートに対する怒りがこみ上げてくる。そこで、気を逸らすために又新しい周期を開始する。これによって疲労と憤慨の悪循環に陥ってしまった。一年が経ったがまったく休めた気持ちはしなかった。しかしいつまでも家族に甘えているわけにもいかず、私は少しでも収入を増やす為にパートの仕事に応募した。

それは特許申請の翻訳の仕事であった。面接の際に、その会社は厳しいビジネス界で業務を拡大することによって必死に生き延びようとしている小さな会社であることが分かった。私の仕事もパートでありながら、正社員の責任を持たされるものであった。私の表層感情はまず「絶対いやだ!」と叫んだ。しかしながら、私の知性には鉄の掟があり、それは私の決めることではなく、私が就くべき仕事なら採用されることになっており、そうなったらこちらからは拒否できないとい

うものであった。そのとき私は心の中で成人学校で働き始めた頃のことを考えていた。それはただ生活を支える為だけのものであったが、働き始めてみると本書執筆のプロジェクトの扉を開いてくれるものであった。この仕事もこのようなものかもしれない。採用されそうな雰囲気が強くなってきた。どうしなければならぬかは分かっていたが、私の表層感情は惨め極まりなかった。

その時である。私は叔母にその話をしたのだが、彼女は絶対仕事は請けるなと主張し、「お父さんのおかげですぐに働かなくてもいいという幸運に恵まれているのだから、そんなに急がなくてもいいでしょう。ゆっくり時間をかけて基盤を築きなさい。」と言ってくれたのである。天は巧みにそのメッセージの伝達者を選ぶものである。もし他の人からこれを聞いても社交辞令くらいにしか思わなかっただろうが、叔母は私と同じように若いころ米国で過ごし帰国したのだが、お母さんに家に同居を許してもらえず、すぐに働いて自活しなければならなかった経験を持っていた。それで私は、叔母は私のやっていることを甘っちょろいと言って支持してくれていないだろうと思っていたのである。そんな人からのメッセージであったので、心に響いた。そして私は遂にもうやりたくないことにはいやとっていいのだと悟ったのである。タイミングもちょうどよかった。私の知性も私の仕事は終わったと悟ったところだったので、もう責任を果たす為にはどんな犠牲も払わなければならないとは言って来なくなった。こう悟った時、私の表面上の意識は疲労と憤慨の悪循環から解放されたのである。

この時点で私は全ての問題が解決されたと思った。これは叔母が招待してくれていた旅行への出発の五日前であった。それで私はこの旅行は私が遂に仕事を完成させたことのお祝いになると考えた。と、次の日、母が入院することになり、その三日後に他界した。私はその意味を探った。明白な教訓は理想主義者には祝いはないということであった。祝い事はエントロピーを放出する。祝い事に費やされるエネルギーはもっと建設的なことに利用できるのである。振り返ってみると私はこの教訓を繰り返し与えられた。博士号を取得した時も卒業式には出られなかったし、最初の本を出版した時も祝う人も無く、箱に入った本がただ宅急便で送られてきたただけであった。

その命と引き換えに、母はまたより深い教訓も与えてくれた。母と私はまったく別の人生を歩んだ。母の人生は自分の夢を追求することにあり、私はその正反対で、自分の欲するものといかに戦うかであった。母は自分が第一、その為に他人が傷つくことがあっても仕方ないと信じていたが、私はそのような個々の態度が社会全体として今起こ

っているようなテロ事件やポピュリズムの台頭といった問題を産むのであると主張した。このような世界では『勝者のサークル』から阻害された人々が反社会勢力となり社会が不安定化するのには避けられないのである。一旦これが始まれば勝者はいない。言い換えれば、母の信じるような生き方はエントロピーを社会に吹き込み最終的には破壊してしまうのである。であるから私にとっては本書のような理想主義のプロジェクトに母が関与する余地は無かった。

母の死について考えるにつれ、私は母との関係が実は対極するものではないことに気がついた。私は確かにはるかな重責を背負わされたがそれを遂行する為に母よりずっと多くのものを与えられて来た。そこで私は人は皆自分に特定の責務とそれを遂行するに必要なだけの負のエントロピーを与えられるのだと悟った。であるから、より恵まれないものが、恵まれたものを羨んだり、重責を背負ったものが社会的責任をそれほど果たさないものを責めたりするのはどちらも間違いであると気づいた。問題になるのは与えられた負のエントロピーを私物化するとき起こる。

さらに、私はこれには量を超えるより複雑なものがあることに気がついた。私の闘争の中で、私は社会から人が放出するエントロピーをできるだけ吸収してきたが、最後にはそれで飽和状態になりぶよぶよになってしまった。その状態で帰国して母と暮らすようになった。そして母と暮らした最後の一年は、私は母を私の戦いの対象の象徴と見るに至っていた。そして何十年にもわたって内包してきた怒りを全て母にぶつけてしまっていたのである。私が子供のころ母は家庭も欲しいキャリアも欲しいと自分の多彩な夢を追いかけて家族を省みなかったことは本当である。そのころは子供として母のエントロピーを吸収していた。そして私は国を去り、母と交流することもあまり無かった。30年経って帰国した時、私たちの立場は入れ替わっていた。ここから私はエントロピーというものは今その場で清算されなければならないというものではないことを悟った。

さらに、母の元生徒たちがたくさんお参りにやってきた。彼らは私の知らなかった母の像を語ってくれた。母が持っていた最後の現役の子供がお母さんと一緒にやってきた。彼女は辛そうに泣いていた。二人は母とその子の関係は生徒とピアノ教師を遥かに超えるものだったと言った。最初の頃は問題を抱えたお子さんだったらしいが、母にだけは気を許したそうである。他の生徒のお母さんも母はただピアノのテクニックだけを教える教師ではなかったと話してくれた。その子に始めたことはきちんと最後まで終わらせることを教え込んでくれたと

いうことであった。母の同僚のピアノの先生もお参りに来てくれた。彼女によると、彼女の最初の音楽の先生が母で、その影響で自分もピアノ教師になったとのことであった。ここから私はエントロピーは直接二者の間で清算されなければならないものではないことを悟った。初期には、自分で認めたように、先生と呼ばれたいが為に音楽教師になった母の放出したエントロピーを私が吸収していたかもしれないが、その間母は負のエントロピーを母の生徒に供給していたのであった。

自分の命と引き換えに母は私が思っていたよりもはるかに複雑なシステムを見せてくれた。それはきわめて入り組んだ仕事の割り当てとエントロピー網であり、一個人が全体像を理解できるものではなかった。そんなシステムでの決定は中央の脳において行われなければならない。私たちはそれを伝統的に神と(あるいは私は超越自己として)認識していたのだろうか。召喚されれば職務につかなければならないが、我々は常に勤務中であるわけではない。待機中は一個人として生活してよいのである。振り返ってみると、母は生涯自分の夢を追いつけたが、最後に私を『アリア・ダ・カーポ』まで導くという使命を負っていたのだろう。

いままで落胆させられてきた人がたくさんいた。しかしそれらの全ての人が私が責めたように現実主義に迎合した人ではなかったと思う。彼らの多くは単に私を援助するという職務を負っていなかったのだろう。血小板が通りかかっても黴菌と戦う白血球を助けることが出来ないのと同じように、助けようと思っても助けられなかったことだろう。彼らがいつの日か召還されて自分に与えられた職務を果たすことは十分考えられることだ。彼らは何をすべきか決めてそれによって是非を決めるのは私の仕事ではない。今思い出すと、母は最期に会ったとき、「責任感の強いきっちりした人は、なかなか許すことが出来ないけれど、私はいい加減だから、その分許すことが出来るのよ。」と言っていた。

米国を去る最後の瞬間について考えてみる。私は傷心していたし、憤慨していた。30年にわたって懸命に尽くしてきた後で、誰一人として私が残って戦えるよう助けてくれた人はいなかった。でも今では誰も助けてくれなかったのは、彼らが義務を怠ったのではなく、私が単に私の『アリア・ダ・カーポ』に辿り着くために帰国するように定められていたためだということが解る。そのことに気がついた時、私は彼らを許すことができた。いや実際は何も許されるべきことなど無かったのだろう。そう気づいた時、私の中に溜まっていた怒りと、表に出てきた罪の意識が溶けていくのが感じられた。そして私は遂に肩の

荷を降ろすことができた。私には何百万という人の命は救えないが、私は世界を救う為の英雄でもなんでもないので。ベートーベンが第九交響曲で主張したように、理想主義というのはヒロイズムではないのである。それはシステム全体からみるとあまりに小さくて何の影響も与えられないような仕事に精を尽くして完成させることなのである。今では私は私の職務を忠実に終え、もう罪の意識を感じなくてもよいのだと思えるようになった。このようにして私の表層感情には自分の『アリア・ダ・カーポ』が見えてきたのである。

その時、母の奏でる『クオドリベット』が聞こえた。それを通して母は私に「お帰り。ずいぶん長くかかったけどついに帰ってきたね。残念だけど私はもう行かないといけないよ。あなたがもう少し早く理解してくれていたなら、残ることが出来ただけだね。」母の『クオドリベット』を聞いていると、またバッハの「大は小」というメッセージの偉大さを思い知らされる。ゴールドベルグ変奏曲は個々の3組の変奏曲が一つの文明の周期を示した壮大な人類文明の10周期を表していると解釈できる半面、個々人の些細な一生とも解釈することが出来る。そのとおり。全ての人は自分の人生で独自のゴールドベルグを奏でるのであろう。ついに私は、自分のを奏でる傍ら、母のそれを聞くことができた。私には『アリア・ダ・カーポ』の演奏が残っているが、母も母のアリアを私の横で演奏しているような気がする。

そこで目前に現れたのは、アリストテレスの壮大な形而上回路だった。これは第一の実体に始まり第一の実体に終わる回路であり、その両極を結ぶのは無数の理想主義者の鎖である。私もその中の一鎖に自分を見出した。私の前には無数の人たちがいて、それぞれが自分の職務を果たして、次の人に受け継がれていった。私の後にも無数の人たちがいて、前任者の職務を引き継いで自分の任務を果たして次に引き継いでいく。ここで私は第一の実体について熟考し、自分の任務について熟考し、そしてついには第一の実体に到達する鎖をつなぐ私の前任者と後任者たちについて熟考する。鎖の中には物理的につながっているものもあり、その場合は直接会うことができるが、中には化学的伝達のように、物理的には接触しない伝達方法もあるようだ。私が本書をインターネットの書物出版サイトにあてもなく掲載し、次の人に辿り着くよう祈るしかないのがその例だろう。これには盲目的信念が必要である。

アリストテレスの形而上回路について熟考していると、この回路を抽象的に想像するのではなく、実際具現化できればどんなに良いかと思うようになった。想像だけでは鎖を遡るのにも限界がある。そこで

私は日本の連歌か俳諧が役に立たないかと考えている。個々の句は5-7-5か7-7で複数の歌人が前者の作を受け、その上に積み上げていくという形式であるが、これが回路を示すのに適しているようにも思える。さらにこの形式には可能性がある。個々の俳句に目を向けると、その目的は四季のかもしれないし、いろいろな感情を表現することである。この文学はまず映像を言葉で描写することによってその映像が、かもし出す感情を引き出そうとするものである。これには二つの利点がある。俳句は知性の意思疎通手段である言葉を使うため、感情と知性が共有しやすい。言い換えると、歌人は、知性は理解できるが、感情には理解し難いような「私は悲しい」とは言わず、「寒い冬の夜の沈黙の中」などという表現を使い、そこから感じられる悲しい感情を知性が理解できる方法で表現するのである。第二に絵画に比べると俳句は経済的である。俳句は小さなメモ帳にも記録でき、場所をとる壁面に飾る必要はない。俳句はまた季語を使う。季語は読み手に共通のある感情をもたらすので表現が経済的にできる。ある感情を言葉多く説明する代わりに一つの季語がかなりのところまで感情を表現してくれるのである。

さらに、高浜虚子によると、主観と客観が俳句では交錯するとのことである。

私は敢て客観写生ということを言う。それは、俳句は客観に重きを置かねばならぬからである。

俳句はどこまでも客観写生の技倆を磨く必要がある。

\*

その客観性ということに努めて居ると、その客観描写を透して主観が浸透して出て来る。作者の主観は隠そうとしても隠すことが出来ないのであって、客観写生の技倆が進むにつれて主観が頭をもたげて来る。

客観写生に熟練して来ると、知らず識らず作者の個性が隠そうとしても隠すことが出来なくなり、その鋭鋒が客観写生という袋を突いて出て来る。<sup>47</sup>

虚子は歌人は絵描きと同じように客観から主観の段階を経て再び客観に戻るとここでも形而上回路の存在を示唆している。

<sup>47</sup> 高浜虚子 『俳句への道』、岩波文庫、1997年、33頁。

絵も始めはその対象物を向こうに置いて形なり色なりを研究するに始まって、その形や色が出せるに従って自然々々にその対象物と作者との距離が近くなって来て、自分の心に感ずるような形や色が自由に描けるようになって来る。一つのモデルであっても十人が十人描いたものはみな違っておいて、自然にその人が、即ち作者自身が、その上に現れて来る。たとえば言えば、その対象物が真直ぐに写されているものもあるし、いびつに写されているものもあるし、柔らかい線で描かれているものもあるし、強い線で描かれているものもある、少し暗いものもあるし、少し光っているものもある。そういうのは対象物を向こうに置いて写す間に自然々々にそれが作者に近づいて来て、対象物を写すのではあるが同時に作者を写すことになるのである。それがいよいよ進んで来ると、如何にもその作者で無ければ描けないというものになって来て、純粋な客観写生の作品であるけれどもその中に作者の人格が現れているようになって来る。こうなって来ると主観の影が内に沈潜してまた客観写生の様相を備えて来るのである。主観を喜ぶ時代は必ずあるものである。がその主観の時代を経過すると、また何時か客観に戻ってくる。<sup>48</sup>

これらの特性を利用してアリストテレスの形而上回路を表わす俳諧的な文学を創出することは出来ないだろうか。四季はそれぞれピコーの周期に投影することができるだろう—春は理想主義の発展の時代、夏は理想主義の頂点、秋は軍事的権力の台頭で、冬が民主化から衆愚政治を経て野蛮時代への回帰といった具合である。もちろんそのような試みは問題を引き起こす。季語は我々が四季それぞれに感じる一般的な感情を表現するものである。例えば桜といえば、この時期に学校の入学式を経験するほぼ日本人全員に理想主義の発展中に感じられるであろうような暖かい始まりの感情を思い起こさせるが、一旦国境を越えてしまえばそのような感情は共有されない。この点では私はバッハのような天才的歌人が出て、どこにいようと個人の中でも、また文明全体でも共通して感じられるような「大は小」の原則が当てはまるような歳時記を編集してくれるのではないかと期待したい。もしそのような試みが成功すれば、我々のコミュニティが実存する証拠としてア

<sup>48</sup> 同、35～36頁。

リストテレスの形而上回路も眼で見ることが出来るようになり、我々にとってもどれだけ勇気付けられることになることだろうか。

母が亡くなってから一年余りが過ぎた。その間に兄と父が亡くなり、法事やら何やらで手を取られゴールドベルグを弾くことも無くなった。その後プロジェクトに戻り、またゴールドベルグを弾きたいという気持ちも戻ってきた。しかし今回は弾き方がまったく違っていた。今は気持ちが向くままに『クォドリベット』を何度も何度も弾いている。今回聞く『クォドリベット』には三年前に聞いた到着を祝う高々と鳴る祝福の鐘はもう聞こえない。無人の廃墟で私は誰かいないかと探し続けた。三年の間探し続けて、疲れ切って座り込んだ。その時『クォドリベット』がまた聞こえてきたのだが、今回は惜別の響きが聞こえる。もう去る時が来たのだと告げているかのようだ。立ち上がって歩き出しなさいと。それでも最後の方まで弾いた時、『クォドリベット』の最初の音である低い『レ』の音に引っ張られて、また最初から弾き出すのである。あたかも去り難い、もう少し待てば誰か来るかもしれない、という気持ちに引き戻されるかのよう。それで何度も繰り返し弾いていると、あるときふと『アリア・ダ・カーポ』の最初の音である天から響くような高い『ソ』の音が聞こえる瞬間があり、そのままアリアに移れるのである。これは私の人生と並行しているように感じる。私も三年かけて人生の『クォドリベット』を通り過ぎ、今『アリア・ダ・カーポ』に移る時が来ているようだ。去り難い惜別の情の中にいつか天からの『ソ』の音が聞こえる瞬間を待っているのである。

私の深層感情はもう既にここにあってゴールドベルグを超えた世界があるかどうか考えていたがこのとき突然『アリア・ダ・カーポ』は最初の『アリア』になり第二の周期が始まるのだと気づいた。このようにゴールドベルグは『アリア・ダ・カーポ』が『アリア』になり、また次の『アリア・ダ・カーポ』が『アリア』になって止むことなく永久に続いていくのだと。

天からの『ソ』の音はそっと優しく私の人生に入って来た。それは私の持つひとつの後悔からやって来た。父はその生涯の終わりの方では何も意味のあることはしていないように見えた。毎日朝起きて、家族のためにもやしとウィンナーの朝食を作って、新聞を読んで、テレビを見て、焼酎の晩酌で夕食を取って寝るという生活を繰り返していた。話すことといえば夜寝られないとか、今日はどれだけ歩いたかということばかりだった。人類の生存に関わるような重要な問題に取り

組んできた後では、取るに足りないことでこのような人生ははたして生きる価値があるのだろうかとさえ思えた。しかし父を失った時、この父との日常生活がいかに失い難いものであったかを悟った。特に毎朝起きてきたとき「おはよう」とあいさつを交わしたり、働いて帰ってきたとき待っていて一緒に夕食を食べたのは貴重な時だった。父が亡くなる数日前、買い物中に町でほのかな香りが漂っていたと父に告げると、それは金木犀だと言い、また金木犀と銀木犀があると教えてくれた。どう違うのかと聞くと、花の色が白と黄色なのだと教えてくれた。これが父が私に教えてくれた最後のこととなった。父との関係は決して順風満帆とは言えなかったが、その時私はあたかも若い父親の手に引かれる七つの女の子のような安心感を感じていた。

取るに足りないと思っていたこれらの小さな瞬間を失ったからといってどうしてこれほど後悔するのだろうか？ 天からの『ソ』の音はこの疑問の答えとしてやって来た。私が学んだ教訓はこの小さな日常の繰り返しこそが全ての基盤であり、それゆえ『アリア・ダ・カーポ』自身であるのだということだった。私は旅路の終わりにはなにか壮大な発見をするだろうと思っていたのだが、実際には『青い鳥はすぐそばに居る』と言われるように全く月並みなものだった。しかしこれはほとんど全ての人が知っているが、ほとんど誰も真に理解していないものなのかもしれない。それが『アリア』と『アリア・ダ・カーポ』の違いなのであろう。この自明なことが30の変奏曲という長い旅路を終えてからでないで真に理解することはできないのだ。こう悟った時、私は自分の『アリア・ダ・カーポ』を演奏し始めた。毎朝起きて、猫に餌をやって、朝食を済ませて散歩をし、父の庭の手入れをして、父のよく通っていた青果店でみかんを買い、ゴールドベルグ変奏曲を弾いて、時には仕事に行き、夕食を作って、ベッドに入る。この日常を繰り返す時は『アリア・ダ・カーポ』を弾いている時と同じで、穏やかな心になれる。

また、梅、桜、ツツジ、芍薬、アジサイ、金木犀や椿の花が咲き、散っていくのを見るにつれ、この日常の繰り返しの中により大きな季節の周期も感じられる。一直線に見える進歩は実は無数の周期から成っているのだろう。

このような生き方ができるのはもちろん両親が残してくれたおかげである。穏やかな境地に達することができたのはもうあまり深刻に食べる心配をしなくてよくなったからなのか、それともこのような心境に到達するのと同じような環境が同時に達成されたことは偶然ではないのかは私には解らない。いずれにしろ、私は私の『アリア・ダ・カー

ポ』を弾き続ける。そしていつの日かこの『アリア・ダ・カーポ』が第二周期の『アリア』となっていることに気付くのかも知れない。

最後に書いてから2年以上が経った。忘れようとしていた日々のことを考えることもめっきり少なくなっていた。しかし、前向きに生きようと思い始めた矢先に私の旅路について考えさせられる事件が起こった。永住権を失ってからずっと経ってから、まだ税金を納める義務があると言われたのである。そう聞いた途端忘れていたと思っていた怒りがひしひしとこみあげてきた。事実上の国外追放の憂き目に合わせておきながら、税金を払えだど？こんな不当な仕打ちがあろうか？どんなに助けを求めても拒絶されつづけ、困難な旅路を続ける間、そういうことを一旦は許せるようになったと思ったこともあったが、結局は許せなかったので苦しい経験は忘れるようになっていた。しかし今回のことで私はいったん忘れられてもつらい経験は思い出すのだと知った。そして思い出したときにはその時感じていた感情もその時と同じ強さで戻ってくる。忘れることは許すことの代替にはなりえない。許すことを覚えなければ。

母が亡くなった時の経験から私はすでに私の表層感情は許すことを学んだと思っていた。しかしそれは私の知性であって表層感情ではなかったことに気づいた。私の表層感情はいまだに許すことができず苦しんでいた。今回それを学ばせるために、私は到着したばかりの汎理想主義者の領域から図5-1に示されている純朴理想主義者と現実主義者の境界線にあるミクロのピラミッドに送り返されたのだと思う。本章で先に述べたように私が若いころ汎理想主義者の領域に向かって旅立ったときくぐったのとよく似た門がそこにはある。純朴理想主義者と現実主義者の境界にはこのような扉が多くあり、純朴理想主義者の多くが毎日そこへやってくる。私たちの仕事は彼らを純朴主義者の領域に戻るように説得し、現実主義から戻って来たものを安全に純朴主義者の領域に導いてやることである。つまり私は門番なのだ。私が送られた門は辺境の地にあってほとんどだれも訪れてこない。私には大きな舞台で多くの人を動かす力はないので、この辺境のミクロの舞台に派遣されたのは適切だったと感じている。ここで私は一度に一人ずつ対峙していくことになる。まず、中学生2人の家庭教師をすることになった。この門からは遠ざけておかなければならない。

さらに予備校で「温故知新」というプログラムに巡り合った。これは随分前からやっていたらしく、夏期に行われ学生を大学受験だけに集中させるのではなく、講師がより広い観点から学生に自ら考えさせ

るような特別講座だった。これはまさに私の追い続けてきた理想であり、このようなプログラムに巡り合えたことは幸いだったと思った。早速応募して、ヴィコーの周期についての講義を持たせてもらった。ただ自分で宣伝しろと言われ、頑張ってみたが2年間で5人しか来てもらうことができなかった。また、このプログラムは今では一部の講師による同好会のようになっていたので、これをまず予備校全体で取り組めるものに成長させ、その枠組みの中でより多くの学生にヴィコーの周期について周知してもらい、特に民主主義の意義について主権、権利と義務、自由と平等などの主要な概念について考えてもらうようにしたいと思い、世話役に立候補した。

ここに落ち着くようになって、心の中にあるイメージが浮かんでくるようになった。当初は私の表層感情はこのような辺境の地に閉じ込められることに不満があった。昔「嵐が丘」という映画でみた暗くて寒い岩だらけの荒涼とした風景が眼前に広がっているようだった。そこに私が守るべき錆びた鉄の門があった。それでも、ここにいる以上はできるだけ快適な環境を作り上げよう。まず、これらの岩を取り除いて居心地の良い小屋を建てよう。ここで小屋を作るときに岩をよけて作るというのが、苦しい思い出を忘れるということになり、それらの岩を取り除くというのが許すということになるのだろうと感じるようになった。私の表層感情はついにその差を理解するようになったようだ。これらの岩を避けているだけでは、満足のいく小屋は立てられない。そして何とか岩を全部取り除いて平静な心を持つことができるようになると、そこに居心地の良いちいさな小屋を建てようとした、それが現実社会では温故知新のプログラムを成就させることであったのだと思われた。一から小屋を建てるのではなく、もうすでに小屋はあったのだ。しかし随分古びて傷んでいるので修理が必要だ。いったんプログラムが軌道に乗れば後は毎年講座を持たせてもらえばいい。安寧な門番小屋生活が待っているはずだ。

また、余裕ができたので、ピアノのレッスンを受けてみようとも思った。もう10年以上ゴールドベルグ変奏曲をピアノと自分の人生の両方で演奏してきたが、この2つをつなげることができていない。人生経験からピアノでの演奏をどのように解釈したいかという思いはあるのだが、それを鍵盤上で実演する技術がないのだ。いわば両端からトンネルを掘り始めたが、それがつながっていない状態だ。

そこでゴールドベルグについて久しぶりに考えてみるようになった。実際ゴールドベルグに自分の人生を当てはめてきたが、今どこにいるのか見失っていた。二週目に入ったのかもかもしれないと思っていたが、

確信はなかった。そこに私の心のイメージが合致してきた。二年前クオドリベットを何度も何度も繰り返し弾いている間にアリア・ダカーポの最初の高い「ソ」の音に引っ張られて、立ち上がって歩き出したのだが、それから何年か荒涼とした岩だらけの地形を歩き続けた。それが今思えばクオドリベットからアリア・ダカーポへの移動だったのだろう。二周目などではなかったのだ。そしてそれは現実主義者の領域を逆の方向に再通過することでもあった。私は新しい職務を果たすため汎理想主義の領域から歩いて純朴理想主義と現実主義の間の門まで移動していたのである。

そのように考えているうちに重要な発見をした。かつてゴールドバーグをベートーベンの第九の「歓喜の歌」と比較したことがあった。これは理想主義を讃えたものであるが、この合唱には何百人、時には何千人もの人が参加して、喜びを分かち合うのである。しかし私の反応は、私たち理想主義者は時と空間を超えて広がっており、このように一同に会することはできないというものであった。このような合唱を聞いていると無性に孤独になる。一方バッハの「大は小」の原則は私たちのコミュニティの存在を確たるものとしてくれる。前に述べたがゴールドベルグには3つのレベルがある。鍵盤上の演奏と個人の人生、そして文明の周期である。文明もヴィーコの周期に従い、誕生し発展し崩壊していく、そしてまた次の文明がその周期をたどるのだが、そのたびに形而上の奥行が広がっていくのである。10周目にやっと人類はアリア・ダカーポに到達し、永遠の理想主義社会を達成する。私たち汎理想主義者はゴールドベルグの中では時と空間を超えて一つになれる。肉体的には孤立していてもゴールドベルグの中では私たちは決して一人ではないのだ。

ということでいま小屋を建て安寧な門番生活を確立すべくアリア・ダカーポを通過しているところであるが、この時若いころ現実主義の領域への門のところ見送ってくれたダンテがまた現れた。私の両親は私が無事にこの世で生きられるように守ってくれ導いてくれたが、逝ってしまった。それはあたかもウェルギリウスがダンテを残して、ここからはベアトリーチェを待つように言い残して去っていったかのようにであった。今ここで私も精神界を導いてくれるベアトリーチェを待っているかのように感じる。ここで時々訪れる純朴理想主義者を案内しながら静かに待つことにしよう。すると、眼前に突然大きな海が開けた。そして私は海岸の真っ白な砂浜にたたずんでいた。その砂の白さはあたかもすべての感情が融合したものであるかのように感じられた。そこで私は真に穏やかな感情に囲まれて立っているかのように、外界

のすべての問題から切り離されて安らかに感じることができた。そこで私は静かに暮らし、毎朝浜辺を散歩し、夕方には夕日で真っ赤に染まった空を見上げて一日を振り返ろう。いつの日か、そこにベアトリーチェが現れて、私を次の世界に導いてくれることもあるかもしれない。その時アリア・ダカーポの最後の上昇モチーフが聞こえる、それは私を導いてくれるベアトリーチェのたどる神聖な階段を表している。ベアトリーチェに従いながら、最後に私は振り返り、その時、汎理想主義のピラミッドの全様と私がつたすべての足跡を鳥瞰することになるだろう。そしてゴールドベルグの最後の2小説は極めて深い瞑想を誘うのだ。

ようやくすべてが落ち着いてきたように見えた。その時世界的に感染症が流行した。それは野蛮時代の到来を予告するような状況であった。ここで私の知性が介入して吠えた。健全な理想主義の社会では、このような時施政者が危険な社会活動を停止させ、そこで就業していた市民には危機対応に必要な部署に派遣することになるだろう。また、平時から娯楽や観光などの部門を抑えて危機に際して脆弱となる産業構造を回避しておくだろう。しかし現社会ではそれができる能力を持った指導者がいない。能力がないのに無理に行うと社会主義の実験のような悲惨な状況を生んでしまう。さらに自由と権利という民主主義の基本概念が妨げとなっている。職業選択の自由から政府は産業構造に影響を及ぼすことができない。また危機に際して産業部門替えを強制することもできない。その結果政府は飲食店等に営業を自粛するよう要請することしかできなかった。さらに高い権利意識が問題に拍車をかける。自由というのは残酷なものである。つまるところ完全な自由というのはまさに弱肉強食の野蛮時代なのだ。この職業を選んだ以上このような災害時には多大な損害を被ることは覚悟のうえでなければならない。それが嫌なら自由を放棄し政府によって割り当てられた職業に甘んじて付くべきである。しかし世論は営業を停止するなら保証をだせと要求する。

それは根本的に民主制を取り違えている。国民は政府が自分たちが安心して好きなことができるような社会を作る下僕であり、自分たちはお客であるかのように考えているようであるが、民主制度においては主権を持つ国民が意思決定者であり、政府はその代表であるにすぎない。したがってまず、国民には賢明な決定ができる信頼に足る人材を育成し、政府に送る義務があり、政府の下した決定は投票したかどうかにかかわらず、自分の下した決定であるとして貫徹できるよう徹底的に支持しなければならない。もしその決定が社会にとって益をな

さないものであったら、よほどのことがない限り定期的な選挙においてより有能な人材に交代させることが必要である。

しかし、汎理想主義の指導者不在の社会が、有能な施政者を育てることができるのだろうか？ またこの社会では自己の利益の追求という現実主義の指針がすでに鎌首をもたげ始めているのも見て取れ、そのような体制の実現は難しいようだ。政治家は国民の利益を守るというよりは自分の選挙や支持者の権益の保護のことにより関心があるように行動しており、これが国民の不信感を買う結果となっている。国民の生活を制限するよう要請しておきながら、オリンピックなどはやると言いつつ引かなかったり、政治疑惑の追及を避けるため危機下に国会を閉じたりする。野党は与党の信頼を失わせるため、やることなすことすべてを批判し、結果として政治そのものに不信感を抱かせている。マスコミも社会の利益を守るというよりは視聴率や売り上げを上げることにより関心があるように行動している。これが政府の行動や政策の効果を著しく損なう結果となっている。政府が非常事態宣言を出さないでいると、切迫する病院のことが大きく取り上げられるが、出すと翌日から苦悩する飲食店の様子が大きく取り上げられることになる。これでは政府が何をしてしても無能に見える。また、官僚が会食自粛要請中に会食などするとマスコミが鬼の首でも取ったかのように取り上げる。すると国民は上がやっていないのに何で自分たちがと会食を始める。緊急事態中にあえて効果が下がるような報道をすべきではないだろう。事態が落ち着いてからこのようなことがあったと報道して責任を取らせればいいことだ。このような社会ではお互いを批判しあうが自分の身を正そうとする者はいない。民主主義の原則の一つである均衡と抑制のシステムの腐敗が進むとこのようになるのだろう。

今回の危機は影響を受けたのは社会の一部なので何とか決定的な打撃を受けることは免れそうだが、たとえこの一回の危機は乗り越えられたとしても、将来このような危機を繰り返していくうちに、政府はこの水準で国民を守り続けることなどできなくなり崩壊するだろう。そしてその後の社会では弱いものから切り捨てられ、文明は衰退していくのだろう。この事態を前にして、私は冷ややかな目でこれを傍観している。かつて私は崩壊に直面したダム の壁の前であちこちの小さな裂け目から噴き出る水を必死に抑えながら上から見下ろす人たちに降りてきて手伝ってくれと叫んだが、傍観するだけで誰も何もしてくれなかったというイメージを持っていたことがあった。ところがいつの間にか立ち位置が逆転していて、今回は私が上に立って、下でも多く人たちを眺めていた。そして私は彼らに向かってそれは自業自得で

しょうとつぶやいていた。（もちろんダムが崩壊すれば上にいる傍観者も流されてしまうことは周知しているが。）

これは問題だ。理想主義者が人々の苦悩にかくも冷淡な反応を取ってよいはずはない。そこで私はここで再度私の人々に対する態度について考えるに至った。最初は人々は私に大きな力を与えてくれる存在だった。苦しいことがあった時はいつでも戦争で犠牲になった人たちのことを考えた。彼らの苦しみに比べると私の苦しみなど何でもないように思えた。しかし時が経つにつれて、人々に対して失望し、戦争の犠牲者だってこんな風だったに違いない、彼らは運が悪かっただけなのだと感じるようになった。次に私は理想主義者のコミュニティーに強さの源を求めた。その義務を果たすにあたって大きな犠牲を払い、時には命さえ失った理想主義者の痛みを思ったとき、私の痛みなど小さなものに思えた。私は彼らを自分の親とみなすようになった。私はまた、古代ギリシャにソクラテスが殺されたように、数百年以内に民主社会で処刑されてしまうであろう汎理想主義者のことを考えた。私は彼らを自分の子供と思っている。しかしそうなると人々は私の子供たちを苦しめるであろう存在となり連中に対する怒りや憎しみの情が湧きあがり、自分が守るべき対象を憎まなければならないという境遇に陥ったのである。

しかしそのうちこのような状況を通り越して、私の表層感情はアパシーとでも呼ばれるべき無関心の状態に陥った。怒りや憎しみも無くなったが、人々に対する強い思いも無くなってしまった。苦しむ人々に対しても彼らの痛みを分かろうというような共感ももう無い。さらにこれ以上続けていく気力も同時に失ってしまった。これを燃え尽きたというのだろうか。

そんな時突然私は待ち続けていたベアトリーチェの訪問を受けた。そして私は想像していたように彼女に連れられて、天へと向かう階段を昇っていった。そこではすべての存在は消え去っていた。そして残ったのは神と自分だけだった。他人や外部の動機に依存することはそこでは一切なかった。そんなものは存在しなかった。私はそこではただ神の声を聴こうとした。神の意志を知り、それを忠実に遂行したかった。しかし神の声を聴き神の意志を理解するというのは非常に難しいことである。どれが自分の意志で、どれが神の意志なのかはわからない。今やろうとしていることは神の意志に従っているのかそれとも自分の意志なのか。これをどうやって見極めていけばいいのだろうか。これには近道はないのだろう、日夜精進を続けることによってのみいつかその意思に近づけるという希望がつかねるのだろうか。

かつて一度私はそれに似た経験をしたことがあった。それには音楽の世界でバッハの勉強をした時だった。彼の意志は絶対で、疑問をさしはさむことなど考えられない。ただその意思を理解すべく日夜励むのである。もちろんそれは月に向かって歩き出すようなもので、どんなに歩いても到達できるというものではない。それでも、努力すると毎日一歩ずつその絶対意思に近づいていくのである。私はその時の喜びを覚えている。また一歩バッハに近づいた喜び、たとえどんなに努力してもたどり着けなくても、それでも一歩ずつ近づいていく実感。神の意志を理解しようとする過程もきっとこれに類似したものなのであろう。

神を感じるには言葉ではなくイメージが必要なようだ。キリスト教徒はミケランジェロやラファエロを通じて神を感じる事ができ、仏教徒も阿弥陀如来や釈迦如来の仏像に仏の慈悲を感じる事ができるのが羨ましい。ここでもバッハの偉大さが光った。『マタイ受難曲』はキリスト教の枠内で書かれたが、ゴールドベルクは宗教楽曲の形はとっていない。それゆえにキリスト教を超えた理想主義者たちにも神の存在を感じさせる事ができる。私が最終的にキリスト教を受け入れられなかった後もゴールドベルクに特別の思いを持ち続けることができたのも、バッハの偉大さのおかげだと思っている。

修行初期ではあるが稚拙ながら見えてきたこともある。私の役割は種を植えることだったのだと。そして今私は種を植え終えたのである。この種は時期が来たら芽生える。それが数十年後なのか数百年後なのか私にはわからないが、芽生えるべき時がくれば芽生える。それを早めることはできないのである。その時私は蒔いた種を発芽させ、私の生存中に開花させようと必死で無意味な努力をしていたのだと悟った。ミクロのピラミッドに送られてきたとき、小さいなら成功するかもしれないとここで芽をだすよう努力をしてみようとしたが、それは間違っていた。葉っぱから幹を育てることはできない、まず幹が育って栄養が葉に送られてきて初めて葉はその役目を果たし始めることができるのである。

文明崩壊期にある今の社会は空中ですでに翼を失った飛行機のようなもので、まず必要なのはパイロットができるだけ安全に飛行機を不時着させることである。安全な設計について提案しているときではない。形而上工学にとっては秋から冬の時代であり、発芽に適した時期ではない。長い冬を終えて春が来るまで種のままじっと待つ時期なのだろう。実際ミクロのピラミッドでついに動き出したかに見えた私のプロジェクトは一瞬にして砕け散った。温故知新ではもっと学校

内で知られるように活動しようと提案したら、春の研修会で告知をしてくれると約束してくれた。心強かった。またピアノ教師も見つけてゴールドベルクのレッスンを受けたいと意図を説明すると快く引き受けてきた。ようやくすべてが動き出したかに見えた。そこで勇気づけられてたまたまテレビで既存の体制に挑戦する出版社が取り上げられていたので、一冊目の本の日本語版の出版の件で助力してもらえないかと思って連絡を取ってみた。出版までできなくても、せめて英語版の出版社と交渉して出版権くらい取る援助はしてくれるかと淡い期待を抱いていたが、一週間もしないうちに断りの短いメモ付きで送り返されてきた。そこから坂を転げ落ちるかのようにすべてが瓦解していった。研修会で約束された告知はされなかった。方針変更については何の連絡も説明もなかった。問い合わせしてみようという気も起きなかった。またピアノ教師も何度か連絡してより詳細に説明するにつれ返事が来なくなった。

ここでじたばたするのは社会にとっては無益であるだけでなくむしろ有害でさえありえる。成らぬものを成そうとして一人相撲をとっている間に、誰も協力してくれないとって周りの人間を恨むようになる。そして生まれるべきでない憎しみや怒りを作り出してしまふことになり、最悪の場合これが社会に放出されることになってしまう。感染症の報道を見ているとき、サイトカイン・ストームという現象を耳にした。これは免疫反応の暴走だそうで、本来身体を守るため免疫を活性化させるサイトカインという物質が過剰に作用して自身の健康な細胞まで攻撃してしまう現象だそうだ。神の意志ではなく一人の思い込みで行動するとこのような結局自分の思いと反した結果をもたらしてしまうことになるのだ。

こう悟った時、私の中で新に浮かんできたイメージは自分は生命体に存する一つの細胞であるというものであった。それは自分の生涯よりずっと長く存在し、一つ一つの細胞は栄養を与えられ、自分の職務を果たす。自分の割り当ては全体から見るとほんの一部、一時期かわるに過ぎない。ここでは神の意志によって、個人では知覚することのできない全体の利に即したホメオスタシスが達成され、個々の細胞も意に反して何かをすることを強いられるということはないのだ。必要なものは与えられるが、職務でないことをしようとしてもあたかも耳の細胞がしゃべろうとするように一切成功しない。思うにこれはなん十ページか前に超越自己として悟ったと書いたことと同じでだ。それは典型的な教育課程においては、まず教科書を読んで概念を理解した後、実験で結果を出すという過程に相当するようにも思える。

そこで私はもう一度ベアトリーチェの声を聞いた。「そうやって神の意志に近づきなさい。そうすれば神の愛があなたに浸透し、その愛を通じてもう一度人々を愛することができるようになるでしょう。」

そこで私は神の愛を感じようとした。そこで見出した結論は驚くべきことだった。私が神の愛を感じることができるのは、私があればほど疎ましく、邪魔でしかなく無くなってしまえばいいと思っていた私の表層意識を通してだった。全知全能の神においては、我々を個々の細胞とする新たなより優れた存在を作り出すことなど訳はなかったことだろう。個々の細胞に独自の意志のないように、我々から表層意識を取り除いて機械的にこの存在を創造することができたはずである。しかし、神は我々に自分の役割を果たした後、個々として生きる楽しみを持たせてやりたいと思われたのだろう。それで表層意識を与えて下さり、我慢強く見守ってくださっているに違いない。だからそれは神からの贈り物であり、私たちは親が子供を育てるように育み、やはりお前らには無理だったかと取り上げてしまわれないう、それができることを神に証明しなければならぬのだ。そう思ったとき、私は初めて自分の表層感情を愛おしく思うことができた。辛かったのに、苦しかったのによく頑張って責務を果たし切ってくれたねと労うことができた。そしてこの感情が、自分の内部からあふれ出て人間の弱さへの愛着として広がっていくのだと感じるようになった。

私が一人でできる形而上工学者になるための感情の訓練はここまでである。振り返ってみると、私は第5章の図4を地図に愛と憎しみ、感情と知性、そして理論と実践の形而上回路を旅していたのだと感じた。最初に平和な世の中を作りたいと愛の極を出発した私は世間の非協力に苦しむ中、自己憐憫に陥り憎しみの極にたどり着いた。それを回避するために、無関心・無感動のアバシーの極にたどり着いたが、そこで神の存在を通して私の深層感情と知性と表層感情は矛盾なく融合される場所までたどり着いた。

しかしその旅は決して目的地まで一直線という類のものではなく、進んでは戻り、戻っては進むということの繰り返しであり、その間様々な感情がかつてバッハのカンタータに見たように寄せては引いていった。また一度にいか所を通過するというのではなく、複数の回路を同時に通過することにもなるという複雑なものであった。ゆえに繰り返しも多く、矛盾もあり、最終的にこれを整理してより明確に端的に説明することは可能にも思える。しかし将来より系統だった教育システムが開発されるよう、過程を残すため、このままにしておこうと

思う。これを分析して、効果的な教育法が開発され、形而上工学者の卵たちが一人ではなく皆で励ましあってこの道をたどれることを祈って、ここからは次世代に引き継いでもらおう。

第一の任務は実証件数を累積することである。本書では私個人の形而上の世界での旅を提示したが、これは単なる一個人の経験に過ぎない。例えば、旅の途中で私は形而上回路なるものを発見したが、これはただ一件に過ぎず、私の歪んだ心がそう思わせただけかもしれない。しかしもし何百人という人が形而上の世界を探求して同じものを見たら、それはより強力なものとなる。形而上の現象は実験によって真偽が証明できるものではない。であるからなぜそうなのかを説明することはできないかもしれないが、多数の実証例が集まれば、相関関係を確立することができる。そして十分な実証例が集まれば、説明できなくても使い始めることができる。それは物理学の世界でニュートンが重力を発見するまでは説明はできなかったものの、人類は重力を使ったエンジニアリングを多数行使して来たのと似ていると思う。民主制崩壊後に文明を再建しなければならない将来の世代は累積された実証例を検証し、説明に成功するかもしれない。そしてついには我々のニュートンが誕生してこれらをより体系的に検証できる我々の微分・積分を与えてくれるかもしれない。これには時間がかかる。しかしより多くの人が形而上界に入るほど多くの実証例を累積することができ、過程を早めることができるだろう。であるからこの形而上の世界の探検時代をできるだけ早く始めることが重要である。これらの探索結果は将来の世代が利用できるよう、できれば第六章で述べた汎理想主義文書館に収められることが理想である。



## 第八章 瞑想

人類の歴史は戦争であふれている。人類はこの恐ろしい戦争が何度も繰り返されるのを食い止めようとしてきた。しかし人間社会の規模が広がり、技術革新が進むにつれ、破壊の規模も拡大した。20世紀には何千万人という人々がたった一つの戦争で命を失うことを可能にしてしまった。又このような大戦争が起これば、勝者はいないかもしれない。そこで次のような質問が起きてくる。「どうしてこのような自己破壊的な行動を繰り返すのか?」「これを食い止める方法はあるのか?」多くの人々が同じ問題に取り組んできたが、答えを見つめることはできなかった。答えは無いのかもしれない。たとえ無くても我々はこの問題に取り組み続けていかなければならないと私は信じ、努力してきた。

その努力の中で人類は究極的には協力して超越自己の意識を宿す実体を創造することができれば、恒久平和を達成することができるかもしれないと思うようになった。青写真はすでにあるように感じている。そう感じるのはいずれ一人一人の中に人ととのつながりを求めあう心とより偉大なものへの憧れがあるという事実からである。これは従来人間愛と神への愛として認識されてきたものである。大胆にも私は物理界のエントロピーの法則を相殺すべく反エントロピーの法則が形而上界に存在するのではないかと想像する。エントロピーと反エントロピーの法則を駆使することによって、人類は内部で負のエントロピーを創出できる実体を創造することができるかもしれない。

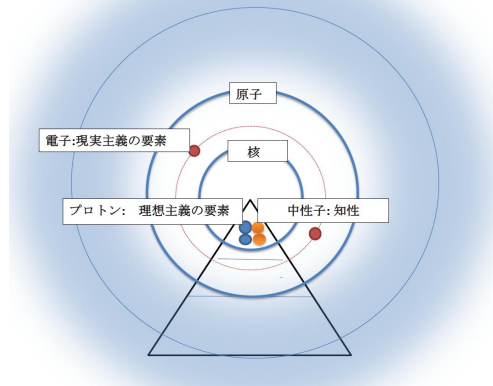
実現過程は核反応のようなものかもしれないと想像する。それはまず起こすためには巨大な起発エネルギーを必要とするが、一旦反応が起り始めると、破壊的にならないようにその反応速度を厳しく管理しなければならない。それと同じように、過程が開始されるまでは、我々一人一人が、自己の欲望を差し置いて、持てる全てをつぎ込んでこの超越自己の福祉の充実に捧げなければならない。その為にはいくらやりたくないことでも全力投球しなければならない。そして一旦過程が進み始めると、我々は負のエントロピーを安定して一定の度合いで供給し続ける為に、気の遠くなるような忍耐力を持って毎日努力し続けなければならない。

もし我々がこの偉大なる自己の実現に成功した場合どうなるのだろうか？ 偉大なる超越自己は一体何を考えるのだろうか？ アリストテレスは第一の実体は自分自身に関して瞑想していると考えたが、私は超越自己はより偉大な自己について瞑想しているかもしれないと想像する。より高い形而上の次元ではより偉大な自己の創造は原子の創造のように見えるかもしれない（図8-1）。ここでは汎理想主義者の領域が原子核となり、陽子と中性子のように理想主義の感情と知性が存在する。現実主義者の領域はエネルギー準位で、電子のように現実主義者の感情が存在する。これがエネルギー準位上を周回する限り安定しているが、それを外れると自由電子のように有害物質となる。外層は純朴理想主義者の領域で多くの未定義の亜原子要素が存在し、現実主義者の深層感情、理想主義者の深層感情、または知性となりうるものであろう。このようにより偉大な自己でさえより高い形而上の次元では単なる原子に過ぎなくなる。このように形而上と物理のはしごは無限に続いていく。

このように想像の翼は広がって行く。

2022年2月

図8-1  
最終統合





汎理想主義－恒久平和のための形而上工学  
現代社会の三重危機－中国の民主化、イスラム社会の世俗化、西洋文明の衆愚政治化－への対応とその後

2021年6月

一理想主義者

\*全ての汎理想主義の作品は匿名で神に捧げられる。  
Copyright ©2015 by the author (著作権は作者に存する)  
汎理想主義の原則に反する利用・複写を禁ずる。